第Ⅳ章　遺　　物

1　木　　簡

A　木簡出土遺構

一連の調査で木簡が出土した遺構とそれぞれの点数は、Tab.17のとおりである。合計11万点にのぼる厖大な木簡が出土したことになり、木簡研究史上画期的な発見となった。以下、まずはじめに木簡が出土した全ての遺構についてその概略と木簡の特徴を述べ、その後項を改めて「長屋王家木簡」と「二条大路木簡」について概要を述べる。なお、当該地において過去の小規模な調査で出土した木簡も併せて記述する。関係木簡の指示は本報告巻末の「出土木簡釈文(抄)」の№で示し、非掲載分については『平城宮発掘調査出土木簡概報』の号数と頁数を「城24－6」のように略記する。　木簡11万点

SD4150　七坪を流れる蛇行溝で、菰川の旧河道を埋めて掘り直したものである。北東から南西に流れ、屈曲しながら六坪（宮跡庭園）の溝SD1525へと続く。幅4～7m、深さ1.5mで、堆積層からは弥生時代～8世紀前半の土器が出土した。溝の最末期には自然堆積によって深さ

遺構番号		発掘次数	出土点数
蛇行溝	SD4150	103－1	1
		178	1
土坑	SK4126	141－35	1
掘立柱建物	SB4205	178	1
井戸	SE4225	〃	1
井戸	SE4365	184	1
井戸	SE4366	〃	11
掘立柱建物	SB4430	〃	2
井戸	SE4497	〃	1
井戸	SE4580	〃	1
井戸	SE4655	186西	2
三条々間北小路北側溝	SD4361	193A	3
南北溝	SD4750	193E	32294
		193F	3030
井戸	SE4760	186補	2
井戸	SE4770	186北	226
井戸	SE4815	186補	1
井戸	SE5220	193B	4
井戸	SE4885	190	2
井戸	SE5135	195	1
井戸	SE5140	〃	1
井戸	SE5075	197	5
不整形土坑	SK5074	〃	26

遺構番号		発掘次数	出土点数
東二坊々間路西側溝	SD4699	178	109
		193A	221
		193B	131
		198A	34
		198C	16
〃	SD5021	198B	19
		202－13	141
		123－26	18
		223－13	48
東二坊々間路東側溝	SD4701	193A	7
二条大路南側溝	SD5105	193B	1
二条大路北側溝	SD5240	198B	8
		204	31
二条大路上南濠状遺構	SD5100	193B	4256
		197	3258
		200	23910
		200補	627
		次数不明	6398
二条大路上北濠状遺構	SD5300	198B	22881
		204	12330
〃	SD5310	〃	727

Tab.17　木簡出土遺構一覧

が0.5mとなっていた。木簡は1977年の第103－1次調査で1点、1986年の第178次調査で1点が出土した。後者は尾張国海部郡嶋里からの荷札木簡である。

なお、この溝と一連の六坪の溝SD1525からは、90点にのぼる木簡が出土しており[1]、併せて再検討すべき点がある。すなわち、SD1525出土木簡の年代も同様に奈良時代初期で、木簡には「北宮御物俵」「片岡司」「竹野王子大許進米」「帳内」といった語句を記すものが含まれている。これらはいずれも後述する「長屋王家木簡」と共通する語句であり、二つの木簡群は密接に関連すると考えざるを得ない。だとすれば、SD1525から出土した木簡が、六坪で廃棄されたのか、上流の七・八坪から流れてきたのかという問題が生じ、これは長屋王宅が4町占地なのか、それ以上になるのかという問題と関わってくる。この点については第Ⅴ章で触れる。

北宮御物俵

SK4126　第141－35次調査で検出した径約4mの土坑である。平城宮Ⅰの土師器盤が伴出しており、遺構の切り合い関係からも奈良時代初期に位置づけられる。旧遺構番号はSK2549。

SB4205　七坪南辺に建つ、南北に庇を持つ5間×4間の掘立柱東西棟建物で、C期に属する。この建物の東南隅の柱抜取り穴から木簡1点が出土した。

SE4225　七坪西南部にある井戸である。径1.2m、深さ1.4mの円形掘形の中に底板を抜いた曲物を据えて井戸枠としている。曲物は3段遺存し、径45cmである。その外側にさらに径54cmの曲物をおいている。この井戸の埋土から木簡1点が出土した。伴出した墨書土器に「大井」と記す土師器坏がある。土器は平城宮Ⅴ、つまり奈良時代末頃のものである。

SE4365　七坪中央付近で検出した縦板組み隅柱横桟どめの方形井戸である。井戸枠の一辺は80cm、深さ1.85mある。井戸の掘形内の井戸枠の外側に接した所に斎串や小型の素文鏡が埋まっており、井戸築造時の祭祀に伴うものと考えられる。その掘形から木簡1点が出土した。井戸埋土の遺物から奈良時代末に廃絶したとみられる。

SE4366　SE4365の北にある、内法一辺110cmの横板を井桁に組んだ方形井戸で、深さは1.9mある。最下段の井戸枠のみ残る。廃絶の時期は土器の年代から霊亀～養老年間と推定される。この埋土および抜取り穴から木簡が11点出土したが、内容の判明するものは少ない。なお、同じ抜取り穴からは猿などを描いた土師器の皿も見つかっている。

SB4430　七坪西北で正殿の東の区画にある、東庇を持つ6間×3間の掘立柱南北棟建物で、A期に属する。この南側柱の抜取り穴から木簡2点が出土した。

SE4497　正殿SB4500とSB4430の間に位置する円形の井戸で、下段が径58cmの曲物を3段積み重ね、上段は縦板組みにしている。深さは1.5mある。奈良時代後半に廃絶した。この埋土から木簡1点が出土した。

SE4580　正殿SB4500と重複して検出された井戸で、一辺5mの大きな掘形の中に、内法135cmの横板井籠組み方形の井戸枠が13段残存していた。深さも3.4mある。掘形の埋土からは多くの瓦片と平城宮土器Ⅲが出土し、枠内に堆積したヘドロ状の泥土から木簡1点と、平安時代初期の土器、瓦片、斎串、一頭分の馬骨が出土した。また、井戸底に溜まった堅くしまった砂層の中には和同開珎23点、万年通宝3点、神功開宝12点が散在していた。井戸枠は年輪年代測定によって、伐採年が767年前後であることが判明している。

1）奈文研『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』1986。なお、木簡出土点数は102点としていたが、その後の検討により90点とする。奈文研『平城京木簡一』1995を参照。

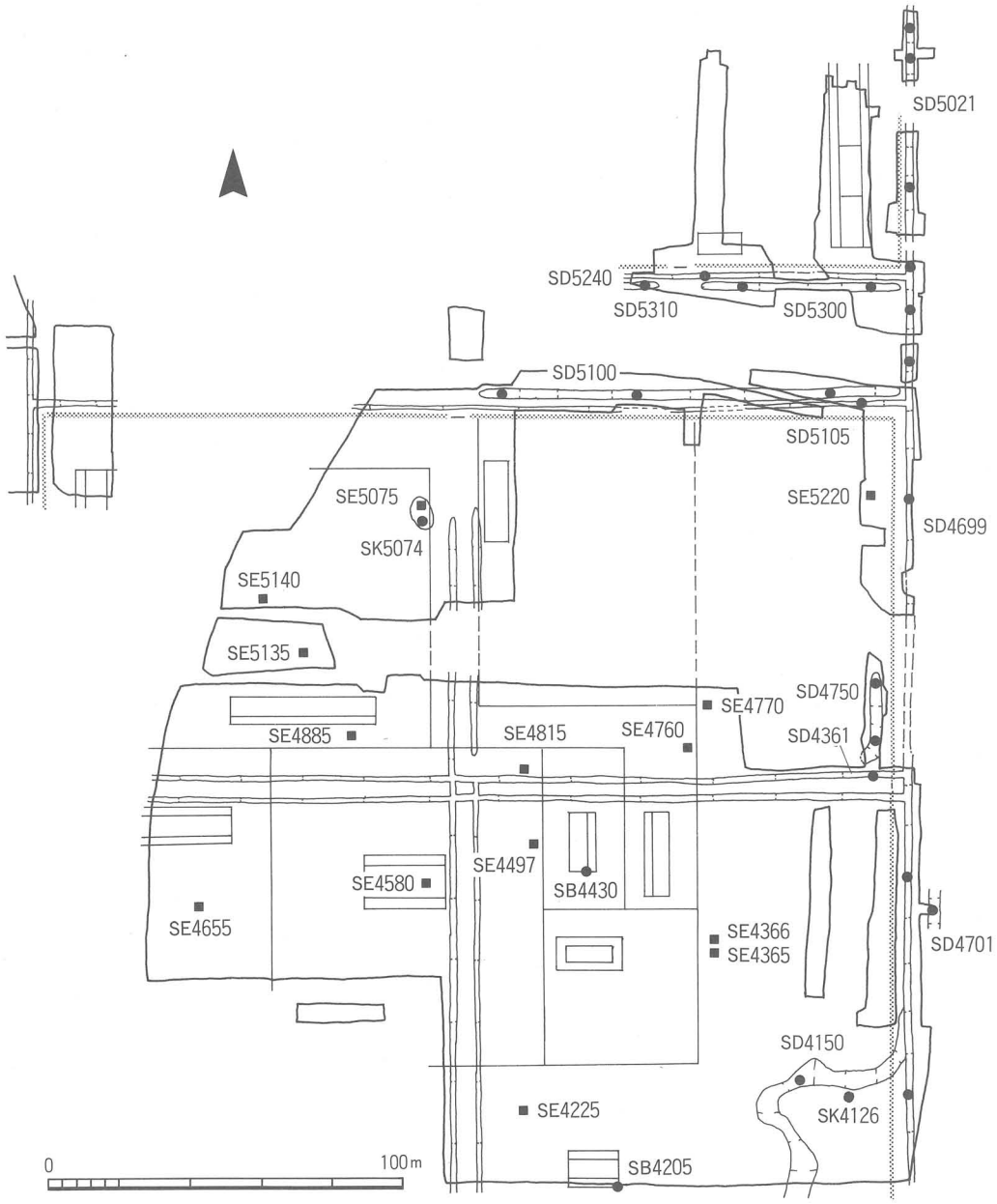


Fig. 48　木簡出土遺構位置図

SE4655　二坪で検出した井戸で、井戸枠は抜取られている。井戸の掘形は直径４m、深さは約２mある。木簡２点は井戸枠の抜取り穴から出土した。

SD4361　一・八坪と二・七坪を画す坪境小路の北側溝で、時期を異にする２条の東西溝があるが、そのうちの古いほうの溝（SD4361A）である。したがって、遺構変遷のD期にあたる。小路は溝心々で６mを測る。木簡３点は溝の東端付近で出土した。そのうちの１点に、左右兵衛府もしくは中衛府に関わる「番長」という語句を含む文書木簡の断片(『平城京木簡一』54)がある。伴出した墨書土器に「東寺」「相模所」「佐伯」「美濃麻呂」などがある。

SD4750　八坪の東南隅に掘られた溝状の土坑で、ここから「長屋王家木簡」が大量に出土した。幅2.8～3.7m、深さ0.8～1.0m、全長27.3mある。溝の北端は丸くおさまり、やや強い傾　長屋王家木簡出土土坑

斜で立ち上がる。一方、南は緩やかな傾斜で、南西部は発掘区外となるが、その傾斜からみてほどなく溝肩となり、さらに西へ続くことはなかろう。溝底は凹みがいくつかあるが、他は比較的平坦である。溝底のレベルは標高59.7～59.9mと一定している。

堆積土は大きく4層に分かれ、上から第1層茶褐色粘質土層、第2層暗褐色粘土層、第3層木屑層、第4層粘土混じり灰色砂質土層となる。第4層は地山崩壊土とみられ、遺物を殆ど含まない。合計3万5000点余の木簡は全て第3層から出土した。第3層は30cm前後の厚さがあり、木簡を主として土器や瓦などもこの層から大量に出土した。土器は第1・2層からも出土している。第3層の遺物の年代は木簡の年紀により和銅3年（710）から霊亀3年（717）の間とおさえられる。同層の土器の年代もこの頃である。第1・2層の粘土層は土坑を埋めて整地した土とみられるが、第1・2層出土の土器も新しいものを含まず第3層と同時期のものである。したがって、この土坑は長期間開いていて、順次不用品を廃棄していったというものではなく、きわめて短期間のうちに一括廃棄したものと考えるべきである。発掘時の知見でも一括遺物と判断し、木屑層には大量の削屑が含まれていること、さらに調査期間の制約などを考慮して、第3層の土は全て取り上げることとし、整理室で水洗いを行って遺物を探した。

SE4760　八坪南部で検出した、縦板組み隅柱横桟どめの方形井戸で、約70cm四方、深さ2.5m

檜　扇　の規模をもつ。井戸枠内埋土から木簡2点が出土した。うち1点は檜扇の1枚に墨書したもので、天平勝宝7年10月の年紀をもつ。『続日本紀』によれば、天平勝宝7年は正月4日に「七歳」に改められているが、木簡にはそれが反映されていない。

SE4770　八坪中央南寄りの区画塀東で検出した井戸である。井戸枠はすべて抜取られており、現状では南北1.9m、東西2.3m、深さ1.9mの土坑状を呈する。この埋土は層位をなしており、4層に大別できる。上から第1層暗赤褐色砂土層、第2層灰色粘土層、第3層木屑層、第4層灰色粘土層で、木簡は遺物の少ない第2・4層の間の第3層木屑層からまとまって出土した。木簡の年紀より、養老元年（717）ののち程なく埋められたのであろう。出土土器の年代もこれと矛盾しない。木簡の点数は226点にのぼり、内容・年代ともにSD4750と類似する。内容は次項（B）で述べる。

SE4815　八坪西南部で検出した、縦板組み隅柱横桟どめの方形井戸で、底に径43cmの円形曲物を据える。井戸枠は84cm四方で、深さ約1.7mある。木簡1点は井戸の埋土から出土した。埋土の土器は平城宮Ⅴである。

SE5220　八坪東北部で検出した井戸である。下段が径約75cmの円形曲物2段重ね、上段が縦板組み隅柱横桟どめの方形井戸で、一辺80cm、深さ1.6mある。井戸底には円礫を敷いている。木簡4点は井戸の埋土から出土した。埋土の土器は平城宮Ⅳ・Ⅴである。

SE4885　一坪南辺にあるF期の井戸である。縦板組み隅柱横桟どめの方形井戸で、約88cm四方、深さ2.9mの規模をもつ。下に径68cmの円形曲物を据え、井戸底には円礫を敷く。木簡2点のうち1点が井戸の埋土から、他の1点は井戸の掘形から出土した。埋土の土器は平城宮Ⅴ

地子米　である。埋土から出土した1点は「厚狭郡地子米五斗」（№179）という荷札木簡で、これは長門国厚狭郡から地子米を太政官に送ったものといえる。太政官ではこれを厨家で管理したと推定されるから、この木簡出土地を太政官厨家と考えることもできる[1]。事実、これと符合するよ

1）鬼頭清明「太政官厨家跡と地子の荷札」『長岡京古文化論叢』Ⅱ,1992

うに、井戸SE5140から墨書土器「官厨」なども出土しており、さらに同じ一坪の包含層からも「官厨」(２点)「官」と記す墨書土器が出土している。また、長岡京の太政官厨家の位置も左京三条二坊八坪にあって、条坊の位置関係がほぼ一致することも注目すべきである[1)]。　「官　厨」

SE5135　一坪中央南寄りで検出した、縦板組み隅柱横桟どめの方形井戸で、約105cm四方、深さ2.0mある。木簡１点は井戸の埋土から出土した。埋土の土器は平城宮Ⅴである。美作国英多郡吉野郷からの黒葛の荷札（№180）である。『延喜式』によれば、美作国の中男作物の品目の中に黒葛がある。

SE5140　一坪ほぼ中央にあるＦ期の井戸である。一木刳抜きの円形井戸で、直径約0.9m、深さ3.0mである。木簡１点は井戸の埋土から出土した。宝亀７年（776）の年紀をもつ阿波国阿波郡からの小麦の荷札木簡（№181）である。『延喜式』では阿波国の交易雑物として小麦があげられている。

SE5075　一坪東北部で検出した、縦板組み隅柱横桟どめの方形井戸で、約90cm四方、深さ1.6mある。下に径68cmの円形曲物を据える。木簡は４点が井戸の埋土から、１点が掘形から出土した。SK5074との切合い関係はSE5075の方が新しく、埋土の土器は平城宮Ⅴである。

SK5074　一坪東北部にある南北８m、東西11mの土坑で、形は不整形である。深さは0.4mと浅く、土坑の肩は傾斜がゆるい。遺物も含まれるが、SD4750のように大量に出土するという状況ではない。したがって、人工的に掘削された塵芥処理用の土坑というよりは、凹地を整地した土中に遺物が混じったものとみるべきかも知れない。

木簡は26点が出土した。木簡の中には神亀５年（728）の年紀をもつ木簡が１点含まれている（№183)が、伴出した土器は平城宮Ⅱ・Ⅲで、おおよそ740年前後の時期の遺物といえる。Ａ～Ｃ期の区画塀SA5081と一部重なる位置にあるが、塀の柱穴の残りが悪く、切合い関係は確定できない。しかし、柱穴を検出できなかったことからすると、この土坑は塀を取壊した時にできた凹地であった可能性が強い。

木簡の内容が判明するものは少ないが、参河国播豆郡析嶋の海部の供奉する贄の木簡（№182）があることが注目される。この木簡には年紀がないが、長屋王存命中のもので贄として彼のもとに届けられた荷札の可能性も否定できない。事実、「長屋王家木簡」の中にも贄と表記したものはいくつかみられる。しかし、「長屋王家木簡」中の贄木簡は、その書式が平城宮内で発見されるものとは異なり、必ずしも宮内省や内膳司に貢進されて天皇に供すべき贄と考える必要はない。それに対し、SK5074出土の１点は書式や木簡の形態等が平城宮内のそれと共通し、後述する「二条大路木簡」と同じく宮内省へ貢進されたものと考えた方がよい。したがって、木簡の年代を神亀６年の長屋王の変後と考え、その頃ここに公的施設が置かれたことの反映とみた方がよかろう（第Ⅴ章１参照)。　贄の木簡

SD4699・5021　発掘区の東辺を南北に走る溝で、東二坊々間路の西側溝にあたる。遺構番号は、二条大路北側溝SD5240と合流する地点の南と北で２分し、南がSD4699、北がSD5021である。合計９次にわたる調査で、総延長約310mを発掘した。

溝の規模は発掘した場所によって若干の違いはあるものの、おおよそ幅が２～３m、深さが0.9～1.2mほどである。基本的な層序は４層に大別でき、最上層は埋め立てた土で、下３層(上

1）向日市教育委員会『長岡京木簡』１、1984，同『長岡京木簡』２、1993

・中・下層）が堆積土となる。木簡は３層のいずれからも出土しているが、中・下層からの出土量が多い。ただし、木簡の年紀に層位毎の違いは顕著には見られない。

SD4699には西から左京三条二坊八坪の北を限る築地の南北両側溝と、七・八坪の坪境小路の両側溝が注ぎ込む。このうち、築地北側溝（二条大路南側溝）は４時期に区分でき、最終期にはSD4699の埋土の上を東に流れてゆく。また、坪境小路の側溝も上・下２層のうち、上層の溝がやはりSD4699埋土をこえて東側溝へ流入したと考えられる。SD4699の出土遺物にも奈良時代末期のものが含まれていないことから、同溝は奈良時代後半頃に埋め立てられたものと判断される。一方、SD5021は、SD4699とは違い、奈良時代を通じて機能していたとみられる。

SD4699の木簡で年紀のあるものは、養老６年、神亀４年、同６年、天平元年（２点）、同２年（３点）、同３年で、ちょうど長屋王の時期からその没後にかけてのものと言える。内容としては「書吏」名のある飯支給伝票（№185）や文書箱に「資人等上日帳」と記したもの（№192）など貴族の家政に関わるものと、「将曹」から厨務所あてに酒を請求したとみられる木簡（№184）、「大尉、少尉」の官職を記す召喚状（№187）、さらに「冂衛」(№187)「冂府大志」(№188)など衛府に関わるものがまとまって出土している点が注目される。前者は長屋王の家政機関の可能性があり、そうだとすれば長屋王家木簡の一部ともいえる。一方、後者は長屋王の変後に一時駐屯した兵衛府、中衛府に関係するものと推定できる。「左兵衛府」「中衛府」という墨書土器が伴出しているのも、このことを示している。

荷札木簡では志摩、参河、伊豆、若狭、隠伎、周防、その他のものがあり、参河国播豆郡や若狭国遠敷郡からの贄の荷札（城23－19，№191）が含まれている。これらの書式も後述する長屋王家木簡の荷札とは異なり、平城宮跡出土のそれに近い。また、荷札の年紀も天平２，３年が多いので、これらの多くは長屋王没後のものと考えるべきであろう。

一方、SD5021から出土した年紀をもつ木簡は、和銅８年、神亀４年、天平19年（２点）、同21年、宝亀４年と長期間にわたり、遺構についての知見と合致する。内容としては荷札木簡が多い。なお、№193は完形の計帳の軸であり、その木口に題籤として墨書してある。それによって、和銅８年の大和国城上郡大神里の計帳であることがわかる。同年は郷里制施行の年とされるが、ここでは里制をとっていること、また畿内の計帳歴名が京進されていることを示すものであり、計帳制度の変遷を考える上でも重要な木簡である。

計帳の軸

SD4701　七坪の東辺から延ばしたトレンチで確認した南北溝で、東二坊々間路の東側溝にあたる。深さ約１m、幅は４m以上になるが、溝の東肩は発掘区外にのび、未確認である。この溝とその西にある南北溝SD4699の間が道路となり、路面幅で5.5～5.8mを測る。出土した土器は奈良時代末のものが含まれており、奈良時代を通じて機能した溝である。木簡は７点で、「伊委志鮨」と記す付札（城22－７）の他はいずれも断片である。

SD5105　二条大路の南側溝で、溝幅約1.3～2.3m、深さ0.4～0.6mである。ほぼ奈良時代を通じて機能している。木簡１点は溝の東端付近で出土した。内容は近江国坂田郡上坂田郷からの庸米の荷札(№195)で、年代は郷里制下(717～740年)のものである。なお、上坂田郷の庸米荷札はSD5300出土の二条大路木簡の中に集中しており、それとの関連も考えられる。

SD5240　左京二条二坊五坪の南端を西から東に流れる溝で、二条大路の北側溝にあたる。奈良時代を通じて機能しているが、３回の掘削が行われている。古い順にSD5240Ａ，SD5240Ｂ，

SD5240Cと呼ぶが、溝の心が順に数十cmずつ北へ移動している。溝の深さは3条とも大きな違いはなく、遺構面から約0.4～0.8mほどである。溝幅はもっとも新しいSD5240Cが約2.5mを測るほかは、現状では溝の肩を確認できない。

木簡は39点であるが、SD5240Aから4点、SD5240Bから5点のほかはいずれもSD5240Cからの出土である。内容は削屑で「中衛府移中務省」と記すもの、丹波国多紀郡・淡路国津名郡からの荷札木簡（いずれも城23－21）などがある。

SD5100　二条大路の南端を大路に沿って東西に走る濠状遺構である。当初は二条大路の南側溝ではないかと考えたが、この2m南に南側溝SD5105を検出し、それが東二坊々間路西側溝SD4699へ注ぐことが判明した。SD5100の東端はSD4699の1.2m西で途切れ、西端も一坪と八坪の境で止まっている。また、途中で流入・流出する施設もないので、溝状ではあるが、流れた痕跡がない遺構である。幅2.6～3.5m、深さ0.9～1.2mで、全長120mをほぼ完掘した。土層は4層に分かれ、上から暗灰褐色砂質土層，炭層，木屑層，黒灰色粘土層となる。最上層の暗灰褐色砂質土層は埋め立てた土で、奈良時代後半の遺物を含むが、以下の3層は堆積土で、木簡はすべてこの3層から出土した。年紀は神亀2(725)～天平11年(739)で、特に天平7・8年が多い。

SD5300　二条大路の北端を大路に沿って東西に走る濠状遺構である。その東端は東二坊々間路西側溝SD4699の0.8m西で途切れ、西端は左京二条二坊五坪南面中央に位置する門SB5315の手前で止まっている。SD5300は幅2～2.7m、深さ1～1.3mで、全長約56mを完掘した。土層は4層に分かれ、上から黄褐色粘土混暗灰色粘土層，炭・砂混暗灰色粘土層，木屑層，黄褐色砂質土混青灰色シルト層となる。最上層の黄褐色粘土混暗灰色粘土層は埋め立てた土で、その下の3層が堆積土。木簡はすべて木屑層から出土した。木簡に記す年紀は1点だけ神亀5（728）年があるが、他は天平3（731）～8年で、特に天平7、8年が多い。

SD5310　門SB5315の西で、門を挟んでSD5300と対称の位置にある濠状遺構である。その東端6mを確認したが、西は近鉄線の線路下に続く。幅は現状では不明であるが、おそらくSD5300同様に2m前後と推定できる。深さは1.1mで、土層は4層に分かれ、上から暗灰色土層，暗灰色粘土層，木屑層，黒灰色粘土層となる。木簡はすべて「木屑層」から出土し、年紀は天平8年のものしかないが、木簡の内容はSD5300と共通する。なお、この遺構からは漆紙文書も出土している(城24－38)。

SD5300・5310も流れた痕跡のない遺構で、二条大路南のSD5100と遺構の性格が共通する。また、木簡の内容や年代にも共通点が多いことからみて、これら3条の濠状遺構から出土した木簡は、あい関連するものと判断して、以下「二条大路木簡」と呼称する。

「二条大路木簡」と呼称

B　長屋王家木簡

前項で述べた遺構のうち、ここではSD4750から出土した「長屋王家木簡」とSE4770出土の木簡について、内容上の特色を述べることとする。なお、以下の「長屋王家木簡」の検討は、これまで公刊してきた『平城宮発掘調査出土木簡概報』21・23・25・27・28に掲載の木簡1253点、削屑1707点の計2960点をもとにし、点数もこれらの集計である。ただし、文中に引用した木簡の番号は、特にことわりのない限り、本報告の巻末に付した「出土木簡釈文（抄）」のそれである。

i　SD4750出土木簡

計35,000点の木簡

SD4750出土木簡の総数は35000点余となり、全体の約82%が削屑となる。これを3m毎の地区別に集計し、削屑の内訳をまとめたのがTab. 18である。地区別にみると、北端に近いTI11・TJ11地区がやや少ないものの、ほぼまんべんなく出土していると言ってよい。中でもTC11地区には1万点近い集中をみせている。

はじめに木簡の年紀をみると、削屑の小片で「□［宝ヵ］三年」(No.164) とある1点が大宝3年とかけ離れているのを除けば、和銅3年から霊亀3年までの8年の間におさまる。月日を記す年紀の上限は和銅3年8月の荷札木簡 (No.97) で、下限は「霊亀□［三ヵ］□四月廿□」(No.78) であるが、三年と断定できないということでこれを除外すれば、「霊亀二年十二月廿□」とある耳无御田からの進上状の木簡 (No.21) が確実な下限となる。

木簡の分類　通常木簡を内容で分類する場合、まず文書、付札、その他に大別する。さらに、文書は書式上何らかの形で授受関係が明かなものを狭義の「文書」とし、これに対して授受関係のない帳簿や伝票などを「記録」と称している。付札は地方から都に貢進される税物に付けられた「荷札」と、物品の整理や保管のために付けられた狭義の「付札」に区分する。その他としては、文書や付札に含まれない、習書、楽書、記載内容不明の断簡類をいう。

本報告書の釈文もおおよそこの分類にしたがって配列しているが、平城宮木簡などと比較してさらに細かく検討すると、「長屋王家木簡」の特徴が浮かび上がってくる。

雅楽寮移

まず文書木簡からみてゆくと、最も典型的な書式は「雅楽寮移長屋王家令所…」(No.9) のように、文中に「移」「解」「符」といった公式令に規定する官司間文書の文言を持つ木簡である。これに準ずるものとして「召」「宣」「奏」という語句のものも含めると、68点にのぼる（ここでは便宜上Ⅰ類と仮称する。以下、同じ)。次に、書式としてはⅠ類に準拠すべきものの、「長屋王家木簡」の中で特に点数の多いのが「進」ないし「進上」という文言をもつ木簡であり、これらをⅠ類と区別して扱いたい(Ⅱ類)。たとえば、「片岡進上菁三斛…」(No.23) などの木簡で65点ある。記録の木簡としては、米支給の伝票と考える「書法模人米二升受当良…」(No.65) という書式の木簡(Ⅲ類)、官人の考課木簡 (No.82など) や画指 (No.88など) の木簡のような個人名を

地区	木簡	削屑	計
TB11	869	3499	4368
TC11	1413	8376	9789
TD11	699	2839	3538
TE11	757	4294	5051
TF11	862	3680	4542
TG11	576	1734	2310
TH11	473	2433	2906
TI11	244	749	993
TJ11	247	525	772
不明	137	918	1055
合計	6277	29047	35324

Tab. 18　SD4750出土木簡点数表

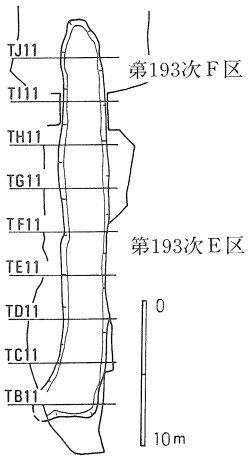


Fig. 49　SD4750地区割図

記す木簡(Ⅳ類)がある。既報告の点数ではⅢ類が447点と際だって多く、Ⅳ類は43点である。荷札木簡は合わせて222点ある(Ⅴ類)。付札木簡は68点である(Ⅵ類)。その他としては習書の木簡が24点あり(Ⅶ類)、内容不明のものについては以下の検討から除外する。

文書木簡　Ⅰ類の木簡は官司と官司間、もしくは官司と個人とのやりとりを記すもので、木簡全体の性格を考える上で重要である。つまりこれらは、一部の例外を除いて、木簡が差出から宛先へ行って、そこで用済みとなって廃棄されるのが常であるから、宛先として記された官司名が発掘地にあった機関の呼称である可能性が極めて高い。また、それとともに木簡の差出の官司との関係も問題となる。そこでⅠ類の木簡に宛先としてみえる官司名を列挙すると、

1.奈良務処　2.奈良務所(3点)　3.奈良宮務処　4.務所(8点)　5.政所　6.司所
7.長屋王家令所　8.片岡司等

の8種になる。このうち8はⅡ類として多数みえる片岡と同じく地名であり、発掘地の名称とは関係ない。この木簡は片岡司等へ指示した木簡の控えか、もしくは片岡司等へ行った後に差出へ戻ってきて廃棄されたのであろう。次に1～3は同一の呼称で「ナラノ(ミヤノ)ツカサドコロ」と呼ばれたとみられ、4～6も「ツカサドコロ」の読みが正しかろう。1～3と4～6の2群は木簡の差出者に大きな相違がなく、内容も人や物品の移動を指示するという共通点をもつから、1～6は全て同一の機関を示す呼称のバラエティーとみなすことができる。本章では、宛先にわざわざ「奈良」を冠していること、差出者の構成が家令・家扶・家従・大少書吏よりなること、指示内容から差出官司と発掘地とが極めて密接な関係にあること、などの諸点を確認するにとどめ、考察は後の章に譲る。7は平城宮内の治部省雅楽寮から舞人の派遣を依頼したものであり、「故移」という書止の文言に見られるように、いわば正式な文書の記載をもつ木簡である。したがって、この木簡の伝来を特別な理由で除外しない限り、発掘地にあった機関の対外的な名称は「長屋王家令所」と考えなければならない。

奈良務所

Ⅱ類は物品の送り状と言うべき木簡で、冒頭に地名あるいはこれに「御田」「御薗」「司」などがつく語句があり、以下「進」「進上」、物品名、数量、持人名、日付、人名という書式をもつ。冒頭の地名は物品の進上元を示し、日付の下の人名はその責任者である。こうしたⅡ類のような木簡は平城宮木簡には類例が極めて少なく、貴族の所領からの物品進上状という新たな類型が判明したといえる。これらの分析によって長屋王家の所領の所在と経営が明らかになる(後述)。

御田・御薗

記録木簡　Ⅲ類は米の支給に関する木簡で、その書式は職名ないし人名、人数、米の量、「受」＋人名、日付、人名（＋家政機関職名）となっている。冒頭の職名ないし人名は米の支給を受ける者、「受」人名は米を受け取って運ぶ者、末尾は米支給の担当者を示す。「長屋王家木簡」を上のように分類した場合、このⅢ類が全体の48%に達する点数にのぼり、いわば「長屋王家木簡」の中心をなす木簡群と言ってよい。以下、この類型の特徴をあげる。

米支給伝票

①米の量は大半が一人当たり5合ないし1升と少量であり、1石を超えるようなまとまった支給ではない。②日付は年を省略し、月日もしくは日のみを記す。③米支給担当者名は地位や姓を省略し、名だけのものがほとんどである。④米の被給者が多様であるのに対して、支給者は何人かの人物が頻出し、それぞれの日付をみると、例えば広嶋は11月と12月、甥万呂は7・8月と12・正月に多い、というように何か月かの間に集中する傾向がある。④家政機関の職名が連署される場合があり、それらは書吏と家令が大半を占め、大少書吏・扶・従はごく稀であ

る。⑤形態上の特徴として、木簡の長さがⅠ・Ⅱ類と比べてやや短く、完形品で20cmに満たないものが多い。⑥上端もしくは下端に孔を穿つものが大半であり、その孔は文字を書いた後に穿たれたことを確認できるものもある。

以上のような特徴から、Ⅲ類の木簡の機能を次のように推定する。①②③などから、これらは家政機関と外部とのやりとりではなく、狭い範囲の主として宅地内での米の授受に関する木簡である。米の支給は大量にまとめて行われるのではなく、日毎に行われ、その都度各部署ないし各人のもとに運ばれた。米支給担当者は月単位で交替でこれにあたり、毎日1件毎の米支給を1点ずつの木簡に記録した。その後、木簡には孔をあけて紐でくくって保管し、月末などの区切りの際に、綴じられていたⅢ類の木簡を集計して、No.37のような大きな木簡ないし紙の文書に書き込み、これを報告したのであろう。

いずれにせよ、Ⅲ類の大量の木簡によってこの宅地内に居住し、または宅地内で活動して、米支給に預かった様々な職種の人々の存在が明らかとなるのである。

Ⅳ類は個人名を記す木簡で、この中では考課木簡と画指(かくし)木簡が目につく。考課木簡は位階、姓名、年齢、本貫地、上日を記し、上部の側面から孔を穿つ015形式で、平城宮式部省跡から出土したものと同様の書式である。考課令の規定によれば、トネリを含めて家政機関に所属する下級官人も考選の対象になっているから、それに従って実際に考課が行われたことを示す。平城宮の考課木簡は、上日は日数のみ記すが、ここでは「日」のほかに「夕」として夜勤も記載している点が特徴的で、所属官人の勤務形態の違いを反映しているのであろう。一方、画指木簡は「長屋王家木簡」で初めて存在が知られたものである。10cm前後の小型の木簡に名前と「本」または「末」の文字を記し、側面三箇所に墨点または刻目があるのが典型である。画指の方法を示すのはNo.90で、左の食指の付け根を木簡の端にあてて、指先、第一関節、第二関節の位置に印を付けた。この木簡によって、人の出入を確認したのであろう。なお、画指に見える名前は女性名か男性の場合は若年の者であり、彼らはトネリのような階層ではなく奴婢とみて良かろう。

画　　指

付札木簡　Ⅴ類は荷札木簡である。その書式をみると、周防国の調塩木簡（No.106）のように「国＋郡＋里＋人名＋税目＋品目＋数量」と、平城宮木簡と同様に書式の整ったものから、「羽床里阿遅四斗」(No.110）のように国郡名や人名などを省略する簡略なものまでバラエティーがある。また、貢進国が近江、越前、周防などに大きく偏りをみせることや、「北宮」「長屋皇子宮」など冒頭に宛先を記した荷札木簡、あるいは「宗形郡大領」(No.113)という郡司名の木簡など、宮内ではみられない特徴がある。これらの諸点についての考察も第Ⅴ章にゆずる。Ⅵ類の付札、Ⅶ類の習書については特に際だった特徴はない。ただ、封緘木簡（No.124など）がいくつか出土していることを指摘するにとどめる。

以上、「長屋王家木簡」を内容から7種に区分して、概略を述べてきたが、その特徴は内容のバリエーションが多いという点と、点数的には米支給伝票の比率が極めて高いという2点を指摘できる。

「長屋王家木簡」と呼称

長屋王家木簡　これまで無前提に「長屋王家木簡」という呼称を使ってきたが、ここでその根拠をまとめておく。要点は以下の4点である。①「雅楽寮移長屋王家令所」(No.9）の存在（既述)、②Ⅲ類の米の被支給者の範囲、③二つの家政機関、④宛先を記す荷札木簡。

②については、米の支給を受ける王の名が多数知られ、その出自をみると第Ⅴ章のFig.76に示したように、大半は長屋王の妻妾と子供および兄弟という範囲におさまり、邸宅内の居住者が長屋王を中心としてその一族であったことを物語る。

③木簡にみえる家政機関は、その構成から二つの組織があったことがわかる。一つは、家令・家扶・家従・大少書吏よりなる二品相当の家政機関で、主にⅠ類の当該地宛ての文書木簡の差出者として登場する。もう一つは、家令・書吏よりなるもので、主にⅢ類の米支給伝票に連署している。二者の関係は大きな問題であり、後章で考察を加えるが、少なくとも当該地に常置されたのは後者であり、それは家扶・家従が欠けていること、「従七位上行家令赤染豊嶋」が長官と推定されることなどから、従三位相当の家政機関である。木簡の時期の長屋王の位階がちょうど従三位でこれに合致する。

④の荷札木簡の宛先をみると、北宮（№104など）、長屋皇子宮（№173など）、氷高親王宮（№105）の三者があるが、氷高は１点のみ孤立しており、彼女自身霊亀元年には即位して元正天皇となるから、木簡廃棄の時点でここに居住していないから除外できる。そうすると、長屋王と彼に密接に関わる北宮（後述）とが残ることとなる。

以上の諸点から、当該地には長屋王と吉備内親王をはじめとする一族が居住し、そこにあった家政機関の木簡群であることをもって「長屋王家木簡」と称する。

木簡の廃棄と保管機関　次に、内容分類の上でその出土地ごとの違いをみると、Tab.19のようになる。地区毎にそれぞれ特徴がみられるが、大きく言えば広義の文書、すなわち上記分類のⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類は南半のTB11～TF11に多く、TG11より北になると広義の付札つまり、Ⅴ・Ⅵ類の比率が高くなる。こうした点は短期間の投棄であるとはいえ、投棄前の木簡のまとまりが出土地点に反映していると言えよう。しかしそのことは、宅地内の各所に集まっていた木簡類をそれぞれ溝の所まで運んできて投棄したと考えるべきであろうか。この点を考える手がかりは削屑に求められる。

削　　屑

削屑は内容が断片的であり、容易に分類できないものが多いが、全体を概観すると木簡と同様の傾向があると言えそうである。つまり、上記分類のうちⅤ・Ⅵ類の付札を除き、ほかのタイプの削屑がいずれも含まれており、また％で示すことはできないが、おおよその比率も近いように思われる。大量の削屑にも木簡と同じバラエティーがあるということは、同様の投棄のされ方をしたとみて良い。広大な敷地の各所から木簡等を廃棄するために集めてきたとすると、その際に削り屑までかき集めたこととなり、解釈としては不自然であろう。むしろ、溝の近辺にあった部局に集積していた木簡や削屑をまとめて廃棄したとみるほうが蓋然性が高い。

このように推定すると、全体の木簡群が集積した部局とは何かが問題となる。Tab.19によれば、米支給伝票としてのⅢ類の木簡の比率が極めて高く、これが「長屋王家木簡」の中心をなすと述べたが、そのことから木簡全体の集積場所として米ないし食料担当の部局を考えることも可能である。しかし、ここで注目すべきはⅢ類の多さよりも、むしろ木簡の内容の多様性である。Ⅰ類の文書木簡の指示内容は食料の移送のほかにも、人や物品の移動が含まれるし、Ⅳ類の中の考課木簡の存在は食料担当部局としては解釈できない。また、削屑をみても、人名・本貫地・上日など、考課木簡の削屑とみられるものが少なくない。これらの諸点は食料担当の部局で行う職務の範囲を越えているとみるべきである。そして何よりも、Ⅰ類の文書木簡の宛

地　区	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	Ⅵ類	Ⅶ類	小計	総　数
TB11	17点 11.1%	21点 13.7%	65点 42.5%	23点 15.0%	19点 12.4%	1点 0.7%	7点 4.6%	153点 100.0%	186点
TC11	21点 12.4%	10点 5.9%	100点 58.8%	5点 2.9%	20点 11.8%	10点 5.9%	4点 2.4%	170点 100.0%	233点
TD11	6点 5.5%	9点 8.3%	60点 55.0%	0点 －%	15点 13.8%	15点 13.8%	4点 3.7%	109点 100.0%	155点
TE11	1点 1.1%	8点 8.7%	58点 63.0%	3点 3.3%	16点 17.4%	5点 5.4%	1点 1.1%	92点 100.0%	125点
TF11	7点 5.3%	5点 3.8%	65点 49.2%	6点 4.5%	37点 28.0%	11点 8.3%	1点 0.8%	132点 100.0%	168点
TG11	5点 4.1%	3点 2.4%	35点 28.5%	3点 2.4%	64点 52.0%	10点 8.1%	3点 2.4%	123点 100.0%	159点
TH11	6点 6.8%	8点 9.1%	34点 38.6%	0点 －%	29点 33.0%	9点 10.2%	2点 2.3%	88点 100.0%	108点
TI11	1点 3.3%	0点 －%	12点 40.0%	3点 10.0%	10点 33.3%	4点 13.3%	0点 －%	30点 100.0%	49点
TJ11	4点 10.0%	1点 2.5%	18点 45.0%	0点 －%	12点 30.0%	3点 7.5%	2点 5.0%	40点 100.0%	53点
合　計	68点 7.3%	65点 6.9%	447点 47.7%	43点 4.6%	222点 23.7%	68点 7.3%	24点 2.6%	937点 100.0%	1253点

Tab.19　SD4750出土木簡類別点数表

先に「ツカサドコロ」とあるのは無視できない点である。以上の諸点から、木簡は長屋王家の家政機関の中心部局「ツカサドコロ」で使用され、廃棄されたものと考える。多くの米支給伝票の木簡も最終的にはそこへもたらされたものと推定する。そして「ツカサドコロ」の対外的な正式名称にあたるのは「長屋王家令所」であろう。

木簡の年代　最後に、SD4750出土木簡の年代を述べる。年紀をもつ木簡を、内容による違いを問わず、また和銅や霊亀とのみあるものと、閏月から年が推定しうるもの等を除き、本文中に年を明記するものを取りあえず集計すると、

大宝３(703)年＝１点、和銅３(710)年＝２点、和銅４(711)年＝２点、

和銅５(712)年＝９点、和銅６(713)年＝15点、和銅７(714)年＝33点、

和銅８＝霊亀元(715)年＝17点、霊亀２(716)＝11点、霊亀３(717)年＝１点、

となり、和銅７年の33点をピークとして、同８年、同６年がこれに次ぐという分布をみせる。このことは全体の木簡の年代が和銅６～８年頃のものと言えそうであるが、実はそうではない。それは木簡全体の約半数を占める上記Ⅲ類の年代をどうみるか、に関わってくる。既述のようにそれらには年紀がない。Ⅲ類の木簡の年代について渡辺晃宏は大半が霊亀２年であろうと推定した[1)]。その根拠として、①１点のみであるが、「二年正月廿日」という年紀をもつもの（No.53）があり、これは霊亀２年と考えざるをえない、②「閏11月」の木簡（No.599）も、和銅３年～霊亀３年の中で該当するのは同年のみである、③月毎の分布をみると、年の後半に偏り、中でも11月の点数が前後の月の２倍もあり、これは閏11月を含んだ点数と考えられる、④各月

1）渡辺晃宏「長屋王家木簡と二つの家政機関」『奈良古代史論集』２，1991

の月末の日付をみると、30日の記載のある月が、1、7、10、11、12月で[1]、この五つの月が共に大の月であるのは、和銅3年～霊亀3年の中ではやはり霊亀2年しかない等の点をあげた。これらのうち、③については別の解釈もありうるが、それ以外の点は、この論文の発表後に公表された木簡を含めて検討しても、事実として認められる。したがって、Ⅲ類の木簡の大半が霊亀2年のものという渡辺説は妥当であり、そうなると全体の木簡も年紀がないものを含めて、同年のものがかなりの部分を占めていると考えられるのである。

小　結　以上を要約すると、SD4750の遺構上の知見から出土遺物は短期間のうちに廃棄されたものであること、それは邸宅内の各所から集められたというよりは、長屋王家の家政機関の中心部局「ツカサドコロ」にあったものと考えられること、木簡の点数からいえば米支給の伝票木簡の比率が高いこと、木簡による年紀は和銅3年～霊亀3年に及ぶが、その中心は霊亀2年のものであろうこと、を指摘した。

ii　SE4770出土木簡

遺構は既述のように、SD4750より西に位置する井戸で、井戸枠の抜取り穴から木簡が出土した。したがって、これも一括遺物といって良い。発掘の時期はSD4750より半年早く、この井戸から出土した「長屋皇宮」と記す3点の木簡（№172～174）が、発掘地を長屋王宅と推定する最初の手がかりとなったのである。

「長屋皇宮」

SE4770出土の木簡は226点と点数は多くはないが、「長屋皇宮」木簡以外にもSD4750と共通する点が多い。一つはSD4750の大きな特徴である米支給伝票の木簡がやはりみられることである。№165～167などで、そこに記された用語にも同じものがある。すなわち、「若翁」「帳内」「小子」「犬」、さらには断片ながら「西宮」(№176）も同様である。また、登場する人物も「国嶋」「弟上」「瘡男」などいずれもSD4750の木簡にみえる者と同一人物であろうし、№165の「秦望万呂」によって、SD4750に頻出する「望万呂」の姓と彼が帳内であることが推定される例もある。荷札木簡の中では近江国のものが5点とまとまって出土しているが、この点もやはりSD4750の特徴と一致する。

以上のように、SE4770の木簡は基本的にSD4750と極めて共通点が多く、両者は同一の場所で使用された木簡と判断できる。ただし、細かい点であるが、木簡の年紀がわずかに相違する。SE4770から出土した年紀をもつ木簡は、霊亀3年9月、霊亀3年10月、養老元年12月の3点のみで、いずれも717年のものである。したがって、木簡群は養老元年12月後ほどなく、おそらくは翌年初め頃に投棄されたと推定できる。SD4750木簡が霊亀2年のものを中心として、翌3年に廃棄されたとするとちょうど1年ほど違うことになる。わずか1年の違いではあるが、古代史研究にとっては重要な違いであることが最近指摘されるようになった。すなわち、郷里制の施行が、従来は霊亀元年からというのが通説であったが、霊亀3年からではないかという新説が提唱され[2]、これをSD4750とSE4770の荷札木簡が鮮明に示したのである。すなわち、霊亀2年までのSD4750の荷札は全て里制、霊亀3年のSE4770のそれは例外なく郷里制をとっているのである。

郷　里　制

1）1点だけ「八月卅日／御飯米間用米三石六升」(№277）があるが、伝票木簡とは米の量が大きく異なり、同列に扱うべきではない。

2）鎌田元一「郷里制の施行と霊亀元年式」『古代の日本と東アジア』1991，同「郷里制の施行　補論」『長岡京古文化論叢』Ⅱ、1992

C　二条大路木簡

二条大路の濠状遺構

ここでは、SD5100・5300・5310の３条の濠状遺構から出土した木簡について、内容上の特色を概観する。これらの遺構は、左京三条二坊八坪と二条二坊五坪との間の二条大路の南北両端に、道路側溝と平行してその内側に掘られたものである。その性格と遺物の内容が共通することから、出土した木簡も一連の遺物と考え、これを「二条大路木簡」と総称している。

二条大路木簡については、これまでに概報を４冊刊行(『平城宮木簡概報』22・24・29・30）してきており、計2,837点（うち削屑1,396点）の木簡の釈文を公表してきた。本報告書には、このうち二条大路木簡の内容や性格を考える上で重要と思われるもの計218点（うち削屑100点）の釈文を掲載した(「出土木簡釈文（抄）」№196～413)。

木簡の出土点数とその分布　二条大路木簡が出土した各遺構について、木簡の出土点数を３ｍごとの地区（Fig.50参照）別に、削屑（091型式の木簡）とそれ以外のもの（091を除く17型式の木簡）とに分けて集計すると、Tab. 20・21のようになる。現在、二条大路木簡の整理や解読はまだその途上にあり、ここに示した数字は確定数ではない。今後接続の判明などによって、若干の減少が見込まれるが、大きな変動はない。

計74,000点の木簡

まず、遺構ごとの総点数は、二条大路南側のSD5100が38,449点（うち削屑31,256点)、二条大路北側のSD5300とSD5310が計35,938点（うち削屑30,244点）であり、二条大路木簡としての総計は74,387点（うち削屑61,500点）にのぼる。出土密度という点では、SD4750（長屋王家木簡）には遠く及ばない（SD4750は１ｍあたり平均1,294点。地区ごとでの最高はTC11地区の9,789点。SD5100は１ｍあたり平均320点、最高はUO42地区の3739点。SD5300は１ｍあたり630点、最高はJF11地区の6,765点)。しかし、総点数に限ればSD4750の２倍以上であり、SD4750の発見以前に全国で出土していた木簡の総点数（約65,000点）をもはるかに上回る。

次に、遺構ごとの木簡の出土分布の状況を概観する。SD5100・5300・5310は溝状を呈する

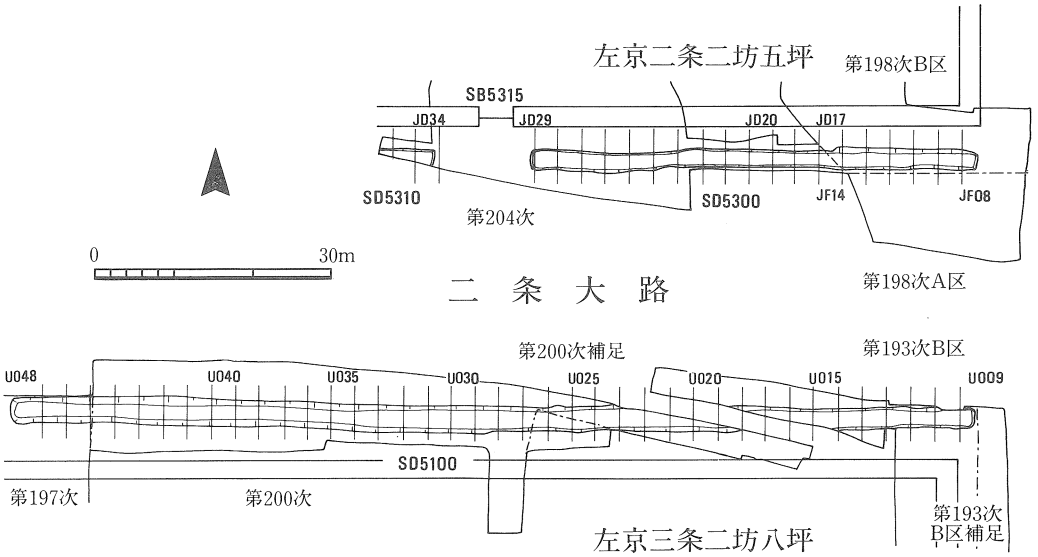


Fig.50　SD5100・5300・5310地区割図

地　区	第193次調査Ｂ区		第197次調査		第200次調査		第200次補足調査		計
	木簡	削屑	木簡	削屑	木簡	削屑	木簡	削屑	
UO09	12	37							49
UO10	30	151							181
UO11	52	48							100
UO12	159	2071							2230
UO13	111	870							981
UO14	99	450							549
UO15	70	45							115
UO16	18	3							21
UO17	20	10							30
UO18									
UO19					1	3			4
UO20					39	60			99
UO21					26	31			57
UO22					92	109			201
UO23					44	38			82
UO24					50	36			86
UO25					44	88	12	12	156
UO26					19	62	71	245	397
UO27					145	515	106	181	947
UO28					305	733			1038
UO29					199	347			546
UO30					165	431			596
UO31					123	247			370
UO32					159	351			510
UO33					140	507			647
UO34					85	344			429
UO35					138	337			475
UO36					168	325			493
UO37					122	294			416
UO38					180	972			1152
UO39					318	680			998
UO40					199	1025			1224
UO41					494	1890			2384
UO42					647	3092			3739
UO43					454	2501			2955
UO44					441	2154			2595
UO45					278	1663			1941
UO46			341	754					1095
UO47			277	836					1113
UO48			288	762					1050
計	571	3685	906	2352	5075	18835	189	438	32051
UOZ*	木簡452　削屑5946								6398
総　計	4256		3258		23910		627		38449

＊ＵＯＺの多くは第193次調査Ｂ区の木簡と判断される。これだけ大量の地区不明木簡が生じたのは、紙ラベルの溶解に原因がある。第197次調査以降は耐水性のラベルに切り替えたため、この理由による地区不明は生じていない。

Tab.20　SD5100出土木簡点数表

が、両端の閉じた土坑であって、湛水していた時期があった可能性はあるが、遺物が流れるような状況ではない。すなわち、出土状況はそのまま廃棄状況を反映しているものと考えてよく、出土分布の検討がSD4750出土木簡同様、一定の意義を有するといってよい。

SD5100の木簡出土分布

SD5100の木簡は、120mにわたって万遍なく分布するのではなく、①西端のUO38～UO48、②東端のUO12～UO14に顕著な分布のピークがある。また、③中央のUO27、UO28にもまとまりがあるが、中央東寄りは木簡出土が極端に少ない。このうち、①ではUO41～UO45の15mに特に顕著な分布があり、この15mだけでSD5100出土木簡全体の約35%が出土している。SD5100全体でみれば、西端寄りで多く出土しているといえるが、端部からやや内側の地区に出土点数のピークがあるという点では、東西両端に共通した状況を読み取ることができる。①②に比べると、中央部に小規模ながら③のような一つのピークがあるのはやや特殊である。これは、後述のように、この付近で出土する木簡の内容とも関連する。

SD5100全体としての削屑の割合は81.3%であり、SD4750出土木簡の82.2%に近い値を示す。傾向としては、木簡全体の出土点数が多い地区ほど削屑の割合が高くなる。これは逆に言えば、木簡の点数は削屑が主体となって増加するということである。なお、前述の二つの大きなピークのうちでは、特に東端で削屑の割合の高さが顕著で、UO17以東27mでは削屑が約92%を占めており、UO38以西33mの削屑の割合が約81%であるのと対照的である。

地　区	第198次調査B区		第204次調査		計
	木簡	削屑	木簡	削屑	
JF08	254	1818			2072
JF09	355	3354			3709
JF10	327	3747			4074
JF11	346	6419			6765
JF12	514	2674			3188
JF13	245	1888			2133
JF14=JD17	29	178	315	1817	2339
JD18			141	368	509
JD19			74	193	267
JD20			30	346	376
JD21			35	170	205
JD22			88	399	487
JD23			53	172	225
JD24			191	711	902
JD25			122	503	625
JD26			103	637	740
JD27			191	1046	1237
JD28			411	791	1202
JD29			1461	1728	3189
JD34			274	361	635
JD35			18	74	92
JFZ	48	685			733
JDZ			69	165	234
計	2118	20763	3576	9481	35938

遺構別内訳
SD5300：34977点
SD5310：727点
不明：234点
次数別内訳
第198調査B区：22881点
第204次調査：13057点

Tab.21　SD5300・5310出土木簡点数表

次にSD5300については、①JF08～JF14[1]、②JD24～JD29、すなわち東西両端に大きく二つのピークがある。このうち、特に顕著なのは①で、この間の20mのみでSD5300全体の70％近くが出土している。ここもSD5100の両端同様端部が最多ではなく、東端よりやや西側のJF10・JF11に最大のピークがきている。これに対し、②においてはJD29が最多であり、SD5300西端に出土のピークがある。このSD5300西端の木簡の出土状況は、二条大路木簡全体の中でも特殊な様相を呈している。

SD5300の木簡出土分布

この点はSD5300の地区ごとの削屑の割合をみると一層明らかになる。SD5300・5310全体の削屑の割合は、84.2％で、木簡の集中するJF09～JF12で削屑の割合が高くなるという状況は、SD5100と類似している。JF11では削屑が実に95％近くに達し、JD17以東20m全体でも約90％が削屑で、SD5100東端寄りの状況との類似が特に顕著である。このようにSD5300についてもSD5100と同様の傾向を一応読み取ることができるのであるが、西端では状況が一変する。すなわち、JD28では削屑の割合が木簡の総点数に対して65.8％と低く、さらに西端のJD29に至っては、総点数が3,189点に達するのに、削屑は54.2％しかない。JD27からJD29へと西端にいくに従って、削屑ではなく形のある木簡の割合が急激に高まっていくのである。このようにSD5300西端は、内容は別にして木簡出土状況に限っても、二条大路木簡全体の中では明らかに異質である。

SD5300西端の特殊性

SD5310については、溝幅全体を調査できたわけではなく、しかもJD35はわずかに調査できただけであるので断定的なことはいえないが、東端のJD34の削屑の割合が56.9％と低くなっているのは注目できる。SD5300西端と同様の状況を示している可能性は高い。

木簡の内容　次に、二条大路木簡の内容について概観しておく。

まず、文書木簡について述べる。二条大路木簡には官司間などで交わされた文書木簡が多数含まれている。公式令の規定に則った文書様式をとるものとしては、SD5100では民部省解（No.196）、大膳職解（No.197）、内膳司解（No.198・257）、内蔵寮解（未公表）、中務省移衛門府（未公表）、左兵衛府移中衛府（No.200）、中衛府移中務（No.259）、内匠寮牒（No.201）などがあり、SD5300では中衛府奏（No.290）、大炊寮解（No.291）、中宮職移兵部省卿宅政所（No.293）、中衛府移中務（No.341）、移中衛（No.342）、豎子所移（No.343）、太政官符（No.344）、中衛府牒（No.345）などがある。また、SD5100には（摂津）国嶋上郡（No.258）、SD5300には（大倭国）式下郡（No.292）や（武蔵国）足立郡（No.340）の郡司からの解もある。令外の官司その他からのものとしては、SD5100では山房解（No.199）、写一切経司移（No.260。ただし、これは習書の可能性が高い）などがある。

文書木簡

この他、解・移などの書式をとらずに「某官司進」ないし「某官司進上」と書き出す木簡が多数みられる。SD5100には園池司進（No.203）、左京職進（No.204）、右京職進（No.206）、左京某条進（No.205－五条）、右京某条進（No.207－八条・五条）、東市買進上（No.208）、西市進上（No.209）など、SD5300には園池司進（No.295）、左京職進（No.296）、右京職進（No.297）、東市買進（No.349）、西市進上（No.298）、府召進上（No.299。ただし、これは書き出しではない）などの他、右佐貴瓦山司（No.300・350）をはじめとして、佐紀瓦司、佐貴瓦山司、越田瓦屋、瓦山など造瓦工房からのものが多数みられる[2]。

各所よりの進上木簡

1）SD5300は第198次B区と第204次の2回に分けて調査しているが、これらの調査では地区割が異なるため、第198次調査B区のJF14と第204次調査のJD17とは同一地区である。

2）佐紀瓦司・佐貴瓦山司・越田瓦屋はいずれも以下の出典。『平城宮木簡概報』24、1991、p.9。瓦山は以下の出典。『平城宮木簡概報』29、1994、p.13。

なお、左右京職の進上木簡は、鷹の餌と考えられる鼠など[1]と、薬物や染料として用いられたと考えられる槐の花[2]を進上するものが多数を占めている。

このような進上木簡には、官司が進上するもの以外に御田・御薗などからのものもある。SD5100では意保御田（No.210）、池辺御園司（No.211）、奄智御薗（No.212）、菅内御園司（No.213）、南宅（No.214）、岡本宅（No.215）、宇太御厩（No.216）、多太氷所（No.217）などからのもの、SD5300では櫟本三宅（No.301）、岡本宅（No.302）、山代宅（No.303）、宇多御厩（No.304）、網曳司（No.351）などからのものがあり、SD5310にも岡本宅よりの進上木簡（No.408）がある。

門の警備の木簡

広い意味で伝票木簡の範疇に収め得る木簡も多数出土している。第一に、門の警備に関わる木簡、第二に宿直の木簡、第三に米支給の木簡である。門の警備に関わる木簡は、門号＋人名＋人数（＋食料請求の文言）、という書式をとる。食料請求を示す文言をもつものは少ないが、平城宮内裏北方官衙の土坑SK820出土のいわゆる西宮兵衛の木簡[3]に類するもので、門の警備担当者とその人数を書き上げ、食料を請求した木簡とみてよい（No.220・313～317・409）。所見する門には東一門、二門、三門、北門、南門、外南門の他、固有名詞で呼ばれる「みいうえ」門（表記は「三井上」「御井於」「御井上」「弥上井」などさまざま）がある。三門と北門は同一木簡に組み合わせてみえることが多い（No.314）。また、二門は皇后宮とともにみえることがある（No.313）。この他の門は単独でみえる場合のみである。他に、門ではないが同様の書式をとる

1）東野治之「古文書・古写経・木簡」（古筆学研究所『水茎』7）1989を参照。
2）東野治之「二条大路木簡の槐花－街路樹との関連から－」（中山修一先生喜寿記念事業会編『長岡京古文化論叢』II）三星出版、1992を参照。
3）奈文研『平城宮木簡一　解説』1969、総説を参照。

国名	郡名	税目・品目
大和	／	地子稲直
	平群	封戸白米*
河内	古市	調銭
和泉	／	薑2、大球薑
伊賀	阿拝	油
志摩	／	中男作物鰒腸
	答志	調堅魚、御調堅魚*、御調海藻、堅魚、堅魚鮨、多比鮨3*2、鯛（田比、多比）荒腊6*1、近代鮨*、末滑海藻、撫滑海藻*、赤乃利*、名止毛、貽貝腊2*、貽貝鮓*、不明
	英虞	御調熬（海）鼠、堅魚2*1、末滑海藻、布乃利*、荒伊委之、久恵荒腊、近代味腊*、不明2*
尾張	／	荏油*
	愛知	不明*
	知多	御調塩、調（塩ヵ）、不明2*
参河	／	蘇
	播豆	御贄須々岐楚割4*3、御贄赤魚楚割2*1、御贄佐米楚割9、御贄宇波賀楚割4*2、御贄鯛楚割3*1、御贄毛都楚割5*2、御贄楚割（魚種不明）、御贄楚割ヵ26*12、調小凝、不明*
	宝飯	中男作物（品目不明）
	八名	不明
駿河	志太	調荒堅魚、不明
	益頭	煎2*1、調荒堅魚、堅魚3、堅魚ヵ、不明*
	有度	中男作物煎、不明*2
	安倍	中男作物堅魚煎3*2
	廬原	調煮堅魚、調荒堅魚、堅魚ヵ、堅魚煎2*、煎*、御贄交易煮堅魚、不明2*1
	富士	調荒堅魚、荒堅魚、煎
	駿河	調荒堅魚9*1、調堅魚4、中男煎*、不明*
伊豆	／	堅魚
	田方	調荒堅魚15、調堅魚2、堅魚ヵ3*2、煎*、不明5*
	那賀	調荒堅魚4、調堅魚14、不明5*4、税目・品目なし（伊豆国中郡上）
	賀茂	調荒堅魚12、調煮堅魚2、不明3*1
甲斐	山梨	不明*
相模	／	豉2
武蔵	／	蘇、豉2*1
	足立	土毛蓮子、不明*
	榛沢	不明
安房	安房	調鰒20、鰒、調（鰒ヵ）、不明4*
	朝夷	調鰒、不明*
	長狭	不明2*1
上総	／	精蘇
	夷灊	若海藻
常陸	那賀	茜
	久慈	大贄鰒腊2

国名	郡名	税目・品目
近江	／	乗田価銭
	蒲生	不明*2
	犬上	大豆
	浅井	米*、不明*
美濃	／	蘇
	不破	不明
信濃	埴科	御贄鮭
上野	山田	不明
若狭	遠敷	御調塩9*[2]、調塩ヵ、中男作物海藻、御贄鯛腊2*[1]、御贄鯛2、御贄鯛鮓2*[1]、御贄海細螺、御贄貽貝富也交作、御贄貽貝鮓、大御贄海□*、不明2*[1]
	三方	調塩、贄宇尓
越前	丹生	不明*
	加賀	小豆
能登	能登	鯛腊、調代熬海鼠2
	珠洲	鯖
越中	新川	雑腊
佐渡	雑太	若海藻
丹波	／	乗田(価銭ヵ)、若海藻
	氷上	調銭*、不明*
丹後		御贄鮮鮭、(鮮鮭ヵ)雌腹*
但馬	出石	海藻
	城崎	不明*
因幡	巨濃	不明*
	法美	中男作物御贄海藻、不明*
	気多	海藻
伯耆	／	御贄若海藻
	河村	御贄海藻
出雲	／	御贄煮干年魚、御贄若海藻塩洗、御贄若海藻水洗、若海藻ヵ*
	嶋根	中男作物烏賊
	秋鹿	中男作物海藻
石見	邇摩	不明*
隠岐	知夫	調□腊、紫菜、凝海菜
	海部	調御(三)取鰒2、調螺、調熬海鼠、調短鰒2、調海藻*、調品目不明、贄腊*、贄烏賊*、烏賊、不明2*[1]
	周吉	調海藻2、調若海藻、調烏賊4*[1]、不明*
	隠道	調□螺、調乃利2、三耳鰒、不明*
播磨	賀古	加比鮓
	餝磨	調銭
	神埼	調銭*
	多可	封戸白米3*[1]、米ヵ*
	佐用	庸米
	不明	封戸白米ヵ*
美作	久米	中男茜*
	大庭	茜
	真嶋	中男作物搗栗
美作	不明	不明
備前	邑久	不明
	赤坂	簀
	御野	調銭*
	児島	調塩、調塩ヵ、調(品目不明)*
	上道	庸米2、米ヵ2、不明*
	不明	不明*
備中	都宇	中男作物楡蟹
	浅口	調塩2、不明
備後	沼隈	調鉄、
	品治	不明
	世羅	白米
安藝	／	銅
周防	熊毛	不明*
	佐波	調短席
	不明	不明*
長門	大津	鰒耳漬
	阿武	中男作物(品目不明)
紀伊	海部	御贄安遅魚2
	日高	調塩
淡路	津名	調(塩ヵ)2
	三原	調(塩ヵ)
阿波	／	贄蕀甲
	板野	少豆
	那賀	調御取鰒
讃岐	／	調椙櫃、櫃
	鵜足	中男作物干蛸、中男作物蛸
	多度	米ヵ
	三野	調塩、鹿醢、不明*
	苅田	庸米
伊予	／	枝子2*[1]、和気瓜*
	神野	調塩*、不明5*[4]
	濃満	海藻*
	和気	楚割2、不明*
	伊与	鯛楚割、調(品目不明)*、調贄楚割*、不明*
	宇和	調贄(品目不明)
土左	香美	不明
	吾川	不明
	不明	不明
筑前	穂波	紫草種子ヵ
	嘉麻	紫草種子ヵ
肥後	詫麻	紫草種子ヵ6*[3]
豊後	大野	紫草種子ヵ
薩麻		紫草種子ヵ

＊はこれまでの未公表のものを示す。例えばA５*[3]は、Aの荷札が５点あり、そのうち３点が釈文未公表であることを示す。

Tab.22　ＳＤ5100出土荷札木簡の税目・品目一覧

国名	郡名	税目・品目
摂津	菟原	米
伊勢	飯高	庸米ヵ、米ヵ
志摩	答志	御調海藻、名乗菜、伊祇須、近代鮨、鯛荒腊、不明
	英虞	多比膴、多比楚割、不明2
尾張	愛知	不明
	智多	調塩
	不明	調塩
参河	碧海	不明
	播豆	御贄鯛楚割２、御贄佐米楚割４、御贄楚割ヵ3
	渥美	調塩、調塩ヵ2
遠江	磐田	不明2
	不明	不明
駿河	志太	堅魚
	益頭	煎
	有度	調堅魚ヵ2、不明
	安倍	中男作物堅魚煎
	駿河	調荒堅魚2、不明
伊豆	／	煮堅魚
	田方	調荒堅魚6、煎、不明2
	那賀	調荒堅魚、税目・品目なし(伊豆国中郡上)4、不明
	賀茂	調荒堅魚、煮堅魚
	不明	調荒堅魚
武蔵	／	豉
	橘樹	茜
	荏原	大贄蒜
安房	安房	調鰒2、調鰒ヵ、不明
	不明	不明
下総	埴生	左兵衛養布
近江	蒲生	庸米、不明
	神埼	大豆
	坂田	庸米29、庸米ヵ26、不明
美濃	多藝	不明
	方県	煮腊年魚
	大野	米
上野	／	粮代布
若狭	遠敷	御調塩、御調塩ヵ、調塩ヵ、加麻須腊、御贄鰒鮓、御贄鯛腊、御贄細螺
	三方	御贄鰒鮓
越前	丹生	白米　茜
	足羽	中男作物呉桃子、不明2
	江沼	白米
	加賀	白米
	不明	不明
能登	能登	調熬海鼠
越後	沼足	不明
丹後	／	鮮鮭御贄
但馬	気多	白米
因幡	／	鮮鮭御贄2
	高草	不明2
	気多	中男作物海藻大贄
伯耆	／	御贄鮭、鮭
石見	邇摩	不明
	那賀	右大殿御物海藻
	美濃	不明(裏面に同国邑知郡調錦の記載あり)
隠岐	知夫	調海藻2、調乃利
	海部	調海藻5、調御取鰒、調短鰒、調螺、海藻ヵ、不明
	周吉	調烏賊、御取鰒、不明
	役道	不明
播磨	賀古	御調御贄大蛸
	神埼	不明
	多可	庸米、封戸白米、白米2、白米ヵ、不明
	賀茂	白米
美作	不明	不明2
備中	哲多	不明
	不明	不明
備前	児島	調水母
備後	沼隈	調鰍
周防	大嶋	調塩
紀伊	伊都	中男海藻
	安諦	調塩
淡路	津名	調塩、調塩ヵ2
	不明	不明
阿波	美馬	米2
讃岐	寒川	庸米
	三木	中男作物蛸
	山田	庸米ヵ、調塩
	那珂	調備頭打
	三野	調塩ヵ
伊予	桑村	不明
	伊予	不明
	宇和	調贄楚割2

Tab.23　SD5300・5310出土荷札木簡の税目・品目一覧

ものに、北府（№318）、翼所（№319）、宿所（№321）、鷹所（№322）などのものがあり、翼は大宝令制における兵衛府の次官であるから、少なくとも兵衛府ないし兵衛がこれらの警備に関わっていたことがわかる。また、鷹所の木簡に兵衛府の第三等官である大直がみえる例（№322）があるから、鷹所も兵衛が警備した施設であることがわかる。

宿直木簡

宿直の木簡は、宿ないし直、あるいはその両方を担当した人名（主として資人）と日付を書き上げた木簡（№221・222・325・326・410）で、これも平城宮出土のものに類例がある（『平城宮木簡四』3751～3759号など）。

米支給の木簡

米支給の木簡は、支給日と支給した米の総計を記し、その人別の内訳を書き上げたもの（№223・327）で、日下の署名（苅田孔足、掃守乙麻呂など）の他、別筆で支給責任者のものと考えられる署名（真公、稲万呂など）のあるものが多い。

多種多様の荷札木簡

次に荷札木簡について述べる。多種多様な荷札木簡が出土しているのも、二条大路木簡の大きな特徴の一つである。遺構ごとに国郡別に品目や税目も含めて整理すると、Tab.22・23のようになる。畿内のものが少ないのは別として、ほぼ七道全域にわたる木簡が網羅されており、その内容のヴァリエーションは平城宮出土の荷札木簡そのものといってよい。多数の調、庸、中男作物、贄の荷札の他、少数ではあるが封戸白米、兵衛養物（№334）、地子稲直（№235）、乗田価銭（№236）、土毛（№244）などの荷札を含み、また類例の少なかった越後国（№336）や土左国（№254・255）の荷札、あるいはこれまで１点しかなかった蘇（『平城宮木簡一』、466号）の荷札が４点も出土（№240－参河、245－武蔵、247－上総、249－美濃）するなど、超一級の荷札木簡群を構成している。その中でも特に点数的に顕著なものとしては、伊豆国の調荒堅魚・煮堅魚（№243など62点）、駿河国の調荒堅魚・煮堅魚（№242など29点）、安房国の調鰒（№246など26点）、隠岐国の種々の海産物（№252など47点）、近江国坂田郡上坂（田）郷の庸米（№335など55点）、参河国播豆郡篠嶋・析嶋の海産物の贄（№239など63点）がある。これらは、二条大路木簡を特徴づける荷札木簡といってよい。

題籤軸木簡

この他、二条大路木簡に特徴的な木簡としては、題籤軸の木簡がある（№230～233・329～331）。SD5300の西端を中心に出土しており、その内容も多彩で、活発な事務処理活動を垣間みることができる。

文書の軸と箱

また、SD4750と同様に、文書の箱がまとまって出土しているが、箱とその中に収められていた文書のものと覚しき軸がペアになって出土した例がある（№333の「伊勢国少目大倭生羽進上」という上書をもつ箱と、№234の「伊勢国天平八年封戸調庸帳」の軸。前者はSD5300出土、後者はSD5100出土で、両遺構の関係を考える上でも重要）。№324・338・339のように多数の事例がありながら、用途不明の木簡もある。

削屑は大きさや文字の残りの良さの点では長屋王家木簡にははるかに及ばないが、内容的にはヴァラエティーに富むものとなっている。元の木簡が推定できるものとしては、宿直木簡の削屑（№266、377～379）、米支給木簡の削屑（№267）、門号木簡の削屑（№263・375・376）などの他、これまで類例のほとんどなかった荷札木簡の削屑と確実に判断できる実例がある（№287・393～395）。また、№307と№381の関係のように、単独の木簡と同文の削屑もある。文書木簡の日下の自署を含む差し出し部分の削屑（№354・371など）も多く、木簡の再利用が頻繁に行われていたことを示している。

荷札木簡の削屑

点数的に顕著な削屑としては、勤務評定に関わる一群がある（№274～283・384～387）。明確

勤務評定の木簡の削屑

に確認できるものだけで約220点あり、SD5100東端とSD5300東端から集中して出土している。考課令兵衛条に規定のある兵衛の上等者の評定文言である「恭勤謹慎、宿衛如法、便習弓馬」や、同じく中等者の「番上不違、職掌無失、雖解弓馬、非是灼然」の一部を記すもの（№279・280・385～387）が伴出しているので、兵衛あるいは中衛に関わるものが含まれるのは確実である。他にも、中衛府の官名を記すなど中衛府に関わるもの（№259・264・341・342・345・347・348・367～371）、同じく兵衛府に関わるもの（№261～263・353・357～366）は多数にのぼる。一方、九等評価のもの（城30－12）もみられるので、舎人の勤務評定に関わる木簡も含まれている（第Ⅴ章の１B参照）。

両面墨書の削屑

その他、内容的に注目できるものとしては、物品の和名を記す古辞書風の削屑（№288）、千字文を習書した削屑（№396）、中央に調副物の欠小を申告する国司解の文例集を習書した削屑[1]（№397～405）、具注暦の削屑（№407）などがある。なお、№260・272・397のような両面に文字のある削屑が出土している。習書木簡のあり方を考える重要な資料となろう。

木簡の年紀　二条大路木簡の年紀は、全体としては天平７年と天平８年の年紀をもつものが多く、この点はSD5100とSD5300・5310とで共通している。しかし、寺崎保広が既に指摘している[2]ように、まず文書木簡については、全体としては天平８年７月をピークとするが、その下限はSD5100では天平10年４月まで下るのに対し、SD5300では天平８年12月までで止まる。また、荷札木簡についても、天平７年をピークとする点は共通（７年に納められた物品が翌８年に消費されたと考えると、廃棄時期のピークは文書木簡のそれと合致する）するが、SD5100に天平11年10月のものが含まれるのに対し、SD5300では天平８年10月のものが最新の年紀であるという違いがある。寺崎はさらに、このようなSD5100とSD5300・5310の年紀の違いは、遺構の埋め立て年代の違いに基づくものと考え、SD5300は天平９年の早い時期に埋められたのではないかと推定している。

SD5100とSD5300と年紀の下限に差

この寺崎の理解は基本的には正しいと考えるが、二条大路木簡は前述のように木簡の出土分布にも特徴があるので、ここでは出土分布という観点をも加えた上で、文書木簡と荷札木簡の両方について、地区ごとに木簡にみられる年紀を整理しておくこととする。

文書木簡の年紀と分布

はじめに文書木簡について整理したのが、Tab. 24～26である。明確に荷札木簡と識別できるもの以外は便宜上全て文書木簡として採り上げてある。SD5100は、神亀２年が最古（未公表）で天平６年以前のものが６点ある（他に、削屑に「神亀三年」と記したと考えられるものが１点みられる（城30－９））が、明瞭な文書木簡としては天平７年８月が最古（城30－43）であり、同年も６点のみ、主体は天平８年のものとなる。ピークは天平８年６月と７月で、木簡出土の絶対数の多い東西両端に多数分布している。しかし、天平９年以降の木簡の分布をみると、東端に分布する点に変化はないが、西端からはほとんど出土しておらず、天平９年の年紀をもつものはSD5100中央部に集中している。さらに、天平10年以降のものはこれともやや出土分布が異なり、やや西寄りに分布範囲が移動する。SD5100の文書木簡の最新の年紀は、天平10年

1）多くの断片を総合すると、ほぼ次のように復原できる。「ム国司解申副物欠小事、右去年陽旱、五穀不登、老小飢饉、四方求食、此往彼堺、彼来此間、輸丁……物欠々小々数、顕注如件、仍具事状、便付調使位姓名、申送謹解」（原読点なし）。これについて言及するものとして、以下の文献がある。鈴木景二「下級国司の任用と交通」『木簡研究』14、1992

2）寺崎保広「平城京『二条大路木簡』の年代」『日本歴史』531、1992

	天平6年以前	天平7年						天平8年												天平9年												天平10年
		8	9	10	11	閏11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
UO48				1									2	1																		
UO47			1								1		1	3				1														
UO46	1							1				1		5					1													
UO45	1									1		1		2																		
UO44	1																															2
UO43						1							1	1	1																1	1
UO42	2				1														2			1	1									
UO41										1																						2
UO40										1																						
UO39																																2
UO38																																
UO37	1																										1					
UO36																	1										1					
UO35																																1
UO34																							1									
UO33	1																												1			
UO32																												1				
UO31																				1		1		1								
UO30														1								1										
UO29											1										1	2										
UO28																		2									1					
UO27											1		1	1							1	1										
UO26																																
UO25																																
UO24																																
UO23																																
UO22																								1								
UO21																														1		
UO20													1																			
UO19																																
UO18																																
UO17																																
UO16																																
UO15			1												1		1															1
UO14															1									1								1
UO13									1	1												1										
UO12		1																1				1						1				
UO11															1			1														
UO10													1		1																	
UO09																																

Tab.24　SD5100出土文書木簡の年紀

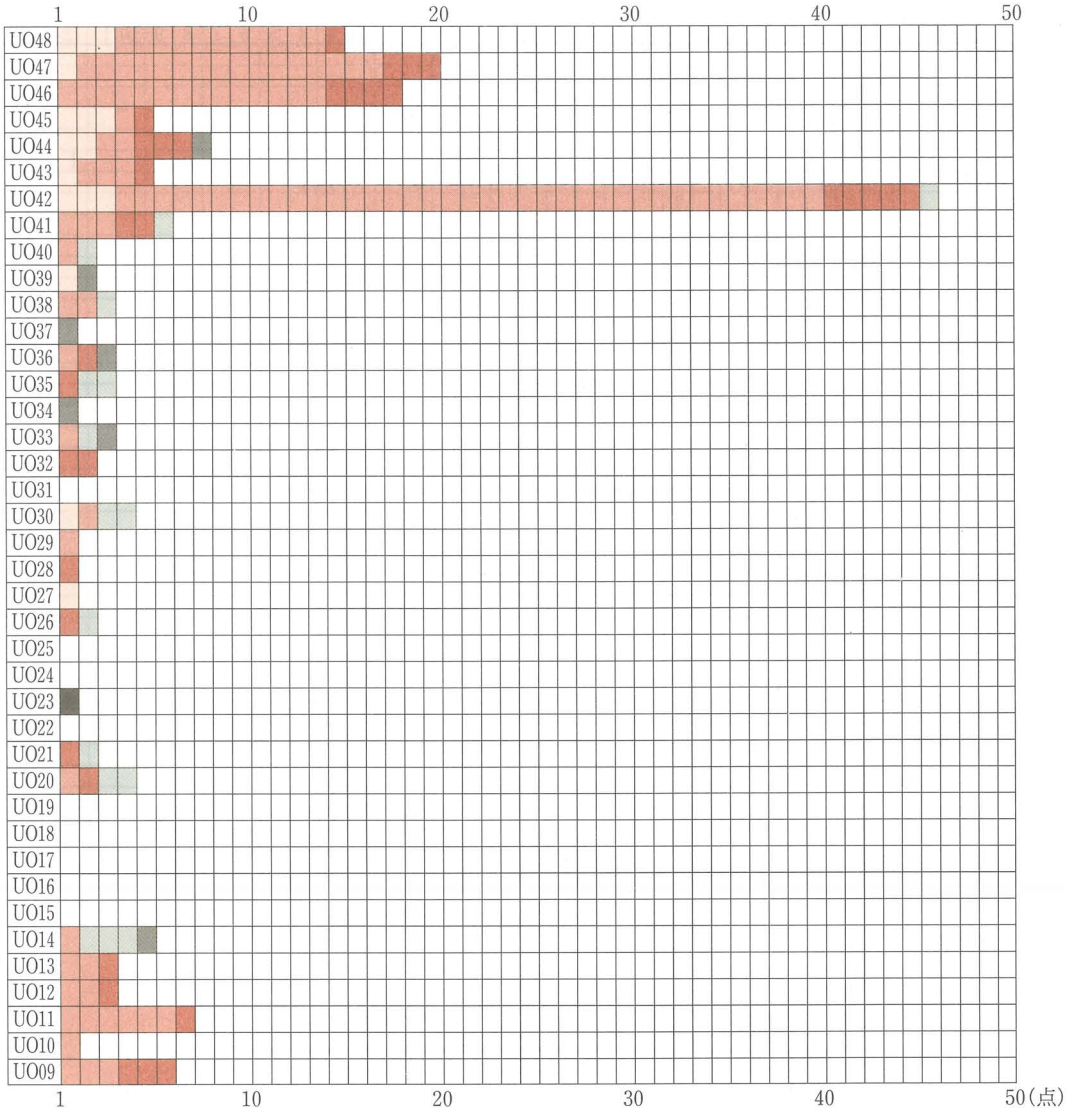
	天平6年以前	天平7年						天平8年											
		8	9	10	11	閏11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
JD29								1	2			6	6	12	4	2	1		1
JD28					1							2	3	5	4		1		
JD27															2	1			
JD26								1											
JD25																	1		
JD24													1						
JD23														1			1		
JD22	1																		
JD21																			
JD20															1				
JD19															2				
JD18	1							1				1					3		
JF14														1	1	1			
JF13										1						1			
JF12															2	1			
JF11	1						1							2	2	1	1		
JF10	1										3	1				1			
JF09										1	1		2	1					
JF08														1					

Tab.25　SD5300出土文書木簡の年紀

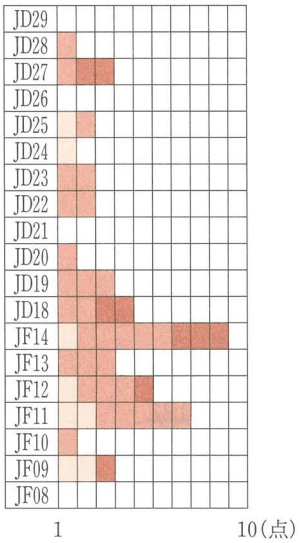
	天平6年以前	天平7年						天平8年											
		8	9	10	11	閏11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
JD35																			
JD34	1											5		2					

Tab.26　SD5310出土文書木簡の年紀

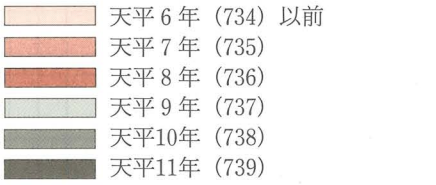
※調査途中で平城京の地区割基準を変更したため、
SD5300のJF14区はJD17区になった。



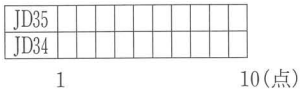
Tab. 27　SD5100出土荷札木簡の年紀



Tab. 28 SD5300出土荷札木簡の年紀



※調査途中で平城京の地区割基準を変更したため、
SD5300のJF14区はJD17区となった。



Tab. 29 SD5310出土荷札木簡の年紀

閏７月（未公表）である。

このような紀年木簡の分布の偏りは、木簡の内容とも密接に関係している。天平７、８年の木簡は内容による分布の偏りは顕著でなく、SD5300出土の木簡（ただし、その西端は別）と似通った状況を示すが、天平９年の木簡はSD5300西端に集中的に分布する宿直木簡や米支給木簡が主体を占めており、また天平10年の木簡は京職からの鼠の進上状が大半である。この点は同種の木簡が一括して保存・廃棄されたことの反映とみられる（後述）。

SD5300は、天平３年５月が最古（城24－19）で、天平６年以前のものが４点あるが、明瞭な文書木簡としては天平６年７月が最古（某所よりの瓦の進上状。城24－９）であり、天平７年のものも１点に過ぎない。他は全て天平８年で同年12月までにおさまる（最新は佐紀瓦司の木簡。城24－９）が、SD5100同様木簡の絶対数の多い東西両端に集中している。ただ、東端が天平８年４月から10月にかけてほぼ均等に分布するのに対し、西端は天平８年５月から８月に顕著な集中がみられ、ことにJD29では天平８年７月の木簡が12点と際だっている。

荷札木簡の年紀と分布

次に、荷札木簡について出土地点という観点も加えてその年紀を整理すると、Tab. 27～29のようになる。まず、SD5100についてみると、神亀年間のもの（年不明）が最古（未公表）、天平11年10月が最新（城22－35）である。出土分布は文書木簡以上に年紀による偏りが顕著であり、天平６、７年に納められ７、８年頃までに消費された物品の荷札は、ほぼUO40以西とUO14以東に分布する、一方、これ以降に消費された天平８年以降の荷札木簡、特に天平９年から11年のものは、両端にはほとんどみられず、中央部分に分布している。この天平９年以降の荷札木簡には内容的にも一つの傾向がある。すなわち、天平９年の荷札木簡は16点（№250・251・253など）あるが、このうち中男作物が５点、贄が４点で、二条大路木簡に特に顕著な堅魚や鰒などの調の荷札は１点もない。また、天平10年のものは７点（№237など）あり、調堅魚の荷札（国名不詳）が１点含まれるが、、中男作物１点、贄１点の他、調銭の荷札が３点あり、ここにも荷札の内容に傾向の違いが認められる。さらに、天平11年の１点も中男作物の荷札である。このように、SD5100においては天平９年以降の新しい年紀をもつ特定の税目の荷札木簡が、それ以前のものとは異なる場所に集中的に分布しているのである。このような年紀による分布の偏りは、文書木簡の場合と軌を一にするもので、何らかの形での廃棄の時間差を考える必要がある。ただ、これを一括した廃棄処分の中で同類の木簡ごとに捨てたために生じた単なる時間差と解すべきか、使用時期の異なる木簡による純然たる廃棄時期差として解すべきか、俄には判断できない。

SD5100に廃棄の時間差

ここで次の事実はこの点を考える上で参考になる。すなわち、№271にみえる「高椅朝臣安」は、高椅朝臣安麻呂の可能性が強く、天平９年９月に正五位下から正五位上に、また天平10年正月に正五位上から従四位下に叙されている。また、№272にみえる「小野□〔朝ヵ〕」は、小野朝臣東人の可能性が強く、天平９年９月に外従五位下に叙されている。したがって、これらは天平９年９月から12月頃に書かれた木簡の削屑であり、少なくともこれ以降に廃棄されたことが判明する。№271や№272が廃棄されていたSD5100東端出土の木簡には、天平９年以降の年紀をもつものは少ないが、以上の事実はこの地域にも廃棄時期が天平９年以降に降る木簡が多数含まれる可能性を示唆するものといえよう。このようにSD5100における地区ごとの明瞭な廃棄の時期の違いを認めるのはやはり困難のようであるが、天平８年までの木簡にSD5100

とSD5300・5310とで強い共通性があるのは確かで、SD5100の木簡の廃棄が、全体として2時期にわたる可能性は否定できない（第Ⅴ章1B参照）。

SD5300から出土した荷札木簡の年紀は、神亀5年9月を最古（城24－28）とし、天平8年10月を最新（№337など）とするが、主体は天平7年である。天平8年のものに、鮮鮭（生鮭）の荷札（№337）が含まれているのは示唆的で、基本的には天平8年までに消費された物品の荷札と考えてよかろう。すなわち、天平8年12月を最新とする文書木簡の年紀と整合する。しかし、SD5300の西端に年紀のある荷札木簡がほとんどみられない点は注意を要する。SD5300西端の木簡が二条大路木簡の中でも特異であることは再三述べてきたが、年紀のある荷札木簡の分布においても同様のことがいえるのである。なお、SD5300における年紀のある荷札木簡の分布のピークは、SD5100とは異なり、木簡の絶対数のピークとは一致しない。絶対数のピークが削屑によって形成されていることの反映である。

SD 5300 西端以外は同一の廃棄元

以上の事実から、二条大路木簡の年紀について、ここで改めてまとめておこう。天平8年までに使用された木簡は、SD5100の両端寄りおよびSD5300の中央から東端にかけてと、西端に分布する。天平9年以降に使用された木簡は、SD5300にはみられず、SD5100の主として中央寄りに分布する。天平9年以降に使用された木簡のうち、SD5100中央に分布する宿直木簡や食料支給木簡はこれと位置的に向かい合うSD5300西端と共通するもので、SD5300西端共々廃棄元が別である可能性を暗示する。これ以外のものでは、鼠や槐花の進上状はSD5300東寄りにみられ、贄や中男作物の荷札はむしろSD5100に多いという違いがある程度であり、またSD5100では廃棄に時間差が考えられるが、基本的には廃棄元を同じくする木簡と考えられる。

木簡の性格　前述の内容の検討からも明らかなように、二条大路木簡は平城京内出土の木簡でありながら、その性格は平城宮出土の木簡とほとんど変わらない。しかも、天平7、8年を中心としたごく限られた時期のもので、極めて良好な一括史料と考えてよい。

二つの木簡群

では、二条大路木簡のような大量の木簡を使用し、これを廃棄したのはいかなる機構なのか、木簡の記述から知られる事実を次に紹介する。木簡の使用元として明らかな機構としては、①中衛府・左右兵衛府、②兵部省卿宅政所がある。

中衛府の木簡

①のうち、中衛府は左兵衛府の移（№200）と某所よりの移（№342）に宛先としてみえ、また中衛府を発給主体とする木簡（№259・290・341・345など）も多い。中衛府宛の木簡と中衛府を発給主体とする木簡がともに出土するのは、必ずしも中衛府に限らず、論理的には中衛府と木簡のやりとりを行う某官司ということもあり得ないことではない。例えば、中衛府発給の木簡の宛先としてみえる中務省や、中衛府宛の木簡を発給した左兵衛府も考慮に入れておく必要はある。しかし、少なくとも中務省の場合、その存在を示すような木簡が他にほとんどないので、考慮の対象から外すことが許されよう[1)]。これに対し、中衛府の存在を示す木簡は数多い。中衛府という官司名のみえる木簡の他、中衛府の官職名としてはSD5100に権将曹（№264。権官の初見としても重要）があり、SD5300に大将（№367）、将監（№368・369）、将曹（№370・371）があり、中衛の歴名を申送する木簡の削屑（№347）もある。また、SD5300出土木簡にみえる

1）「中務省移衛門府」と記す断片（未公表）があるが、衛門・右・左に分けて人名を列記した木簡（城24－17）の存在からみて、宛先の衛門府が左右兵衛府と活動をともにする中で廃棄されたものと考えられる。

五十長（№294）も50人を単位として編成される中衛の統率者で、中衛府の官人とみてよい。このような状況からみて、二条大路木簡に中衛府に関わる木簡が含まれているのは確実である。墨書土器にも中衛府を示すものがあり、SD5100から「中衛府厨／右兵衛（重ネ書キ）」が、また東二坊々間路西側溝SD4699から「中衛府」と記された墨書土器が出土した。

左右兵衛府の木簡

中衛府と並んで左右兵衛府の木簡も重要である。木簡の宛先としてはみえないが、発給主体としてSD5100に左兵衛府から中衛府に宛てたもの（№200）がある他、兵衛府に関わる木簡は数多い。官司名を記したものとしては、SD5100から左兵衛府（№261）、右兵（№262）、SD5300から左兵衛府（№353）があり、所属官職名としてはSD5100から直・志（№218）があり、SD5300からは翼（№357・361）、大直（№358～360）、少直（№361）、前大志（№362）、少志（№363・364）、番長（№313）、下番兵衛（№366）、考選所兵衛（№365）などの他、大志曹司（№323）、卒所・翼所・大志所（№320）のような官人の執務場所を示すものもみられる。また、これらとともにみえる府厨（№320）、宿所（№321）も兵衛府の施設であり、鷹所（№322）も前述のように兵衛府に関わる機構である。さらに、門の警備の木簡には番長がみえる（№313）から、兵衛府が某所の門の警備を担当した際の木簡であり、番上官の考課に関わる木簡も「考選所兵衛」と記す削屑（№365）の存在からみて兵衛府に関わる木簡であることが明白である。墨書土器にもSD5100出土のものに「中衛府厨／右兵衛（重ネ書キ）」「大直所器」、SD5300に「左兵衛府」「右兵衛」「□兵衛」がある。また、SD4699からも「左兵衛府」と記されたものが出土している。このように左右兵衛府の木簡も二条大路木簡の重要な構成要素となっている。

なお、中衛府と左右兵衛府はその職掌が一致しその分担は明確でなく、二条大路木簡においても両者は弁別しがたい。SD5100出土墨書土器に「中衛府厨／右兵衛（重ネ書キ）」と記すものがあることから推すと、中衛府と左右兵衛府は一体として活動していた可能性もある。したがって、門の警備の木簡や番上官の勤務評定木簡に中衛に関わるものが含まれている可能性は否定できない。このような問題は残るが、中衛府や左右兵衛府といった衛府に関わる木簡が、二条大路木簡の主要部分を占めていることは事実として理解できる。その意味で、夙に鬼頭清明が二条大路木簡と平城宮内裏北方官衙の土坑SK820出土の木簡との類似を検討した[1]のは、正鵠を射た指摘であった。

藤原麻呂の家政機関に関わる木簡

②の兵部省卿宅政所は、当時の兵部卿藤原麻呂の家政機関である。その根拠となるのは、中宮職から兵部省卿宅政所に宛てた移（№293）である。文書木簡は、宛先で廃棄される場合と、発給元に回送されて廃棄される場合とがあるが、次のような理由から№293は宛先の兵部省卿宅政所で廃棄されたもの判断できる。すなわち、№293にみえる19人には、宿直木簡や食料支給木簡に散見する者がいる[2]ので、№293を廃棄した機構にこの時この19人は勤務していたことがわかる。宿直木簡や食料支給木簡はいわば帳簿に類する木簡であり、少なくともここにみえる舎人たちの勤務場所かこれを統括する部署で廃棄されたと考えられる。したがって、これら

1）鬼頭清明「平城京の保存と長屋王木簡－東院南方遺跡の保存を訴える」（歴史学研究会編『遺跡が消える－研究と保存運動の現場から』歴研アカデミー7）青木書店、1991

2）日下部乙麻呂（№222）、丈部広国（№221・『平城宮木簡概報』22、1990、p.17）、狭井石楯（№267）、河内夷麻呂（『平城宮木簡概報』24、1991、pp.14・15，『平城宮木簡概報』29、1994、p.21）、大荒木事判（『平城宮木簡概報』24、p.12）など。この5人は、『平城宮木簡概報』22、p.6の召文にみえる。

の木簡がどこで用いられた木簡であるかがNo.293の廃棄場所決定の重要な手がかりとなる。ところで、No.293にみえる19人のうち、狭井石楯は中宮舎人（No.328）としてみえ、また他田神□も正倉院文書にみえる他田日奉部直神護である可能性が強く、天平８年当時中宮舎人であったことが明らかである(『大日本古文書』編年文書巻３、p.150)。また、No.293で中宮職が送付を請求している考文銭は、勤務評定を受ける官人本人が払い、これを所属官司でとりまとめて太政官に送るものである[1]から、そこにみえる19人はこの時中宮職には勤務していなかったことがわかる。すなわち、この19人は本来中宮職に所属する中宮舎人でありながら、この時期には中宮職には勤務しておらず、藤原麻呂の家政機関に出向していたことになる。よって、彼らが実際に勤務していた場所から廃棄されたNo.293も、藤原麻呂の家政機関から廃棄されたものであることが明らかで[2]、No.293およびこれと関係する一連の木簡が藤原麻呂の家政機関の木簡であることが判明する。

中宮舎人が藤原麻呂宅に出向

なお、木簡の内容ごとの分布については、詳しくは第Ⅴ章の１Ｂで言及することにするが、藤原麻呂の家政機関に関わる木簡が、左京二条二坊五坪南面中央の門SB5315と不可分の関係をもって出土していることは、これまでの事実記載からだけでも明確で、藤原麻呂の家政機関に関わる木簡は二条大路木簡の中ではむしろ特殊な一群とみることができる。ただし、出土地区だけから、例えばSD5300西端のJD29から出土したという点のみでその木簡を藤原麻呂の家政機関のものと類推するのは危険で、人名のつながりから確実に判断できるもののみにとどめるべきであろう。

麻呂の木簡と門SB5315

以上のように、二条大路木簡の性格については、藤原麻呂の家政機関に関わる一群を含みつつ、衛府に関わる木簡を主体としていることが明らかであるが、両者でもなお律しきれない木簡が含まれている。それは天平８年６月から７月にかけての吉野行幸に関わる木簡（No.227。198・305などもか）や、大膳職に関わる木簡（No.226）であり、また民部省解（No.196)、大膳職解（No.197)、大炊寮解（No.291)、あるいは「進」ないし「進上」の書式をもつ木簡の宛先をいかに理解すべきかも課題として残る。これらは、基本的には二条大路木簡の主体を占める衛府が警備する対象、すなわち天皇や皇后あるいはこれと同クラスの人物に関わる施設の木簡とみられ、二条大路木簡は全体としてこの施設に関わる木簡として把握することができると考えるのであるが、その施設の実態については二つの木簡群の関係とともに第Ⅴ章の１Ｂに譲ることとする[3]。

天皇・皇后クラスの人物の施設

1）野村忠夫『律令官人制の研究』増訂版、吉川弘文館、1968、pp.134～138

2）「兵部卿宅」と記した墨書土器が同じ地区から出土していることも、その根拠の一つとなろう。なお、かつて鷹所の存在もその根拠の一つ（奈文研『長屋王概報』1991）としたが、本文前述のように、鷹所は藤原麻呂の家政機関とは無関係であることが明らかになったので、根拠とすることはできない。

3）なお、宛先をもつ木簡が他にも出土しているが、木簡の廃棄元を示唆するようなものはない。東宅司(『平城宮木簡概報』24、1991、p.６）は藤原麻呂と密接に関わる別の人物の邸宅の機構とみられ、この木簡は東宅から差出の麻呂宅に回送されたものであろう(第５章２Ｂのiii参照)。岡本宅(『同』p.６）は瓜の進上木簡にみえる岡本宅と考えられ、この木簡も瓜の進上命令として岡本宅に送られた後、物品とともに回送されてきたものと解釈できる。また、厨司(『同』p.６）は門の警備の木簡にその名がみえ、兵衛または中衛と考えられる間人石勝を発給主体とするから、府厨と同一の機構の可能性が強い。また、酒司(『同』p.６）については明証はないが、衛府または藤原麻呂の家政機関の一部局の可能性が考えられよう。SD5300出土の右大殿(『同』p.29。右大臣藤原武智麻呂を指すか）宛の荷札については、他に武智麻呂に関わる木簡はなく、藤原麻呂との関わりで搬入されたものと解される。

2　瓦　塼　類

今回の調査区は左京三条二坊一・二・七・八坪と左京二条二坊五坪、さらに両者の間を通る二条大路や東を限る東二坊々間路におよぶ。二条大路の南と北では異なる宅地であるので、両者に分けて記載すべきであるが、ここでは便宜上、一括して型式順に記載する。出土状況に関しては第Ⅴ章の考察で触れる。左京三条二坊と二条二坊の５町分の敷地内においては、奈良そごう関連の調査以外にも小規模な調査が実施されている。左京三条二坊側については、４町分のかなりの面積を調査しているので、こうした調査で出土した資料も検討対象に加えた。一方の二条二坊側については軒瓦と緑釉瓦を収録するに留める。まだ調査範囲は狭く、総合的な分析は将来に委ねることにする。

出土した瓦塼類は、軒丸瓦47型式99種、軒平瓦43型式96種、また多量の丸・平瓦や面戸瓦、熨斗瓦、鬼瓦、塼などの道具瓦、そして瓦製品がある。三彩や緑釉単彩の施釉瓦も数は少ないが出土している。なお、近世の瓦もわずかに出土したが割愛する。

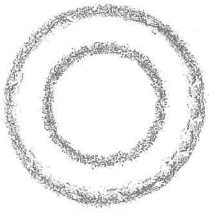
軒瓦の記述にあたっては、出土量の多いもの、今回新たに確認された新出資料、あるいは今回の出土品によって文様や諸特徴が明らかになったものを重視した。拓本と断面図および写真は別冊図版に収録し、本文中には縮尺1/7にした拓影を入れることにした。また、軒瓦の各部計測値や諸特徴をまとめた表を、これまでの別表一覧表から切り離し、別冊の図面の下部に挿入した。出土点数については、本文中に点数を示したほか、別表で出土地点別の一覧表を掲げている（別表７・８）。なお、記述に際して、例えば6284型式Ｃあるいは6284Ｃというように、「型式」や「種」を省略することがある。

Ａ　軒丸瓦

軒丸瓦は47型式99種、計1289点が出土した。文様構成は、中央に１重の蓮子をめぐらす中房があり、周囲に８弁の蓮弁を配し、その外側に珠文帯をおき、外縁部内斜面に線鋸歯文を入れるものがほとんどである。こうした多くのもので共通する文様構成や弁数については、とくに触れない場合がある。また各部名称として、外区内縁と外区外縁という呼び方を省略し、珠文帯など蓮弁に続く文様帯を外区と呼び、内・外区の平坦面から高く立ち上がる部分を外縁と呼ぶことにする。さらに、外区の内外の圏線を、単に内圏線や外圏線と呼ぶことがある。間弁には、先端がＹ字状や楔形状になったＡ系統と、間弁がそのまま蓮弁の周囲をめぐるＢ系統があり、間弁のないものもある。瓦当と丸瓦部の成形については、多くが接合式であるが、丸瓦の接合痕がないもの、あるいは不明瞭なものがあり、瓦当部と丸瓦部を一体として成形したものと考えられる。こうした事例について、横置きの成形台を利用したものと考え、「成形台一本作り」と呼んでいる[1]。ただし、その多くは、6229型式などを除いて、瓦当裏面から丸瓦部凹面にかけて調整を施すため、連続する布目が認められない場合がほとんどである。このため、成形台の具体的な形態を含めてなお検討を要するが、ひとまず丸瓦接合痕跡のない丸瓦非接合式のものについて、「一本作り」と呼ぶことにする。

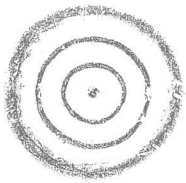
1）毛利光俊彦・花谷 浩「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮報告ＸＩＩＩ』1991，pp.270～276

i　重圏文軒丸瓦（Pl.46，Ph.105・106）


6009A

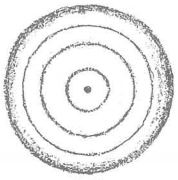
6009型式（Pl.46，Ph.106）　1重に圏線をめぐらすもので、平城宮・京では初出である。中央に珠点の有無は明らかでないが、これを6009型式A種とする。

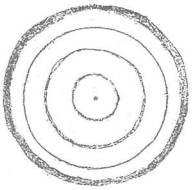
A（1点）　圏線は断面がほぼ方形で、高くて太い。基部で幅0.9cm、高さは1.2cmある。外縁は台形状で、高さ1.2cm。瓦当厚2.5cmと薄く、瓦当裏面は平坦である。接合式で、丸瓦は瓦当近くまで入る。焼き甘く、燻し焼き風。

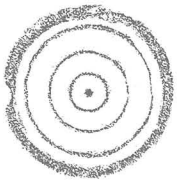

6010A

6010型式（Pl.46，Ph.106）　圏線を2重にめぐらし、中心に珠点を入れるもの。A1種。

A（7点）　内区・外区面は平平坦ではなく、中心に向かってやや高くなる。中心の珠点は径1.2cmで、圏線は基部の幅が0.6cmほどである。外縁は台形状で、縁頂部から0.7cm外に笵端らしい当りがある。接合式か。瓦当裏面はヘラケズリによって、丸瓦部にむかってやや厚みを増す平坦面に仕上げ、丸瓦部凹面との接合線は明瞭で、台形状としている。瓦当厚は4.0～4.5cmである。丸瓦部側縁は、多少カーブしながら瓦当裏面に取りつき、折れ線は明瞭で、ほぼ直交に削り出している。かなり砂粒を含む胎土で、青灰色硬質のものと焼きの甘いものがある。


6012A


6012B

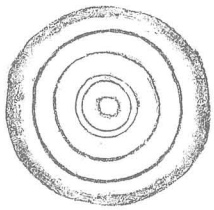

6012C

6012型式（Pl.46，Ph.106）　中心に珠点を入れ、圏線を3重にめぐらすものである。A～Hの8種があり、A・B・C種が各1点出土した。

A（1点）　珠点は小さく、圏線も細い。外縁は台形状で、縁頂部から0.5cm外の位置に笵端圧痕が残る。瓦当厚は3.5cmほどで、瓦当裏面は平坦で布目が残る。この布目は丸瓦内側に入れた接合粘土の剝離面にも続くことから、笵型に粘土を詰める際に布を被せて押圧したものと考えられる。接合式で、接合溝を入れて、瓦当外周に近い高い位置に丸瓦をおく。焼成甘く、燻し焼き風である。

B（1点）　Aより珠点が大きく、圏線も太い。外縁は台形状である。瓦当厚5.0cmあまりと厚く、まず2.5cmほど入れた段階で丸瓦をおき、さらに瓦当粘土を加えている。瓦当裏面はやや中央で窪むが、ほぼ平坦である。焼き甘く、灰白色を呈する。

C（1点）　もっとも外側の第3圏線がとくに太い。外縁は傾斜をもって立ち上がり、台形状に復原できよう。瓦当裏面は平坦で、瓦当厚は4.0cmほど。丸瓦の取りつき高く、内外の接合粘土は多くない。焼き甘く、燻し焼き風である。


6018B

6018型式（Pl.46，Ph.106）　圏線を4重にめぐらすもので、中心の珠点のあるものと、ないもの両者がある。A～Dの4種があり、Bが出土した。

B（1点）　中央に釘孔があるため、珠点の有無は不明。内側の2本の圏線は細く近接しており、その内側が中房状にわずかに高くなっている。外縁は匙面状で高い。平城宮出土の同笵例では接合式である。瓦当厚は4.0cmあまりで、裏面はヘラケズリとナデで平坦に仕上げる。瓦当下半側面を横に強くナデて窪ませ、断面は縁部から屈曲して瓦当裏面にいたる形状となる。砂粒含み、焼きはおおむねよく灰色を呈する。

イ　なお、重圏文軒丸瓦の新種が1点ある。2本の圏線が残る小片で、中心の珠点の有無や圏線の本数は不明。接合式で、丸瓦は瓦当近くまで深く入っており、この丸瓦の取りつきから判断して小型の軒丸瓦になろう。焼き甘く、燻し焼き風である。

ii　単弁蓮華文軒丸瓦(Pl.46～48，Ph.105～112)

6131型式(Pl.46，Ph.106)　凸中房で１＋８の蓮子をもつ。単弁16弁で、珠文帯の外側には圏線がなく、外縁に凸鋸歯文を入れる。Ａ・Ｂの２種があり、ともに出土した。

A(15点)　弁端は丸く、輪郭線と間弁はともに細い。外縁は台形状で、縁頂部より0.9cm外に笵端らしい圧痕が残る。瓦当から３cmほどの高さまで粘土を入れたあと、丸瓦をおき、内外に接合粘土を入れる。瓦当厚は４～５cm前後で、瓦当裏面は中央が窪むものが多いが、平坦なものもあり、ヘラケズリによって仕上げる。丸瓦部凸面は細かいタテケズリを施す。胎土には軟質のシミ状の黒粒を含む。焼き上がりは多様で、青灰色のものから、焼き甘く黄白色のものまであり、焼き上がりの径がかなり異なる。

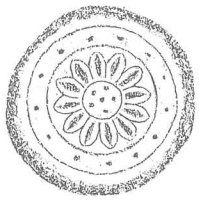
6131A

B(２点)　間弁がなく、Ａに比べてやや小振り。外縁は台形状である。接合式で、瓦当厚は4.5cm前後、裏面はケズリによりほぼ平坦に仕上げる。胎土に砂粒をあまり含まず、青灰色硬質のものと、焼き甘く灰白色のものがある。

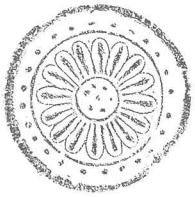
6131B

6133型式(Pl.46・47，Ph.108)　間弁なく、弁は互いに接し、外縁は無文。外圏線のあるものとないものがある。Ａ～Ｄ・Ｉ～Ｑの13種があり、Ａ・Ｄ・Ｋ・Ｑが出土。

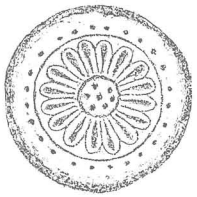
Aa(１点)　弁は短く先端が尖る。外縁は台形状。笵型が傷んだ段階で、弁の輪郭線や中房圏線を彫り直す(Ab)が、出土資料は彫り直し前のAaである。縁頂部から0.7cm外に笵端らしい痕跡がある。接合式であろう。瓦当厚は3.5cmで、裏面はヘラケズリにより平坦に仕上げる。側縁は直線的に瓦当裏面に取りつく。


6133Aa

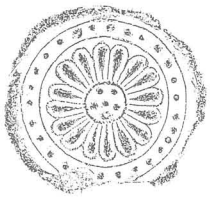
Da(２点)　弁端は丸く、外縁は台形状。6133Ｄの笵型は、途中で中房を凸中房に彫り直しており、DaとDbに区別している。笵端は縁頂部から0.9cm外。接合式で、瓦当面から２cm弱の深さまで丸瓦端が入るものが多いが、図示したものはより深い例である。丸瓦端に内面の接合粘土がおよぶものがあり、接合粘土を丸瓦に接着させてから瓦当部に取りつけたことも考えられる。凸面側の接合粘土を一度指押えするものもある。瓦当厚は５cm前後で、瓦当裏面は中窪みでヘラケズリによって仕上げ、丸瓦部凹面にかけてはタテナデとする。中窪みの瓦当裏面は、下縁から窪むものと、ヘラケズリによる面取りで土手状の平坦面のめぐるものとがある。焼成はおおむねよく、燻し焼き風である。平城宮東院南門では、6704Ａと組んで使用された。

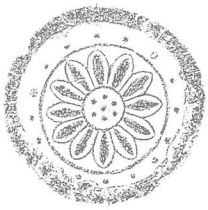

6133Da

Db(１点)　Daの中房を彫りこんで凸中房にしたもの。瓦当厚が４cm弱とやや薄いことを除けば、Daとほぼ共通した特徴をもつ。


6133Db

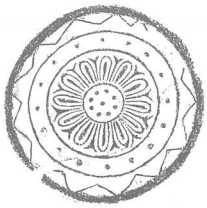
Kb(２点)　弁区全体をやや高くし、そこに先端の丸い弁を彫りこむ。6133Ｋの笵型も途中で中房部を改変しており、KaとKbに区別する。当初のKaは中房面が外区面と同じ高さであるが、Kbは中房を高くし、中房圏線も彫り直す。出土資料では不明だが、平城宮出土の同笵例では珠文間に小さな突起および凹部がある。突起の場合は珠文の割り付けのために笵型に入れた目印として理解できるが、凹部は笵型では凸部であり、整った円形の突起を笵型に彫り残すことは不自然で、何の痕跡かは判断できない。外縁は傾斜緩く立ち上がる台形状であろう。丸瓦の接合痕跡が明らかではなく、一本作りによるものと考えられる。瓦当厚は５cmほどで、裏面は平坦である。


6133Kb


6133Q

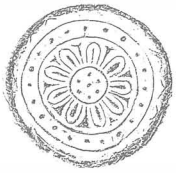
Q（１点）　12弁で弁端は尖り、珠文は16個と少なくまばらである。外縁は直立し、縁頂部は幅1.5cmの広い平坦面となる。同笵例では、その外１cmの位置に笵端圧痕が明瞭に残り、笵端に続いて幅0.4cmのバリ状のはみ出しがある。文様面の表面がかなり荒く、同笵例で共通することから、笵型そのものが荒い仕上げであったことを示す。接合式か。瓦当厚は3.5～4.0cm、瓦当裏面はやや中窪みで、下縁にヘラケズリにより面取りした平坦面がめぐる。焼成おおむねよく、燻し焼き風である。

6134型式（Pl.47，Ph.108）　中房からのびるＡ系統の間弁をもち、直立気味の外縁には線鋸歯文を入れる。Ａ～Ｄの４種あり、Ａ・Ｂが出土した。


6134Aa

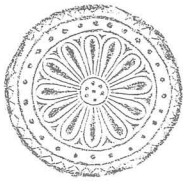
Aa（３点）　外縁は直立気味に高い台形状。縁頂部から1.3cm外に笵端痕跡が残る。笵型は途中で外区の珠文をより大きく彫り直す。中房の蓮子も彫り直しの可能性が高い。これによってAaとAbに区別している。接合式で丸瓦端は瓦当から１cmほどの深さに入る。瓦当厚は4.5cm前後、裏面はかなり深い中窪みで、下縁にヘラケズリによる土手状の平坦面がめぐる。焼きおおむねよく、燻し焼き風である。

Ab（１点）　Abに該当するらしい小片が１点ある。これまで平城宮からAbの良好な資料が出土していないので、確実とはいえず、異笵である可能性も残る。ここでは、弁や珠文の特徴からAbとみておく。焼成甘く、燻し焼き風である。

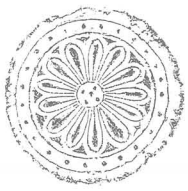

6134B

B（１点）　Ａに比べて小振りで、弁数も９弁と少ない。弁区はやや肉厚で盛り上がり、弁や輪郭線および間弁はＡに比べて太い。間弁の多くは楔形状であるが、先端が二又に分れる形状の部分もある。外縁は低く狭い。接合式かどうか不明である。瓦当厚は３cm前後で、裏面は平坦である。焼き甘く、灰白色を呈する。

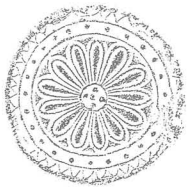
6135型式（Pl.47・48，Ph.108・110）　間弁は中房からのびず、弁端付近にだけ入る楔形状。弁は互いに分離し、低い三角縁をもつ。Ａ～Ｃ・Ｅの４種あり、３種が出土した。


6135A

A（51点）　中房径小さく、１＋６の蓮子は互いに接して盛り上がる。間弁はＢより基部が尖る。弁は薄肉で珠文の方が高い。縁頂部から0.4cm外に笵端痕跡が残る。接合式で、丸瓦は瓦当の高い位置におき、丸瓦端は瓦当面から１cm前後の深さに入る。内側の接合粘土はごく少なく、瓦当裏面と丸瓦部凹面は明瞭に屈曲する。外側の接合粘土は瓦当裏面の高さで一度指押えをしている。図示したものは硬質に焼き上がったもので、瓦当厚は２cm強と薄く、裏面はヘラケズリで平坦に仕上げる（1）。しかし、焼き悪く軟質で、燻し焼きのものがむしろ多い。これらは瓦当がより厚く、３cmを越える（2）。また、裏面は平坦でなく丸瓦部凹面にむかって厚みを増す。


6135Ba

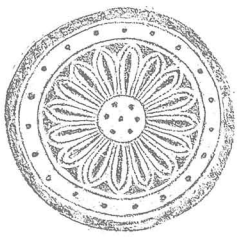
Ba（２点）　中房の蓮子は１＋４。Ａに比べて間弁基部が尖らず、三角形状になった部分もある。途中で中房圏線と外区珠文を彫り直し、BaとBbに区別する。さらに中房圏線を太くしたものをBcとするが、これに該当する資料はない。縁頂部から0.6cm外に笵端痕跡を残す。接合式で、丸瓦部凹面にかけては薄く接合粘土を入れ、荒くタテナデする。瓦当厚は約２cmで、瓦当裏面はヘラケズリによりほぼ平坦に仕上げる。丸瓦部側縁は円弧を描いて瓦当裏面に取りつく。黒い燻し焼き。


6135Bb

Bb（１点）　瓦当厚は3.5cm強でBaより厚い。接合式で、丸瓦内側の接合粘土はやはり少ない。丸瓦部側縁は瓦当近くでわずかに円弧を描くが、ほぼ直角に取りつく。暗灰

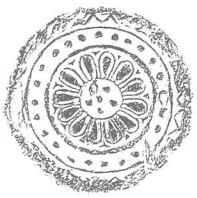
色硬質に焼き上がり、薄手で燻し焼きのBaとはかなり異なる。

C（3点）　A・Bに比べて瓦当径が大きい。中房は平坦でなく、薄く盛り上がる。間弁基部は長く尖る。6133Kと同じく、珠文の間に円形の凹部と小さな突起がある。縁頂部から0.6cm外に笵端痕跡が残る。接合式で、瓦当部に1.5cmほど粘土を入れて丸瓦をおいている。丸瓦の取りつく位置はやはり高く、内側の接合粘土は少ない。瓦当裏面はヘラケズリなどで調整するが、中窪みのものと平坦なものがある。丸瓦部側縁は円弧を描いて瓦当裏面に取りつく。暗灰色硬質に焼き上がる。

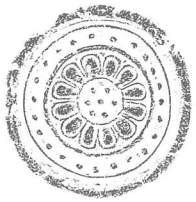

6135C

6138型式（Pl.48，Ph.110）　弁端の丸い単弁12弁軒丸瓦で、弁同士は原則として分離している。間弁は三角形状。外縁の線鋸歯文は、あるものとないものがある。A～C・E～Lの11種類があり、B・H・Iの3種が出土した。

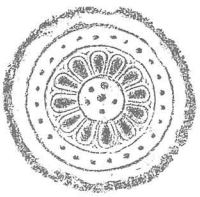
B（3点）　弁区が一段高く、境の圏線頂部は外区面から0.6cm高い。中房の蓮子や外区の珠文は径が大きく高い。外縁は台形状で、太い線鋸歯文を入れる。図示した個体は、丸瓦部凹面に布目が残り、瓦当裏面からのナデツケがおよんでおり接合式であろう（1）。これとは別に、瓦当部で割れた資料で、丸瓦の明瞭な接合痕跡がなく、粘土の剝離痕から一本作りとみられるものがある（2）。瓦当厚は3.5～4.0cm、ヘラケズリにより瓦当裏面は平坦に仕上げる。焼成はおおむねよく、燻し焼き。接合式の胎土に含まれる赤い小粒は、一本作りらしい別個体にはない。


6138B

H（2点）　別に6138Lを設定していたが、Hと同笵であると判断した。ただし、中房圏線や蓮子の大きさなど異なる部分があり、彫り直しが考えられる。外縁は台形状で、線鋸歯文はない。Aと同じく弁区は一段高い。3ヵ所で隣り合う弁の輪郭線がつながっている。三角形の間弁は、低く小さなもので、ほとんど目立たない。丸瓦部凹面に縦のナデツケがあり、接合式であると思われる。瓦当厚は4.0cm、裏面はヘラケズリで平坦に整える。丸瓦部側縁は直線的に瓦当裏面に取りつく。


6138H

I（2点）　外縁は台形状で無文。笵端痕跡が縁頂部から1.4cm外に残る。A・Hと異なり、弁区を高くしていない。接合式で、接合溝を入れて丸瓦をおく。瓦当裏面は平坦で、瓦当厚3.5cmである。焼き甘く灰白色。


6138I

6140型式（Pl.48，Ph.110）　蓮弁は肉薄で互いに接し、弁端が三角形状に尖る単弁軒丸瓦である。A・Bの2種があり、Aが出土した。

A（2点）　弁端が圏線に接し、間弁がないので、弁間部に三角形の凹部ができる。外縁は斜めに立上がり、間隔の長い線鋸歯文を入れる。焼成やや甘く、燻し焼き風。

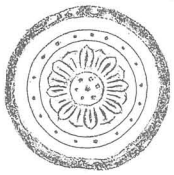
6140A

6144型式（Pl.48，Ph.110）　A系統の楔形間弁をもつが、弁端および間弁端に接して細い圏線をめぐらし、外縁の上面に線鋸歯文を入れる。A種のみ。

A（4点）　小型の軒丸瓦。弁区は平板で、間弁端は高くなるが、弁はごく短い線彫り表現である。笵型の傷みの進行によって、間弁とすぐ外側の細い圏線が一体化し、B系統の間弁風になる。中房の蓮子もやや大きくなるものがあり、彫り直しがあったことも考えられる。出土資料は摩滅が著しく、どの段階か特定できない。低い直立縁で、上面は幅1cmあまりの平坦面となる。同笵例では接合式である。瓦当厚は下端で3.0cmで、裏面は平坦だが丸瓦部凹面にむかってやや厚くなる。胎土に赤い小粒を含む。

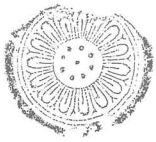
6144A

6151型式(Pl.48, Ph.112)　弁と間弁が重なるように表現され、弁・間弁とも弁端が尖る。外区の珠文帯は弁区より一段高い。外縁は無文。A・B２種あり、Aが出土した。


6151Aa

Aa(３点)　外縁は直立縁に近いが、やや傾斜をもつ台形状。接合式で、瓦当裏面はヘラケズリで平坦に整える。瓦当厚は2.5～3.0cm。丸瓦部側縁と瓦当裏面はほぼ直角に削り出す。東院玉殿の瑠璃瓦にあたる緑釉製品が、平城宮東院庭園の近辺で出土する。今回の出土資料では、２点が無釉で、残る１点は釉は見えないが、緻密な胎土と淡橙色の焼き上がりから緑釉製品であった可能性がある。無釉の２点は、焼成おおむねよく、燻し焼きである。胎土には、ともに赤色の小粒を含んでいる。

6172型式(Pl.48, Ph.112)　２重圏線で珠文帯なく、複弁の6227型式に近い。A１種のみ。


6172A

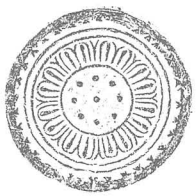
A(１点)　弁は線彫りで薄肉。外縁は幅が狭くきわめて低い直立縁である。接合式かどうか明らかでない。瓦当厚は約4.0cm。焼成甘く、灰白色を呈する。

iii　複弁蓮華文軒丸瓦(Pl.49～58, Ph.111～132)

6225型式(Pl.49, Ph.112)　外区が２重圏線で珠文帯なく、外縁に凸鋸歯文をもつ。中房径が大きい。A～E・Lの６種あり、A・C・E・Lの４種が出土した。A・C・Lは、平城宮第二次大極殿院と、第二次朝堂院の上層朝堂の所用瓦である。

6225A

A(60点)　弁区はやや盛り上がり、先端がやや尖り気味の弁と、Y字状に大きく分れる間弁を彫りこむ。２重圏線の内側がやや太い。凸鋸歯文は大振りである。外縁は台形状で、上面は0.7cmほどの平坦面となる。丸瓦部の成形は、ほとんどの資料が一本作りによるが、接合式が３点ある。一本作りのもの(１)は、瓦当裏面における丸瓦の取りつき位置はかなり低いが、丸瓦部凹面の円弧は高い位置にあって、その境の屈曲は比較的明瞭である。瓦当裏面は平坦なものや、荒い指ナデ等によって、中窪みか、丸瓦部凹面にむかって薄くなるものなどがある。丸瓦部凹面は全面タテナデで、布目が認められる資料はない。成形台圧痕の残るものがあるが、成形段階ではなく、内面の調整後についたものである。丸瓦部凸面はタテナデ、瓦当下半側面はヨコナデする。瓦当厚は4.0～5.0cm前後で、4.0cmほどの例が多い。瓦当面に布目が残る資料が１点ある(４)。一方の接合式の事例は、平城宮をはじめこれまで認められていなかったもので、例外的な存在である(２・３)。瓦当厚３～４cmで、一本作りに比べてやや薄手。内面の接合粘土のため、瓦当裏面と丸瓦部凹面の境は不明瞭で、縦断面では円弧を描く。次の6225Cについては、接合式から一本作りへ移行することが判明している[1]が、この接合式の6225Aは同列には扱えない。瓦当文様を見ると、いずれも文様が不鮮明となり笵傷が進んだ段階の製品とみられる。6225Aについては、一本作りで多量に生産されたのち、その末期に接合式で作られることがあったと考えておく。

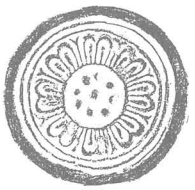

6225C

C(13点)　Aより瓦当径がやや小さく、弁端は丸い。間弁のY字の開きがAより小さい。圏線は２本とも細い。蓮子や凸鋸歯文もAより小さい。多くが接合式で(１)、一本作りは少ない(２)。接合式の瓦当裏面における丸瓦の取りつき位置は低く、凸面側に多

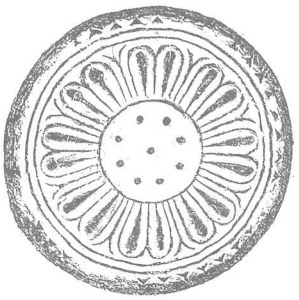
1）佐川正敏「屋瓦」『平城宮報告XIV』1993, pp.111～113

量の接合粘土を入れるが、丸瓦の脱落したものが多い。丸瓦端の入る深さは一定しない。瓦当厚は2.5cmと薄いものもあるが、多くは5.0cmほどである。裏面は平坦なものや窪んだものがある。一本作りの場合、瓦当厚が3.5～4.0cmとやや薄いが、丸瓦の取りつきや瓦当裏面の調整など、接合式とほとんど変らない。

E（7点）　A・Cと異なって弁区は平坦で、線彫りの蓮弁は肉薄である。一本作りで、瓦当厚は4.5cm前後、裏面は丸瓦部凹面にむかって緩く窪む。成形台圧痕を残すものがあるが（1・2）、A種の場合と同じく成形段階ではなく、内面調整後についたものである。丸瓦側縁は瓦当裏面に直角に取りつく。丸瓦部が完存する資料があり、全長35cm、玉縁長5cmである（2）。凹面はかなり磨耗しているが、布目は認められない。胎土に多くの砂粒を含む。燻し焼き風であるが、焼成は甘い。

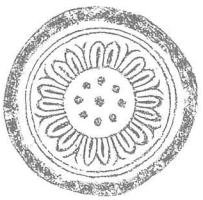

6225E

L（8点）　特大の軒丸瓦で、鳥衾のように棟先に使用したと考えられている。弁区はやや盛り上がり、丸い弁端の形状はC種に近い。接合式である。丸瓦剝離痕から復原できる丸瓦径は、通常のものと変らない。瓦当裏面のかなり低い位置、瓦当上端から10cmほど下に丸瓦を取りつけ、多量の接合粘土を加えて、縦断面が瓦当上端にむかって急激に反り上がった形状に成形する。

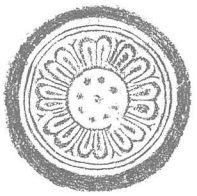

6225L

6227型式（Pl.49，Ph.112）　6225型式と同じく外区が2重圏線だが、外縁に凸鋸歯文がなく無文となったもの。A・B・D・Eの4種あり、A・Dが出土した。

A（2点）　弁区は平坦で、尖り気味の弁端斜面が長くのびる。外縁は低い直立縁である。瓦当厚3cmあまり。一本作りで、6225A・Eと同じく凸形台の当りがある。胎土に小礫をかなり含む。焼成はよく硬質で、燻し焼き風である。

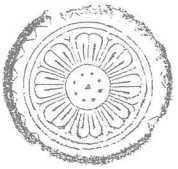

6227A

D（1点）　弁区は平坦でAに似るが、中房が1段高い。弁端はAに比べて丸い。外縁は低い直立縁で、幅はAより広い。一本作りで、瓦当厚は4.0cm、裏面は平坦である。成形台の当りがあり、その形状は弧の大きくない蒲鉾形。丸瓦側縁は直線的に瓦当裏面に取りつく。焼成甘く調整などは不明。砂礫を多く含み、焼き甘く灰白色。

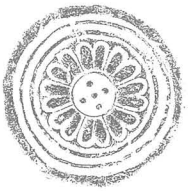

6227D

6228型式（Pl.49，Ph.112）　6225・6227型式と同じく、外区が2重圏線の複弁8弁で、外縁に線鋸歯文を入れるもの。複弁の形状も異なっている。A1種のみ。

A（1点）　弁央の切れ込みがほとんどなく、複弁としての一体性が強い。間弁は細く、先端がY字に分れる。外縁は匙面状に復原できる。平城宮出土の同笵例では、丸瓦の接合痕跡がなく、また丸瓦相当部分に粘土の詰まっていない空間が認められ、一本作りと考えられる。焼成おおむねよく、燻し焼き風である。


6228A

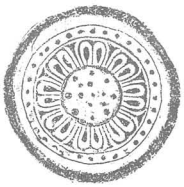
6229型式（Pl.50，Ph.114）　2重圏線の間弁B系統複弁8弁軒丸瓦。間弁というより、薄肉の弁の周囲が連続的にやや盛り上がっている。A・B2種あり、Bが出土した。A・Bは酷似し、異笵であることをためらうほどよく似ている。しかし、ともに瓦当下半に水平の笵割れが生じたことが同笵例から確かめられ、笵割れの部位が異なることから2笵あったことは間違いない。笵割れの位置は、Aが内圏線下縁から2cm上、Bはより高く、内圏線下縁から4cmほどである。図示したもの以外に完好な資料が3点あるが、焼きが甘く、表面が完全に磨耗しており、種の認定はできない。


6229B

B（1点）　中房は平坦ではなく、やや盛り上がる。圏線間は幅0.5cmの無文部となり、

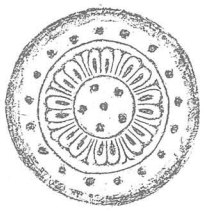
外縁は低い直立縁である。瓦当裏面には丸瓦凹面から連続する布目および成形台圧痕を残す。横置きの凸形成形台を使った一本作りである。瓦当厚は5cm。丸瓦部凸面はヨコナデ、瓦当下半側面はヨコケズリで仕上げる。瓦当の両側面を幅広くタテケズリすることが特徴である。焼成おおむねよく灰白色、胎土に赤い小粒を含む。

6233型式(Pl.50, Ph.114)　外縁無文の藤原宮式複弁8弁軒丸瓦。藤原宮式の中ではやや小型。A・B2種あり、Bが出土した。


6233B

B(5点)　凸中房で、圏線はない。蓮子は2重目の8顆が弁央に対応する。弁は平板で、照りむくりはない。間弁は楔形状。縁頂部から0.7cm外に笵端圧痕が認められ、これにそってバリが残る。瓦当厚は2.5cmと薄い。丸瓦の取りつきは高く、接合粘土も少ないので、接合線は高い位置で円弧を描く。丸瓦凹面は丁寧にタテナデして布目を消す。丸瓦部側縁は円弧を描いて瓦当裏面に取りつく。青灰色で硬質。

6235型式(Pl.50, Ph.114)　いわゆる東大寺式軒丸瓦で、外縁無文の複弁8弁軒丸瓦である。弁の照りむくり大きく、先端がY字に分れた間弁は左右の弁にとりつく。蓮子と珠文は大振り。A～K・M・O～Qの15種があり、Bが出土。

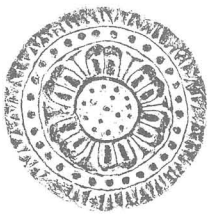

6235B

B(13点)　平城宮所用の瓦で、東大寺では出土しない。中房は外区よりわずかに高く、弁は弁区の中房寄りでもっとも高い。外圏線はないが、笵型に三角縁の外縁を彫る前に、圏線で割り付けたものか、外縁基部が段状になる。接合式で、瓦当に2cmほど粘土をつめた段階で丸瓦をおく。丸瓦の残存部および脱落痕跡をみると、半円というより半周を越える円弧で、正円というより縦長の馬蹄形に近いものがある。丸瓦の接合時に、先端をより湾曲させたことも考えられる。丸瓦外側の接合粘土を、指で押えて丸瓦に密着させた痕跡の明瞭なものもある。丸瓦部側縁は円弧を描いて瓦当裏面に取りつく。その位置はかなり低く、丸瓦端の側面下部に三角形状の粘土を多く加えている。ただし、取りつき部はケズリにより明瞭に屈曲する。瓦当厚3.5～5.0cmで、4.5cm前後のものが多い。瓦当裏面から丸瓦部凹面にかけてタテナデを丁寧に施す。燻し焼きで、おおむね焼きはやや甘い。

6271型式(Pl.50, Ph.114)　藤原宮式の複弁6弁軒丸瓦で、外縁に面違鋸歯文をもつ。外区の珠文は大振り。A～Cの3種があり、B・Cが出土した。

6271B

B(2点)　中房の蓮子は先端が乳頭状に尖るもので、弁とは対応しない。弁端は高く、間弁は楔形状。珠文はとくに大きく、その外側の高い圏線に接して外線が立ち上り、整った面違鋸歯文を入れる。笵端は不明ながら、縁頂部から1cm外までは笵型が続いていたらしい。丸瓦の取りつきは高く、接合粘土は少ない。瓦当厚は3.5cm、裏面は荒いナナメケズリ。胎土に白い長石粒をかなり含む。青灰色硬質。

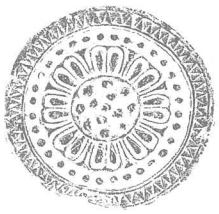

6271C

C(1点)　中房の蓮子は小さいが、圏線はやや太い。弁端および楔形状の間弁端はかなり高い。外縁は傾斜のきつい三角縁で、面違鋸歯文は粗雑である。縁頂部から1.5cm外に笵端圧痕が残る。丸瓦の取りつきは高く、接合粘土は少ない。瓦当厚は4.0cm、瓦当裏面はナデ調整し、丸瓦凹面はタテケズリにより布目を消す。丸瓦部側縁は直線的に瓦当裏面に取りつく。青灰色硬質に焼き上がっている。

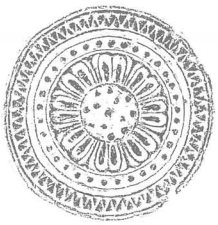
6272型式(Pl.50, Ph.116)　長屋王邸所用の、外縁に面違鋸歯文をもつ複弁8弁蓮華文

軒丸瓦である。A・B２種あり、ともに出土した。

A(12点)　凸中房で、１＋４＋８の蓮子を間弁と弁央に対応させて配する。弁は照りむくりがなく、先端で高い。間弁は楔形状。外区には細い圏線をめぐらし、高い珠文をおく。外縁は段差をもって一段高くなり、上面の傾斜面に、内外に圏線を入れて面違鋸歯文を充塡する。鋸歯文外側の圏線にそって切り落とすことを原則とするが、外側に平坦面が残るものもある。中房の蓮子は基部が不鮮明で、弁区を含めて笵傷がいくつか生じている。瓦当厚3.5cm前後。丸瓦凸面は縄タタキのあとタテナデし、瓦当周囲をヨコナデする。瓦当裏面はナデにより平坦に仕上げる。丸瓦の取りつきは高く、接合粘土は少ない。丸瓦部凹面は瓦当裏面から９cmほどをナデ調整し、布目を消す。接合した丸瓦の側面にも薄く粘土を入れて覆っている。丸瓦部側縁はほぼ直角に瓦当裏面に取りつく。玉縁端まで残る資料が２点あり、全長は42cmと46cmである。玉縁長はともに７cm。青灰色硬質のものと、焼きの甘いものがある。

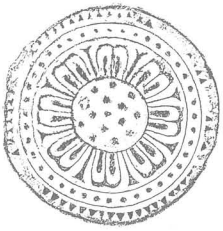

6272A

B(36点)　大きさはAとほぼ同じだが、弁・中房・珠文・外縁の段差など、全体にAに比べて彫りが浅い。Aと同じく笵傷がいくつか認められる。珠文帯内外の圏線はより高く明瞭で、外圏線と外縁間の平坦面が広い。面違鋸歯文の内外をめぐる圏線も太い。鋸歯文外側の圏線まで十分に切り落としていない資料を見ると、圏線から幅３mmほどの平坦部があり、その外側がわずかに高まっている。平坦部までが笵型によると考えられる。つまり笵型自体は外縁に被らず、縁頂部の周囲にわずかな平坦面をもつ円形であったらしい。瓦当厚は2.0～3.5cmで、2.5～3.0cmのものが多い。丸瓦は瓦当面に薄く粘土入れた段階でおく。丸瓦の取りつきは高く、接合粘土は少ない。調整はイタナデにより、丸瓦部凹凸面、瓦当下半側面、瓦当裏面などにハケメが残る。丸瓦部側縁は緩く円弧を描いて瓦当裏面に取りつく。胎土に黒雲母を含む。少数が青灰色硬質で、多くは焼きの甘い燻し焼き風である。生焼けで淡橙色のものもある。


6272B

6273型式(Pl.50・51，Ph.114・116)　凸鋸歯文をもつ藤原宮式の複弁８弁蓮華文軒丸瓦である。A～Dの４種あり、A・B・Dの３種が出土した。

A(３点)　中房は径が大きい。間弁は楔形状。外縁は急傾斜の三角縁で、細かい凸鋸歯文を入れる。瓦当粘土を厚さ４cmまで入れたあと、丸瓦を高い位置に取りつけ、内側に接合粘土を入れる。瓦当厚３cmほどのより薄いものもある。瓦当裏面はナデ調整し、下縁をヨコケズリしてやや斜めに落とす。焼きはやや甘い。


6273A

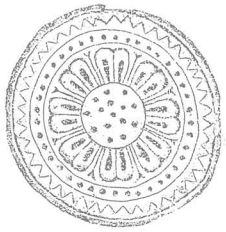
B(８点)　中房は中高で太い圏線をめぐらす。外縁の凸鋸歯文は縦長の三角形である。笵端痕跡が明瞭で、縁頂部から1.1cm外に認められる(２)。瓦当面から１～２cmほど粘土を入れたあと、丸瓦をおいて内外に接合粘土を入れる。丸瓦を瓦当頂部よりやや下に取りつけ、外側に幅3.5cmほどの接合粘土を帯状に加え、丸瓦部上縁の縦断面の形状が、瓦当部寄りで段差をもって高くなったものがある(２)。瓦当厚は4.0～4.5cm、裏面は平坦にナデ調整したものと、工具先端の刺突痕が数多く残り中央がやや窪むもの(２)、さらに中央をかなり凹ませ中房面から2.0cmほどになったものがある。

6273B

D(２点)　弁端と間弁端はかなり高い。丸瓦の取りつき高く接合粘土は少ない。瓦当裏面はヘラケズリにより平坦にするが、わずかに布目が残る。瓦当厚は3.5cm。胎土に

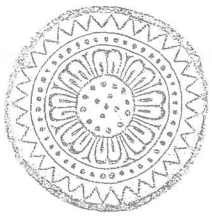
6273D

白い長石と赤い小粒を含む。焼成よく暗灰色。二条大路に面した濠状遺構の、南側のSD5100出土破片と北側のSD5300出土破片が接合した。


6274Ab

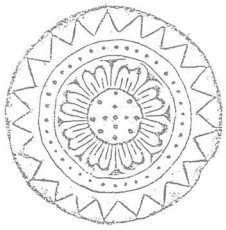
6274型式(Pl.51, Ph.116)　線鋸歯文縁の藤原宮複弁8弁軒丸瓦のうち、蓮子に周環があり、弁が大きく照りむくりのあるもの。A・B2種あり、Aが出土した。

Ab(5点)　凸中房で、細い圏線がめぐる。間弁はY字形。外縁は三角縁で、頂部が圏線状になり、その外側に平坦面が続く。丸瓦の取りつきは高く、丸瓦端をやや薄くしているようだ。瓦当厚は3.5cm。裏面はヘラケズリ調整し平坦に仕上げる。

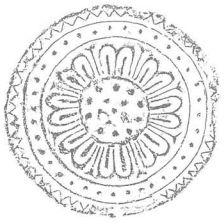

6275A

6275型式(Pl.51, Ph.116・118)　線鋸歯文縁の藤原宮式の複弁8弁軒丸瓦のうち、弁が平坦なもの。A～E・G～K・Mの11種あり、A・Dの2種が出土した。

A(21点)　高い凸中房で、圏線はない。珠文を密に配する。外縁は緩やかに内彎する匙面状だが、笵込めが不十分なためか縁頂部をケズリ落とすものがある。縁頂部の残るもので、1cm外に笵端痕跡が認められる。丸瓦は高い位置に取りつく。瓦当厚は2.5～3.0cmである。瓦当裏面はナデによりほぼ平坦に仕上げ、丸瓦側面から連続する部分と下縁にヘラケズリを施す。焼きは良好で、青灰色から暗灰色。


6275D

D(1点)　弁端は尖り、間弁は楔形状である。外縁は傾斜緩く斜面長の長い三角縁で、大振りの線鋸歯文を入れる。丸瓦の取りつきは高く、丸瓦端は瓦当から2cmほどの位置に入る。瓦当厚は外区面から2.5cm。焼成はおおむね良く灰色。


6278B

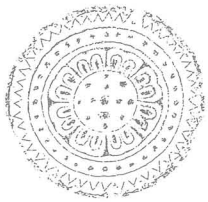
6278型式(Pl.51, Ph.118)　外縁に線鋸歯文をめぐらす藤原宮式の複弁8弁軒丸瓦のうち、弁が長くもっとも扁平なもの。A～Gの7種あり、Bが出土した。

B(2点)　中房は高い凸中房で、弁は扁平、珠文は小振りである。外縁は幅の狭い三角縁で、線鋸歯文は細かい。丸瓦の取りつきは高く、丸瓦端は瓦当面から2cmの深さに入る。接合のため丸瓦端に刻みを入れたらしく、剝離面に縦の凸線が残るものがある。瓦当厚は3.5cm～4.0cmで、裏面は平坦に仕上げる。焼成よく青灰色硬質のものと、焼き甘く灰白色のものがある。胎土に黒い小粒を含む。

6279Ab

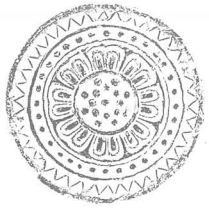
6279型式(Pl.51)　線鋸歯文縁の藤原宮式の複弁8弁軒丸瓦で、径の小さい中房に蓮子を1重にめぐらすもの。A～Cの3種あり、Aが出土した。

Ab(1点)　ごく小片だが、急傾斜で長く立上がる外縁の形状と外区の珠文の特徴から、6279Abと判断した。笵型に薄く粘土をつめた段階で丸瓦をおく。丸瓦端は外区面から0.7cmの位置。胎土に細かい白・黒色砂粒を含む。焼成よく青灰色。


6281Aa

6281型式(Pl.51, Ph.118)　藤原宮式の複弁8弁軒丸瓦のうち、間弁B系統で、中房の蓮子が2重のもの。中房径が大きく、弁は短い。A～Cの3種あり、A・Bが出土した。

Aa(1点)　2重目の蓮子は間弁と対応する。弁は線彫りで、蓮子や珠文の方が高い。丸瓦端は外区面から0.5cmの深さに入る。薄く瓦当粘土を入れた段階で丸瓦をおき、ついで厚さ2cmほどの瓦当粘土を加え、最後に接合粘土を三角形状に充塡している。青灰色硬質に焼き上がっている。


6281Ba

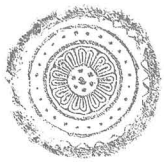
Ba(2点)　Aよりも中房高く、蓮子は1重目の8顆が弁央に、2重目が間弁に対応する。弁はAより長い。外縁は三角縁で、縁頂部より1cm外に笵端圧痕が残る。丸瓦の取りつきは高く、瓦当上縁に近い。瓦当粘土を入れたのち丸瓦を押しつけ、その先端

は外区面から1.5cmの位置まで入る。接合粘土はとくに加えない。瓦当厚3.5cmほどで、裏面は丁寧にヨコナデして平坦にし、下縁をヨコケズリする。丸瓦部側縁は直角に瓦当裏面に取りつく。胎土に黒い小粒を含む。焼成おおむねよく灰白色。

6282型式(Pl.52・53，Ph.118・120)　間弁B系統の複弁8弁軒丸瓦で、中房の中央蓮子を周囲のものより大きくしたもの。複弁の2弁は原則的に互いに接することなく分離する。A～E・G～I・Lの9種があり、A・Lを除く種が出土した。

6282Ba

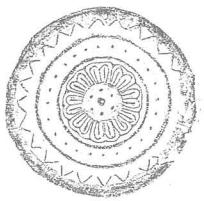
B(46点)　外区と弁区全体が凸レンズ状に中高になり、短い蓮弁を線彫りで表す。弁端は隅丸方形である。外圏線が太い。外区の珠文は24個で、間弁対応で8個を割り付け、間に2個ずつ入れたのかもしれない。線鋸歯文は珠文に対応する。瓦当厚は3.5cm前後である。丸瓦の取りつき低く、内外に多くの接合粘土を加える。瓦当裏面はヘラケズリで平坦とし、接合線は台形状。笵型の傷みが進んだのちに、弁を彫り直し、中房圏線上にも弁がおよぶ。中房の蓮子間の笵傷も進行する。笵傷の進んだものは、焼成甘く摩滅しているものが多く、BaとBbの認定は困難である。


6282Ca

C(11点)　これまでDと認定してきたもののうち、DaとDbが異笵と判明したので、後者をC種とする。ともに外区面が中心に向かってやや高くなり、さらに1段高い弁区も緩やかに盛り上がる。間弁B系統では、原則的に複弁の2葉が分離するが、小型のため7弁は接し1弁のみ分離する。この点もDと共通し、互いに酷似するが、以下の諸点でDはCと異なる。外圏線の外でただちに外縁が立ち上がること、線鋸歯文がより太いこと、外縁の立上がりの基底面よりも外区面がわずかに高いこと、1段高い弁区との境になる内圏線が太いこと、弁端が丸いこと、中房の中央部がやや高く中房圏線との間に凹部がめぐることである。笵型の傷みにともない弁を彫り直す部分があり、CaとCbに区分されるが、Cbにあたる資料は出土していない。

6282D

D(18点)　内圏線より間弁の方が太い。弁端は隅丸方形である。外圏線は太く、3～4mmの平坦面をおいて外縁が立上がる。接合粘土は多く、接合線は台形を示す。瓦当厚は3.5cm前後である。恭仁宮で出土しているのはCではなくDである[1)]。


6282E

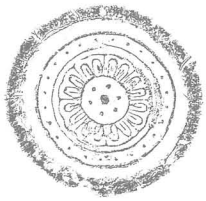
E(18点)　中房は、径が小さく細い圏線がめぐり、Dと同じく中心部がやや高い。高い蓮子がめぐる。弁区は1段高く、これもDと同じく複弁の2葉が1ヵ所を除いて分離しない。外圏線は太く高く、2～3mmの平坦面をおいてやや内彎する外縁が立上がる。線鋸歯文は太い。頂部は1cm幅の平坦面で、ヘラケズリ調整などなく、笵型の形状を反映している。縁頂部から0.6cm外に笵端痕跡が残る。丸瓦の接合位置は低く、内外の接合粘土は多い。丸瓦端は外区面から3～4cmの位置でかなり浅い。瓦当厚は4cm前後である。裏面はヘラケズリ調整し、平坦ないし丸瓦凹面にむかって厚くなり、屈曲せず円弧状に丸瓦部凹面に移行する。丸瓦部側縁は円弧を描いて瓦当裏面にとりつく。

6282Ga

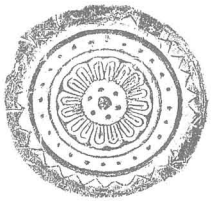
Ga(10点)　弁区は中高に高まり、中房も太い圏線の内側にリング状の凹部をおいて、内側が中心にむかって高くなる。中房径は大きい。間弁と内圏線の間には幅3mmほどの平坦面がある。太い外圏線の外に幅3～4mmの平坦面をおいて、太く頂部の丸い外

1）上原真人『恭仁宮跡発掘調査報告瓦編』京都府教育委員会，1984

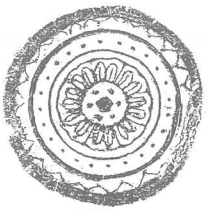
縁が立上がる。笵端は縁頂部から6mm外の位置である。瓦当厚は3.0cm前後で、裏面はヘラケズリにより平坦に仕上げる。内側の接合粘土は少なく、丸瓦部凹面との折れ線は明瞭で、隅丸台形状ないし円弧状の接合線を描く。


6282Gb

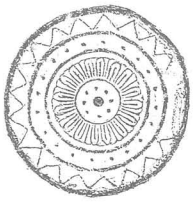
Gb(2点)　Gaに比べて、瓦当厚がいくぶん厚く、また丸瓦部凹面にかけてやや厚みを増すものとなる。瓦当裏面の丸瓦部との接合線は台形状である。


6282Ha

Ha(4点)　6282型式の中でも大型。やはり文様面が中心にむかって中高にふくらむ。中房面は平坦で、弁端は尖り気味である。1ヵ所のみ弁幅が狭くなったためか、複弁の一方は子葉がなく、他方は子葉と片側の輪郭線となる変形が生じている。平城宮出土の同笵例では、笵端は縁頂部から1cm外の位置である。接合式で、丸瓦端は外区面から2.5cmあまりの深さに入る。瓦当厚は外区面から3.5cm前後、裏面はヘラケズリで平坦とする。丸瓦部凹面との接合線は明瞭で隅丸台形状。丸瓦凹面の瓦当接合部分もヨコケズリする。丸瓦部側縁の瓦当裏面との接合部は直角に削り出す。

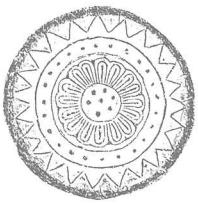

6282Hb

Hb(2点)　内区の笵型の傷みが顕著となり、弁と間弁を彫り直したと認定し、HaとHbに区分する。完形資料があり、全長44cm・玉縁長6cmである。丸瓦部凹面は、瓦当裏面から10cmほどをタテナデ調整し、それより後は布目が残る。

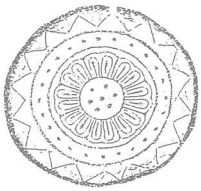

6282I

Ia(7点)　6282型式諸種の中で、他種と異なる特徴をもつ。中房の蓮子が1＋8であること、間弁が圏線状で、弁端と接するとともに弁央部に三角文の切れ込みをもたないこと、また外縁が外圏線から平坦面をおかずに匙面状に立ち上がる点が挙げられる。平城宮出土の同笵例では縁頂部から6mm外に笵端圧痕が残る。笵型の傷みにともない弁と中房圏線を彫り直すが、彫り直し後のIbにあたる資料はない。瓦当厚は外区面から3cmあまり、裏面はヘラケズリで平坦とし、丸瓦部凹面とは明瞭な折れ線を形成する。接合線は隅丸台形状。焼成よく硬質である。

6284型式(Pl.53, Ph.120・122)　間弁B系統の複弁8弁蓮華紋で、平城遷都当初の主流をなした型式である。A・C～G・Lの7種があり、A・C～Eの4種が出土した。


6284A

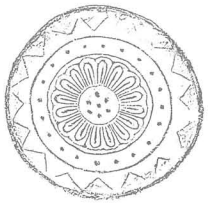
A(1点)　中房は外区面よりやや高く、低い圏線がめぐり、内部はわずかにふくらむ。弁は全体に盛り上がり、弁区中央でもっとも高い。かなり木目が目立ち、使いこんだ時期の製品と考えられる。珠文と線鋸歯文は弁と対応しない。外縁は匙面状に立ち上がり、線鋸歯文は縦長で鋭角に屈曲する。同笵例では縁頂部から1.3cm外に笵端らしい痕跡がある。接合式で、丸瓦の取りつき位置は高く、丸瓦端は外区面から1cmまで入る。瓦当厚は外区面から4cm。焼成おおむねよく、燻し焼き風である。


6284C

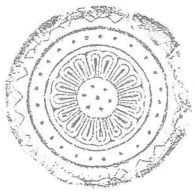
C(5点)　中房と弁区は外区面からわずかに盛り上がる。外縁は匙面状で、細い線鋸歯文は弁に対応させており、Aより1単位が大きい。縁頂部から1.3cm外に笵端圧痕が残る(2)。笵込めのわかる1例では、瓦当面から0.7cmほど粘土を入れ、さらに1.5cmほど加えたあと丸瓦をおく(2)。図示したものは接合溝を入れるが、実際には丸瓦端は溝底部に1cmあまりおよばない(1)。丸瓦側縁は瓦当裏面のかなり低い位置にとりつく。瓦当厚は4.5cm～5.0cmで、裏面はヨコナデ調整し平坦に仕上げる。燻し焼き。

D(1点)　細い圏線をめぐらす中房は、基部での高さは外区面とかわらないが、中央が大きく盛り上がる。弁もA・Eに比べて肉厚で、弁区の中央やや外側でもっとも高い。

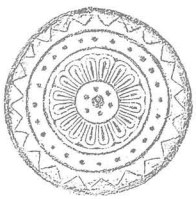
外縁は匙面状で細く高い。外区の珠文と線鋸歯文は対応するが、弁と対応させる配慮はない。接合式で、丸瓦端は外区面から１cm未満の位置まで入る。瓦当裏面に残る丸瓦剝離痕の形状は、半周分の円弧というより縦長になっており、丸瓦側縁の取りつき位置は低い。瓦当裏面はヘラケズリで平坦に仕上げるが、丸瓦部凹面にむかって厚くなる。下縁部で、瓦当厚は外区面から３cmである。


6284D

Ea（７点）　Ｃに似るが中房がやや高い。弁は線彫りで薄肉である。外区面は中央に向かって内傾する。外縁の線鋸歯文は弁や珠文と対応せず、Ｃ・Ｄに比べて細かい。外縁は匙面状。内面の丸瓦接合粘土はかなり多く、瓦当裏面から丸瓦凹面にかけて荒くタテナデ調整する。丸瓦部側縁は円弧を描いて瓦当裏面に取りつく。瓦当厚は4.0〜4.5cm。焼成やや甘く、燻し焼き風で黒色に焼き上がっている。


6284Ea

Eb（11点）　中房の中央蓮子を大きく彫り直す[1]。6282型式の先駆形態である。中央蓮子は低く、上面は平らである。Ebの古い資料では弁に笵傷がほとんどなく鮮明で、笵型が傷んでから彫り直した訳ではない（１）。ただし、焼成は異なり、6284Ea段階の資料は焼成が甘く、黒く燻しているのに対して、Ebは硬質灰色に焼き上がる。Ebには２段階あり、外縁が薄くEa段階の笵型に手を加えていない古段階と、外縁を幅広く彫り広げた新段階に分けられる。Eb新段階では弁の笵傷が進行している（３）。Eb両段階ともに、瓦当厚は外区面から３cm前後で、裏面は丸瓦部凹面にかけてやや厚くなる。丸瓦部凹面との接合線は比較的高い位置である。しかし、Eb古段階が胎土に砂粒を多く含み硬質であるのに対し、Eb新段階の胎土はより緻密で、やや軟質で燻し焼き風である点が異なる。中房心に径１cmあまりの釘孔を穿ったものがあるが（２）、胎土や焼成具合および弁の笵傷からみて、Eb古段階に限定できそうである。なお、Eb古段階の資料には、瓦当裏面が剝離した部分に、布目が残る面が認められるものがある（１）。丸瓦の取りつけ以前に、瓦当部の粘土を笵込めして布で押圧したものだろう。

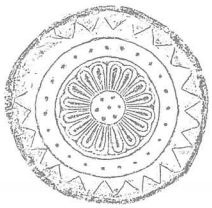

6284Eb

Ec（19点）　線鋸歯文を太く彫り直したもの。瓦当厚は3.5cm前後とやや厚くなり、凹面側の接合粘土が多くなって、瓦当裏面から緩い曲線を描いて丸瓦部凹面に移行するものとなる。胎土と焼成はEb新段階と共通する。

6284Ec

6285型式（Pl.54，Ph.122）　間弁Ｂ系統の複弁８弁軒丸瓦で、6284型式より中房径がやや小さく、弁が長いもの。Ａ・Ｂ２種あり、Ａが出土した。

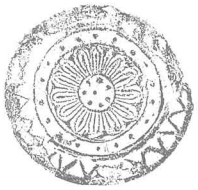
A（６点）　中房と弁区が全体に大きく盛り上がる。細い圏線をもつ中房は、レンズ状に高まる。弁は弁区の中央やや外寄りでもっとも高い。外区の珠文および外縁の線鋸歯文は細かく、弁とは対応しない。外縁は匙面状で細高く、もっとも高い部分には粘土が充分に入っていない。笵込めの際に、深い外縁部に粘土が充分に入るよう、指で押えた痕跡が残る。接合式で、丸瓦は瓦当の外区相当の高さで、丸瓦端は外区面から１cmあまりの位置まで入る。瓦当裏面は下縁がもっとも高く、そこから中窪みとなり、ナデ調整で仕上げる。内面の接合粘土はほとんどなく、接合部をヨコナデする程度で、丸瓦凹面の布目がほぼ残る。瓦当厚は下縁で縁頂部から4.5cm。胎土に白い長石およびシミ状


6285A

1）旧6282Ｆ。佐川正敏「平城宮の軒丸瓦6284Ｅと6282Fa」『年報1992』，p.49

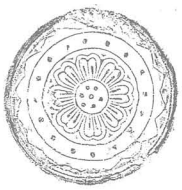
の黒粒を含む。青灰色硬質のものと、焼き悪く黄白色のものがある。

6288型式(Pl.54, Ph.122)　間弁B系統の複弁7弁軒丸瓦である。A1種のみ。


6288A

A(4点)　弁区は外区面よりもわずかに低く、凸レンズ状にふくらむ中房にむかって、弁の基部が高くなる。弁の割り付けに失敗し、終点のところで複弁2葉を入れる空間がなく、片側が子葉のみとなる。間弁端と弁央端部の三角形が目立つ。外圏線の外に0.5cmほどの平坦面をおいて外縁が高く立ち上がる。接合位置は高く、丸瓦端は外区面から1.5cmの深さに入る。瓦当厚は外区面から3.5cm。焼成甘い。

6291型式(Pl.54, Ph.122)　間弁B系統の複弁8弁軒丸瓦で、間弁が弁に沿う輪郭線状で、弁間に独立した小さな三角形が入る。A～Cの3種あり、Aが出土した。

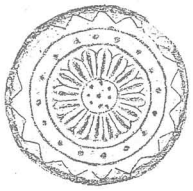

6291Aa

A(6点)　弁区と中房がやや盛り上がり、小振りの弁を彫りこむ。外区幅は広く、外圏線の外に0.3cmほどの平坦面をおいて外縁が立上がる。珠文と線鋸歯文は弁に対応する。のちに一部彫り直し、対角線の位置にある2ヵ所の間弁端部について、輪郭線状の間弁と三角文を一体とし、あわせて弁央の切れ込み部分を内圏線沿いに円弧状に彫り直す。これによりAa・Abに区別する。Abは1点。外縁は幅広く、丸い頂部に圏線をめぐらす。丸瓦の接合痕跡がなく、一本作りと考えられる。瓦当厚は4.5～5.0cm。裏面は平坦で、丸瓦部凹面にむかって薄くなるものが多い。

6291Ab

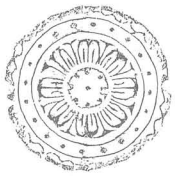
6296型式(Pl.54, Ph.124)　線鋸歯文縁で、間弁のない複弁8弁軒丸瓦。しかし、間弁がないため単弁16弁にみえる。A・Bの2種があり、Aが出土した。

A(1点)　弁区と中房は外区よりやや高い。弁端は尖り気味で、輪郭線は互いに接する。珠文は大振りで、弁間の位置に配する。外区内外の圏線は高く、外側がより太い。外縁は急傾斜で立ち上がり、平城宮出土の同笵例では縁頂部から0.8cm外に笵端痕跡が残る。接合式で、丸瓦端は外区面から2.5cmの位置まで入る。同笵例では瓦当厚4cmほどで、裏面は中央がゆるく凹む。硬質で燻し焼き風である。


6296A

6298型式(Pl.54, Ph.124)　間弁A系統の複弁8弁軒丸瓦で、中房と弁区の間に文様のない凹部をもつ点が大きな特徴である。A1種のみ。

A(2点)　凸中房で、蓮子は中房の周縁近くに配する。弁区は外区より1段高く、弁端と間弁端がもっとも高い。間弁は楔形状。割り付けの失敗からか、弁のひとつが単弁表現となる。笵込めに際しては、まず外縁から外区までについて環状に粘土を入れ、ついで弁区から中房までの粘土を充塡しており、出土した2点ともに、この部分で粘土が剝離し外区と縁部を欠失する。瓦当厚は外区面から2.5cmほどで、裏面はヘラケズリ調整でほぼ平坦にする。焼成やや甘く、燻し焼き風である。


6298A

6301型式(Pl.54, Ph.124)　いわゆる興福寺式の複弁8弁軒丸瓦。径の大きな低い凸中房をもち、蓮子を2重にめぐらし、照りむくりの大きい弁をもつ。珠文は大振り。A～F・I・Jの7種あり、互いに酷似するB・Jが出土した。

6301B

B(4点)　6301型式のなかでは小型。中房の蓮子は小さい。弁は弁区の中央やや内側でもっとも高い。外縁は幅の狭い三角縁で、縁頂部に凹線がめぐる。接合式で、丸瓦部凹面には三角形状の接合粘土を入れ、瓦当裏面から丸瓦凹面にかけて屈曲なく移行する。丸瓦部側縁は円弧を描いて瓦当裏面にとりつき、その位置はかなり低い。平城宮出土の

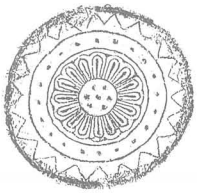
同笵例で認められる瓦当裏面の布目押圧のあとは、調整のためか認められない。瓦当厚は3.0〜3.5cm、裏面は中窪みで、丸瓦部凹面にかけてタテナデを施す。

J（1点）　6301Bと認定していた海龍王寺出土資料が、酷似するが別笵であることが判明し、J種とした。Bと特徴はほぼ同じであるが、Bに比べてわずかに径が大きく、外縁の斜面長はやや短く、線鋸歯文が細い。縁頂部より0.6cm外に笵端圧痕が残るとともに、バリ状の突帯がめぐる。焼成おおむねよく、燻し焼き。海龍王寺出土の同笵例は接合式である。瓦当厚は3.0cmで、裏面は平坦で下縁に布目が残っている。

6301J

6303型式（Pl.54, Ph.124）　間弁B系統の複弁8弁軒丸瓦で、A・Bの2種あり、Bが出土した。Aは弁区が高く突出する点で特徴的だが、Bは6284型式と変りない。

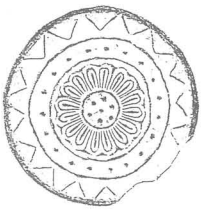
B（4点）　弁区と中房は盛り上がり、中房はさらに凸レンズ状にふくらむ。弁は弁区の中央外寄りでもっとも高い。外縁は匙面状で細高い。珠文と線鋸歯文は数が同じでおおよそ位置が対応するが、弁とは対応しない。瓦当部に1cmほど粘土を入れた段階で丸瓦をおき、内外に接合粘土を加える。瓦当厚は縁頂部から5cmほどで、裏面はナデ調整し平坦に仕上げる。2点のうち1点は玉縁まで完存し、全長39cm、玉縁長4.5cmである。丸瓦は最大厚1.4cmほどの薄いもので、内外の接合粘土が薄くなりながらも丸瓦部のかなり後方までのびる。内面で瓦当裏面から13〜23cmまで、外面は縁頂部から23cmの位置までおよぶ。焼成おおむねよく、燻し焼きである。


6303B

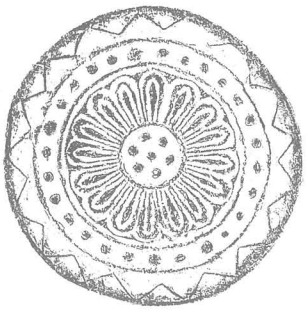
6304型式（Pl.55, Ph.124）　間弁B系統の複弁8弁軒丸瓦のうち、中房の突出が大きく、弁が長く先端が尖り気味のもの。A〜E・G・L・Nがあり、A・C・Lが出土した。

6304A

A（3点）　6304型式のなかでは、弁区の盛り上がりが大きく、弁はより長く、子葉をかこむ輪郭線が太い。外縁は匙面状でかなり高く、線鋸歯文は弁に対応させており1単位が大きい。丸瓦は瓦当の外区相当の高さに取りつけられ、丸瓦端は外区面から1.5cmの深さまで入る。瓦当裏面は平坦だが、丸瓦部凹面にかけてやや厚くなり、瓦当厚は下縁で2.0cm。焼成やや甘く、燻し焼き風である。

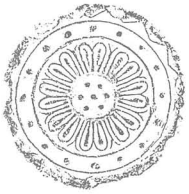

6304C

C（4点）　弁区は肉厚で、中央やや外寄りでもっとも高い。外区内外の圏線は太くかつ高い。外縁は匙面状で高く、線鋸歯文は弁に対応させる。縁頂部から1.2cm外に笵端らしい痕跡がある。図示したものは、接合溝を入れて丸瓦を押しつけるが、丸瓦は溝の底までおよんでいない。丸瓦端の位置は外区面から2.5cm。瓦当厚は4〜5cmで、裏面はナデにより平坦にするが、丸瓦部凹面にむけてやや厚くなる。丸瓦部側縁は瓦当裏面に直角に取りつく。


6304L

L（5点）　大型の軒丸瓦。6225Lと同じく棟先に使用したものだろう。弁区の盛り上がりはAに似て、弁区の中央外寄りでもっとも高い。中房は凸レンズ状にふくらむ。珠文と線鋸歯文は弁と対応しない。外縁は匙面状で、縁頂部から0.7cm外に笵端痕跡が残る（4）。瓦当厚は外区面から2.8cm〜3.5cmである。

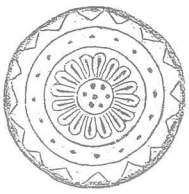
6305型式（Pl.55, Ph.124）　線鋸歯文縁の複弁8弁軒丸瓦で、弁区は薄く盛り上がるが、中房は外区と同じ高さのままで圏線もなく窪んだもの。A1種のみ。


6305A

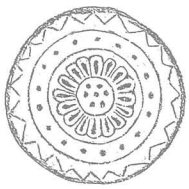
A（1点）　珠文は弁に対応し、外縁の線鋸歯文も同笵例で確認できる限りは対応している。外縁は三角縁。接合式で、丸瓦端は外区面から1.5cmの深さに入る。瓦当厚は外

区面から3.0cm弱で、裏面はわずかに中窪みだがほぼ平坦である。

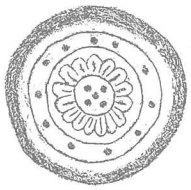
6307型式(Pl.55, Ph.126)　間弁のない複弁8弁軒丸瓦。弁央に2子葉を分ける突線のあるものとないもの、隣り合う弁がつくものと独立するもの、外縁に線鋸歯文がめぐるものと無文のものが混じる。A～I・Lの10種あり、A・E・Gが出土した。


6307A

A(4点)　中房高く、弁区は盛り上がり大きく、弁区中央でもっとも高い。弁は原則的に分離するが、2弁のみは、子葉3つの単位と単弁の単位になる変形が生じている。外区の珠文と外縁の線鋸歯文は弁に対応する。外縁は匙面状。丸瓦を瓦当の高い位置に取りつける接合式で、丸瓦端の深さは、外区面から0.5cmと深いものと、2.5cmの浅いものがある。瓦当厚は外区面から3.0～4.0cm、裏面はナデにより平坦に仕上げ、丸瓦部凹面にむかってやや薄くなるものが多い。焼きの甘いものが多い。


6307E

E(1点)　複弁8弁の構成がくずれ、となりあう複弁2弁が融合し、4子葉からなる単位が4単位になる。さらにそのうち1単位は、3子葉からなる1単位と単弁の1単位に分離している。外縁は匙面状で、細く高い。焼きやや甘く、燻し焼き風である。


6307G

G(1点)　弁は粗雑な表現で、子葉を失い輪郭線のみの部分もある。複弁の表現をとらないが、複弁が崩れたものとして本型式に帰属させる。圏線は太く、珠文は大振りでまばら、外縁は無文である。青灰色硬質で、胎土に大粒の礫を含む。

6308型式(Pl.55・56, Ph.126・128)　間弁A系統の複弁8弁軒丸瓦のうち、中房面が外区と同高ないしやや高く、弁区と同高ないしやや高く突出するもの。A以下12種あり、A・B・C・D・Iの5種が出土した。

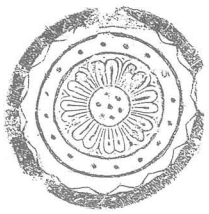
6308Aa

A(25点)　弁区全体を外区面より1mmほど一段高くし、そこに弁を彫りこむ。したがって、弁央端および間弁端の外には台状の平坦面があり、弁央端の平坦面には小さな三角形の突起を彫りこむ部分がある。珠文と線鋸歯文は弁と対応する。外圏線の外に0.5cmほどの平坦面をおいて外縁が立上がる。縁頂部は丸みをもち、圏線がめぐる。笵端は不明瞭だが、縁頂部より0.6cm外までは笵面がおよんでいる。笵型は文様の鮮明な初期の段階ですでに割れを生じ、その後拡大する(2)。この頃には中房圏線を太くする彫り直しも行われる。出土資料の多くは、笵割れが著しくない彫り直し以前のAa段階で、Abは1点のみ。丸瓦接合痕が確実な例はなく、6225A・Cに類似した粘土接合痕と瓦当裏面の形状をもち、一本作りと考えられる。ただし、Abは接合式ともみられる破面をもつ。丸瓦側縁の瓦当裏面への取りつき位置はかなり低い。瓦当裏面は平坦で、丸瓦部凹面にむかって薄くなるものが多く、瓦当厚は下端部で縁頂部から4～5cmである。青灰色硬質のものもあるが、多くは焼成甘く、燻し焼き風である。

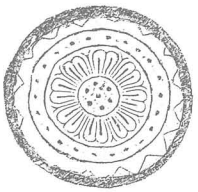
6308B

B(19点)　Aと酷似するので、異なる点を挙げる。弁が全体に細く、子葉を取り巻く弁が輪郭線状に突出する。弁区の段差はより小さいが、平らではなく中心にむかってわずかに傾斜する。外区圏線がより細く、外縁の傾斜はやや緩く、縁頂部の形状が平坦である、などの点がある。縁頂部から0.7cm外に笵端圧痕が残る。Aと同じく中房に達する笵割れを生じるが、別に中房の中心を通る割れと、外区から弁区にかけて割れが生じる(2)。接合式とわかるものは1点で(1)、多くは一本作りである(2)。接合式のものは、丸瓦端の深さが外区面から3cmほどと浅い。瓦当厚は縁頂部から5cm、一本作り

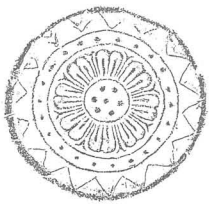
のものはやや薄手。ともに丸瓦側縁の瓦当裏面への取りつき位置は低い。裏面はヘラケズリにより平坦とし、多くは丸瓦凹面にむかって薄くなる。瓦当下半側面に「北」と「井」の刻印を押捺したものが各１点ある（２・５）。


6308C

C（７点）　Ａ・Ｂと異なる点を挙げると、直径が大きいこと、外区内外の圏線が太く、とくに外側が太いこと、弁の特徴はＢに近いが、Ｙ字状に分れた間弁端の外にも三角文を入れること。弁央部の三角文は、Ａ・Ｂとも不明瞭なほど小さい部分もあったが、Ｃではすべての該当箇所にやや大きく入れること、内圏線と弁の間の平坦面が２～３mmと広いこと、外圏線の外側には４mmほどの平坦面をおいて外縁が立ち上がるが、その傾斜が緩く、頂部に幅１cmほどの平坦面が明瞭で、圏線がめぐらないこと、などが挙げられる。成形は一本作りで、瓦当厚は4.5cm前後、裏面は平坦で丸瓦部凹面にむかってやや薄くなる。裏面に布目を残すものが１例あり（２）、またイタナデ調整によりハケメが残るものもある。丸瓦部凹面は丹念にタテナデし、布目は認められない。瓦当裏面と丸瓦部の接合部は明確に屈曲して折れ、その部位を最後にヨコナデする。


6308D

D（４点）　弁区を一段高くした段差は不明瞭で、段差があるかどうか判然としない。弁は弁区の中央やや外側でもっとも高い。珠文は弁と対応しないが、線鋸歯文は対応する。外縁は匙面状で高く細い。笵端は、不明瞭だが縁頂部の１cm外に認められる。接合式で、丸瓦端は外区面から1.5cmの深さに入る（２）。瓦当厚は4.5～5.0cm。裏面は丸瓦部凹面にむかってやや薄く、ヘラケズリやナデで平坦に仕上げる。図示したものは、下縁がとくに高くなっていたものを面取りし、平坦面ができている（１）。胎土は砂粒をかなり含む。燻し焼き風で、焼成よく堅緻なものが２点、１点は軟質である。

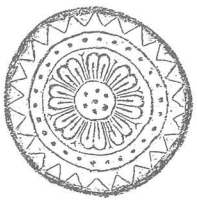

6308I

I（11点）　Ｄ種および左京三条二坊九坪の調査で出土したＭ種に類似する[1]。Ｄ・Ｉ・Ｍの３者は、中房径や弁の形状、珠文と弁が対応しないこと、外圏線からただちに細高い外縁が匙面状に立ち上がること、接合式で、丸瓦の取りつき位置も高いことが共通し、Ａ・Ｂ種と異なる１群をなす。珠文数はＤとＩが22個で、Ｍが23個である。Ｉ種は、Ａ～Ｃのように弁区の段差がわずかにあるが、段差というより圏線状である。弁央端には三角文が入る。蓮子と珠文はＤに比べて大きい。瓦当面に1.5～2.0cmほど粘土を入れ、接合溝を入れて丸瓦をおき、接合粘土を加える。瓦当厚は縁頂部から3.5～4.5cm、裏面は中窪みでナデ調整する。もっとも高い下縁は、余分な粘土をヘラケズリし、土手状の平坦面ができたものが多い（２）。中にはバリ状に高く残したままのものもある（３）。焼成よく硬質のものが多く、１点のみ焼き悪く灰白色である。

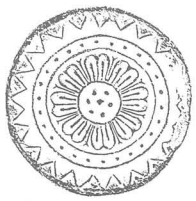
6311型式（Pl.56，Ph.128）　間弁Ａ系統の複弁８弁軒丸瓦のうち、中房面が弁区と同高ないし低いもので中窪みのもの。Ａ～Ｈの８種あり、Ａ・Ｂ・Ｆ・Ｇが出土した。

Aa（29点）　Ａ・Ｂは、珠文や線鋸歯文の数はもとより、弁との位置関係も一致するので、同じ下絵から作笵したものと思われる。異なる点は、Ａには弁の照りむくりがあり弁端が高いのに対し、Ｂは弁区中央では高いが弁端が垂れ下る点である。Ａ・Ｂいずれも笵が磨耗したのち、子葉と輪郭線を彫り直す。その結果、両側の弁が太くなり、間

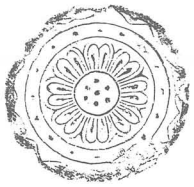
1）奈良市教委「平城京左京三条二坊九坪発掘調査概要報告」『昭和54年度奈良市埋文報』1980，pp.51～67


6311Aa

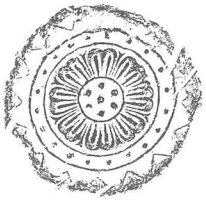
弁が中房まで通らず途中で消失する。彫り直し後のAbは１点で、これ以外はAa段階の資料である。外縁は匙面状で、縁頂部から１cm外に笵端圧痕が残る。瓦当粘土を充填したのち、接合溝を入れて丸瓦をおく(３)。丸瓦端の位置は外区面から１cmほどの深いものから、２～３cmの浅いものまで多様である。なかには丸瓦先端をやや折るように湾曲させているものがある(４)。外側の接合粘土は多く、丸瓦に密着させるために指で押えた痕跡が残る。内側の接合粘土はほとんどない。瓦当厚は縁頂部から5cm前後で、裏面はナデにより平坦に仕上げ、丸瓦凹面にむかって低くなるものもある。接合する丸瓦の側縁に粘土を加えることはほとんどなく、丸瓦の側縁がそのまま瓦当裏面に取りつく。丸瓦部凹面は縦方向のケズリやイタナデで布目を消す。焼成はおおむねよく燻し焼き風だが、黒変した部分は少なく灰色～灰白色のものが多い。


6311Ba

Ba(27点)　Ａと酷似することは先に触れた通り。縁頂部から1.5cm外に笵端らしい痕跡が残る(２)。瓦当部が薄く剝離するものがあり、まず全面に薄く粘土を充填したことがわかる(３)。笵型の彫りこみの深い縁部については、入念に指で押えている。瓦当部の粘土をさらに加えたのち、接合溝を穿って丸瓦をおく。瓦当厚は縁頂部から4.5～5.0cm、裏面はケズリないしナデで平坦に仕上げ、やや丸瓦凹面にむかって薄くなるものもある。Ａと同じく、丸瓦凹面の接合粘土は少ない。


6311F

F(２点)　弁区と中房は外区からわずかに盛り上がる。子葉が高く、間弁端はＹ字状に大きく開く。珠文は径のわりに高い。外圏線の外側に３mmほどの平坦面をおいて外縁が低く立ち上がる。外縁は三角縁で、頂部に圏線がめぐり、この外はわずかな平坦面となる。珠文と線鋸歯文は弁に対応する。丸瓦の接合痕跡がなく、一本作りと考えられる。瓦当厚は縁頂部から４cmほどで、裏面はヘラケズリにより平坦に仕上げ、丸瓦凹面に向かってやや薄くなる。焼成よく灰色から灰白色である。


6311G

G(１点)　弁区の盛り上がりは中央やや外寄りでもっとも高い。珠文は20個で弁と整合的に対応しないが、90度ごとに弁央にあわせて４個おき、間に４個ずつ配した位置にある。線鋸歯文は弁に対応する。外縁は匙面状で、興福寺出土の同笵例では縁頂部から１cmあまり外に笵端圧痕が残る。丸瓦の接合痕跡が明らかでなく、さらに同笵例にあたる必要があるが、一本作りの可能性がある。瓦当厚は縁頂部から４cmほどで、裏面はナデで平坦に仕上げる。焼き悪く灰白色である。

6313型式(Pl.56・57，Ph.128・130)　小型の複弁４弁軒丸瓦で、中房の蓮子は大きな１顆のみ。間弁にはＡ系統とＢ系統が混在する。Ａ～Ｉの９種あり、５種が出土した。

6313Aa

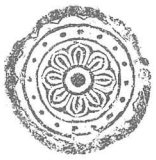
Aa(41点)　弁端は照りむくりなく垂れ下り、間弁端はＹ字形に分れる。珠文と線鋸歯文は弁に対応する。外縁は緩い匙面状で、縁頂部から0.8cm外に笵端圧痕が残る。笵傷から木取りがわかり、木目と平行・直交方向に間弁を割り付けている。多くは接合式だが(１)、丸瓦の接合痕跡のないものがあり、一本作りによると考えられる(２・３)。接合式では、接合溝を入れた上で、瓦当裏面の比較的高い位置に丸瓦をおく。丸瓦端は外区面から1.0～1.5cmの深さまで入る。内側の接合粘土は少ない。接合式の瓦当厚はほぼ3.5cm前後で一定しており、瓦当裏面はヘラケズリないしナデで平坦に仕上げ、丸瓦凹面にむけてやや薄くなるものがほとんどである。一本作りのものは、笵型の傷み具

合では接合式と変らず、瓦当厚や調整もおおむね等しい。

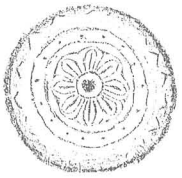
C（6点）　6313型式の中でも小型。弁と珠文・線鋸歯文はほぼ対応する。外圏線の外に2mmほどの平坦面をおいて、わずかに匙面状の外縁が傾斜きつく立上がる。奈良山瓦窯の同笵例では縁頂部から8mm外に笵端圧痕が残る。Aと異なり、木目の直交・平行方向に弁央を割り付ける。接合式で、丸瓦端は外区面から1.5cmの深さに入る。接合粘土は外面に多いが、内面は少ない。瓦当厚は外区面から2.5〜3.0cm、裏面はヘラケズリやナデで平坦にし、丸瓦部凹面にむかって薄くなる。

6313C

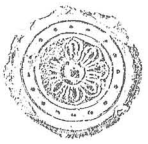
D（2点）　中房圏線が太く、Hとともに間弁B系統で、複弁が分離するとともに、弁央部にも間弁端に合わせた大きく開くV字文が入る。この間弁端や弁央のV字文の外には、外区面よりわずかに高まる段があり、この点は6308A・B・Cと共通する。弁端はわずかに尖る。珠文と線鋸歯文は弁に対応する。外圏線から2〜3mmの平坦面をおいて外縁が立上がる。木目に直交・平行方向に弁央を彫り込んでいる。丸瓦痕跡は明瞭ではなく、一本作りの可能性がある。焼きの甘い燻し焼き風である。


6313D

F（1点）　6313の中では大型。圏線は正円でなく、ロクロ挽きによらずフリーハンドで彫り込んだとみられ、弁の表現も稚拙で整わない。珠文と線鋸歯文は弁と対応しない。6313D・Hなどを模倣したことが考えられる。外圏線の外に8mmほどの平坦面をおいて外縁が立上がる。外縁は厚く、丸い頂部に圏線がめぐる。平城宮出土の同笵例では縁頂部から7〜8mm外に笵端らしい痕跡がある。接合式で、接合溝を入れ丸瓦を押しつける。取りつき位置は高く、丸瓦端は外区面から2cmあまりの位置に入る。瓦当厚は外区面から3.5cm、裏面はヘラケズリにより平坦に仕上げる。


6313F

H（1点）　間弁B系統で、弁央端の空間にも三角文をいれる。外圏線から3〜4mmの平坦面をおいて外縁が直立気味に立上がる。縁部の断面形状は隅丸方形に近く、頂部は幅5mmほどの平坦面となり、中央に圏線がめぐる。同笵例では笵端は縁頂部から5mm外の位置にある。珠文は弁と対応するが、線鋸歯文は対応しないようである。木目の平行・直交方向に間弁を割り付ける。丸瓦の接合痕跡が明らかなものはない。瓦当厚は外区面から3〜3.5cm、裏面はナデにより平坦に整える。


6313H

ロ（1点）　6313型式Aに似るが、間弁が中房に達しない点はこれまでに知られる6313型式にはない。弁の深い彫り直しによって間弁基部がなくなる現象は、6311型式Ab・Bbに似ており、新種ではなく彫り直しの可能性もある。しかし、焼成が甘く磨耗しており、新種あるいは彫り直しの判断は保留する。

6314型式（Pl.57，Ph.129・130）　6313型式に似た小型の複弁4弁軒丸瓦だが、中房の蓮子が中央の1顆のみではなく1重にめぐるもの。間弁B系統で、複弁の2葉は互いに分離する。A〜Fの6種あり、A・B・Cが出土した。

A（4点）　弁区は中央やや外寄りでもっとも高くなるよう盛り上がる。弁端がわずかに尖る点は6313D・Hに近い。弁端と内圏線の間にごく細い圏線がめぐる。外圏線の外に4mmほどの平坦面をおいて外縁が直立気味に立上がる。縁頂部は肩が丸みをもった幅1cm弱の平坦面となり、中央に圏線がめぐる。珠文と線鋸歯文は弁に対応する。一本作りで、瓦当裏面における丸瓦部凹面との接合位置は低く、隅丸台形状の円弧を描く。

6314A

瓦当厚は縁頂部から4.5〜5.0cmでほぼ一定。裏面はナデによって平坦にし、丸瓦部凹面にむかってやや薄くなる。焼成やや甘く、燻し焼き風である。

6314B

B(4点)　Aよりやや小型でCに近い。Cに比べると、中房はやや小さく、弁が長く子葉も大きく高い。外縁は匙面状で細高い。珠文は蓮弁に対応しない。木目の平行・直交方向に間弁を割り付ける。接合式で、丸瓦端は外区面から1cmあまりの深さに入る。瓦当厚は2点が外区面から3.5cm前後、小破片の1点は1.5cmと薄い。裏面は完好な例では平坦に仕上げている。焼き甘く軟質で、燻し焼き風である。

6314C

C(3点)　珠文と線鋸歯文は弁に対応する。間弁端が高い。外縁は匙面状で細高い。木目の平行・直交方向に弁央を割り付ける。木目が浮き、笵傷も進行しており、笵型をかなり使いこんだ段階の資料である。接合式で、丸瓦端は外区面から1cm弱の深さに入る。瓦当厚は外区面から3cm、裏面はケズリにより平坦にする。丸瓦の凹面に、瓦当裏面から長い範囲にわたって薄く粘土を入れ、タテナデ調整する。

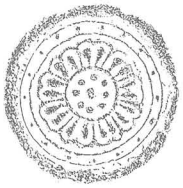
6316型式(Pl.57・58, Ph.130・132)　間弁のない複弁軒丸瓦で、2子葉を分ける弁央の凸線がなく、2子葉をひとつの輪郭線が囲むもの。8弁を原則とするが、9弁のものも少数ある。隣り合う弁が互いに接するものが多いが、分離するものを少数含む。A〜I・K・M〜Pの14種あり、C・D・E・G・H・Qが出土した。

6316C

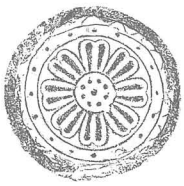
C(2点)　中房高く、弁の輪郭線は太く子葉よりも高い。外圏線からほぼ直立する外縁が立上がり、内面上部に線鋸歯文を密に入れる。木目に平行・直交方向に十字の蓮子、間弁・珠文を割り付ける。珠文はこれらで区分された90度分に、均等に4個ずつ配している。接合溝を入れて丸瓦をおく。丸瓦端は外区から2.5cmの深さに入る。瓦当厚は4cm、裏面はほぼ平坦に仕上げる。燻し焼き風である。

6316Da

Da(2点)　9弁。中房は高く、弁も子葉・輪郭線ともに肉厚である。珠文帯は狭い。直立縁で内斜面に線鋸歯文を入れるが、ほとんど文様が出ない。頂部は幅1cmほどの平坦面をなし、縁頂部から1.2cm外に笵端痕跡が残る。珠文と線鋸歯文は弁と対応しない。蓮子は当初は1＋4で、途中で彫り加えて1＋8とする。これによってDaとDbに区別する。接合式で、丸瓦の取りつく位置は低く、丸瓦端部の深さは、判明するものでは外区面から3cmと浅い。瓦当厚は外区面から3.5cm、裏面はケズリやナデで平坦に仕上げ、接合線は円弧というより三角形に近い。丸瓦部凹面は指によるナデツケが顕著である。丸瓦部側縁は直線的に瓦当裏面に取りつく。


6316Db

Db(5点)　笵傷は増えているが、Daに比べて著しく傷んでいる訳ではない。丸瓦の取りつき位置はさらに低く、丸瓦部凸面が瓦当にむかって反り上がり、鳥衾瓦のようになっている。焼成やや甘く、黒い燻し焼きである。


6316Ea

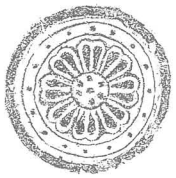
Ea(10点)　中房は外区面と同じ高さである。蓮子は弁間に対応する。長い子葉は基部から先端まで一様な高さである。外圏線が高く、その途中から直立する外縁が立上がる。縁頂部は1cm弱の平坦面で、内外の角は鋭い。珠文は弁に対応するが、線鋸歯文は対応しない。木目と平行・直交方向に間弁を割り付ける。接合式で、丸瓦の瓦当裏面の取りつき位置はやや低く、内外に接合粘土を多く入れ、接合線は緩い円弧ないし三角形状である。丸瓦端は外区面から2.0〜2.5cmの深さに入る。瓦当厚は2.5〜3.0cmであ

る。裏面はヘラケズリで平坦とし、丸瓦部凹面は荒いタテナデ調整。

Eb（5点）　直立縁の外縁の笵抜けが悪かったのか、途中で外区面を斜めに彫り直し、直交していた外区と外縁の角度を緩和している。諸特徴はEaに同じ。

6316Eb

G（5点）　凸中房で、弁区は盛り上がり、中央やや外寄りでもっとも高い。外区面はわずかに傾斜をもち、弁に対応させて珠文をおく。外縁の内斜面はやや傾斜をもつ直立縁で、線鋸歯文を彫るがほとんど表出しない。縁頂部から7mm外に笵端圧痕が残る。接合式で、笵型に厚く粘土を入れたあと、丸瓦を押しこむ。丸瓦端は外区面から3cmあまりと浅い。丸瓦の取りつき位置は低く、外側に多量の接合粘土を入れる。瓦当厚は4cm弱、裏面はナデ調整で平坦にし、接合線は台形状のものと緩い円弧のものがある。丸瓦部凹面は、瓦当裏面から20cmにわたってタテナデを施す。


6316G

H（10点）　凸中房で、圏線はない。弁は互いに分離し、薄肉で長い。外区圏線は太く、珠文は弁に対応する。外縁は傾斜のきつい台形状で無文。縁頂部は1cm弱の平坦面となり、内縁にわずかな圏線がめぐるようである。接合式で、丸瓦の取りつき位置は低く、外側に多量の接合粘土を加える（2）。丸瓦端の深さがわかる1例は、外区面から2cmほどの位置。瓦当厚は外区面から3cm、裏面は下縁をヨコケズリする程度で、笵込めの指頭圧痕を残す。縄タタキで成形することが特徴で、瓦当の下半側面を含め、外面全体を縄タタキする。タタキ目の方向は、2例では下半側面は横、凸面側は斜めであるが、全周にわたって縦方向のものが1例ある。丸瓦部凹面には縄を巻いた当て具の痕跡が残る。外面はタタキののち調整は加えないが、丸瓦部凹面はタテナデを施す。丸瓦部側縁は円弧を描いて瓦当裏面に取りつく。焼成よく硬質である。

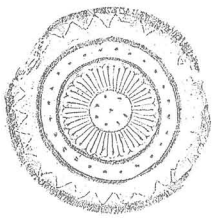
6316H

Q（1点）　瓦当文様の全体は不明で、弁数もわからないが、おそらく8弁であろう。中房は外区面より低く窪んでいる。接合式で、丸瓦は隅部を斜めに切り落とし、端部は外区面から2cmあまりの深さに入る。瓦当厚は5cm弱。裏面は平坦で、丸瓦凹面にかけて屈曲なく円弧を描いて移行する。焼成悪く灰白色。

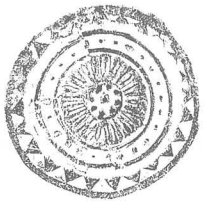
6316Q

6320型式（Pl.58，Ph.132）　弁の細長い複弁12弁軒丸瓦だが、複弁の構成が崩れ、単弁24弁風になっている。A1種のみ。

Aa（1点）　中房は高く1＋8の蓮子をめぐらす。子葉風の凸弁と、先端がわずかにY字形に分れた間弁を交互に繰り返す。弁区は全体に中房にむかって高くなっている。珠文は弁間に対応させ、線鋸歯文とも対応する。外区の珠文は小さく、太い外圏線の外に5～6mmの平坦面をおいて外縁が立上がる。外縁は直立気味に急傾斜で立上がり、幅の狭い細高いものである。瓦当厚は4cmほどである。焼き上がりはやや軟質で、内部は黄褐色で表面が黒い燻し焼き風である。


6320Aa

Ac（1点）　笵型には途中で2回の彫り直しが加わる。外縁の線鋸歯文を凸鋸歯文に彫り直したものがAb、さらに使い込まれ弁が模糊となる段階で、中房の蓮子をやや大きく彫り直したと認定したものがAcである。Abらしいものも出土しているが確定できない。出土したAcは、丸瓦の取りつき高く、接合粘土も少ない。瓦当厚は3cmあまりで、裏面はヘラケズリとナデにより平坦とし、丸瓦部凹面は丁寧にタテナデする。丸瓦部側縁は直角に瓦当裏面に取りつく。焼成よく青灰色である。


6320Ac

6348型式(Pl.58, Ph.132)　外区に反時計回りに偏行唐草文をめぐらす複弁7弁の軒丸瓦である。A・B2種があり、Aが出土した。

6348Aa

Aa(8点)　凸中房で圏線はない。弁区は平坦で、弁も薄肉で端部でやや高くなる。外区面は平らでなく外縁にむかって勾配をなす。偏行唐草文は、主葉が連続して反転し、分離した1支葉をともなうもので、18単位がめぐる。外縁は傾斜緩く、わずかに匙面状を呈する。線鋸歯文は19単位で、弁や唐草文と対応しない。縁頂部をヘラケズリする。瓦当下半の外縁の外に、笵型と枷型の合わせ目の痕跡が残る。現状の縁頂部から1.1cmほど外の位置である。接合式で、丸瓦は瓦当裏面の高い位置におかれ、内側にはほとんど接合粘土を入れず、接合線は高い位置で円弧を描く。丸瓦端は外区面から1cmの位置に入り、外側を指で押えて丸瓦に密着させる。瓦当厚は縁頂部から2.0〜2.5cm、裏面は丁寧にヘラケズリし平坦にする。丸瓦側縁は円弧を描いて瓦当裏面に取りつく。丸瓦部凸面はタテケズリするが、乾燥が進んだためか、平滑で1単位の幅が狭いミガキ風になったものもある。須恵質に堅く焼き上がり、青灰色を呈する。

6348Ab

Ab(1点)　笵型は途中で2回彫り直される、まず中房面をより高くしたものがAb、笵型の傷みが進行した時点でさらに中房面を高くし、弁の基部を中房にむかって高く彫り直したものをAcとする。偏向唐草文の部分の笵傷も進行する。Abが1点あるが、Acは出土していない。Abは瓦当厚や調整などAaと異ならない。

6444型式(Pl.58, Ph.132)　唐草文風の文様をもつ小型の軒丸瓦である。A1種のみ。

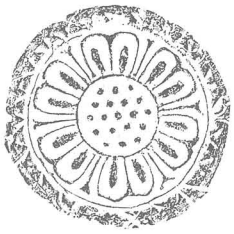
6444A

A(3点)　文様の全体は不明。中房は1＋6以上で、内区には唐草文風の文様を、時計回りに展開するように配するものらしい。この文様の間に珠文も加えている。外圏線の外にわずかの平坦面をおいて直立縁が立上がり、内面に線鋸歯文を入れる。接合式で、丸瓦端は地文部から2cmの深さに入る。瓦当裏面の残る資料なく厚さは不明。燻し焼き風で、焼成良好で硬質なものと、やや甘く軟質のものがある。

iv　その他(Pl.58, Ph.132)

型式番号のないもの3種について、最後にまとめてふれよう。

ハ(1点)　飛鳥寺出土の複弁8弁軒丸瓦と同笵と思われる小片である[1]。間弁は楔形状で、弁にはわずかに照りむくりがある。珠文帯なく外縁は無文であろう。瓦当厚は2.5cmほどで、瓦当裏面は平坦。焼成よく硬緻で、暗灰色に焼き上がっている。


姫寺

ニ(1点)　姫寺出土の大型の面違鋸歯文縁複弁6弁軒丸瓦[2]と同笵の破片である。大振りな弁と間弁および面違鋸歯文をもつ。やや軟質で、燻し焼き。

ホ(1点)　間弁のない複弁蓮華文軒丸瓦。6316型式とみるのが適当かもしれないが、弁の遺存部分が小さく、今のところ型式番号を与えずに保留する。弁の形状は整わず、弁端はかなり高い。外区の珠文は、残存する部分では弁と対応する。外縁は直立する細高いもので、内面には線鋸歯文ではなく、細い平行線を密に入れる。接合式で、文様面から1cmの深さに丸瓦端が入る。焼成やや甘く、燻し焼き風で黒色を呈する。

1）飛鳥寺軒丸瓦XⅣ型式。奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』1958

2）奈文研『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976

B　軒平瓦

軒平瓦は43型式96種、計1254点が出土した。大部分は唐草文軒平瓦で、界線で画した内側に唐草文を展開し、界線外側の外区に珠文などの文様を入れるが、外区文様のないものもある。藤原宮式の偏行唐草文をのぞいて、奈良時代のほとんどの軒平瓦は均整唐草文軒平瓦である。

顎の分類

顎形態には段顎や直線顎あるいは曲線顎がある[1)]。曲線顎は幅1cm前後の顎面をもつ曲線顎Ⅱ、顎面がないか、あっても幅の狭い曲線顎Ⅰに分ける。しかし、実際には顎の形状は多様で、直線顎を含めて分類が難しく、分類名称ではなく形状をそのまま記述したものもある。

范型の形状
外縁の成形

范型の形状と外縁の成形には、大きく4種類がある。その1は、外区の外側に界線をめぐらし、押捺後、その界線まで切り落とし外縁のないもの。范型は界線の外にわずかに平坦面をもつ形状であろう。その2は、周囲を1段ないし2段、階段状に彫り下げたもので、これによってできる段差を半ば利用して外縁をもうけるもの。その3は、范型周囲に加工なく、押捺後、范型の当らなかった外側の粘土で外縁をつくるもの。その4は、外縁部を范型自体に彫りこんで、型押しによる外縁をもつものである。

i　重弧文軒平瓦(Pl.59，Ph.134)

6555

6555型式(Pl.59，Ph.134)(1点)　5重弧文軒平瓦。法華寺から出土しているものと、瓦当の断面形状は共通する。貼りつけ段顎で、顎幅は9cm前後である。やや焼き甘く、灰色の燻し焼き。

6561型式(Pl.59，Ph.134)　重弧の押し挽きのあと、その上から×や○の文様を型を使って押捺するものである。A・Bの2種あり、Aが出土した。

6561A

A(1点)　6重弧文で、上4本が細く下2本は太い。上から2・3重目の弧線上に×を、5本目の太い弧線上に○を押捺し、また下端部を間隔をあけて指により下方へ押し下げる。もと久米寺所用だが、藤原宮へも供給される。粘土板桶巻作りで、貼りつけ段顎。顎幅は10cm強である。凹面側は瓦当沿いにヨコケズリするだけで布目が残る。焼成おおむねよく、黄灰色から灰白色を呈する。胎土に白い長石や灰色のクサレ礫を含む。

ii　重郭文軒平瓦(Pl.59，Ph.134)

6572型式(Pl.59，Ph.134)　范型の型押しによる2重郭文軒平瓦である。A～Gの7種があり、AとCが出土した。

6572A

A(2点)　弧線の断面形は台形に近い。瓦当寄りがやや厚くなる直線顎である。脇部の縁頂部から4mm外に范端圧痕が残る。燻し焼きで軟質。

6572C

C(1点)　弧線の断面形は三角形に近い波状を示す。瓦当部の厚さが平瓦部と変りのない直線顎である。脇部の范端痕跡は縁頂部から3mm外。凹凸面ともヘラケズリし、タタキ目と布目を消す。燻し焼きで軟質。

---

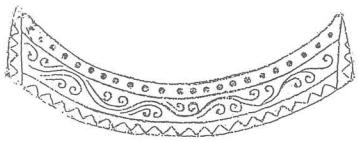
1)毛利光俊彦・花谷 浩「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮報告XⅢ』1991，pp.299～300

iii　偏行唐草文軒平瓦(Pl.59～61，Ph.133～136)

6641型式(Pl.59・60，Ph.134)　右偏行唐草文軒平瓦である。上外区に珠文、脇区と下外区に線鋸歯文をおく。連続する波状の茎から２本の支葉が派生するのを原則とする。一部には小支葉がさらにともなうものがあり、これが薬師寺式である。Ａ・Ｃ・Ｅ～Ｌ・Ｎ～Ｐ種の14種があり、このうち６種が出土した。報告する５種では、Ｈが薬師寺所用の軒平瓦であり、Ｐをのぞく他３種は藤原宮所用の軒平瓦である。いずれも段顎。

6641Ab

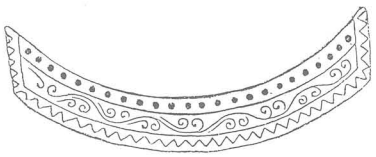
Ab(１点)　茎の始点と終点がともに反転する。もとは脇区と下外区に線鋸歯文をもつが、この部分の笵型を切り落としたAbである。Aaでは外界線沿いに余分な粘土を切り落とすが、Abでは笵を打込んだのち、界線の外側の粘土をヘラケズリで調整し、幅４mm前後の外縁とする。同笵例では粘土紐桶巻作り。削り出し段顎で、粘土を加えて顎部を肥厚させ、顎端面に切り込みを入れ、段を削り出す。顎幅は8.5cmである。凸面はケズリによってタタキ目を消し、凹面は瓦当沿いをヨコケズリするのみで枠板痕と布目が残る。胎土に多量の砂粒を含み、焼成は堅緻である。


6641C

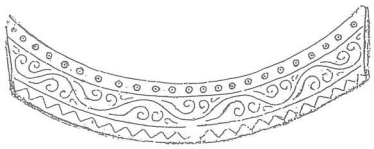
C(６点)　茎の始点は反転せず、遊離した２支葉をおき、終点は反転するが支葉はつかない。同笵例では粘土紐桶巻作り。顎は削り出し段顎で、顎幅９cmほど。焼成おおむね良く、青灰色の燻し焼き風である。

6641E

E(６点)　茎の始点が反転するとともに、遊離した１支葉をおき、終点は反転せず逆方向の支葉を上下に２個ずつ入れる。笵型の押捺後、脇区はほとんど削り落とし線鋸歯文は現われない。粘土紐桶巻作りで、削り出し段顎である。顎部の粘土を厚く加え、縦縄タタキのあと顎部をヨコナデし、顎端面の切り込みを入れて、それと直交するように平瓦部を削りこんで段を成形する。顎幅は８～９cmである。凹面は、瓦当沿いをヨコケズリするのみで、粘土紐の接合痕・枠板痕・布目痕が残る。黒いシミ状の斑が特徴的で、焼成堅緻、青灰色に焼き上がっている。


6641F

F(１点)　茎の始点はＥと同じで、終点は単純に反転する。焼成甘く磨耗しており、顎幅や顎の整形方法は不明である。


6641H

H(１点)　薬師寺所用の軒平瓦。各単位とも、反転する２支葉に加えて逆向きの小支葉をおく。薬師寺出土の同笵例は、粘土板桶巻作りで、顎は貼りつけ段顎である。胎土に白と黒の砂粒が斑状に入る。

6641P

P(３点)　新出資料。茎の始点・終点とも反転する。唐草端部が玉状をなし、下外区の線鋸歯文は小さく、脇区にはもとから鋸歯文を欠く。また、界線までを削り落とすことなく、外側の無文部をそのまま残す。粘土紐の接合痕があり、粘土紐桶巻作りと考えてよい。顎幅6.5cmの段顎だが、段差は少なく、また顎面は平坦ではなく瓦当にむかって外反する曲線顎風である。顎面には縦および斜めの縄タタキ目が残る。凹面は瓦当沿いを横に

イタナデするだけで、瓦当近くまで布目が残る。側面にも縦のイタナデが認められる。焼成やや甘く、表面黒灰色の燻し焼き。

6643型式(Pl.60, Ph.136)　藤原宮式の左偏行唐草文軒平瓦である。連続する波状の茎から２本の支葉が派生し、唐草の始点と終点はともに反転する。外区の文様はすべて珠文。Ａ～Ｅの５種が知られ、２種が出土した。いずれも文様は類似し、6641型式などに比べて画一的である。すべて段顎。

6643C

6643D

C(４点)　顎幅７～８cmの段顎。顎部の粘土が剝離し、粘土を加えた状況がよくわかる資料がある(2)。同笵例は粘土紐桶巻作り。凹凸面とも丁寧にヨコナデし，布目やタタキ目は残らない。砂粒をかなり含む。

D(２点)　顎幅6.5cmの段顎で、同笵例は粘土紐桶巻作り。顎部の成形方法は不明。平瓦部凸面にわずかに縦縄タタキ目が残る。暗灰色硬質のものと、灰白色軟質のものがある。軟質のものは胎土に赤い小粒を含む。

6644型式(Pl.60・61, Ph.136)　右偏向の変形忍冬唐草文軒平瓦で、上外区に珠文を、下外区には線鋸歯文を入れる。Ａ～Ｃの３種がともに出土した。外縁はもたず、界線に沿って余分な粘土を削り落とすのは、藤原宮式と共通する。軒丸瓦6272型式と組む長屋王邸所用の軒瓦である。

6644A

A(50点)　右に７回反転し、各単位間に忍冬唐草の蕾が三葉文風に表現されている。唐草文自体はＣ種の陰陽を逆に彫りこんだため、あまり整ってはいない。顎幅は７～９cmの長いものが多く、５～６cmの短いものは少ない。顎端部の段差はさまざまである。平瓦部と顎部の成形方法は一様ではない。枠板痕があり、粘土板接合痕が１例のみだが認められ(2)、粘土板桶巻き作りと考える。また、平瓦部が２枚の粘土板からなり、さらに顎部の粘土板を重ねる接合痕を示すものが２例ある(４・５)。１枚目の粘土板に糸切り痕が明瞭に残る(５)。こうした層状に剝離する破片も多くはなく、これ以外に顎部近くの粘土を指で押し広げたような粘土の剝離痕を示すものがある。桶に巻いた状態で、顎部の粘土を加える前に、既に巻きつけた平瓦部の粘土の下端を、桶の台に押しつけたことによるのであろう。粘土板桶巻作りで、顎部の成形にはいくつかの技法があったようである。笵型を押捺したのち、界線にそって余分な粘土を切り落とす。こうして凹面の瓦当沿いを幅５cmほどヨコケズリするだけのものと、縦のケズリやナデによって平瓦部のかなりの後方まで布目を消すもの(１)とがあり、後者の例が多い。隅軒平瓦が１点あり、片側の側面を瓦当から10cmまで残して、そこから斜めに切り落としている。これに合せて顎も斜めに成形する。焼成堅緻なものには、灰白色のものと、黒く燻し焼きされたものがある。むしろ焼きが悪く、内部が淡橙色で、表面が暗灰色の燻し焼きのものが多い。これらはすべて胎土に赤い小粒を含み、これは以下のＢ・Ｃでも共通している。

B(１点)　唐草文は６回反転でＡ・Ｃより１単位少なく、瓦当幅は狭い。

6644B

唐草文はAを模倣したものだが、蕾の多くは雫状になる。右端部の第6単位に続いて、上方にさらに7単位目の唐草文の基部がみえるが、脇区界線によって切られている。もともと7単位であった笵型を切り縮めたことも考えられるが、下外区の線鋸歯文は終点として処理されており、長屋王邸以外の出土例でも第7単位のあるものはないので、笵型の製作過程の現象とみられ、最終的には6回反転の偏行唐草文として完成したのだろう。出土した資料は隅軒平瓦で、片側の側面を、瓦当から7.5cmの位置から斜め45度に切り落とす。これに合せて顎幅も10cmから3cmまで斜めに削り落としている。粘土板の接合痕が通り、粘土板桶巻作りと考えてよい。笵型押捺ののち、凹面は瓦当沿いを界線に沿ってヘラケズリし、さらにタテナデで布目をある程度消す。凸面はナデによりタタキ目を完全に消す。

6644C

C(8点)　文様的にはA・Bに先行し、藤原宮式の偏行変形忍冬唐草文に近い。珠文や唐草文はA・Bに比べて大振り。顎幅は6～7.5cmである。隅軒平瓦が1点あり、瓦当からただちに斜め60度に切り落とす(3)。凹面は瓦当沿いをヨコケズリし、さらにタテナデで布目を消すものがある。

iv　均整唐草文軒平瓦(Pl.61～72, Ph.136～156)

6654型式(Pl.61, Ph.136)　左半分に左偏向の5単位を、右半分に右偏向の4単位をおく偏向唐草文の変則型式であるが、左偏向1単位を中心飾りとして左右に4回反転させた、変形の均整唐草文としておく。上外区に珠文を、脇区と下外区に線鋸歯文をおく。A1種のみ。

6654A

A(3点)　枠板痕が残り、おそらく桶巻作りであろう。顎幅8cmの段顎である。1例は顎部の粘土を加えた痕跡が残るが、粘土板というより、粘土紐を何段か重ねたものか(1)。端部の切りこみと平瓦部からのケズリによって段顎を成形する。笵型押捺後、界線に沿って周囲を切り落とす。凹面は瓦当沿いをヨコケズリし、凸面側も顎面をふくめて縦ないし斜めにヘラケズリする。1点は焼成良く青灰色硬質で、他方はやや甘い暗灰色である。

6663型式(Pl.62, Ph.138)　花頭形の中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文軒平瓦である。外区の珠文帯なく、界線が二重にめぐる。花頭基部は界線からのびる。A～F・H・Oの14種があり、うち8種が出土した。笵型は周囲を一段彫り下げており、外縁上に笵型の当りがみられる。その幅は3～4mmで、笵型の当らない外縁のより外側部分との間に段差が生じる。曲線顎Iの段階は外縁上面をヘラケズリしてこれを調整するが、曲線顎IIになって以降、笵を打込んだまま段差をそのまま残すものが多くなる。

A(40点)　唐草の各単位が長く、主葉とふたつの支葉が界線近くから基部を近接させて派生し、次第に離れ太さを増す。顎の形態は多様で、直線顎(1)と曲線顎I(2)が主体を占め、顎面をもつ曲線顎IIがわずかにある(3)。こうした顎の変化は、おおむねこの順で変化したと考えられるが、笵傷は顕著

でなく、笵傷進行による確かな年代の推移から裏付けられる訳ではない。木目が浮いた笵型の傷んだ段階の資料に、曲線顎Ⅱの例があることは確かである。多くは縦縄タタキで(2)、一部に横縄タタキがある(1)。凸面は瓦当寄りをヨコナデするものが大半で、直線顎や曲線顎Ⅰの資料もタテケズリしない。凹面はヨコナデにより布目を消す。側面に凹面から続く布目が残るものがあり、凸形台で成形した一枚作りであるとわかる。

B(13点)　BはAに酷似するが、唐草がやや横長で、第2・3単位間に左右各1個の珠点を入れる。顎幅の短い段顎が2点(1)と、曲線顎Ⅰの資料(2)がある。木目の浮いた笵型の傷んだものに曲線顎Ⅱの例がある。凸面の叩きは多くが縦縄タタキで、一部に横縄タタキがある

C(27点)　平城宮第二次大極殿や、第二次朝堂院を礎石建ちに改修した際に、統一的に葺かれた軒平瓦である。6225CないしAと組み合う。左2単位の第1支葉の彫り直しによってCaとCbに区別する。出土資料ではCaが1点で曲線顎Ⅰ、これ以外はCbで曲線顎Ⅱである。凸面の叩きは大半が縦縄タタキで、1点のみ曲線顎Ⅱに横縄タタキの例がある(2)。

D(3点)　A～Cに比べて、文様構成の原則が崩れ、唐草文自体も太く稚拙になる。外縁は削りこんで幅は狭い。曲線顎Ⅱである。瓦当右側に横方向の亀裂の入る資料があり、同笵例にはここで完全に笵割れを起こしたものがある。凹面は瓦当沿いをヨコケズリするのみである。

E(1点)　唐草の左右の連続性がやや失われ、各単位とも上下の界線から唐草文が派生する。しかし、まだ主葉と支葉が界線付近では近接しており、そこから開いて展開する。曲線顎Ⅱ。砂粒を多く含み、焼成甘く灰白色である。同笵例が押熊瓦窯から出土している。

F(23点)　以下の6663は、唐草の左右の連続性がさらに失われ、Eより各単位が独立した傾向を増す。主葉と支葉の基部も分離傾向にある。唐草文の末端は脇区に接することなく反転して終る。F種の中心飾りは、2本の基部が平行せず上に開く点や、端部の三つ又の張り出しが三角形状である点などが特徴的である。曲線顎Ⅱ。顎面の幅は1.0～2.0cmで、多くは1.5cm前後である。凸面は縦縄タタキ、凹面は横ないし斜めにヘラケズリし、瓦当寄り約半分について布目を消す。焼き甘く灰白色である。

H(4点)　薬師寺所用の軒平瓦。顎面の幅が2.0cm前後と広い曲線顎Ⅱで(1)、1点が顎幅2cmあまりの短い段顎である(2)。凸面は縦縄タタキ、凹面はヘラケズリにより布目を消す。焼き甘く灰白色。

J(5点)　2～3cmと幅広い顎面をもつ曲線顎Ⅱである。凸面は縦縄タタキ、顎部はヨコナデ調整する。焼き甘く灰白色である。

6664型式(Pl.63・64, Ph.140・142)　花頭形の中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文軒平瓦で、唐草各単位は界線に接することなく派生し、第3単位の主葉が脇区界線に取りつくもの。A～D・F～Pの15種があり、9種が

6663A

6663B

6663Ca

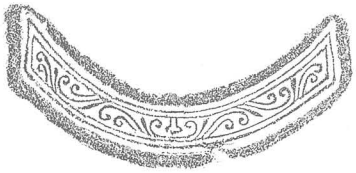
6663Cb

6663D

6663E

6663F

6663H


6663J

出土した。花頭形の中心飾りの上端は、界線に接することなく左右に開くものから、やがてD・Fになると、２本の平行線となり界線に取りつく。笵型は周囲を２段に彫り下げる。笵を打込んだのち、外縁上面はヘラケズリ調整されるが、文様面に近い１段目の段差は必ず残る。すべて段顎である。

B(３点)　第３単位の第１支葉も脇区界線に接する。外区隅部は上下とも界線で区画する。顎幅７cm前後。顎面は横にヘラケズリののちナデを施す。灰色で、やや軟質に焼き上がっている。胎土に黒い小粒を多く含む。

C(11点)　中心飾りの基部は細く、珠文は大振りである。中心飾りの左側に縦方向の笵傷が発生している。顎幅はおおむね７cm前後にまとまり、６cmのものが１点ある。凸面は横縄タタキ。図示したものは顎端面の切込みが明瞭である。凹面はヘラケズリして布目を消す。硬質のものもあるが、大部分は軟質で、内部が灰白色で表面が灰黒色になった燻し焼き。

D(33点)　Fとともに多量に出土しており、軒丸瓦6311A・Bと組む。D・Fは文様も類似し、唐草文や界線なども太く、彫りも深い。花頭形の中心飾りは界線にとりつく。顎幅は5.0cm前後のものが多く(４)、5.5～6.0cmほどのやや幅広いものが数点ある(３)。顎の切り込みが明瞭なものもある(２)。凸面は縦縄タタキである。凹面は横ないし斜めにヘラケズリし布目を消す。側面調整にイタナデするものがある(３)。粘土の接合痕からみると、平瓦部の粘土板を瓦当部分で肥厚させ、その上に顎部の粘土板を加えたものや、逆に平瓦部の粘土板を瓦当付近で薄くしておいて、断面三角形状の顎部の粘土を加えたものがある。ほとんどが軟質で、燻し焼きである。

F(56点)　Dより珠文がやや密である。顎幅はDより長く、6.0～7.0cmのものが多い。凸面の叩きは横(２)と縦(１)が相半ばし、それぞれ縄目の密度が密なものと粗なものがある。凹面はヨコケズリし平瓦部の半ばまで布目を消す。基本的に顎部は粘土板を貼りつけ、顎端面に切り込みを入れて削り出す(４)。

Ga(４点)　顎幅は6.0cmの長いものと、４cmの短いものがある。凸面は縦縄タタキである。顎面の切り込みが明瞭なものがある(３)。

H(５点)　顎幅は6.0～7.0cm。凸面は縄目の細かい横縄タタキである。凹面は瓦当寄りをヨコケズリで仕上げたのち、縦方向のケズリで布目を消す。焼きはやや甘く、内部が灰白色で表面が黒灰色の燻し焼き風である。

I(４点)　顎幅6.0cm前後。凸面は横縄タタキ。焼き甘く燻し焼き風である。

K(１点)　中心飾りはCに似て細いが、全体にやや大型である。中心飾りの軸部に横方向の笵傷が生じているのがわかる。

N(16点)　小型の軒平瓦である。顎幅は5.0cmでほぼ一定している。焼きはおおむね良好で、燻し焼き風に黒く焼き上がる。顎端部に切込みを入れたのち、平瓦部からの削り出しで段顎を成形する。凸面は横縄タタキである。凹面はヨコケズリして布目を消す。側面はイタナデのあとナデ調整する。

6665型式(Pl.64, Ph.142)　6664型式と同じ花頭形の中心飾りをもつ３回反転の

6664B

6664C

6664D

6664F

6664Ga

6664H

6664I

6664K

6664N

均整唐草文軒平瓦で、第３単位は反転して脇区には取りつかないもの。Ａ～Ｃの３種があり、Ｂが出土した。段顎である。

B（１点）　唐草文の横の連続は失われ、各単位が界線から派生し、独立している。外区の珠文は高く、中心に工具の芯である小さな突起をもつ。左上外区の珠文を見ると、各珠文の脇に彫り込みかけた珠文の痕跡が残る。珠文の割り付けが変更されたのであろう。笵型を彫る際には、あらかじめ錐の当りをつけ全体を割り付けた上で、それから本格的に彫りこんだことが考えられる。左下外区についても、同笵例で同じ痕跡が認められ、左側の上・下外区に変更が生じたようである。笵型の周囲に段差は認められず、そのまま打込んだものらしい。段顎で、凹面に枠板痕を残し、桶巻き作りと考えられる。顎幅は5.5cm、凸面は縦縄タタキである。顎端面の切込みは観察できないが、顎部寄りの平瓦部をタテケズリするので、おそらく削り出した段顎であろう。凹面は瓦当寄りをヨコケズリするだけで布目が残る。焼成硬緻で、暗灰色に焼き上がっている。砂粒を多く含む胎土である。

6665B

6666型式（Pl.64，Ph.142）　6664型式より小型で、唐草文の基部が界線に取りつくもの。しかし、まだ唐草文の基部は細く、界線に接する程度である。6664Ｄ・Ｆの唐草文に後続し、主葉と支葉の基部がやや離れて直線的になったものといえる。Ａ１種のみ。

A（9点）　唐草文や界線は太い。笵型は周囲２段落とし。顎幅4.0～4.5cmの段顎で、多くは4.0cm程度である。平城宮出土の同笵例では、6.0cmほどの顎幅の大きいものがある。凸面は縦縄タタキ。顎幅の大きい同笵例が、おおむね焼成良好であるのに対して、出土例は焼き甘く軟質である。

6666A

6667型式（Pl.64，Ph.142）　花頭形の中心飾りをもつ４回反転の均整唐草文軒平瓦である。Ａ～Ｃの３種があり、互いに酷似するＡ・Ｃ２種が出土した。

A（23点）　法華寺から多量に出土し、藤原不比等および娘光明子が伝領した邸宅所用の軒平瓦で、軒丸瓦6285Ａと組む。出土した資料はいずれも段顎で、曲線顎はない。顎幅は8.0cm～5.0cmあり、長いものから短いものへ変化することが判明している。顎幅約８cmのものは１点で（１）、凹面をナデ消していて不明ながら、桶巻作りであろう。凸面縦縄タタキで青灰色硬質である。ついで顎幅６～７cmほどの一群と、顎幅５cm前後のもの（２）が相半ばする。ともに縦縄タタキだが、短い一群は縄目がより細かい。いずれも一本作りであろう。凹面の調整も、笵型の打込み後に瓦当沿いをヨコケズリするのみで、布目を残すようになる。これらの中には、笵を打込む前に瓦当面を縄タタキで調整し、外縁頂部にタタキ目が残るものがある。笵型の傷みが進行し、木目がかなり浮いている。なお、顎幅５cm前後の一群の中には、胎土がかなり精良で灰白色硬質のものが一定量ある。

6667A

C（６点）　Ａと酷似し、珠文の配置まで一致するので、作笵に使用した下絵が共通すると考えられる。Ａに比べて、全体に唐草文の彫りが深く、基部

6667C

が直線的で、巻きこみは大きい。細部では多くの点で相違するが、いくつか特徴を挙げると、中心飾りの花頭形の先端、屈曲部の内側にバリ状のはみだしがあること、中心葉の巻きこみが大きいこと、右第２単位の第１支葉の基部が主葉寄りであることなどがある。顎幅は7.0～8.0cmと幅広く一定している。すべて木目が浮き出しており、笵型が使い込まれてからの製品であることを示す。凹面には瓦当寄りのヨコケズリ以外は布目が残るが、枠板痕は認められず一枚作りと考えられる。凸面は縦縄タタキである。焼きは良好で、灰色から青灰色に焼き上がる。大粒の白い長石粒を含む点で、胎土はＡと共通する。奈良市古市廃寺で同笵品が出土している[1]。

6668型式(Pl.64, Ph.142)　6664型式と同じ文様構成で、花頭型の中心飾りの先端がやや扁平なことで区別する。Ａ・Ｂ２種あり、Ａが出土した。

6668A

Ａ(５点)　顎幅6.0～7.0cmの段顎である。笵型は周囲２段落とし。左第１単位の部分が縦に笵割れを起こしているものが１点ある(２)。京都府木津町の瀬後谷瓦窯では6668Ａ型式が焼かれ、笵割れを起こす前後の資料が出土しており[2]、この破片については瀬後谷瓦窯産とみられる。瀬後谷瓦窯の6668Ａは粘土紐桶巻作りである。笵型が割れたのち、何らかの充塡材を使って接合したらしく、笵面が幅３mmほど分離している。

6671型式(Pl.65, Ph.142)　いわゆる興福寺式軒平瓦で、菱形の珠文を下向きの中心葉が囲んだ中心飾りをもつ３回反転の唐草文軒平瓦である。第３単位は反転して終り、脇区界線につかない。上外区と脇区に杏仁形の珠文を、下外区には線鋸歯文を配する。外区は内区より一段高い。Ａ～Ｅ・Ｉ～Ｋの８種があり、Ｅ・Ｉ・Ｋの３種が出土した。

6671E

E(１点)　顎幅４cmの段顎で、瓦当部に木目が浮き、笵形が使い込まれた段階の製品である。焼成良好で青灰色である。胎土に砂粒をかなり含む。

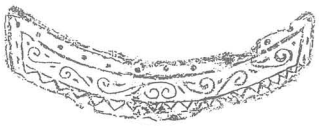
6671Ia

Ia(８点)　6671型式の中では小型である。上外区の珠文は円形となる。下外区の線鋸歯文は、左側が大きく、右端では単位が細かく密になる。彫り直しによってＩａとＩｂに分ける。Ｉａは興福寺式の特徴である外区が一段高いもの。平城京東市周辺出土の同笵例には、幅4.0cmほどの段顎の資料があるが(４)、今回出土したのは、すべて凸面をタテケズリした直線顎である。笵型押捺後の仕上げも、東市例が界線に沿って丁寧に切り落とすのに対して、界線外側に平坦面を残すものが多い。焼きやや甘く軟質で、燻し焼き風である。粘土の剝離痕からみると、瓦当付近では３枚の層状の粘土が重ねられ、それぞれ上外・内・下外区におおむね相当し、外区片と内区片に分離したものが目立つ(２・３)。

Ib(１点)　内・外区で段差があったＩａの笵型を、内区面も外区と同じ面まで彫り下げて、改めて唐草文を彫り直す。Ｉａの流麗さを失い、全体に太い硬

1）奈良市教委「古市廃寺の調査」『平成元年度奈良市埋文報』1990, pp.55～58
2）京都府埋蔵文化財調査研究センター「木津地区所在遺跡平成３年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第51冊－３, 1992, pp.71～88

直した唐草文となる。Ｉａと同じく、タテケズリで直線顎とする。瀬後谷瓦窯からＩａとＩｂがともに出土しており、やはり直線顎で、胎土も同じであることから、瀬後谷瓦窯産とみて間違いない。


6671Ib

K（１点）　興福寺式6671型式の多くは、外区外側の界線まで余分な粘土を切り落とし外縁をもたないが、Ｄ種とＫ種は大振りな外縁をもつ。下と脇の外縁は三角縁、上外縁は直立縁である。三角縁の斜面は平滑で、調整して作り出したものでなく、笵型の形状を反映していると思われる。外縁をもつ点は法隆寺出土の同笵品[1]と共通するが、梅谷瓦窯出土の同笵品は界線まで切り落としており、笵傷からは後者が先行する[2]。凹面の布目は細かく、顎面の幅2.5cmほどの大振りな曲線顎Ⅱである。平瓦部凸面はタテケズリして、タタキ目は残らない。焼成良好で黄白色である。

6671K

6675型式（Pl.65，Ph.142）　「个」字形の中心飾りを上向きの中心葉で囲み、左右に連続する４回反転の唐草文をもつ軒平瓦である。上外区に珠文、脇区と下外区に線鋸歯文を入れる。Ａ１種のみ。

A（２点）　顎幅5.5～6.0cmの段顎である。焼成は２点で異なり、硬質で表面が黒灰色のもの（２）と、焼き悪く黄白色軟質（１）の２者がある。

6675A

6681型式（Pl.65，Ph.144）　6663型式と同じく、外区に珠文帯なく２重の界線がめぐる３回反転の均整唐草文軒平瓦である。単線と珠粒からなる中心飾りをもち、やや小型であることが異なる。唐草第３単位の主葉は脇区界線につく。Ａ～Ｇ・Ｓの８種があり、Ａ～Ｅの５種が出土した。

A（９点）　外縁はケズリとナデによって丁寧に仕上げ、笵型の加工痕跡は残らない。凸面は瓦当にむかって緩やかな曲率で厚みを増し、タテナデののち顎部をヨコナデし、瓦当沿いに幅１cmの顎面をもうける。平城宮出土の同笵例では横縄タタキ。凹面はヨコナデで布目を消す。きわめて丁寧な作り。

6681A

B（８点）　笵型は周囲２段落とし。凸型台での成形にあたって、まず台のもっとも低くなった部分に、瓦当脇部にあたる粘土をおき、上面を窪ませたのち、瓦当中央部の粘土をのせた例がある（３）。曲率の緩い曲線顎である。顎面の幅はおおむね１cm程度。凸面は縦のケズリないしナデ調整で、顎部分にはヨコナデを加える。瓦当から10cm弱の位置に朱線の残る例がある。側面を糸切りするものがある。平城宮出土の同笵例では縦縄タタキである。

6681B

C（９点）　諸特徴はＢに同じ。平城宮出土の同笵例では横縄タタキである。

6681C

D（１点）　6681型式の中では大型である。唐草第３単位の第２支葉は反転する。笵型は周囲１段落とし。直線顎である。焼成甘く黄灰色を呈する。

E（３点）　笵型は周囲２段落とし。２重の界線は太い。凸面は横縄タタキで、顎部をタテケズリで曲線顎Ｉとし、瓦当沿いをヨコナデして仕上げる。瓦当か

6681D

1）法隆寺232K。毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩『法隆寺の至宝－昭和資財帳－第15巻 瓦』小学館、1992

2）1993～94年に京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査。石井清司氏ほかの御厚意により比較検討する機会をえた。

6681E

ら9cmほどの位置に朱線の残るものがある。凹面はケズリとナデにより布目を消す。焼成よく暗灰色を呈する。

6682型式(Pl.66, Ph.144)　6663型式に対する6681型式の関係と同様に、6664型式と文様構成は等しく、中心飾りが単線と珠粒で構成される点で異なる。唐草第3単位の主葉は脇区界線につく。A～Fの5種があり、A～C・Fの4種が出土した。いずれも笵型は周囲を2段に落とす。

6682A

A(16点)　段顎(1)と直線顎ないし曲線顎の例がある(2)。いずれも縦縄タタキで、凹面はケズリないしナデにより布目を消す。段顎には、顎幅6.5cm前後の須恵質硬質のものと、顎幅5.0cm前後で焼きの甘い燻し焼きの2者がある。顎幅の広いものの中に、瓦当から10～12cmの位置に朱線が残るものがある。平瓦部に粘土板2枚が重なる痕跡をもつもの(1)、瓦当部に粘土塊を何度かにわたって入れ、その調整にハケメを用いたもの(2)がある。直線顎風のものは、凸面をタテケズリし、幅0.5cmのわずかな顎面をもうける。焼成よく灰色硬質である。曲線顎風のものは、木目がかなり浮き、珠文部分に笵傷が多く発生している。凸面はタテケズリののちヨコナデ調整する。0.7cmほどの顎面をもつ。直線顎のものとともに、縦縄タタキは顎の成形後である。

6682B

B(2点)　顎幅6.5～7.0cmの段顎。凸面は横縄タタキである。凹面はタテナデ調整し布目を消す。焼きおおむねよく、燻し焼き風である。

C(5点)　外区の珠文頂部には小突起が明瞭に残る。顎幅7.5～9.0cmの段顎である。顎の成形は、平瓦部を整えてから顎部に粘土板を貼りつけているもの(2)や、初めから瓦当部分に厚く粘土をおいたものがある。顎部の成形後に笵を打込む。凹面タテケズリで布目消す。側面はタテケズリないしイタナデ(1)。焼成すこぶる良く、青灰色に焼き上がったものが多い。

6682C

F(2点)　顎幅5.5cm前後の段顎である。枠板痕あり、顎部には粘土板を貼りつけている。図示したものは、成形した瓦当予定部分のかなり下の位置に笵が打込まれ、凹面側を大きくヨコケズリするが、それでも外縁が幅広く残る。凸面横縄タタキで、朱がわずかに残る。燻し焼き。

6682F

6685型式(Pl.66, Ph.146)　6682型式と文様構成は等しく、同じ中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文軒平瓦である。6682型式と異なるのは、唐草第3単位の子葉も脇区界線に取りつくこと、小型の軒平瓦である点である。A～Fの6種があり、A～Cの3種が出土した。

A(55点)　ほとんどが段顎で(1)、3点のみが曲線顎である(3)。段顎には縦縄タタキ(5)と横縄タタキ(4)があり、横縄タタキがやや多い。縄目の密度は、横縄の方が粗い。縦縄のものは顎幅4.5～5.0cmで、焼成おおむねよく、横縄のものは顎幅4.0cm未満とやや短く、焼成の甘いものが多い。曲線顎はタテケズリで顎部を成形する。タタキ目の方向は不明。木目のかなり浮いた資料がある一方(3)、木目がほとんどみえないものもある。また、縦縄タタキの段顎の資料の中にも木目の顕著なものがあり、顎の2形態は共存していたと考えられ

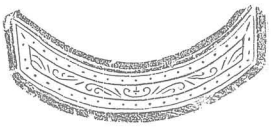
6685A

る。いずれも凹面は調整により布目を消す。

B(3点)　とくに小型の軒平瓦である。顎幅3.5cmほどの段顎をもつ。焼成甘く、調整等は確かめられない。灰白色で燻し焼き。

C(4点)　直線顎と曲線顎Ⅰ(1)がある。ともに凹面は調整して布目を消す。直線顎の例には、外縁の幅が狭いもの(2)と、周縁の幅が瓦当部に対して著しく広いもの(3)がある。必要とされた軒平瓦の大きさに対して、やや小さい笵型を使わざるをえず、外縁を幅広くとって対応したように思われる。曲線顎のものは縦縄タタキで、側面をイタナデして調整する。

6685B


6685C

6688型式(Pl.67, Ph.146)　3回反転の均整唐草文。6682や6685型式よりも唐草文の左右の連続性が失われ、また各単位とも主葉と支葉の基部が分離し界線に接する。右第1単位が上外区界線から派生する変形が生じている。脇区の外側の界線が2重である点も特徴的である。A・B2種がともに出土した。

A(26点)　中心飾りは逆T字形である。笵型は周囲1段落とし。当初は細い唐草文を太くし、珠文や界線も深く彫り直す。これによってAaとAbに分けている。Aaが1点、それ以外はAbである。Aaの顎形態は不明。Abでは段顎が3点で、残りが直線顎である。Abの段顎は顎幅7.0～8.5cmと長い。直線顎の資料には2群ある。一方は、上外区の外縁をもたず外側の界線より外を切り落とすもので、瓦当厚が薄く、布目は細かい(2)。この特徴は平城宮出土のAaの同笵例にも認められる。段顎のAb3点のうち、1ないし2点はこの一群である。他方は一定の幅の外縁を上下ともにもつ(1)。いずれも、凸面はタテケズリして直線顎とし、格子のタタキ目は残らない。瓦当から8.5cmの位置に朱線の遺存するものある。黒色の燻し焼きである。

6688Aa

6688Ab

B(2点)　Aより外区の幅が大きく、全体に瓦当がより厚い。2点のうちの1点は、平城宮出土の同笵例よりも珠文や唐草が細く、これは笵型への粘土の入り方が不十分であったものではない(1)。A種と同じように、途中で笵型の彫り直しがあったらしい。顎幅6cmの段顎である。他の1点は顎幅7cmの段顎で、顎面に格子タタキが残る(2)。タタキ目の格子の大きさは、平城宮出土の同笵例と等しい。なお、平城宮出土のA種の格子叩をみると、Bに比べてやや大きい。凹面はともに調整して布目は残らない。

6688B

6689型式(Pl.67, Ph.146)　6664型式と同じ文様構成で、中心飾りが単線の三葉文で左右に大きく開くもの。A～Cの3種あり、Aが出土した。

A(4点)　中心飾りの上端の彫り直しによりAaとAbにわけるが、出土資料に中心部の残るものはなく、細別は不明である。笵型は周囲を2段に落とす。顎幅5.5～6.5cmの段顎である。凸面は縦方向の縄タタキ、凹面はヨコケズリで布目を消す。側面はイタナデ調整している。

6689A

6691型式(Pl.67, Ph.146・148)　6667型式の文様を受け継ぐ4回反転の均整唐草文軒平瓦である。中心飾りの花頭形の軸部が一本化している。A～D・Fの5種があり、A・B・Fの3種が出土した。笵型は周囲1段落とし。

6691A

A(62点)　すべて曲線顎IIで、恭仁遷都以降のものである[1]。顎面の幅は1cm強から2cm、多くは1.5cm前後である。1点のみ横縄タタキがある(2)以外は縦縄タタキである。斜めのタタキを加えたものはない。曲線顎の形状は、平瓦部が厚手であることもあり、直線顎風に徐々に厚みを増したのち、顎部近くで円弧を描き顎面にいたる形態である。成形には2通りがある。あらかじめ仕上りの曲線顎に近いように粘土を加え、これをヨコナデで整えるものと、厚く粘土を加えておいて、顎面を残してタテケズリして顎部を作るものである。唯一の横縄タタキは、縦縄タタキに重複させた補足的なものではない。凹面は、残存する範囲においては調整して布目がほとんど残らない。おおむね焼成よく堅緻なものが多い。

6691B

B(4点)　曲線顎IIであるが、顎面は瓦当に直交せず、かなり鈍角で、正面から大きく顎面がみえる。顎部の曲率は緩やかな円弧を描く。瓦当脇の切り落としが脇区界線とは平行せず、外縁が下に広がる三角形となる。凸面の叩き目がわかるものでは、縦と横が1点ずつ認められる(1・3)。

6691F

F(7点)　新出資料。中心飾りの基部は上に長く伸びず、先端の三葉は大きく広がる。顎面の幅1.5cm前後の曲線顎IIで、形態はA種と共通する。顎部の成形には2通りある。平瓦部の粘土板に顎部を貼りつけるもの(3)と、平瓦部の粘土を瓦当近くで薄くし、その上に断面三角形の粘土を加えて顎部とするものである(1・4)。縦縄タタキである。

6694型式(Pl.67, Ph.148)　5葉形の中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文軒平瓦である。A1種のみ。

6694A

A(10点)　唐草文は界線から派生し、末端が玉状にふくらむ。笵型は周囲2段落とし。顎幅6.0cm前後の段顎である。凸面の縄タタキには縦と横がある。焼成甘く、灰白色で表面黒灰色の燻し焼きのものが多い。

6700型式(Pl.68, Ph.148)　新出資料。χ字状の中心飾りをもつ、3回反転の均整唐草文軒平瓦である。A1種のみ。

6700A

A(7点)　笵型は周囲1段落とし。段顎(1)と特殊な曲線顎(2)がある。段顎の顎幅は7.0〜7.5cmを測る。凹面に枠板痕が残り、布の綴じ合わせが認められる。粘土接合痕は明瞭で、2ヶ所で瓦当と平行に割れており、幅の広い粘土紐による桶巻作りである。瀬後谷瓦窯で出土した同笵例でも、粘土紐桶巻作りであることが判明している[2]。凸面は縦縄タタキのあと、顎部近くはヨコケズリし叩き目を消す。凸面と側面の稜を丸く仕上げる特徴があり、顎部で顕著である。曲線顎の1例は、平瓦部が薄手で、瓦当付近だけにわずかな粘土を加え曲線顎とし、斜めの縄タタキを交差させ重複して行なう。瓦当の厚みは笵型におよばず、下外区以下の文様は途切れている。このタタキによる顎の形状は、6641Pの段顎に近い。黒い燻し焼きである。

---

1) 佐川正敏「考察 屋瓦」『平城宮報告XIV』1993, pp.96〜107　　2) p.188註2) 文献

6702型式(Pl.68, Ph.148)　単線ないし先端がわずかにT字状になった軸線を中心飾りとする、3回ないし4回反転する均整唐草文軒平瓦である。唐草文の横への連続性が形骸化し、各単位が分離する。内区を画する界線が1重にめぐるのみで、外区がない。A～Iの9種のあり、Aが出土した。

A(4点)　中心飾りは太い軸状。顎面の幅2.0cm前後の曲線顎IIである。凸面は縦縄タタキ。焼成甘く灰白色で、燻し焼き風である。

6702A

6704型式(Pl.68, Ph.148)　「中」字に似た、下ふくらみの円に縦軸を通した文様を中心飾りとする、4回反転の均整唐草文である。A1種のみ。

A(2点)　主葉と支葉の別が不分明となり、本数も配列も不規則で、末端が玉状である。笵型は周囲1段落とし。顎面の幅の大きい曲線顎IIである。焼き甘く黄灰色。平城宮東院南門で、6133Dと組み合せて使用された[1)]。

6704A

6710型式(Pl.68, Ph.148)　逆V字の中心飾りをもつ3回反転の均整唐草文軒平瓦である。A・C・Dの3種あり、A・Cが出土した。

A(1点)　小破片で磨耗が著しい。直線顎である。黄白色で燻し焼き風。

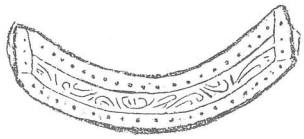
6710A

C(9点)　主葉の反転部をはじめ唐草が全体に太い。笵傷が各所に現われている。笵型は周囲1段落とし。図示したものは、瓦当面に平行する横方向の細凹線が走るが、木目が浮いたものではなく、糸切り痕あるいはタタキ目でもないようで、イタナデによるハケメではないかと思われる。凸面はタテケズリして直線顎に作るが、瓦当部との厚みの差が大きく、緩やかな曲線顎風である。凸面の瓦当寄りに凹型台の圧痕ではないかと思われる窪みが残るものがある。凹面は瓦当から10数cmの範囲をヨコケズリする。硬質黒灰色のものが1点ある以外は、焼きが甘い。A・Cとも、側縁平面が瓦当にむかってラッパ状に開く点が大きな特徴である。

6710C

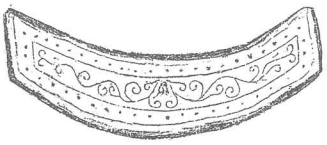
6711型式(Pl.69, Ph.150)　2本の縦線を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦である。A・B2種があり、Aが出土した。

A(2点)　彫り直しによってAaとAbを区別するが、なお検討が必要である。笵端痕跡風の当りが外縁の外に残っており、6721型式のように、笵型に外縁を彫りこんだ可能性がある。凸面をタテケズリする直線顎である。


6711A

6714型式(Pl.69, Ph.150)　上下逆にすると牛頭のようにみえる図像を中心飾りとする、5回反転の均整唐草文である。A1種のみ。

A(1点)　6138Bと組む法華寺阿弥陀浄土院所用の瓦で、音如ケ谷瓦窯の製品である。顎面の大きい曲線顎II。砂粒を多く含み、硬質に焼き上がる。


6714A

6716型式(Pl.69, Ph.150)　支葉が左右に反転する均整唐草文軒平瓦である。外区の珠文は杏仁形。A～Fの6種あり、Aが出土した。

A(1点)　顎面の幅1.3cmの曲線顎II。焼成よく暗灰色を呈する。

6716A

6719型式(Pl.69, Ph.150)　三葉文を上向きの中心葉で囲み、左右に5回反転す

1）奈文研『1993年度平城概報』p.38

る均整唐草文軒平瓦である。6721型式の先行型式。Ａ１種のみ。

A（８点）　外区珠文なく、２重に界線がめぐる。外側の界線がやや太い。とくに瓦当を厚くせず、平瓦部と同じか、わずかに厚くする程度の直線顎である。凸面の縦縄タタキは瓦当部近くまで及び、とくに調整を加えず、笵型を打込んだあと瓦当沿いをヨコケズリするのみ。凹面も瓦当沿いをヨコケズリするだけで、細かい布目が残っている。溝状の布端が残るものがあり、１枚作りであることを示す。胎土に多量の砂粒を含む。同じ胎土ながら、硬質青灰色のものと、焼き甘く摩滅著しいものがある。

6719A

6721型式（Pl.69・70，Ph.150・152）　6719Ａ型式に後続する５回反転の均整唐草文軒平瓦である。6719Ａと異なり、上・下外区に珠文を密にめぐらす。笵型による一定の幅の低い外縁を作り出し、外側に笵端痕跡をよく留めている。凸面の縄叩きはいずれも斜めである。Ａ・Ｃ～Ｋの10種あり、８種が出土した。

A（８点）　中心飾りの三葉文の両脇が水平で唐草文末端の巻きこみは弱い。脇区界線と外縁の間は２～３mmと狭い。外縁は幅５～６mmで、笵端は縁頂部から３mm外。曲線顎Ⅱで、顎面の幅は縁頂部から１cm前後である。一枚作りで、凸面は顎面をヨコケズリし、それより後方は瓦当部から十数cmにわたってタテケズリで曲線をつくる。凹面はヘラケズリ調整して布目をある程度消す。焼成は２点が硬質で、多くは焼きが甘い。

6721A

C（43点）　中心飾りの三葉文の両脇は逆ハの字に上がる。脇区界線と外縁の間は４mmの無文部があり、外縁は幅１cmと厚い。笵端は縁頂部から３mm外。曲線顎Ⅱで、顎面の幅は１cm弱のやや狭いものがわずかにあるが、大部分は１cm前後である。凸面は斜タタキで顎部はタテケズリにより成形する。すべて焼成甘く灰白色を呈する。

6721C

D（13点）　中心飾りの三葉文の両脇は太く、やや上がり気味である。唐草文も太い。唐草文自体は手を加えず、界線を太くし、珠文を横長の楕円に近い形状にする彫り直しがあるらしい。外縁の幅は９mmで、笵端は縁頂部から３mm外に認められる。すべて曲線顎Ⅱで、顎面の幅は1.1～2.0cmを測る。斜めタタキで、顎部はタテケズリにより成形する。珠線の残るもの２点あり、瓦当面から水平距離で７～８cmの位置である。

6721D

Fa（３点）　中心飾りの三葉文の両脇は水平に開く。脇区界線と外縁間の無文部は５mmと広い。外縁は幅７mmほどである。界線と珠文を掘り直したFbは出土していない。いずれも曲線顎Ⅱで、顎面の幅1.5cm前後。凸面は斜めタタキののち、曲線顎を成形し、最終的にタテナデ調整する。凹面は瓦当沿いからある程度までヨコケズリで布目を消している。

6721Fa

Ga（60点）　中心飾りの三葉文の両脇は水平に開く。唐草文は細く繊細で、基部が細い。外区は二重の界線の間に珠文を充塡し、ほかの6721諸種と異なり、幅のある笵型による外縁をもたない。外側の界線から３mmほどの無文部までが笵型であるらしい。完形資料があり、凸面は斜めのタタキのあと、

瓦当部から狭端部にむけて全長の2/3ほどをタテケズリし、直線顎に仕上げる。また、狭端部も幅5cmあまりのヨコナデを施す。凹面側は、瓦当部沿いを幅5cm前後ヨコケズリ、狭端部もわずかだが面取りし、側縁も幅3cmほど浅くタテケズリする。

6721Ga

Gb(21点)　外側の界線より外を1段低く彫り落として外縁をつくる。ただし、外縁部の外に笵型が立上がるとみるには、笵端痕跡は確かな例がなく、またGaから考えられる笵端の位置を考えると、溝状の外縁を彫りこむ空間はない。笵型の周囲を段にして落としている形状が考えられる。Gaと同じ直線顎が大部分であり、2点のみ曲線顎Ⅱである。

6721Gb

Ha(2点)　脇区にも珠文を配する点は他の6721諸種と異なる。外縁は幅4mm、笵端は縁頂部から2mm外である。凸面はタテケズリ仕上げの直線顎で、凹面は瓦当側の1/2をヨコケズリし、布目を消している。

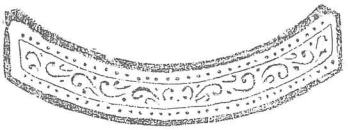
6721Ha

Hb(4点)　上外区と脇区の境になる隅部には、当初は珠文がなかったが、ここに珠文を彫り加えたもの。唐草文と外縁については笵型に手を加えていない。これまで珠文の追加と唐草文の彫り直しは同時とみて、HaとHbに分けていたが、彫り直しに段階差があることが確認され、三つの段階に区分する。脇部分が遺存し、確実にこの段階と認定できる資料は少ない。タテケズリによる直線顎ないし曲線顎Ⅰである。

Hc(20点)　中心飾りを含め、全体に唐草文の基部を細くのばす彫り直しを行い、外縁も幅7～8mmに彫り広げる。Hbまでの外縁と彫り広げ部分との間には、わずかなバリ状の痕跡が認められる。Hbまでと異なって曲線顎Ⅱとなる。縁頂部から幅1.5cm前後の顎面をもつ。凸面は丁寧にタテケズリして顎部を成形し、凹面はヨコケズリで布目を消す。

6721Hc

Ⅰ(13点)　6721型式の諸種は、文様構成や表現がかなり画一的であるが、その中にあって、このⅠのみは原則からかなり退化している。中心飾りとともに、各単位の第2子葉の多くは珠点になる。外縁の幅は6mm程度。曲線顎Ⅱで、顎面の幅は2.0～2.5cmと広くなる。焼成不良で灰白色を呈する。


6721Ⅰ

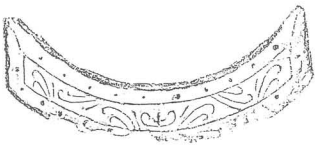
6723型式(Pl.70, Ph.152)　6721Ⅰが退化し、中心飾りや唐草文がさらに乱れたもの。脇区にも珠文をもつ。A1種のみ。

A(3点)　唐草文と珠文はともに太く、彫りも深い。凸面タテケズリによる直線顎である。焼き甘く灰白色である。

6723A

6727型式(Pl.70, Ph.154)　縦線と小粒による三葉文を中心飾りとする3回反転の均整唐草文軒平瓦である。A・B2種あり、Bが出土した。

B(3点)　唐草各単位は独立し、界線から派生する。径が小さく高い珠文を、間隔をあけて配する。同笵例には、右側に横方向の笵割れを起こすものがあるが、出土したものはそれ以前の資料である。笵型は周囲1段落とし。顎幅6.5cmの段顎である。顎端面の切り込みが明瞭に残る。


6727B

6732型式(Pl.71, Ph.154)　軒丸瓦6235型式と組む、いわゆる東大寺式の軒平

瓦。中心飾りは、三葉文を唐草文が左右から包み、その上に松葉状の文様が向き合う。唐草文は３回反転で、多くの支葉をともなう。最終単位は反転し脇区につかない。珠文は大振り。Ａ・Ｃ～Ｚの25種がある。大部分は東大寺と西大寺の所用瓦で、平城宮所用瓦に当てられたのはＡ・Ｃ・Ｌ・Ｏの４種である。平城宮系のＡ・Ｃおよび東大寺系のＦの３種が出土した。これ以外に種の特定できない小片２片がある。

A(18点)　笵型は周囲１段落とし。顎面の幅2.0～2.5cmの曲線顎IIである。平瓦部は厚く、瓦当にむかって直線的に厚みを増したのち、瓦当近くで曲線を描き顎面にいたる。顎部はヨコナデで仕上げる。凸面の叩きは縦縄タタキで、１点のみ横縄タタキがある。凹面は瓦当沿いをヨコケズリするだけで布目が残る。燻し焼き風である。

6732A

C(５点)　Ａに比べて唐草文末端の巻きが弱く、珠文はより小さい。外縁の幅もＡより狭い。顎面の幅1.5～2.0cmの曲線顎IIである。平瓦部の厚みもＡより薄く、瓦当近くでＡよりも長い円弧を描いて顎面にいたる。凸面の叩きがわかる１点では、縦縄タタキのあと横縄タタキを加えている。凹面は残存する瓦当から10cmの範囲はヘラケズリで布目を消す。

6732C

F(２点)　顎面の幅2.0cmほどの曲線顎II。焼き甘く燻し焼き風。

6734型式(Pl.71, Ph.154)　縦線と桐葉形の三葉文を中心葉が囲み、３回反転する均整唐草文。珠文帯なく２重に界線がめぐる。Ａ１種のみ。

6732F

A(１点)　6732型式に似て、多くの支葉を配した唐草文である。末端が玉状にふくらむ。凸面はタテケズリし直線顎に仕上げている。

6737型式(Pl.71, Ph.154)　３回反転の均整唐草文。界線を１重めぐらすだけで、外区は無文である。Ａ１種のみ。

6734A

A(８点)　小型の軒平瓦。中心飾りは先端が三叉状になった縦線で、唐草文が２重線表現をとることが特徴である。内区全面に展開し、多くの支葉が主葉内に配され、主葉とあわせて三ないし四つの唐草文の先端が各単位の中央で向い合う。各単位間の上下および両隅部に、界線に接して弧線をおく。笵端はおそらく外縁にかからず、界線の外側にある無文部までであろう。凸面はタテケズリして直線顎に仕上げる。凹面は瓦当沿いをヨコケズリするのみで、全面に布目を残す。完形資料があり、全長28.5cm・広端幅19.5cm・狭端幅18.0cmである。凹面は側縁を幅の狭いケズリで面取りし、狭端沿いは幅1.5cmほど浅く面取りする。燻し焼き風で、硬質に焼き上る。

6737A

6754型式(Pl.71, Ph.154)　単純な棒状の縦線を中心葉が包み、左右に３回反転する均整唐草文である。Ａ・Ｂ２種あり、ともに出土した。

A(１点)　中心飾りは太い紡錘形。大型の軒平瓦である。唐草文は界線に接して派生し、長く伸びて先端は玉状になる。左右の第２単位の第２支葉は反転せず、第１支葉は主葉とは逆むきに反転する。笵型の周囲はとくに加工していないらしい。凸面にタタキ目が残らず、縦横のケズリで直線顎に仕上

6754A

げる。凹面もヘラケズリして布目を消す。燻し焼き。

B（1点）　中心飾り付近が残る小破片で、今のところ唐草文の全容は不明。中心飾りの棒線はAより細い。焼成やや甘く燻し焼き風である。

6754B

6759型式（Pl.72）　下から上に反転する左右の唐草第1単位が、中心部で主葉を接し、その下に桐葉形の中心飾りが垂下する。これを含めて、左右に5回反転する均整唐草文である。A・B2種あり、Bが出土した。

B（1点）　三彩の軒平瓦である。左京三条二坊十二坪から中心部分の破片を含む数点が出土している[1]。今回の右脇部の破片と文様の連続が確かめられた訳ではないが、各部の特徴が共通し、同じ施釉製品であるので、同笵と判断した。釉は外区の珠文帯が褐（黄）釉で、内区と縁部は緑釉である。内区の発色を見ると、褐釉を下に一度塗り、その上に緑釉をかけたらしい。凸面はタテケズリで直線顎に仕上げ、斑状に褐釉と透明釉があり、残る部分が緑釉である。凹面には緑釉と透明釉が残る。側面寄りには、もともと施釉しなかったようである。側面も、瓦当外縁に沿った3mmほどに緑釉がおよぶのみである。ほとんど砂粒を含まない緻密な胎土である。

6759B

6760型式（Pl.72，Ph.154）　3弁の花文を中心飾りとし、左右の脇区から中心にむかう4回反転の唐草文軒平瓦である。多くの子葉が派生し装飾性に富む。外区は1段高い。A～Cの3種があり、A・Bが出土した。これらは平城宮東院で軒丸瓦6151型式と組むことが明らかで、ともに緑釉製品があり、「東院玉殿」に葺かれた「瑠璃瓦」にあてられる。

A（7点）　珠文帯外側の界線は内側のものよりやや太く、細い外縁風である。右上隅部に横方向の笵割れを生じている。凸面は斜めの縄タタキがわずかにみえ、磨耗が著しく調整不明ながら、おそらくヘラケズリして直線顎に作り出したものだろう。1点が硬質である以外は、焼きは甘く灰白色を呈する。緑釉製品が2点あり、同一個体であるかも知れない。無釉の直線顎に対して、やや瓦当にむかって緩やかな円弧を描いた曲線顎である。瓦当全面はもちろん、凸面は瓦当から斜距離で7.5cmまで、凹面は残存部すべてに施釉する。側面は瓦当外縁のわずかな部分と、下半部に釉がかかる。6659Bと同じく、精製され砂粒のほとんどない胎土で、赤色の小粒を含む。

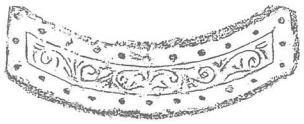
6760A

B（5点）　支葉の細部でAと異なる。内区と外区の段差は、Bの方が大きい。外区内側の界線もやや太く、珠文も大きい。Aの直線顎に対して顎面のない曲線顎Ⅰである。凸面には細かい格子叩きが認められる。凹面はヨコケズリで布目を消す。焼き甘く灰白色。燻し焼き風のものが1点ある。

6760B

6763型式（Pl.72，Ph.156）は、上向きの三葉文を中心飾りとする3回反転の均整唐草文である。第1単位の基部は中心飾り上部から下向きに展開する。外区の珠文は大きい。A～Cの3種があり、Aが出土した。

1）1984年に奈良市教育委員会調査。


6763A

A(11点)　唐草文は全体に稚拙で、各支葉は主葉から分離独立気味である。笵型は周囲をとくに加工しないようである。顎面の幅2.5〜3.0cmの広い曲線顎II。曲線顎とはいえ、平瓦部から徐々に円弧を描いて厚みを増すのではなく、顎部のところで急激に厚くなった段顎風である。平瓦部の粘土板の先端を窪ませ、そこに顎部の粘土を加える(1)。凸面は縦縄タタキで(2)、顎部近くはタテケズリ、凹面は瓦当沿いをヨコケズリするだけで布目が残る。布の末端が溝状に残り、一枚作りであることが明瞭である。凸形の成形台が当った痕跡が残るものもある(1)。

6767型式(Pl.72, Ph.156)　縦の単線の中心飾りにむかって、下から上に第1単位が展開する4回反転の均整唐草文である。A・B2種とも出土した。

6767A

A(1点)　顎面の幅1.5cmの曲線顎IIである。凸面はタテナデ、凹面はヨコケズリ調整する。胎土に白い長石粒を多く含み、内部セピア色、表面暗灰色で、きわめて硬質に焼き上がっている。

B(1点)　Aより内区厚大きく、唐草文も大振りである。法華寺出土の同笵例では、Aと同じ曲線顎IIである。

6767B

6768型式(Pl.72, Ph.156)　上下2段に向い合った中心葉の左右に、4回反転する唐草文が展開する。A〜Eの4種があり、Eが出土した。

6768E

E(1点)　笵型は周囲1段落とし。珠文は径が小さいが高い。顎面の幅2.0cmほどの曲線顎IIである。薄い平瓦部から徐々に円弧を描き顎面にいたる。凸面はタテケズリで顎部の曲線を成形し、タテナデで整えたのち、縦縄タタキを加える。凹面は瓦当から5cmほどをヘラケズリし、あとは布目が残る。胎土に白い長石粒を多く含み、焼成よく硬緻で、青灰色に焼き上がる。市坂瓦窯から完形の同笵例が出土している[1)]。

V　雲文軒平瓦(Pl.73, Ph.155・156)

6802型式(Pl.73, Ph.156)　中心の雲文にむかって、左右から二つの雲文がたなびく。A・B2種あり両者が出土。A・Bは酷似し、雲文頭部や、その内部に入る軸線の先端の入り具合、その軸線基部と雲文の尾との取りつき部分などが微妙に異なる。ともに界線は幅0.5cmと太く、脇区と下外区には外縁までの間に0.5cm前後の平坦面があるが、上外区が狭い点も共通する。

6802A

A(2点)　焼成甘く燻し焼き風である。直線顎で、表面の磨耗が著しいが、タテケズリであろう。凹面には布目が残り、布の端部らしい凹部がある。

6802B

B(1点)　凸面は縦縄タタキののち、タテケズリで直線顎を作り出す。凹面は、笵打ち後に瓦当沿いをヨコケズリで整えるだけで、布目が残る。布の端部らしい凹部が認められる。凹面の側縁は面取りしない。胎土にはかなり砂粒を含む。焼成よく、青灰色硬質に焼き上がっている。

---

1) 1994年に京都府埋蔵文化財調査研究センター調査。石井清司氏のほかの御厚意により確認する機会をえた。

ⅵ　その他(Pl.73，Ph.155・156)

中心が飾りなく型式番号を与えられないものについて、最後にまとめて記述する。

ヘ(1点)　界線で囲んだ内区を縦の平行線で埋め、脇区と下外区に線鋸歯文を入れる。唐招提寺から完形の同笵品が出土している。顎幅6cmの段顎である。凹面には枠板痕風の段差があるが、部分的で桶巻作りかどうか判断できない。焼成おおむねよく燻し焼きで灰色。

ト(2点)　右脇部の破片が3片ある。6664・6682型式と同じく、主葉が脇区界線に取りつき支葉が巻きこむ。もっともよく遺存する破片では、顎幅7cmの段顎で、凸面と側面の稜を、顎部を含めて丸く落とす。その処理は6700Aに類似する。凹面には枠板痕が残り、明瞭ではないが粘土紐の接合痕跡が残る。胎土に径4mmほどの礫をまばらに含む。

チ(1点)　左脇部の破片。顎幅6cmの段顎である。凸面と側面の稜を丸く処理しない点はトと異なる。枠板痕があり粘土紐の接合痕が明瞭で、粘土紐桶巻作りとわかる。

リ(2点)　ともに左側の破片。先端が玉状になった唐草文で、主葉と支葉の区別が不明瞭になっている。顎部が遺存しないが、おそらく直線顎であろう。

ヌ(1点)　唐草端部は玉状にふくらむ。瓦当部でやや肥厚する直線顎である。焼き甘く黄白色。

ル(1点)　幅1.5cmほどの顎面をもつ曲線顎Ⅱであるが、平瓦部と瓦当部の厚みがあまり変らず、顎部近くでわずかに曲線を描き顎面にいたる形状である。焼き悪く黄灰色で燻し焼き。

このほか、**ヲ**は摩滅が著しいが、2重に界線がめぐり、反転して終る唐草文が認められる。瓦当厚の薄い小型の軒平瓦で曲線顎である。0.8cmほどの顎面をもつようである。**ワ**は右脇端部の破片で、太い界線があり、脇区には珠文なく、上外区に小さな珠文が確かめられる。そのあり方は、幅7mmほどの一定幅の外縁の形状とともに6721型式に近い。顎端部は失われているが曲線顎Ⅱであろう。黄白色で燻し焼き風である。最後に、**カ**は無文の軒平瓦である。左脇部の破片で、瓦当は膚の荒れた部分もあるが調整し平滑にしており、燻し焼きによる黒灰色の表面がほぼ残っているので、当初から無文であったと考えてよい。直線顎でわずかに瓦当付近が肥厚する。縦縄タタキが残る。凹面はタテケズリで布目を消す。

C　施釉瓦(Pl.84，color Ph.6，別表12)

左京三条二坊　三彩軒平瓦6659B 1点、三彩丸瓦1点のほか、緑釉の丸瓦6点、平瓦4点、熨斗瓦1点・丸瓦ないし熨斗瓦2点、塼4点である。軒平瓦6659Bについては先にふれた。三彩丸瓦(1)は左京三条二坊の三条々間北小路SD4361から出土した。丸瓦玉縁側の破片で、残存長約19cm、玉縁の大部分は欠失する。褐（黄）釉と透明釉を市松文様風に交互に配する。丸瓦の半円の円弧に5単位がならぶ。玉縁端面にも緑釉が残るが、玉縁部凸面および丸瓦部側面、凹面には釉はかけていない。平瓦は厚さ1.5cmの厚手のもの1点(11)と、厚さ0.7mmから1cmの薄手3点(7・8・10)である。凸面は縦縄タタキを消さないが、釉をかける凹面は、3点は調整して布目をほとんど消し、1点のみが布目をそのまま残した上に施釉する(7)。薄手で端部が残る2点では、端面にも施釉が認められる。厚手のものは、側面沿いの幅3cmには施釉しない。熨斗瓦(12)は平瓦の薄手の部類で、凸面と側面に施釉する。塼4点のうち釉が剝落せずに残るものは2点(16・17)、残る2点(18・19)についても、精良な胎土で丁寧に調整し、焼き具合

も緑釉のものと全く同一であり、緑釉製品と考えてよい。釉の残るものを見ると、片側の表面および1側面の上部に残るが、側面全面に施釉したかどうかは不明。釉の剝落した1点(19)はもっとも大きい隅部の破片だが、裏面の中央に刳りこみがある。

これらは南北の坪境小路の側溝埋土からの出土が多い。それ以外は一坪と七坪に散在する。塼4点は一坪周辺にまとまる。これらの施釉瓦塼が使用された場所を特定することは集中が明瞭ではなく困難だが、坪境小路の交差点周辺から一坪にかけての範囲が考えられる。

左京二条二坊　いずれも緑釉単彩で、同一個体の可能性もある軒平瓦6760A 2点、平瓦1点(9)と熨斗瓦2点(13・14)が出土した。ともに厚手である。熨斗瓦は側面から凸面側の幅5cmの範囲に施釉し、凹面側の側面沿いにもわずかにおよぶ。端面にも施釉が認められる。

これらの左京二条二坪側の施釉瓦は、二条大路の北側溝SD5240から3点、東二坊々間路の西側溝SD5021から2点が出土しており、宅地内からは出土していない。

D　丸瓦と平瓦

丸瓦と平瓦については、全資料を対象とする分析は、破片数と重量の計測を行ったに留まる。これをもとに、重量による3mグリッド単位の分布図を作成した(別表9・10)。その上で、完形および完形に近い資料について、法量や調整手法などにもとづき分類を試みた。

i　丸　瓦(Pl.74・75, Fig.51, Tab.30・31)

大半の資料が縄叩き丸瓦で、格子叩きは小片3点のみである。縄叩きはすべて縦縄タタキで、叩き成形のあと回転を利用してヨコナデを施し、タタキ目をおおむね消すものがほとんどである。玉縁は鍵手に折れた挽き型を利用して肩を作り出す。凹面は、原則として摸骨からはずすだけで、面取りを除いて調整を施さない。丸瓦については、まず面取りの調整手法によって分類を行ない、第①類から第⑫類までに分けた(Tab.30)。この中で、調整手法、法量、胎土、焼成によって、同一工房の製品と考えられる一群として認識できるのはa～eの5群である。

まず、同一群として一括できない単独例について、特徴的な点にふれておく。玉縁部の凸面側縁を面取りする第③類・第④類のうち、6は玉縁端部に向かって三角形に落とすもので、一方の7は幅広い面取りを玉縁の全側縁に施す。第5類は、凸面側の面取りはないが、凹面側は側縁・両端縁とも面取りするもの。該当する3点はすべて特徴が異なる。第9類の面取り調整をまったく施さないものが圧倒的に多い。そのうちのいくつかは群に分類できるが、それ以外の資料のうち特徴的なものを挙げると、玉縁に2条の凸線をもつもの(22)や、筒部凸面に2条の凹線を入れるもの(23)がある。いずれも回転を利用したものである。

a群　小型の丸瓦。完形2点のほか10点前後の一群で、すべてSD5100の東端部から出土。凹面は側・端縁とも面取りし、凸面も玉縁部を含めた側・端縁とも丁寧に面取りする。玉縁部凹面には布端が溝状に横に走り、釣り紐が結びつけられたような痕跡を残すものもある。

b群　第②類としたものは、玉縁部を含めて、側面の凹・凸・側縁とも面取りする丁寧なもの。これら玉縁部の長さは9cmと共通し、他の丸瓦と比べて明らかに長い。その特徴は、軒丸瓦6272Aの丸瓦部が完存する2点の資料と共通しており、この軒丸瓦にともなう丸瓦と認定できる。6272Bは不明。法量から2種あり、それぞれ軒丸瓦の丸瓦部完存資料に対応する。大(3)

6272にともなう丸瓦

側縁面取り	凸面	全縁	玉縁部のみ	玉縁部のみ	なし			分割破面残す
凹面端縁面取り	凹面	全縁	玉縁部のみ	面取りなし	全縁	玉縁部のみ	なし	
両端		①類			⑤類			⑩類
広端のみ			③類		⑥類	⑦類	⑧類	⑪類
なし		②類		④類			⑨類	⑫類

Tab.30　丸瓦分類表

番号	類	群	全長	筒部長	玉縁	凹玉	厚さ	広幅	狭幅	玉幅	段差	角度	重量kg	焼成	色調	備考	出土位置
1	①	a	31.6	27.1	4.4	7.8	1.1	7.7	6.7	4.9	1.2	水平	0.94	良	暗灰		八坪SD5100
2	①	a	31.1	27.7	3.2	8.2	1.3	6.8	7.0	－	1.2	水平		良	暗灰		八坪SD5100
3	②	b	45.6	36.7	9.0	13.7	2.6	(11.5)	11.1	－	1.0	鋭角	(3.60)	不良	灰白		一坪
4	②	b	41.8	32.4	9.3	13.5	1.4	11.7	10.0	7.2	1.0	鋭角	2.32	良	暗灰	布綴	一坪
5	②	b	－	－	9.5	14.0	1.6	－	11.0	7.1	1.2	鋭角	－	良	青灰	布綴	八坪
6	③	c	39.0	32.9	5.8	9.0	2.1	12.5	11.4	(7.3)	1.5	鈍角	2.76	良	黄灰	布綴	五坪
7	④		38.0	33.2	4.7	10.2	1.4	13.5	11.2	6.7	1.8	鋭	(1.78)	良	暗灰	布綴	一坪
8	⑤		35.5	28.8	6.5	11.2	1.5	13.6	12.5	8.7	1.5	水平		良好	青灰色	布細かい	一坪
9	⑤		36.5	30.6	6.0	9.0	2.2	13.0	12.1	7.7	2.4	鋭	2.82	良	黒灰・淡灰	布綴・接合痕	五坪
10	⑤		35.1	30.2	4.5	8.0	1.9	11.6	11.3		1.3	鈍	－	良	黄灰・淡灰	布綴	一坪
11	⑥	c	38.8	33.3	5.4	9.3	1.9	14.0	11.6	－	1.7	水平	2.46	不良	淡灰	布綴	五坪SD5240
12	⑥	c	38.0	32.2	5.9	8.9	2.3	(13.2)	10.7	7.5	1.6	水平	2.12	不良	淡灰	布綴・接合痕	五坪SD5240
13	⑦	c	40.4	34.7	5.5	9.6	2.2	12.9	11.8	(7.5)	1.7	水平	2.56	不良	淡灰	布綴	五坪SD5240
14	⑦	c	40.6	34.6	6.0	9.7	2.2	12.6	12.0	－	1.6	水平	2.70	不良	灰・淡灰	布綴	五坪SD5240
15	⑦	c	37.7	32.4	5.4	9.5	2.0	12.7	11.0	7.0	1.8	水平	2.56	不良	灰・淡灰	布綴	五坪SD5240
16	⑦	c	38.9	33.5	5.4	9.2	2.0	12.4	11.6		1.6	水平	2.40	不良	淡灰・淡黄	布綴	五坪SD5240
17	⑧	d	36.0	31.6	4.0	7.5	1.4	10.5	9.9	7.1	1.5	鈍		良	青灰	布綴	五坪
18	⑨	c	36.2	31.0	5.0	8.0	1.9	(13.0)	11.6	8.0	1.7	水平	2.38	良	灰・黄灰	接合痕	五坪SD5240
19	⑨	e	37.0	32.9	4.1	9.1	1.3	11.6	11.4	7.8	1.2	鋭	1.60	良	黒灰	一条凸	五坪SD5300
20	⑨	e	37.4	33.2	4.2	8.1	1.5	11.8	9.7	7.3	1.3	鋭	1.76	良好	黒灰	一条凸	五坪SD5300
21	⑨	e	－	－	4.1	8.0	(1.4)	－	10.4	7.3	1.2	鋭	－	良	暗灰	一条凸	五坪SD5300
22	⑨		34.5	30.0	4.3	7.5	1.1	(10.4)	10.5	7.6	1.2	鈍	1.38	良	黒灰	二条凸	五坪SD5300
23	⑨		36.2	31.4	4.7	8.8	1.4	11.3	11.1	－	1.1	水平	(1.44)	良	青灰	二条凹横綴	五坪
24	⑨		36.5	31.7	4.7	8.1	1.6	11.6	11.6	7.8	1.5	水平	2.64	良	青灰色	布綴	五坪
25	⑨		34.6	30.4	4.1	8.7	1.4	－	(11.5)	(7.5)	1.6	鋭	(1.28)	良	淡灰～灰	布綴	五坪
26	⑨	中	32.4	28.2	3.9	7.8	1.7	11.0	10.5	(7.3)	1.3	水平	(1.72)	不良	暗灰	三日月綴	八坪築地
27	⑨	中	31.1	27.4	3.6	8.0	1.2	10.5	10.0	－	1.2	水平	1.38	良	灰色	布綴	八坪築地
28	⑨	中	－	28.0	－	－	1.7	10.3	9.4	－	1.2	水平	(1.60)	良	灰色		八坪築地
29	⑨	d	33.9	29.4	4.4	8.2	1.6	11.6	11.1	8.4	1.1	水平	(1.58)	不良	灰～灰白	布綴	八坪築地
30	⑨	d	35.5	29.8	5.5	9.0	1.9	11.7	11.7	－	1.3	鈍	2.00	良	黒灰	三日月綴	八坪
31	⑨	d	36.7	31.5	5.0	7.9	1.7	11.9	11.6	－	1.3	水平	(2.04)	不良	黒灰	三日月綴	八坪築地
32	⑨	d	－		4.5	9.2	1.6	－	11.1	－	1.3	水平	(1.40)	良	暗灰	三日月綴	八坪築地
33	⑨	d	35.5	29.4	5.7	8.5	1.3	－	11.0	－	1.6	鈍	(1.58)	不良	灰～黒暗灰	布綴	八坪築地
34	⑨	d	35.3	30.8	4.5	8.0	1.6	(12.1)	11.3	－	1.3	鈍	(2.04)	良	淡灰	胎土	八坪築地
35	⑨	d	－	32.1	－		1.6	12.5	11.2	－	1.2	鈍角	(1.84)	良	灰白色	胎土	八坪築地
36	⑨	d	35.7	30.8	4.9	9.2	1.3	(12.2)	11.3	－	1.2	水平	(1.42)	不良	灰白		八坪築地
37	⑨	d	36.8	32.0	4.7	6.7	1.5	11.3	10.5		1.0	鈍	1.82	不良	黒灰～淡灰	布綴	八坪築地
38	⑨	d	35.2	30.7	4.5	8.6	1.5	12.4	11.5	(9.0)	1.3	水平	2.10	不良	灰白色	三日月綴	八坪築地
39	⑨	d	37.0	32.0	4.8	8.8	1.1	11.0	11.1	8.2	1.3	水平	1.66	不良	暗灰色		八坪築地
40	⑩	細	31.4	27.4	3.8	6.9	1.5	9.5	8.3	5.9	1.1	水平	1.48	良	黒灰～淡灰		八坪
41	⑪	d	37.4	32.0	5.0	8.2	1.8	11.6	(10.8)		1.0	水平	(1.78)	不良	暗灰～黄灰	接合痕	八坪築地
42	⑫	細	32.8	29.1	3.7	6.4	1.7	9.4	8.7	5.8	1.6	鋭	1.56	良	黒灰	布綴	八坪SD4699
43	⑫	d	35.7	30.2	5.4	8.5	1.9	11.5	10.2		1.4	水平	2.26	不良	黒灰	布綴	八坪築地
44	⑫	d	36.5	30.8	5.6	9.2	1.3	11.5	10.3	(7.2)	1.2	水平	2.04	不良	灰色	接合痕	八坪築地
45	⑫	d	35.6	30.3	5.1	7.6	1.4	11.3	(11.0)	－	1.5	鋭丸	(1.78)	良	黒灰		八坪築地

計測値の単位はcm

Tab.31　丸瓦計測表

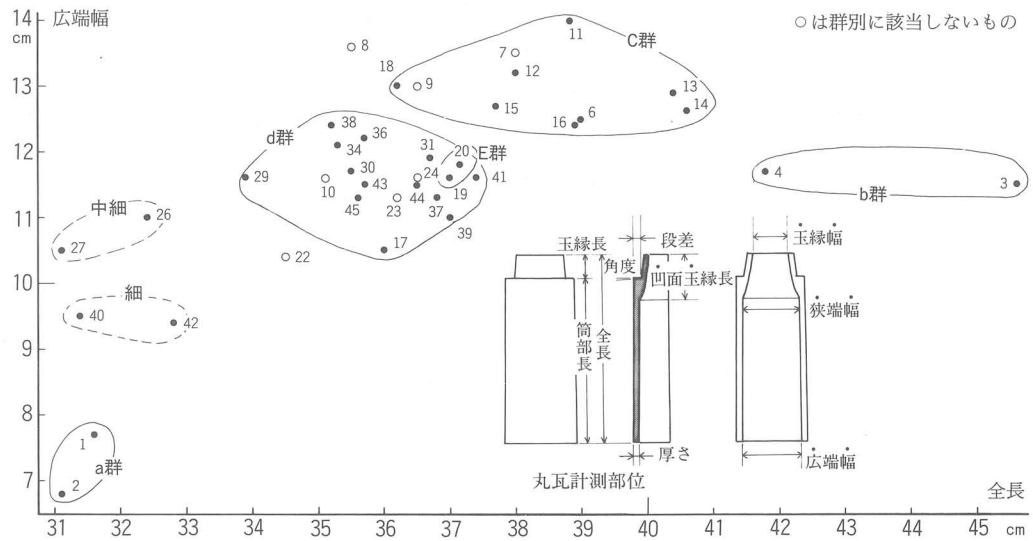


Fig. 51　丸瓦の法量分布図

は、玉縁凸面の端縁も面取りするようだが、軒丸瓦では欠失していて不明。焼成不良。b類小(4・5)は、b群大より4cm筒部が短い。2点の玉縁凹面の屈曲が異なり、摸骨に2種が認められる。布綴じは「ぐし縫い」である[1)]。b群大よりも薄手。青灰色硬質。

c群　第⑥類と第⑦類は、凹面の広端縁を面取りし、玉縁凹面の側縁を面取りする点で共通し、その違いは第⑥類が玉縁部だけでなく丸瓦部側縁をすべて面取りする点である。この2者は、法量も近似し厚手で、扁平な形状、焼き上がりも共通し、胎土も量の多寡はあるが、いずれも赤い小粒を含む。第③類の6、第⑨類の18も面取りの調整は異なるが、上記の特徴は一致するので、この群に含まれよう。これら7点はいずれも二条大路の北側溝SD5240から出土。

二条二坊側の丸瓦

d群　いずれも三条二坊側の北辺築地に葺かれていたもので、落下した状況で検出されたものである。法量は変異はあるが一定の幅におさまり、とくに筒部径はおおむね近似し、焼成具合も似通っている。大きくいえば1群として把握できると考えるが、筒部長や玉縁の形状など細部の特徴からは、いくつかの小単位の群から構成されているようである。これを細分することは困難である。いくつか特徴のあるものを示すと、まず30などは凹面の布綴じに特徴がある。玉縁を上にして凹面を見た時、右側の布端が筒部上部で円弧を描いて、左側の布に綴じつけられ、円弧部分に布の被らない半円形の平坦面ができる。また34・35は胎土と焼き上がりがまったく一致する。胎土は白い長石や黒色砂粒をかなり含み、焼成よく明灰色を呈する。なお、⑫類の分割破面を残すものは、法量や焼成の特徴からd群とみなしてよく、d類には分割破面を残す傾向があることがうかがえる。

三条二坊側の丸瓦

e群　玉縁凸面に1状の突帯がめぐるもので、法量・焼成も一致する。SD5300から出土。

丸瓦については、同一群においても、法量に一定の個体差があるように思われる。この要因としては、群別の妥当性を措くとしても、同じ工房内でも使用された模骨そのものの大きさが微妙に異なることが考えられる。また、摸骨は玉縁成形の挽き型とは連動していないので、筒部長を等しくするよう配慮しても、肩部の位置は厳密には個体でばらつきが予想される。また、玉縁端面はヘラケズリなどの調整を行うので、挽き型による成形ののちの切り落としや調整に

1）大脇潔「研究ノート丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』(奈文研学報第49冊) 1991, pp.21～22

よって玉縁長に差が生じるであろう。このように、丸瓦の場合、平瓦が成形台に完全に規定され法量による分析が有効であるのとやや異なっている。また、調整による分類をあらかじめ行ったが、結果的に群として認識したものは、この分類を越えて存在する。むろん、調整による類別は、群を認識する前提作業として有効であるが、最終的な仕上げ段階で、例外的に端面にヘラケズリを加えるなどの、個体による違いが現われる場合があるのである。

ii　平　瓦(Pl.76～79，Fig.52，Tab.32)

桶巻作りの縄叩き平瓦と、圧倒的に多い一枚作りの縦縄叩き平瓦とわずかな横縄叩き平瓦、さらに少数の一枚作り格子叩き平瓦がある。多くの一枚作り縄叩き平瓦の分析にあたっては、肉眼観察でえられた群別が、全長と広端弧長の２要素でかなり明確に分離できる。これら各群の群別の妥当性は、面取り、凹・凸面の調整、離れ砂の有無などの特徴がおおむね共通し、出土地点が一致することからも裏付けられる。そこで法量による類別をおこない、そのなかの単独例については計測表に委ね、一群と認定できるａ～ℓ群について主に記述する。なお、これ以外に隅切平瓦が少量出土しているが割愛する。

桶巻作り　ａ群は桶巻作りの大型品で、法量の一致から明らかに一群と理解できる。しかし叩き締めや調整によって二通りに分れる。凸面の縄タタキは、ともに桶巻作りに特徴的な叩き締めの円弧を描き、タタキのあと回転を利用した横ナデを施すが、２はナデ消しが不徹底で叩き目がかなり残り、３は叩き目をほぼナデ消して、さらに縦方向の仕上げのタタキを間隔をあけて施す。また調整は、２が側面については凹・凸縁とも、角を落とすような面取りを施すのに対し、３は凸面は面取りせず、凹面の側・端縁とも、幅は広いが浅い面取りである。また、３の方が厚手であり、焼成具合も異なっている。　6644にともなう平瓦

４は枠板痕の残るきわめて薄手の平瓦で、焼成甘く凹面の細部は磨耗して観察できないが、側面の断面が凹凸面の円弧と直交するので、桶巻作りの可能性があろう。

ｃ群は、凹面が平滑な曲面ではなく、タテナデでナデ消すため不明瞭だが、模骨痕らしい浅い段差が認められる。側面の断面形状は凹凸面の円弧に直交気味である。ナデ消すため、粘土接合痕や布綴じなどは観察できず、桶巻作りの可能性があるが、一枚作りの可能性も完全には否定できない。おおむね明灰色に焼き上がる。三条二坊側の北面築地の落下瓦である。

枠板痕のある一枚作り　ｂ群も、凹面に枠板痕らしい浅い段差が認められ、またタテナデでナデ消すことも ｃ群と共通する。しかし、その段差が顕著でないことや、側面の断面形状が円弧に直交せず、凹面と鋭角をなすものであることから、短冊型の板をならべた成形台を使った一枚作りと考える。三条二坊側の東二坊坊間路西側溝SD4699から出土。

一枚作り縄叩き平瓦　ｄ群は大型で縦長の平瓦。凹面の側・端縁を幅は狭いが面取りする。焼きはやや甘い。二条大路北側溝SD5240から出土。ｅ群はやはり縦長で、凸面に離れ砂が使われる。横方向の布綴じが認められるものがある。やや大きい２枚(e_2)と小さい５枚(e_1)がある。　二条二坊側の平瓦

e_2もおおむね焼成よいが、e_1は青灰色硬質で、法量差は焼き上がりの違いによるのかもしれない。二条大路北側溝SD5240以外の資料も二条二坊側からの出土である。ｄ群とは平面形も近似する。同じ二条大路北側溝からの出土で、これも法量差は焼き上がりの違いである可能性もあろう。しかし、ほぼ近似した規格の平瓦ではあるが、離れ砂の有無や凹面の狭端縁を大き

番号	群	全長	広弧	狭弧	厚さ	重量kg	砂	凸面※1	側面※2	広端※2	狭端※2	スリケシ	焼成	色調	備考	出土地点
1	a	39.0	33.7	28.7	2.2	3.90	×	○	○	○	○	×	良	暗灰・淡灰色	接合痕・布綴	八坪
2	a	41.2	33.0	27.5	2.2		×	○	○	○	○	×	良	灰・淡灰色		八坪
3	a	39.8	34.9	−	2.7		×	○	○	○	○	×	良	淡橙・灰橙色		五坪SD5300
4		34.6	−	24.6	1.4		×		×?	×	○?	×	不良	灰白色	薄い	八坪築地
5	b	35.8	26.9	25.9	1.8		×	○	◎	×	○	2/3	良	淡橙灰色	1枚	八坪SD4699
6	b	35.7	−	25.3	1.6	(1.94)	×	○	◎	×	×	2/3	良	淡灰色	1枚	八坪SD4699
7	c	34.5	−	(26.0)	1.8	(2.26)	×		×	×	×	4/5	良	灰白色		八坪
8	c	34.5	29.1	25.6	2.6	3.56	×	×	×	×	×	3/4	良	灰白色		八坪築地
9	c	34.1	29.4	(25.5)	1.9	(2.84)	×		×	×	×	2/3	良	灰白色		八坪築地
10	c	34.0	29.6	(25.3)	1.9	3.14	×	×	×	×	×	1/3	良	灰白色		八坪築地
11	c	34.7	29.9	−	1.3	(1.92)	×	×	×	×	×	×	不良	黒灰・灰白		八坪築地
12	c	35.5	30.0	−	1.7	(2.88)	×	×	−	×	×	−	不良	黄灰色	桶巻？	八坪築地
13		36.5	29.5	25.8	2.4	3.56	×	×	○	○	○	1/8	良好	青灰色	布端	八坪SD5100
14		36.8	−	−	3.1	4.32	×		△	○	×	2/3	良好	淡灰色	熨斗瓦	八坪SD5300
15	d	37.7	28.3	24.2	2.1	3.28	×	×	◎	?	○	×	不良	黒灰・淡灰色		五坪SD5240
16	d	36.7	26.7	−	2.3	(3.18)	○?	−	?	○?	○	×	不良	灰色・灰白色		五坪SD5240
17	d	37.0	27.9	−	2.5		○		×	○	○	×	不良	灰白色	赤色粒	五坪SD5240
18	d	36.8	(27.2)	23.7	2.2	(2.64)	×	−	○	×	×	×	不良	黒灰・灰白		五坪SD5240
19	e_1	35.8	(27.4)	22.7	2.4	3.24	○	○	△	○	○	×	良好	青灰色	凸広端指頭	五坪SD5240
20	e_1	35.5	27.7	23.3	2.2	3.12	○	×	○	×	○	×	良好	青灰色	横布綴　布端	五坪
21	e_1	35.0	26.9	23.9	2.1	2.84	○	×	○	○	○	×	不良	灰白色	凹型台？	五坪
22	e_1	35.4	(26.5)	23.0	1.9		○		△	○	○	×	良	灰色		五坪SD5240
23	e_1	35.5	(27.0)	24.7	1.9	(2.78)	○	×	○	○	○	×	良	青灰色	横布綴	五坪SD5240
24	e_2	36.5	27.8	−	2.1	(2.38)	○	○	○	○	○	×	良	暗灰色		五坪SD5240
25	e_2	36.5	27.6	24.0	2.1	3.42	○	×	○	○	○	1/2	良	暗灰色		五坪SD5240
26	f	32.5	31.1	−	2.2	(2.62)	×	○	○	×	×	7/8	不良	灰白色	接合痕布端	八坪築地
27	f	32.2	31.1	27.3	1.6		×	×	○	×	×	2/3	良	灰色		八坪築地
28	f	33.5	30.8	27.3	2.0	3.80	○	○	○	×	×	1/2	不良	淡灰色	糸切布端	八坪築地
29	f	32.2	31.8	(28.0)	2.0	3.24	×	×	○	×	×	7/8	良	青灰色	布端	八坪築地
30	f	33.3	(31.3)	−	1.8	(2.54)	×	−	○	×	×	2/3	不良	灰白色	布端	八坪築地
31	f	34.0	−	26.3	2.0	(2.14)	×	×	○	×	×	×	良	灰白色		八坪築地
32		33.5	(29.3)	26.6	1.8	2.82	×	×	○	×	×	×	良	灰白・灰色	布端	八坪築地
33	g	34.8	29.9	(25.6)	1.9	2.98	○	×	△	×	×	1/2	良	灰色		八坪築地
34	g	34.8	28.6	25.8	2.3	3.16	○	×	×	×	×	1/10	不良	灰色	布端？	八坪築地
35		34.6	28.6	−	1.6		○	×	×	×	○	1/8	良	灰・黒灰色	刻印里	一坪
36	h	34.0	28.9	26.4	1.7		×		△	×	×	1/2	良	灰白色	胎土布端	八坪築地
37	h	33.5	28.8	26.2	2.1	2.90	×	○?	○	×	×	×	不良	灰白色	胎土布端	八坪築地
38	i	34.3	27.5	−	2.0	(2.98)	○	×	○	×	○?	2/3	良	暗灰色		五坪
39	i	33.8	27.4	−	2.1	(1.66)	○	×	○	×	○	1/2	良好	黄灰色		五坪SD5240
40		33.5	(26.8)	23.8	1.7	(2.86)	○	×	△	×	○	×	良好	灰色	刻印里	一坪
41	j_1	33.0	−	24.6	1.3	(1.68)	×	×	○	×	×	×	不良	黄白色	布端	八坪築地
42	j_1	33.0	−	25.0	1.7	(2.04)	×	×	○	×	×	×	良	黄灰色	布端	八坪SD4699
43	j_1	32.5	28.3	23.7	1.7	2.24	×	×	○	×	×	×	良	黄灰色	布端	八坪築地
44	j_1	33.3	(28.5)	(24.3)	1.6	(2.08)	×	×	○	×	×	×	良	黄灰色	布端	五坪
45	j_1	33.2		24.3	1.5	(2.06)	○?	×	○	×	×	×	不良	淡灰色	布端	八坪築地
46	j_1	33.1	(29.7)	23.8	1.6	2.14	×	×	○	×	×	×	良	黄灰色	布端	五坪SD5240
47	j_2	32.1	28.5	−	2.0	(2.16)	×		○	×	○	×	良好	灰色	布端	五坪SD5240
48	j_2	32.4	27.9	23.2	1.6	2.14	×	×	○	×	○	×	良好	灰色	布端	八坪築地
49	j_2	32.2	(28.8)	(23.0)	1.5	(2.26)	×?	×	○	×	○	×	良好	青灰色	布端	八坪
50	k	31.0	28.5	24.4	2.3		○?	×	×	×	×	×	良	青灰色	布紐	一坪
51	k	−	28.2	−	2.1	(2.62)	×		×	×	−	×	良	青灰色	布紐	八坪SD5100
52	l	31.0	26.3	−	1.8	(2.30)	×	×	○	×	×	×	良好	青灰色	布端	八坪SD5100
53	l	31.5	26.0	(24.2)	1.1		×	×	×	×	×	×	良好	青灰色		五坪SD5300

計測値の単位はcm
※1は凸面の調整の有無
※2は凹面の面取りの有無

Tab.32　平瓦計測表

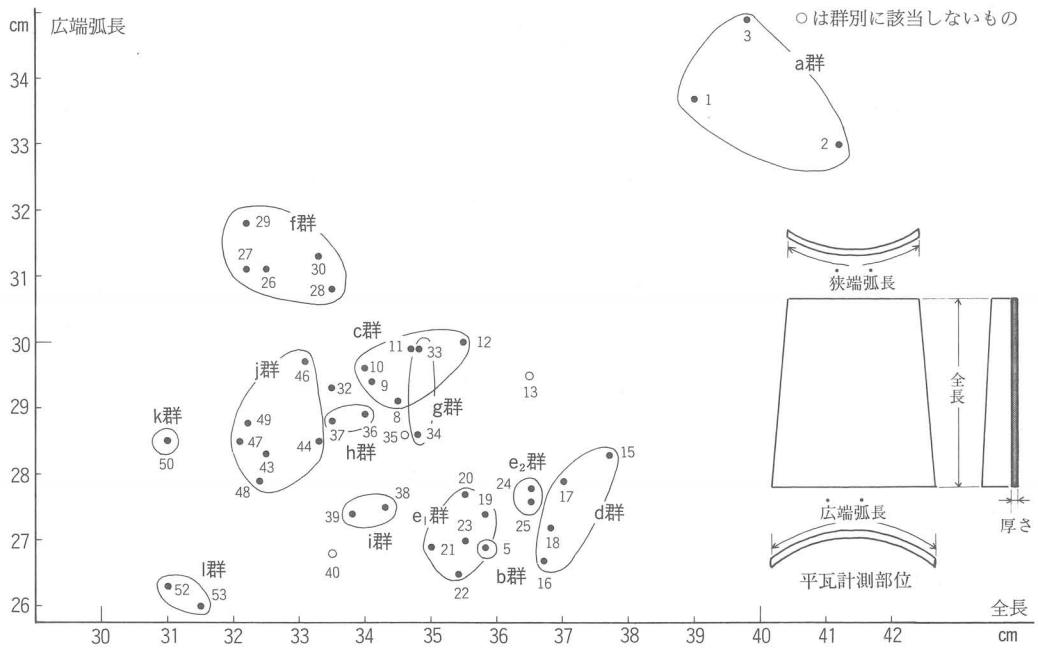


Fig.52　平瓦の法量分布図

く面取りする特徴から、生産単位として別群でよいだろう。f群は正方形に近い平面形で、タタキ目が太く粗い。凹面に布端の凹部が明瞭に残るものが多い。凹面をヨコナデでスリ消す。白い長石を主体とした砂粒を多く含む荒い胎土で、焼成おおむねよく明るい青灰色を呈する。いずれも三条二坊側の二条大路に面する北面築地の落下瓦である。g群は、離れ砂を用いるもので、焼成はやや甘い。同じ北面築地の落下瓦である。h群は、白と黒の砂粒を含み明るく焼き上がった特徴があり、丸瓦のd群の一部に対応する。布端が明瞭で、端面を凸面と鋭角になるよう斜めに削る特徴をもつ。同じ北面築地の落下瓦である。j群は方形に近い台形状で薄手であることを特徴とする。j_1は面取りなく、j_2は凹面狭端縁を面取りする点が異なる。布端は明瞭に残る。両者とも、やはり築地の落下瓦である。　三条二坊側の平瓦

k群は、胎土に砂粒を多量に含み、また暗灰色硬質に焼き上がり、むしろ温度が上がり過ぎて2点とも焼け歪んでいる。凹面には一見すると布端風の凹線があるが、この外側にも布目は広がっていて、布に紐を綴じつけたものではないかと思われる。Pl.78－55はきわめて厚手で、凹面に縦の縄目が残る特殊なものである。縄目は不整合部分があり、成形台に縄目を巻きつけたものではなく、タタキによるものと考えられる。

ℓ群は横縄タタキのものである。いずれも青灰色硬質で、SD5100木屑層から出土した。

一枚作り格子叩き　格子の大きさには4種ある。一辺2cmの斜格子タタキ(2)、一辺1.5cmの正格子タタキ(1)は、それぞれ1点。次に一辺1cmほどの斜格子タタキの破片(3)は5点あるが、それぞれ叩き板はやや異なる。一辺0.5cmの細かい一群(4)は、100片弱の量が出土。すべて薄手で灰白色、火のまわりのよい側面付近が黒く燻されている点で共通し、一群と考えてよい。完形に近い大きな破片はなく、法量の規格は不明。平城宮・京の軒平瓦で格子タタキが認められるのは、6688型式および6679型式がある。6688型式は軒丸瓦6135型式と組み合うが、今回の出土資料でも一定の量が出土している。格子の叩き目の形態や大きさ、あるいは焼き上がり具合などから、6135－6688型式の軒瓦にともなうものと思われる。

E　道具瓦と瓦製品

i　面戸瓦(Pl.80)

面戸瓦は26点あり、隅棟用の登り面戸瓦(鰹面戸)はなく、いずれも大棟用の蟹面戸瓦である。両端が丸瓦にのるT字形のⅠ類と、丸瓦の上にのらない逆台形のⅡ類に分けられるが、確かめられるのはⅠ類であり、Ⅱ類と確定するものはない。分類するほどに全体の形態がわかる例が少ないので、遺存部の大きいものなど特徴的なものについて触れる。

まず、1は長さ27.5cm。舌部は欠失するが、両端に凸面の弧長で11cm分の端面を残し、切込みがはじまる。背の側面は分割破面を一部残し、凹面側の側縁および端縁を面取りする。2は舌部が残る破片で、T字の背になる側面の長さは1に比べて短い。端面の切込みは凸面の弧長5cmの位置からはじまる。端面はとくに面取りを施さないが、舌部は大きく斜めに面取りする。3は長さ不明ながら、背の側面と端面の角を切り落とすもの。切り落とし部分を含め、凹面側を面取りする。4は端面を残さずに舌部の切込みを行う。切込みのカーブの内側にヘラ先で描いた線刻があり、丸瓦を面戸瓦に加工する際に、あらかじめ位置を指定したものかもしれない。7・8は舌部先端の破片だが、ヘラケズリにより丸く仕上げたもの(7)と、もとの丸瓦側面の直線を残すもの(8)である。

5・6はT字部の曲線がなくⅡ類の蟹面戸瓦ともみられるが、舌部先端にあたる部分は丸瓦側面を長く残しており、特殊な形態である。

ii　熨斗瓦(Pl.80)

破片数61点を抽出しているが、そのほとんどは平瓦を縦に切断し、あらかじめ熨斗瓦として作られたものである。平瓦を現場で打ち欠いた割り熨斗瓦も当然あろうが、抽出できていない。切り熨斗瓦として抽出された大部分は、叩き目の消し方、凹面の枠板痕、そして胎土・焼成具合が、平瓦a群と共通し、長屋王邸の軒瓦にともなうものと考えてよい。単に切り離すだけではなく、截断面側についても、凹凸面の側縁を面取りする丁寧な作りである。その大きさから、1枚の平瓦を2分するものとともに、3分したものと考えられる幅の狭いものが存在する(4・5)。仕上りの幅はこの1/2や1/3規格に合わないものもある。截断時に均等割が徹底しなかったのか、あるいは桶巻状態の粘土円筒をまず4分割する通常の平瓦への分割を経ずに、いきなり熨斗瓦として分割したためか判断つかない。熨斗瓦の分布は、三条二坊側でとくに集中することないが、七坪でややまとまり、一部は二条二坊側にも及ぶ。

長屋王邸の熨斗瓦

iii　鬼　瓦(Pl.81，別表12)

平城宮式の鬼瓦[1)]が計19点出土した。全身を表す鬼瓦の大型品(ⅠA)が4点、小型品($ⅠB_1$)が1点。舌を出した鬼面文鬼瓦の大型($ⅡA_1$)が2点、大型の別種($ⅡA_2$)が1点、小型($ⅡB_1$)が4点で2個体以上。舌の表現が欠落した鬼面文鬼瓦(Ⅲ)が6点で3個体以上。下顎の表現を省略した鬼面文鬼瓦(ⅤB)1点である。

1）毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦」『研究論集Ⅵ』(奈文研学報第38冊) 1980

iv　塼(Pl.82・83，別表11，Tab.33)

塼は大小含め、かなりの量が出土した。このうち３辺が残り、一辺の長さが判明するものを抽出した。塼は正方形の１点を除き長方形で、これが縦に割れて長辺の長さが判明する例はない。したがって、一辺の長さとは短辺の幅である。そこで、完形品を手掛かりにしながら、幅がおよそ共通するものをⅠ～Ⅷ類にわけ、厚さの規格が複数以上ある場合、ａ群・ｂ群などに群別し、計19群を抽出した。塼は型枠に粘土を充塡してできる規格品であり、製作時の生粘土の水分や焼成具合によって大きさは一定の偏差をもつが、原則的には法量による規格別に群別しうるはずである。点数の少ない群もあるが、いずれも複数以上の存在を確認しており、19の規格があったと考えている。

幅による大別		幅(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)
Ⅰ類(群)		30.5	35.5以上	9.5～10.0
Ⅱ類(群)		26.0	27.5	8.0
Ⅲ類(群)		20.5～21.0	33.0	7.0～7.5
Ⅳ類(群)		19.0	27.5～28.0	7.5
Ⅴ類17.5～18.0	a	17.5～18.0		6.5～7.0
	b	17.5～18.0	30.5～31.5	7.5～8.0
	c	17.5		8.2～8.5
Ⅵ類15.5～17.0	a	17.0		5.5
	b	16.0	23.0以上	6.0
	c	15.5～16.5	32.0	7.0
	d	16.0～16.5	26.0以上	7.5
	e	16.0～17.0	29.0	8.0
Ⅶ類15.5～15.0	a	15.0	22.0以上	6.3
	b	15.0	26.5～27.0	7.0
	c	15.0～15.5		8.0～8.3
Ⅷ類14.0～15.0	a	14.5～15.0	17.0以上	5.5
	b	14.0～14.5	22.5	6.3～6.5
	c	14.0～14.5	23.0	7.0
	d	14.0～14.5		8.2

Tab.33　塼分類表

幅と厚さによる分類

特殊なものとして、ⅥB群に該当するもので、片面に枘穴状に円形の刳り込みをもつものが１点ある(１)。また、片面に溝状の凹部をもうけたものが１点出土している(２)。平城宮の内裏や第二次大極殿などから類品が出土しており、これらには側面にヘラ描きで文字を記す[1]が、今回出土したものには確められない。さらに、塼に類する板状品で、片枘状の板状部がともなうものが２点出土している(３・４)。砂粒を多く含む硬質で、通常の塼とはやや異なる。瓦製品とすべきかもしれない。厚さ4.5cmで、片枘状の突起部分は厚さ長さとも２cmほどである。

v　瓦製品と瓦転用品(Pl.83)

円形突起付板状品(ａ)　厚さ2.5cmの板状部に、直径16cmほどで厚さ２cm強の円盤を貼りつけ、さらに底径8.5cm、高さ4.5cm、頂径５cmほどの突起部をとりつけたもの。突起部はヘラケズリで整えナデにより仕上げる。円盤部、板状部の表面はナデ調整する。裏面は荒いヘラケズリのままである。砂粒を多く含む胎土で、焼成よく灰色硬質。東二坊坊間路西側溝SD4699から出土した。その位置は、三条々間北小路が取りつく位置にあたる。類品が平城宮第一次大極殿院の第Ⅰ期塼積擁壁の直下から２点、東大溝から１点出土しており、装飾塼の１種と考えられている。[2] しかし、胎土や焼成は通常の塼とは異なるものである。

丸瓦狭端状環状品(ｂ)　丸瓦玉縁部に似るが、丸瓦の転用ではなく特別に作られた瓦製品である。出土した２点は、いずれも三条二坊の二坪と七坪の境付近の近接した地点から出土しており、同一個体の可能性が高い。ともに破損し、環状のものか半截しているのか不明。しかし、２片とも側面が認められず、また大きい方は復元直径の1/4強の円弧をもち、半截されたもの

1)『平城宮報告ⅩⅢ』p.127,『平城宮報告ⅩⅣ』p.83　2)『平城宮報告Ⅺ』p.129

とすればその1/2以上になるが側面が認められないので、環状品と考える方が妥当であろう。丸瓦玉縁部に似て、段差をもって径の小さくなった筒部が上方にのびるが、折損して長さは不明である。類例がなく、用途は不明とせざるをえない。

平瓦転用紡錘車(c)　平瓦片を打ち欠いて径5～9cmの円盤とし、中心に孔を穿って紡錘車に転用したものである。まだ穿孔していないものもある(3)。多角形状のものから正円に近く整形したもの(2)まである。うち2点は平瓦端面を部分的に残す(1)。平瓦の厚さは1.4～2.7cm、焼成も多様で、素材を限定した様子はない。うち1点は、焼成甘く磨耗しているが、タタキ目や布目が見えず、平瓦の曲率もないので、専用に作った瓦製品かもしれない(4)。二条二坊側で1点、三条二坊側では一坪で4点、7坪で3点が出土している。

F　文字瓦(Pl.83, Ph.157)

墨書瓦　丸瓦に墨書の認められるものが4片あり、うち2片は広端側凹面に同じ「徳」文字が書かれており(B・C)、同一個体と考えてよいだろう。もっとも大きい破片も、広端隅部の資料であるので(A)、確実に2固体以上にはなる。残る小片(D)は、以上の2固体と同一個体であるかどうか明らかでない。いずれもSD5300から出土した。

刻印瓦　刻印を押捺したものが42点あり、その内訳は13文字23種である[1)]。

「修」　c種－平瓦凹面(1点)、e種－平瓦凹面(3点)、g種－平瓦凹面(1点)

「彳」　a種－平瓦凹面(2点)、丸瓦筒部端面(1点)

「冬」　a種－丸瓦筒部端面(1点)

「理」　b種－丸瓦筒部凸面(2点)、g種－平瓦凹面(2点)、i種－平瓦凹面(1点)
j種－平瓦凹面(1点)、平瓦凹面(1点)、l種－平瓦凹面(1点)

「里」　a種－平瓦端面(3点)。いずれも離れ砂を使い、凹面端縁を面取りする。完形に近い1点の特徴から、平瓦g群に対応すると思われる。

「司」　a種－平瓦端面(1点)、b種－平瓦凹面(1点)

「矢」　a種－平瓦端面(1点)。b種－平瓦端面(3点)。いずれも離れ砂を使い、凹面端縁を面取りする。c種－平瓦端面(2点)。いずれも離れ砂を使い、凹面狭端縁を面取りする。うち1点は完形に近く、押捺は狭端面である。

「田」　a種－平瓦端面(1点)、丸瓦筒部端面(4点)。いずれも筒部凹面端縁を面取りする。

「目」　a種－平瓦端面(2点)。ともに離れ砂を使う。b種－丸瓦筒部端面(1点)。

「在」　a種－平瓦凹面(1点)

「伊」　a種－平瓦端面(2点)、丸瓦筒部端面(1点)。平瓦はともに離れ砂を使う。

「人」　a種－平瓦凹面(1点)

「公」　a種－平瓦凹面(1点)

恭仁宮式文字瓦　恭仁宮の造営にあたって新調された瓦のうち、B型式平瓦とb型式丸瓦と分類された一群の瓦には、人名を刻印した細長い板を凹面に押捺したものが多数存在する[2)]。今回の出土品は、いずれも平瓦で、「出雲」(1点)、「太万呂」(1点)、「真依」(1点)、「國万呂」(1点)の計4点である。

---

1)『奈良国立文化財研究所基準資料V 瓦編5』1977　2) p.169註1) 文献

3　土　　器

長屋王邸とその周辺の調査では、質、量ともに厖大な土器が出土した。土器を出土したのは溝、土坑、井戸、建物の柱穴をはじめとする遺構や包含層など多岐にわたり、それぞれ重要な内容を含んでいる。その全てを整理、報告することは、整理期間等の制約から不可能であったので、ここでは、大量の木簡を共伴し、長屋王家の土器の実体を示すSD4750、同じく大量の木簡を共伴し、平城宮土器Ⅲ前半の基準資料となる豊富な内容をもつ、二条大路上に掘られた濠状遺構SD5100・5300・5310、左京三条二坊一・二・七・八坪の宅地割りの変遷の時期の基準となる坪境小路の側溝SD4229・4231・4909と二条大路北側溝SD5240、および遺構変遷の指標となる井戸や柱穴出土の土器を中心として報告することとする。他にも、東二坊々間路西側溝SD4699・5021や東側溝SD4701、宅地内の土坑などから出土した重要な資料があるが、それらに関しては一部を取り上げるのにとどめ、機会を改めて報告することとしたい。

今回報告する遺構

出土土器には、土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器、唐三彩、製塩土器や、硯、土馬、土製円板などの特殊土製品および古墳時代の土器、埴輪、陶棺があるが、土師器や須恵器が多数を占め、それ以外のものは少ない。

土師器の調整手法

土器の器形、調整手法、年代などに関しては、既刊の『平城宮報告』に従うこととする。土師器の調整手法は記述の煩雑を避けるために記号化している。a手法と呼ぶのは土器の口縁部外面をヨコナデし、底部を調整せずに残すもの。b手法は口縁部をヨコナデし、底部をヘラ削りで調整するもの。c手法は口縁部と底部の全面にヘラ削りを施するもの。e手法は口縁部直下を幅狭くヨコナデし、それ以下を調整しないものである。また、土器の外面にはヘラ磨きを施す場合があるが、施す場所の違いによって区別を行っている。1手法と呼ぶのは口縁部だけを磨くもの、2手法は底部を磨くもの、3手法は口縁部と底部の両方を磨くものを示す。口縁部も底部も磨かないものがあるが、それは0手法と呼んでいる。そして、a～e手法と0～3手法の組み合せによって、a1手法などと、調整を表現している。

土器の群別

また、胎土により、土師器を2群、須恵器を6群に分けている。土師器のⅠ群土器は胎土に砂粒をほとんど含まず、灰白色を呈するもの。Ⅱ群土器は砂粒を多く含むもので、灰褐～赤褐色になるものである。須恵器のⅠ群土器は青灰色を呈し、黒色や白色の粒子を含む。Ⅱ群土器は黒色粒子がナデや削りで、墨を流したように延びるものである。Ⅲ群土器は花崗岩の母石に近い粘土を用い、磁器質に焼き上がるもの。Ⅳ群土器は粗大な長石類の他、白色微砂を含むもの。Ⅴ群土器はやや砂っぽい胎土で、微細な黒色粒子を含み、赤みを帯びた黒褐色を呈するもの。Ⅵ群土器は砂っぽい胎土で、焼き締まりが悪く、表面がざらざらした感となり、明灰色～淡暗灰色に発色するものである。以上の須恵器の群別は、産地の差を反映しているもので、Ⅰ群・Ⅱ群土器は和泉陶邑窯、Ⅳ群土器は生駒東麓窯、Ⅴ群土器は尾張猿投窯、Ⅵ群土器は美濃須衛窯の製品に比定でき、Ⅲ群土器は播磨の製品であると推定している。

土器に付した番号は実測図、写真図版、表ともに共通している。なお、1～900番台はSD4750をはじめとする長屋王家の土器、1000番台からはSD5100出土土器、3000番台からはSD5300・5310出土土器、4000番台からはそれ以外の土器、施釉陶器、特殊土製品を示す。

A　SD4750出土土器と特殊土製品

土師器と須恵器および製塩土器が出土したが、土師器が多数を占め、須恵器は少なく、製塩土器はきわめて少ない。これらの土器は、和銅4年（711）～霊亀2年（716）の紀年がある木簡とともに出土し、邸宅内で使用していた一括の土器として重要であるばかりでなく、平城宮土器Ⅱの基準資料としても貴重なものである。

紀年木簡

SD4750出土土器は4層に分けて取り上げたが、上2層のものは出土量が多くはなく、後の時代の土器の混入も一部にみられる。また、特に土師器は風化が著しく、手法等の観察が困難なものが多いため、主として下2層の土器を対象として、ここに報告することとする。

i　土 師 器（Pl.85～90, Ph.158～161）

土師器の器種

杯A・B、杯B蓋、杯C・E・F・X、皿A・B、皿B蓋、皿C、椀C・X、鉢A・B・X、盤A・B、高杯の食器、壺A・Bの貯蔵器、甕A・B・C・X、鍋、竈の煮炊具がある。このなかで主体を占めるのは食器であり、特に杯や皿が多く、詳細は後に考察するが、他にはみられない特殊な器形および器種構成がみられる。一方、甕の出土量はやや少なく、壺は小破片のものしかない。以下、器種ごとに記述を行う。

杯A（Pl.85, Ph.158－1～30）　広く平らな底部と斜め上に開く口縁部をもち、口縁端部は肥厚する。杯AⅠ（1～24）・AⅡ（27～30）・AⅢ（25・26）に分かれる。調整にはa_0、a_1、a_3、b_1、b_3手法があるが、b_1手法が大半を占める。内面の暗文は、杯AⅠでは放射二段暗文をもつ土器が主体で、連弧暗文も一定量存在する。杯AⅡ・AⅢでは、連弧暗文の比率が高くなるようで、暗文のない土器（29・30）もある。また、13～16は暗文が左上がりになる土器で、12・23は厚手で大量の砂粒を含み、Ⅰ・Ⅱ群以外の土器である。しかし、こうした土器は特殊な存在で、杯AⅠは器形、調整手法、文様ともに非常に斉一性が高い一群が主体となる。こうした規格性が極めて高い酷似した土器の存在は、杯Aだけに限ったことではなく、他の器種にもみられる。また、ある特徴が器種を越えて認めることもできる場合があるのもSD4750出土土器の一つの大きな特徴である。なお、1・2には特徴的なキズのある工具痕があり、同じ工具で調整した可能性がある（Ph.168）。

高い規格性

杯Aは一般には火襷をもつ土器はほとんどないが、SD4750出土の杯Aでは、多くの個体に火襷があり、焼成の際に重ね焼きしていたことがわかる。また、底部外面に黒斑をもつものもある。

11は漆塗りの際にパレットとして用いたもので、内面全体と外面の一部に膜状の黒漆が付着する。5・24の底部外面には「羹」の墨書があり、3は底部外面に線刻がある。

杯B（Pl.86, Ph.159－64～74）　杯Aに高台を付けた器形。杯BⅠ（69～74）・BⅡ（64・66・67）・BⅢ（65・68）がある。全て外面を磨く。内面の暗文は放射二段暗文と連弧暗文があるが、杯Aに比べて連弧暗文の比率が高い。また、65は暗文が左上がりであり、73は暗文をもたない。73は体部上半で外面に段をももつほどに口縁部が外反し、型づくりの成形かとも思われる。杯Bには、高台が外方に張り出し、端部が外傾する形態の特徴的な一群（66・68）がみられる。これらの胎土は他の杯Bとは異なり、皿BⅡ・BⅢと同じものを用いている。また、口

型づくり

縁部の外反がきつい一群（67・74）もあり、同様の特徴は杯Ａにもみられる。

杯Ｂ蓋（Pl.86，Ph.159－60～63）　杯ＢⅠ～ＢⅢに対応する口径のものがあり、一部は皿ＢⅡ・ＢⅢに組み合うため、杯Ｂの出土量を上回っている。端部は直線的に外反するものが主体だが、内弯しながら開く、壺A蓋に近い器形（60）もみられる。外面には４方向の丁寧な磨き、内面には螺旋暗文を施し、つまみの頂部にも螺旋暗文をもつものが多い。

杯Ｃ（Pl.85，Ph.158－31～59）　底部は小さな平底で、口縁端部は内傾する。杯ＣⅠ（43～59）・ＣⅡ（37～42）・ＣⅢ（31～36）がある。杯ＣⅠには深い器形と浅い器形があり、b_1手法で調整し、連弧暗文を施す。一方、杯ＣⅡ・ＣⅢはa_0手法で調整し、放射一段暗文をもつものが多い。内面の螺旋暗文も両者に差があり、杯ＣⅠは螺旋が何重にも巻く（43）のに対して、杯ＣⅡ・ＣⅢでは一重（31）となる。杯ＣⅠには杯ＡⅠと同様に火襷をもつものが多い。48・58は灯火器として使用。32・52は底部外面に線刻がある。　火　襷

杯Ｅ（Pl.88，Ph.159－146～151）　平底で、口縁部が内弯しながら開く器形。杯ＥⅠ（148～151）・ＥⅡ（146・147）がある。c_3手法で調整するものが多い。完形に近い個体には把手やその痕跡が残存している。火襷をもつものがある。

杯Ｆ（Pl.88－152）　杯Ｅに断面三角形の低い高台を付した器形。外面を丁寧に磨く。

杯Ｘ（Pl.88－153）　口縁部が段を持って屈曲し、把手が付く。外面には密な磨きを施す。極めて珍しい器形であり、全形は不明だが、一応杯Xとしておく。

皿Ａ（Pl.87，Ph.159～161－98～132）　広く平らな底部に短い口縁部がつく器形。皿ＡⅠ（98～121）・ＡⅡ（127～132）・ＡⅢ（122～126）がある。皿ＡⅠはほとんどがa_0手法で調整し、放射一段暗文をもつが、ごく稀に連弧暗文を施すもの（98）もある。それに対し、皿ＡⅡ・ＡⅢはb_1手法で調整し、連弧暗文を施すものが多い。131・132はc_0手法で調整する皿ＡⅡで、この２個体のみ出土した。121はロクロ成形で、底部にヘラ切り痕が残る。皿ＡⅠの口縁部の形態には、直線的に外反するものと、弯曲しながら外反するものの２者がある。　ロクロ成形

皿Ｂ（Pl.86，Ph.160・161－77～97）　皿Ａに高台を付したもの。皿ＢⅠ（82～97）・ＢⅡ（80・81）・ＢⅢ（77～79）がある。通常は皿Ｂの出土は珍しいが、SD4750からは大量に出土し、この点が長屋王家の土器の性格を示す一つの大きな特徴となる。皿ＢⅠは口径30cm前後の大型品で、35cmを超える例もある。底部は削り調整を施した後、高台を貼り付ける際にヨコナデで調整する。口縁部外面は例外なく丁寧に磨く。暗文は放射二段暗文もみられるが、連弧暗文をもつ個体が圧倒的に多い。口縁部の形態は内弯しながら外反するものが多いが、屈曲するものもみられる。皿ＢⅢは口径が19cm前後で、大きさ、器形ともに規格性が高く、暗文は連弧暗文が主体である。高台の形態や成形法は杯Ｂの一部と共通し、高台のみでは両者の区別はつかない。この点に関しては後に詳しく考察する。　大量の皿Ｂ

皿Ｂ蓋（Pl.86，Ph.161－75・76）　杯Ｂ蓋を大型にしたもの。皿ＢⅠ・ＢⅡにそれぞれ対応するものがある。つまみの頂部に螺旋暗文を施すものが多く、内面に螺旋暗文をもつ。

皿Ｃ（Pl.88，Ph.161－154～158）　口径12cm程の、ｅ手法で調整した小型粗製の皿。灯火器として使用したものがある。

蓋Ｘ（Pl.88－159）　杯Ｃを倒立させた器形で、口縁部の破片であるが、口縁部外面をヨコナデ、頂部外面を削りで調整する。頂部には板状に近いつまみをもつ。Ⅰ・Ⅱ群以外のもので、　Ⅰ・Ⅱ群以外の蓋

同様の蓋は後述するSD5100出土土器の中に一定量みられる。

椀C（Pl.88－164～181）　e手法で調整した粗製の椀で、内面に工具痕や、外面に粘土紐の継ぎ目を残すものもある。口縁端部は面をもって内傾し、深い器形と浅い器形がある。ほとんどの個体に火襷があり、黒斑があるものも多い。173・186は灯火器として使用している。

小型の椀

椀X（Pl.88－160～163・182）　160～163は椀Cに似た形だが、口径が小さく、器壁も比較的薄い。椀C同様、深い器形と浅い器形がある。182はc_0手法で調整するもの。

盤A（Pl.87－138～140）　口縁部が斜め上に大きく開き、平底となる器形。盤AI（138・139）・AII（140）がある。外面は縦方向に削るc_3手法で調整し、内面には連弧暗文（138・140）や放射二段暗文と連弧暗文の組み合わせを施す（139）。

盤B（Pl.87，Ph.160－141～145）　盤Aに高台を付した器形。c_1手法で調整し、削りの方向は盤Aと同様、縦方向である。内面の暗文には放射二段暗文と連弧暗文を単独、または組み合わせたいくつかの種類がある。把手をもつものが多く、141の把手は対称の位置には付かず、やや角度がずれている。142・144に関しては破片であるため、把手の有無は不明。

鉢B（Pl.87，Ph.159－133～135）　やや内弯する口縁部が直線的に立ち上がる器形で、c_3手法で調整する。135には口縁部内面に磨き状の暗文がある。

鉢C（Pl.87－137）　口縁部が内弯する器形に、高台を付した器形。高台は欠失する。外面には密な磨きを施し、内面には連弧暗文をもつ。

鉢X（Pl.87，Ph.160－136）　平底で、口縁部が内弯しながら開く器形。口縁部直下を幅狭くヨコナデし、それ以下は不調整。風化が著しく、磨きの有無は不明。内面に暗文はない。

高杯（Pl.88，Ph.160－183～193）　口縁部が大きく外に開く杯部に、脚部と裾部を付けた器形。大小の2者がある。完形に復原できるものは183のみである。杯部内面の暗文には3種類あり、183・184・189は放射二段暗文、185～187は放射二段暗文と連弧暗文、188は放射暗文と連弧暗文を施す。杯部外面は、縦方向に削った後に磨きを施し、口縁端部直下を幅狭く削って面取りするもの（186）もある。脚部は全て心棒成形のII群土器で、内面下端に削りを施す。裾部は端部をナデ調整するものと削りで面取りをするものがあり、外面に磨きを施す。183は杯A（1・2）と同じ特徴的なキズのある工具痕が脚部にある（Ph.168）。

3種の暗文

壺A（Pl.88－195）　薬壺形の器形である。外面には密な磨きを施す。肩部に把手の付いていた痕跡がある。

壺A蓋（Pl.88－194）　杯Eを逆転させた器形で、c_3手法で調整。頂部に板状のつまみが付く。

甕A（Pl.89・90，Ph.161－199～209）　球形の体部に外反する短い口縁部を付ける器形。口径約32cmの甕AIと、口径約16cmの甕AIIがある。口縁部は、外面には縦方向、内面には横方向のハケ目を施した後にヨコナデを加え、外面のハケ目はほとんどナデ消す。体部外面は縦方向のハケ目、内面はナデ調整を加え、器形、大きさ、調整ともに斉一性が高い。内面に工具痕を残すもの（206・207・209）がある。204は体部内面に削り調整を加える河内型の甕。205は叩き成形の甕で、体部外面下半は縦方向、内面上半には横方向のハケ目調整を加えるが、体部外面上半に叩き目、内面下半には当て具痕を残す。内外面に煤や炭化物の付着したものが多い。

叩き成形の甕

甕B（Pl.89－196～198）　甕Aに把手を付けた器形。完形に復せるものは少ないが、把手の出土量は多い。体部上半のハケ目をナデ消すものがみられ、小型のものはない。

甕C（Pl.90－212）　外反する短い口縁部に、長胴の体部をもつ器形。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ目、内面上半は横方向のハケ目を施し、それ以下はナデ調整。

甕X（Pl.90－210・211）　同一個体と思われる口縁部と底部。復原径約20cmの平底で、かなり長胴の器形となると推定できる。外面には縦方向の粗いハケ目、口縁部内面には雑な横方向のハケ目を施す。胎土には多量の砂を含み、焼成も軟質である。　長胴で平底になる甕

鍋（Pl.90－213～215）　口径40cm前後の大型品と、約30cmの中型品がある。214は偏平な球形の体部で、口縁部は大きく外反し、肩部の２ヶ所に把手が付く。口縁部外面は縦方向のハケ目上にヨコナデ、内面は横方向のハケ目上にヨコナデを加え、体部外面には縦方向のハケ目を施すという、甕A・Bと同じ調整を行う。213・215は胴部の形態が214とは異なり、頸部で一旦内弯することなく、口縁部に向かって開く。胴部外面には縦方向のハケ目を施す。215は破片から復原したもので、把手の付く可能性がある。

ii　須恵器（Pl.91～94，Ph.162～165）

杯A・B、杯B蓋、皿A・B、皿B蓋、椀A・B・X、鉢A・F、盤、高杯の食器、壺A、壺A蓋、壺B・E・K・X、平瓶、横瓶、甕の貯蔵器がある。Ⅰ群とⅡ群土器が主体である。Ⅴ群やⅥ群土器もみられるが、Ⅰ～Ⅵ群以外のものもある。　器種構成

杯A（Pl.91，Ph.162・163－301～324）　平底で、口縁部が直線的に開く器形。杯AⅠ2(301～307・312)・AⅡ2(308～311・313・314)、AⅢ2(315～319)・AⅣ(320～321)がある。杯AⅠ1～AⅢ1の深い器形は極めて少なく、図化できるものはない。底部をヘラ切り不調整で残すⅠ群土器は少なく、口縁部が内弯しながら立ち上がり、底部を丁寧にロクロ削りする特徴的な一群が主体を占める。312は内面に自然釉が降着する。

杯B（Pl.91，Ph.162－348～355）　杯BⅠ2(351・353)、BⅡ1(348～350)、BⅢ(352・353)、BⅣ(354)があり、Ⅰ群土器が多い。353は体部が丸みを帯びる特徴的な器形である。

杯B蓋（Pl.91，Ph.162－331～347）　杯BⅠ～BⅣに対応した法量のものがある。口縁端部が屈曲しない笠形の形態で、端部は鋭く下方に突出する。頂部をロクロ削りするものが多い。身に比べて大量に出土した。内面に墨が付着し、転用硯として使用したものが多い。338は口縁部内面にかえりをもち、壺の蓋の可能性がある。345～347は２ヵ所に穿孔がある。345は緑色の自然釉が厚く降着する。335はⅤ群土器で、尾張猿投窯の製品である。　転用硯

皿A（Pl.91，Ph.162・163－328～330・358～361）　皿AⅠ(358～361)・AⅡ(328・329)・AⅢ(330)がある。皿AⅠは底部をロクロ削りする。358～360は砂を多く含む粗い胎土で、焼き締まりが悪く、器壁も厚い。皿AⅢは灰白色の自然釉が一部に降着する。皿AⅠ・AⅡには、杯Aと同様、口縁部が内弯しながら立ち上がり、底部との境が不明瞭で、底部を丁寧にロクロ削りする特徴的な一群と、口縁部が底部から屈曲して立ち上がる一群の二者がみられる。

皿B（Pl.91，Ph.162・163－356・357・364）　皿BⅠ(364)・BⅡ(356・357)がある。皿BⅠはⅠ群土器で、焼成はやや不良。皿BⅡは口縁部が直線的に外反して開く偏平な皿部に高台を付したもので、灰釉陶器皿に似た形態となる。「長屋皇宮」木簡を出土したSE4770からも出土しており、この時期の特徴的な器形である。357は内面を硯として使用している。　灰釉陶器に似る皿BⅡ

皿B蓋（Pl.91，Ph.163－362・363）　362は扁平なつまみをもち、器高が高いⅠ群土器。363は

当て具痕　口径約35cmのⅠ群土器で、内面に叩きの当て具の痕跡がある。

椀A（Pl.91，Ph.163－325・326）　杯Aを深くした形で、口縁部が直線的に立ち上がる。325は底部にロクロ削りを施し、体部と底部の境に稜をもつ。

椀B（Pl.91－327）　底部付近のみが残存するが、高台の形態の特徴から、椀Bと判断した。胎土が灰白色で焼成も堅緻なⅥ群土器で、美濃地方の窯の製品である。

椀X（Pl.92，Ph.163－365・366）　口縁部がやや外弯して開く器形に高台を付けるもの。底部は高台下端より下方に突出する。内外面を丁寧に磨く。金属器の形態や質感をまねたもので、木簡にみえる「鋺形」(城25－116）の名の土器にあたるものであろう。

金属器模倣

鉢A（Pl.92，Ph.164－367～370）　丸底に近い底部をもつ鉄鉢形の器形。底部の形態は古い特徴を示す。370は外面を磨く。368には外面に焼成前に記した刻書がある。灯火器として使用。

鉢F（Pl.93－390・391）　口縁部が直線的に外反して開く器形。緻密な胎土で、器壁は薄く、焼成も堅緻である。

盤（Pl.92，Ph.163・164－373～379）　いくつかの形態があるが、盤として一括する。373～375は内弯する体部に直線的に立ち上がる短い口縁部を付した器形で、体部下半をロクロ削りする。7個体出土した。376・377は口径約35cmで、皿Aを大型にしたような器形。底部から体部下半をロクロ削りする。4個体出土した。378・379は大きな平底に直線的に外反する口縁部を付したもの。口縁端部はやや肥厚し、上端に面をもつ。6個体出土した。

各種の盤

高杯（Pl.92－371・372）　371は杯部の破片。ゆるやかに弯曲して立ち上がり、ロクロ削りをする。しまりの悪い胎土で、焼成も不良。372は脚部の破片で、透かしはない。Ⅰ群土器。

壺A（Pl.92－383）　肩が胴の上部で強く屈曲し、口縁部は内傾して立ち上がる。Ⅰ群土器で、肩部には自然釉が降着し、蓋をかぶせて焼成した痕跡がある。

壺A蓋（Pl.92，Ph.163・164－381・382・385）　大小2種がある。端部の形態も、381は平坦な面をもち、382は下方に鋭く突出させるという違いがある。

壺B（Pl.92－386）　短い口縁部で、肩に稜をもつ。体部下端をロクロ削り。Ⅴ群土器か。

壺D（Pl.92－380）　扁平な体部に直線的に立ち上がる短い口縁部を付した器形。Ⅰ群土器。

壺K（Pl.93，Ph.164－392～399）　肩に稜をもつ長頸の壺。396・397は肩部の張りが弱く、丸みを帯びた形態である。一方、394・395・398は肩部の張りが強く、稜をもつ399は内面のロクロ目が顕著で、凹凸が著しい。392～395の内面や断面には漆が付着しており、漆液の運搬具として使用したものである。Ⅰ～Ⅵ群土器以外のものが多く、産地は不詳。

漆運搬具

壺X（Pl.92・93－387・388・400）　その他にも、多種多様な壺が出土した。387は胴部下半を欠失しており、全形は不明であるが、外反して開く短い口縁部と丸い肩部をもつ。肩部には2条の沈線を施す。灰褐色を呈し、焼成は堅緻である。1個体のみ出土。388は大型の壺の底部。胴部下半をロクロ削りする。400は底部付近の破片。緻密な胎土をもち、焼成は極めて堅緻で、外面には自然釉が降着し、一部ではそれが流れ落ちている。Ⅴ群土器で、猿投窯の製品であり、SD5100で出土している様な双耳瓶となる可能性が高い。1個体出土。

双耳瓶か

壺蓋（Pl.92－384）　円筒形の器形で、頂部と体部の境には鋭い稜をもち、頂部をロクロ削りする。焼成の堅緻なⅤ群土器で、一部に自然釉が降着する。双耳瓶の蓋であろう。

平瓶（Pl.92，Ph.164－389）　口縁部を欠失する。平底で、把手や高台は付かない。Ⅰ群土器。

横瓶（Pl.93－402）　俵型の胴部に直立する短い口縁部を付す器形。外面は胴中央部にはカキ目調整を施し、両端には叩き目が残る。内面は両端には叩き当て具痕が残り、中央部にはナデ調整を加え、連続した指頭圧痕が付く。焼成は堅緻で、外面と内面の一部には自然釉が降着し、胴部の両端には焼き台として使用した杯Aが融着している。

甕（Pl.94，Ph.165－403～407）　404・406はⅠ群土器の甕B。407は口縁部外面に櫛状工具による連続刺突文を施し、全面に酸化鉄を塗ったⅤ群土器で、同一個体の口縁部と底部付近を図示した。高蔵寺2号窯期の猿投窯の製品と思われる。403・404は甕C。403は胴部の4ヵ所に把手が付き、405は胴部外面下半をヘラ削りする。　猿投産の甕

iii　墨書・刻画土器と特殊土製品（Pl.93，Ph.168，Fig53）

墨書土器　「羹」(24：土師器杯A底外）が2点、「銭」(508：土師器杯A口内)、「東」(506：須恵器杯AⅡ底外)、「紫□」(503：土師器杯A底外)、「菜司」(505：土師器皿A底外)、「刀女」(507：土師器皿A底外)、「大炊」(509：須恵器鉢A体外)、「百足」(510：土師器杯A底外）と記したものが各1点出土し、他に判読不能のものが数点ある。　羹

刻書土器（504）　土師器杯A内面に「帳」の字を焼成後に線刻したものが1点ある。

墨画土器（501）　須恵器甕の内面に墨画を描いたもので、冠帽をかぶった役人の姿か。

刻画土器（502）　土師器杯Aの内面に細い竹管状の工具で焼成前に刻画を施したもの。全体の構図は不明であるが、鴟尾の乗った瓦葺建物の屋根を表現したものとみることもできる。　刻画土器

硯（Pl.93－401）　同一個体の2片から図上復原したもの。須恵器杯B蓋に似た形態だが、底面に周縁を意図的に折り曲げた痕跡があり、硯として製作したことがわかる。研面には「板持麻呂研莫〔取カ〕□」「□此莫」の墨書や、筆ならしの墨線がある。　特殊な硯

土製円盤（515・516）　土師器皿A、皿B蓋などを転用したものが4点出土した。直径がやや大きいもの（515）が1点、比較的小さいもの（516）が3点で、大きめのものは中央に穿孔があり、周縁を打ち欠いた後に擦っている。小さ目のものの周縁は、打ち欠いたままである。

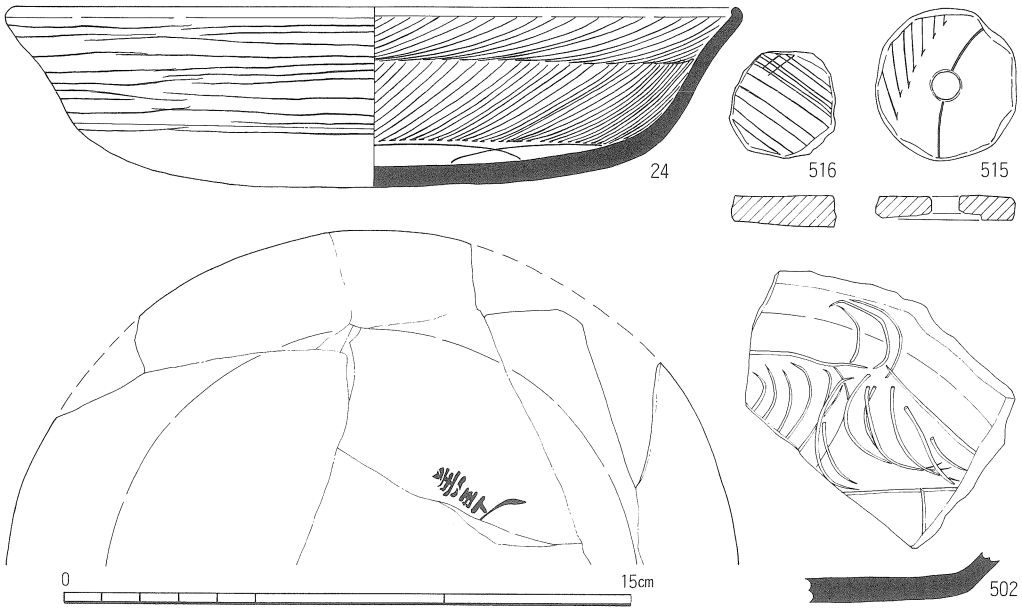


Fig.53　SD4750出土墨書・刻画土器と特殊土製品実測図　1：2

B　A・B期の井戸と土坑出土土器

i　SE4770出土土器（Pl.95, Ph.165・166）

SE4770からは、「長屋皇宮」と記したものや、養老元年（717）の年紀をもつものを含んだ大量の木簡とともに、多くの土器が出土した。土師器には杯A・B、杯B蓋、杯C・E、皿A・B、皿B蓋、椀C、高杯、甕、鍋、須恵器には杯A・B、杯B蓋、皿B、皿B蓋、鉢A・F、壺A蓋、壺Q、平瓶、甕がある。これらの土器は、井戸の抜取り穴から出土したもので、平城宮土器Ⅱの好資料であり、SD4750出土土器に比べてやや新しい様相を示す。

土師器　216～220は杯A。杯AⅠ(216・217・220)・AⅡ(219)・AⅢ(218)がある。a_1、b_1手法で調整し、内面には放射二段暗文をもつものが多いが、218は連弧暗文、219は放射一段暗文をもち、220には暗文がない。218は灯火器として使用している。222～227は杯B。杯BⅠ(226・227)・BⅡ(222～225)がある。外面は丁寧にヘラ磨きし、内面には放射二段暗文や連弧暗文をもつ。222は体部外面に線刻がある。221は杯B蓋。外面を丁寧にヘラ磨きし、内面とつまみ上端には螺旋暗文を施す。228～231は杯C。杯CⅠのみ出土した。a_1、b_1手法で調整する。内面に連弧暗文を施すものが多いが、231は暗文をもたない。器壁の厚いⅡ群土器が一定量みられ、SD4750出土の杯Cとはやや様相を異にする。230は底部外面に線刻がある。233・234は杯E。b_3手法で調整する。233は灯火器として使用している。SD4750出土の杯Eとは異なり、把手が付かず、杯EⅡも出土していない。237～240は皿A。237～239はa_0手法で調整し、内面に放射暗文をもつ。240はb_0手法で調整し、内面に暗文はもたない。238は底部外面に線刻がある。皿AⅡ・AⅢは出土していない。236は皿B。外面を丁寧に磨き、内面は底部に螺旋暗文、口縁部に磨き風の暗文がある。一対の把手を持ち、他の皿Bには見られない極めて珍しい例である。235は皿B蓋。つまみ頂部と内面に螺旋暗文をもち、外面を八方向に磨く。241・242は椀C。口径がやや小さく深いものと、口径が大きく浅いものとがある。243は高杯。心棒成形のⅡ群土器で、脚部を十一角形に面取りする。244・245は甕。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ目、内面はナデによって調整する。244はやや長胴で、245は球形の体部をもつ。完形に復せるものは少ない。246は鍋。偏平な半球形の体部で、大きく外反する口縁部をもつ。口縁部内外面はヨコナデで調整し、外面には縦方向のハケ目が残る。体部外面はハケ目、内面はナデによる調整を行う。

Ⅱ群土器の杯C

把手のある皿B

須恵器　413・414は杯A。杯Aには、杯AⅠ・AⅡ・AⅣがある。414はⅠ群土器で、体部と底部の境に明確な稜をもたない。413はⅤ群土器の杯AⅣであるが、双耳瓶の蓋の可能性もある。415は焼成の堅緻なⅠ群土器の杯B。杯Bには、杯BⅠ・BⅡがある。411は杯B蓋。口縁部に屈曲をもたない笠形の形態で、頂部をロクロ削りする。416～418は皿BⅡ。底部と体部の境が不明瞭な器形で、416・417は体部下半をロクロ削りする。418は底部外面を硯として使用する。412は皿B蓋。頂部をロクロ削りし、1ヵ所に穿孔がある。419は鉢A。口縁部が内弯し、底部は丸底となる器形で、体部下半をロクロ削りする。420は鉢F。底部を欠失するが、円盤状の底部であった痕跡がある。421は壺A蓋。端部が鋭く突出する。口縁部の長さが長く、壺A以外と組み合う可能性もある。422は壺Q。やや広口で、長い頸部をもち、肩部が稜をもっ

て屈曲する器形。一部に自然釉が降着する。内外面に漆が付着し、漆の運搬具として使用している。424は平瓶。体部の一部と把手を欠失する。体部下端はロクロ削りする。423は甕。口縁部から肩部にかけての破片。肩部の４ヵ所に把手が付く。胴部内面には当て具痕が残るが、外面の叩き目はナデ消されている。　漆付着

ii　SE4366出土土器（Pl.96・97, Ph.167・169・170）

Ａ期の東外郭の東限を限る塀SA4250の東方にある井戸。方形横板組で、井戸枠は下から２段のみを残して抜取られている。土器は、井戸枠抜取り穴と井戸枠内から出土し、掘形からは出土していない。247～264・426～429が井戸枠内、265・266・430・431が抜取り穴出土であるが、両者に大きな時期差は認められず、ともに平城宮土器Ⅱに属するため、一括して記述する。特に土師器は、SD4750出土土器と器形、調整手法ともに共通したものが多く、長屋王家の土器の一部を占めるものである。なお、SE4366からは猿や犬、樹木などを描いた墨画土器(Color Ph.7）が出土し、古代の絵画史上特に注目される資料である。　墨画土器

土師器　井戸枠内から杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、杯Ｃ、皿Ａ・Ｂ、皿Ｂ蓋、鉢Ｂ、椀Ｃ、盤、甕Ａ・Ｂ、竈、抜取り穴から杯Ａ・Ｃ、皿Ａ・Ｂ、皿Ｂ蓋、甕Ａが出土した。

247～249は杯Ａ。b_1手法で調整し、247は放射二段暗文、248・249は連弧暗文をもつ。250～252は杯ＣⅠ。250はやや深い器形でa_1手法、251・252は浅い器形でb_1手法で調整し、ともに内面に連弧暗文を施す。253は杯ＣⅡで、a_0手法で調整し、内面に放射暗文を施す。255～257は皿Ａ。a_0手法で調整し、内面には放射暗文がある。257は内外面に墨画や墨書を記す。259は皿Ｂ。底部外面と口縁部外面の下半分に削るb_1手法で調整し、内面には連弧暗文を施す。この手法や暗文はともにSD4750出土の皿Ｂと共通する。265は杯Ｂ蓋、258は皿Ｂ蓋。外面に密なヘラ磨きを施し、265は板状のつまみをもつ。内面には暗文をもたないが、杯B蓋に内面に螺旋暗文を施すものがある。260～262は椀Ｃ。ｅ手法で調整し、深い器形と浅い器形がある。262は底部内面にハケ目が残る。263・264・266は甕ＡⅡ。口縁部、体部外面には縦方向のハケ目、口縁部内面には横方向のハケ目を施し、口縁部のハケ目はほとんどナデ調整により消されている。263は内面にもハケ目調整を施す。

須恵器　井戸枠内から杯Ａ、杯Ｂ蓋、皿Ｂ蓋、盤、壺Ａ蓋、壺Ｋ、甕、抜取り穴から杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、盤、甕が出土した。

427は杯ＡⅠ２、426は杯ＡⅡ１。ともにⅠ群土器で、底部はヘラ切り不調整。431はⅠ群土器の杯ＢⅡ２。同様の器形はSD4750でも出土している。430はⅡ群土器の杯Ｂ蓋で、内面を朱の硯として使用する。428は盤。灰白色のやや粗放な胎土で、底部外周をロクロ削りする。429は壺Ｋ。口縁先端を欠失する以外はほぼ完形。口縁部と体部の接合は三段構成で、肩部に浅い凹線を入れ、胴部下半をロクロ削りする。

墨画土器（Pl.97, Ph.169・170－257）　土師器皿Aを用いたもの。外面に５匹の猿の墨画と「口萬侶」「船連縣麻呂」「幡下」「進」「万」「奉」などの文字を記し、筆ならしの墨線もある。猿の墨画は、全身を描くものは１匹だけで、他は顔のみの表現である。この土器には黒斑があり、黒斑上に記した墨画や墨書は赤外線カメラで確認し、図では薄墨で示した。内面には枝葉と幹を持つ樹木や、犬の顔ともみれる墨画と墨痕がある。猿の表現をみると、最初に目の部分だけを試　猿の表現の二者

し描きし、次に顔、最後に全身と段階的に描写範囲を広げていった過程が認められる。描写や筆遣いは正確であり、専門の絵師が本格的な絵を描く前に下描きをしたものであろう。土器に描いた動物の墨画で鳥[1]や馬[2]はこれまで出土していたが、猿は初出例である。天平宝字年間～平安時代に制作された唐招提寺金堂の梵天像の台座の反花にも猿とみられる墨画があるが、今回の墨画はそれより30～40年古い。日本における最古の猿の墨画であるとともに、法隆寺金堂の天井に描かれた動物の墨画との間をつなぐ資料として、美術史上でも重要な発見である。

最古の猿の墨画

iii　SE4655出土土器

A・B期の西内郭ほぼ中央に位置する井戸で、井戸枠は全て抜取られている。土器は抜取り穴から出土したが、極めて少量である。土師器には杯A・B・C、皿A・B、甕、須恵器には杯A・B、鉢A、水瓶、甕があるが、図示は省略する。平城宮土器Ⅱに属する。

iv　SK4429出土土器（Pl.96, Ph.167）

B期の塀SA4415の撤去後、南から3間目の柱穴に重ねて掘られた土坑。土師器、須恵器ともに大量に出土し、注目すべき資料も含むので、ここに紹介する。土師器には杯A・B、杯B蓋、杯C・E、皿A・B、皿B蓋、椀C、盤A、高杯、甕A・B、須恵器は杯B、壺蓋、壺K、甕があり、平城宮土器Ⅱに属する。

土師器　267・268は杯A、269は杯C、270は皿A。268は連弧暗文をもつが、他は放射暗文のみである。271は盤A。4か所に把手が付き、底部を欠失する。外面は上半はヨコナデ、下半は横方向の削りを行うb1手法で調整する。内面は風化が著しいが、逆位の連弧暗文が一部に残る。272は甕B。口縁部内外面をヨコナデ、胴部は外面をハケ目、内面をナデで調整し、口縁部内面には横方向のハケ目の痕跡が残る。胴部外面の一部には黒斑がある。胴部の一部を欠失するだけで、ほぼ完形であるが、ゆがみが大きく、当初から焼けひずんでいたものと思われる。二次的に火を受けた痕跡や内面への炭化物の付着も認められず、土器製作の際、焼成段階での失敗品をそのまま廃棄したものという可能性が高い。

4個の把手

焼成失敗品

須恵器　432は杯AⅣ。底部はヘラ切りの後、ロクロナデを行う。433はⅠ群土器の杯BⅢ。434は壺蓋で、口縁部の立ち上がりが高く、頂部にはロクロ削りにより段を表出し、宝珠形のつまみをもつ。灰褐色の胎土で、ナデや削りによって墨を流したようににじむ黒色粒子を含む。口縁部には煤が付着し、倒立させて灯火器として使用したものであろう。岐阜市老洞2号窯[3]に類例がある。436は壺K。胴部下半をロクロ削りし、肩部に自然釉が降着する。435は平瓶。球形に近い体部をもち、底部をロクロ削り、その他をロクロナデで調整する。口縁部を欠失し、把手は付かない。437・438は甕C。437は口縁部内外面をロクロナデで調整し、胴部外面には格子目叩きの上にカキ目を施し、内面は当て具痕の上に部分的にロクロナデを加える。黒色粒子を含む青灰色の胎土で、Ⅰ～Ⅵ群以外のものである。438はⅠ群土器で、胴部外面は格子目叩きの上に一部ロクロナデを施し、内面の当て具痕はほとんどナデ消している。外面の一部に自然釉の降着がみられる。

老洞2号窯

1）奈文研『平城宮出土墨書土器集成Ⅰ』1983，p.62
2）奈文研『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告』1984，p.30
3）岐阜市教育委員会『老洞古窯跡群発掘調査報告書』1981，図版32

C　SD5100出土土器と特殊土製品

i　はじめに

SD5100は、北面築地SA5095・5096に開く北門SB5090の東寄りから東二坊々間路西側溝SD4699の手前までの、築地北側に沿って掘られた東西方向の濠状遺構で、幅約3m、深さ約1.5m、総長120mの規模を有する。SD5100の堆積は、大きく4層に分かれ、最上層は埋め立て造成土であり、以下の3層が堆積土である。各層から土器類が出土しているが、ここでは総量3600点にのぼる土器類が出土した第3層（木屑層）出土土器を中心に報告する。木屑層出土土器は、天平8年前後の紀年木簡、最も新しいものでは天平12年の年紀のある墨書土器が共伴しており、絶対年代の知られる基準資料である。出土土器には、土師器、黒色土器、製塩土器、須恵器、奈良三彩陶器があり、土師器と須恵器の食器類が大半を占め、完形品が多い。ところで、木屑層の土器類は、発掘中にも取り上げたが、この層には大量の木簡が含まれるため、層そのものをすべて取り上げ室内で洗浄する方策をとった。木屑層の水洗選別には時間を要し、土器の整理作業と歩を伴にすることはできず、接合作業は十分には行いえなかったのが実情である。個体数の算定にあたっては、以下のような基準で行った。普遍的な器種の算定に関しては、25%以上の破片を対照に個体判別を行った。蓋等つまみを有するものは、つまみも算定に加え、須恵器の大型器種、例えば甕Cなどは、口縁部と底部の双方を算定の基準とした。また、平城宮・京ではあまり出土例のない器形については、小片と言えども個体判別可能なものは算定の基準とした。器種名や調整手法は、『平城宮報告Ⅶ』『同・XI』にもとづいて記述する。

年紀資料

個体数の算定基準

後に詳述するが、SD5100の土器類には多量の灯明器が含まれている。灯明器には長期に亙って使用されたものと短期使用のものがある。前者は油煙がこびりついているのに対し、後者はわずかに油煙が確認できる程度で、洗浄しすぎるとなくなる場合がある。実際洗いすぎたものが多く、灯明器の判定・算定に困難をきわめた。そこで実際に灯明実験を行い、土師器を灯明器として使用すると、土師器そのものにどのような変化が現われるかを実験した。容器には電気窯で800度程の火度で焼成した素焼きの皿を、灯芯材には木綿の細ひもを、燃料には純正の胡麻油を使用した。油は、底に2～3mm程度の深さ入れ、なくなれば補給することにし、6時間灯し続けた。実験の結果、使用前の素焼きの皿は、明るい灰黄色を呈していたが、灯明を灯すと色合が大きく変ることが判明した。すなわち、内面の油が浸み込んだ部分は、全体に暗灰色に変り、内面には部分的に赤橙色の発色が現われる。一方、外面の油が浸み込んだ部分は、内面より明るい色合いの黄土色に変り、また明るい赤橙色のドーナツ状のリングの斑文が現われる。リング外側周縁部は薄いあざやかなピンク色を呈する。

灯明実験

実験の結果をふまえ、実際に短期使用の土師器の灯明器をみると、実験で現われたと同じような色合いに発色するものが数多く確認することができた。実験成果を利用すれば、洗い過ぎやその他の理由で灯芯痕をとどめない土師器の器、あるいは灯芯痕をもたない破片についても灯明器か否かの判定が可能となり、今回の報告ではこれをも灯明器判定の基準の一つとした。長期間使用したものには、前述したような特徴はみられず、使用を重ねるとまた変化が現われるようである。

灯明器判定の基準

ii　土 師 器（Pl.98～109，Ph.172～185，Fig.54）

杯Aの法量

杯A（Pl.98，Ph.172－1001～1036）　法量のまとまりから、口径19～20.5cm、器高4.5cm以上の杯AⅠ1、口径19.5～21.5cm、器高3.5～4.5cmの杯AⅠ2、口径17.0～18.5cm、器高3.0～4.0cmの杯AⅡの3種に分かれる。杯Aは総数358点出土しているが杯AⅠ1（1001～1012）は、143点あり、a_0手法調整のもの（1004～1012）が圧倒的に多く、109点を数える。他にa_2手法調整のもの（1001～1003）が14点、a_3手法のもの4点、b_0手法調整のもの1点、b_1手法調整のもの3点、b_2調整のもの11点、b_3手法調整のもの1点がある。暗文をもつものが多く占め、1010のように底部内面に大きくて粗い螺旋暗文、口縁部に放射暗文を施す例（以下、Aタイプ暗文と称す）が103点、底部内面に細かい螺旋を密に配し、口縁部内面に細かい斜放射暗文と連弧状暗文を施すもの（1001・1002　以下、Bタイプ暗文と称す）が15点あり、暗文のない例は25点にすぎない。斜放射暗文の多くは1010のように右上がりの傾斜で施されるものが多いが、左上がりの斜放射暗文（1007・1008）も46点ある。

杯AⅠ1

暗文の種類

杯AⅠ2

杯AⅠ2（Pl.98，Ph.172－1013～1026）は、総数112点あり、a_0手法調整のもの（1020・1021）が19点、a_2手法調整のもの11点、a_3手法調整のもの4点、b_0手法調整のもの（1014～1016・1025・1026）が13点、b_1手法調整のもの2点、b_2手法調整のもの（1017～1019・1022・1023）が58点、b_3手法調整のもの5点ある。杯AⅠ1とは異なり、底部を削るもの（b手法）と底部不調整（a手法）の比は、ほぼ2：1の割とb手法が優勢で、また、ヘラ磨きを施す例が70％を占める。次に暗文をみると、Aタイプ暗文が39点、Bタイプ暗文が46点、暗文のないものは27点。杯AⅠうちで1と2の区別ができない例が8点ある。

杯AⅡ

杯AⅡ（Pl.98，Ph.172－1027～1036）は、総数95点あり、a_0手法調整のもの（1030～1032）が25点、a_2手法調整のもの（1028・1029）が11点、a_3手法調整のもの（1027）が3点、b_0手法調整のもの（1035・1036）が19点、b_1手法調整のもの1点、b_2手法調整のもの（1034）があるが、b_3手法は1例もない。Aタイプ暗文は65点、Bタイプ暗文は20点、暗文のないものは10点ある。

杯Aのうちには、口縁部に灯芯痕や内面底部に油煙が確認できるものが36点、油を入れた結果、肌色から桃色に変色したと考えられる例が90点、内面に油とみられる有機物のよごれが確認できる例が30点ある。黒斑をもつ例は12点で、底部外面の黒斑は大きく、口縁部外面の黒斑は一部が黒く変色しているにすぎない。

杯B（Pl.99，Ph.173－1073～1087）　他の食器に較べ極めて少なく総数26点にすぎない。また、以下に述べるように、3型式（平城宮土器Ⅰ～Ⅲ）が混在する。

超大型の杯B

口径24cm以上、器高8cm以上の超大型杯Bは2例ある。1086はb_2手法、1087はc_2手法で調整するが、いずれも暗文を施さない（Ⅱ群土器）。この手の大型杯Bは、平城宮土器Ⅳ（SK219段階）から登場すると考えられていたが、この資料によって平城宮土器Ⅲの段階にも存在することが明らかになった。

杯BⅠ

杯BⅠ（1085）は、b_2手法で調整するⅠ群土器で、口径21.1cm、器高6.9cm。Bタイプの暗文を施すが、他の例とは異なり、口縁内面には、ジグザグ往復連続放射状暗文を施す。

杯BⅡ

杯BⅡには、（1）－Aタイプ暗文を施すもの（1080～1083）、（2）－Bタイプの暗文を施すもの（1073～1075）、（3）－底部内面に螺旋暗文を口縁部内面に2段の斜放射暗文を施すもの（1077

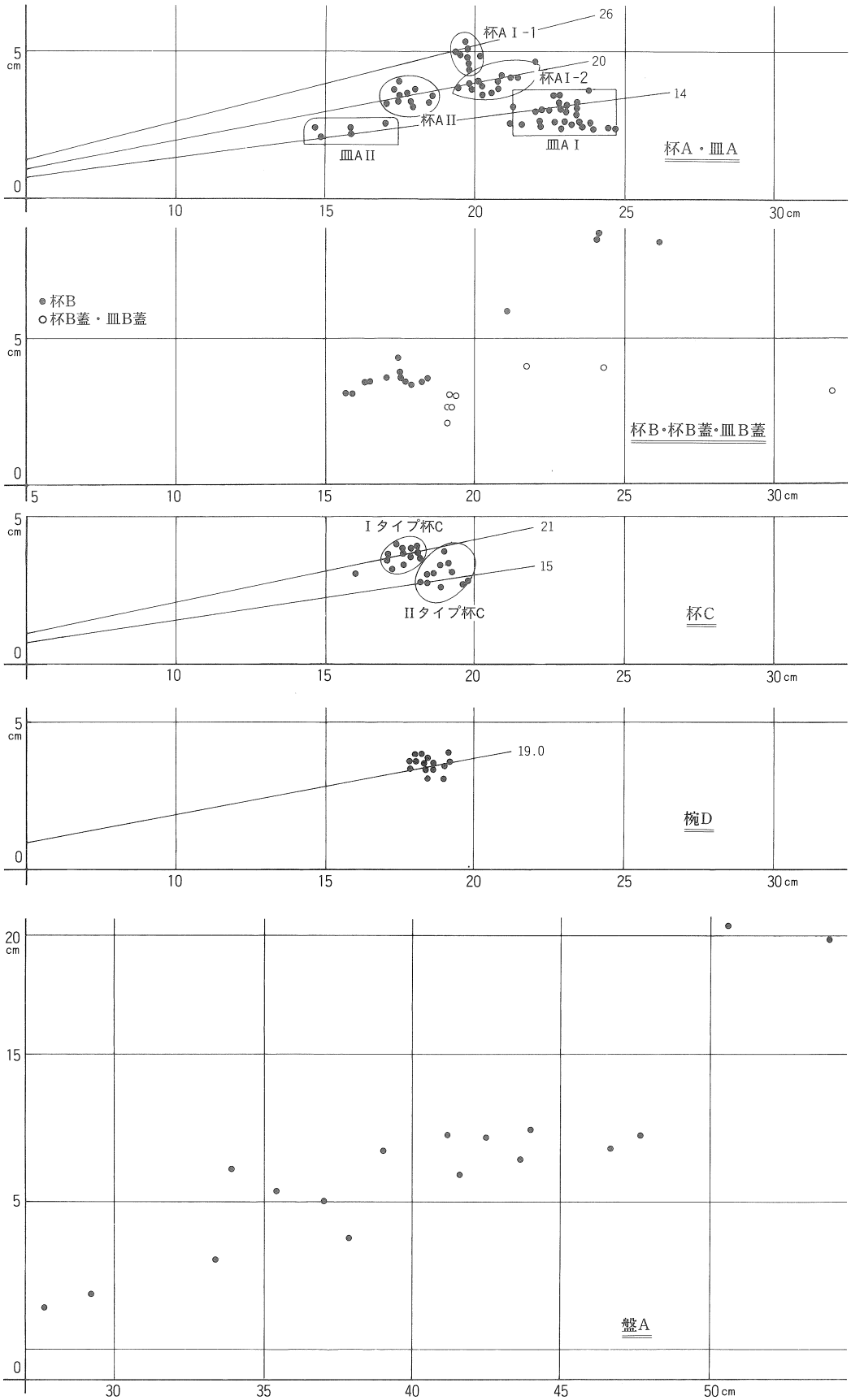


Fig.54　SD5100出土土師器食器と調理具の法量分布図

Cタイプの暗文

～1078　以下、Cタイプの暗文と称す)、(4)－内湾する口縁形態で無文のものの4種がある。この他、木屑層下の黒灰粘土層から、b_2手法で調整し、底部内面および口縁部内面に螺旋暗文を施す杯BII（1076）が出土しているので併せて掲載することにした。

(1)の杯BIIは、平城宮土器IIIに通有なもので、口径15.5～16.5cm、器高3.0～3.5cm。7個体あり、うち1点（1080）がa_2手法で、3点（1081・1082）がb_0手法で、残り3点がb_2手法で調整する。(2)の杯BIIは、平城宮土器IIに属し、総数9点あり、3点（1073・1075）がa_2手法で、6点（1074）がb_2手法で調整する。(3)の杯BIIは、平城宮土器Iに属し、5点ある。1点（1078）がa_2手法調整、4点（1077・1078）がb_2手法調整である。(4)の杯BIIは、5点あり、b_0・b_2・c_0手法調整のもの各1点、c_2手法調整のもの2点がある。あまり類例のない器形であり、型式認定に躊躇するが、胎土や調整の上から平城IIIに共伴すると考えておきたい。

杯Bのうちには、灯芯痕を確認できる例が12点、内面に油とみられる有機物が付着する例が5点ある。黒斑をもつ例は1点ある。灯明皿として使用した例が多いが、1点を除いてすべて正位の状態で油を入れ点灯したものである。例外の1点は、倒位すなわち逆にふせ、高台で囲われる部分に油を入れ点灯したものである。

杯B蓋（Pl.102，Ph.173－1150～1152・1159～1163）　総数50点出土している。口径20.0～27.5cm、器高3.5～4.6cmの杯BI蓋（1152・1158）、口径18.5～19.5cm、器高2.1～3.2cmの杯BII蓋（1150・1151・1159～1163）、口径17～18cm程度の杯BIII蓋があるが、杯BIII蓋は残りのよいものはない。計数可能な41点中、杯BI蓋が11点、BII蓋が17点、BIII蓋は13点ある。

杯BI蓋

杯BI蓋のうち、頂部内面に暗文のない例が7点あり（1159）、うち1点はつまみには螺旋暗文をもつ。暗文を有するものは、すべて内巻螺旋暗文で、比較的細かい螺旋をうずまき状に数重に施す例（1152）と、やや大きな螺旋を施すものがある。頂部外面の調整は、1点（1158）を除き、すべてc_3手法で調整する。

杯BII蓋

杯BII蓋のうち、暗文のない例は1点のみで、他は内巻の螺旋暗文をもつ。外面の調整はすべてc_3手法による。螺旋暗文には、細かい螺旋単位を数重うずまき状に施すもの（1163）、先のものに比べ螺旋の数が少なくやや粗くうずまき状に施すもの（1152）、螺旋の単位が大きく2～3個のもの（1150）がある。

杯BIII蓋

杯BIII蓋でつまみを残すものはないが、すべてc_3手法で、螺旋暗文をもち、うち1点が剣菱形の暗文をもつ。

杯B蓋

杯B蓋のうちには、灯芯痕を確認できる例が9点、桃色から肌色の色合いに変色する例が2点、内面に有機物をとどめるもの14点ある。

皿B蓋は、4点あり、いずれもBI蓋で、口径30cmを超える。すべてc_3手法による調整で、内面に螺旋暗文を施すもの2点、うち1点は外巻きである(1156)。暗文のない例および有無不明のものが各1点ある。内面に油状のよごれをもつものが2点ある。

蓋X（Pl.177，Fig.55－1253～1256）　総数5点あり、いずれも胎土に長石粒と雲母を多量に含み、雑な作りで、頂部外面はヘラ削りを施し、中央穿孔のある扁平つまみを付す。1253は、つまみを欠損するが、口径21cm。笠形の口縁端部は内側に折り返され肥厚する。粗大な長石粒・雲母を含み、灰黄色を呈し、頂部内面には墨痕がある。灯明器として使用する。1254も、大型品で焼けひずむが、径21.0cm、器高3.4cm。外面全面をヘラ削り調整し、内面は縁部近くをヨコナデ、以

下の部位はナデで調整。内面には、有機物がほぼ全面付着し、墨痕がある。鍋・甕の蓋の可能性がある。1255・1256は、縁部が外方に開き、口縁端面が平坦な面をなす。口径19cm、器高5.3cm程度。壷の蓋であろう。1256は、頂部外面に黒斑をもち、灯明器として使用する。

杯C（Pl.98・99－1037～1072）　SD5100出土土師器中最も多い器種で、総数562点を数える。奈良時代前半の土師器の食器の口縁端部の形態は、大きく分けて、(1)－内側に折り返され丸く肥厚するもの（杯A・B・ⅢA・B）、(2)－丸くおさめるもの（後述の椀D）、(3)－内側を斜めにそぎ落した形のもの3種がある。それぞれ用途に応じた口作りで、(2)・(3)は口をつけ液体を飲むのに適した器形であることは言うまでもない。事実、(3)の口縁形態の器形に「酒杯」と墨書する例もある。3タイプの口作りのものを杯Cと分類している。SD5100の木屑層からは、形態の異なる2種の杯Cが出土している。器壁が厚く、底部が丸みを有し、口縁部が内湾気味に立ち上るもの（1037～1058）、平底で口縁部が斜め外方に開くもの（1061～1072）の2種である。前者をⅠタイプの杯C、後者をⅡタイプの杯Cと仮称する。Ⅰタイプの杯CⅠは口径17～18.3cm、器高3.2～4.2cm。杯CⅡ(1059・1060)は口径15～16cm、器高2.7～3.0cm。Ⅱタイプの杯CⅠは口径18～19.8cm、器高2.5～3.5cm。杯CⅡは小片が数点出土しているが、法量は確定できない。

食器類の口縁の形態

2種の杯C

杯Cの法量

Ⅰタイプ杯CⅠは、総数322点あるが、a_0手法調整のもの（1037～1050・1055～1058）が圧倒的多数を占め283点。a_1手法調整のもの1点、a_2手法調整のもの4点、A_3手法調整のもの(1051・1053・1054)、b_0手法調整のもの5点、b_2手法調整のもの1点。b_3手法の例は、木屑層からは出土していないが、炭層から完形で出土したもの（1053）を図示した。Aタイプ暗文をもつものが圧倒的多数を占め280点、Bタイプ暗文をもつもの（1051・1053）12点、暗文のないもの30点を数える。杯CⅡは、総数12点あり、a_0手法調整のもの（1059）が8点、b_1手法調整のもの（1060）1点、この例は黒色土器A類である。b_2手法のもの1点、b_3手法のもの3点がある。暗文のあるものはすべてAタイプ暗文で、暗文のない例は3点ある。黒色土器A類の杯CⅡは、完形で口縁部内面をヨコ方向に、底部内面は往復ミガキ（ジグザグ暗文）を施す。

Ⅰタイプの杯C

黒色土器A類の杯C

Ⅱタイプの杯Cは、総数226点あり、a_0手法調整のもの（1058・1070）46点、a_1手法調整のもの7点、a_2手法によるもの（1061・1067・1068）15点、a_3手法調整のもの25点、b_0手法調整のもの(1069・1071・1072)38点、b_1手法によるもの(1064)8点、b_2手法調整のもの(1065・1066)38点、b_3手法調整のもの（1062）49点がある。Aタイプ暗文の例が圧倒的に多く、192点を数え、Bタイプ暗文の例は17点、暗文を施さない例は17件ある。左上がり斜放射暗文の例は1点のみで、他はすべて右上がり斜放射である。

Ⅱタイプの杯C

Ⅰタイプの杯Cは、明黄灰色を呈し、胎土も緻密で硬質に焼き上がり、平城宮から出土するⅠ群土師器と共通する。Ⅱタイプの杯C類は、暗茶褐色を呈し、緻密な胎土のものもあるが、多くは砂を含み、焼成温度もやや低く雲母が溶けないで残る例が多い。

胎土と焼成

杯Cのうちには、灯芯を確認できるものが114点、肌色から桃色に変色したものが118点、内面に有機物あるいは油の浸み込んだ痕跡をとどめるものが35点ある。黒斑をもつ例は33点ある。

杯X（Fig.55－1266・1267）　口径17.5cm、器高3.5cm程度で、口縁部外面はヨコナデするが、以下の部位は不調整で木の葉の圧痕をとどめない。1266は、砂を含む焼け締りの悪い胎土で、暗褐色を呈す。灯明皿。1267は口縁部に3段にわたってヨコナデ調整を施す。

皿Aの法量　**皿A**（Pl.100・101，Ph.174～177－1088～1130）　総数308点あり、口径21.2～24.5cm、器高2.2～3.7cmの皿AⅠ、口径14.6～17.0cm、器高2.1～2.6cmの皿AⅡの2種がある。

皿AⅠの分類　皿AⅠには、次の6種がある。

（1）　器壁が厚く、口縁が内湾し、端部は内側に折り返され大きく肥厚し、内面底部には3～4回巻き螺旋暗文を、口縁部には比較的粗い斜放射暗文を施すもの（1088～1099）。199点出土しており、2点のみb0手法で、他はすべてa0手法で調整する。暗文のない例は15点ある（1122・1124・1125）。水簀を思われる緻密な胎土で灰白～黄灰色に焼き上り、平城宮土器の分類ではⅠ群土師器に相当する。

（2）（1）と同様に内湾する口縁形態をとるが、やや器壁が薄く、1110のように底部内面の螺旋は細かく3重にめぐり、口縁部の斜放射暗文も細かいもの（1107～1112）。すべてa0手法調整による。平城宮土器Ⅱに属すⅠ群土師器である。

（3）　口縁部が外反するタイプで、1103のような大きく内巻の螺旋を底部内面いっぱいに配する。斜放射暗文は、杯Aのように底部と口縁部の境から発するものが多いが、1100～1102のように外巻螺旋暗文を施すものや、同じく外巻きで剣菱状暗文を施す例（1118）もある。総数52点あり、a0手法調整のもの30点（1100・1103）、b0手法調整のもの22点（1101・1102・1104～1106・1118）あり、暗文のない例は僅か2点のみである。

（4）（1）とよく似た作りであるが、暗文が特殊なもので、口縁部内面の斜放射暗文がジグザグに連続して施されるもの（1118）。斜放射暗文はなく、底部から連続する螺旋暗文が口縁部まで及ぶもの3点（1120・1121）。いずれもa0手法調整。

（5）　口縁部が外反し気味に外傾し、暗文を施さないもの（1123）。口縁部を3段にナデ成形し、底部外面には粘土紐巻上げ痕跡をとどめるが、木葉の圧痕は認められない。

（6）　口縁部が内湾する形態で、c0手法で調整し、暗文のないもの（1124～1130）。総数48点ある。c0手法としたが平城宮土器Ⅳにみられるc0手法（口縁部全面ヘラ削り）と異なり、すべて口縁部上位を削り残す。

皿AⅡ（Pl.100－1113～1117）　いずれも皿AⅠの（2）タイプの口縁部形態で、総数7点出土。a0手法調整のもの2点（1113・1115）、b0手法調整のもの5点（1114・1116・1117）がある。外巻き螺旋暗文で、斜放射暗文が粗に施されるもの（1113）、杯AⅠの1118のような剣菱形の螺旋暗文をもつもの（1117）、暗文のないもの（1114）がある。1116は、螺旋・斜放射暗文も密に配され、平城宮土器Ⅱに属す。

皿Aのうちには、灯芯痕を確認できるものが68点、桃色から肌色に変色するものが64件、内面に有機物が付着するものが56件ある。黒斑をもつ例は11点あるが、左上がり斜放射暗文はみられない。

皿X（Fig.55－1252～1257）　総数8点出土。皿XⅠ（1256）は、砂粒を含み黄灰色に焼き上る。c0手法による調整で、口縁部が内湾し、端部は内側に折り返されるが肥厚しない。口径23.0cm、器高1.9cm。皿XⅡには、口縁部が内湾し器高の低いもの（1256）、内湾する口縁部をもつもの（1252・1253）、外反する口縁部をもつもの（1254・1256）、内湾する口縁で端部が内傾する黒色土器A類のもの（1257）がある。1254は、b0手法による調整であり、口径19.4cm、器高2.1cm。灯明器。1252は口縁部上位までヘラ削りを施す。口径16.4cm、器高2.7cm。1243は、b0手法による

調整であり、口径19.2cm、器高2.6cm。灯明器。1243・1244は、口径19cm、器高2.6～2.8cmであり、b_0手法で調整する。

皿B（Pl.101，Ph.178－1148・1149）　いずれも口径30cm以上の皿BⅠで、総数4点出土している。1148は、口縁部が外反する形態で、b_0手法で調整され、底部内面には大きな螺旋暗文を施す。1149も、同様な形態で、a_0手法で調整され、底部外面には剣菱形の暗文を施す。口縁部と底部の境目あたりに、焼成後穿孔した穴が3ヵ所残る。他の2点のうち、1例はc_2手法で調整され、口縁部内面には暗文はないが、底部内面には大型の螺旋暗文を、また底部外面には細い単位の螺旋暗文を施す。

椀C（Ph.176，Fig.55－1246～1251）　総数7点あり、うち1246・1247は完形である。いずれもe手法による調整で、口径13.0～14.2cm、器高3.3～4.4cm。口縁部内面の内湾部分は、曲刃コテによる断続削りで、刃の圧痕が残る。1248は口縁部中位に焼成後に2孔を穿つ。内面に油の痕跡をとどめるもの2例、澄桃色に変色するものが2例ある。黒班は、底部外面に存するもの3点、口縁部外面に存するもの1点ある。

椀D（Pl.101－1131～1147）　皿AⅠと皿AⅡの間の大きさであるが、径高指数がそれらより高い。内湾する口縁部で、口径17.8～19.8cm、器高2.8～3.9cm。総数114点中、c_0手法調整のものは100点（1134～1147）、c_2手法調整のものは1点（1133）、c_3手法調整のものは3点（1131・1132）ある。c手法としたが、口縁まで全面に削る例は数例で、多くは上端を削り残す。平城宮出土のⅡ群土師器である。灯芯痕をもつもの19点、橙色に変色するもの15点、内面に油とみられる有機物を残すもの19点ある。黒斑をもつ例は6点ある。

椀X（Fig.55－1258～1262）　成形法や胎土も平城宮・京で一般的な椀類とは明らかに異なり、また出土例が少ないものに対する呼称であり、細分可能である。1258は、e手法による調整で形態的には椀Cに通ずるが、それよりひとまわり大きく、口径17.0cm、器高4.5cm。この例の他にもう1点出土している。1259・1260は、口径15.8～16.4cm、器高3.3～3.7cmであり、平底で内湾する口縁部からなり、口縁端部内側に折り返すが肥厚しない。底部から口縁部中位までをヘラ削り調整する。1250は灯明器。1261・1262は、杯Cの形態に似るが、非木の葉成形で暗文を施さずe手法で調整する。両者ともに灯明器として使用する。椀Xは総数20点出土。

鉢B（Fig.55－1274）　丸底に近い底部と内湾する口縁部からなる。口縁部上端は立ち上り、端部を内側に折り返し小さく肥厚さす。底部と口縁部下半部にヘラ削り調整を加える。Ⅰ群土師器に似た砂粒を含まない精良な胎土である。河内地方で出土する。平城宮・京出土例は少なく、前川遺跡の例が知られる程度であるが、その例ではa_0・a_3手法による調整である。

鉢E（Ph.177，Fig.55－1269～1273）　総数14点あり、やや小型の1273以外は口径18.2～19.4cm、器高5.2～6.5cm程度の法量である。丸底で内湾する口縁部をもち、口縁部のやや上位から底部外面はヘラ削り調整する。砂粒を多く含む胎土で、灰褐色に焼き上る。ヨコナデ・ナデ調整以前の内面の調整は、曲刃コテによる削りであるが、内面に布目圧痕を残すもの(1271)が3点あり、内型成形の可能性が高い。油煙をもつ例が2点、桃黄色に変色するものが1点ある。鉢Eは、平城宮推定大膳職の土坑SK219出土品にみられる程度で、平城京では出土することは稀である。

鉢X（Ph.177，Fig.55－1278～1284）　総数38点あり、口縁部をヨコナデ調整し、内面底部はナデで調整する。口縁下半から底部外面は、不調整でe手法に属するが、一般のe手法より、ナ

デの範囲が広い。1281のように、ヨコナデ・ナデ調整を加える前に内面を器面を板ベラ状で調整し、ハケ目状のひっかき痕をとどめる例が9点、1279のように曲刃コテで削る例4点ある。鉢Xに「下番」と墨書した例が2点（Pl.126－1294・1295）ある。灯明器として使用の明らかなものは8例、内面に有機物の残滓が残る例が7点、桃色に変色するもの1点ある。黒斑を有するものは総数7点あり、口縁部外面が2点、底部内面が1点、他は底部外面に存する。

鉢Xも出土例が少なく、平城宮推定内膳司にある土坑SK820から4点出土しているにすぎない。そのうち2点は灯明器として使用されている。また、SK820出土例では底部外面に木葉圧痕をとどめる例が1点あるが、SD5100出土品には見い出せない。

高杯（Pl.102，Ph.181・183－1163～1166）　総数17点出土した。口径29cm、器高30cm、脚径14cm前後の大型の高杯Ⅰが3点、口径20cm未満、器高22cm、脚部径12cm前後の高杯Ⅱが5点ある。いずれも杯部外面をヘラ削り調整し、ヘラ磨きを施す。

高杯の分類

高杯Ⅰ（1164）は、杯部の大半を欠損するが、他の部位は完存する。杯部内面には、内巻きの螺旋暗文を渦巻き状に配し、斜放射暗文を加えない。脚部は、心棒作りで、脚柱部をヘラ削りで14面に面をとる。裾部はヨコナデ調整であり、外面にはヘラ磨きを施し、脚柱部内面はヘラ削りで調整する。Ⅰ群土器。もう1点は、杯部を欠損するが、脚柱以下は完存する。1164と同様な調整を施すが、脚柱部の面取りは11面で、脚部内面にはヘラ削りは施さない。Ⅰ群土器。他の1点は、脚柱部中位以下と杯部の口縁を欠損する破片であり、内面には螺旋暗文と斜放射暗文を施す。脚柱部は心棒造りで、外面を8面に面取り、内面はヘラ削り調整を加える。Ⅱ群土器。

高杯Ⅱは、脚柱部の残るものはすべて心棒造りである。裾部は1点のみヨコナデ調整で、他はすべて内外面をヘラで削る。外面にはヘラミガキ調整を加え、脚柱部内面にもヘラ削りを施す。脚柱部の面取りは9～11・13・14面で、杯部内面に暗文を施さないのは1点のみである。杯部内面に内巻きの多重螺旋暗文と2段斜放射暗文を施すものが3点ある。1165・1166は、それぞれ脚柱部を10面・11面に面取り、杯部外面はいずれも5回、手を持ち替えヘラ磨きを施す。比較的大きな巻きの螺旋暗文と1段斜放射暗文を施すものは5点あり、1166は比較的薄手で口縁部が外反する。口縁端部に灯芯痕をもつ。

高杯X（Fig.55－1268）　脚部を欠損するが、口径21.6cm、高さ約2cm程度の杯部で、縁部が大きく外反する。杯部外面にはヘラ削り調整を施す。前述の蓋Xと共通する胎土組成である。

壺A（Pl.103－1180・1181・1183）　土師器の貯蔵器形は、極めて少なく、壺Aが11点、壺D1点にすぎない。壺AⅠは全体がうかがえる資料はない。口径17～22cm、底部高台径12～14cm程のものが口頸部片2点、底部片2点ある。図示しなかったが、形態や調整法は、次に述べる壺AⅡ・AⅢと同様である。壺AⅡは、1点あるが、器高・底径がわかる例はない。1183は、口径13.0cmで、肩部に三角形角状把手を付す。口縁部はやや外反気味に立ち上り、端部は内側に折り返され小さく肥厚する。口縁部はヨコナデで、体部外面はナデ調整後、横方向にほとんど隙間なくヘラ磨きを加える。肩部内面の内湾部は曲刃状のコテで断続的に削りを施すが、以下の部位はナデ調整する。壺AⅢは総数6点あり、全形のわかる1181は口径11cm、高台径9.4cm、器高18cm。口縁部体部は壺AⅡと同様な調整であるが、底部外面はナデ調整で丸みを有し、高台は用をなしていない。杯AⅡに属す底部破片で、ヘラ削りを加えるものが1点ある。壺AⅡで内面に油様の有機物が付着する例は2点ある。

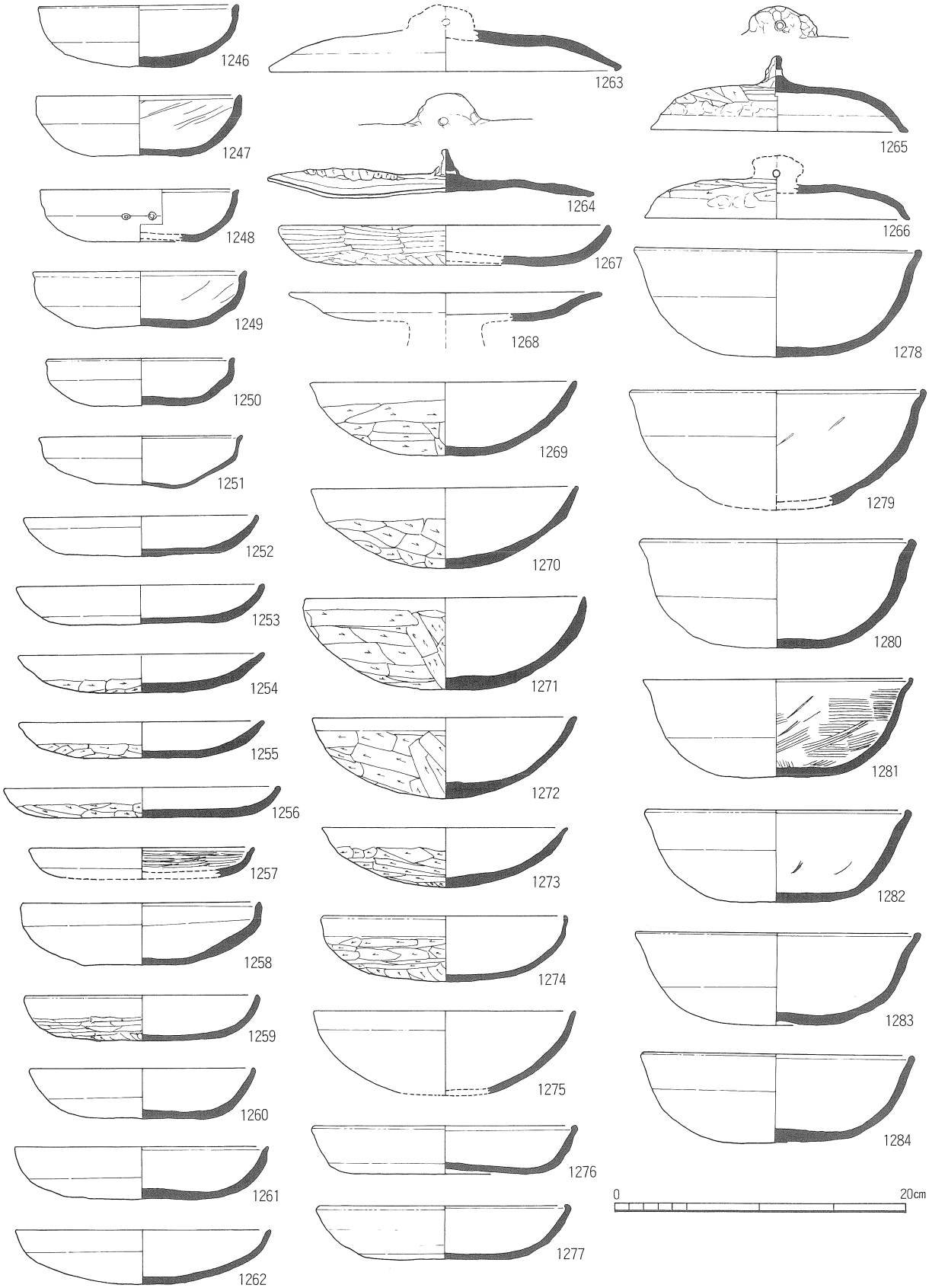


Fig. 55　SD5100出土土師器食器実測図（Ⅰ・Ⅱ群以外）

壺A蓋（Pl.102－1153～1155）　つまみを付す平坦な頂部から外方に開き気味に折れまがる縁部からなる。全形の知れるものは少なく、口径17～19cmの壺A蓋Ⅰが3点、うち1点は頂部内外に墨書がある（Pl.126－1296）。他に口径12.0～13.5cm、器高3.0～3.5cmの蓋Ⅲ（1153～1155）がある。蓋Ⅰは頂部と縁部内外面を全面ヘラ磨きを施す。これに対し、蓋Ⅲには、縁部にはヘラ磨きを施さないもの（1154・1155）と、施すもの（1153）の両種があり、前者にはボタン状の、後者には扁平板状のつまみが付される。壺A蓋には、灯芯痕をもつ例が1点（1183）、内面油様の有機物痕跡をとどめるものが2点ある。

壺D（Pl.103，Ph.173－1180）　口縁部が短く内傾し、口径や底径に比して器高の低いものであり、1点のみが出土した。口径11.4cm、底径10.0cm、器高6.0cm。縁部を除く外面はヘラ削り調整で、体部には密なヘラ磨きを施す。体部内面はヨコナデ、底部内面はナデで調整する。内面には黒色の有機物が付着する。

盤（Pl.103・104，Ph.178～180－1167～1179・1186～1189）　いずれも高台を付さない盤Aで、総数39点出土している。うち体部に把手を有するものは14点ある。盤Aの体部外面に「多良比」を墨書する例（Pl.126－1298）があり、当時、この器形を「たらひ」と呼称していたことがわかる。口縁部の作りから、次の4類に分類可能である。

盤の分類　1類　口縁部が内湾する形態で、口縁端部が水平もしくは外傾する平坦な面をもつもの（1168・1171・1174～1177）。総数15点。口径39.0～42.5cm、器高11.0～12.6cmの大型品（1168・1169・1171）、口径33.4～37.0cm、器高8.0～11.3cmの中型品（1175～1177）、口径29.2cm、器高6.8cmの小型品（1174）がある。b_1手法の1169の他は、すべて口縁上端までヘラ削り調整を施すもので、c_0手法で暗文のないもの（1168）、c_0手法で暗文をもつもの（1176・1177）、c_2手法のもの（1171）、c_3手法のもの（1174・1175）がある。1類に属す小片で把手を有する例は1点のみで、他はすべて把手をもたない。内面の暗文は、底部も螺旋暗文で、多くは内巻螺旋であるが、外巻螺旋の例（1174）もあり、口縁には暗文を施さないもの（1176）もある。

2類　内湾気味に開く口縁部が端部付近で外反する形態であるが、全体の2分の1以上の破片でないと、次の3類との区別がつかない。口径41.2～48.7cm、器高12.4～13.2cmの大型品（1167）、口径34.6cm、器高4.2cmの中型品（1179）、口径27.6cm、器高6.4cmの小型品（1178）がある。大型品はすべてc_3手法調整による。1167・1179は暗文がない。中型品とした1179は、器高が低くⅢAに近いが、平城宮土器ⅡのSD485出土品にこの形態に高台を付け、体部に三角形把手を付した盤B類があるので盤とした。c_3手法で調整し、底部内面に螺旋暗文、口縁部には連弧・斜放射・連弧の3段暗文を施す。小型品の1178はc_0手法で調整する。これと同一法量のものがもう1点ある。

3類　2類の体部に三角形の把手を付すもの。口径50.6cm、器高14.3cmの大型品（1172）は、c_3手法調整により、内面には螺旋螺旋暗文を付す。口縁部中位よりやや上位に小さな三角角状把手を3方に配す。1186も大型品で、口径43.2cm、器高11.4cm。c_3手法で、内面全面に螺旋暗文、口縁部の一部には小さな渦巻文を処々に配す。3個の把手を付す1170はc_3手法、口径37.8cm、器高8.7cmの中型品。

4類　口縁部がやや外反気味に大きく開く形態のものである。1173は4個の把手をもつ、口径54.0cm、器高13.8cmの大型品。c_0手法で調整する。当品の破片の大半は、木屑層下の黒色砂

から出土したものである。同層には、もう１点これと同じ型式のものがあり、それは、口縁部内面には２段の斜放射暗文を施す。c0手法で調整し、暗文は施さない。把手の先端は口縁部にくっつく。

１～３類は、砂を含まない緻密な胎土で明黄灰～明黄褐色を呈し、平城宮のⅠ群土師器と一致する。４類は、焼け締りの悪い砂を多量に含む胎土で、暗茶褐色を呈す。Ⅱ群土師器とは違うようである。盤で内面に油煙の観察できる例は、25％以上残る破片で４点あり、25％以下の破片では６片ある。

双孔把手付蓋（Pl.104，Ph.185－1184・1185）　総数20点出土しているが、全形をうかがえるのは２点にすぎない。陣笠形で上半部が内湾、下半部が外反し、口縁端部を内側に折り返し肥厚させる。口径49.6～50.6cm。1185は全高21.3cmを測る。頂部には環状の把手を、頂部よりやや下位の笠部の相対する位置に円孔を２個穿孔する。笠部外面はハケ目で、縁部はヨコナデで、内面はナデで調整する。双孔把手蓋の破片を灯明器に利用したものが４点ある。

甕（Pl.104～107，Ph.181～185－1190～1239）　総数206点出土している。大半が使用痕をとどめる。多くは破損の後に破棄されたもので、完形品や全形が分かる例は少ない。形態的には、口径が器高より若干大きい球胴甕の甕Ａ、球胴甕で体部の相対する位置に一対の把手を付す甕Ｂ、口径が体部最大径を上まわり、胴長丸底の甕Ｃ、球胴甕で体部に片把手を付す甕Ｄ、長胴で平底の甕Ｘに分類できる。なお、甕Ａ・Ｂの区別は、２分の１以上の体部辺をもつものでないといずれか判定できないが、個体数の算定にあたっては、把手をもたないものは甕Aに含めた。球胴甕は、成形技法や調整技法の上では次の11類に分類可能であり、それぞれ胎土を異にすることから、産地の違いを反映するものと考えられる。

球胴甕の分類

Ⅰ類　体部外面にはハケ目調整を、内面にはナデ調整を施す。口縁部内面端部から頸部にかけて断続ハケ目調整を施すものもある。なお、このハケ目調整痕は、最終仕上げのヨコナデ調整でナデ消されてほとんど痕跡をとどめない例もある。また、内面のハケ目痕は、平坦な口縁部から屈曲する頸部にかけて一連の作業で行われていることから、ハケ目調整は、口頸部を折り曲げる以前に行われる調整であることがわかる。それは、口縁部内面の上位のハケ目条線に比して屈曲部の条線が巾広く開いていることからも、傍証される。胴部内面の肩部付近には、ナデ調整痕の下に、連続し互いに重複する半球状のくぼみが観察され、対する体面外面にも小さな平坦面が連続することから、少なくとも肩部は叩き成形と考えられる。口縁端部は内側に折り返され丸く肥厚する。Ⅰ類の胎土は比較的砂分が少なく長石の微粒を若干含む程度である。器種には、甕Ａ・Ｂ・Ｄがあるが、甕Ｃはみられない。

Ⅱ類　体部内外面をハケ目調整するグループ。器面調整器具による差異か、木理木目痕が器面に現れる場合と、ナデ状の細かい条理が現われ、断続押引きの際の工具のあたりが沈線状に残るものとがある。他の特徴はⅠ類に通ずるが、口縁内面にもハケ目調整をもつものが多くを占める。Ⅰ類よりも長石粒を多量に含み、器面もざらざらした感じのものが多い。

Ⅲ類　体部外面ハケ目調整後、下半部のみヘラ削り調整し、体部内面はハケ目調整を加える。口縁部は小型品は外反し、端部はは丸くおさまる。大型品はSD5100から出土していないが、内湾する口縁形態をとる。

Ⅳ類　体部外面にはハケ目調整を施すが、雑な調整で不調整の部分が大半で凹凸のある面を

もつ。対する内面は縦方向のヘラ削りで平滑に整える。Ⅰ・Ⅱ類とは異なり、口縁端部は外傾もしくは丸くおさめる。暗茶褐色の色合いで、微細な雲母片が見られるが粗砂を含まない精良な胎土である。

Ⅴ類　Ⅳ類に比べ、体部外面のハケ目調整は丁寧で、内面は曲刃コテ状の器具で縦方向のヘラ削り調整を施す。口縁端部の作りは、Ⅰ・Ⅱ類と同様、内側に折り返され肥厚する。砂粒をほとんど含まない茶褐色に焼き上る精良な胎土である。

Ⅵ類　体部外面にはハケ目調整を、体部内面上半部には曲刃コテ状の器具で横方向のヘラ削り調整を加えるが、下半部は不調整で同心円の当板痕跡をとどめる。口縁部は外反し、端部は丸くおさめるか、あるいは小さく上方につまみ上げる。粗大な長石砂粒を多量に含む。

Ⅶ類　体部外面不調整で、内面はヨコ方向に曲刃状のコテで横方向の削り調整を施す。口縁部は上方に小さく肥厚する。砂粒をほとんど含まない精良な胎土である。

圧倒的多数を占めるのはⅠ類である。次いで多いのがⅡ類で、他の類は極めて少ない。また、

産地の比定

各類の産地比定については、Ⅰ類－大和、Ⅲ・Ⅵ類－近江、Ⅳ類－河内、Ⅴ類－河内と考えられるが、他の類については確定していない。ただ、Ⅱ類は大和の可能性が高い。

甕A・B・Dの判定

次にⅡ類に分類した球胴甕について、甕A・B・Dの判定をしておく。

Ⅰ類甕　Ⅰ類で甕AⅠと判定できるのは、1201の1例のみである。口径30.0cm、器高27.3cmで、後述の甕BⅠよりひとまわり小さくて器壁も薄く、砂粒がやや多く他の一群とは様相を異にし、Ⅰ類の細分の必要性を示唆する資料である。口縁部内面にはヨコナデによって削られたかすかなハケ目痕、体部外面上位の相対する位置に丸い黒斑をもつ。甕AⅡ（1197・1198）は、口径21.0～21.4cmであり、やや胴長の形態で器高は口径とほぼ等しい。1197は、口縁部内面に断続ハケ目痕跡、体部外面上に黒斑をもつ。甕AⅢは口径17.6～14.2cm、器高12.8～14.2cm。口縁部内面にハケ目調整痕をとどめるもの（1193～1196）と、ハケ目のないもの（1190～1192・1207）に分かれる。甕AⅢの中では、口縁端の内側への肥厚が小さい1192、口径が胴部最大径を上まわる1207は特異な存在で、他とは産地の異なる可能性がある。

Ⅰ類の甕Bは、全形のうかがえる資料はないが、計測できる破片はいずれも口径30cm以上の甕BⅠ（1199・1200）のみであり、BⅡ・BⅢの例はない。

Ⅱ類甕　甕AⅠ（1238）は、Ⅰ類のそれに比べやや小さく、口径26.4cm。体部内面の底部あたりには、当板痕跡とみられる凹面がある。甕AⅡ（1229）は口径19.8cm、器高18.6cm。頸部内面にはハケ目調整痕はない。甕AⅢ（1222・1223・1228）は口径14.6～17.0cm、器高12.9～15.0cm。1222は、粗い調整で、体部外面上位にはハケ目調整を施さず、体部内面下半部のハケ目調整を省略する。1228も胴部上位をハケ目調整する。

Ⅲ類甕　Ⅲ類の甕AⅢ（1224）は、ほぼ完形で、口径15.2cm、器高13.6cmを測る。胴部上半部にハケ目調整後に施した1本のヘラ描線がみられる。

Ⅳ類甕　甕AⅠと推定する1236は口径24.2cm。体部外面のハケ目調整は比較的丁寧で、体部内面はハケ目調整後、縦方向のヘラ削り調整を施す。口縁部は外反し、端部は外傾する。甕AⅢ（1226）は口径15.8cm。体部内面上半部は曲刃のコテ状器具で横方向に削りを加え、下半部を縦方向に削る。1232は口径16.1cm。口縁部内面にもハケ目痕をとどめ、体部内面頸部付近に部分的な横方向のヘラ削りを加え、以下の部位には縦方向のハケ目を施し、一部さらにハケ目調

整を加える。

甕Ｂには、口縁部が大きく外反し、端部が外傾するもの（1235）、口縁部の外反度が低くほぼ真直に立ち上り、端部が丸くおさまるもの（1234）がある。いずれもハケ目調整は雑である。1235・1234はそれぞれ口径23.6cm、25.6cm。

Ⅴ類甕　甕ＡⅠ（1237）は口径29.0cm。内面体部は幅3.5cm程の曲刃状工具で下から上方に向かって削り上げる。甕ＡⅡ（1230・1231）は口径17.6cmと19.8cm。1230は胴部最大径が下半部にある下膨れの形態である。甕Ｄ（1233）は口径13.1cm、復原高9.9cm。内面体部中央部付近のみを横方向にヘラ削りする。

Ⅵ類甕　甕ＡⅡ（1239）と甕ＡⅢ（1227）があり、いずれも口径が胴部最大径を上まわる。1239は口径23.4cm、復原高19.2cm。口縁部内面にはハケ目調整痕をとどめる。1227は口径19.2cm。口縁部が外反し、端部は上方に小さくつまみ上げる。

Ⅶ類甕　甕ＡⅢ（1225）がある。口径16.4cmで、口縁部外反し、端部を上方につみ出す。体部内面を曲刃コテ状の器具でヨコ方向に削る。

長胴甕Ｃの分類

甕Ｃ（Pl.106，Ph.182・183－1210～1218）　長胴甕の甕Ｃは総数23点出土している。内外面の調整法と胎土組成の上から、以下の８類に分類可能である。

Ⅰ類甕Ｃ　体部下半の残る例はないが、他の例から判断して外面下半はヘラ削りを施し、内面には全面ハケ目調整を施す。1209がその例で、短い口縁部は内湾する。口径22.4cm。Ⅲ類の甕Ａと共通する胎土組成で、近江型の甕Ｃである。

Ⅱ類甕Ｃ（1211）　内面頸部付近にのみハケ目調整を施し、以下の部位はヨコ方向のヘラ削り調整を施す。口径18.6cm。口縁部は内湾し、端部がわずかに立ち上る。長石粒を少量含む。

Ⅲ類甕Ｃ（1212）　Ⅰ類の甕に似るが、口縁端部が上方に小さくつまみ上げられ、体部内面はハケ目調整の後、部分的に縦方向のヘラ削りを加える。口径22.0cm。長石粒を少量含む。

Ⅳ類甕Ｃ（1210）　口縁部は、ほぼ真直ぐに立ち上り、端部近辺で外反し、外側に折り返され、端部は丸く玉縁状になる。内面は、縦方向ヘラ削りの後、ヨコ方向のハケ目調整を加える。口径20.5cm。Ⅳ類の球胴甕と共通する胎土組成である。

Ⅴ類甕Ｃ（1215）他の例に比べ器壁は薄く、外面全面をハケ目調整し、内面は上半部をヨコ方向の削りで、下半部は下から上に向かってヘラ削り調整する。煮炊の痕跡はない。口径21.0cm、復原高33.9cm。黄灰色の焼き上りで砂粒を多く含む。

Ⅵ類甕（1217）　ほぼ完形に復原でき、口径22.2cm、器高36.6cm。煮炊した痕跡はない。体部内面は、ヨコハケ調整後、底部付近から上方に向かってヘラ削りを加える。削りはやや乾き過ぎた段階で行ったのか、暗文面に光沢をもつ。

Ⅶ類　他の一群より長い口縁部がほぼ直角に近い角度で折れ曲り、端部は内側に肥厚する。頸部付近のみは横方向のハケ目を施し、以下の部位はナデで調整する。口径20.8cmのやや小型品（1213）と、口径27.8cmの大型品（1214）があり、いずれも暗茶褐色の色合いで、球胴甕Ⅴ類に通ずる胎土組成をもつ。

Ⅷ類甕Ｃ（1216・1218）　他の一群より、口径・胴径がひとまわり大きく、口縁部も大きく折り返され、端部は丸くおさまる。体部内外両面ともハケ目調整による。一見、弥生土器の甕に似た胎土で、川砂を多量に含む。1216は口径26.0cm、器高約35cm。1218は口径27.0cm、復原

器高38.8cm。底部よりやや上の位置に、1条の沈線がある。ハケ目調整後の造作であり、おそらく口縁部のヨコナデ調整を行う際、底部のくずれるのを恐れて椀状の器形を底に押しあてたものと思われる。

甕X（Pl.106，Ph.183－1219～1221）　3点ある。1219は口径21.6cm、復原高30.8cm。口縁部の外傾度が低く、頸部との境が明瞭でない。口縁部はヨコナデで、内底部はナデで調整を加える。体部内外面は部分的にハケ目を施す。不調整の部分が大半を占め、粘土紐の巻き上げ痕跡をとどめる。1221も同様な甕Xの底部である。1220は、底部を欠損するが、平底とみられ、円筒形の体部上端を外反させ口縁部を作る。口径17.2cm。口縁部をヨコナデで、体部外面は上から下へ向かってヘラ削りを施す。内面は、胴部下半部のみを下から上に向かってヘラ削りを施すが、上半部は不調整で粘土紐の巻き上げ痕跡をとどめる。体部外面に大きな黒斑がある。

平底甕

ミニチュア甕（Pl.105－1202～1205）　4点出土しているが、いずれも小破片である。口径7.5～10.0cmで、体部外面不調整のもの(1202～1204)、部分的にハケ目調整を施すもの(1205)がある。

火にかかる甕の場合、灯明の油煙と煤との識別は困難であるが、壊れた球胴甕の底部片を灯明器に使った例が1点知られる。

鍋（Pl.108，Ph.181－1240～1244）　極めて少なく、木屑層からは2点出土しているにすぎない。ここでは木屑層下の黒灰色粘土や黒色砂出土品も合せて報告する。

木屑層出土の1241は、口径41.6cmの大型品で、口縁内外面をヨコナデ調整する。体部外面上半部は不調整であるが、下半部はヨコ方向にヘラ削りを施す。内面体部は曲刃コテ状器具で横方向に削り調整を加える。体部中程に黒斑をもつ。暗灰褐色を呈し、長石砂・雲母微粒子を含む生駒西麓産である。木屑層出土のもう1点（1243）は口径31.4cm、復原高25.2cm。体部外面はハケ目で、内面はナデで調整する。Ⅰ類の甕Aと共通する胎土で、肩部内面には無文の当板痕跡をとどめる。

黒色砂出土の1240は口径34.8cm。体部外面はハケ目調整で、内面上半部を曲刃コテ状器具で横方向に削るが、下半部は不調整で当板痕跡をとどめる。明黄褐色で長石他砂粒を多量含み、Ⅵ類の甕と相似た胎土組成である。黒色砂出土のもう1点（1244）は、鉢に近い形態で丸底と内湾する口縁部からなり、口縁部の一端を外側にひねり出した注ぎ口をもつ。口径29.4cm、器高13.4cm。口縁部はヨコナデで、体部下半部は粗いハケ目で、内面底部はナデで調整する。黒灰色粘土出土の1242は、完形で把手のない鍋Aであり、口径31.2cm、器高19.0cm。体部外面はハケ目で、内面はナデで調整する。使用痕跡がなく、底部外面には火襷痕をもつ。

移動式カマド（Pl.108，Ph.184－1245）　出土量が少なく、木屑層以外の層すべて含めても7点にすぎない。全体がうかがえる資料は黒色砂出土の1245のみである。1245は、廂上部と下半部を欠損するが、底部は長軸径49cm、短軸径45cm程の大きさの楕円形に復原できる。受口径は約23cmで、下底部から受口までの復原高31.5cm。廂は受口よりも高い位置まで広がり、下底部から廂頂部までの復原高は37.2cmを測る。体部に切開した焚口は正面形がかまぼこ形を呈し、上端幅約22cm、下端推定幅34.5cm、上端までの推定高約21cm。欠損するが、体部の相対する位置に上向きの三角形把手を付す。体部外面は縦方向ハケ目調整を、内面は断続ヨコハケ目調整を施した後、下方から上方に向けてヘラ削り調整を加える。焚口の切開、廂および把手の貼り付けは、体部の調整後に行う。

iii　須恵器（Pl.109～124，Ph.109～124，Fig.56）

須恵器は総数1855点出土している。食膳具は1633点あり、総個体数の約88％を占める。食膳具の中でも多いのは、無蓋形態の杯Ａと有蓋形態の杯Ｂ、それとセットをなす杯Ｂ蓋であり、この３者で食膳具の約83％を、また総出土量の上でも73％を占める。食膳具以外では、鉢Ａと甕Ｃが多いのが組成におけるもう一つの特色である。さらに、土師器と同様、灯明器として使用したものが多い。短時使用のもので焼成の甘いものは、土師器同様、器体に油が浸み込むので灯明器か否かの判断は容易であるが、硬質に焼き上ったものは、洗浄しすぎるとまったく痕跡をとどめず、正確な算定は困難である。以下、食膳具、調理具、貯蔵具の順に記述する。

杯Ａ（Pl.109・110，Ph.186～188－1400～1481）　径高指数（器高／口径×100）が33程で口径に比べ器高の高いグループと、径高指数が25程の口径に比し器高が低いグループに分かれる。

器高の高い一群（Pl.109，Ph.186・187）は、ＡⅠ1、ＡⅡ1、ＡⅢ1、ＡⅣ1、ＡⅤ1の５種に分化している。　径高指数の高い一群

杯ＡⅠ1（1428～1433）は、法量はが口径19.5cm以上、器高65cm以上で、総数37点ある。1428・1430は、他に比べやや器高の厚い深手のタイプで、口縁部が内湾気味に立ち上る。1428の容量は1840cc。いずれも長石粒を多量含むが、硬質に焼き上がり灰白色を呈す。火襷痕は認められない。産地不明。底部外面から口縁部中位やや下位までの範囲をロクロ削り調整する。内面底部と口縁部の境周辺をコテで削る。これと同形のもので、底部外面に「中衛厨」と墨書のあるものが、炭層からも出土している（Pl.129－1844）。　杯ＡⅠ1

Ⅰ群須恵器の杯ＡⅠ1（1431）は、完形で、口径20.8cm、器高6.8cm、容量1450cc、重量1431gを測る。暗青灰色を呈し、高温で焼成され、火襷痕はみられない。底部は陥没し、もともとヒビが入っていた不良品。

Ⅱ群の杯ＡⅠ1（1429・1432・1433）は、いずれも内外面に火襷痕をとどめ、灰青色の色合に焼き上る。長石細砂とロクロ削りやナデで墨をぼかしたようになる黒色物質を含むが、1433は極めて緻密で表面が滑らかで、内面底部と口縁部の境近辺をコテ状器具で削りを施し、調整の上でも他の２者と異なる。

杯ＡⅡ1（1434～1437）は、口径16.5～19.5cm、器高5.0cm以上で、総数35点ある。Ⅰ群の杯ＡⅡ1（1436）は、焼成が甘く、底部内外面と口縁部上部が重ね焼きのためか黒灰色を呈す。火襷痕をもつ。底部外面を平坦に削り、口縁部の下端を削るのがⅠ群に共通した特徴である。　杯ＡⅡ1

Ⅱ群の杯ＡⅡ1は、Ⅰ群に比べ底径が小さく、口縁部の外傾度が大きく、丸味をもたせて底部を削り、口縁部の高位までロクロ削りする。やや器高が高いもの（1434・1435）と、低いもの（1437）の２種がみとめられる。1434は、完形で、容量970cc、重量360g。1435も、ほぼ同大で、容量930cc。やや小型の1437は、容量680ccで、灯明器。これと同径で口縁部外面に「奴」と墨書した例（Pl.127－1825）がある。

杯ＡⅢ1は、口径15～16.5cm、器高4.8cm以上の法量で、総数45点ある。Ⅰ群の杯ＡⅢ1（1445～1447）は、焼成が甘く灰白色を呈し、重ね焼きのため生じた黒斑が底部内外面や口縁部外面にみられるものが多い。いずれも底部外面をロクロ削りし、合せて口縁下部周辺を１～２周ロクロ削りを加え、底部と口縁部の境に鋭い稜を作るのが特徴である。1445は完形に復され、容　杯ＡⅢ1

量780cc、280g。

II群の杯AIII1には、器高が比較的低く、容量が610～620cc程で底部を平坦に削り出すもの（1438～1440）と、器高と口縁部の外傾度が高く、容量が650～840ccほどで、底部に丸味をもたせて削るもの（1441～1443）がある。1443は、完形で、容量640cc、重量310gを測る。

杯AIV1　杯AIV1は口径12～15cm、器高4.2～5.3cm、容量360～540ccの法量である。杯Aのうちで量が最も多く総数90点ある。このうち、灯明器と確認できたものは62点ある。I群の杯AIV1（1440～1405・1415・1418～1420）は、前述の杯AIII1同様口縁部下端、すなわち腰部に1～2回ヘラ削りを施し、直線的に造作するのが特徴である。焼成の甘い例が多い。1405は、完形品で、容量450cc、重量240g。

II群の杯AIV1（1406～1447・1421・1422）は、腰部を細かくロクロ削りして丸味をもたせるのが特徴であり、焼成の甘い例はほとんどない。1411は、完形で、容量400cc、重量240g。

杯AVI　杯AV1（1423～1427）は、口径9～11cm、器高4～5cm、容量200～340ccで、総数15点ある。うち灯火器として使用したものが9点ある。I群の杯AV－1は、II群に比べやや口径が小さく、底部を調整しないもの（1425）と底部をロクロ削りするもの（1426・1427）がある。II群の杯AV1（1423・1424）は底部を丸く削り出す。

径高指数の低い一群　口径に比べ器高の低い杯A類（Pl.110）も、AI1、AII2、AIII2、AIV2、AV2の5種に分化している。I・II群があるが、後者は極めて少ない。

杯AI2　杯AI2は、すべてI群土器であり、総数13点ある。口径22cmを超える大型品（1460・1461）もあるが、口径20～21cm、器高6.0cm前後のもの（1462・1463）が多数を占める。焼成火度の低いものが多く、灯火器として使用したものが7点ある。すべて底部をロクロ削り調整する。1460は容量1450cc、重量570g。1462・1463はそれぞれ容量1290ccと1440ccである。

杯AII2　杯AII2は、器高5.5cmを超える例（1472・1475）もあるが、口径17.5～20cm、器高3.9～5cm未満、容量が650～1000cc未満のものが圧倒的に多い。総数52点で、灯火器は35点ある。II群土器は極めて少なく、先に例外的とした1472のみであり、他はすべてI群で占められる。

I群とした杯AII2には、ややざらざらした砂っぽい胎土で焼成が甘く、底部をロクロ削りする1群（1470・1473・1474）と、比較的硬質に焼き上り底部不調整の1群（1464～1469・1475・1476）があり、細分の余地を残す。1471は底部をロクロ回転を使わないで手持ちヘラ削りする特殊例である。

唯一のII群須恵器である1472は、内湾する口縁形態で、底部から口縁部中位までをロクロ削り調整を施す。完形品で、容量1150cc、重量400g。

杯AIII2　杯AIII2（1477～1482）は、杯AII2同様底部不調整のもの（1478～1480）とロクロ削り調整を施すもの（1481・1482）があり、前者が多数を占める。II群の杯AIII2（1427）は、極めて少なく、1427を含め4点にすぎない。

杯AIV2　杯AIV2（1448～1453）は、口径12～15cm、器高4.2cm以下、容量320～480ccの法量で、総数26点ある。このうち灯火器は2点。1点を除き、すべてI群須恵器で、底部不調整なもの（1448・1449・1451・1452）とロクロ削りを施すもの（1450）がある。後者は少なく、1450の他に1点あるにすぎない。II群杯AIV－2は、極めて少なく、口縁部外面に「□□自」と墨書したものが1点ある（Pl.127－1828）。

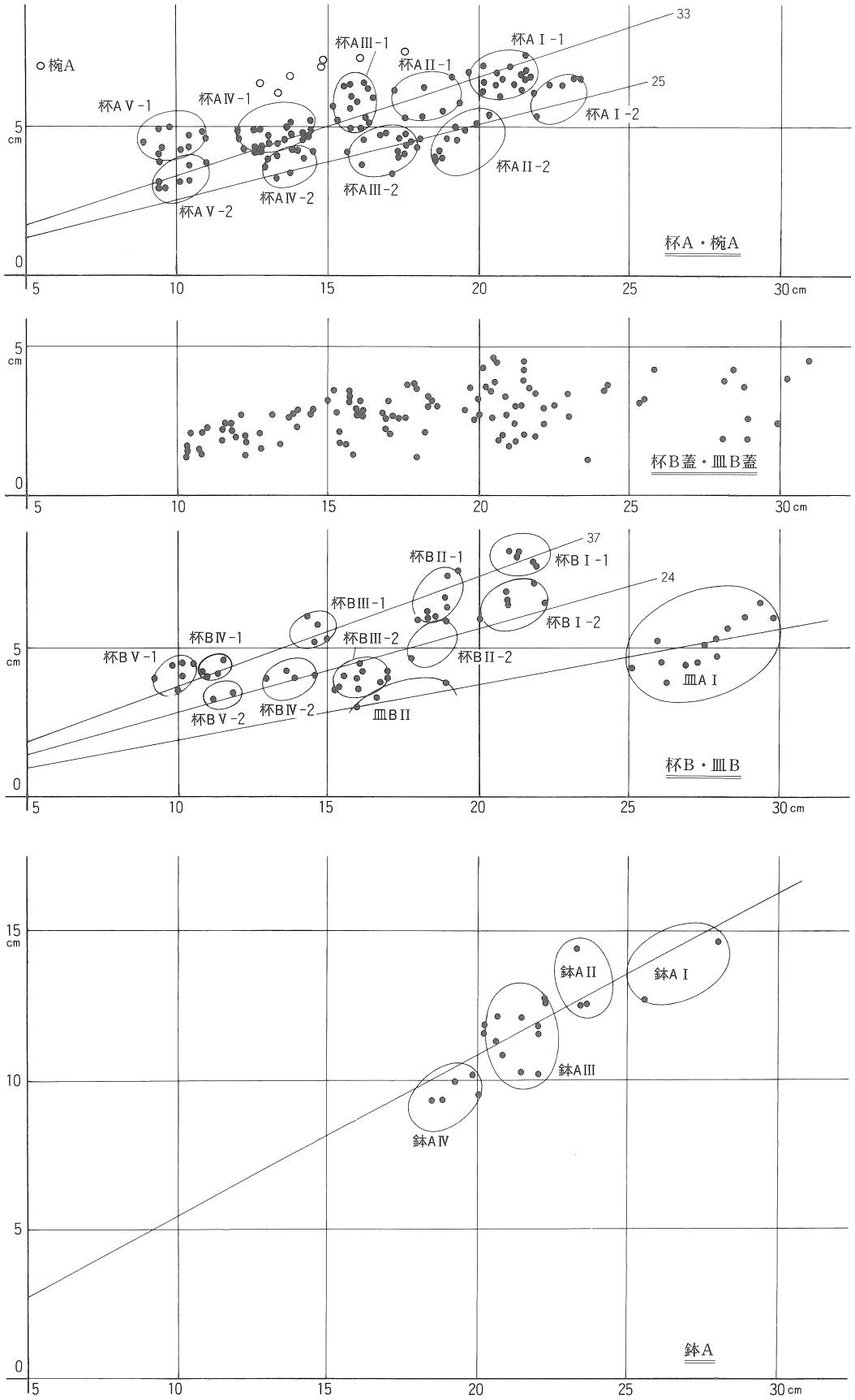


Fig. 56　SD5100出土須恵器食器法量分布図

杯ＡＶ2（1454～1459）は、口径９～11cm、器高４cm未満の法量で、総数25点ある。すべてＩ群須恵器であり、底部にロクロ削り調整を施す例は２点のみである。

杯Ｂ（Pl.111・112，Ph.189～191）　総数357点あり、口径・器高が計測可能なものは115点ある。杯A同様、径高指数が高い一群と低い一群に分れる。

径高指数の高い一群

径高指数の高い一群（Pl.111）は、ＢＩ1、ＢII1、ＢIII1、ＢIV1、ＢＶ1の５種に分化する。

杯ＢＩ1

杯ＢＩ1は、口径19～22cm、器高7.0cm以上、容量1500～1970ccで、総数11点ある。Ｉ群杯ＢＩ1には、口縁部が内湾気味に立ち上るもの（1527）、口縁部が直線に立ち上り、外反度の小さいもの（1533・1544）、腰部付近が内湾し、それより上位の口縁部がやや外反気味に立ち上り、比較的外傾度の大きいもの（1531・1524・1532）がある。いずれも底部にはロクロ削り調整を施すが、1524の高台内側に爪状圧痕がかすかに残る。

II群の杯ＢＩ1は、1530のみで、腰部が内湾し、口縁部上位が外反気味に外方に開く。内面腰部部分は、曲刃コテ状の器具でロクロ目を削り、曲線的なカーブを造作する。

1525・1526は、長石粒を多量含むが硬質に焼き上り、外面全面に自然釉が降着する。Ｉ・II群の須恵器とは明らかに異なるが、産地は定かでない。いずれも低短な高台を付す底部は、高火度焼成のため陥没する。1530は、ほぼ完形で、容量1530cc、重量750g。1526は、容量1500ccで、口縁部外面には縦方向のヘラ描き１本線が刻されている。

1529は、高台を欠損するが、かなり奥まった位置に付される。腰部は内湾し、口縁上部はほぼストレートに外傾する。砂粒をほとんど含まない均質な胎土である。産地不明。

杯ＢII2

杯ＢII１は口径17.5～19cm、器高6.0cm以上、容量950～1200cc。Ｉ群の杯ＢII1(1535～1539・1541・1542)の底部は比較的広く、口縁部は内湾もしくはわずかに外反気味に立ち上るが、外傾度は低い。多くは底部にロクロ削りを施すが、1542はヘラ切りした後、ナデで調整する。底部外面、高台内側周辺に爪状圧痕を残す例(1539)もある。1539は完形で、容量1050cc、重量500g。

II群の杯ＢII1（1534・1528・1540）は、腰部に張りを有し、比較的狭い底部から口縁部が外反気味に大きく開く。口縁下端から底部外面をロクロ削りを施すが、1540は中央部付近を削り残す。いずれも腰部内面は、曲刃コテによって、ロクロ目を削り去る。

杯ＢIII1

杯ＢIII1（1520～1523）は口径15～17cm、器高5.0cm以上、容量510～590cc。いずれもＩ群土器で、底径が狭く口縁部の外傾度の高いもの（1520・1522）、やや器高が低いが底径は比較的広く、口縁部の外傾度が小さいもの（1521・1523）がある。1520は灯明器。

杯ＢVI1

杯ＢVI1(1518・1519)は口径11～12.5cm、器高3.5cm以上、容量220～270cc。総数13点あり、灯明器は１点。いずれもＩ群須恵器で、底部は不調整で、1158・1559のように爪状圧痕をもつ例が総数３点ある。1159の底部外面には焼成前に施した針描き刻線文が残る。

杯ＢＶI

杯ＢＶ1（1510～1517）は口縁部の外傾度が低く口径９～11cm、器高3.5cm以上、容量200～240cc。1510は、完形で、容量200cc、重量145g。Ｉ群が多く、II群は1512を含めて２点、総数16点ある。灯明器は１点ある。Ｉ群（1510・1511・1514～1517）はいずれも底部不調整で、1511・1513は底部外面に爪状圧痕列が残る。II群（1512）は底部ロクロ削り調整を施す。底部外面には爪状圧痕列が残る。

口径に較べ器高の低い一群（Pl.112）も杯ＢＩ2、ＢII2、ＢIII2、ＢIV2、ＢＶ2の５種に法量分化する。

杯ＢＩ2（1582～1592）は、口径20cm以上、器高７cm未満、容量1400～1650cc。すべてＩ群須恵器で、口縁部が内湾気味に立ち上るもの（1582・1590・1591）、外反気味に立ち上るもの（1583～1589・1592）で底部中央を削り残す例もある。1588・1592はナデ調整を施す。 杯ＢＩ2

杯ＢII2（1575～1581）は口径17.5～19.5cm、器高６cm未満、容量960～1350cc。総数12点ある。Ｉ群の杯ＢII－１は、口縁部が外反気味に立ち上がり、やや焼成が甘く、杯Ｂには珍しく口縁部内・外面に火襷をもつもの（1578・1579）と、焼成堅緻で口縁部が内湾気味に立ち上るもの（1581）がある。いずれも底部外面にロクロ削りを施す。1580は、焼成良好で、焼成時別個体を重ねた部分以外の外面に自然釉が降着し、灰白色の斑文状を呈す。底部ナデ調整であり、産地不明である。なお、II群の杯ＢII2は皆無である。 杯ＢII2

杯ＢIII2（1560～1574）には、1577のように口径19.0cm、器高3.8cmのやや大型品も存在するが、多くは口径15.5～18.0cm、器高５cm未満のものである。また、口縁部と底部の境が稜をなすもの（1575・1576）もあるが極めて少なく、多くは腰部が丸味を有し、口縁部が内湾するか、あるいは口縁上端がわずかに外反する形態である。底部外面をナデ調整するのは1561のみで、他はすべてロクロ削りを施す。灯明器として使用する例が９点あり、図示したものでは1561～1563・1567・1568・1574・1575が灯明器。 杯ＢIII2

Ｉ群の杯ＢIII2には、胎土に粗砂を含み、高台幅がやや広いもの（1561～1563・1567）と、胎土に砂粒を殆ど含まず、ロクロ削り調整も丁寧で高台幅は狭く、高台端面がくぼんだ面をなし、高台内端で接するもの（1560・1564～1566・1568・1570・1574）がある。Ｉ群の容量は360～590cc。うち1562は、完形で、容量360cc、重量290g。1564の底部外面には、判読できないが、焼成前に施した針描き刻書がある。1574の底部外面にも同じく針描きによる「×」状刻線文があり、また高台内部周辺には爪状圧痕をとどめる。

II群須恵器はないが、Ｉ・II群のいずれにも属さない産地不明品（1571～1573・1576・1577）がある。1569・1571・1577は、同群で、他の一群に比べ器高が低く、高台も低短である。1571・1577の底部外面に静止糸切り痕をとどめる。容量は、1569が430cc、1571が510cc、1577が560cc。1572は、極めて細身の高台で、器表面が黄灰色に発色し、砂ぽい胎土で焼き締りが悪い。1573も、器高が低く、端面が大きくくぼむ幅広の高台を有し、胎土には緻細な長石粒を多量に含む。全体の４分の１程度の破片であるが、底部外面に針描きによる「×」状の刻線文の一部が確認できる。播磨産か。1575は、腰部に稜を有し、底部が高台より突き出す、所謂、出尻タイプで、微細な砂粒を多量に含み、焼け締りが悪い。容量700cc。美濃産か。 畿外産の杯ＢIII2

杯ＢIV2（1555～1558）は口径11～14.5cm、器高4.5cm未満、容量200～420cc。Ｉ群の杯ＢIV2には、高台が腰部よりやや内側に付され、口縁部が内湾気味に立ち上るもの（1556・1557）と、やや古手で腰部よりやや奥まった位置に高台を付し、口縁部が外反気味に立ち上るもの（1558）がある。いずれも底部外面にナデ調整を施す。1556は灯明器。1555も、1558と同様な形態をとるが、Ｉ群よりも多量に長石粗粒を含む。産地不明。完形で、容量200cc、重量240g。底部外面はロクロ削りを施す。高台に囲まれた底部外面を硯面として使用し、墨が遺存する。 杯ＢIV2

杯ＢＶ2（1545～1554）は口径10～12cm、器高3.5cm未満。300cc程度の容量のもの（1554）もあるが、多くは180～220ccの容量である。総数23点あり、灯明器は２点。すべてＩ群土器に属し、底部をロクロ調整するもの（1549・1551・1553）は少なく、ナデ調整のものが多い。 杯ＢＶ2

杯Ｂ蓋（Pl.113・114，Ph.192～195）　既に述べたように、対になる杯Ｂには器高の高い一群と器高の低い一群がある。蓋は双方と組み、厳密には身が分らないと法量の決定は困難である。ここでは、一応、法量分布のあり方から、口径20～22.5cmのものを杯ＢⅠ蓋、量的には極めて少ないが、18.5～20cmのものをＢⅡ蓋、15～18cmのものをＢⅢ蓋、12.5～14.5cmのものをＢⅣ蓋、10～12.5cmのものをＢⅤ蓋として記述する。また、杯Ｂ蓋の形態には、（１）－頂部が平坦で器高が低く、縁部がわずかに屈曲するＡタイプ、（２）－頂部が丸味を有し縁部との境が明瞭でなく、笠形を呈すＢタイプ(1638～1651)、（３）－頂部と縁部の境なく平坦なＣタイプの３種がある。

縁部形態に３タイプ

杯ＢⅠ蓋

Ⅰ群の杯ＢⅠ蓋には、Ａタイプ（1632～1636・1638～1651）とＢタイプ（1617・1620・1623・1625・1626）とがある。

Ａタイプの杯ＢⅠ蓋は後の時期のそれと比べ縁部の屈曲は小さい。完形品の1635・1647は重量450g、1639・1649は400g。つまみの中央が高く突出するもの(1632～1636・1638・1646～1649)、上面が平坦もしくはややくぼむもの（1639～1642）、小さく突出するもの（1643～1645）、丸味を有するもの（1650・1651）と実に多様である。頂部の調整はすべてロクロ削り調整による。外面に自然釉が降着するものは少ない。1644は内外面に火襷痕をもつ。1648は転用硯。1634・1639・1640・1647・1649は灯明器として使用する。

Ｂタイプのつまみは、1617のように中央がやや突出するもの、1625のように上端がくぼむものがある。1620は頂部ナデ調整、他はロクロ削り調整を施す。1626は外面全面に自然釉が降着する。1617の頂部外面には火襷痕をとどめる。1623は転用硯。他に、灯明器が４点ある。

Ⅱ群の杯ＢⅠ蓋は、量的に少ないが、Ⅰ群同様Ａ・Ｂ両タイプがある。Ｂタイプ（1623・1629・1630）は、いずれも突出するタイプのつまみをもち、頂部をロクロ削り調整を施す。自然釉の降着する例は皆無である。1629は、完形で、450g。1630は灯明器として使用する。他にＡタイプで灯明器に使った例が１点ある。

Ⅱ群の杯ＢⅠ蓋のＡタイプ（1652）は、頂部が丸味を有するつまみをもち、頂部外面にロクロ削りを施す。灯明器として使用。

Ⅲ群の杯ＢⅠ蓋（1637）は、さらに少量で、３点出土しているにすぎない。Ｃタイプの形態で、頂部に台形状のつまみを付す。完形品で、重量550g。他に、完形で頂部内面に墨書をもつ例（Pl.133－1870）がある。

この他、Ⅰ～Ⅲ群のいずれにも属さない一群（1618・1624・1627・1628・1631）がある。仮にⅧ群とする。やはり、Ａ、Ｂ両タイプある。Ａタイプ（1618・1619・1624・1627・1628）は、いずれも焼成堅緻で、外面全面に自然釉が降下する。つまみはⅢ群に似た台形もしくは頂部がやや丸味を有する。1618・1627・1628は転用硯（杯蓋硯）。1627・1628は、完形品で、それぞれ重量550g。Ｂタイプ（1631）も、外面全面に降灰し、灰緑色を呈する。

杯ＢⅢ蓋

杯ＢⅢ蓋にも、Ａ・Ｂ両タイプがあるが、Ａタイプは少ない。Ｂタイプ（1593～1616）のうち、Ⅰ群（1594・1596・1597・1600・1606・1607・1609・1611・1612・1614・1616）は、暗灰色を呈し、自然釉の降着するものは少ない。つまみの形態は多様である。いずれも頂部外面をロクロ削り調整を施す。硯として使用した例（1593・1597・1606・1616）や灯火器として使用した例（1596・1609・1614）がある。

1595は、Ⅵ群（美濃須衙産）とみられ、灰白色の自然釉が外面全面にかかり他に比べ、大き

く扁平なつまみをもつ。縁部に１条の沈線がめぐる。

1599・1602～1604・1615は、先にⅧ群としたもので、外面全面に灰緑色の自然釉が掛り、扁平台形もしくは中央が小さく突出するつまみを付す。1503は、完形で、重量250g。硯として使用する。1599・1602・1603は内面に油状の有機物が付着する。

1607は、Ⅴ群（尾張猿投窯産）で、褐色味を帯びる暗青灰色を呈し、つまみは頂部がややくぼみ、中央部がやや突出する。縁部には細かい水挽きロクロ目が残るが、頂部はロクロ削りを施す。1593・1598・1608・1613・1614・1616は、小さく頂部がやや突出するつまみをもち、胎土は極めて緻密で外面全面に灰白色～灰緑の自然釉が降着する。比較的薄手で、外面は縁部までほぼ全面を丁寧にロクロ削り調整を施す。これらは、ロクロ削りやロクロナデで糸を引く黒色物質を含まない点以外はⅡ群と極めて良く似るが、一応、以下ではⅨ群と仮称する。1593・1608・1616は硯として使用する。1614は、完形で、重量310g。灯明器として使用する。

1601・1610は長石粒を多量に含み灰白色に焼き上る。頂部が山形のつまみをもつもの(1601)と、頂部がくぼみ、中央部がやや突出するつまみを付すもの（1610）がある。1610は内面に自然釉が付着する。以下、Ｘ群とする。

Ａタイプの杯ＢⅢ（Pl.114－1653～1659・1888）は、Ⅰ群が多く、他にⅨ・Ｘ群が１点ある。

Ⅰ群（1653・1654・1657～1659）は、胎土に多量の長石粒を含み、いずれも頂部にロクロ削りを施すが、粗い調整である。1654・1659は硯として使用する。1654は完形品で重量250g。

Ⅸ群（1653・1655）は、精良な胎土であり、外面は縁部までロクロ削り調整する。1655は灯明器として使用する。

杯ＢⅣ蓋　杯ＢⅣ蓋には、Ａタイプはなく、すべてＢタイプである。Ⅰ群、Ⅷ・Ⅸ群の他に産地不明品１点がある。

Ⅰ群には、頂部をロクロ削り調整を施すもの（1660・1662・1663）と、ロクロナデ調整を施すもの（1665）がある。1663・1665は、完形品であり、それぞれ重量150gと200g。1660と1663は灯明器とに使用。

Ⅷ群は、外面全面に自然釉が降着し、扁平なつまみを付す。Ⅸ群（1661）は、やや焼成が甘く黒灰色に焼き上り、頂部がくぼみ中央部が小さく突出するつまみを付す。産地不明品(1664)は、多量の長石粒を含む胎土で、頂部外面はロクロナデを施す。他と異なり、口縁端部が内側に折り返され、内端が小さく突出する。

杯ＢⅤ蓋　杯ＢⅤ蓋には、Ａ・Ｂタイプの他に、Ｃタイプもある。

Ｂタイプのうち Ⅰ群（1669・1670・1674～1676）は、長石粗砂を含み、いずれも頂部をロクロ削り調整を施すが、次に述べるⅨ群に比べ雑である。頂部中央部がわずかに突出し、周囲がくぼむつまみを付す例が圧倒的に多い。他に頂部がくぼむ例もある。図示したものは、すべて完形品である。重量は、1669が110g、1770が100g、1774が110g、1775が150g。

Ⅷ群（1771）は、完形で、重量120g。ロクロ削り調整の頂部外面に黄緑色の自然釉が全面に掛る。硯として使用する。

Ⅸ群の杯ＢⅤ蓋（1667・1668・1672・1673）は、水篏粘土を使用し、縁部の一部まで丁寧にロクロ削り調整を施す。ゆるやかな山形を呈するつまみが一般的であるが、頂部が半球形のつまみをもつもの（1673）がある。1667・1668・1672は完形。重量はそれぞれ100g。

Aタイプのうち、Ⅰ群（1678・1685）は、いずれも完形で、比較頂部が尖ったつまみを付す。重量はそれぞれ110g、90g。Ⅱ群（1686）は、完形で、重量100g。Ⅸ群（1688）は頂部が平坦なつまみを付す。Ⅹ群(1679・1680)は頂部外面はナデ調整を施す。1680は、ほぼ完形で、150g。

頂部と縁部の境がないCタイプには、天井部がやや丸味をもつもの（1676・1681)、平坦な天井部をもつもの（1677・1682～1684・1687～1690）がある。

Ⅰ群には、宝珠状のつまみを付すもの（1676・1681)、頂部中央部が小さく突出し周囲がくぼむつまみを付すもの（1687・1689)、平坦な頂部のつまみを付すもの(1682)がある。また、Ⅰ群(1676・1682・1687・1689)はいずれも天井部をロクロ削り調整する。1676は、完形品で、重量120g。天井部中程に、焼成前に直径2cm程の穴を穿孔する。1682は、転用硯で、重量100g。1687は、天井部に火襷痕をもち、重量100g。1689は天井部内面に自然釉が降着する。

Ⅱ群(1683)は天井部全面をロクロ削り調整を施す。Ⅸ群(1681)は、ほぼ完形で、重量100g。乳頭状のつまみを付す。頂部外面全面に灰白色の自然釉が降着する。Ⅷ群(1677・1684・1690)は、いずれも焼成良好で、外面に自然釉が降着する。1667は、完形で、重量200g。算盤玉状のつまみを付し、火膨れをもつ。灯明器として使用する。1684・1690は頂部の平坦なつまみを付す。1684は硯として使用する。1684は、完形であり、重量60g。

図示しなかった資料中には、硯として使用した例が7点、灯明器として使用した例が1点ある。

杯C（Pl.114，Ph.202－1700・1701・1707～1710）　土師器の杯Aを模倣した杯Cには、口径19.5～21cm、器高3.9～5cmの杯CⅠ(1707～1708)、口径18cm前後、器高4cm前後の杯CⅡ（1700・1701・1709)、口径16.0cm、器高4.0cmの杯CⅢ（1710）がある。土師器杯Aの口縁端部の内側への肥厚を、沈線を入れて表現するもの(1700・1701・1706)、端部をつまみ出し内側に折り返して表現するもの(1707～1710)がある。

前者のタイプのうち、1701・1706は、いずれも焼成が甘く底部内外面が重ね焼きのため黒灰色を呈し、火襷痕をとどめ、底部外面を丁寧にロクロ削り調整を施す。もう一つの1708は、比較的焼成良好で、底部外面はナデ調整を施す。火襷痕はみられない。このタイプの杯Cはこの3点のみである。Ⅰ群とよく似るが、後者の杯Cに比べ器壁は薄く、製作技法や焼成も異なることから、工人グループの違いを反映している可能性がある。

後者のタイプは典型的なⅠ群土器であり、1707はやや焼成が甘く黒灰色を呈し、底部外面はヘラ切りままで不調整、1708・1709は底部をナデてヘラ切りの段を調整する。1708は火襷痕をとどめる。杯CⅢの1710は、Ⅸ群に属し、底部外面と腰部をロクロ削り調整する。完形品で重量250g。内面全面に灰白色の自然釉が霜降り状にかかる。灯明器。

杯E（Pl.114，Ph.196・202－1702～1705・1711～1715）　Ⅰ・Ⅱ群須恵器合せて14点がある。

Ⅰ群の杯Eには、口径18.4cm、器高5.8cm、容量950ccの杯EⅠ（1705)、口径15.8cm、器高6.3cm、容量710ccの杯EⅡ（1711)、口径11.8cm、器高4.6cm、容量320ccの杯EⅢ（1702）がある。いずれも底部をナデで調整する。1705は内面端部下位に沈線を施す。灯明器として使用する。1711は内傾する平坦な口縁端部をもつ。焼成が甘く、油が浸透した痕跡をとどめる。1702は比較的精巧な作りである。これと同形で内面に墨書をもつ例（Pl.129－1842）がある。

Ⅱ群の杯Eには、口径18.3～19.6cm、器高5.5～6.1cm、容量1000～1070ccの杯EⅠ(1712～1714)と、口径15.4～16.2cm、器高5.0～5.3cm、容量800cc程の杯EⅡ（1703・1704）がある。Ⅱ群の

杯Ｅは、いずれも外面底部～口縁部上位まで丁寧にロクロ削り調整を施し、腰部に丸みをもたす。また、杯ＥⅠでは腰部内面にも曲刃コテを使い削りを施す。1714は内外面に火襷をもつ。杯ＥⅡは内面端部直下に沈線を施す。1714は灯明器。

皿Ａ（Pl.110，Ph.197・200－1491・1494～1509）　皿Ａには、口径21.5～24.5cm、器高1.8～3.2cmの皿ＡⅠ（1491・1496～1500）、口径17.8～18.4cm、器高2.2～3.1cmの皿ＡⅡ（1494・1495・1501～1503）、口径13.8～14.9cm、器高2.5～3.0cmの皿ＡⅢ（1506～1508）、口径12.8cm、器高1.8cmの皿ＡⅣ（1509）がある。

Ⅰ群の皿ＡⅠ（1491・1496・1498）は、いずれも底部外面にはロクロ削り調整を施さず、ナデで調整するもの（1496・1498）と、板ベラ状のものでナデ付けるもの（1491）がある。1496は灯明皿。Ⅱ群の皿ＡⅠ（1497）は、口縁部が内湾し、内面端部直下に沈線もつ形態で、外面底部から腰部にかけてロクロ削り調整を施す。

Ⅷ群の皿ＡⅠ（1499）は、器壁が厚く、短い口縁部が内湾する。外面全面を丁寧にロクロ削り調整する。灯明皿。これと同形態で底部外面に「○」印の墨書をもつ例（Pl.131－1857）がある。

1500は、器壁が厚く、底部外面をロクロ削りで平坦に整える。焼成が甘く、灯明器として使用する。産地不明。皿ＡⅡには、口縁部が外反気味に開きやや器高が高く杯Ａに近い形態のもの（1494・1495・1502・1503）と、内湾する口縁形態でやや器高の低いもの（1501・1504・1505）がある。いずれもⅠ群須恵器で、1502は底部外面をロクロ削り調整するが、他はすべてナデで調整する。灯明器。1503は、完形で、重量200g。火襷痕を内外面に持ち、灯明器として使用する。1505は、硯として使用し、外面底部にも墨が付着する。皿ＡⅢ（1506～1508）はいずれも水篠粘土を胎土とするⅡ群須恵器。口縁部はやや内湾気味で、底部は丸味を有する。外面底部から腰部にロクロ削り調整を施す。1506・1508は灯明器。皿ＡⅣ（1509）も、Ⅱ群で、底部外面をロクロ削り調整する。灯明器。

皿Ｂ（Pl.115，Ph.198～200－1732～1745）　多くは皿ＢⅠであるが、口径29.5～30cm、器高6.0cmの深手タイプ（1735～1737）と、口径25.2～28.0cm、器高3.8～5.6cmの浅手タイプ（1732～1734・1738～1745）の２種ある。いずれも底部外面と腰部にロクロ削り調整を施す。

Ⅰ群の皿ＢⅠ（1732～1734・1737・1741・1743・1745）は、底部外面のロクロ削り調整が雑で、1734・1737・1745は焼きが甘いが、他は焼成良好で暗灰青色を呈す。1743は灯明器。1745は、完形で、重量1050g。Ⅱ群の皿ＢⅠ（1738・1739・1742）は丁寧なロクロ削りで口縁部の下位まで削りが及ぶ。1738は外面全面に灰白色の自然釉が霜降り状にかかる。1739はやや焼成が甘く淡灰青色を呈す。底部外面には爪状圧痕が輪状に残る。1742は焼成良好で暗灰青色を呈す。灯明器として使われ、内外両面に油煙が残る。

水篠粘土を胎土とするⅨ群（1735・1736・1740）は、Ⅱ群同様にロクロ削りが丁寧であり、いずれも焼きが甘く、外面は灰黒色に内面は灰白色を呈す。1736は、他と異なり、腰部に稜を削り出す。1740の外面、高台から腰部の一部に布の圧痕をとどめる。Ⅳ群の1743は、黒色砂から出土したもので、他に較べ器壁が厚い。焼成が甘く、外面は灰黒褐色を呈す。

皿ＢⅡ・ＢⅢは極めて少ない。皿ＢⅢ（1746）は炭層から出土したもの。短い口縁部が屈曲し、端部が上方に突出する蓋を逆にしたような形態に外方に踏んばる高台を付す。Ⅰ群須恵器で、底部外面はナデ調整。内面を硯として使う。前述した以外にも、硯としての使用されたも

の１点、灯明器として使用されたものが２点ある。

皿Ｂ蓋（Pl.115，Ph.198～200－1716～1731）　口径28.2～36.3cm、器高1.9～5.2cmの皿ＢⅠ（1716～1725）、口径24.2～26.1cm、器高3.1～5.4cmの皿ＢⅡがある。特に記述を加えないものは、頂部外面をロクロ削りで、内面の縁部はロクロナデで、天井部はナデで調整と理解されたい。Ａ・Ｂ・Ｃの３タイプがある。

Ａタイプの皿ＢⅠ蓋（1719・1720・1722・1723・1725）のうち、Ⅰ群は1720・1722・1723である。天井部が陥没する例が多い。1720は、外面に火襷痕をとどめ、灯明器として使用する。1723は天井部に直径８cmの重ね焼き痕跡をとどめる。1719・1725はⅡ群で、1719は他のⅡ群に比べ砂を多量含み、黒色粒子が少ない。1725は、環状鈕をもち、水篏粘土を用いる。これと酷似したものが、北側の濠状遺構SD5300の木屑層から出土している。

Ｂタイプの皿Ｂ蓋Ⅰ（1716～1718・1721・1724）のうち、1721はⅠ群、1716・1717はⅡ群、1718はⅧ群、1724はⅣ群（美濃産）である。1721は灯明器として使用する。1716は環状の鈕を付す。焼成が甘く灰白色を呈す。内外面全面をロクロ削り調整を施す。灯明器として使用する。1717は、ほぼ完形品で、1716同様に内外面ともロクロ削り調整を施す。内面の削りは、かなり乾燥した段階で行われたらしく、磨き風に光沢を放つ。前述の1725同様、水篏粘土を使用する。1718は逆台形状のつまみを付す。水篏粘土を胎土とし磁器質に焼き上がる。1724は、皿ＢⅠ（1744）同様焼成が甘く、外面は灰黒褐色に内面は灰白色を呈し、本来セットであった可能性が高い。

皿ＢⅡ蓋のうちＡタイプは、1726・1728であり、環状鈕を付す。Ⅱ群で、外面の縁部までと内面全面をロクロ削り調整を施す。水篏粘土を胎土とし、焼成はやや甘く灰白色を呈す。完形品で、重量560g。灯明器として使用する。1728はⅠ群で。焼成良好で、外面重ね焼き部の外周には灰白色の自然釉が付着する。内面の調整は雑で凹凸がはげしい。

皿ＢⅡ蓋のＢタイプのうち、1727・1730はⅣ群で、両者ともゆるやかなカーブで頂部から縁部に至る。焼成は良好であり、1727は内面に、1730は外面に自然釉が降下する。1729は、Ⅰ群で、焼成が甘い。天井部外面をロクロ削り調整するが雑で、削り残しの部分が目立つ。1731は、Ⅱ群で、外面全面を丁寧にロクロ削り調整する。比較的粗い長石粒を多量に含む。完形品であり、重量760g。

次に群構成について付言すると、Ⅰ群以外は、図示した程度であり、大半がⅠ群である。また、前述した以外の皿ＢⅠ蓋や皿ＢⅡ蓋で、灯明器としての使用例は２点、硯としての使用例は１点ある。

皿Ｃ（Pl.110，Ph.197・200－1483～1490・1492・1493）　皿Ｃは、口径22～24.8cm、器高1.9～2.3cmの杯ＣⅠばかりで、杯ＣⅡは出土していない。すべてⅠ群須恵器で、底部外面ロクロ削りを施す例（1483・1484）は少なく、ナデ調整を加える例が多い。また、ヘラ切りで生じた中央部の突出部のみを手持ちヘラ削りする例（1492・1493）もある。内外面に火襷痕をもつ例（1486・1492）も少ない。焼成が甘く灰褐色を呈するものが大半で、灰青色を呈し硬質に焼き上がるのは1484・1486・1490のみである。1483・1485・1486・1489・1493は灯明器。この他、底部外面にそれぞれ「○」や「下」と墨書した杯ＣⅠ（Pl.131－1856、Pl.130－1854）がある。

椀Ａ（Pl.114，Ph.197－1693～1699）　口径17.6cm、器高7.5cm、容量1020ccの椀ＡⅠ（1693）、口径14.9～15.8cm、器高6.4～7.0cm、容量770～830ccの椀ＡⅡ（1694～1697）、口径12.8～13.8

cm、器高6.4～6.7cm、容量520～590ccの椀ＡⅢ（1698・1699）がある。いずれも外面底部から腰部をロクロ削り調整する。

椀ＡⅠ（1693）は、他に較べ口縁部の外傾度が高く、長石粒を多量含み、焼成良好で灰白色を呈すⅠ群土器である。椀ＡⅡのうち、1694～1696はⅠ群須恵器であるが、1694は他に較べ器壁が厚い。1696は焼成が甘く、口縁部外面は黒灰色を呈す。もう一つの椀ＡⅡである1697は、Ⅱ群須恵器で、灯明器として使用する。椀ＡⅢ（1697・1698）は、いずれもⅠ群須恵器で、1698は焼きが甘く、油の浸み込んだ痕跡をとどめる。他に、Ⅱ群須恵器の椀ＡⅠ、Ⅰ群須恵器の椀ＡⅢの破片がある。

高杯（Pl.114，Ph.197・206－1691・1692）　総数15点出土しているが、全容が知れる例は図示した２点にすぎない。1691は、裾部外周部を欠くが、小型高杯であり、杯部外面を全面ヘラ削り調整。杯部内面には径10cm程の器物を重ねて焼成した痕跡をとどめる。1692は、大型品で、３方に縦方向の透しをもつ。杯部外面全面をロクロ削りする。いずれもⅠ群須恵器。

鉢Ａ（Pl.116，Ph.201・202－1747～1767）　木屑層からは総数57点出土している。黒色砂層と炭層と接合するものもあり、この両層出土品をも含めると100点以上になる。尖底のものが大半で、平底の例は1764・1765の２点のみである。口径25～28cm、器高12.6～14.6cmの鉢ＡⅠ（1761・1762）、口径23～24.5cm、器高11.3～14.4cmの鉢ＡⅡ（1747・1754・1763・1767）、口径20～23cm、器高10.2～12.7cmの鉢ＡⅢ（1748～1753・1756・1758・1766）、口径18～20cm、器高9.3～11.2cmの鉢ＡⅣ（1755・1759・1760・1765）の４種ある。ＡⅡ・ＡⅢが多くを占める。

尖底の鉢Ａは、すべてⅡ群須恵器で、器壁が薄い。外面全面をロクロ削り調整するが、口縁部上位は特に丁寧に調整し、一見、ヘラ磨き状にみえる。口縁部内面上位はロクロナデで、以下の部位はコテ状器具で平滑に調整する。また、多くは、重ね焼きのために、口縁部外面上位が黒灰色に発色する。

平底鉢Ａ（1765）は、焼成良好で、外面に自然釉が降着する。口縁部外面中位までロクロ削り調整を施す。内面は口縁部をロクロナデ、底部はナデで調整する。もう一つの平底鉢Ａ（1766）は、外面全面をロクロ削り調整し、内面は口縁部をロクロナデで、底部はナデで調整する。前者はⅢ群須恵器、後者はⅠ群須恵器。

鉢Ｅ（Pl.117，Ph.206－1768・1769）　1768は、平底で、口縁部がやや外開き気味のバケツ状の器である。口縁部を欠損するが、口径26.5cm、器高23.5cm程に復原できる。底部外面はロクロ削り調整で、やや焼成が甘く、灰白色を呈する。1769は口径30.2cm、器高13.9cm。ロクロ削りで調整した底部に高台を付す。いずれもⅠ群須恵器。

鉢Ｆ（Pl.117，Ph.202－1771・1772）　総数８点あるが、全形を復原できる資料は図示した２点である。分厚い円板状の底部に粘土紐を巻き上げて、外方に開く体部を構成する。いずれも底部不調整で、体部外面をロクロナデ調整。1772はⅠ群須恵器、1771はⅢ群須恵器で、内外面に自然釉が降着する。

鉢Ｘ（Pl.117－1770）　鉢Ｄに似た形態であるが、口縁部の一端を外方にひねり出した片口をもつ。小片で、体部下半部の形状は不明であり、焼きが甘く灰褐色を呈す。Ⅰ群須恵器か。

盤Ａ（Pl.117，Ph.205－1773～1776）　総数９点あるが、高台を付す例はない。平底と外方に開く口縁部からなり、口縁部の中程に把手を有すもの（1774・1776）と、付さないもの（1773

・1775）がある。

1774は、横方向に環状把手を付すが、環状部はひしゃげ、狭い隙間で指が入らない。成形は、粘土紐巻き上げの後、内面を当具で叩き締め、さらに口縁部内面をロクロナデで、内面底部はナデで調整するが、青海波の当板痕がほぼ全面に残る。外面底部から口縁部中位までをロクロ削りで調整する。粗大な長石粒を大量に含む胎土で、暗灰色を呈すⅠ群須恵器。外面底部から口縁部下位に油が付着する。横方向の環状把手を付すもう１点の1776は、把手部をヘラ削りで調整する。底部外面と口縁部下位をロクロ削り調整する。砂粒をほとんど含まない緻密な胎土で、淡灰白色に焼き上がる。産地不明。これと同じ作りで同生産地と目されるものがもう１点ある。また、他に扁平板状の把手片が１点出土している。

把手を付さない1773は、長石砂を多量含む焼け締りの良くない胎土で、暗灰色を呈す。口縁部内外面をロクロナデで、底部内面はナデで調整するが、底部外面は不調整。Ⅰ群土器か。

1775は、他に比べ器高が高く、器壁も薄い。ほとんど砂を含まないが、焼成が甘く、暗灰褐色から茶褐色に焼き上がる。やはり、粘土紐巻き上げの後、内面を当て具で叩いて成形し、その後にロクロナデ、ナデで調整する。底部には青海波文の当て具痕をとどめる。底部外面の外周辺と腰部をロクロ削りするが、中央部付近は不調整。産地不明。この他、把手の有無は不明であるが、これと同じ趣きの盤で、口縁部外面に回転ヘラ磨きを施すものが１片ある。

壷・瓶類は、食器類に較べ数は少なく、完形に近いものや全形が復原できるものは極めて少ない。そのため、黒色砂層や炭層から出土したものも合せて集録することにした。

壺Ａ（Pl.118，Ph.206－1803～1807）　木屑層から６個体出土している（1803・1804・1806）。1803は、体部下半を欠くが、小型品で口径10cm。残存部にはロクロ削りは及んでいなく、内外面ともロクロナデ調整。蓋を被せず焼成し、外面全面に自然釉が降着する。尾張猿投窯産か。1804は口縁部から肩部直下の上位部を欠損する他は完存する。外面体部下半から底部をロクロ削り調整。蓋を被せたまま焼成し、肩部には灰白色の自然釉が降下する。1806は、口径15.8cm、胴部最大径34.4cmの大型品で、やはり下半分を欠損する。外面は肩部まで丁寧にロクロ削り調整を施し、内面はロクロナデで調整する。器壁は薄く、蓋を被せたまま焼成する。肩部の全面に自然釉が降着するが、内面は全面茶褐色に発色する。

1805は、炭層から出土したもので、底部には外方に開く比較的高い高台を付す。肩部近辺までロクロ削りで調整する。蓋を被せないで焼成したもので、肩部には自然釉が降着する。猿投窯産か。1807は、黒色砂から出土した大型品で、肩部まで丁寧にロクロ削りを施す。蓋を被せないで焼成しているが、火度は低く自然釉は降着せず、黒灰色に発色する。

壺Ａ蓋（Pl.118，Ph.201・202－1777～1792）　身の量に比し数が多く、総数37点出土している。前述の壺Ａと確実にセットをなすと思われるものは見い出せない。残存率が高く、完形品もみられる。灯明器に使用した例が９点、硯として使用したもの２点ある。焚口近くの火度の高い所で焼成されるためか、頂部に自然釉が降着するものが多くを占める。つまみは、1778のように中央がやや突き出るボタン状のものが多くを占めるが、頂部が水平なもの(1779・1783・1784)、中央が凹むもの(1782)、擬宝珠状を呈するもの(1785)がある。また、多くは、蓋を被せて焼成するため、口縁端部の内側を薄く挽き出し、隔着しても横からたたいてはずせる工夫がみられるが、1784・1785のように平坦な面をもつ例もある。前者は西日本に一般的にみられるもので

あり、後者は蓋と身を別々に焼成するもので、東国に多くみられる。調整は、細部の作工とは関係なく、頂部外面をロクロ削りで、口縁部はロクロナデで、頂部内面はナデで調整する。図示したもののうち、1780・1785は完形品で、いずれも灯芯痕跡をとどめる。

小型の蓋

小型蓋のうち、1789は、つまみを欠損するが、縁部が外方に開く形態で、頂部ロクロ削り調整を施す。口径11.2cm。1790は、無紐の完形品であり、頂部外面をロクロ削りで丸味をもたせ、縁部を内側に折り返す。口径8.0cm、器高2.8cm。内面に自然釉が降着する。大きさからみて平瓶か長頸瓶に被るものであろう。なお、図示しなかったが、内面に返りを有する長頸瓶の蓋の小片が1点ある。

壺Q（Pl.118－1797）　暗灰褐色砂土から出土したもので、縁部が大きく外反するのが特徴である。肩部の一部に自然釉が降着する。

壺X（Pl.118－1795）　炭層と暗灰褐色砂土から出土したもの。一見、奈良時代後葉に通有な壺Gに近い形態をとるが、壺Gと異なる点は、3段構成であり、体部の径も大きい。体部下位をロクロ削りを加えるが、底部は不調整で糸切り痕をとどめる。体部内面には、頸部開口部に別の粘土を巻き頸部を挽き上げる際に垂れた、水泥痕が残る。産地不明。

平瓶（Pl.118，Ph.200－1802）　総数5点出土しているが、全容を復原できる資料は少ない。5点のうちわけは、大型品が3点、小型品が2点で、いずれも高台を付す例はない。小型品（1802）は、底部の一部を欠く他は完存し、外面底部から体部にロクロ削り調整を施す。焼成良好で頂部には灰白色の自然釉が降着する。この例には把手は付かないが、これと同巧の小型品で把手を付す例が他に1点ある。

瓻　瓻と目される破片が2点出土しているが、いずれも口縁部から頸部にかけての破片で必ずしも瓻とは断言できない。大型品(1800)は、口径20.4cmで、口縁部がロート状に大きく開く。内面の全面と頸部外面の一部に自然釉が降下する。砂をほとんど含まない胎土で、磁器質に近い焼き上がりである。小型品（1801）は盤口瓶のように外反する口縁部と受け口をもつ。内外とも自然釉が付着する。尾張猿投窯産。

双耳瓶（Pl.118－1793・1794・1798・1799）　徳利形で肩部に穿孔のある薄い板状の耳飾を付すもの（1793・1794）と、大型で肩部に環状耳飾を縦方向に付すもの（1798・1799）がある。前者は、尾張猿投窯に特徴的な器形で、無紐の蓋（1791・1792）とセットをなす。後者は畿内地方に一般的な双耳瓶である。1793は暗灰褐色砂土、1791は黒色砂、1798は炭層から出土したもの。猿投産の双耳瓶や蓋は、外面全面に自然釉が降着する。

水瓶（Pl.118，Ph.200－1796）　猿投窯の製品で、3段構成で作られ、頸部には3条の沈線がめぐり、底部には低短な高台を付す。底部ロクロ削り調整で、酸火炎気味の焼成で下半部は暗茶褐色に発色し、頸部から肩部には薄緑色の自然釉が降着する。

甕A（Pl.119，Ph.204－1809・1810）　個体識別の上では17点出土しているが、その多くは破片で、完形もしくは全形が復原できる資料は極めて少ない。1809は、体部下半を欠損するが、口径35.8cm。ラッパ状の口頸部に倒卵形の体部が付く形態で、口縁部は口縁端部が立ち上り、縁帯をなす。体部外面は、木目に直行する条線を刻んだ叩き板で成形し、擬格子状叩き目を残す。体部内面は、不調整で、青海波文の当板痕跡をとどめる。砂粒が極めて少ない胎土で薄手に作られ、焼成も良好で外面には灰黄緑色の自然釉が降着する。美濃末衛産か。

1810は、ほぼ完形に復原でき、口径27.6cm、復原器高52cm。口頸部は1809と同様な形態で、底部は尖底に近い丸底である。叩き板は1809と同様であるが、当板は極めて細かい青海波の刻み目をもつ。焼成良好で体部外面に自然釉が降着する。口頸部には縦方向の１本のヘラ描き沈線が施されている。美濃末衛産か。

甕Ｂ（Pl.119・120，Ph.203・205－1811・1812）　12点出土しているが、やはり全容が知られるものは少ない。1811は短頸で外傾する口頸部に倒卵形の体部がつく。口径25.2cm、器高42.0cm。尖底に近い丸底で、口頸端部は平坦な面をなす。体部外面は、擬格子叩き板で成形した後、ほぼ全面にカキ目調整を施す。内面の叩き板痕には、刻み目がみられる卵石を使用した可能性が高い。焼成は甘く、淡灰黒色を呈する。Ｉ群須恵器。

1812は、やはり短頸で外反する口縁部をもつが、口縁端部は外傾し、球形に近い体部が付く。口径22.8cm、復原器高43.8cm。体部外面は、擬格子目叩き板で成形した後、部分的にカキ目調整を施す。体部内面は不調整であり、粗い刻み目の青海波文の当板痕を全面にとどめる。Ｉ群須恵器。

甕Ｃ（Pl.120～124、Ph.206）　貯蔵具のうちで最も多く、総数65点ある。法量的には、口径60～70cm、器高44～52cm程度の甕ＣII、口径50～55cm、器高40cm程度の甕ＣIII、口径36～40cm、器高30cm前後の甕ＣIVに分れる。

甕Ｃの法量

甕ＣII　甕ＣIIのうち、1813は、出土甕Ｃのうち最大で、口径68.6cm、器高51.8cmを測り、口縁端部は水平な面をもつ。平底形態であり、体部外面は擬格子目叩き成形で、内面はナデで調整するが、青海波文の当板痕を消し去るには至らない。底部外面と体部下端部には、ヘラ削り調整を施す。砂礫はほとんど含まない胎土であるが、焼成はやや甘く、底部外面は淡黄褐色に、他の部分は灰白色を呈す。1823は、口径の大きい割に器高が低く、口径61.4cm、器高43cm。底部および体部下端部には削りを施し、体部はナデで調整するが、部分的に叩き目が残る。内面はナデ調整で当板痕を消し去っている。長石粒を多量に含む胎土で、焼成は良好で暗灰青色を呈す。肩部外面に自然釉が降着し、体部には部分的に火膨れが現われる。底部外面には焼台とした別の甕片が隔着する。

甕ＣIII

甕ＣIII（1818・1819・1821・1822）には、ヘラ削り調整の平底形態（1821）と不調整で丸味をもつ平底形態(1819)の２種ある。1818・1822は、底部欠損するが、後者に属すと思われる。1818は、体部内面はナデで調整するが、部分的に当板痕が残る。肩部内面には「＋」字状のヘラ描きが残る。長石粒を多量に含む胎土で焼成も良く、暗灰青色を呈し、外面口縁部から肩部に自然釉が降下する。1819は黒色砂から出土。体部内外面の上半部と底部をナデ調整を加える。

甕ＣIV

甕ＣIVには、肩部に縦方向の環耳を付すもの（1820)、高台のないもの（1814・1815・1820)、輪高台を付すもの（1816・1817）がある。1814は、体部内面はナデ付けにより、当板痕を外面もナデで叩き目を消去する。黒色粒子を含む緻密な胎土であるが、焼成は甘く灰白色を呈する。1815は、肩部外面の一部をナデで叩き目を消し去るが、他の部分は調整せず、擬格子目叩き目を残す。内面は上位をロクロナデで、下半部はナデで調整し、当板痕跡を消去する。焼成は甘く灰白色を呈し、内面には油を入れた痕跡をとどめる。1820は口径40.6cm、器高29.2cm。肩部に縦方向の環耳を４方に付す。体部外面は格子目に刻んだ叩き板で成形し、下半部はロクロ削り調整するが、叩き目は深く刻まれているため、消し去るには至らない。内面体部も上位をロクロナデ、以下をナデで調整するが、当板痕を消し去るには至らず、粗い刻目の青海波文の当

板痕を残す。底部内面の調整はナデによる。焼きが甘く、灰褐色の色合いを呈し、やはり油を入れた痕跡をとどめる。

高台を付す甕ＣⅣには、平底に低短な輪高台を付すもの（1816）と丸みを有する底部に外方にふんばる高台を付す例（1817・1887）があるが、前者が一般的な形であり、後者は図示した以外に２点あるのみである。1816は、体部を木目に平行する条線の刻み目をもつ叩き板で成形し、底部～体部下半をロクロ削り調整を施す。内面は上位をロクロナデ、以下の部位はナデで調整し、当板痕を消し去る。高台内側には、杯Ｂに通有な爪状圧痕が輪状にめぐる。長石粒を若干含むが、総じて緻密な胎土であるが、焼きが甘く灰白～暗灰黄色を呈す。内面に油を入れた痕跡をとどめる。1887は比較的径の小さな高台を付す。残存部の外面は、ロクロ削り調整を施す。内面もナデ調整を加えるが、部分的に当板痕跡を残す。砂をほとんど含まない緻密な胎土であるが、焼成は甘く灰白色を呈する。1817は、底部外面から胴部の下端部をロクロ削りで、それより上位はロクロナデで調整する。体部内面はナデ調整で、底部内面はコテ状器具で削りを加える。緻密な胎土であるが、焼成が甘く、体部外面は黒灰色を呈する。

甕ＣⅣは、甕ＣⅡ・Ⅲに比べ油を入れた痕跡をとどめるものが多く、30点を数える。

ⅳ　奈良三彩陶器・墨書土器・陶硯

奈良三彩陶器（Pl.163－1883・1884）　SD5100からは９点の奈良三彩が出土している。いずれも破片であり、層毎の内訳は、木屑層６点、木屑層下の黒灰色粘土１点、木屑層より上位の炭層や暗灰褐色砂質土各１点である。量は少ないが、出土分布をみると、北門SB5090の東寄り（UO42～44区）、中央部（UO26～33区）、東辺部（UO15区）に分かれる。北門近辺からは二彩瓶（1884）や小皿片、中央部の黒灰色粘土からは二彩小壷片、木屑層からは器種不明の二彩陶片、東辺部の木屑層からは三彩小壷蓋（1883）、炭層からは瓶の小片が出土している。瓶（1884）は薄手で口縁部上端が外反する。現状では二彩であるが、三彩の可能性もある。小壷蓋（1883）は、一般的な小壷の法量よりやや大きく、口径7.4cm、器高2.1cm。つまみをとどめる全体の３分の１程の破片である。天井部と口縁部外面には緑・褐・白釉を斑文状に、内面には白釉を施すが、素地が酸化炎焼成のため白釉部分は黄土色に発色する。

器　　種

墨書土器（Pl.125～135，Ph.207～212）　SD5100の各層から、墨痕や文字の一部を残す断片、文字とみられるが判読困難なもの合せて総数308点の墨書土器が出土している。ここでは、墨痕や断片的文字を除き、判読しえた資料について、層位や出土地点を明示して一覧表にした（別表15）。なお、釈文は、史料調査室寺崎保広と渡辺晃宏による。

墨書対象の土器は、須恵器が圧倒的に多く、土師器は少ない。器種は、食器類が多く占め、煮沸具や貯蔵具は極めて少ない。記号や一字だけで意味不明なものを除き、墨書内容をみると、役所や身分・仕事に関するもの、場所を示すもの、器名、墨書対象の器の内容物や用途に関するもの、人名、所有権を指し示すもの、呪文・年号の他、絵など極めて多様である。SD5100出土墨書土器群と、従来知られている他の京内出土品とを比較すると、まず出土量が多い点、内容的には記号が少ない点、内容が多岐にわたり、文章風墨書や絵が多い点でそれらとは一線を画し、むしろ、平城宮の墨書土器群のあり方に近い。

役所に関するものでは、中衛や右兵衛など兵衛関係の墨書が多くみられ、また二坊内出土の

王名の墨書　人名墨書と一致する「文屋」や、京内では極めて珍しい例であるが、「當伎王」「□瀬□王」「□市□王」などの王名墨書も出土している。これらの墨書資料は、木簡とともに、三条二坊一・二・七・八坪や二条二坊五坪の、特にC期遺構の性格を考定するのに極めて重要な資料となる。

また、土器研究にとっても貴重な情報を提供することになった。一つは、紀年墨書(「天平十二年三月一日」)によって、SD5100出土土器群に絶対年代の一端が付与できたことである。二つは、器の用途を知ることができ、また新たな古器名資料を得たことである。具体的には、我々が分類している洗面器形の土師器や須恵器の盤は、当時は「多良比」と呼ばれていたことが判明したことである。

「多良比」

陶硯(Pl.164～166、Ph.216)　陶硯類は、1点を除き、いずれも破片で出土した。小片が多い。総数14片あり、10個体を識別した。層毎の出土点数の内訳は、黒色砂が2点、黒灰色粘土が1点、木屑層が3点、炭層が5点、暗灰褐色砂土が3点である。層位を考慮せず出土分布をみると、西辺部、中央部、東辺部に分れる。

陶硯類の形式と点数は、蹄脚円面硯1点、猿面硯（甕腹硯)、1点、低輪高台円形硯1点、残り7点が圏足円面である。

蹄脚円面硯(1850)は、硯部と台部を一体に作る型式（蹄脚硯B類）で台部破片はない。硯部径24.8cmの大型品。硯面は外堤よりやや低く中央に向って下降する。外側面のほぼ中央に2条の突帯めぐり、その下に型作りによる脚頭や脚頸が貼り付く。図上復原では、逆三角形の透孔が23個開く。海部裏面は曲刃の工具によるヘラ削りで、陸部裏面周辺はロクロナデで、それより内側はナデで調整する。長石微粒を多く含む胎土で、いぶし気味に焼成され黒灰色を呈す。硯部には墨が残存する。西辺部と東辺部、約86m離れた炭層出土品が接合し、また、同一個体と思われるものが、黒色砂と暗灰褐色砂土から各1点ずつ出土している。

円面硯（1877～1879）のうち、1879は、口径26.8cmの大型品で、硯部約3分の1の破片である。硯面はほぼ外堤と同じ高さに作られ中央部に向ってゆるく傾斜し、陸部外周には小さく上方につまみ上げた突帯がめぐる。海部はV字状を呈し、外側面には突帯はない。圏足部には長方形透孔を29個穿つ。硯部裏面周縁部はヘラ削りで、それより上位はナデで調整する。長石砂粒を若干含むが、総じて緻密な胎土で淡灰色に焼き上がり、硯部外面には暗黄緑色の自然釉が降下する。Ⅰ・Ⅱ群須恵器のいずれにも属さない。東辺部の木屑層出土。

1878は口径19.2cmの中型品。硯部が外堤よりも一段低く作られ、海部は浅い。外堤には太い突帯を付すが、外堤は細身に作られる。圏台には、外面から内側に向ってヘラを挿し込み長方形透しを21個穿つが、えぐっただけで内面に突き出た粘土をそのまま放置する。長石微砂を多量に含み、黒灰色に焼き上がる。Ⅰ群須恵器。中央区の暗灰褐色砂土より出土。

1877は硯部径13.4cmの小型品。硯面が外堤とほぼ同じ面に作られるが、外堤が低く、V字状を呈する海部も浅い。圏足部には18個の長方形透孔を穿つ。長石砂粒と微砂を多量に含み、暗灰色に焼き上がるⅠ群須恵器。西辺部の黒色砂から出土。この他、小片であるが、大型品硯部片が西辺部から2点、中央部から1点、いずれも炭層から出土している。残り2片も大型の圏台片である。

猿面硯（1882）は甕腹片を打ち欠き擦って楕円形に整形したもの。完形品で、長径約19cm、短径12cm。硯面の、名にし負う青海波の当板痕は、磨り取られてわずかに顔をのぞかせる。硯面と側面には墨が遺存する。甕腹は尾張猿投窯産品。

D　SD5300・5310出土土器

i　土 師 器（Pl.136～139，Ph.217～219，別表16，Fig.57，Tab.34）

杯A（Pl.136，Ph.217－3001～3016）　全部で109個体ある。大きさによって口径26.5～19.9cmの杯ＡＩ（3001～3010）、口径19.8～17.6cmの杯ＡII（3011～3013）、口径17.4～15.6cmの杯AIII（3014～3016）の３種に区分できる。杯ＡＩは器高が４cm以上の杯ＡＩ１と、器高が４cm未満の杯ＡＩ２に細分される。内訳は、杯ＡＩ１が26個体、杯ＡＩ２が17個体、杯ＡIIが22個体。杯AIIIが16個体ある。

口縁部の形態は、口縁部下半が内湾に上半がわずかに外湾する弧を描き、口縁端部が丸く肥厚するＡ形態と、口縁部全体が内湾し、口縁端部の肥厚小さく目立たないＢ形態の２種がある。杯ＡＩではＡ形態33個体、Ｂ形態２個体、杯ＡIIではＡ形態17個体、Ｂ形態２個体、杯ＡIIIではＡ形態５個体、Ｂ形態３個体と、圧倒的にＡ形態が多い。

ほとんどの個体の内面に暗文がある。螺旋一段もしくは螺旋二段暗文と放射一段暗文の組み合わせが一般的で、これに連弧暗文が加わる個体が約半数ある。放射二段暗文をもつ個体は大変少なく、ＡＩに１点、AIIIに１点あるのみである。暗文を全くもたない個体はＡＩ１に３点、ＡＩ２に２点、ＡIIに２点ある。ＡＩのなかには口縁部内面に連弧暗文のみを有し、淡黄褐色を呈する共通した胎土と焼成の一群（3001・3002）が５点ある。　暗　　文

調整手法では、口縁部をヨコナデし、底部外面を不調整とするａ手法と、底部外面をヘラ削りするｂ手法があり、それぞれの個体別の数は、ＡＩ１でａ手法12個体、ｂ手法14個体、ＡＩ２でａ手法６個体、ｂ手法10個体、杯ＡIIでａ手法10個体、ｂ手法９個体、杯AIIIでａ手法10、ｂ手法４となる。ＡＩではｂ手法が多いが、ＡIIではａ・ｂ両手法がほぼ同数となり、AIIIでは逆にａ手法が多くなる。ｂ手法ではすべての口縁部外面に磨きが施されるが、ａ手法では磨きの施されない個体の方が多い。　調 整 手 法

杯B（Pl.136，Ph.217－3017～3019）全部で14個体ある。口径24.0～22.0cmの杯ＢＩ（3017）６点と、口径19.1～17.6cmの杯ＢII（3018～3019）８点の２種がある。内面は螺旋暗文＋放射一段暗文と螺旋暗文＋連弧暗文の２通りがあり、杯Aに比べ底部内面の螺旋暗文が４段や５段と精緻なものが多い。口縁部外面には磨きが加えられる。

杯C（Pl.136，Ph.218－3020～3052）　全部で83個体ある。口径22.7～19.0cmの杯ＣＩ（3020～

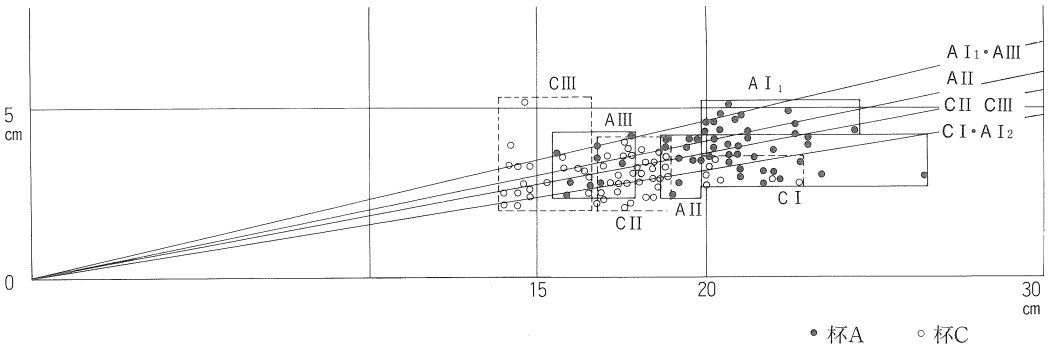


Fig.57　SD5300・5310出土土師器食器法量分布図

3024)、口　径18.8～17.0cmの　杯CⅡ（3025～3051)、口径16.6～14.4cmの杯CⅢ（3052）の3種がある。杯CⅠが25個体、杯CⅡが47個体、杯CⅢが11個体ある。内面の暗文は、杯Aの暗文と比べると粗く、螺旋暗文＋放射一段暗文を基本とする。

調整手法　外面の調整は法量によってその傾向が異なる。杯CⅠでは底部をヘラ削りし、底部から口縁部にかけて磨きを施すb3手法が10点と主体を占める。この他、底部不調製で外面に磨きを施さないa0手法が6点、口縁部外面に磨きを加えるa1手法が3点ある。杯CⅡではa手法が31点と大半を占める。なかでもa0手法が19点と最も多く、磨きを加えるものがCⅠに比べて少ない。底部外面木の葉の圧痕をとどめるものが5点ある。杯CⅢではa手法7点、b手法4点となる。

杯E（Pl.137, Ph.217－3053～3055）　杯Cに似るがさらに扁平な器形で、底は平底となる。9点ある。口径21.0～18.0cm、高さ2.8～2.2cm。いずれも内面には暗文がなく、ナデ調整の痕跡が明瞭に残る。

杯Eの出土した地点　外面調整は、a3・b3・c3各手法があるが、いずれも磨き調整が非常に丁寧である。すべてⅡ群土器。溝の東方、11・12・13ラインを中心に出土している。

椀D（Pl.137, Ph.217－3056～3058）　17点ある。口径18～19.2cm、高さ3.2～5.0cm。外面は口縁端部近くまでヘラ削り調整を行うc0手法である。口縁部直下は、削りが及ばずナデ調整による窪みが一周する。内面はナデ調整を施すが、暗文はない。図示した3点は体部が内湾気味に立ち上がり、器高は3.2～4.0cmで、扁平な器形である。体部が直線的に外傾しながら立ち上がり、器高が5.0cmと比較的高い個体が1点ある。

	土師器		個体数			比率%		
食器	杯A	Ⅰ1	26	81	437	5.5	17.2	92.8
		Ⅰ2	17			3.6		
		Ⅱ	22			4.7		
		Ⅲ	16			3.4		
	杯B	Ⅰ	6	14		1.3	3.0	
		Ⅱ	8			1.7		
	杯C	Ⅰ	25	83		5.3	17.7	
		Ⅱ	47			10.0		
		Ⅲ	11			2.4		
	杯E		9			1.9		
	椀D		17			3.6		
	ⅢA	Ⅰ	92	150		19.5	31.9	
		Ⅱ	58			12.4		
	ⅢB		9			1.9		
	ⅢC		6			1.3		
	蓋A	Ⅰ	1	22		0.2	4.7	
		Ⅱ	11			2.4		
		Ⅲ	8			1.7		
		Ⅳ	2			0.4		
	蓋B		4			0.8		
	蓋C		2			0.4		
	鉢X		4			0.8		
	高杯		17			3.6		
	盤A		12	14		2.5	2.9	
	盤B		2			0.4		
	大形蓋		5			1.1		
煮炊具	甕A	Ⅰ	10	25	32	2.2	5.3	6.8
		Ⅱ	5			1.1		
		Ⅲ	7			1.5		
		Ⅳ	3			0.6		
	甕B		3			0.6		
	甕C		2			0.4		
	甕X		2			0.4		
	製塩土器		2			0.4		
	計		471			100		

Tab.34　SD5300・5310出土土師器構成表

ⅢA（Pl.137, Ph.218－3059～3076）　全部で168個体ある。口径26～20cmのⅢAⅠ（3059～3073)、口径19.8～14.4cmのⅢAⅡ（3074～3076）の2種がある。

暗　文　AⅠは92個体ある。口縁部は内湾しながら立ち上がるB形態が主体を占める。暗文はほとんどすべての個体に施され、螺旋一重～四重暗文＋一段放射暗文の構成が一般的である。杯Aと同様、口縁部内面に螺旋暗文だけをもち、淡黄褐色を呈する特徴的な個体（3055）が8個体ある。

調整は削りを行わないａ手法が主体を占めるが、口径の小さいものほどｂ手法の割合が大きくなる。一部に火襷をもつ例がある。

ＡⅡは58個体ある。ＡＩと異なり、内湾気味に立ち上がり口縁端部で外湾する口縁部Ａ形態が主体をなす。暗文はＡＩと同様、螺旋一重～三重暗文＋一段放射暗文の構成がほとんどである。連弧暗文のみを有し、胎土が特徴的な個体が２個体ある。調整はａ・ｂ両手法がほぼ同数であり、外面に磨きを施す個体がＡＩに比べ多くなる。

皿Ｂ　いずれも破片で、完形に復原できるものはない。９個体。直径のわかるもの４点のうち、３点は直径31～26.４ｃｍと大形である。蓋ＡＩはこの皿Ｂ伴うものであろう。調整はａ・ｂ両手法がみられるが、いずれも口縁部外面に磨きを施す。

皿Ｃ（Pl.137，Ph.219－3079～3084）　６個体ある。いずれも口縁端部外面から内面全面を横ナデ調整とし、底部外面を不調整とする。うち２個体（3079・3080）は皿Ｃ通有の器形を示し、平坦な底部より斜めに口縁部が立ち上がる。４個体（3081～3084）はゆるやかに湾曲する底部に外反気味に立ち上がる口縁部がつく。底部外面の不調整部分には粘土紐の継ぎ目がみえる。

蓋（Pl.137，Ph.219－3085～3092）　扁平な宝珠形のつまみが付き、外面に丁寧な磨きを加え、内面に螺旋二段暗文を施すＡ（3085～3087）。板状のつまみが付き、外面をヘラ磨きとし暗文を施さないＢ（3090～3092）、皿Ａを逆さまにしたような体部をもち、外面に丁寧なヘラ磨きを施すＣ（3088・3089）の３種類がある。蓋Ｃには扁平な宝珠形のつまみが付くものと、板状のつまみの付くものの２種がある。

Ａは30個体ある。直径の不明な５個体と、つまみ部分のみの３個体を除く22個体は、大きさによって、直径31ｃｍのＡＩ（3085）１個体、直径24.8～22cmのＡⅡ（3086）11個体、直径19.４～17.6cmのＡⅢ（3087）８個体、直径16.8～16cmのＡⅣ２個体の４種に細分される。このうち、ＡⅡ５個体とＡⅢ２個体には、内面に螺旋暗文が入る。

Ｂは４個体ある。いずれも上面を粗く削った後、板状のつまみを付け、穴をあける。口縁部と内面は全面にナデ調整を施す。いずれもⅡ群土器。

Ｃは２個体。3089は宝珠形のつまみが付く。上面には非常に丁寧な磨きをいれる。内面は全面ナデ調整とする。Ⅰ群土器。3088は紐状粘土をつまみ上げて山状に整形したつまみが付く。3089ほどではないが、丁寧な磨きを４方向に施す。内面は全面をナデ調整とする。Ⅱ群土器。

鉢Ｘ（Pl.137，Ph.219－3095～3098）　４点ある。直径20cm前後。高さ６～８cm。２個体は底部を削り、口縁部をヨコナデ調整とする。他の２個体は底部不調整で口縁部のみをヨコナデ調整とする。口縁端部は杯皿のＡ形態のように、丸く巻き込む。内面に黒色の有機物が付着し、煮沸具として使用したと考えられる個体が１点ある。

高坏（Pl.138，Ph.219－3099～3102）　17個体ある。口縁端部をわずかに巻き込む平らな杯部に、縦方向にヘラ削りで面取りする脚をつける。いずれも杯部外面は脚の取り付け部から口縁端へ向かってヘラ削り調整を施した後、丁寧な磨きを行う。杯部内面はナデ調整の後荒い螺旋暗文をいれる。脚部は外面を縦方向に削り、断面多角形とする。裾部内面は横方向にヘラ削りを行った後に、横ナデを施す。裾部外面は５区にわけて磨きを行う。

杯部の調整

脚部のつくりの違いにより２種に細分することができる。ａ手法は円筒状に作った脚部を杯部に接合するもの、ｂ手法は、円錐形粘土を芯として、杯部との接合部に厚く粘土を巻くもの。

脚部のつくりの違い

a手法4点、b手法13点である。

a手法の4点はいずれも脚部のみの破片。b手法のものに比べ脚部の開きが大きく、器壁が薄い。b手法の13点のうち、杯部径が30cm前後の大形が10個体、18cm前後の小形が3個体ある。小形の3個体(3099～3101)はほぼ完形で出土し、胎土や調整を同じくする一群である。大形のうちの2点(3102)は杯部内面と脚部外面が黒色にいぶされる。

盤(Pl.138－3103～3105)　高台のつかない盤A(3103・3104)と高台の付く盤B(3105)がある。盤A12点、盤B2点。盤Aには、胎土が精良なI群で、体部が外反するもの(3103)と、胎土が比較的粗いII群で、体部が内湾するもの(3104)の2種がある。前者は外面に削り調整を施した後、丁寧な磨きを底部から外面にかけて施す。体部内面には放射暗文と螺旋暗文を施す。後者は同じく外面を削りの後に磨きで仕上げ、内面は細かいハケ目調整を施した後、連弧暗文を底部から体部内面にかけて施す。

大形蓋　5個体あるがいずれも口縁部の破片。把手がつくものと思われる。口縁端部をナデ、体部中位までは粗いハケ目。それ以上は再びナデ調整とする。内面を中心に、一部外面まですすに付着が認められる。

甕A(Pl.138, Ph.219－3106～3117)　外反する口径と丸い体部からなる。法量によって、甕AI・AII・AIII・AIVの4種類がある。

調整手法　口径35.6cm～26cmのAI(3116～3117)が10個体。外面に縦方向のハケ目調整、口縁部にヨコナデ調整、内面にナデ調整を行う一般的なものの他、外面をナデ調整するもの、内面に縦方向の削り調整を行うもの、口縁部内面にハケ目調整を行うもの、尖底となるものなど種々がある。口径24.4cm～19cmのAIIが5個体。口径17.4cm～15.2cmのAIII(3109～3115)が7個体。いずれも調整手法に各種がある。口径8.8cm～8.4cmの超小形甕AIV(3106～3108)が3個体ある。

小形の甕　内外面ともにナデ調整とするが、外面のナデは粗く、不調整部分を多く残す。

甕B(Pl.139－3118・3119)　甕Aとほぼ同じ形態で、体部中位の2カ所に三角形の把手を付ける。3点が出土。口径は26.8～28.0cmあり、BIに分類される。いずれも外面に粗いハケ目調整を施し、内面はナデ調整とする。いずれも把手は大形である。3119は外面全面にすすが付着している。

甕C(Pl.139－3120)　長胴形の丸底甕。口径約17.5cmと22.8cmの2個体。口縁部は外反し横ナデ調整をくわえる。胴部は外面を粗い縦方向のハケ目調整を施し、内面にも同じハケ目を横方向にいれる。

甕X(Pl.139－3121)　2個体ある。内1点は口径12.1cm、高さ27.9cm以上。口縁部は内湾気味に斜めに立ち上がり、胴部は円筒形で平底となる粗製の甕。外面は極めて粗いハケ目を所々に入れる。内面も極めて粗くナデ調整されるが、不調整の部分も多い。外面は一部黒変する。

製塩土器(Pl.139－3093・3094)　SD5300の西端を中心に製塩土器が出土した。図化できるものは少ないが、総量10.24kgが出土した。

図化できた2個体はいずれも円錐形で尖底となるようだ。外面上半部には粘土紐の継ぎ目を明瞭に残し、下半部には指押さえの痕跡が所々に残る。内面は全面を指ナデもしくは指押さえとする。著しい被熱痕跡を残すものもあるが、大部分は灰黒色系の色調を呈するが、被熱の痕跡は認められない。

ii　須 恵 器（Pl.140～143，Ph.220～224，別表17，Fig.58，Tab.35）

杯A（Pl.140，Ph.222－3122～3136）　全部で57個体ある。底部外面をヘラ切りのままとするものと、ロクロ削りを加えるものがある。口縁部外面から内面にかけてはロクロナデとする。杯Bのように磨きを加えるものはない。口径19.4～22.2cmの杯ＡⅠ（3134～3136）12個体、口径16.8～18.8cmの杯ＡⅡ（3131～3133）14個体、口径14.6～16.5cmの杯ＡⅢ（3127－3130）22個体、口径12.2～13.8cmの杯ＡⅣ（3122－3126）６個体の４種がある。ＡⅠは器高の高いＡⅠ１（器高6.1～7.5cm）７個体と、低いものＡⅠ２（器高3.2～4.8cm）５個体がある。Ⅰ群土器３個体、Ⅱ群土器２個体、Ⅳ群土器５個体。墨書土器が２個体ある。

ＡⅡは同じく、ＡⅡ１（器高4.4～5.3ｃｍ）８個体と、ＡⅡ２（器高3.4～4.1cm）４個体がある。Ⅰ群土器５個体、Ⅱ群土器３個体、Ⅳ群土器３個体。ＡⅢは、ＡⅢ１（器高5.0～6.3cm）７個体と、ＡⅢ２（器高2.9～4.7cm）12個体がある。Ⅰ群土器６個体、Ⅱ群土器３個体に対して、Ⅳ群土器が11個体あるのが注目される。墨書土器が３個体ある。ＡⅣは器高の変化はなく、Ⅰ群土器３個体、Ⅳ群土器３個体。

杯Ａでは杯Ｂに比べ、重ね焼きを示す痕跡が顕著に認められる。口縁部外面上半が黒色に変色するもの23個体。火襷が認められるもの19個体。また、灯火器として用いられたものがＡⅢに１点、ＡⅣに２個体ある。土器の群別で見ると、灰白色の精良な胎土で、焼成の良好なⅣ群がＡⅢを中心に多く見られ注目される。火襷や重ね焼きの痕跡もⅣ群土器に顕著にみられる。　重ね焼き　火　襷

杯B（Pl.140，Ph.221－3137～3163）　全部で84個体ある。杯Ａ同様、底部外面をヘラ切りのままとするものと、ヘラ切り後、ヘラ削りで仕上げるものが主体をなす。口径19.1～24.1cmの杯ＢⅠ（3157～3163）23個体、口径16.7～18.8cmの杯ＢⅡ（3154～3156）13個体、口径14.4～16.１cmの杯ＢⅢ（3146～3153）18個体、口径13.0～13.6cmの杯ＢⅣ12個体、口径9.0～11.8cmの杯ＢⅤ（3137～3145）16個体の５種がある。

ＢⅠは器高の高いＢⅠ１（器高6.9～8.4cm、3160～3163）12個体と、ＢⅠ２（器高4.1～6.8cm、3157～3159）６個体がある。Ⅰ群土器15個体、Ⅱ群土器３個体。この他灰白色で磁器質に焼きあがるⅢ群が１個体。粗い胎土で焼成の悪い特徴的な２個体がある。3157は口縁部内面に凹線がめぐる。杯Ｃに高台を付けたと考えることもできる。ＢⅠ１の２個体は、口縁部外面に丁寧な磨きを施す。ＢⅡは同じく、ＢⅡ１（器高6.5cm、3156）１個体と、ＢⅡ２（器高3.6～4.2cm、

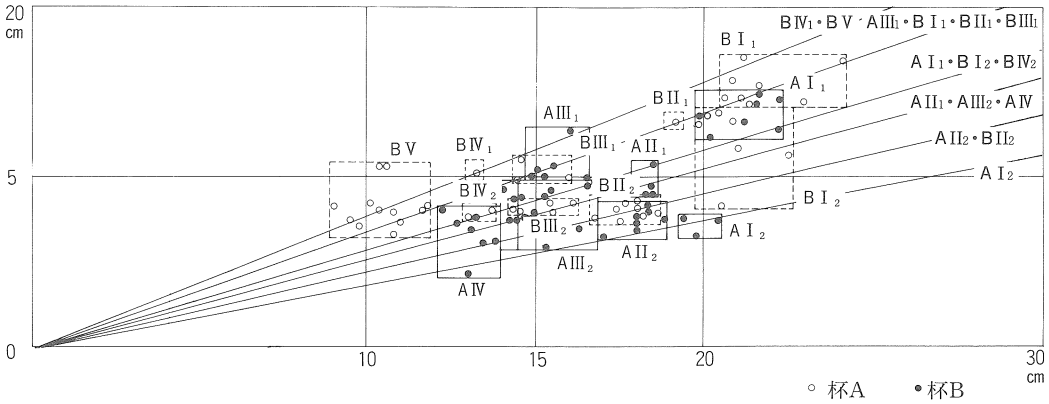


Fig.58　SD5300・5310出土須恵器食器法量分布図

3154－3155）9個体がある。Ⅰ群土器5個体、Ⅱ群土器4個体である。BⅡ1の3個体は灰白色の胎土で焼成良好なⅣ群土器。BⅡ2の1個体は、灯火器として使用。BⅢは、BⅢ1（器高5cm）2個体と、BⅢ2（器高3.9～4.5cm）10個体がある。Ⅰ群土器11個体、Ⅱ群土器4個体。灰白色で外面に釉をかけたような光沢があるⅢ群土器が2個体ある。BⅣは完形に復原できるものが少なく、BⅣ1（器高5.1cm）1個体と、BⅣ2（器高3.6～4cm）2個体が確認される。Ⅰ群土器8個体、Ⅱ群土器1個体、Ⅳ群土器2個体である。BⅣ2の底部外面には墨書があるが、判読不能。BⅤは器高による細分はできない。Ⅰ群土器12個体、Ⅱ群土器1個体、Ⅳ群土器2個体。BⅣ・Ⅴでは、Ⅰ群土器が卓越する。

灯火器

杯B蓋（Pl.141，Ph.222－3164～3187）　全部で167個体ある。頂部を広くロクロ削りし、その後口縁部内外面をロクロナデし、内面にナデを加えるものが主体をしめる。口径18.4～24.7cmの杯B蓋Ⅰ（3164～3172）84個体、口径17.0～18.8cmの杯B蓋Ⅱ（3178～3181）15個体、口径14.7～17.4cmの杯B蓋Ⅲ（3173～3177）27個体、口径12.2～13.6cmの杯B蓋Ⅳ（3184～3187）11個体、口径10.0～11.6cmの杯B蓋Ⅴ（3182～3183）9個体の5種がある。

杯B蓋の二つの形態

杯B蓋の口縁部形態には、平らな頂部および屈曲する縁部とからなるA形態と、頂部が丸く笠形を呈し縁部が屈曲しないB形態の2種がある。今回の資料はほとんどがB形態で、A形態はBⅠが4個体、BⅢが3個体、BⅣが1個体、BⅤが2個体の各個体のみである。B形態も細かくみると、2種に細分できる。B1は典型的なB形態で、縁部に強いナデが入らず、頂部の湾曲がそのまま縁部まで続くもの。B2は縁部に強いナデが入るため、若干の屈曲が見られるもの。今回の資料にはこのB2が圧倒的に多い。この他、はっきりした身受けがなく縁部内

	須恵器		個体数				比率%		
食器	杯A	Ⅰ1	7	49			12.0		
		Ⅰ2	5						
		Ⅱ1	8						
		Ⅱ2	4						
		Ⅲ1	7						
		Ⅲ2	12						
		Ⅳ	6						
	杯B	Ⅰ1	12	189			46.1		
		Ⅰ2	6						
		Ⅱ1	1						
		Ⅱ2	9						
		Ⅲ1	2						
		Ⅲ2	10						
		Ⅳ1	1						
		Ⅳ2	2						
	杯B蓋	Ⅰ	84						
		Ⅱ	15						
		Ⅲ	27						
		Ⅳ	11						
		Ⅴ	9						
	杯C	Ⅰ	4	5	375		1.2	91.6	
		Ⅲ	1						
	杯E	Ⅰ	1	3			0.7		
		Ⅱ	2						
	ⅢA	Ⅰ	4	14			3.4		
		Ⅱ	7						
		Ⅲ	3						
	ⅢB	Ⅰ	13	79			19.3		
		Ⅱ	6						
		Ⅲ	5						
	ⅢB蓋	Ⅰ	32						
		Ⅱ	17						
		Ⅲ	6						
	ⅢC		8				2.0		
	ⅢD		2				0.5		
	高杯		13				3.2		
	鉢A		3	9			2.2		
	鉢F	Ⅰ	2						
		Ⅱ	4						
	盤A		4				1.0		
貯蔵器	壷A		1	17	35		4.1		8.4
	壷K		2						
	壷L		3						
	壷蓋		11						
	甕A		6	18			4.3		
	甕C		12						
計			410				100		

Tab.35　SD5300・5310出土須恵器の構成表

側に沈線のはいるものがＢＩに２個体ある。

ＢＩの84個体のうち、ＢＩ１が125個体、ＢII２が246個体。頂部外面に厚く自然釉のかかるものが多い。土器群別ではＩ群土器とII群土器が主体をしめ、灰色で灰釉をかけたような照りを持つIII群土器が３個体。灰白色の精良な胎土で、焼成の良好なⅣ群土器が６個体ある。この他、頂部外面に厚く自然釉がかかり、胎土に黒色粒子を含む特徴的な個体が９個体ある(3170)。

転用硯は20個体ある。したがって実際に蓋として使用されたものは64個体となる。この数を杯身と比べてみると、杯ＢＩは23個体で、杯ＡＩの12個体を加えても35個体しかなく、蓋の方がかなり数が多いというこれまで通りの結果を得た。　転用硯

ＢIIでは縁部の形態のＢ１が９個体、Ｂ２が４個体と逆転する。土器群別では頂部に自然釉の厚くかかる特徴的なものが５個体と目立つ(3181)。転用硯は１個体と少ない。杯ＢIIが13個体であるから、ＢIIはほとんどが杯ＢIIとセットで蓋として用いられたと考えることが可能である。ＢIIIでは頂部が笠形とならず平坦で、縁部が屈曲しない特徴的な形態のものが６個体ある。平坦な頂部には自然釉が厚くかかり濃緑色に釉化するものが多い。土器群別ではほとんどがＩ・II群土器であるが、III群と思われるものが３個体ある。転用硯は３個体。ＢⅣとＢⅤには縁部形態がＡ形態のものがある。土器群別ではほとんどがＩ群土器であり、転用硯も少ない。

杯Ｃ（Pl.141－3188）　土師器杯のＡ形態の口縁部形態を模した須恵器。５点ある。口径19.6～21.2cmのＣＩ（3188）４個体、口径14.1cmのＣIII１個体に分かれる。いずれも底部をヘラ切りとした後、ロクロナデで調整。口縁部内外面をロクロナデ。底部内面をナデとする。3188は口縁部外面に幅0.7cmの重ね焼き痕跡と思われる黒変部分がある。

杯Ｅ（Pl.141，Ph.223－3189・3190）　平底と内湾しながら立ち上がる口縁部からなる。銅椀を模した須恵器。６点ある。口径20.2cmのＥＩ(3190)が１点、口径16.0～18.0cmのＥII(3189)が２点、口径15.2～15.7cmのＥIII３点がある。　銅椀を模倣

底部外面をロクロ削り、口縁部内外面をロクロナデ、内面をナデで仕上げる。3190はＥＩ、外面全面に丁寧なヘラ磨きを施す。口縁端部内面には凹線をめぐらす。口縁部外面には、幅約１cmの重ね焼き痕跡と思われる黒変部分がある。

皿Ａ（Pl.141，Ph.222－3192～3196）　14個体ある。口縁部外面から内面全面をロクロナデで仕上げ、底部はヘラ切りの後、ナデで仕上げるＩ群土器が主体をしめる。口径24.3～27.4cmの皿ＡＩ４個体、口径22.2～23.8cmの皿ＡII（3194～3196）７個体、口径18.4～19.1cmの皿ＡIII（3191～3193）３個体の３種がある。

墨書土器はＡＩに「川」１個体、ＡIIに「経師」１個体、ＡIIIに「大」１個体、計３個体ある。SD5300の西端にあたる28・29区と、SD5310の東端である34区から完形の皿ＡIIが５個体まとまって出土した。　墨書土器

3203はゆるやかに湾曲する底部から、斜めに外反気味に口縁が立ち上がる。皿Ａとしておくが、皿Ｅの大型品ととらえることもできる。

皿Ｂ（Pl.141，Ph.223－3204～3210）全部で24個体ある。口縁部外面から内面全面をロクロナデで仕上げ、底部外面をヘラ削りとする個体が主体をしめる。口径29～31.6cmの皿ＢＩ（3208～3210）13個体、口径26.8～27.8cmの皿ＢII（3207）６個体、口径25～25.8cmの皿ＢIII５個体の３種がある。II群土器が10個体、Ⅳ群土器が９個体と、Ｉ群土器の４点を凌駕する。

3205と3206は口縁部が内湾気味に立ち上がったのち、口縁端部で外反する。浅い特徴的な器形をなす。内面に丁寧なヘラ磨きを施す。いずれも佐波理の盤を模した器形であろう。3204は口縁部が薄く外反気味に立ち上がり、高台が口縁部と底部の境に取り付く特徴的な器形をなす。

佐波理の盤を模倣

皿Ｂ蓋（Pl.142，Ph.223－3211～3217・3224）　全部で65個体ある。杯Ｂ蓋と同じく、頂部をヘラ削りした後、縁部内外面をロクロナデとし、内面をナデ調整とする個体が主体をしめる。口径29.0～34.8cmの皿B蓋Ⅰ（3216～3217，3224）32個体、口径26.2～28.8cmの皿Ｂ蓋Ⅱ（3212～3215）17個体、口径25.0～25.8cmの皿Ｂ蓋Ⅲ（3211）６個体の３種がある。

縁部の形態はＢ形態を主体にしつつも、端部を三角形に突出させないでそのまま丸く納める分厚い作りの蓋が５個体みられる。杯Ｂ蓋では見られない形態である。

ＢⅠではＢ２形態が主体をしめる。土器群別ではⅠ群とⅡ群がそれぞれ９個体と拮抗し、これにⅣ群４個体、杯Ｂ蓋にもある頂部に厚く自然釉のかかるものが２個体ある。転用硯はみられない。皿ＡⅠと皿ＢⅠをたしても17個体と、皿Ｂ蓋Ⅰの32個体の約半数にしかならない。ＢⅡもＢⅠと同じ傾向を示す。ＢⅢでは頂部に厚く自然釉のかかるものが３個体と目立つ。3216は円環状の摘みを持ち、外面に丁寧なヘラ磨きを加える特徴的な個体。皿Ｂの3206と作りに似た点が多い。セットになるようである。

皿Ｃ（Pl.141，Ph.222－3197～3201）　全部で８個体ある。平坦な底部に斜めに短く立ち上がる口縁部の取り付く器形。口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部が平坦で外傾するものと、口縁部が内湾し、口縁端部が土師器皿Ａのように内側に肥厚するものの２種がある。口縁端部が外傾するタイプは６個体ある。底部外面はヘラ切り痕をそのままとどめるものと、ロクロ削りで仕上げるものの２種がある。

口縁端部内側に肥厚するタイプのものは２個体ある。3201は底部外面から口縁部外面中位にかけて丁寧なヘラ削りを行う。土師器皿Ａのように、底部と口縁部の境が明瞭でない。3200は底部外面をナデ、口縁部外面から内面をロクロナデとする。

皿Ｄ（Pl.141－3202）　3202は平坦な底部に、短くつまみ上げたような口縁部が付く特異な器形。底部外面はロクロ削りの後高台を張り付け、周囲をナデ調整する。口縁部から内面にかけては全体をナデで仕上げる。Ⅰ群土器。内面全面に墨が付着し、硯としての使用痕が顕著ある。皿Dとしたが、硯として製作された可能性も高い。

壺蓋（Pl.142，Ph.224－3218～3223）　11個体ある。宝珠形のつまみのあるものと、ないものの２種がある。3220は扁平なつまみがつき、口縁端部を丸くおさめる。3223は丸い摘みがつき、口縁端部を鋭く突出させる。内面に墨の流れた痕跡がある。3222も同じようなつまみの付く器形となるものと思われる。3218は口径10.5cm、高さ1.1cm　つまみを欠失する。扁平な器形。

宝珠つまみ

3219は口径13.5cm、高さ2.5cm。暗灰色を呈する。Ⅰ群土器。摘みはなく内面全面に降灰がみられる。外面には火襷が認められる。

高杯（Pl.142，Ph.224－3231・3232）　全部で13個体ある。脚部に透かしのないものと、３方に透かしのはいるものの２種がある。

3231は透かしのないもので、杯部と脚部をロクロ上で別々に成形する。杯部は口縁部内外面をロクロナデ、底部外面をロクロ削り、底部内面をナデで仕上げる。脚部は内外面をロクロナデで仕上げる。杯部底部中央に脚部を接合するためのくぼみをつけ、脚部を接合する。土師器

高杯のように接合粘土を置くことはない。精良な胎土で灰白色に焼きあがる。II群土器。3232は３方に透かしをもつ。脚部と杯部の作りは、3231同様、別々にロクロ上で作ったものを接合する。ただし3231と異なり、接合用粘土を用いている。脚部を接合したのち、ヘラで切り込みをいれて透かしを作る。灰色を呈するＩ群土器。　高杯の透し　接合用粘土

この他、透かしを持たない脚部破片が１個体、透かしをもつ脚部片が６個体ある。杯部の形態は図示した以外にも、皿Ａの口縁部に類似したものなど数種がある。２点は杯部に煤が付着し、灯明皿として用いられたようだ。

鉢Ｆ（Pl.142，Ph.223－3225～3227）　６点ある。口径が23cm前後のＦＩ２点と、18cm前後のＦII４点の２種がある。3225と3226はＦＩ。3225は復原可能で、高さ20.8cm、口径23.8cm、底部径14.2cm。暗灰色を呈し、焼成は良好である。内面に厚く自然釉がかかる。底部外面には、棒状工具による多数の刺突痕がある。3226も3225と同じ胎土・焼成の個体。いずれも１群土器。3227はＦII。底部がＦＩのように角張らず、丸みをもつ。底部外面の刺突も、ヘラ状工具を用い、細長い痕跡を残す。

壺Ａ（Pl.142，Ph.223－3229）　肩部に四耳の付く壺Ａ。胎土の砂粒を多く混ぜ、暗灰色を呈するが、底部を中心に焼きの甘い部分がある。胴部下半をヘラ削り、上半から内面をロクロナデとする。肩部には降灰がみられる。高台の取り付け部に焼きひずみが大きく、高台は完全に遊離している。

壺Ｋ（Pl.142，Ph.223－3230）　２点ある。3230はほぼ完形に復原される。高さ21.0cm、口径10cm、体部径15.8cm。灰色の精良な胎土で、肩部に厚く自然釉がかかる。体部外面下半はロクロ削り、上半はロクロナデ、口縁部は内外面をロクロナデとする。3228は体部の破片。体部径16.6cm。暗灰色を呈し、焼成はあまりよくない。肩部に降灰がみられる。内面に厚く漆が残り、断面にも付着する。漆容器として用いられ、内面にたまった漆を掻き出すために割られたものと推定される。

この他、壺Lの破片が３点ある。

盤Ａ（Pl.143，Ph.224－3233～3236）　４個体ある。径高指数24～25のＡＩ（3235・3236）と、同32のＡII（3233・3234）の２種類がある。ＡＩのうち、3236は底部外面を不調製とし、板目状の痕跡が残る。口縁部外面は口縁端部を除きロクロ削りで仕上げる。口縁部外面はいぶされたような黒灰色を呈する。3255は底部外面から口縁部の一部をロクロ削りとし、後の部分をロクロナデで仕上げる。底部は一部ひずみ、上げ底となる。口縁部の２ヵ所に三角形の把手を付ける。同じＡＩであっても、この２個体は製作手法にかなりの相違がある。

ＡIIの２個体は器形だけでなく製作手法が類似する。底部外面は不調製、口縁部外面はロクロ削りの後上半部を外面から内面全面にかけてロクロナデとする。いずれも口縁部外面に黒班をもつ。この他に半環状把手の破片が１点ある。

甕Ａ（Pl.143，Ph.224－3237・3241）　口縁部の破片を数えると６個体が確認される。口縁端部が外傾し、内外両方向にわずかに肥厚するものと、外側に三角形に大きく肥厚するものの２種がある。図示した２点はいずれも前者のタイプ。3241は外面に格子目叩きを、3237は平行叩き目をとどめる。内面はナデによって当て具痕跡を消す。　格子目叩き

底部の破片は少なくとも４個体分が確認される。このうちの１点は、胴径が１m前後になる大

型品で、外面が平行叩き目、内面ナデ仕上げ、胎土に細かな黒色粒子を含む。外面全面に自然釉がかかる。Ⅴ群土器。

全体に甕Ａは数が少なく、胴部破片の量も多くはない。最大でも10個体を越えることはない。

甕Ｃ（Pl.143，Ph.224－3238～3240・3242～3244）　12個体ある。四耳と高台の付くものが１個体、四耳の付くものが３個体、高台の付くものが３個体ある。外面に格子目叩き、内面に同心円の当て具痕跡を残す、Ⅰ群土器が主体を占める。3239は外面をロクロ削り、内面をロクロナデとするⅡ群土器。3242は肩部の張りが少なく、外面には細かな平行叩き目を残す。Ⅰ群土器。四耳はいずれも細長い帯状の粘土を湾曲させ、肩部にナデ付ける。墨書土器が２点ある。3240は判読できない。

鉢Ａ（Pl.143，Ph.224－3246）　３個体ある。3246は外面を丁寧にヘラ磨きする。口縁部外面に降灰が認められる。口径25.6cm。

獣足（Pl.143，Ph.224－3245）　高さ13.2cm、足先の幅5.7cm。大形の獣足。粘土の丸棒を芯にし、胴部との接合部と足先に粘土を継ぎ足して成形する。接合部から足先にかけて縦方向の削りで調整する。足先はヘラで切り込みを入れ、指を表現する。灰白色の精良な胎土で、灰色に焼成される。Ⅰ群土器。胴部の丸いカーブを残し、唐三彩に見られる獣足付きの鍑もしくは火舎のような器形と推定される。

硯　蹄脚硯の脚部破片が１個体。円面硯の硯部破片が１個体ある。前者は灰白色の精良な胎土で、極めてよく焼成される。外面に自然釉が全面にかかる。Ⅲ群土器。後者は透かしのある脚が付く通常の円面硯。Ⅰ群土器。

ⅲ　墨書土器（Pl.144～146，Ph.225・226）

3252は須恵器杯ＣⅠ、3253は須恵器皿ＢⅠで、ともに底部外面に「菓」。3254は須恵器皿ＡⅡで底部外面に「□経師」。経の上は、縦と横各一画ずつがかすかに残る。3256は須恵器杯Ｂ蓋で、頂部に「兵」。3255は須恵器皿ＡⅢで、底部外面に「兵」の墨書。3255と3256は書体が似ている。3257は土師器皿ＢⅠで、底部外面と体部外面に多数の墨書が確認される。判読できたのは以下の通り。本墨書以前に「申」を習書したとおぼしき墨痕が５ヶ所程、認められる。

「岡本宅」　岡本宅謹申請酒五升右
　　為水葱撰野党雇女等給料天平
「天平八年」　八年七月廿五日諸人
　　岡本宅謹申請酒五升右
　　岡本宅謹申

3258は土師器皿ＡⅡで、底部外面に「殿」の墨書。3259は土師器椀Ｄで、体部外面に「下」。3260は須恵器甕Ｃで、体部外面に横に「水」の墨書。3236は須恵器杯Ｂ蓋Ⅳで、頂部に「歳万呂」の墨書。3248須恵器杯ＡⅡで、底部外面に「右兵衛」の墨書。右は割れのために確定できないが、他の同字より判断した。

「右兵衛」

3264は須恵器杯ＡⅠで、体部、外面に「右兵衛」の墨書。3265は土市器甕Ａで、体部外面に「直丁」の墨書。3266は土師器皿ＢⅠで、「兵部卿宅」の墨書。左行は判読できない。3267は須恵器杯Ａ底部。２行あり。右行は線刻で「左兵」。左行は墨書で「左兵」。

E　二条大路北側溝出土土器（Fig.59）

SD5300の北側に存在する二条大路北側溝SD5240は、掘り直しが認められ、切り合い関係を根拠に古い方から、SD5240A（北側溝３）→北濠状遺構SD5300→SD5240B（北側溝２）→SD5240C（北側溝１）という変遷が明らかになっている（ただし、SD5240Bが掘られた当初は、SD5300と共存したと推測）。

SD5240A　SD5300に大きく切られていおり、埋土が部分的にしか残らない所が多い。そのため遺物は多くない。

土師器は杯A・C、皿A、高杯がある。杯Aには非常に細かい暗文をもつ個体がある。杯Cには暗文のはないものが多い。

須恵器には杯B、杯B蓋、皿A、壺A蓋、盤がある。杯BにはV群と思われる個体が１点ある。杯B蓋はいずれもB形態で、つまみは丸みを帯びた宝珠形が多い。

土師器杯Aの暗文をみると、SD5300木屑層のものより明らかに細かく精緻であるとともに、連弧暗文を持つ個体がある。しかし、杯C（3270）の大部分が暗文を持たないなどの新しい要素もみられる。平城宮土器Ⅱに遡る古い様相がみられるものの、全体でみると平城宮土器Ⅲの古段階に近いと考えられる。SD5300に切られており、明らかに古いが、それほどの時期差はないようである。

濠状遺構の上限

SD5240B　遺物量が少ない。土師器には杯A、皿A、壺A、椀A、盤Aが認められる。杯Aには、螺旋暗文＋放射暗文＋連弧暗文という構成の個体がある。皿Aでは暗文が認められるがやや粗い。盤には高台が付く。

須恵器には杯B、壺K、平瓶（3278）、甕A、甕Cがある。土師器椀A（3275）が存在することから、平城宮土器Ⅲの新段階に位置づけられる。ただ、杯Aと皿Aの暗文を比べると、杯Aにより古い様相が認められる。この杯A（3276）については混入を認めざるを得ないかも知れない。

SD5240C　SD5240Cは細かく分層されており、上から砂層１、砂層２、砂層３、中層、下層、最下層に分かれる。このうち砂層３、下層、最下層の遺物が比較的まとまっている。

砂層３からは土師器の杯A・B、皿A、甕A、須恵器の杯A・B、壺A、甕A・Cなどが出土した。土師器杯Bには口縁部が外に大きく直線的に開く器形のものが含まれ、c手法の割合が高い。下層も杯Cにc手法が多く、粗い暗文をもつものが２点あるが、大部分に暗文はみられない。

最下層からは土師器の杯A・C、甕B、須恵器の杯B、壺A、鉢A、甕Aなどが出土した。杯Aに粗い暗文を持つ個体が含まれるが数は多くない。甕B（3286）は把手がかなり矮小化してきている。

北側溝の上層である砂層３の遺物は、平城宮土器Vの様相をもつ。最下層においても暗文のある個体が少なく、c手法が多用されている。北側溝全体では平城宮土器Ⅳ～Vという位置づけとなるであろう。

墨書土器　SD5240Bから出土した須恵器杯BⅡには、底部外面に「包」の墨書がある。さらに字は続くが不明。3274は須恵器杯B蓋で、外面に「左」の墨書がある

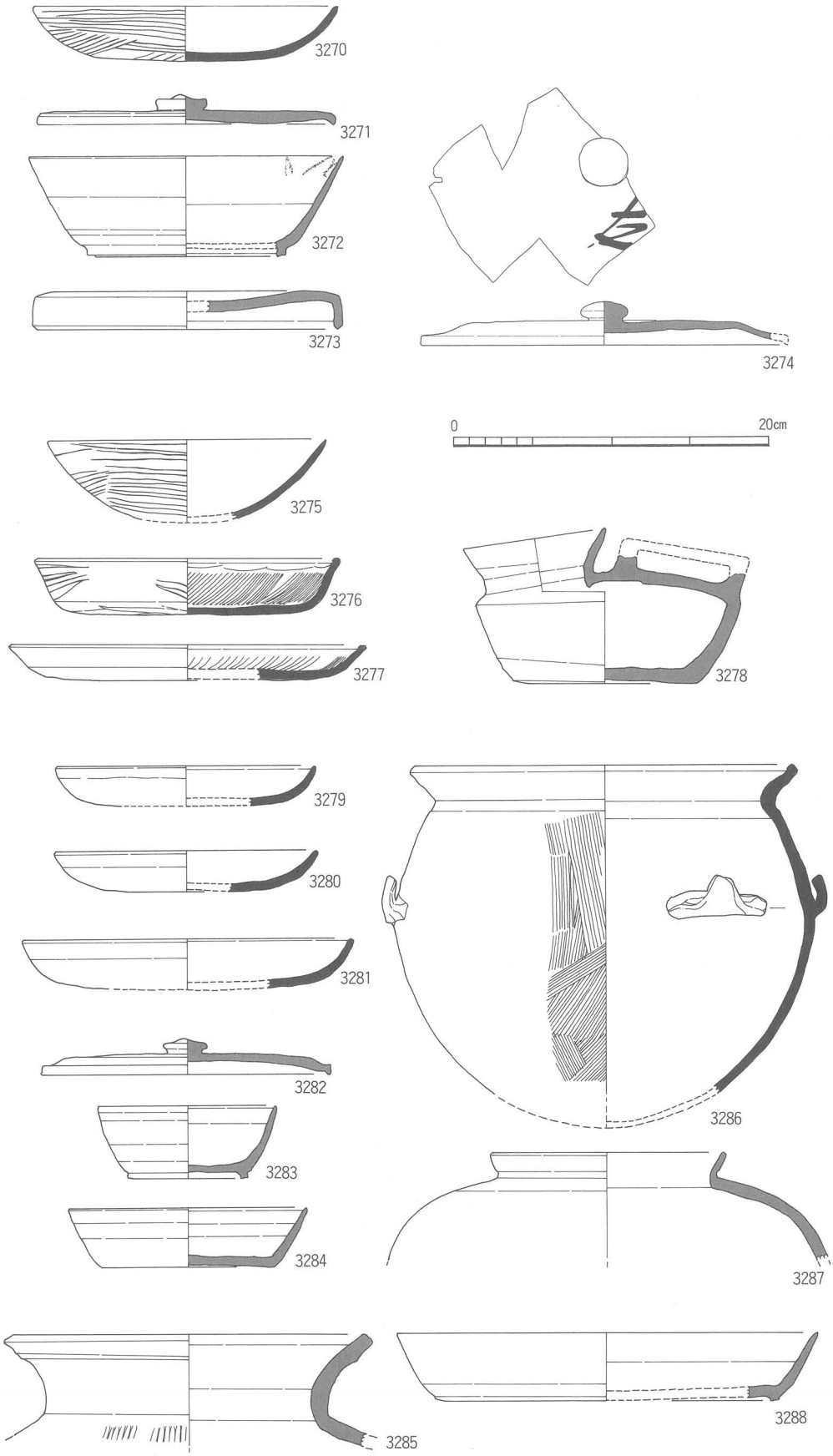


Fig. 59　SD5240出土土器実測図　　1：5

F　東二坊々間路側溝出土土器

西側溝は長さおよそ200mにわたって検出し、東側溝は七坪の東方の調査区で一部確認した。それぞれ質、量ともに豊富な土器が出土したが、整理が未了なため、ここでは簡単な記述にとどめることにする。

i　西側溝SD4699出土土器

SD4699の開削は奈良時代の初頭にはさかのぼらず、D期までは存続し、F期には廃絶していることが遺構変遷の上から確認されている。溝の堆積は大きく3層に分かれ、土器は主として下層から出土した。下層出土の土器は平城宮土器Ⅱに属し、須恵器、土師器ともに多くの器種を揃え、該期の基準資料となる。内容の詳しい報告は別の機会に譲るが、ここでは上層出土の黒色土器杯(Fig.60)を紹介する。これは、口径22.6cm、残存高4.2cmを測り、底部から口縁部にかけてなだらかに内弯する器形で、口縁端部は平たく面取りをする。b 3手法で調整し、内面には丁寧で密なヘラ磨きを施す。内面のみを黒色処理するが、外面の一部に黒斑がある。畿内における黒色土器は、平城宮土器Ⅱに属する薬師寺SE037出土土器[1]、平城宮土器Ⅲに属する左京四条四坊九坪出土土器[2]の例はあるが、平城宮土器Ⅳ以降に普遍化する。SD4699出土の黒色土器は、平城宮土器Ⅲ以前の段階のものと考えられ、平城宮土器Ⅳ以降のものとは器形、調整ともに直接の系譜関係をたどることは難しい。今後、畿内における黒色土器の成立と展開を考える上で、その出自を含めて、問題となる土器である。

黒色土器

系譜の問題

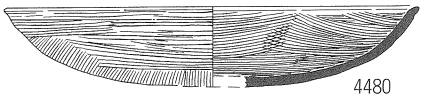


Fig.60　SD4699出土黒色土器実測図
1：4

ii　東側溝SD4701出土土器

SD4701は、西側溝SD4699と異なり、奈良時代の当初から終末まで存続する。調査面積が狭いにもかかわらず土器の出土量は多く、平城宮土器Ⅱ～Ⅴまでわたる。なお、SD4701・4699出土土器には墨書土器が多くみられ、釈文は別表18を参照されたい。

墨書土器

G　坪境小路側溝出土土器 (Pl.147)

左京三条二坊一・二・七・八坪の間を限る東二坊々間西小路、三条々間北小路の側溝からは、厖大な量の土器が出土した。各側溝の堆積は上下2層に分かれ、A・Bの2時期の変遷をたどる。それぞれの出土土器は宅地割の変遷を考える上で重要な意味をもつ。出土した土器には、土師器や須恵器と、少量の黒色土器や製塩土器がある。土師器と須恵器は、食器、貯蔵器、煮炊具の基本的な器種を揃える。しかし、土師器は保存状態が不良で、手法等の観察が困難なものが多い。また、各側溝の出土土器の構成には、溝ごとに大きな差は認められない。ここでは、代表的な例として東二坊々間西小路の東側溝SD4909・4229、西側溝SD4231の出土土器を取り上げて記述し、三条々間北小路側溝の土器は必要に応じてふれることとする。

小路側溝の変遷

1）奈文研『薬師寺発掘調査報告』1988，PL.133

2）奈文研『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』1983，p.19

i　東側溝SD4229・4909出土土器

土師器　4481はSD4909A出土の杯AⅠ。c_0手法で調整すると思われる。4482はSD4229B出土の杯B。大型の深い器形で、風化が著しいが、口縁部外面にヘラ磨きを施すとみられる。

須恵器　4501～4508はSD4229A、4509～4516はSD4229B出土。4501はⅠ群土器の杯AⅡ。4502は杯AⅢで、底部をロクロ削りする。4503は杯C。Ⅰ群土器で、底部はヘラ切り不調整。4504は杯BⅣ蓋。頂部外面をロクロ削りする。4505は杯BⅠ、4506は杯BⅤ。ともにⅠ群土器。4507は壺A。把手と底部を欠失し、胴部下半にはロクロ削りを施す。4508は平瓶。胴部下半と底部をロクロ削りし、把手の一部を欠失する。4509は杯BⅢ蓋、4510は杯BⅠ蓋。端部が屈曲する形態で、器壁の最も厚い部分は端部寄りにある。4512はⅠ群土器の杯BⅠ、4511はⅣ群土器の杯BⅣ。高台は細く、低い。4513はⅠ群土器の杯AⅢ。4514は壺Lと思われる胴部で、内面にロクロ目が顕著に残る。4515・4516は壺M。低い高台が付く。

ii　西側溝SD4231出土土器

土師器　4483はSD4231A出土の杯CⅠ。a_0手法で調整する。4484～4487はSD4231B出土。4484は杯AⅠ、4485は杯AⅡで、ともにc_0手法で調整する。4486はa_0手法で調整する杯CⅠ。4487は高杯で、表面の磨滅が著しいが、杯部、裾部外面を磨くと思われる。

須恵器　4517～4521はSD4231A、4522～4540はSD4231B出土。4517は杯BⅠ蓋、4518は杯BⅣ蓋、4519は杯BⅠで、ともにⅠ群土器。4520はⅡ群土器の杯AⅣで、底部をロクロ削りし、口縁部には煤が付着する。4521は壺K。肩部に櫛状工具による連続刺突文がある。4522はⅠ群土器の杯BⅠ蓋。4523・4524は杯BⅢ蓋。4525はⅤ群土器で、短頸壺の蓋であろう。4533・4534はⅠ群土器の杯AⅣ。底部はヘラ切り不調整。4531・4532は杯BⅠ、4528～4530は杯BⅢ、4526・4527は杯BⅣで、全てⅠ群土器。高台が底部と体部の変曲点に接して付くものが多い。4535は底部外面をロクロ削りするⅡ群土器の皿B。4536は鉢Fで、口縁部は欠失する。4537は壺A蓋。頂部をロクロ削りした後に、軽いナデ調整を加える。4538・4539は壺G。4538は大型の肩の張る器形、4539は小型で肩の張りが著しくない細身の器形で、ともに内面にはロクロ目を顕著に残す。4540は口縁部のみの残存だが、長胴の甕になると思われる。体部外面にはカキ目を施し、内面には丁寧なナデ調整を加える。群不明で、出土例は多くないが、類例は平城宮内裏北方官衙SK217[1]、田村第推定地の左京四条二坊十六坪[2]などにみられる。

長胴の甕

SD4231には、SB4220の柱穴と重複する部分でSD4231A・Bそれぞれに土器溜があり、下層のものはSB4220より古く、上層のものは新しいという調査時の所見である。図示したものでは4483・4518～4520が下層、4484・4487・4527・4531・4534が上層のもので、下層は平城宮土器Ⅲ新段階～Ⅳ、上層は平城宮土器Ⅴの範疇でおさえることができる。各坪境小路側溝の下層と上層の年代は、若干の混入はあるものの、ほぼこれらの土器溜のものに対応し、左京三条二坊一・二・七・八坪の敷地を限った時期の一点を知ることができる。ただし、一・二坪間の坪境小路側溝SD4589・4591に関しては、明確な上層、下層の堆積の差はなく、平城宮土器Ⅴの資料は僅少であり、奈良時代末には坪境小路は廃絶していた可能性もある。

側溝の年代

1)『平城宮報告Ⅱ』1962，PL.47　　2）奈文研『1991年度平城概報』1992，p.80

H　C期以降の井戸出土土器(Pl.148～158，Ph.227～235，別表18)

本節では、左京三条二坊一・二・七・八坪において長屋王邸廃絶後に掘られた井戸と、二条二坊五坪で発掘した唯一の井戸SE5355(g期)から出土した土器類を取り上げる。長屋王邸の時期の井戸出土土器については、第Ⅳ章３Ｂに別載している。C期以降の井戸は総数37基ある。すべての井戸出土土器を網羅する余裕がなく、遺漏分については後日報告する予定である。井戸出土土器のうち、掘形から出土するものは井戸の上限年代を物語るが、概して細片が多く図示に耐えない。また、井戸枠内の埋土中の遺物についても、廃絶時に埋め戻しに使った土にまぎれたものと、井戸にまつわる祭祀に使用したと考えられる土器の両者を含んでいる。前者の場合は、細片が多く、掘形出土土器よりも古い型式のものも含まれることが多い。したがって、ここでは後者に係る土器類を中心に報告する。記述は七坪、八坪、二坪、一坪の順とする。

SE4145出土土器(Pl.148－4000～4004)　掘形埋土から、土師器の杯C、甕、須恵器の杯BⅠ、皿CⅠ(4000)が出土している。いずれも小片であるが、土師器杯Cには暗文が認められ、平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属す。　掘形の土器

井戸枠内の堆積土から出土した土器類も少なく、細片が多い。土師器の器種には杯AⅠ・B・C、皿AⅠ・C、高杯、壺B(4004)、甕が、須恵器の器種には杯BⅣ(4001・4002)、壺G(4003)、甕がある。土師器の壺B(4004)は、完形品で、煮沸痕跡は認められない。壺Bは、本来人面墨書用に作られた祭祀具であり、人面を描かないものも祭祀に使用される場合がある。本例も井戸に係わる祭祀に使われたのであろう。口径13.2cm、器高8.6cmで、体部中程に三角形状の把手を付す。体部内面はヨコナデを施すが、外面は調整せず粘土紐巻き上げ痕跡をとどめる。須恵器杯BⅣ(4001・4002)はいずれも底部外面をナデ調整。壺G(4003)は、口縁部上位を欠損するが、以下は完存する。底部は糸切ままで不調整である。焼きは良く、口頸部から肩部にかけて自然釉が降下する。堆積土の土器類の多くは、平城宮土器Ⅴに属すが、平城宮土器Ⅲに編年される土師器片も少量あり、井戸の存続は比較的長かったことを物語る。　井戸枠内出土土器　人面墨書専用の壺

SE4116出土土器(Pl.148－4005～4010)　井戸枠内の黒色粘質土中と井戸底から少量の土器類が出土している。黒色粘質土からは、土師器の杯AⅠ、杯BⅠ蓋、杯CⅡ(4006)、皿AⅠ(4007)・C、高杯脚部等、須恵器の杯AⅤ(4005)・B、杯B蓋、鉢A、壺K・L(4008)、甕C(4010)が出土している。土師器はいずれも小片である。杯C(4006)はa_0手法で調整し、暗文をもつ。皿AⅠもa_0手法で調整するが、暗文は施さない。底部外面には焼成後に刻されたヘラ描き沈線文の一部が残る。須恵器の杯AⅤ(4005)は、ほぼ完形で、底部ナデ調整。灯火器として使用する。壺L(4008)は、頸部を欠損するが、以下の部位は完存する。おそらく井戸に係る祭祀の際に故意に打ち欠かれたのであろう。底部外面は糸切りまま不調整。甕C(4010)は体部を内外面ともロクロナデ調整する。　井戸枠内出土土器

井戸底からは須恵器大型平瓶(4009)が１点出土している。口の一部と把手を欠損する他は完存する。底部外面はナデで調整する。焼成良好で頂部外面には黄緑色の自然釉が降下する。　井戸底出土土器

井戸枠内出土土器で完形に近いものは平城宮土器Ⅴに属するが、平城宮土器Ⅲに属す小片もあり、井戸の存続機関が比較的長かったことを物語る。

SE4217出土土器(Pl.148－4011～4018)　掘形埋土には、ほとんど土器は含まれず、井戸の掘削

井戸枠内出土土器　年代は不明であるが、堆積土中の土器類の型式は単純で平城宮土器Ⅴに属す。土師器の器種には、完形の椀２点(4011・4012)の他、盤、大型双孔把手付蓋、カマド、甕の小片がある。須恵器の器種には、杯ＡⅤ(4013)・ＢⅡ(4016)、ＢⅤ蓋(4014・4015)、壺M(4017・4018)の他、壺Ａ、甕の小片がある。土師器椀ＡⅠ(4012)はc_3手法で、椀ＡⅡはc_0手法で調整する。須恵器の杯ＡⅤ(4013)・ＢⅡ(4016)は、いずれも底部をナデで調整する。4013は灯明器として使用する。杯ＢⅤ蓋(4014・4015)は、いずれも口縁部が屈曲するＡタイプで、頂部はロクロナデ調整する。4015は硯として使用する。壺M(4017・4018)は、口頸部を故意に欠いたもので、いずれもロクロ水挽き成形で底部は、ヘラで切り離し、ナデで調整する。(4017)は焼きがよく肩部に自然釉が降下する。

掘形の土器　**SE4160出土土器**(Pl.148－4019～4028)　掘形埋土には、比較的多くの土器片が含まれているが、細片ばかりで、時期を判定できる資料は、図示した杯ＢⅡ蓋(4019・4020)２点にすぎない。いずれもＡ形態の口縁形態で頂部はロクロナデ調整する。平城宮土器Ⅳ～Ⅴに属す。

抜取り穴出土土器　井戸枠抜取り穴埋土からは、平城宮Ⅴに属す少量の土器類が出土しているが、多くは破片である。掘形の土器より古い平城宮土器Ⅲに属す破片もある。土師器の器種には、杯Ａ、皿Ａ、椀Ｃ(4024)、高杯、壺Ｃ(4026・4027)、甕Ａ(4028)等がある。椀Ｃはｅ手法による調整で、内面はコテ状器具で調整するが、外面は不調整で粘土紐巻き上げ、痕跡や指でおさえた痕跡をとどめる。壺Ｃのうち、4026は完形品、4027は約２分の１の破片で、灯明器として使用する。甕Ａ(4028)は、残りが悪く、内面の調整は不明である。口縁部は内湾し口縁端部は内傾する面をなす。産地不明。須恵器の器種には、杯ＡⅡ1(4021)・ＢⅤ(4022・4023)、杯Ｂ蓋、甕片等がある。杯ＡⅡ1は、明らかに埋め戻しの際にまぎれ込んだものであり、平城宮土器Ⅲに属す。底部外面ロクロ削り調整。杯ＢⅤ(4022・4023)はいずれも底部ナデ調整。この他、尾張猿投産の平底甕の破片も出土している。

掘形の土器　**SE4185出土土器**(Pl.148, Ph.227－4029～4039)　掘形埋土中から出土した須恵器の器種には、杯ＡⅤ・ＢⅡ、皿ＣⅠ、高杯、甕片、土師器の器種には、杯Ａ・Ｂ、椀Ａ、皿ＡⅠ、甕片がある。これらは平城宮土器Ⅲの新段階(SK820併行)に属す。須恵器の杯ＡⅤ(4037)は底部ナデ調整。焼きが甘く口縁部外面上位が黒灰色、他の部分は灰白色を呈す。灯明器。皿ＣⅠ(4032)も底部外面をナデで調整するⅠ群須恵器。この他、掘形埋土には須恵器の杯の小片で、底部に「塩」と墨書したものが出土している(Ph.214)。

井戸枠内出土土器　井戸枠内の最上層からは、平城宮土器Ⅴに属すa_3手法調整による土師器の椀ＡⅠが出土している。埋土中層からは、土師器の杯ＡⅠ(4031)・ＢⅠ(4033)、皿ＡⅡ(4029)・Ⅹ(4030)、椀Ａ(4035)、須恵器の杯ＡⅣ・Ｂ、杯Ｂ蓋、壺M(4038・4039)、甕Ｂなどが出土している。土師器杯ＡⅠはほぼ完形・b_0手法による調整で、底部外面に「毛」の墨書をもつ。杯ＢⅠ(4033)は平城宮土器Ⅴに属すc_1手法で調整するⅡ群土師器。皿ＡⅡもb_0手法で調整する。皿Ⅹ(4030)は、ロクロ成形で底部の切り離しはヘラ切りにより、ナデで仕上げる。底部外面には判読できない墨書がある。椀Ａにはc_3手法調整のもの(3035)とc_0手法調整のものがある。

ロクロ成形土師器

須恵器の杯ＡⅤ(3036)は底部ナデで調整する。灯明器。壺M(4038・4039)はいずれも口頸部の一部を故意に割ったもの。いずれもロクロ水挽成形で底部の切り離しはヘラ切りによる。井戸枠内土器類は平城宮土器Ⅳ・Ⅴの両時期にまたがる。

SE4268出土土器(Pl.149，Ph.227－4040～4063)　掘形埋土中からは、土師器杯ＡⅠ、須恵器杯Ｂ、同蓋、椀Ｂ、壺Ａ、同蓋、壺Ｍ等の小片が出土した。時期的には平城宮土器Ⅲ～Ⅳに属す。　掘形の土器

井戸枠内埋土からは、土師器の杯ＡⅠ・ＢⅢ、杯ＢⅠ蓋、杯Ｃ、皿Ｘ、椀Ａ・Ｃ、高杯、壺Ｃ、甕、ミニチュア甑等が出土している。また、須恵器の器種には、杯ＡⅢ・ＢⅡ・ＢⅢ、杯ＢⅤ蓋、皿ＢⅠ・Ｃ、壺Ａ・Ｌ・Ｍ、四耳壺、壺蓋、平瓶、平瓶蓋、甕Ｃなどがある。井戸枠内出土土器のうち、本来完形であったが、発掘中に破壊して破片が散佚してしまったものを含め、完形で投棄されたものは、土師器の杯Ｃ(4042)、皿Ｘ(4043)、椀Ａ(4044)・Ｃ(4045)、壺Ｃ(4047)、須恵器の杯ＡⅢ(4049)、壺蓋(4051)、平瓶蓋(4060)であり、他は破片として出土している。土師器の杯ＡⅠのうち4041は、c_0手法調整によるⅡ群土師器で、4040はa_0手法調整によるⅠ群土師器である。杯ＢⅢ(4046)は、c_0手法調整によるⅡ群土師器で、灯明器として使用する。椀Ａ(4044)はc_3手法調整によるⅡ群土師器。椀Ｃは、ｅ手法調整で、口縁部外面に小黒斑をもつ。皿Ｘ(4043)は、ロクロ成形で、底部の切り離しはヘラ切りによる。内面に柿渋を塗ったようで黒褐色を呈す。壺Ｃ(4047)は、体部内面をヨコナデで底部内面をナデで調整するが、粘土紐巻き上げ痕跡をとどめる。ミニチュア甕(4048)は、口縁部を欠くが、以下の部位は完存する。粘土紐巻き上げ成形で、内面をヨコナデ調整するが雑で粘土紐の痕跡が残る。体部外面は不調整で、柿渋を塗ったのか光沢のある黒褐色を呈する。　井戸枠内出土土器　柿渋塗布の土師器皿

須恵器の杯ＡⅢ(4049)は、底部ロクロ削り調整で、灯明器として使用する。杯ＢⅡ(4055)・ＢⅢ(4053・4054)はいずれも底部外面ナデ調整。4053は底部外面と高台内側を硯として使う。皿ＢⅠ(4059)は焼成が甘く、外面に柿渋を塗る。底部外面はナデ調整。杯ＢⅣ蓋(4052)は、井戸枠内の最下層から出土したもので、硯として使用する。頂部外面はロクロ削り調整で、焼きもよく灰緑色の自然釉が降着する。平瓶(4056)は、口頸部と把手を欠くが以下の部位は完存し、灯明器として使用する。底部はロクロ削り調整。壺Ｌ(4062)・Ｍ(4058・4061)は故意に口頸部を打ち欠く。底部の切り離しはいずれもヘラ切りによる。壺Ｍのうち4058は、焼成が良好で、肩部に自然釉が降着する。もう１点の壺Ｍ(4061)の底部外面には、焼成前に施した「十」字のヘラ描きが認められる。壺Ａ(4059)は、伴蓋焼成のⅠ群須恵器で、肩部には灰白色の自然釉が降着する。4051は、対応する身は定かでないが、明らかに同時期の杯Ｂ蓋とは異なる形態であるので壺蓋とみた。頂部外面はロクロナデ調整で、縁部の近くに１条の沈線が囲繞する。平瓶蓋(4060)は、宝珠形のつまみをもち、頂部外面はロクロ削り調整する。内外面に自然釉が降着する尾張猿投窯の製品。井戸枠内出土土器の多くは、平城宮土器Ⅴに属す。

SE4211出土土器(Pl.150，Ph.227－4077～4080)　掘形からは、須恵器の壺Ｍ(4078・4079)、小型短頸壺(4080)が出土している。壺Ｍは、いずれも頸部を打ち欠き、底部ヘラ切り不調整。4079、は焼成良好で、肩部に自然釉が降着する。小型短頸壺は完形品。蓋を被せないで焼成したもので、肩部には自然釉が降下する。底部の切り離しはヘラ切りにより、ナデで調整する。　掘形の土器

井戸枠抜取り穴の埋土からは、土師器の杯ＡⅠ(c_0)、皿ＡⅡ(c_0)、壺Ｃ(4077)、ミニチュア甑(Pl.163－4371)、甕、須恵器の杯Ａ・ＢⅢ、杯ＢⅡ蓋、鉢Ａ、壺Ｇ、甕片が出土している。土師器の壺Ｃ(4077)は、約２分の１の破片で漆の容器として使用する。ミニチュア甑(4371)は手捏製。この他、底部外面に「一」とも読める墨痕をもつ土師器の椀片も１点出土している。　抜取り穴出土土器

SE4211の掘形や井戸枠抜取り穴出土土器は、いずれも平城宮土器Ⅴに属す。まちがいなく

掘形から出土したものとすれば、井戸の使用期間は比較的短かかったことになる。

SE4265出土土器（Pl.150－4081）　井戸枠内埋土下層から、須恵器の杯ＢⅡと尖底に近い丸底甕の下部破片、甕Ｂの小片が出土したにすぎない。杯ＢⅡ(4081)は完形品で底部外面はヘラ切りまま不調整。焼きは良く口縁部がひずむ。平城宮土器Ⅴ。だが、混入か。

掘形の土器

SE4340出土土器（Pl.151，Ph.230・231－4103～4132）　掘形埋土から少量の土器類が出土している。土師器は細片で器種の判定も困難である。須恵器の器種には、杯Ｂ、壺Ｋ、甕Ａなどの小片があるが、時期判定に足る資料ではない。

井戸枠内出土土器

井戸枠内の上段から最下段まで、整理箱にして５箱分の土器類が詰まっていたが、多くは破片であり、完形品もしくは全容の知れる資料は少ない。

土師器の器種には、杯ＡⅠ・ＡⅡ・Ｂ・Ｃ、皿ＡⅠ、椀ＡⅠ・Ｃ、高杯、盤、甕等がある。杯ＡⅠ(4107)は、ほぼ完形品で、c_1手法で調整するⅡ群土師器。底部外面には「一」の墨書を、口縁部外面に小さな黒斑をもつ。4109はc_0手法調整のⅡ群土器、4108は底部から口縁部中位までをヘラ削り調整するⅠ群土師器。杯ＡⅡ(4110)は、底部は不明であるが、口縁部外面をヘラ削りの後ヘラ磨きを施すⅡ群土師器。杯Ｃ(4111)はa_0手法調整のⅠ群土師器。椀ＡⅠ(4105・4106)は、いずれもc_3手法のⅠ群土師器で、白い砂粒を含む。4105は灯明器として使用。4106は口縁部外面に小さな黒斑をもつ。椀Ｃ(4103)はⅠ・Ⅱ群のいずれにも属さない。皿Ｃ(4104)はｅ手法調整による。

須恵器の器種には、杯ＡⅣ(4114・4115)・ＡⅤ(4116・4117)・ＢⅡ(4121・4122)・ＢⅢ(4120)・ＢⅣ(4119)・ＢⅤ(4118)、杯ＢⅡ蓋(4126)、杯Ｃ(4123)・Ｅ(4112)、皿Ｃ、壺Ａ・Ｂ(4131)、双耳瓶(4135)、壺Ｅ・Ｋ・Ｌ・Ｍ(4128)、四耳壺の他、大量の甕Ａ・Ｂ・Ｃの破片がある。杯ＡⅣ(4114・4115)は、いずれも底部ヘラ切りまま不調整。4115の底部外面には「天」と墨書する。杯ＡⅤ(4116・4117)も底部ヘラ切りまま不調整。いずれも焼成が甘く灰青色を呈し、4116は完形品。杯ＥⅠ(4112)は、内湾する口縁形態で、口縁端部は内傾する面をなす。底部外面はナデ調整。杯ＣⅡ(4123)、皿ＣⅡ(4124)は底部ヘラ切りまま不調整。食器類の底部あるいは蓋の頂部は、皿ＢⅠ(4113)を除く他はヘラ切りの後かるくナデを加える程度の調整で、ロクロ削り調整は施さない。杯ＡⅤ(4117)の底部外面には「天」と墨書する。壺Ｂ(4131)は、口縁部から肩部にかけて一部欠損するが、他の部分は遺存する。外面底部から体部下半にロクロ削りを施す。伴蓋焼成で、焼きが良く肩部に自然釉が付着し、口縁部は焼けひずむ。壺Ｌ(4129)は口頸部と体部の３分の１を欠損する。底部外面はヘラ切り後ナデ調整。底部には灰白色の自然釉が降下する。壺Ｍ(4128)は体部の大半を欠く。外面底部から体部下半をロクロ削り調整する。双耳壺(4132)は、完形品で、口径8.4cm、器高23.6cm。肩部の相対する位置に耳状の把手を付す。底部外面は不調整であるが、体部の下端は正位の状態で緩いロクロ回転を使ってヘラ削りを施す。焼成良好で、口縁部内面と肩部の一部に灰白色の自然釉が付着する。双耳壺としては、この他、猿投窯産の破片１点がある。

墨書土器には、前述したものの他、土師器の高杯脚柱部外面に「天」と縦方向に記すもの(Ph.213)、土師器の椀Ｃの底部に「左」と記すもの、須恵器の杯Ｂ蓋の頂内に「水口」と記すものが出土している。

井戸枠内の埋土から出土する土器類は、平城宮土器Ⅳと共通する特色をもつ。

SE4365出土土器（Pl.149，Ph.230－4064～4076）　掘形埋土中からは、整理箱１箱程の土器類が出土しているが、すべて破片である。土師器の器種には、杯ＡⅠ・Ｂ・Ｃ、皿ＡⅠ、高杯、甕、カマドが、須恵器の器種には、杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、皿ＢⅠ、高杯、平瓶、双耳瓶、甕などがある。掘形出土土器は図示しないが、平城宮土器Ⅲ新に属し、この井戸は平城還都後に掘られたのであろう。　掘形の土器

井戸枠の堆積状況は、井戸廃絶時の埋め戻し土（上層）、井戸の使用中に堆積した黒灰色粘土（中層）、井戸底にたまった黒色粘土（下層）の大きく３層に分かれる。上層は細片ばかりで、図示できる資料は土師器の皿（4073）のみである。4073は、完形品で、灯明器として使用。中層からは、土師器の椀Ｃ（4065～4068）・Ａ（4064）、皿ＡⅠ（4074）、甕Ｘ（4075）、須恵器の壺Ａが出土。椀Ｃ（4066・4068）・Ａ（4064）は、上からこの順で重なって出土した完形品。椀Ｃは、いずれも左手手法で成形し、ｅ手法で調整する。4068は底部外面に「一」と墨書。椀ＡⅠ（4064）はc_3手法調整のⅡ群土師器。皿ＡⅠ（4074）はc_0手法のⅡ群土師器。甕Ｘ（4075）は、平底で、外面をハケ目調整後、下半部は縦方向のヘラ削り調整、口縁部内面と体部内面はヨコ方向のハケ目調整を施す。須恵器の壺Ａ（4076）も、完形品で、前述の椀Ｃ・Ａのやや上位から出土した。短頸で胴長の器で、外方にふんばる比較的長い高台を付す。口径12.4cm、器高17.2cm。底部外面から体部下半を緩いロクロ回転で削りを施す。伴蓋焼成で、肩部には灰緑色の自然釉が付着する。　井戸枠内出土土器

最下層からは、土師器杯ＡⅢ（4072）、皿ＡⅡ（4071）、椀Ｃ（4065）がほぼ完形で出土している。杯ＡⅢ（4072）は、b_3手法調整で、底部外面に「大」と墨書する。平城宮土器Ⅲ。皿ＡⅡはc_0手法のⅡ群土師器。椀Ｃ（4064）は灯明器として使用する。墨書土器は前述したものの他に、掘形から須恵器杯の底部に「口大」と記すもの、中層からは土師器杯か皿の底部外面に文様風の墨書を記すものが出土している。中層と下層の土器は平城宮土器Ⅲ～Ⅳに属す。

SE4405出土土器（Pl.150－4100～4102）　井戸SE4405からの土器の出土量は極めて少なく、井戸枠内からは土師器の杯Ｃ（4100）、皿ＡⅠ、皿ＢⅠ蓋、甕の破片、須恵器の杯ＡⅢ・ＢⅠ（4102）・甕Ｃ片の他、ほぼ完形の壺Ｅ（4101）が１点出土している。土師器杯Ｃ（4100）は、a_0手法のⅠ群土師器で、灯明皿として使用する。須恵器の杯ＢⅠ（4102）は底部外面ナデ調整。壺Ｅ（4101）は底部外面ナデ調整。焼成良好で、肩部に自然釉が降着するⅠ群須恵器。枠内出土土器は平城宮土器Ⅲの古段階に属す。　井戸枠内出土土器

SE4395出土土器（Pl.150，Ph.231－4084～4091）　掘形埋土からは土師器の細片が少量出土しているにすぎない。井戸枠内から出土した土器類も少量である。３段分遺存していた曲物井戸枠より上位は、後述の土師器甕Ｂ（4091）や須恵器皿ＣⅡ（4084）の他は、細片が多い。土器の多くは、下から２・３段目の曲物枠近辺の堆積土から出土したものであり、土師器や須恵器の他に、完形の奈良三彩小壺（Pl.163－4366）が１点ある。曲物より上位の埋土から出土した甕Ｂ（4091）は、ほぼ完形に復し、使用痕をとどめない。体部上半部に径10cm程の黒斑を有す。体部の上位の相対する位置に三角形状の把手を上向きに付す。体部外面をハケ目調整。内面は、底部から上に向ってハケ目を施し、上半部をヨコナデ調整する。須恵器皿ＣⅡ（4084）はナデ調整の底部外面には「及」と墨書する。焼成が甘く、全体に灰白色を呈する。平城宮土器Ⅴ。下から第２・３段目の曲物枠内からは、土師器のほぼ完形の皿ＡⅠ（4085）、壺Ａ（4090）、甕Ａ（4088・4089）、　井戸枠内出土土器　奈良三彩の小壺

須恵器壺A(4086)が出土した。土師器の皿AⅠ(4085)は、口縁部が大きく屈曲するB形態で、b_0手法で調整し、内面には暗文を施す。底部外面のほぼ中央に「飯」と墨書する。壺A(4090)も、ほぼ完形品で、体部上位の相対する位置に体部にくっつけるように三角形の把手を付す。体部外面はヘラ削りの後、ヨコ方向のヘラミガキを施す。甕AⅡ(4088)は、胴部の最大径が下半にあり、体部外面をハケ目調整で、内面は下から上に向ってヘラ削り調整する河内産の甕。完形品であるが、使用痕をとどめ、外面の大半は表面が剝落する。甕AⅢ(4089)も、ほぼ完形品で、叩き成形の後、ハケ目調整で内外面を整えるが、胴部下半にはハケ目調整は及ばず青海波文の当板痕跡をとどめる。近江湖東地方産。須恵器の壺A(4086)は完器で口径10.8cm、器高15.6cm。底部外面はナデ調整を施す。高台の内側周辺には爪状圧痕列をとどめる。体部外面下半部はロクロ削りの後、ヘラ磨きを施す。

河内産の甕

近江湖東地方の甕

奈良三彩小壺(Pl.163－4366)は、完形品で、口径3.0cm、器高4.1cm。体部最大径は、胴部の中程にあり、5.7cm。短頸の縁部は僅かに外反し、比較的長い高台は外方にふんばる。肩部内面を除く部位全面に施釉し、蓋をはずして焼成するが、ほぼ全面銀化し、釉の数や釉の配色は定かでない。底部外面はヘラ切りまま不調整であり、トチンの目跡は認められない。

井戸枠内出土土器は、平城宮土器Ⅳが主で、一部がⅤに属す。

SE4380出土土器(Pl.150, Ph.231－4092)　掘形埋土に含まれる土器片は少量かつ細片で、器形や年代の判定は困難である。井戸枠内も同様であって、埋土中層から出土した須恵器の壺L(4092)が唯一完形品で、全容の知れる資料である。壺L(4092)は口径7.2cm、器高16.8cm。底部外面から体部下半部をロクロ削り調整する。焼成良好で口縁部から肩にかけてゴマ塩状に灰白色の自然釉が降着する。平城宮土器Ⅴに属す。なお、下層からは、平城宮土器Ⅲ～Ⅳに属す須恵器の杯B蓋の小片、土師器の椀や高杯小片が出土している。

掘形の土器

SE4720出土土器(Pl.150, Ph.232－4093・4097～4099)　掘形埋土中から、土師器皿AⅠ、甕、須恵器の杯BⅣ、杯B蓋、皿BⅠなどの小片が出土している。杯BⅣ(4097)は、高台が底部周縁より奥まった位置に付され、底部外面はロクロ削り調整する。底部外面を硯として使用する。尾張猿投窯産。掘形出土土器は平城宮土器Ⅳ～Ⅴ期に属す。

井戸枠内出土土器

井戸枠内の埋土からは、土師器の杯AⅠ1、椀A・C、高杯、壺B、甕、須恵器の杯AⅢ、杯BⅡ・BⅢ、杯B蓋、皿C、平瓶、甕B(Pl.155－4249)などが出土している。土師器杯AⅠ1(4099)はc_3手法のⅡ群土師器。椀C(4098)は、ほぼ完形で、灯明器として使用する。須恵器の甕B(4249)は、口縁部に幅広の縁帯を付し、端部が平坦な面をなす。体部外面は、叩き成形の後、カキ目を施す。体部内面は、調整せず、全面に青海波文の当板痕をとどめる。焼きが良く、外面のほぼ全面に灰緑色の自然釉が降着する。墨書土器には、いずれも須恵器杯A片の底部外面に「唐」と記すもの(Ph.215)、判読不明のもの2点が出土している。井戸枠内出土土器は平城宮土器Ⅴに属す。

掘形の土器

SE4530出土土器(Pl.152, Ph.231・232－4161～4173)　掘形埋土からは土師器杯CⅡ、須恵器の甕片が出土した。杯CⅡはa_0手法調整で暗文を施すⅠ群土師器で、平城宮土器Ⅲ古に属す。

井戸枠内出土土器

井戸枠内埋土の土器類も量が少なく全形の分るものは少ない。土師器の器種には、杯AⅠ(4161)、皿AⅡ(c_0)、椀AⅡ(4163)・C(4162)、高杯、鍋(4164)、甕A、カマド等がある。杯AⅠ(4161)はb_0手法調整のⅠ群土師器。4161の底部外面には「十」の字の墨書が記される。椀AⅡ(4163)はc_3手法調整のⅡ群土師器で最下層から出土した。鍋(4164)は平底で幾分ふくらみのあ

る体部に外方に開く短い口縁部からなる。体部内外面とも軽く撫でる程度の調整で凸凹した器面を呈す。暗茶褐色の色合いで、粗大な長石粒を多く含む。

須恵器の器種には、杯BⅢ・BⅣ杯BⅠ蓋、皿A、鉢D、平瓶、壺L・M、壺蓋(4166)、甕A(4172)・Bの他、ミニチュア長頸瓶（Pl.163－4387)がある。杯BⅣ(4167)は、当時期には珍らしく、底部周縁よりかなり奥まった位置に細くて高い高台を付す。底部外面ヘラ切りまま不調整。杯BⅠ蓋(4166)は、最下層から出土したもので、頂部外面はロクロナデ調整する。内面縁部寄りに墨書が認められるが、判読不可。平瓶(4171)は、口縁部の一部を欠く。ヘラ切りまま不調整の底部には、やはり墨書を認めるが、判読できない。壺L(4168)は、和泉陶邑窯に通有な口縁部形態で、焼成良好で外面に自然釉が降下する。壺M(4169・4190)は、いずれもロクロ水挽成形で、底部はヘラ切りまま不調整。またいずれも故意に口を欠く。壺蓋は大型品で、頂部外面はロクロ削り調整を加え、１条の圏線をめぐらす。ミニチュア長頸瓶(4387)は、２段構成で、猿投窯の製品。甕A(4172)は畿内産。甕B(4173)は東海地方産とみられる。

井戸枠内出土土器は平城宮土器Ⅳ・Ⅴに属す。

SE4497出土土器（Pl.153，Ph.228・229－4174～4195）　掘形からは少量の土師器甕片が出土したにすぎない。

井戸枠内埋土から整理箱２箱分の土器が出土している。土師器の器種には、杯AⅠ・AⅡ・CⅠ、皿AⅠ、甕がある。圧倒的に多いのが甕であり、いずれも使用痕をとどめる。杯CⅠ(4176)は、ほぼ完形で、a0手法調整のⅠ群土師器。皿AⅠ(4174)も、完形品でa0手法調整による。微細な絹雲母を多量に含む胎土で、底部外面には木ノ葉の圧痕なく、大きな黒斑をもつ。もう一つの皿AⅠ(4175)も、完形品で、b0手法で調整する。内面には螺旋暗文と間隔の広い斜放射暗文を施す。また、底部内面には焼成後刻した針描き格子文をもつ。Ⅰ・Ⅱ群土師器のいずれにも属さない。土師器の甕は、大小合せて約10個体以上あるが、図示したもの以外はすべて破片である。小型甕(4177)は、体部内面を曲刃コテ状のもので横方向にナデ調整するが、外面は不調整でハケ目を施さない。この種の器形は、墨書人面を描く例が多く、煮沸に使うことは極めて稀である。本例は、火を受け外面は熱で数ヶ所、器表がはがれ、煤がほぼ全面付着する。4179は、体部内面はヨコ方向にヘラ削り調整するが、肩部直下には当板痕を残す。4178は体部内面をナデ調整する。煮沸痕が認められる実用品であるが、底部の中心より、やや離れた位置に円孔を穿っている。4180は、下膨れタイプの甕で、体部外面はハケ目調整、内面は不定方向にケズリ調整を施す。カマド(4182)は、復原受口径9.6cm、器高16.1cm程の小型甕で、やはり使用痕をとどめる。前述のような小型甕用であろう。体部外面は縦ハケ目で、内面はナデで調整する。

井戸枠内出土土器

須恵器の器種には、杯AⅠ(4183)・AⅡ(4184)・AⅢ(4185)・AⅤ(4186)・BⅠ(4187)・BⅣ(4188・4189)・F(4190)、皿CⅠ(4192)・高杯(4194)、壺E(4193)、提瓶(4195)、甕などがある。食器類のうち、Ⅱ群須恵器の杯AⅤ(4186)は、底部ロクロ削り調整するが、他はヘラ切り不調整。杯BⅣ(4189)は産地不明。それ以外のものは、Ⅰ群須恵器で総じて、焼きが甘い。高杯(4194)は杯部を欠く。Ⅰ群須恵器で、焼きは甘く灰白色を呈す。壺E(4193)は、完形品で、底部外面はヘラ切りまま不調整。提瓶(4195)は、口縁部と把手を打ち欠く他は、完存する。奈良時代にはほとんど確認できない器形である。製作技法の上では、この時代まだ存続している俵瓶と共

通する。肩部の相対する位置に環耳を付すが、片方は一度付けまちがったらしく、とり離した際の環耳の残土が残り、そこにも自然釉が付着する。報告した井戸枠内出土土器は平城宮土器Ⅳに属すが、この他に平城宮土器Ⅲに属す小片も出土しており、8世紀中頃に掘られた井戸とみられる。

抜取り穴出土土器

SE4498出土土器（Pl.152，Ph.228・229－4145～4160）　井戸枠抜取り穴の埋土から少量の土器類が出土したが、その多くは破片で、完形品は後述の土師器杯ＣⅠ(4148)1点のみである。土師器の器種には、杯ＡⅡ・ＣⅠ・ＣⅡ、皿ＡⅠ、高杯、甕などがある。杯ＣⅠ(4148)は、a_0手法のⅠ群土師器で、底部外面に焼成前に施した「十」字のヘラ描きが認められる。杯ＣⅡ(4146)は、a_0手法のⅠ群土師器で、内外面が淡いピンク色に変色する。杯ＢⅡ蓋(4145)はc_3手法で調整するⅠ群土師器。高杯(4149)は、杯部外面および裾部内外面をヘラ削りし、杯部や裾部外面にヘラ磨き調整を施すⅡ群土師器である。

須恵器の器種には、杯ＡⅠ2(4157)・ＡⅢ1(4252)・ＡⅢ2(4150・4151)、ＢⅠ2(4155・4156)・ＢⅢ2(4158・4159)・ＢⅣ(4154)、皿Ｃ、壺Ｋ、壺蓋、甕Ｂ・Ｘ(4160)等がある。食器の底部外面の調整は、杯ＡⅠ2(4157)・ＢⅣ(4154)はナデ調整で、他はすべてロクロ削り調整を施す。いずれもⅠ群須恵器。甕Ｘ(4168)は、丸底の長胴甕で、短い口縁部は外方に開く。体部は、シダ葉状の刻目の叩き板と、刻目のない当板、おそらく卵石を用いて叩き成形する。外面には局部的にカキ目調整整を加える。内面上位はロクロナデで、それ以下は不調整で、粘土紐巻上げ痕跡をとどめる。墨書土器には須恵器杯ＡⅢ1の口縁部外面に「文屋」と記すものが1点ある(Ph.215)。井戸枠抜取り穴出土土器は、前述したSD5100出土土器と共通する特徴をもち、平城宮土器Ⅲの古段階に属す。

掘形の土器

SE4580出土土器（Pl.154，Ph.234－4228～4237）　掘形埋土中からは、土師器杯ＡⅠ、甕、須恵器の杯ＢⅠ蓋、皿Ｃ、甕片など少量の土器が出土している。土師器杯ＡⅠは平城宮土器Ⅲに属し、須恵器の甕片は鉄分の多い泥土を器表に塗った尾張猿投窯のもの。井戸枠材の伐採年は年輪年代測定で752年＋α(767年前後)と判明している。

井戸枠内出土土器

井戸枠内埋土は、8層に分層して取り上げたが、出土土器の大半が細片であり、須恵器の甕腹片が多くを占める。上から2層目の土器類には、9世紀後半に編年できる土師器の杯ＡⅡ(4234)、黒色土器Ａ類の杯ＡⅡ(4233)が出土している。土師器杯ＡⅡ(4234)は、ｅ手法調整による完形品で、灯明器として使用する。内面は、内面を板ベラの先で不定方向にナデ付けた後に、ヨコナデ調整する。黒色土器Ａ類の杯ＡⅡ(4233)は、c_0手法調整により、内面をヨコ方向にヘラ磨き調整し、口縁部内面にはラセン暗文を施す。

井戸底に近い第7・8層からは、平城宮土器Ⅴに属す土器類が出土している。土師器の杯Ｃ、椀ＡⅠ・ＡⅡ、壺Ｂ、ミニチュア甑(Pl.163・4370)が、須恵器の杯ＢⅡ、皿ＢⅠ、壺Ｌ、盤、甕等が出土している。完形品は土師器椀ＡⅠ(4230)と須恵器杯ＢⅡ(4232)の2点のみである。土師器の杯Ｃ(4229)は、b_0手法のⅠ群土師器。4228はｆ手法調整の産地不明品。完形。椀ＡⅠ(4230)は、c_0手法のⅡ群土師器で、底部外面に「九」と墨書する。椀ＡⅡ(4235)もc_0手法調整による。ミニチュア甑(4370)は、約3分の1の小破片で、内面はコテナデ調整。

須恵器の杯ＢⅡ(4232)は底部ヘラ切りまま不調整。口縁部外面には「十」の墨書がある。灯明器。皿ＢⅠ(4231)は底部ナデ調整。底部の高台内に油をためて灯明に使ったらしく、高台部

に油煙が１ヶ所残る。壺Ｌ(4237)は、尾張猿投窯の製品で、底部外面から体部下端をロクロ削り調整する。底部外面には焼成前に施した「十」の字の針描きがある。焼成良好で、体部には自然釉がかかる。壺Ｌ(4236)は、西日本産で、底部外面から体部下半をロクロ削りする。灰黒色を呈し、灰白の自然釉が霜降り状に降下する。なお、これと同巧な作りの壺Ｌの下半部片がもう１点ある。墨書土器には、前述したもの以外に、土師器の杯底部片に「水」と記すもの、須恵器の壺底外面に判読できない文字を記すものがある。

SE4755出土土器（Pl.150－4082～4083）　掘形埋土から、土器は出土していない。井戸埋土中の土師器の器種には、暗文をもつ杯あるいは皿Ａ片、皿Ｂ蓋、カマド、甕などの少片がある。須恵器の器種には、杯ＢⅠ(4082)・ＢⅣ、皿Ｂ蓋、壺Ｑ(4083)、横瓶、甕Ｃなどがある。壺Ｑ(4083)以外はいずれも小片である。壺Ｑ(4083)は、底部は不調整であるが、肩部以下はヘラで切り離す前に正位の状態でロクロ削りを施す。出土量が少なく、型式認定に窮するが、平城宮土器Ⅲ～Ⅳと考えたい。

SE5205出土土器（Pl.150・154，Ph.232－4094～4096・4196～4213）　掘形埋土中より少量の須恵器小片が出土したが、型式判定に足る資料ではない。

井戸枠内出土土器

井戸枠内の埋土からは、整理箱２杯程の土師器や須恵器の他、奈良三彩双耳瓶が出土している。土師器のうち完形品は、皿ＡⅡが１点(4206)、椀ＡⅠが８点(4196～4203)、椀Ｃが１点(4204)、甕Ｘが１点(4208)である。皿ＡⅡ(4206・4207)はc_0手法調整のⅡ群土師器。椀ＡⅠにはc_0手法調整によるもの(4200・4201)、c_3手法調整によるもの(4198・4199・4202・4203)、e_3手法調整によるもの(4196・4197)がある。前二者はⅡ群、後者はⅠ群土師器。椀ＡⅠのうち4197・4198・4203が灯明器で、4202の底部外面には「夫」、4203の底部外面には「○」と墨書する。椀Ｃ(4204)は、ｅ手法調整であるが、口縁部内面を曲刃コテで器面を整えた後、右回りの仕上げナデを施す。底部外面に「上」と墨書する。

甕Ｘ(4208)は、やや外反する口縁部で、端部は水平な面をなす。体部外面は、不調整であるが、内面はコテ状器具で横方向に削りを施す。底部外面には黒斑をもつが、煮沸の痕跡は認めない。河内地方の産。他に、杯ＡⅠ(a_0・b_0・c_0・c_3)、・ＢⅠ(c_1)、皿ＡⅠ(a_0)・Ｃ、高杯、甕片がある。

須恵器の器種では、壺Ｇ(4213)が唯一の完形品で、他に故意に頸部を打ち欠いて投棄したと考えられる壺Ｇ(4212)・Ｍ(4210・4211)・Ｌ(4095)・Ｘ(4096)がある。壺Ｇ(4212・4213)は同形同大であり、4213は故意の所産かは定かでないが、扁壺風に体部の一側面が平坦面をもつ。焼成良好で暗灰青色を呈し、肩部に灰白色の自然釉が付着する。口縁部の一部を欠く4212は、酸化炎気味の焼成で暗茶褐色を呈す。いずれも頸部と体部のつなぎは２段構成による。底部には静止糸切り離し痕をもつ。壺Ｍ(4210・4211)はいずれも、口まで一気に水挽成形したものであり、4210は底部外面から体部下半部をロクロ削り調整するが、4211は底部ヘラ切りまま不調整。壺Ｘ(4096)は、本来は壺Ｇと同様な口頸部をもつが、壺Ｇに較べ器壁は厚く、また体部高が低くて胴径が大きい。口頸部とのつなぎは２段構成により、底部は静止糸切りまま不調整であるが、体部下半部は切り離す前に正位の状態でロクロ削りを施す。この他、杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、壺Ｅ・Ｇ・Ｌ、甕がある。いずれも小片である。井戸枠内出土土器は平城宮土器Ⅴに属す。

奈良三彩の双耳瓶

奈良三彩双耳小瓶（Pl.163－4368)は、口縁部の上位と胴部下半の耳飾を欠損するが、他の部

位は遺存する。残高8.4cm、底径4.2cm。体部最大幅は、肩部よりやや下位にあり、7.0cm。肩部の相対する位置と胴部下半部の3ヵ所に、ヘラで面取った扁平で中央に円孔を穿った耳飾を縦方向に付す。銀化が著しく、本来の釉調はとどめないが、緑・白・褐釉を斑文状にあしらう三彩である。頸部と体部のつなぎは3段構成による。底部の切り離しはヘラにより、ナデで調整する。黄灰色の胎土で、長石砂粒を若干含む。底部外面には輪ヅクとみられるあたりを残す。

体部にも耳飾をもつ双耳瓶の類例としては、東堀河や平城宮第一次大極殿地区の東楼SB7802柱抜取り穴からの出土品があり、いずれも大型品である。前者は、平城宮土器Ⅲと供伴し、耳飾の作りは当品と同様にヘラで扁平に面取るものであり、尾張猿投産とみられる。後者は、平城宮土器Ⅳと供伴し、耳飾は手びねりによる半環耳であり、畿内産とみられる。当品は前者の形を念頭にしたミニチュア品であろう。

墨書土器としては前述のもの以外にも、釈読できないが土師器椀Aの底部外面に記すもの、須恵器杯Aの口縁部外面に記すもの、同杯B蓋の頂部外面に「□公(廣カ)」と記すものがある。

掘形の土器　**SE4760出土土器**（Pl.155, Ph.234－4238～4242）　掘形埋土からは、土師器の杯片、須恵器の杯B、同蓋、壺L、甕などの小片が少量出土した。型式認定に躊躇するほどの少片であるが、一応、平城宮土器Ⅲ～Ⅳとみた。

井戸枠内出土土器　井戸枠内の埋土を上・中・下の3層に分層し遺物を取り上げたが、上・中層は井戸廃絶時以降の埋め立て土で、これらの層から出土した土器類は小片が多いが下層や掘形出土土器よりも古い型式のものも含まれている。例えば、中層から出土した須恵器杯AⅡ(4238)・BⅢ2(4241)は平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属す。

下層からは土師器の壺B片、須恵器の甕片とともに、頸部以上を打ち欠いた壺L(4240)、同じく口の一部を欠く壺Q(4239)、甕B(4242)が出土した。壺L(4240)は、卵形の水瓶風の体部で、口頸部と体部のつなぎは3段構成による。底部外面から体部中位までをロクロ削り調整する。焼成良好で暗灰褐色を呈し、肩部から胴部上位の外面に自然釉が降下する。尾張猿投窯産。壺Q(4239)は、底部外面は不調整であるが、体部下半部を、底部を切り離す前に正位の状態でロクロ削り調整する。体部外面の、高台近くに横位に「和田金口」と墨書する。甕B(4242)は、底部の破片はみあたらないが、ほぼ全形が知られる。体部外面に特徴的な綾杉状の叩き板で成形する。甕には、この他、体部下半のみを残すものがある。尖底に近い丸底形態で酸化炎焼成され、内外面茶褐色を呈す。埋土下層出土土器は平城宮Ⅳ～Ⅴ。

掘形の土器　**SE4815出土土器**（Pl.155, Ph.234－4243～4248）　掘形埋土からは、暗文のある土師器杯C、甕A片、須恵器の杯AⅢ・BⅣ、双耳瓶、甕Bなどの破片が少量出土している。平城宮土器Ⅲ～Ⅳに属すと考える。

井戸枠内出土土器　井戸枠内からは、整理箱1箱程度の土器類が出土したが、その多くは中層から出土している。中層出土土器も完形に近いものは、土師器椀AⅠのみで、多くは細片である。他に土師器の杯AⅠ、皿AⅠ、椀AⅡ、甕、須恵器の杯BⅠ、皿BⅠ、壺L、甕Bなどがある。

土師器椀AⅠ(4247)は、c_3手法調整のⅡ群土師器で、灯明器として使用する。椀AⅡ(4246)はe_3手法のⅠ群土師器。皿AⅠ(4243)は、c_0手法のⅡ群土師器で、口縁部に黒斑をもつ。甕A(4248)は、胴長で下ぶくれの体部をもち、口縁端部は内側に巻き込まない。体部内面をナデで調整するが、一般の大和型とは異なる。

下層からは、土師器の完形の皿ＡⅡ(4244)とともに、土師器の杯ＡⅠ、高杯、甕片が少量出土したにすぎない。皿ＡⅡ(4244)は、c_0手法で調整するⅡ群土師器で、口縁端部に小さな黒斑をもつ。中・下層出土土器はいずれも平城宮土器Ⅴに属す。

SE5125出土土器（Pl.156，Ph.235－4275～4282）　最下層の埋土から、須恵器の杯ＡⅢ(4276)・ＢⅠ(4278)・ＢⅣ(4281)、壺Ｅ(4282)が出土した。杯ＡⅢ・ＢⅣとも底部ヘラ切りまま不調整。壺Ｅ(4282)は、完形品で珍しく平底無高台で、口縁部が極端に短く、口縁端部は凹面をなし内傾する。底部外面はヘラ切りまま不調整。型式的には平城宮土器Ⅲ新段階～Ⅳ。

SE4885出土土器（Pl.156，Ph.233－4250～4274）　掘形埋土中には、平城宮土器Ⅲに属す土師器杯Ｃなどの小片も若干認められるが、多くは後述する井戸枠内の堆積土出土品と同様に平城宮土器Ⅴに属す。掘形埋土出土品には珍しく完形品や完形品に近いものが含まれている。　掘形の土器

土師器の器種には、杯ＡⅡ(4260)、皿ＡⅠ(4258・4259)、椀ＡⅡ(4253)、高杯(4261)などの他、杯Ｃ、カマド、甕などの小片がある。杯ＡⅡ(4260)は、完形品で、b_0手法で調整するⅡ群土師器。皿ＡⅠ(4258・4259)はいずれもc_0手法調整のⅡ群土師器で、4259は完形品。椀ＡⅡ(4253)はc_3手法で調整するⅡ群土師器。高杯(4261)は、脚部の破片はみあたらないが、杯部はほぼ完存する。脚柱部は比較的太い心棒に粘土紐を巻き上げる。杯部外面は、ヘラ削りののち粗いヘラ磨きを施す。

須恵器の器種には、皿ＢⅠ(4272)、壺蓋(4256)の他、杯Ａ・Ｂ、同蓋、甕などの小片が少量ある。皿ＢⅠ(4256)は、高台の作りが特徴的で、高台外側面が内傾する。底部外面はロクロ削り調整。焼きは甘く灰白色を呈する。壺蓋(4256)は、縁部が内湾し、口縁端面は平坦な面をなす。頂部はロクロ削り調整する。

井戸枠内の埋土から出土した土師器の器種には、杯ＡⅠ・ＢⅡ・ＢⅢ・Ｃ、皿ＡⅠ・Ｃ、椀ＡⅠ・ＡⅡ、高杯、小甕(4273)など比較的残存率が高いものの他、甕片も少量出土している。杯ＡⅠには、c_3手法で調整するもの(4251)、c_0手法で調整するもの(4250)があり、いずれもⅡ群土師器。4251は完形品。杯ＢⅡ(4264)も、ほぼ完形で、a_3手法調整により、底部内面に螺旋暗文を、口縁部内面には狭い間隔で斜放射暗文を施す。形態・調整法・胎土の上でⅠ・Ⅱ群土師器と明らかな違いがあり、河内地方の産と考えられる。杯ＢⅢ(4269)も完形品で、b_1手法調整による。河内産か。杯Ｃは、a_0手法調整のⅠ群土師器で、灯明器として使用する。皿ＡⅠ(4252)はc_0手法調整のⅡ群土師器。皿Ｃ(4255)は、完形品で、灯明器として使用する。椀ＡⅠのうち4267は、平城宮土器Ⅳに属すⅠ群土師器で、c_3手法調整する。4268は完形品で、c_3手法調整。灯明器。c_0手法調整による椀ＡⅡ(4265・4266)のうち、4265は完形品で、4266は灯明器として使用する。いずれもⅡ群土師器。高杯(4270)は脚部と杯部の接合は心棒作りによる。口縁と裾部の一部を欠く他は完存する。杯部外面はヘラ削りの後、６回に分けヘラ磨きを施す。裾部はヨコナデにより、外面にはヘラ磨きを施す。小甕(4273)は体部外面のハケ目は粗い。内面底部から体部下半は不定方向のヘラ削り調整。実用品で使用痕をとどめる。　井戸枠内出土土器　河内産杯Ｂ

須恵器の器種には、比較的遺存度の高い、杯ＡⅤ、杯ＢⅣ蓋(4262)、皿ＣⅠ、壺Ａ蓋(4271)、鉢Ｄ（4274）の他に、高杯、盤、壺、甕の破片が少量出土している。杯ＡⅤは底部をナデ調整する。杯ＢⅣ蓋（4262）は頂部外面にロクロナデ調整を施す。皿ＣⅠは底部外面不調整。灯明器として使用する。鉢Ｄ（4274）は、底部外面不調整であるが、体部下半部を正位の状態でロ

クロ削り調整する。

墨書土器は、判読できないが、須恵器杯片の底部外面に文字を記すものが１点出土している。

掘形の土器　**SE5135出土土器**（Pl.158, Ph.235－4331～4353）　井戸掘形埋土からは、土師器の杯Ａ、甕、須恵器の杯ＢⅠ(4341)、皿ＢⅢ、壺Ｅ(4350)、大量の甕などの破片が出土している。掘形出土土器は平城宮土器Ⅲの新段階頃に位置づけられる。

井戸枠内出土土器　井戸枠内上層からは、平城宮土器Ⅴに属す土師器の杯Ａ(4342)・Ｂ(4336)、椀ＡⅠ(4337・4338)、皿ＡⅡ(4335)、須恵器の杯ＢⅠ(4340)・ＢⅣ(4348)、同蓋(4347)、甕片が出土。土師器の残りは悪く、いずれもｃ手法調整によるが、詳しくは不明。須恵器杯ＢⅠ(4340)は、底部外面はロクロナデ調整。焼きはやや甘く灰白色を呈し、口縁部内外面に火襷痕をとどめる。底部外面には「水」もしくは「外」とも読める墨書がある。

下層の灰色砂から出土した土器類は、少量であるが平城宮土器Ⅳに属す。土師器の器種には、杯ＡⅠ(4331・4332)、甕、鍋(4353)、須恵器の器種には、杯ＡⅠ(4334)、皿Ｃ(4333)、短頸壺(4345)、甕Ｂ(4352)、ミニチュア壺Ｌがある。土師器の杯ＡⅠには、Ⅰ群土師器でa_0手法のもの(4231)、Ⅱ群土師器でc_3手法のもの(4232)がある。前者は、口縁部内面をコテ状器具でヨコ方向に調整した際に着いた、コテ刃のあたり痕を残す。鍋(4353)は、平底形態で体部外面は軽く撫でる程度で、特に調整しない。内面の底部は不定方向に、体部はヨコ方向に木ベラを使ってナデ調整する。

須恵器の杯Ａ(4334)は底部ナデ調整。皿ＣⅡ(4333)は、ロクロ削り調整の底部に、墨書文字の一端を残す。短頸壺(4345)は胴長の体部で畿内ではあまりみかけない。外面は肩部以下をロクロ削りで、内面はロクロナデ調整を施す。酸化炎気味の焼成で、内面と断面は暗茶褐色を呈す。ミニチュア長頸壺は口縁部の一部をかく。ロクロ水挽成形で、底部外面は不調整であるが、底部を切り離す前に正位の状態で肩部以下をロクロ削りする。

掘形の土器　**SE5140出土土器**（Pl.157, Ph.235－4301～4330）　掘形埋土からは、土師器の杯Ａ、皿ＡⅡ、椀Ａ、甕、須恵器の杯Ａ・Ｂ、壺、甕片が出土。須恵器の甕Ａ(4330)は、口縁端部が上方に立ち上がり、外傾する面をもち、外側面はやや外反気味の縁帯をなす。体部は木目に直行する刻み目を入れた擬格子文の叩板と青海波文を刻んだ当板で薄く成形する。灰白色の砂をほとんど含まない胎土で、焼きもよく、頸部から肩部に自然釉が降着する。美濃産と目される。掘形出土品の型式認定はむつかしいが、平城宮土器Ⅳ以降とみた。

井戸枠内出土土器　井戸枠内からは整理箱２杯程の土器類が出土している。井戸底に接して出土した土器類は、細片が多く、土師器杯ＢⅠ、黒色土器Ａ類の杯Ｂ蓋などがある。杯ＢⅠ(4322)はc_1手法で調整するⅡ群土師器。黒色土器Ａ類の杯Ｂ蓋(4311)は、器表が荒れて外面の調整法は定かでないが、内面の磨きは頂部は丁寧であるが、縁部は比較的雑である。この他、土師器椀Ａ、高杯片等が出土しているが、後述の井戸下層出土品と型式的には変わらない。

下層埋土の土師器の器種には、杯ＡⅠが４点、皿ＡⅠが１点、皿ＡⅡが３点、椀ＡⅠが16点、椀ＡⅡが３点、高杯脚部が11点、甕Ａなどがある。杯ＡⅠのうち、4313は完形で、c_0手法調整のⅡ群土師器。4314は、c_3手法で調整するⅡ群土師器で、口縁部外面に黒斑をもつ。4312は、ｆ手法調整による産地が特定できない土師器で、底部内面には焼成後に「井」と刻んだ針描きが残る。皿ＡⅠ(4318)はc_0手法調整のⅡ群土師器、4319はb_0手法調整のⅠ群土師器。皿ＡⅡ(4315

～4317)はいずれもc_0手法調整のⅡ群土師器。4317は、ほぼ完形。灯明器。椀ＡⅠには、c_3手法によるもの(4303・4309)とc_0手法によるもの(4301・4302)の他、小片であるがｅ手法のもの１点、ｅ手法で外面全面を磨くものも１点ある。c_3手法のものは一般に砂をほとんど含まないのに対し、c_0手法のものは砂が多く、それぞれⅠ・Ⅱ群に対応するものと思われる。椀ＡⅠに墨書した例が２件ある。１件は口縁部外面に「官厨」(4305)と、もう１件は底部外面に「九」と記す。高杯には脚柱部心棒作りのもの(4321)と輪積みしぼり手法のもの(4320)がある。前者が多く８点ある。脚柱部のヘラによる面取は、７・８・９面のものがある。

須恵器の器種には、杯ＢⅢ、杯ＢⅠ蓋、皿ＡⅡ(4329)、壺Ｌ、甕などがある。杯ＢⅢ(4324)は、ほぼ完形で、不調整の底部外面に「三」と墨書する。杯ＢⅠ蓋(4327)も、縁部の一部を欠くがほぼ完形で、頂部ロクロナデ調整。硯として使用する。皿ＡⅡ(4328・4329)はいずれも底部ナデ調整で、4327の底部外面には「十」と墨書する。4325は焼きが甘く、雲母を多量に含む胎土で灰白色を呈す。壺Ｌ(4325・4326)は口縁部を打ち欠く。4325は尾張猿投窯折戸10号窯式に属す。体部と頸部のつなぎは２段構成で、外面底部から体部下半をロクロ削り調整する。口縁部内面と肩部に灰緑色の自然釉が降下する。4326は西日本の製品で頸部まで一気に水挽成形する。底部の切り離しはヘラにより、不調整の底部外面には焼成前に施した一本線の針描きがある。井戸枠内埋土出土土器は平城宮土器Ⅴ。

SE5075出土土器(Pl.156・158－4275・4279～4295・4346)　井戸掘形からは、整理箱１箱程の土器類が出土しているが、すべて破片である。土師器の器種には杯ＡⅠ、杯Ｂ蓋、杯Ｃ、盤、甕、須恵器の器種には杯ＡⅡ・ＢⅡ、杯ＢⅢ蓋、盤Ａ、甕などがある。平城宮土器Ⅲに属す。　掘形の土器

井戸枠内の遺物は３層に分層して取り上げたが、時期差はほとんど認められず、平城宮土器Ⅴに属す。　井戸枠内出土土器

土師器の器種には、杯Ａ・Ｃ、皿ＡⅠ・ＡⅡ・Ｃ、椀ＡⅠ(4243～4245)、高杯(4247)、甕などがある。杯Ｃ(4254)はb_0手法調整のⅠ群土師器、皿ＡⅠ(4280)・ＡⅡ(4275)はc_0手法調整のⅡ群土師器。皿Ｃ(4287)はｅ手法調整で、底部から口縁部にかけての外面に黒斑がみられる。高杯(4288)は杯部と脚柱部のつなぎは心棒作りによる。杯部外面はヘラ削りの後、横方向に粗いヘラ磨きを施す。脚柱部は７面に面取り、裾部はヨコナデ調整後、外面にヘラ磨きを施す。裾部端面に小さな黒斑が生じている。最上層出土。もう１点の高杯は、脚部はシボリ成形の後、ヘラで10面に面取る。裾部はヨコナデの後、ヘラ磨きを施す。

須恵器の器種には、杯ＡⅢ(4293・4294)・ＢⅢ、杯ＢⅠ蓋(4290)、鉢Ｘ(4289)、壺Ｍ(4346)、甕などがある。杯ＡⅢ・ＢⅢ、鉢Ｘは、底部外面不調整。杯ＡⅢ、鉢Ｘは、焼きが甘く、口縁部外面上端が灰黒色に以下の部位は灰白色を呈す。杯ＢⅠ蓋(4290)は、完形で、頂部ロクロナデ調整。水挽成形の壺Ｍ(Pl.158－4346)は頸部を欠く。体部外面下半部を正位の状態でロクロ削りを施すが、底部はヘラ切りまま不調整。焼成良好で灰黒色を呈し、肩部から胴部にかけて胡麻塩状に自然釉が降下する。

SE5220出土土器(Pl.154，Ph.232－4214～4227)　掘形埋土に含まれる土器類は少量で、土師器の杯ＡⅢ、椀Ｄ、甕、須恵器の杯Ｂ蓋、平瓶(4227)、甕などがあるが、平瓶以外は小破である。平瓶(4227)は、口縁部上位が故意に打ち欠かれているが、以下の部位は完存する。高台と把手をもつ形態で、底部を切り離す前に体部外面をロクロ削りする。焼きが良く、天井部と把手に　掘形の土器

は暗灰緑色の自然釉が降下する。掘形出土土器の型式判定に窮するが、平瓶の形態から平城宮土器Ⅳ～Ⅴとみた。

井戸枠内出土土器

井戸枠内下層埋土から整理箱1箱程の土器類が出土したが、やはり多くは破片である。

土師器の器種には杯B蓋、杯C、皿AⅠ・AⅡ、椀AⅠ、高杯、壺C、甕などがある。杯C(4218)はb0手法調整のⅠ群土師器、皿AⅠ(4217)・AⅡはc0手法調整のⅡ群土師器で、皿AⅡ(4219)の底部外面には「大」と墨書する。椀AⅠには、c0手法調整によるもの(4215)、c3手法調整によるもの(4216)、e3手法調整によるもの(4214)の3種あり、前二者がⅡ群、後者がⅠ群土師器である。4216の底部内面には意味不明の針描きがある。焼成後、すなわち消費者の手に渡った後に刻されたものである。また、4215の底部外面には「一」と墨書する。壺Cは祭祀具や漆容器に使われるのが一般的であるが、4220は実際に煮沸に使ったかどうかは分らないが、煤が口縁部から体部に付着する。

須恵器の器種には、杯BⅡ、壺E・A・G・M、甕などがある。杯BⅡ(4221)は、底部外面をヘラ切り後にナデ調整する。焼きがよく灰黒色を呈し、口縁部外面に胡麻塩状に自然釉が降下する。壺E(4226)は、肩部直下から体部下端まで、ロクロから切り離す前に正位の状態でロクロ削りする。底部はヘラ切りまま不調整。壺M(4222～4225)は、いずれも口まで一気に水挽成形したもので、4222はこの器形としては珍しく、高台がない。完形品で焼きも良く黒灰色に焼き上がり、口縁部内面と肩部外面には胡麻塩状に灰白色の自然釉が降下する。底部は静止糸切り離しまま不調整であるが、体部下半部はロクロから切り離す前に正位の状態でロクロ削りを施す。4223と4225とは底部の切り離しをヘラで行うが、4223は切り離す前に体部をロクロ削りする。甕類には尾張猿投窯産の平底形態のものも含まれる。前述の土器類は、平城宮土器Ⅴに属す。

SE5065出土土器 (Pl.157, Ph.235－4296～4300)　井戸枠内の埋土から整理箱1箱分の土器が出土した。後述の須恵器の小壺以外はすべて小片であるが、平城宮土器Ⅲに属す。土師器の器種には、皿AⅠ、高杯、甕などがある。皿AⅠ(4296)はb0手法調整のⅡ群土師器。高杯には、脚柱部を粘土輪積ののちしぼって成形するもの(4297)、同様な成形法であるが、裾部内外面を板ベラで削り、脚柱内面下半部のみをヘラ削りするもの(4298)、先に棒状粘土柱を作り、その中心に細い棒をさし込み、その棒で内側を抉り取るもの(4299)がある。須恵器小壺(4300)は、完形品で、底部外面ヘラ切りまま不調整。焼きは良く灰黒色を呈し、口縁部内面と肩部外面に灰白色の自然釉が降下する。

SE4225出土土器 (Pl.151－4133～4145・4478・4479)　小さな曲物井戸で、掘形からは土器は出土していない。曲物枠内の埋土からは、土師器、須恵器、製塩土器合せて整理箱1箱程度の土器が出土している。完形品は土師器椀AⅠ1点のみで、他はすべて破片で小片が多く、そのうち残存率の高いものを選んで図示した。出土土器は平城宮土器Ⅴに属す。

井戸枠内出土土器

土師器の器種には、杯AⅠ(4179)、皿AⅡ(4134)、椀AⅠ(4135・4136)・X(4137)、壺C、甕等がある。杯AⅠ、皿AⅡ、椀AⅠは、いずれもⅡ群土師器で、前二者はc0手法で、後者はc3手法で調整する。なお、皿AⅡ(4134)に関しては、c手法としたが、ケズリは口縁上端部までは及んでいない。また、底部外面には「田長」と判読できる墨書をもつ。椀X(4137)は、杯Cに似た形態であるが、底部には木ノ葉圧痕は見られず、左手成形手法による。口縁部を2段ナデ

調整する。産地不明。

須恵器の器種には、杯A・BⅡ・BⅢ(4138・4478)・BⅤ(4140・4141)、杯BⅠ蓋(4142)、杯F(4143)・X(4139)、皿A(4133)・C・甕等がある。杯BⅢ・BⅡは、いずれも底部不調整で、暗灰青色に焼き上がる。杯BⅤ(4140)の底部外面と高台内側には、爪状圧痕帯がめぐる。杯BⅡは、A形態の縁部で、頂部外面はロクロ削り調整。杯F(4143)は、椀形で口縁端部が外側に小さく肥厚し、底部には幅広の高台を付す。外面底部から腰部にはロクロ削り調整を施す。粗い長石砂粒を多く含み、灰褐色に焼き上がる。産地不明。杯X(4139)は、狭い底部から口縁部が大きく外方に開く形態で、底部外面はヘラ切り後、ナデ調整を施す。口縁部下半部には細かなロクロ目をとどめる。また、底部内面にもヘラ切痕をとどめており、「底部円柱作り」と言われる成形法による。底部円柱作り技法とは、まず、ロクロの上に底部となる円柱を据え、円柱の上に粘土紐を巻き上げて大方の形を作った後、ロクロの回転を利用し、挽き上げ細部を成形し、最後に粘土紐からヘラや糸で切り離して製品を作る方法である。粘土円柱がなくなるまで、同様な手順で製品を作るため、製品の底部内面にも切り離し痕跡が残ることになる。埼玉県南多摩窯群の御殿山5号窯など関東地方でみられる技法であり、この杯Xもその地方から搬入された可能性が高い。皿AⅡ(4133)は口径15.8cm、器高1.7cm。底部外面はロクロ削りで、内面底部から口縁部下位をヘラ削り調整する。Ⅱ群須恵器。底部外面には「平□」の墨書がある。

底部円柱作りの杯

製塩土器は、小片であり図示できないが、内型成形で口縁端部は内側に折り返す形態で、内面には細かい布目をもつタイプである。

墨書土器には、前述の例の他、須恵器の杯Aの底部外面に「□宮□　」「大□(属カ)」、土師器の杯か皿の底部に「大□(井カ)」と記すものがある。

SE5355出土土器（Pl.158・163－4353～4362）　左京二条二坊五坪の井戸。掘形埋土から少量の平城宮土器Ⅴに属す破片が出土した。

井戸枠内では、上・下層には土器類が少なく、中層に集中するが、多くは断片で完形品は須恵器杯AⅡ(4360)と奈良三彩小壺蓋（4362)だけである。平城宮土器Ⅴ。以下、中層出土土器のうち遺存率の高い資料を採り上げる。

土師器皿AⅡ(4354～4356)はいずれもc_0手法調整のⅡ群土師器である。4355は口縁部外面に小さな円形の黒斑をもつ。4356は、底部内面には「十」形の、外面には1本線の刻線文が施されている。両面の刻線とも焼成後に記されたものである。

須恵器の杯AⅢ(4357・4360)は、いずれも底部外面不調整でヘラ切り痕をとどめる。4360は、完形で、焼成が甘く淡灰色を呈す。底部外面には、「秦」と墨書する。杯BⅠ(4361)・BⅡ(4359)・BⅢ(4358)は、いずれも灰黒色を呈し、底部外面ヘラ切りまま不調整。杯BⅡ(4359)の底部外面には、「浄」と墨書する。

奈良三彩小壺蓋は口径3.4cm、器高1.4cm。釉の発色はかんばしくなく、釉彩の数は定かでない。天井部外面は鈕を中心に6区画に分け、緑釉を交互に3ヵ所に施す。この間は剝落したか、もしくは本来施釉しなかったのかは分らないが、現状では無釉で器表が露出する。頂部内面にも明確な釉掛け痕跡は認められず、元々、釉を掛けなかった可能性が高い。胎土は、淡灰白色を呈し、砂粒を多量に含む。頂部内外面はロクロナデ調整。

奈良三彩の小壺の蓋

I　奈良三彩・唐三彩陶器（color Ph. 7，Pl. 163，Fig. 61）

奈良三彩　ここではSD5100や井戸以外の遺構から出土した奈良三彩について述べる。三条二坊一・二・七・八坪では、総数10点あるが、小片や釉が剝落したものが多い。遺構から出土したものは6点ある。

七・八坪間の坪境小路南側溝SD4359からは同一個体とみられる二彩火舎片2点と二彩瓶片1点、同北側溝SD4361からは二彩・三彩の杯あるいは皿の小破片2点、七坪の掘立柱建物SB4711の柱抜取り穴から二彩の瓶片が出土している。この他、一坪の包含層から小壷(4367)、二・七坪間の坪境小路東側溝近辺の包含層から小壷片(4365)、七坪の東北部の包含層から二彩小壷蓋(4364)が出土している。小壷は、4365・4367ともに釉が完全に剝落し、器壁も摩滅しており、調整法も定かでない。いずれも、やや赤味を帯びる灰褐色の胎土で、前者の高台部分は茶褐色の色合に焼き上がり、粗大な長石粒を含む。小壷蓋(4364)も、釉が剝落するが、二彩と判定できる。素地は灰白色に焼き上がり、釉は黄緑色に発色する。頂部外面はロクロ削り調整。

二条二坊五坪側では東二坊々間路西側溝SD5021から三彩蓋の破片が出土。縁部を欠くが、天井部は縁部近辺に段を持つ珍しい器形であり、合子の蓋の可能性がある。銀化のため、釉の配色は定かでないが、天井部外面には褐・緑・白の三彩を斑文状にあしらうようである。内面は白釉単色であり、黄味を帯びる。素地は灰白色の水簸粘土で、一般の奈良三彩よりも硬質に焼き上がり、褐釉を多用することや特異な器形であることから、唐三彩の可能性もある。

唐三彩　確実に唐三彩とみられる小片1点が、八坪南西の包含層から出土している。小片であるが、内外面に三彩をあしらうことから、小型の椀形とみられる。鉄分の少ない黄釉、鉄分の多い褐釉を使い分ける。灰白色の焼成堅緻な胎土で、化粧土は認められない。釉の発色も良好である。

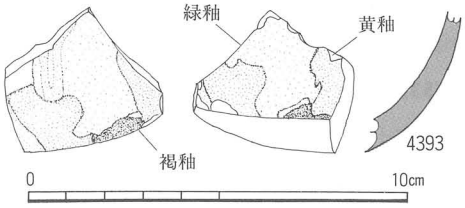


Fig. 61　唐三彩椀実測図

J　墨書人面土器（Fig.62）

左京三条二坊の坊内では墨書人面用の壷が井戸SE4145・4497から出土している（Pl.148・153－4004・4177）。墨書のあるものは皆無であり、同じ祭祀具の土馬とは対照的な出土状況を示す。墨書人面土器が出土した遺構は、極めて調査面積の少ない東三坊々間路東側溝SD4701のみであり、ほぼ完形品1点と小片3片が出土した。ほぼ完形の4394は、大和地方で墨書人面用に作られた壺形態とは異なり、井戸SE4497出土小甕（Pl.153－4177）に良く似た形態である。

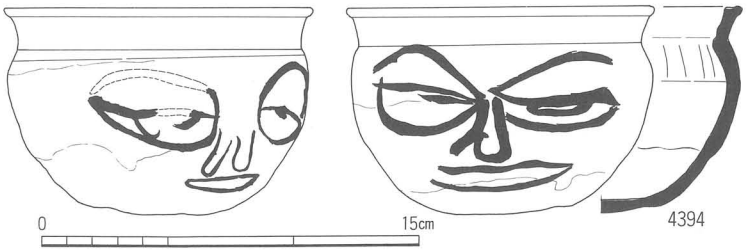


Fig. 62　墨書人面土器実測図

小型で、口径12.4cm、器高8.2cm。体部の相対する位置に２面の人面を描く。目を大きく描くが、口ひげの表現はない。

他の３片の破片のうち２点は接合しないが同一個体とみられ、顔が小さいことから、２面以上描かれている可能性が高い。

K　墨書・刻書・刻印土器

墨書土器（Pl.159～162，Ph.213～215－4395～4425，別表18）　二条大路上に掘られた濠状遺構SD5100・5300出土の墨書土器については、第Ⅲ章３Ｃ・Ｄで述べたので、ここでは二坊々内の遺構や遺物包含層、東二坊々間路両側溝から出土したものを報告する。これらの地域から出土した墨書土器は、判読不可のもの断片資料を含めると総数419点にのぼるが、主として判読可能なもの読めそうなもの195点を別表18に集録した。墨書土器の記載内容と出土場所は、各坪の性格を考える上で極めて重要である。しかし、個々の詳細な出土地点については、煩瑣を極めるので、坪との関係で出土場所を示すことにした。

墨書土器の分布

まず、墨書土器の分布をみると、当然の事ながら調査面積と比例し、七坪が最も多い。次いで一坪で、二坪・八坪では少ない。遺構の上では、三条々間北小路の両側溝に多いが、道路交差点以西（一・二坪間）での出土は稀で、東（七・八坪間）に分布が偏っている。一・八坪、二・七坪間の坪境小路両側溝からは、あまり出土していない。

次に墨書対象の土器をみると、８世紀後半代、平城宮土器Ⅳ・Ⅴに属すものが大半を占める。遺構変遷の上ではＤ～Ｆ期に相当する時期の所産である。８世紀前半代に属すものは、東二坊々間路西側溝出土品の一部、土坑SK4750、井戸SE5075・4498の出土品に限られる。墨書される土器の種別は、土師器が少なく、須恵器が圧倒的に多い。器種には貯蔵器や煮沸具も若干存するが、多くを占めるのは杯・皿類の食器である。しかし、食器器形であるが必ずしも食器として使用したとは限らず、硯として使用していたものも含まれる。

墨書の内容

最後に簡単に記載内容についてみると、一字だけのものは意味不明なものが多いが、人名、内容物あるいは用途を示すもの、官署名や役所名、吉祥句などがある。人名で特に注目されるのは、三条二坊一・二・七・八坪の４町を占有した時期(奈良時代前半のA・B期)の井戸SE4498から出土した「文屋」である。これと同筆とみられるものが、二条大路上の濠状遺構SD5100からも出土しており、SD5100の遺物がこの南の坪内から投棄されたことを傍証するからである。官署・役所名墨書は、東二坊々間大路西側溝SD4699(左兵衛府・中衛府)、一・二坪間の坪境小路南側溝SD4589(務所)、同北側溝SD4591(相模所)、一坪の遺物包含層や井戸SE5140(官・官厨）から出土しており、各坪の性格を考える上で貴重な資料である。

また、SE5140などには、「三」「九」「十」といった数字１字を墨書する例があり、官署の備品番号を示す可能性もある。

刻書土器(Fig.63，別表19)　ここでは、SD5100以外の遺構や遺物包含層から出土したものを扱う。井戸出土品については既に述べたものもあるから、小片で図示できなっかたものをここでとり上げる。ヘラあるいは針で刻書するものは、現状では36点確認している。刻書土器の多くは、「十」「×」「一」のような記号風のものが圧倒的に多くを占める。これらは、土師器の場合はほとんど焼成後、すなわち消費者に渡ってから刻されたものであるが、須恵器の場合は焼成

記号刻書

前、すなわち生産者によって刻されたものである。

文字刻書　文字が刻された例は極めて少なく、SD4591から出土した黒色土器A類の杯BⅠの底部内面に「忠」と刻すもの(4)、一坪のSE5075から出土した須恵器壷の体部外面に「西」と刻すもの(2)、東二坊々間路西側溝SD4699から出土した土師器杯Cの底部内面に判読できない文字を刻すもの(1)、二坪包含層出土で「忍山」と刻すもの(Pl.162－3424)の、計4例のみである。「西」は焼成前、他は焼成後に刻す。

刻印「官」　**刻印土器**(Fig.63，別表19)　印面陽字印の4種の「官」が出土している。一つは小型で丸い印面をもつもの(7)。二・七坪間の坪境小路西側溝SD4231出土。6・8はよく似るが、6はうかんむりの最初の書き出しが下を向くのに対し、8は上を向き異印である。いずれも七坪の包含層出土。もう一つは、全体がうかがえないが、ひとまわり大きいもの(5)である。一坪の東面築地西雨落溝出土。4種の印は、平城宮内裏東方の基幹排水路SD2700や東院西辺部でも出土しているが、宮外での出土はこれが初めてであり、前述の「官」「官厨」などの墨書土器とともに、坪の性格を語る上で重要な資料となる。

逆字の「官」の刻印須恵器は、岡山県総社市道金山窯跡から出土しているが、これらとは異印である。産地の特定ができないが、平城宮の例も含め、刻印された須恵器は概して焼きが甘いものが多い。

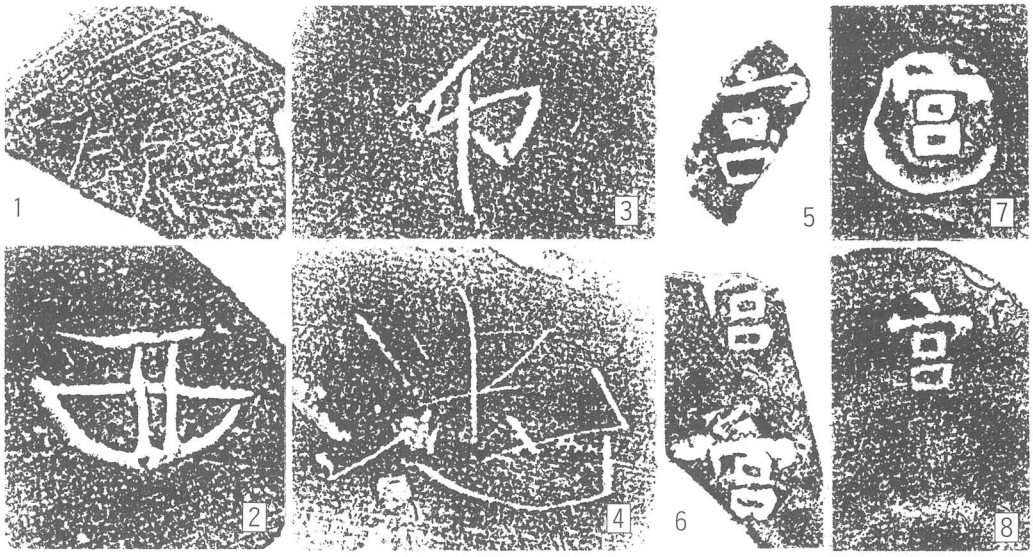


Fig.63　刻書・刻印集成　1：1

L　特殊土製品

特殊土製品は、濠状遺構SD5100、井戸以外の遺構や遺物包含層からも出土しており、ここではそれらについて報告する。なお、SD4750・5100・5300や井戸以外の置物は、まだ十分には整理が進んでおらず、今後、新たに資料が追加される可能性が高いことをおふくみ願いたい。ここで特殊土製品としたものは、硯、ミニチュア土器、土玉、土錘、紡錘車、用途不明土製品である。

i　陶硯類(Pl.164～166，Ph.216)

三条二坊の一・二・七・八坪の内外から多量の陶硯類の破片が出土した。破片総数133点あり、型式、形態、胎土の上から少なくとも80点の個体識別が可能である。いずれも須恵器であり、圏足円面硯、蹄脚円面硯、低脚輪状高台円形硯、無台円形硯、獣脚円形硯、宝珠硯(八花硯)、風字硯、鳥形硯、猿面硯、特殊硯などさまざまな形態の硯がある。

坊内における硯の分布

まず、一・二・七・八坪内での硯の分布をみると、硯の集中する地域は、一坪では中央部と八坪との坪境小路西、七坪では南辺部と中央部、小路交差点東の七坪西北部や八坪南辺部である。次に、接合するもの、あるいは同一個体と認定できるものの分布をみると、坪を越えて点在する状況が知られる。その例は遺物包含層出土品の場合が多い。水田造成などで移動した可能性も考慮する必要があるが、破片の分布の広がりが大きい硯は、大型の蹄脚円面硯に限らる。他の型式の硯で坪を越えて分布する例は極めて少なく、同坪内の近辺に分布する。例外は、七・八坪間の坪境小路北側溝SD4361下層と七坪南東部の流路SD4150出土品が接合した圏足円面硯(4429)だけである。したがって、必ずしも後世の移動だけに帰すことも無理があろう。問題の蹄脚円面硯は、大型品に限られ、個人用とするよりも、公私の事務所での共用硯とみるべきである。したがってその分布のあり方は、破片がより広域にまで移動が可能であった4町もしくは2町占地のときに使用されたことを反映する現象とみるのも一考である。

二坊外の出土遺構

一・二・七・八坪の外では、濠状遺構SD5100、東二坊々間路東側溝SD4701、同西側溝SD4699から出土している。このうち、SD5100出土品については、既に別項で述た通りである。ここでは、東二坊々間路両側溝出土品をまず報告し、次に一・二・七・八坪内出土品は硯の型式ごとにまとめて記述する。

a　東二坊々間路両側溝SD4699・4701出土陶硯

東二坊々間路東側溝SD4701からは、蹄脚円面硯の硯部片が1点出土している。七坪南半部や八坪南半部出土品と同一個体であり、坊内から投棄されたことが知れる。

蹄脚円面硯

東二坊々間路西側溝SD4699からは、圏足円面硯の小片、蹄脚円面硯1点、低脚輪状高台円形硯2点(4443・4446)、計4点が出土した。蹄脚円面硯(4439)は外堤径25.2cm、器高5.3cmの大型品。一般の蹄脚円面硯とは異なり、側面の突帯下に個々独立した短い獣脚を付す。いわゆる百足硯であり、図上復原では22基の脚が付く。断面の観察から、まず、円筒形体部を作り、内側に硯部を載せる粘土帯を貼り付け、その上に硯部の平板を取り付ける。外側面には、まず突帯をめぐらせた後、その下部に獣脚を付す。暗灰青色に焼き上がり、底面には灰白胡麻塩風の自然釉が降下する。硯面の陸と海部には墨が残存する。尾張高蔵寺2号窯でも同式のものが出土していて、型式的には古い蹄脚硯であるが、当品は陶邑産とみられる。

低脚輪状高台円形硯

低脚輪状高台円形硯(4443)は、側面が丸味を有しながら、真直ぐ立ち上がる皿状の器に、底部のやや奥まった位置に低短な高台を付す。口縁部寄りが全体にややくぼめて作られていて、境はないが、一応海と陸部を分けているようである。底部外面ロクロ削り調整。水簸粘土を使用し、底部外面には自然釉の降灰をみる。使用頻度が高く、内面のロクロナデ条線は完全に磨り消され、墨が残る。七坪東方のSD4699下層出土。4446は、輪状紐をもつ杯蓋の形で、硯部に粘土帯で海部と陸部

を画す。粘土で囲まれた内側は、磨った痕跡がなく、墨が遺存する。何ヵ所海部があるかは不明であるが、一応２ヵ所として復原した。頂部外面をロクロ削り調整する。長石を多量に含む胎土で、焼きもよく暗青灰色を呈す。八坪東方のSD4699上層出土。

b　坊内出土硯

円面硯の法量分布

円面硯　円面硯は47点出土。外堤径で法量の分布をみると、径25cm以上の超特大型品（Ⅰ類）、径20cm前後のもの（Ⅱ類）、径15cm前後のもの（Ⅲ類）、径10～12.5cmのもの（Ⅳ類）、径10cm未満の小型品（Ⅴ類）の５種に分かれそうである。坊内では、Ⅰ類の出土はなく、Ⅱ類～Ⅴ類が出土している。量が多いのは、Ⅲ・Ⅳ類であり、Ⅱ・Ⅴ類は少ない。硯面の陸と海の形態から、A・B両タイプに区別する。Aタイプは陸部と海部が段差で区別されるものであり、陸部周縁を小さくつまみ上げるもの（4427・4430・4431・4436）と、ありそうでないもの（4429・4437・4438）がある。Bタイプは陸と海を円弧状の同一面に作るものであり、突起を施けてその境を明確にするもの（4428）と、界をまったく施けないもの（4426・4432～4435）の２種がある。後者が圧倒的に多く、法量Ⅲ類以下の硯にみられる。例外もあるが、このタイプの硯は圏足部の透しの数が少ないという特徴がある。

陸と海の区画の有無

Aタイプの円面硯

Aタイプのうち、4427は、法量Ⅲ類で、圏足部に長方形透しを15個穿孔し、実足部には縦方向の沈線を施す。焼成良好で暗灰～灰黒色を呈す。Ⅰ群須恵器。八坪の遺物包含層出土。4429は、法量Ⅳ類に属し、陸部をほぼ真上ぐ一段高く盛り上げる。圏足部には30個以上の長方形透しを穿孔する。暗灰黒を呈し、硯部外面には灰緑～灰白色の自然釉が降下する。尾張猿投窯産。七・八坪境小路北側溝SD4361と七坪の流路SD4150から出土し、互いに接合した。4430・4431は法量Ⅲ類に属し、4430は陸部が盛り上るのに対し、4431は中央に向って下降する。4431の圏足には19個の細い長方形透しを穿つ。いずれも焼きがよく、硯部外面には自然釉が降下する。尾張猿投窯産。いずれも七坪南辺の遺物包含層出土。4436は、法量Ⅴ類に属す尾張猿投窯の製品で、圏足部外面の裾近くに１本横方向の沈線をいれ、沈線と外側面突帯の間に針描きの３葉と４葉の木の葉文を連ねる。他とは異なり、自然釉は圏足部にのみ掛り、硯部内外面には掛らない。文様帯を意識して圏足部に釉が掛る措置を取った可能性もある。七坪中央部の遺物包含層出土。4437・4438は法量Ⅱ類に属し、4437は圏足部が厚手に作られているが外堤と外側部突帯は薄く挽き出され、圏足部には22個の長方形透しを穿つ。硯部裏面には自然釉が降下し、硯部上面には火襷痕をとどめる。Ⅱ群須恵器。4438は、焼きが甘く、淡灰色を呈す。圏足部には　個の長方形透しを穿つ。硯部下半はナデで調整する、Ⅰ群須恵器。両者とも一坪中央東半の遺物包含層から出土。

Bタイプの円面硯

Bタイプの硯のうち、4428は、法量Ⅲ類に属し、曲面の硯部に小さく突帯を貼付け海と陸を画す。圏部には細長い長方形透しを31個穿つ。硯部下半はロクロナデ調整を施す。明灰色に焼き上がり、硯部下面には自然釉が降下する。尾張猿投窯産。七坪南半の遺物包含層出土。4432は法量Ⅳ類に属す。圏部透しの数は不明。硯部裏面はヘラナデ調整。Ⅰ群土器。二坪遺物包含層出土。4433・4434も法量Ⅳ類に属し、4433は外側面突帯よりやや下位に細い長方形透しを７個穿つ。Ⅰ群須恵器。七坪西南遺物包含層出土。4434は、圏足部には16個の長方形透しを穿ち、外側面の縁部と突帯間に連続波状文を施す。同様な例は平城宮第一次大極殿院地区、兵庫県姫

路市本町遺跡で知られているにすぎない。硯部内面ナデ調整。砂粒を多く含む胎土で、暗灰色に焼き上がる。産地不明。八坪南西の坪境小路北側溝SD4361出土。4435は、法量Ⅴ類に属し、長石粒を多量に含む胎土で灰白色に焼き上がる。産地不明。七・八坪間の坪境小路南側溝SD4359出土。

蹄脚円面硯　いずれも断片で小片が多いが、18個体以上ある。蹄脚硯は製作技法からＡ・Ｂの２類に大別できる。蹄脚硯Ａ(4441)は、硯部と台部を別々に作り、不整形な円頭をもつ三角柱多数で両者を接合するものである。一方、蹄脚硯Ｂ(4440)は、硯部と台部を一体に作った後、台部部分にさらに粘土を巻きたしたのち、ヘラで逆三角形ないし逆台形の透孔をえぐり、でき上がった三角柱の上に型で作った半球頭と脚頭とを貼りつけるものである。坊内では、蹄脚硯Ａは２点のみで、他はすべて蹄脚硯Ｂである。蹄脚硯Ａは、4441の他に、硯部外側面の上・下端にそれぞれ２本一組の沈線をめぐらせ、上端の沈線直下に突帯をめぐらせ、大きく不整形な脚部を突帯下に貼り付けるものがある。両者とも七坪南辺の遺物包含層出土。蹄脚硯Ｂ(4440)は坪境小路南側溝SD4359出土。

蹄脚硯Ａ
蹄脚硯Ｂ

低脚輪状高台円形硯　4444は小片のため外形は推測の域を出ないが、前述の東二坊々間路西側溝出土品(4443)、あるいは4446のような形態の硯部に粘土紐で海部を区切るもの。海部には墨が残るが、磨った痕跡はない。底部外面ロクロ削り調整。長石粒をかなり多く含む胎土で、裏面には熔け切らない灰が降下する。産地不詳。七坪のRP33区の土坑出土。

台脚付円面硯　4447は、低い皿状の硯部の縁部際を台形状にくぼませ周囲３辺をやや高く盛り上げ海部を作り、底部には方形台を取り付ける。方形台は海部の真下に取り付ける。円形硯は他の例からみても、風字硯のように硯面が斜めにならず水平であるので、一案として三脚に復原した。底部外面はロクロ削りで調整する。灰青色に焼き上がり、底部外面には霜降り状に灰白色の自然釉が降下する。Ⅰ群須恵器か。二坪東辺の遺物包含層出土。

無台円面硯　4442は中型の圏足円面硯の圏足部を省いたような形態である。陸部と海との境には比較的高い突帯をめぐらす。底部外周のみにロクロ削り調整を施す。微細な黒色粒子を含む灰黒色の胎土で、灰白色に焼き上がる。自然釉は、硯としては珍しく、表面すなわち硯部側に掛かる。尾張猿投窯の製品とみた。一坪中央東寄りの遺物包含層出土。

脚台付円形硯　4492は、脚台端部を欠くが、外堤部は極めて小さく、つまみ上げただけのもので、硯面は内湾気味に作る。外堤寄りの硯面に楕円形の孔をあけ、下面の口穴を粘土板で袋状につつみ込み、海(墨溜)とする珍しい硯である。底面の脚台部周縁をロクロナデ調整するが、他の部分は不調整。長石微砂を多量に含む胎土で、やや焼きが甘く淡灰色を呈する。産地不詳。七坪南辺の遺物包含層出土。

獣足円面硯　4453は浅い皿状の器に獣脚を取り付けたもの。小片で、海の存在や獣足の数は不明。底部外面ロクロ削り調整。長石微砂を多量に含む胎土で、灰青～灰黒色に焼き上がる。Ⅰ群須恵器か。八坪南辺の遺物包含層出土。

宝珠硯　4445は尖端部を含む約半分を欠く。楕円形状の粘土板に木笵による型押しで硯部を成形した後、外周を硯面に合せて宝珠形に削り出し、底部に４足を付す。底部には灰緑色の自然釉が掛かる。破面には漆が付着しており、補修した可能性もある。平城宮では、内裏東方官衙と東院地区から同笵の宝珠硯が出土しているが、本例はそれらとは違う笵で作られたもの。尾張黒笹７号窯の産品。

無台花形硯　4456は、外堤部を部分的に外側から内側に指で押さえて、あらかたの花弁形に作ったものをさらにヘラで整える。硯部にも粘土帯をめぐらせ、外側の花弁に合せてナデで弁花を作るが、この粘土帯は一周せず外堤に取り付き、陸部と海部を区画する。底部外面は不調整。微細な長石砂を多量に含み、灰黒色に焼き上がる。断面芯は暗紫色を呈するが、硯面は磨りへって暗紫色の面が処々に出る。Ⅰ群須恵器。七・八坪間の坪境小路南側溝SD4359上層出土。

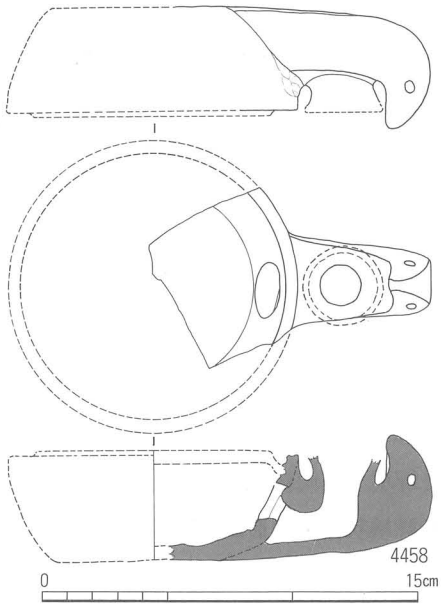


Fig.64　特殊鳥形硯実測図

風字硯　ロクロを使わず、粘土板で成形したものであるが、楕円硯の可能性の高いものをも含む。4449は、解放の硯尻部と脚台をもつ破片で、外面をヘラ削り調整し、脚台を硯尻端に付した後、脚台をヘラ削り調整する。長石微砂と黒色粒子を含む胎土で、明灰色に焼き上がる。自然釉は硯面に降下する。尾張猿投窯産。七坪西北寄りの遺物包含層出土。4448は硯部に外堤内側から発する粘土突帯で陸と海部を区画する。内外面ともヘラ削りで仕上げる。前述の4449と同様な胎土組成であるが、やや焼成温度が低く、底部の降灰は熔け切らない。尾張猿投窯産。七坪南辺の遺物包含層出土。4450は粗い作りの獣足が付く。胎土や焼成は前述の無台花形硯と同じでありる。Ⅰ群須恵器。八坪南辺の遺物包含層出土。なお、図示しなかったが、風字硯と推定されるものがもう１点ある、尾張猿投窯産。二坪東辺の遺物包含層出土。

鳥形硯　鳥形硯も２種あり、粘土板で成形した硯部の硯尻近くに足を付すもの(4451)と、中空の硯台側面に頭部から頸部の鳥形把手を付すもの(Fig.64－4458)がある。4451は、堤部は比較的低く、硯尻は楕円形を呈す。外面全面をヘラ削りで成形するが、足は粘土紐を貼り付けただけで特に調整を加えない。黒色粒子を含むが極めて緻密な胎土で、淡灰色に焼き上がる。尾張猿投窯でも日進地区の産品とみられる。二坪西北部にある後世の耕作溝からの出土である。

Fig.64－4458は、杯Ａ形をした台部の側面に円孔を穿った後、開放部を粘土板でふさいで硯面を構成する。次いで体部側面の穿孔部に、袋状で上に口を開ける頸部(のど袋)と頭部からなる鳥形の把手を貼り付ける。面取りした頭部に細い棒を貫通させ両目を表現する。硯本体の中空部と鳥ののど袋は円孔でつながっていて、おそらく硯部のどこかにも磨った墨を下の中空部に入れる穴が穿たれ、実際に使用する際には、穴のある反対側をもち上げ、鳥ののど袋に墨を流し入れ、のど袋にあいた口に筆を挿し入れ使用したものと思われる。携帯に適した作りである。鳥の目にはひもを通していたのかもしれない。仮に携帯用とすれば、硯の穴は体部側面の穴の上あたりにあいていたであろう。所謂、中空硯の一種であり、７世紀前半代に流行する形態である。同様な鳥形中空硯は、福岡県春日市浦ノ原４号窯でも確認されている。本例は胎土の上から尾張猿投窯産とみた。七坪内の道路SF4290の南側溝SD4261出土。

携帯用の硯

特殊硯　特殊硯としたものは、あまり例のない形をしたもの(4454・4455)を言い、硯でない可

能性もある。4454は、ひだ様のものを数段重ね、ところどころ突起させたり、くぼませる奇妙な形で、須彌仙や唐三彩にみられるような池の明器（山水池）の一部かも知れない。底部はナデ調整。産地不詳。二坪東辺の包含層出土。4455は一見、中空硯とも思える。体部は粘土紐積上げ成形で、外面中程に２条の突帯を、外堤直下には１条の沈線をめぐらす。堤部は小さくつまみ上げた程度で硯面は外湾気味に作られる。体部面に灰が降下するが熔け切らない。産地不詳。七坪西北部の包含層出土。

猿面硯　4457は、甕腹を楕円形に近い形に打ち欠き、破面をこすって成形する。甕腹片を硯に転用する例は多いが、周縁を加工するものは極めて稀である。猿面硯の名称由来である青海波当板痕跡は、磨り減ってほとんどその跡を残さない。八坪東北隅の二条大路南側溝SD5105出土。

ii　ミニチュア土器(Pl.163)

ミニチュア土器の出土量は極めて少なく、現状では二坊々内外合せて31点しか確認していない。しかし、整理の進行していない遺構からの出土が多く、整理が進めばさらに点数が増加する可能性が高い。出土した遺構と出土点数は、八坪東方の東二坊々間路西側溝SD4699上層が３点、二条大路上の濠状遺構SD5100が２点、二坪側ではまったく出土せず、七・八坪間の坪境小路南側溝SD4359が３点、同北側溝SD4361が５点、一・八坪間の坪境小路東側溝SD4909が１点、二・七坪間の坪境小路西側溝SD4231が１点、七坪内の東西道路SF4290の南側溝SD4261が１点、一坪の井戸SE5135が１点、二坪の井戸SE4580が１点、八坪の井戸SE4530が２点である。残り10点は遺物包含層から出土であり、七坪が３点、八坪が７点。その多くは道路側溝に近接する地区からの出土している。SD5100を除くといずれも水に関係する遺構であり、また遺物包含層をも含めたその分布は、土馬や奈良三彩と相似通った様相を示す。それは、ミニチュア土器が玩具ではなく祭祀具である傍証となり、またそれらの出土分布から、祭祀の執行の場もある程度特定可能である。　出土遺構

ミニチュア土器の多くが須恵器であり、土師器は少なく６点にすぎない。器種は注器が多く、食膳具他は少ない。また、須恵器の大半が尾張猿投窯産であり、鳴海32号窯式と折戸10号窯式（黒笹７号窯期）の製品がある。以下、各出土遺構の出土品について述べる。

東二坊々間路西側溝SD4699上層からは、完形の須恵器の広口壺２点と壺蓋１点出土した。広口短頸壷(4391・4392)は、いずれも肩に稜を有す壷Ｂ形態。自然釉の掛り方から蓋とともに焼成されたもので、灰黒色に焼き上がる。以下に述べる、平瓶を除く壺類と同様に水挽成形による。肩以下は、ロクロから切り離す前に正位の状態でロクロ削りを施すが、底部はヘラ切りまま不調整。4392は底部外面に「×」のヘラ記号をもつ。いずれもⅠ群須恵器。壺蓋(4374)は天井部の広さにそぐわない大きなボタン状の紐を付す。天井部外面はロクロ削り調整を施す。尾張猿投窯産。　SD4699の出土品

濠状遺構SD5100の木屑層から壺蓋(1885)、暗灰褐色砂土からは壺(1886)が出土した。いずれも須恵器で、壺蓋(1885)は極めて小さく、ロクロ削りを施した頂部には擬宝珠様の紐を付す。尾張猿投窯の製品。壺(1886)は、口縁部の一部を欠損するが、発掘中に破壊したもので本来完形品。体部は、扁平で、肩と胴部の境はにぶい稜をなす。壺Ｂに近い形態であるが、短い細頸で、口縁部は外反する。底部ヘラ切りまま不調整である。Ⅰ群須恵器。　SD5100の出土品

SD4359の出土品

七・八坪間の坪境小路南側溝SD4359からは、須恵器の杯B、長頸瓶、壺Bが出土した。杯Bとした4379は、高台部を欠損するが、貼り付け痕跡は底部周縁のかなり奥まった位置にあり、高足盤の可能性もある。底部外面にはロクロ削り調整を施す。内面に灰緑色の自然釉が降下する。尾張猿投窯の製品とみた。長頸瓶は、口縁部を欠損するが、体部にはそぐわない太い頸部で、肩はするどい稜をなし底部には低短な高台をもつ。肩部以下をロクロ削り調整する。尾張産か。壺B(4390)は、短頸広口で、扁平な体部で肩ににぶい稜をもつ。底部外面を手持ちヘラ削りで、肩以下の胴部をロクロ削り調整する。体部のロクロ削り面にも手持ちヘラ削りが及び、後者の削りが先であり、削りはロクロから切り離す前に正位の状態で行っている。伴蓋焼成で灰青色に焼き上がり、胴部下半部に火襷痕を残す。I群須恵器。

SD4361の出土品

七・八坪間の坪境小路北側溝SD4361からは、須恵器の長頸瓶が2点、壺蓋1点、土師器の甕と鍋各1点が出土した。長頸瓶(4388)は、頸部以上を欠損するが、以下の部位は完存する。外面底部から肩部直下までをロクロ削り調整を施す。暗茶褐色に焼き上がり、肩部には暗緑色の自然釉が降下する。尾張黒笹7号窯の産品。なお、小片で図示しなかったが、これと同型式のものがもう1点出土している。壺蓋(4375)は頂部の大きさに見合う端整な宝珠鈕をもつ。頂部外面をロクロ削り調整する。尾張猿投窯産。土師器の甕とした4369は、形態的にみて壺の可能性もないわけではない。しかし、平城宮や他の京内の遺跡から、この大きさに見合う把手付甑が知られていることから、ミニチュアカマド祭祀に使う甕とみた。非常に小さいが、手捏製ではなく、粘土紐を巻き上げて成形する。鍋(4372)は、半球状の体部に外方に開く口縁部がつく形態で、やはり粘土紐巻き上げ成形による。両者とも口縁部をヨコナデで、体部内面をナデで調整するが、体部外面は不調整で粘土紐痕跡をとどめる。

SD4229の出土品

二・七坪間の坪境小路東側溝SD4229からは土師器甑、須恵器壺(4383)が出土。図示しなかったが、甑は、尖底で、体部と口縁部の区別がない砲弾形である。粘土紐巻き上げ成形で、口縁部上端のみをヨコナデする。須恵器の壺は、SD5100出土品(1857)と同形態であるが、それよりひとまわり大きい。体部下半部をロクロから切り離す前に緩い回転でロクロ削りする。底部外面はヘラ切りまま不調整。I群須恵器。

SD4231の出土品

二・七坪間の坪境小路西側溝SD4231からは、水瓶(3386)が1点出土した。焼きがよく残存部に分厚く灰緑色の自然釉が降下するため、外面の調整は定かでない。尾張黒笹7号窯の産品。七坪々内の道路SF4290の南側溝からは、無高台の平瓶が1点出土している。図示しなかったが、底部から天井部までをロクロ削り調整する。尾張猿投窯産。なお、この溝からは、猿投窯産とみられる鳥形中空硯も出土している(Fig.64)。

井戸出土品

一坪の井戸SE5135からは、杯A(4378)が出土した。薄手で底部外面から口縁部下半部をロクロ削り調整するが、底部の調整は雑でロクロからの切り離しはヘラによったことが分る。二坪の井戸SE4580からは、坪境小路側溝SD4361出土の4369と同形態でやや法量の大きい土師器の甕(4370)が出土した。また、七坪井戸SE4211からは、同じくSD4361出土品(4372)よりもやや法量の小さい土師器の鍋(4371)が出土した。八坪の井戸SE4530からは、須恵器の長頸瓶(4387)、俵壺(4384)が出土した。いずれも尾張黒笹7号窯の産品。長頸瓶(4387)は、北側溝SD4361出土品(4388)と同形態であるが、厚手でやや大きい。俵壺(4384)は断片であるが、ロクロで成形される際の底部部分の破片で、手持ちヘラ削りで体部をとがらせる。

七坪の包含層からは、瓹(4385)、長頸瓶(4381)、壺A(4389)が出土した。瓹(4385)は、頸部以上を欠く。外方にふんばる不均衡な高台で、肩部に突出する注口をもつ。底部外面は不調整であるが、胴部外面は切り離す前にロクロ削りを施す。猿投鳴海32号窯の産品。長頸瓶(4381)は、口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形品。高台付の卵形の体部に、上に向って次第に広がる筒状の口頸部を付す。胴部下半部をロクロ削り調整。尾張黒笹40号窯の産品。壺A(4389)は小片であるが、蓋をはずして焼成する。尾張猿投窯の産品か。　包含層からの出土品

八坪の遺物包含層からは、比較的出土量が多く、平瓶(4382)、長頸瓶、水瓶、壺蓋(4373・4376・4377)が出土した。平瓶(4382)は、頸部と把手を欠損する。高台を付さない型式で、通常の大きさの平瓶と同様な方法で成形する。底部から胴部外面をロクロ削り調整する。頂部には灰緑色の自然釉が降下する。尾張鳴海32号窯の産品。長頸瓶(4380)は肩部にするどい稜をもつ形態である。底部外面は高台を貼り付ける際のロクロナデに隠れて、調整のほどは不明であるが、肩部の稜までロクロ削り調整。肩部に灰緑色の自然釉が降下する。尾張折戸10号窯式。水瓶は、坪境小路西側溝SD4231出土品よりも、やや法量が大きく、胴部下半部をロクロ削り調整する。尾張黒笹7号窯の産品。壺蓋のうち、4377は無紐でほぼ完形品。頂部外面ロクロ削り調整。尾張猿投窯産品。4376も無紐蓋であるが、双耳瓶とセットをなすものである。頂部外面をロクロ削り調整。全面に灰緑色の自然釉が降下する。4373は、壺Aあるいは壺Bなど広口短頸壺と対をなすものであり、ほぼ完形。頂部外面ロクロ削り調整。Ⅰ群須恵器とみた。

iii　土馬・土錘・紡錘車他（Ph.236，Fig.65～67）

土馬(Fig.65)　土馬はすべて破片の状態で出土しており全体の形が知れる資料は皆無である。個体数の認定は極めて困難であるので、遺構出土の破片数を数えると107点ある。土馬が出土した遺構の種別は、溝、井戸、土坑、小穴、柱抜取り穴である。まず溝をみると、坊外では東二坊々間路両側溝(SD4699・4701)、坊内では七・八坪々境小路両側溝(SD4359・4361)、二・七坪々坪境小路両側溝(SD4229・4231)、一坪の東北面築地内側雨落溝、八坪の東面築地内側雨落溝、七坪内の坪内道路SF4290の北側溝SD4262、七坪内の蛇行溝SD4150である。出土量が多いのは坪境小路側溝であり、他の溝からの出土量は極めて少ない。　出土遺構

出土遺構	点数
SD4701	1
SD4699	3
SD4911	8
SD4909	7
SD4231	23
SD4229	3
SD4591	1
SD4589	3
SD4361	25
SD4359	16
SD4262	1
築地雨落溝	3
SE5140	3
SE4580	1
SE4160	1
SE4365	1
SE4395	1
SE5205	1
SE5220	1
SB5160	1
小土坑	1
その他	2

Tab.36　土馬出土遺構と点数

土馬が出土した井戸は、一坪のSE5140、二坪のSE4580、七坪のSE4160・4365・4395、八坪のSE5205・5220の6基であるが、出土量は少ない。土坑の例は、北面築地北側に掘られた濠状遺構SD5100と前述の井戸SE4180の近辺にある小土坑である。小穴の例は、七坪南東隅に掘られたものである。各遺構の出土量はTab.36に示した。

ここで、最も出土量の多い坪境小路側溝の分布を検討し、祭祀の行われた場所を特定してみたい。東二坊々間西小路側SF4230・4910の側溝の場合には、一・八坪間のSF4910中央部付　土馬祭祀の場所

近の両側溝、三条々間北小路との交差付近やや南の西側溝SD4231、同じくSD4231で交差点から50mほど南下した地点に分布の中心がある。一方、三条々間北小路の側溝の場合には、道路交差点の西側、すなわち一・二坪部分では出土量が極めて少なく、交差点より以東に多く、特に東半分に集中している。

次に、何等の事情で遺構から遊離した可能性のある遺物包含層の場合を検討すると、その多くは坪境小路側溝の近辺に、特に前述の集中地区に分布することが分る。しかし、側溝から相当遠く離れた場所からも出土しているのは確かである。それらの分布をよく検討すると、近辺に井戸が存在していることが知れる。また、遺構の柱穴、小穴・小土坑の場合も近辺に井戸が存在する。したがって、土馬がそれぞれの遺構で祭祀に使われたとするより、井戸で行われた祭祀に使用したものが、二次的に井戸以外の遺構に混入した可能性がより高いと言えよう。

8世紀前半の土馬

出土土馬の多くは小破であり、型式認定には窮する。従前の土馬の編年観に基づくと、8世紀前半代の土馬はSD5100出土品(Ph.236)、SE4180の掘形出土品(4461)の2点にすぎず、他はすべて8世紀後半代に属す。8世紀前半代の土馬の形態は、胴長で体高が高く、尾は下向になる。また、鞍の表現があるのが一般的である。製作手法も後半代のものとは異なり、まず頸部から尾も含む体部を一つの粘土塊でひねり出し、次に四肢を胴部に挿入し、頸部に顔を貼り付ける。四肢の挿入にあたっては、四肢1本1本を挿入する場合と、前肢と後肢をそれぞれ別の粘土でつなぎ2本まとめて胴部の腹にあけた穴に挿入する場合があり、SD5100出土品が後者の例である。

8世紀後半の土馬

一方、8世紀後半代の土馬の作りには2種あり、一つは粘土塊から頸、胴、四肢を直接ひねり出し、頸部に顔を貼り付ける。もう一つは、少し厚い粘土板から頸、四肢、尾をそれぞれの方向に引張り出した後、半分に折り返して立てる手法である。後者はより新しい手法である。出土品の多くは前者の手法で作られたものであるが、後者の手法で作られたものも少量ある。

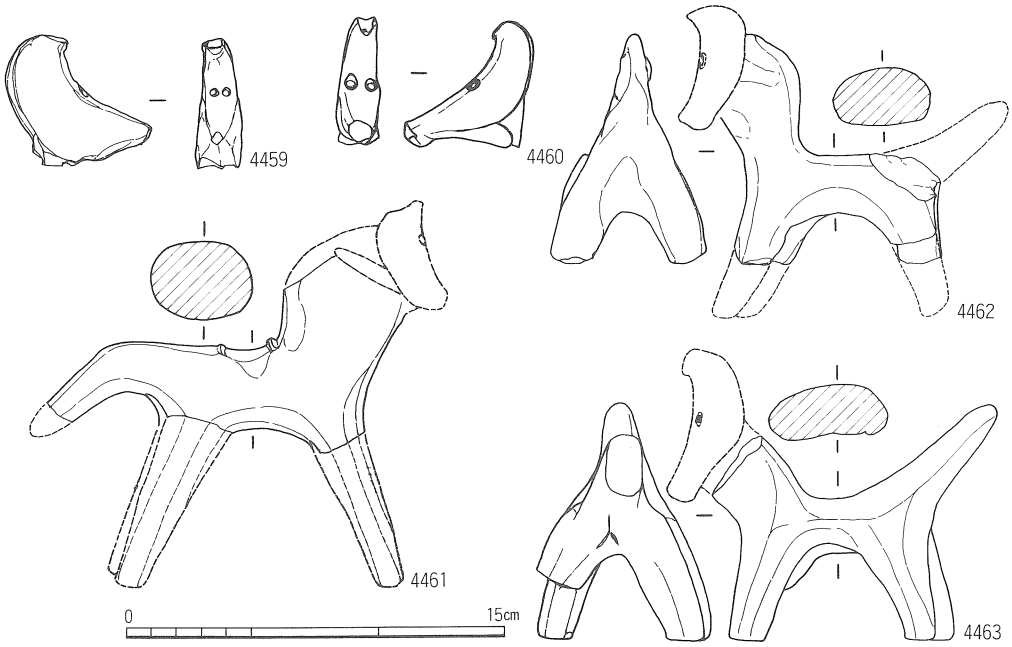


Fig.65　土馬実測図　　1：3

土錘(Fig.66)　土錘は、遺構から6点、遺物包含層から6点、合計12点が出土。土錘を出土した遺構と点数は次の通り。二・七坪間の坪境小路西側溝SD4231が2点(4470)、八坪東北隅の二条大路南側溝SD5105(4467)、七坪の井戸SE4365(4466)、一坪のSB5085柱穴(4469)、八坪のSE5065を切る不整形土坑（4471）各1点。包含層出土品の内訳けは、七坪が1点、一坪が5点で、うち3点はSE5065近辺から出土。

いずれも素焼き製品で、心棒に粘土を巻き付けて成形する。SD5105出土の4467は、最も大きく、長さ10.4cm、最大幅4.8cm、若干欠損するが重さは200g。八坪の不整形出土の4471は、やや細身で、約100g。井戸SE4365出土の4466は重さが50g。SD4231出土の4470とSB5085出土の4469は、4466とほぼ同大で、重さが約50g。4470は黒斑をもつ。八坪の遺物包含層から出土した4464は重さが150g。七坪の包含層出土の4465は、側面を欠損するが、4464とほぼ同形同大。最も細身の4468は重さが40g。八坪の包含層出土。この他、4465と同じ大きさのもの2が点、4465よりやや小さめのものが2点ある。

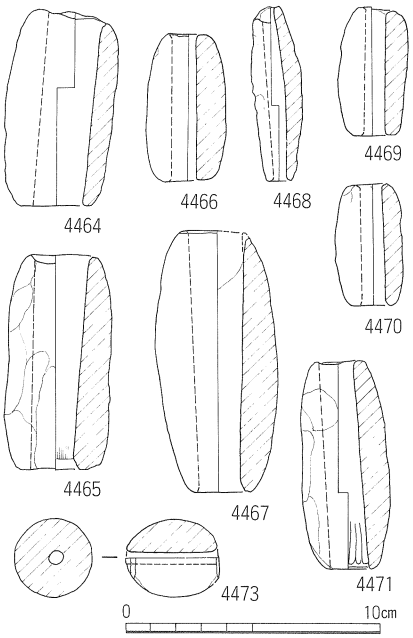


Fig.66　土錘・土玉実測図　1：3

紡錘車・円板状土製品(Fig.67)　紡錘車は、東二坊々間路西側溝SD4699から2点(4474・4477)、濠状遺構SD5100(4475)、二・七坪間の坪境小路東側溝SD4229(4476)、八坪の包含層(4473)から各1点、総数5点が出土。もともと紡錘車として素焼焼成したものは、4473のみであり、他は土師器の杯や皿片を転用。他に、中央に穿孔しない加工土師器の円板が1点あるが、穿孔するのが困難な須恵器の加工円板もあり、必ずしも紡錘車未製品とは断定できない。

用途不明土製品(Ph.236)　平城宮他でも出土しているが、全形が分る例は出土していない。そのため推測の域を出ないが、側面と上部か下部が分らないが端面があることから平瓦風の形状になるとみられる。凸部には、格子風にヘラ描き線を施すものと、棒先やヘラ先を斜め方向から突き挿し、上にもち上げ、わざわざ突き先を外方に起こしてひだをつけた穴を全面に施すものがある。いずれも須恵器質に焼成され、灰青～青灰色を呈し、胎土も緻密でほとんど砂を含まない。内面は側面に対しヨコ方向になでる例が多いが、粘土紐の痕跡をとどめる例がある。また、側面は糸切り痕跡をとどめることから、まず円筒形に作った後、何枚かに分割したものと思われる。合計10点出土。内訳は一坪から5点、濠状遺構SD5100から3点、七・八坪から各1点である。

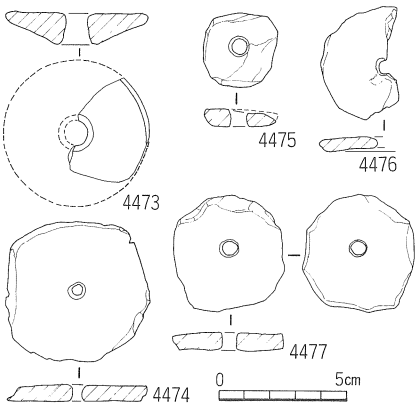


Fig.67　土製紡錘車実測図　1：3

4　木　製　品

今回および過去の関連する調査においては、多数の木製品が出土した。これらの出土遺構と遺構ごとの種類別出土点数は、別表21の通りである。ここでは、すべての遺構ごとに木製品を詳解することは避け、SD4750、SD5100、SD5300・5310、SD5240、SD4699、井戸、その他の遺構に分けて、主たる木製品を取り上げて説明を加えることとする。

なお、以下の記述における木製品の型式分類は、基本的には『木器集成図録　近畿古代編』(奈良国立文化財研究所『史料』第27冊　1985）によったが、刳り抜き箱を従来分類されていた部材の範疇から、調度へと変更して新たに一項をたてた。また、樹種について、特に記していない場合はすべてヒノキである。

A　SD4750出土木製品

箸、棒状品、曲物側板あるいは墨書の認められない木簡形木製品などを除くと、SD4750から出土した木製品および繊維製品は、総数570点あまりに及ぶ。

3m区画の小地区別出土点数をみると、全域にわたりほぼまんべんなく出土しているといえるが、強いて言えばTG11地区以北に若干片寄る傾向がある。地形的には南が低いが、溝が南に傾斜していたわけではない。出土層位では木屑層から出土したものがほとんどであり、全体の93%を占める。他は暗褐色粘土層他からの出土である。

出土した木製品には、工具46点、農具1点、紡織具10点、服飾具26点、容器122点、籠編物5点、食事具39点、遊戯具6点、祭祀具25点、雑具1点、調度15点、部材69点、不明・その他200点あまりがある（Tab.37)。木製品の種類は多岐にわたるが、箸、棒状品と用途不明品を別にすれば、容器類が最も多く出土しており、次いで部材が多い。これらの比率を道路側溝から出土する木製品の傾向と比較すると、祭祀具の占める割合が全体の4%と低いことが特徴として指摘できる。例えば東二坊々間路西側溝SD4699では、祭祀具は14%を占め、容器に次いで多い。このことから、SD4750が祭祀に利用されたとは考え難く、少なくとも最終的には塵芥処理用の溝として利用されたとみるべきであろう。

なお、文中で特に出土層位を記していないものは、すべて木屑層出土品である。

	出土点数	%
農工具	47	8.2
紡織具	10	1.7
服飾具	26	4.5
容器	122	21.3
籠編物	5	0.9
食事具	39	6.8
遊戯具	6	1.0
祭祀具	25	4.4
雑具	1	0.2
調度	15	2.6
部材	69	12.1
不明他	208	36.4
小計	572	100.1

Tab.37　SD4750出土木製品種類別比較表

i　工具・農具（Pl.167, Ph.237－1～21)

工具・農具には、鍬3点、楔8点、墨刺し1点、刀子1点、刷毛6点、へら18点、木釘2点、木針4点、刺突具3点、横槌1点がある。

鍬　2型式ある。1は紡錘形の板の上面中央部に縦断面台形の握り柄を削りだす型式で、同形同大の鍬がもう1点ある。柄の中央部には横方向に貫通する孔がある。下面は曲面をなす。全体に腐蝕が著しく、柄は土圧で歪む。現存長15.9cm、同幅7.1

cm、同高さ3.6cm。2は紡錘形の板の上面中軸上に弓形の把手を削りだす型式。把手の大部分を失うが、比較的遺存状態は良い。下面は曲面をなし、磨滅して平滑となっている。長さ16.6cm、幅7.5cm、高さは残存部で1.5cm、推定高3cm。

楔　出土地点に偏りはない。3は断面三角形の材の中程から先を両面から粗く削り、基部も粗く削ぎ落したもの。顕著な使用痕はないが、先端部が欠ける。現存長10.6cm、幅3.5cm、厚さ2.2cm。アカガシ亜属。

墨刺し　14は長方形の木片の一端を両面から削り両刃状の刃をつけ、墨付け部としたもの。他端は斜めに切り落し尖端状につくる。墨付け部に切り目はいれない。両面に墨が付着する。

刀子　漆塗りの柄1点(21)が出土。断片のため型式や法量は不詳。丸棒の素地の上に直接漆を塗り、滑り止めとして紡錘形の細かな刻みを多数施す。現状で刻みは縦に3列並び、復原すれば6列程度になると考えられる。現存長3.8cm、同幅0.9cm、同厚さ0.3cm。広葉樹。　漆塗り柄

刷毛　漆刷毛が3点含まれる。いずれも柄元から割れ目をいれて毛を狭む平刷毛。出土地点に大きな偏りはない。4・8・11は漆刷毛。8は毛が完全に残る完形品に近いもの。握りに近い位置に切り欠きをいれて糸を巻き、柄元には切り欠きを加えずに糸を巻く。柄元には糸が残り、その上に漆が付着する。毛は固化している。毛種は未同定。全長20.6cm、柄の長さ19.5cm、幅2.6cm、厚さ0.5cm。11は毛が残るが、遺存状態は悪い。現存部の長さ8cm、幅2.6cm、厚さ0.4cm。4も遺存状態は良くない。柄元の半面が欠損し内面の毛が露出する。長さ9.7cm以上、幅1.6cm、厚さ0.5cm。7は刷毛の未製品であろうか。柄元に楔が挿しこまれたまま残り、握りは為損じたものか、大きく削ぎ落されている。長さ14.6cm、幅1.8cm、厚さ0.9cm、楔は長さ2cm、幅1.1cm、厚さ0.2cm。10は柄元の幅が広く、柄を棒状につくる。柄元と握りの先端部が失われる。現存長16.1cm、幅3.5cm、厚さ0.8cm。9は柄元と握りの幅が殆ど同じもの。毛は残らない。

へら　出土地点に偏りはみられない。ここでへらとしたものの形態には、一般的な撥形や匙形の他に、長楕円形、長方形などがある。6は匙形のへら。片刃状の刃をつけた先縁部に附着物が認められるが、漆であるのかどうかは不明。長さ14cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm。15・16は板の両端部を半円形に作る。明瞭な刃は認められず、顕著な使用痕もないが、鋳造工具のなかに類似する形態のへらがあり、ここではとりあえずへらと考えておく。15は腐蝕しているが完形で、長さ17.4cm、幅2.3cm、厚さ0.2cm。16は長さ10.7m、幅1.7cm、厚さ0.3cm。　鋳造工具

木釘　20は方頭形の木釘。頭部と軸部の境は明瞭な段をなす。軸の断面は正方形に近い。先端部が失われるが遺存状態は良く、現存長6.8cm、頭部幅1.1cm、軸部幅0.5cm。

木針　17はほぼ完形。断面楕円形ないし隅切角を呈する細い棒の頭部を、両面から削いで平坦にし、針耳をあけたもの。頭部先縁部は不整形ながら丸くおさめる。長さ6.3cm、幅0.5cm、厚さ0.3cm、針耳径0.2cm。19は丸棒の先端部を片刃状に削ぎ、頭部には針耳をあけずに「コ」字状の溝を巡らせたもの。長さ9.4cm、直径0.4cm、抉りの幅0.2cm。18は扁平な小板の一端を尖らせ他端を幅広くつくり、広端部に針耳をあけたもの。長さ4.6cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm、針耳径0.2cm。

刺突具　先端部を尖らせた製品のうち、木針や木釘以外のもので握り部分を作りだしているものを刺突具として一括しておく。12は完形品で、頭部を幅広く半円形につくり、握りとする。長

さ7.2cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm。13は太い握りの先端に細い丸棒状の刺突部を削り出したもの。握りの部分は木の節を利用する。握りの加工は粗く、樹皮を剝いで余分な枝を削り落しただけである。軸の先端部が欠けている。ほぼ完形で、長さ14.1cm、幅5.4cm、厚さ3.8cm。

横槌　5は心持丸太材を用い、柄は断面六角形につくる。身の整形は簡素で、先端部を粗く切断し、樹皮を剝ぐに止どめる。身には顕著な敲打痕は認められず、長期にわたる使用あるいは強打を伴う用途に使用されたのではないことが分る。長さ27.6cm、直径5.5×4.6cmである。樹種不明の広葉樹。

ii　紡織具（Pl.168, Ph.238－22～30）

糸巻が6点、紡輪が4点ある。出土地点に大きな偏りはみられない。

糸巻　中型の枠木5点（23～26）、「かせかけ」横木（支え木）1点（22）がある。24・26はAIII型式の枠木、23・25はAIV型式の枠木。23・24は断面が円形ないし楕円形を呈する。23は長さ27.6cm、幅1.1cm、厚さ1.7cm。24は長さ26.4cm、幅1.4cm、厚さ1.7cm。25は長さ22.7cm、幅1.0cm、厚さ1.6cm。26は長さ23.4cm、幅1.2cm、厚さ1.7cm。

かせかけ　22は細長い板の中央部を幅広くして相欠き仕口となし、軸孔をあける。端部には棒状の枠木（腕木）を差し込む小孔5個をあける。小孔の穿孔は粗く、わずかに斜めになるか、外へ広がっている。長さは現状で38cm、推定75.4cm、幅4.1cm、厚さ0.6cm。

紡輪　27～30は小型の紡輪。いずれも上・下面の区別は明確でない。直径3～5cm、厚さ0.5cm程度の小円板で、断面長方形を呈するが、28～30はわずかに中央部が厚みを増す。直径3cm程度のものは、紡輪以外の用途を考えるべきであろうか。

iii　服飾具（Pl.168, Ph.238－31～37）

服飾具には横櫛4点、留針20点、木履2点がある。下駄はまったく出土していない。横櫛はいずれも小断片のため図示していない。

留針　頭部を鋲頭状に作るA型式が12点、頭部に加工を加えないC型式が6点、型式不明が2点ある。出土地点に偏りはみられない。

32～35はA型式。32は腐蝕が進み、やややせているが完形で、長さ8.7cm、軸部直径0.6cm。33は完形で長さ5cm、軸部の直径0.4cm。34は頭部にわずかな欠損があるが、ほぼ完形である。長さ11.7cm、軸部の直径0.4cm、頭部の直径0.6cm以上。35は完形で、長さ11.2cm、軸部の直径0.4cm。

36・37はCI型式。37は完形で、先端部が磨滅している。長さ14.3cm、幅1.2cm、厚さ0.7cm。36は完形で、長さ13.1cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm。

木履　1点は爪先被甲部、他は踵底部の小片である。同一地区で出土しているが、樹種が異なるため同一個体ではない。31は中型木履の被甲部分にあたる。底部と側面はほとんど失われ、残る側面も土圧により原形を留めないほどにつぶれる。爪先の小口はやや幅の広い平坦面をなし、山形の先端部はわずかに反りあがる。現存部の長さ11.8cm、同じく幅12.5cm、同じく高さ4.3cm、小口の幅9.1cmである。復原すると、長さ28cm前後、高さ7～8cm前後になる。樹種はカツラ。踵は小断片のため図示し得ない。現存長7.9cm、同幅8.7cm、同厚さ1.8cm。ホオノキ。

中型木履

ⅳ　容 器（Pl.169・170, Ph.239・240－38～53）

挽物14点、刳物１点、残存部が1/2未満のものを含めて曲物（底板のみのものを含む）57点、同じく蓋板49点、曲物枠１点がある。挽物はいずれも断片のため図示しえない。

刳物　39は完形に近い白木の片口鉢である。土圧により変形するが、大きさを知ることができる好例である。全体に腐蝕が進行し、割れが目立つが、内面には加工痕を留める。直径16～16.9cm、高さ9.3cm。片口は口縁部を一段低く切欠いて作り、幅3.2cm、高さ3.5cm。横木取り。　片口鉢

曲物　曲物あるいは曲物底板は、小地区別出土数では特に大きな偏りは認められず、TB～TJ各地区から数点ずつみつかっている。全形の窺える曲物は２点、他は底板のみである。平面形からみると、隅切角（長方形）の底板１点がある以外は全て円形である。結合型式では木釘結合が多く、他は樺皮結合Ｂ型式である。大きさでは直径15～18cm程度の中型品が最も多く、次いでそれよりも小型のものが多い。40は全形の窺える円形の木釘結合曲物蓋。側板の樺皮綴じは２列上下外２段で、木釘は５本を均等に配する。直径17.4cm、高さ2.8cm、底板の厚さ1.1cm。スギ。41は完形の木釘結合曲物蓋。側板の樺皮綴じは２列上内下外３段、７本の木釘をほぼ均等に配する。底板内面中央部に５個の小孔が采目の「五」の形に穿たれる。小孔は貫通していない。直径15.3cm、高さ1.8cm、底板の厚さ0.7cm。

曲物枠　38は単独で出土しており、明確な根拠はないが、ここでは曲物容器の枠と想定しておく。端部はくびれており、ここに縄などを掛けることもできる。相欠き仕口はない。現存長62.5cm、幅4.8cm、厚さ1.1cm。

蓋板　原則的に、円・楕円形ないしは方・長方形を呈する、厚さ0.5～２cmの板の周縁部を斜めに削り落して、断面台形ないし圭頭状にしたものを蓋板とした。地区別出土数に偏りがみられ、TG11区は17点と抜きん出て多い。全体としてはTG区より北に70％以上が集中する。これらは平面形から、円形、楕円形、隅切角（方・長方形）に分類できる。出土点数では円形が41点と圧倒的に多く、全体の約87％を占め、隅切角が５点、楕円形はわずか１点に過ぎない。円形蓋板は、直径が３～７cm前後の小型品（24点）、10～17cm前後の中型品（11点）、20cm前後以上の大型品（６点）に細分できる。

46～49はともに小型の円形蓋板の完形品。他の蓋板と異り、周縁は垂直に削り落されて断面長方形を呈し、中心には浅く窪めただけの小円孔を穿つ。蓋板以外の用途を考えるべきか。46～48は直径４cm、厚さ0.6cm。49は腐蝕が進む。直径5.0×5.5cm、厚さ0.5cm。

50～53は断面台形を呈する円形小型の蓋板。50は直径6.2cm、厚さ0.9cm。51はやや厚手の円形蓋板。用途としては栓に近いものかもしれない。直径7.2cm、厚さ2.2cm。スギ。52は直径8.7cm、厚さ0.9cm、スギ。53は板目材を使用する。直径10.8×11.1cm、厚さ1.5cm。

43は円形中型の蓋板。完形で遺存状態が良好。周縁部断面が圭頭状を呈する。表面の削り調整は極めて丁寧で、形態も真円に近い。直径15cm、厚さ1.3cm。板目材。スギ。

42・44は円形大型の蓋板。42は断面台形を呈する完形の蓋板。表面を丁寧に削り調整する。直径18.8cm、厚さ1.3cm。スギ。44は断面が紡錘形にやや近い。周縁部を幅広く斜めに削り、端部は垂直に削り落す。直径19.8cm、厚さ1.3cm。モミ属。

45は隅切角の蓋板。断面台形を呈する。一辺が16.4～16.6cm、厚さ0.8cm。板目材。スギ。　隅切角蓋板

v　食事具（Pl.170, Ph.240－54～64）

食事具としたものには、箸、匙、杓子がある。箸は、長さ10数cm～20cm前後、直径0.5cm程度の粗製の棒状品のため、箸以外の単なる棒状品との区別が困難であり、正確な数量は不明である。SD4750からは棒状品としたもののうち、直径1cm未満、長さ10cm以上ものが170点近く出土している。

匙には比較的短く幅が狭い身の小さなものを含め、杓子には比較的長く身の大きなものを含めているが、必ずしも両者の区別が明確なわけではない。匙は10点、杓子は29点あり、TC11区に杓子が8点集中する他は、地区別の出土傾向に大きな偏りはみられない。

匙　62は刳物匙。ほぼ完形を保つ。身部はほぼ全体が浅く窪み、先縁がわずかに弧をなす。長さ11.1cm、幅3.4cm、厚さ0.9cm。61は小型の匙。身の先縁部は失われる。両面が平面をなし、表裏の区別がつかない。現存部の長さ7.1cm、同幅1.4cm、厚さ0.3cm。

56・57は身の先縁部が直線状をなすA型式の匙。身を薄く作り、柄を断面隅切角の棒状に作る。先縁部は使用のためか、片減りする。身は全体が平面をなし、表裏の区別はない。長さ26.9cm、幅2.3cm、柄の部分の厚さ0.7cm。57は断面が台形を呈する棒状の柄をもち、身は表面がごく浅い弧面をなす。長さ24cm、幅3cm、厚さ0.6cm。

58～60は身の先縁部を浅い半円形につくるB型式の匙。58は柄が薄く、断面が長方形の板状を呈する。長さ2.9cm、幅2.8cm、厚さ0.3cm。59は柄が断面長方形の板状をなす。身は片刃状を呈しており、その面が表になる。現状での長さ16.3cm、幅2.6cm、厚さ0.9cm。60は身が平板で、先縁部を両面から削り刃をつける。柄は側辺を面取りし先端部を尖らせる。完形で、長さ13.8cm、幅2.5cm、厚さ0.5cm。

杓子　先縁部を半円形に作るB型式(54・63・64)と、先縁部が柳葉状を呈するC型式(55)がある。54は保存の良好な完形品で、表面は使用のためであろうか、やや磨滅する。柄は断面長方形、身の断面は中央部がかすかに膨らむ長方形。長さ35.8cm、幅8cm、厚さ0.7cm。63は身に比較して柄の短いもの。身は表面が曲面をなし、柄は基部の断面が楕円形の棒状をなす。先縁部が磨滅する。長さ35.4cm、幅8.7cm、厚さ0.9cm。64は破損が著しく腐蝕も進むが全形の窺えるもの。柄の断面は楕円形を呈する。現存部の長さ62.7cm、幅8.1cm、厚さ1.4cm。55は身が折れているが、ほぼ完形のもの。先縁部が磨滅する。長さ37cm、幅5.4cm、厚さ0.6cm。

vi　遊戯具（Pl.171, Ph.241－65～69）

琴柱　遊戯具には琴柱6点がある。66～69はA型式の琴柱。66はやや大振りで、下底の切込が深く、側辺が直立する。完形。幅5.1cm、高さ2.9cm、厚さ0.6cm。67は弦受の溝を切っていない。未製品もしくは為損じ品か。完形で、幅3.5cm、高さ2.8cm、厚さ0.3cm。68は側辺が直立し、斜辺が弧形をなす。完形品。幅3cm、高さ2.7cm、厚さ0.3cm。69は、斜辺が弧形をなして立上がり、下底中央部に浅い刳形をいれ、さらにその中央部に三角形の切込をいれる。片脚を欠失する。現存幅3.4cm、高さ2.1cm、厚さ0.5cm。

65はA・Bいずれの型式にも属さない。二等辺三角形の板の両隅を逆「八」字形に短く切落したもので、弦受はあるが底辺の切込はない。完形。幅4.8cm、高さ2.7cm、厚さ0.5cm。

vii　祭祀具（Pl.171, Ph.241－70～84）

祭祀具には斎串３点、人形８点、刀形３点、刀子形４点、舟形１点、馬形２点、鳥形２点、その他２点がある。地区別出土数でみると、溝の中央部TE～TG区にいくらか集中する傾向がある。

斎串　BIII型式が２点、BVIあるいはBVII型式が１点ある。80はBVIあるいはBVII型式。半截して片側を欠損し、先端部も失う。現存長9.7cm、同幅1.1cm、厚さ0.2cm。

人形　AIa型式に属する正面全身人形である。いずれも破損が著しく、腐蝕が進む。74・75は墨描きで顔と頭髪ないし冠帽を表現する。74の顔の左右に入る墨線は、あるいは冠帽の顎紐を表現するのであろうか。74は長さ10.4cm、幅2.5cm、厚さ0.4cm。75は現存長10cm、同幅2.8cm、厚さ0.5cm。71～73は頭部が不明もしくは墨画表現のないもの。71は長さ16cm、幅2.6cm、厚さ0.4cm。72は頭部を欠失し、現存長15.7cm、同幅2.9cm、厚さ0.3cm。73は現存長17.1cm、幅2.7cm、厚さ0.4cm。

刀・刀子形　83は小型であるが、かます切先をなしているため刀形に含める。刀身と柄との区別を明確にする。柄は刃側を斜めに削ぎ落す。完形。長さ17.7cm、幅0.8cm、厚さ0.5cm。81・82は刀子形。いずれも完形である。81は刀身と柄の区別を明確にする。刃は刀身の片面を削ってつけ、柄の下側と拇指を添える上側に浅い刳形をいれる。また、柄頭にも刳込みをいれる。完形で、長さ14cm、幅２cm、厚さ0.5cm。82は刀身と柄の区別が明瞭ではなく、刀身の片面を削ってつけた刃は、徐々に幅を減じていく。完形。長さ15.7cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm。

舟形　70は腐蝕が著しく加工痕が不明瞭だが、底部外面にわずかに削り痕が残されており、先端部を意図的に尖らせていることがわかる。内部は刳り抜く。現存長20cm、同幅5.8cm、厚さ3.3cm。樹枝を加工する。ヒノキか。

馬形　84はAII型式の馬形。中央で折れ、端部をわずかに欠失するが、ほぼ完形である。目、立髪、手綱等は表現しない。現存長17.7cm、幅3.1cm、厚さ0.4cmである。

鳥形　79は完形品。一方の端部を圭頭とし、他端を細く尖らせ、中央部は両側から「V」字形に切込をいれる。形態からAII型式鳥形に含めておく。長さ7.5cm、幅2.5cm、厚さ0.3cm。78はほぼ完形のAII型式鳥形である。短い頸と嘴を削りだし、片面に「不」字に似た細線を刻む。長さ7.4cm、幅2.5cm、厚さ0.3cm。スギ。

その他　76は等脚台形の薄板の下底中央部に三角形の切込をいれるもの。弦受けの溝はないものの、形態の類似から琴柱形に含めておく。完形で、幅７cm、高さ2.2cm、厚さ0.15cm。77は小円板の中央部に１孔を穿ったもの。蓋板とするにはあまりに小さいため、ここでは車輪形ないしは紡輪形と考えておく。直径2.5cm、厚さ0.4cm、孔径0.3cm。スギ。

琴柱形
車輪形

viii　雑　具（Pl.172, Ph.243－85）

器台　85は轆轤挽きにより整形する。上・下面および側面に轆轤整形痕を留め、内面に削り痕を残す。円盤状の材の中央部を残したまま、轆轤挽きにより上・下・側面を整形し、その後轆轤からはずして中央部を刳り抜いてつくったのであろう。外径19.8cm、内径12.3cm、高さ3.9cm。白木。トチノキ。

ix　調　度（Pl.172・173, Ph.242－86～93）

刳り抜き箱　箱身８点と、箱身と組み合わせる蓋７点がある。小地区別出土点数には、特に目立った偏りはない。身は細長い角材を刳り抜いた長方形のもので、蓋は表面が甲盛となり、裏面は周縁部を削って中央部を突出させ、身に嵌め込むようになっている。明確に身と蓋とが組み合って出土したり、あるいはそうした関係を充分に想定できる状況で出土したものはないが、法量からみて92と87、90と86とが組み合う可能性がある。これら箱の長さは31～34.5cm前後、幅は4.5～６cm前後であるが、各箱の法量はSD4699・5100・5300出土品とともにTab.38に掲げておく（断片的な資料は除外した）。材はヒノキあるいはスギ。

箱　身　86～88は箱身。86は一方の長側部を失う。土圧により歪むが、断面は正方形に近く全体を直線的に仕上げるもの。88は中央部で半截し、土圧でつぶれているため中央部が膨らんでみえるが、本来は側板を直線的に仕上げるもの。内底面には鑿の刃痕が明瞭に残っており、やや粗い仕上げである。こうした形態が一般的と考えられるが、87は両長側辺底部の2/3を面取りし、断面「U」字形に仕上げる。87は中央部が二次的な火熱を受けて炭化している。

箱　蓋　89～93は蓋。89～92は中央部断面が「T」字形を呈する一般的な形態のものである。一方、93は例外的な形態を示す。これは裏面の両端付近だけを突出させており中央部分に突出部がないもので、両端の突出部を中央に向かって斜めに削り落としている。

x　部　材（Pl.173・174, Ph.243・244－94～101・103）

出土遺構	外法幅	外法長	凸部幅	凸部長	厚さ	長側部削り幅	備考	図版番号
SD4699	5.1＋	35.6	4.9	32.1	1.0		「資人上日帳」墨書。	Pl.182, Ph.252-112
SD4750	(5.3)	31.5＋	(4.1)	28.5＋	1.6	1.0	端部欠損。	
SD4750	6.4	34.5	4.6	30.3	1.4	0.8	完形。	Pl.172, Ph.242-89
SD4750	4.7	31.3＋	3.2	29.9＋	1.6	0.9～1.1	端部欠損。	Pl.172, Ph.242-90
SD4750	5.1	(34.5)	3.7	(31.4)	1.2	0.7	凸部が内湾する。	Pl.172, Ph.242-93
SD4750	5.8	33.0	4.1	30.4	1.5	0.8～1.0	完形。	Pl.173, Ph.242-91
SD4750	5.0	33.0＋	3.3	30.4	1.0	0.8～1.0	端部わずかに欠損。	Pl.173, Ph.242-92
SD5100	(5.4)	34.7	(3.0)	29.3	1.4	1.4	1/2残る。	
SD5100	(5.2)	30.5	(3.6)	27.5	1.0	0.8	凸部が内湾する。	Pl.198, Ph.259-298
SD5100	4.5	18.3＋	3.3	13.8＋	1.0	0.7	1/2残る。	Pl.198, Ph.259-299
SD5300	(5.7)	34.0	3.7	31.3	1.0	1.0	習書あり。	
SD5300	8.1	35.7	6.0	32.6	1.2	0.9～1.1	木簡に転用。	
SD5300	(6.8)	33.5	4.4	30.8	1.3	1.2	「伊勢国・・」墨書。	Pl.213, Ph.268-104
SD5300	(6.3)	32.7	4.1	30.7	1.4	1.1	習書あり。	Pl.213, Ph.268-105
SD5300	6.0	(34.2)	4.3	31.8	1.6	1.0	習書あり。	Pl.213, Ph.268-106

出土遺構	外法高	外法幅	外法長	内法深	内法幅	内法長	底部厚	長側板厚	備考	図版番号
SD4750	2.2＋	4.4	18.4＋	1.2＋	3.0	16.9＋	1.0	0.8	1/2残る。	
SD4750	1.2＋	3.1＋	16.8＋	0.6＋	2.5＋	15.8＋	0.6＋		1/4残る。	
SD4750	1.8＋	2.8＋	19.8＋	1.2＋	1.8＋	18.8＋	0.6＋		1/4残る。	
SD4750	2.3＋	4.2	13.3＋	1.4＋	2.9	11.5＋	0.9	0.7	1/2残る。	
SD4750	3.9	4.9	25.4＋	2.9	3.8	23.5＋	1.0	0.7	習書あり。	
SD4750	4.1	4.7	33.7	3.7	3.8	31.6	0.4	0.7		Pl.172, Ph.242-86
SD4750	3.3	5.1	34.1	2.1	3.3	30.5	1.2	1.0		Pl.172, Ph.242-87
SD4750	2.6＋	4.5	30.8	2.0＋	3.1	29.5	0.6	0.6	潰れる。	Pl.172, Ph.242-88
SD5100	2.7	6.3	33.2	2.0	4.0	29.9	0.5	0.9～1.4	完形、習書。	Pl.198, Ph.259-297
SD5300	1.1＋	2.8＋	11.0＋	0.5＋	1.7＋	9.5＋	0.6	0.5		
SD5300	1.5＋	(5.7)	34.7	0.9＋	4.0	31.1	0.7	1.0	1/2残る。	Pl.213, Ph.268-103

単位はcm　＋は現存法量　（　）は推定値

Tab.38　刳り抜き箱法量法（上：箱蓋　下：箱身）

ほぞや仕口、切欠きなどを有し、他部材と組み合うと想定し得るものを部材と認定したが、それ以外のものが部材である可能性を否定するものではない。出土地区別にみると、TB～TE区に18点、TG～TJ区に38点あり、溝の北半部に比較的多いといえる。これらは他部材と組み合った状態で出土したものはなく、大部分が用途不明である。

94・95は角材の上方の小口に、断面円形の出ほぞを作りだす。両者はほぼ同形同大であり、同一製品を構成する部材と考えられる。支脚であろう。94は出ほぞの上端から楔を打ちこんでいる。全長16.4cm、幅4.3cm、厚さ3.6cm。出ほぞは長さ1.4cm、直径2cm。楔は幅1.8cm、厚さ0.3cm。95は全長17cm、幅4cm、厚さ3.6cm。出ほぞは長さ1.6cm、直径1.7cm。96は断面長方形の角材の両端に出ほぞを作りだすもの。ほぞの基部を斜めに削りだし、先端部は丸くおさめる。ほぞにあく孔内に残る木釘は、把手として別の支柱に挿入した際の脱落防止用であろうか。一方の出ほぞは基部を除いて大半を失うが、遺存状態は良い。現存長17.2cm、幅4.2cm、厚さ1.5cm。97は、角材を削って弧形となし、幅広くした端部の側面に切欠きをいれ、さらに穿孔を加えたものである。用途不明である。現存長15.6cm、幅3.3cm、厚さ1.1cm。99は、断面隅切角状の棒の一端を相欠き仕口とし、他端に浅く粗雑な抉りをいれるものである。用途不明である。中央部で折れるため正確な長さは不明であるが、推定長62.9cm、幅1.8cm、厚さ0.9cmである。　支　脚

98・101は、断面円形ないし楕円形を呈する棒の一端に、「V」字形の抉りを巡らせたもの。用途は不明である。98は完形で、長さ19.7cm、径1.3×1cm。101は比較的大型で、中央部がやや細くなっている。完形で、長さ39.2cm、径2.3×2.1cm。100は板材の両小口を出ほぞとなし、一方のほぞに穿孔するもの。ほぼ完形。長さ34cm、幅5.8cm、厚さ1.4cm。103は角材の上面に長方形のほぞ穴を刳ったもの。両端が失われているが、現状では一方の端の両側面を斜めに削いで撥形となす。ほぞ穴の加工は粗い。脚座であろう。現存長26.7cm、幅5cm、厚さ2.1cm。スギ。　脚　座

xi　用途不明品・その他（Pl.174, Ph.244－102・104～117）

102はほぼ完形。長方形の材の側縁を中程から徐々に細く削り、全体を細長い羽子板形につくるもの。先端部の両側に小さな「V」字形の切込をいれる。一面には削り調整を加えるが、他面は割面のままで調整を加えない。切込に紐をかけて、板の上に封書を固定したのであろう。長さ39.7cm、幅4.3cm、厚さ0.7cm。

104は墨画板。墨画の意味は不明である。表面は削り調整を加えるが、裏面は割面をとどめる。一方の小口は両面から面取りをする。長さ17.8cm、幅13.4cm、厚さ0.9cm。　墨　画　板

105は楕円形の小木片の一側縁に浅い弧形の切込をいれ、豆形としたもの。完形品。長さ3.7cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm。106は繭形に整形した小木片の両端付近に小孔をあけたもの。装飾品ないし装身具に関連するものか。完形品。長さ4.7cm、幅1.9cm、厚さ0.2cm。107は長方形の小木片の一小口に「V」字形の切込をいれ、先端部を尖らせたもの。用途不明である。完形で、長さ6.9cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm。108は、両端に孔をあけた2本の角棒を向い合わせ、丸棒で結合した枠。一部欠失するが、比較的遺存状態は良い。糸巻などの用途が考えられるが、明かではない。長さ14.7cm、幅9cm、厚さ1.1cm。完形の角棒がスギで、他の部材　枠

がヒノキである。

109は瓢形の板の一側縁に「L」字形の切欠きをいれ、中央基部よりに斜め方向に細い孔をあけたもの。ほぼ完形。長さ9.8cm、幅3.8cm、厚さ0.3cm。110は長方板の一方の端を削り、不整な楕円形の突起をつくりだすもの。長さ22cm、幅2.8cm、厚さ0.3cm。

111は笏に似た板の一側辺をやや長めに切欠き、一端に孔をあけたもの。鳥形あるいは馬形のような祭祀具であろうか。完形で、長さ26.3cm、幅3.5cm、厚さ0.3cm。112は尖端棒。粗く削って整形した細長い板の端部を、斜めに鋭く切落したもの。他端は失われている。形状や用途は不明。現存長16.5cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm。113は両端を斜めに削ぎ、短側辺中央部に「V」字形の切込をいれたもの。側辺は平坦であるが、斜辺は両面から削って刃をつける。用途不明である。長さ14.3cm、幅1.9cm、厚さ0.7cm。114は全面を削り、小口の一方を面取りした長方形の板。使用痕などはなく、用途不明である。完形。長さ13.6cm、幅4.8cm、厚さ0.7cm。115は一方の端の中央に1孔を穿つ長方形の板である。全面を削っている。片面には刃痕がついている。完形で遺存状態は良い。長さ13.2cm、幅7cm、厚さ1cm。116は圭頭

木　鏃

にした両小口に切欠きをいれるもの。用途は明確でないが、あるいは浮きなどに使用されたものか。完形で、長さ11.8cm、幅2.1cm、厚さ0.3cmある。117は柳葉形を呈する木片の基部に、細い突起を斜めにつくりだしたもの。図の中央部に鏃を表現するかのような線が見られるが、これは削り痕の稜線に過ぎない。木鏃(鏃の木型)であろうか。完形品。長さ9.1cm、幅2cm、厚さ0.4cm。

B　東二坊々間路西側溝出土木製品

東二坊々間路西側溝SD4699・5021からは箸、単に加工痕が残るだけの棒・板状品、墨書のない木簡形の板を除いて、木製品・繊維製品は330点あまり出土している(Tab.39)。種類は多岐にわたっており、工具15点、農具2点、紡織具8点、服飾具17点、容器71点、籠編物2点、食事具21点、遊戯具4点、祭祀具47点、雑具4点、調度3点、部材42点、用途不明品・その他

	本調査地	118-23次	123-26次	202-13次	223-13次	小計	%
農工具	11	0	1	3	2	17	5.1
紡織具	8	0	0	0	0	8	2.4
服飾具	10	0	1	3	3	17	5.1
容器	60	3	2	6	0	71	21.5
籠編物	2	0	0	0	0	2	0.6
食事具	17	0	0	2	2	21	6.3
遊戯具	3	0	1	0	0	4	1.2
祭祀具	35	9	1	1	1	47	14.2
雑具	3	0	0	0	1	4	1.2
調度	1	2	0	0	0	3	0.9
部材	24	0	1	4	13	42	12.7
用途不明他	61	7	0	11	16	95	28.7
小計	235	21	7	30	38	331	99.9

Tab.39　SD4699・5021出土調査次数別木製品点数表

95点がある。容器の出土数が最も多く、祭祀具や部材がそれに次ぐ。

木製品は調査した西側溝のほぼ全域にわたり出土している(Tab.68)。小地区別の出土点数では、ほとんどの地区が5点以下の出土数しかなく、10点を越す出土を数える地区は6地区に過ぎない。6点以上出土した地区を列挙すると、北からKE、KB、JK、JJ、JC（以上、新地区割り）、UR、UQ、UK、UJ、UD、UC、UB、SN、SJ、SI、RJ、RD～RE区で、JE区からSI区までは10～30mおきに木製品が比較的多く滞留する場所が繰返し現れるが、溝以外の遺構との関連性や特殊な廃棄活動を示唆するような出土状況ではなく、溝内のよどみととらえるべきものである。出土層位では、最下層出土のものは全体の約25%であり、ほとんどが中層以上の粘土層から出土している。

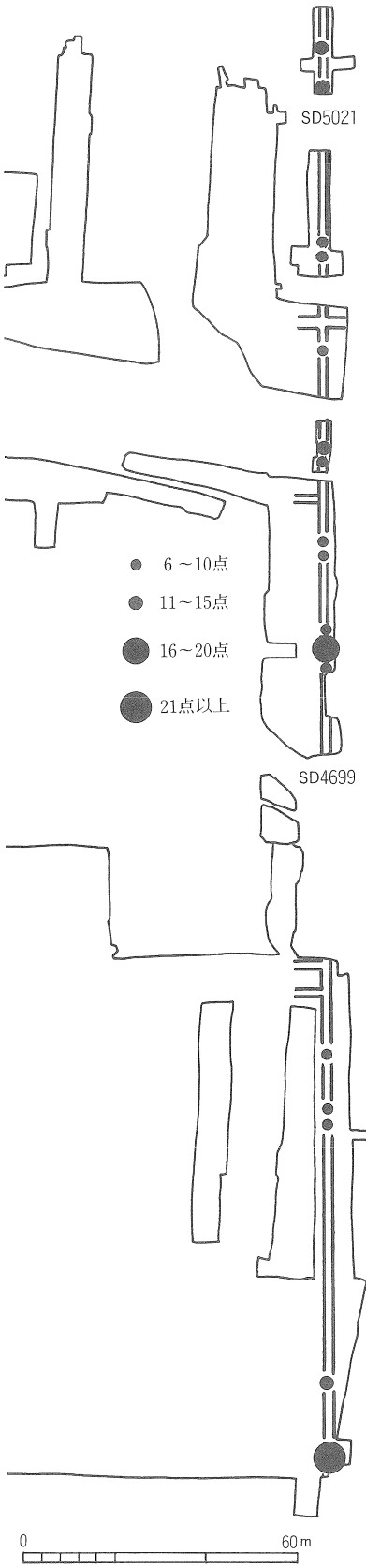
i　工具・農具（Pl.175, Ph.245－1・3～5・10・12）

横斧1点、楔2点、刀子1点、へら8点、木針2点、刺突具1点、鎌1点、木錘1点、がある。

横斧　1は横斧の柄である。樹幹と枝部を利用して、斧台と握りを一体整形したもの。外反する握りは大部分が焼失する。斧台は、下部で厚みを減じて着装部へとつながるが、着装部は失われている。残存長15cm、現存部の斧台の長さ9.8cm、斧台の幅4cm。サカキ。SD4699下層出土。

へら　12は漆へら。先縁部は使用のため刃が丸くなる。身と握りの境界が明確で、握りは折れている。身の大部分に漆が付着する。現存長10.9cm、幅2.8cm、厚さ0.2cm。SD4699出土。4は刀形を呈するへら。断面が長楕円形ないし台形を呈する棒の先端部を、両面から削って薄くし刃をつけたもの。加工痕のよく残る握り部と磨滅する刃部とが明確に分れる。完形で、長さ37.9cm、幅2.1cm、厚さ1cm。SD5021下層出土。

木針　10は鈎針形を呈する粗製品。かまぼこ形に削った材の一端を丸くおさめ、他端を斜めに切落した



斧　柄

Fig.68　SD4699・5021木製品出土地点略図

棒状品の一側縁に鈎形の切込をいれる。裏面は割面をとどめる。完形。長18.6cm、幅1.5cm、厚さ0.8cm。SD4699下層出土。

鎌　　柄　**鎌**　5は鎌の柄。柄元を失う。断面は楕円形を呈し、柄元から柄尻までほぼ同じ太さを保ち、柄尻に山形の突起を削りだす。着装孔端部がわずかに残存し、鎌刃の基部残欠をとどめる。着装孔直下に釘孔をあける。現存長26.5cm、幅3.2cm、厚さ2cm。イヌビワ。SD4699下層出土。

木錘　3は木錘か。心持材を粗く削り、中央部がわずかに細くなる八角柱状となす。腐蝕のため割れが目立つ。長さ8.5cm、直径4.2cm。スダジイ。SD4699中層出土。

ii　紡織具（Pl.176, Ph.246－17・18）

紡織具には糸巻5点、紡輪3点がある。糸巻きはA型式の横木が3点、枠木が2点ある。

紡輪　17・18は紡輪。17は周縁を斜めに削る小型のもので、断面台形を呈する。小型であることから、紡輪以外の用途を考えるべきか。完形。直径3.2cm、高さ0.3cm、中央孔の直径0.4cm。SD4699下層出土。18は断面長方形を呈する大型品である。1/2以上が残り、直径11.3cm、厚さ1.2cm、中央部の円孔の直径1.5～1.8cmである。SD4699中層出土。

iii　服飾具（Pl.176, Ph.246－19・21～24）

横櫛11点、留針5点、漆紗冠1点がある。横櫛はいずれも断片である。

留針　A型式（23・24）とC型式（21・22）がある。

A型式の23は頭部の一部が欠失する。身の中央部から先端部にかけて大きく削られ、薄くなっている。長さ10cm、身部の直径0.3cm、頭部の直径0.9cm。SD4699出土。24は形態の整ったもの。完形。長さ11.9cm、身の直径0.4cm。SD5021上層出土。21はCI型式の留針。頭部付近を多角柱状につくり、身の2/3を断面長方形に仕上げたもの。全体に丁寧な加工を施す。完形。長さ8.1cm、幅1.3cm、厚さ0.7cm。SD4699中層出土。

C型式の22は身の太いCII型式の留針。完形である。全体は多角柱状を呈し、丁寧な加工が施される。先端部と身との境界が明らかである。長さ9.8cm、直径1cm。SD4699下層出土。

漆紗冠　19は粗目の網状の布を半球状にまいて後頭部で綴じ合わせ、黒漆で固めたもの。比較的遺存状態は良好だが、土圧により後頭部を上にしてつぶれた状態で出土した。前頭部上半と後頭部上半から頂部にかけてと、下端周縁の一部を失う。現状での幅18.9cm、高さ15.2cm。下端の縁どりの幅1cm。二条大路と交差する地点のSD4699下層出土。

iv　容　器（Pl.177・178, Ph.247・248－28～30・33・36・38～40・42）

挽物（漆器を含む）11点、残存部が全体の1/2に達しないものも含めて曲物が45点、同じく蓋板13点、栓2点がある。

挽物　挽物は断片的な出土品しかないが、器形のわかるものには皿4点がある。30は高台のつかない皿B類（直径24cm内外）である。平坦な底部に短い口縁部のつくもの。口縁部を欠損する。腐蝕のため轆轤目は消失する。白木。横木取り。推定直径25cm、同高さ1.8cm。ハクギリ。SD4699下層出土。

漆　器　蓋　**漆器**　器形の判明する漆器には蓋2点がある。28は約1/6が残り、頂部は失われるが、中央部

に宝珠つまみがつくのであろう。頂部を平坦につくり、ゆるやかに下る縁部へとつづく。縁端部内面の内寄りにやや内傾する反(かえ)りをつける。内外とも素地の上から直接黒漆をかける。推定直径16.8cm、同高さ1.8cm、頂部厚さ0.5cmである。ケヤキ。SD4699上層出土。29は厚手で板状の蓋である。平坦な頂部に低い輪状のつまみをつくり、縁部内面の内寄りに低い反りをつける。つまみの内外と頂部に沈線を巡らせ、頂部と縁部の境にも3条の沈線を巡らせる。内外とも下地塗りのあと黒漆をかける。縦木取り。推定直径16cm、高さ1.7cmである。ケヤキ。SD4699中層出土。

曲物　確認できるものは大部分が円形木釘結合型式で、半数近くが直径20cm前後のものである。33は円形木釘結合型式の曲物で、下箍がめぐる。側板の崩壊が著しく綴じ合わせは明かでない。側板内面に縦平行線のケビキをいれる。直径16.5cm、高さ6.2cm以上、底板厚さ0.6cm。SD4699上層出土。36は円形曲物底板。木釘痕は認められないが、表面に側板のアタリがないことから、木釘結合曲物と考えられる。中央部に直径5.8cmの円を墨描きする。直径16cm、厚さ0.4cm。SD5021下層出土。

蓋板　すべて円形で、直径3～7cm前後の小型品が10点、直径10～17cm前後の中型品が2点、直径20cm前後以上の大型品が1点ある。40は周縁を面取りし断面が台形を呈するもの。中心に両面からあけた小孔がある。中央部で割れているが、完形である。直径18cm、厚さ15cm。SD5021下層出土。39は粗く整形した大型の蓋板。周縁の面取りは粗雑で、厚さも一様でない。直径24.7cm、厚さ1.9cm。スギ。SD4699中層出土。42は小型の蓋板。加工は粗く、周縁の面取りの幅が不揃いで、裏面に鋸の切放し痕をとどめる。断面は台形を呈する。中心には上底面からあけた小孔がある。直径10.4cm、厚さ1.6cm。SD5021下層出土。　円形蓋板

栓　38は断面が円形の栓。上部の元に浅い「U」字形の抉りを巡らせ、そこから下部に向かって斜めに削り、下部を一回り細く作る。身の先端周縁を面取りする。完形。長さ7.2cm、握り直径2.7cm、身直径1.3cm前後。ヤブツバキ。SD4699下層出土。

v　食事具（Pl.179, Ph.249－49～51・56～58）

匙11点、杓子10点および多数の箸がある。箸は単なる棒状品との区別が困難なものも多く、正確な数量は不明であるが、直径1cm未満、長さ10cm以上の棒状品は430点出土している。

匙　56はC型式匙の完形品。身と握りの境界が不明瞭で、握りを厚めにつくり、身を薄くする。現状では先縁部に明瞭な刃は認められない。長さ17.1cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm。SD4699中層出土。57は厚手の撥形のC型式匙。先端部の隅を切欠く。握りの側縁部の加工はやや不整である。完形。長さ14.4cm、幅2.5cm、厚さ0.7cm。SD4699中層出土。

杓子　49・50はA型式杓子、51・58はB型式杓子。49は身の幅が広く、全体にずんぐりとした形態をとる。先縁部に片刃状の刃を大きくつけ、握りの側縁を弧形とし、握り端部は圭頭状につくる。刃部に付着物はない。長さ15.2cm、幅5.8cm、厚さ0.8cm。SD4699下層出土。50は身の幅が広く握りが細く短いもの。身の先縁部は両面から削り、両刃状の刃がつく。両面に使用痕が残る。半截する。長さ20.4cm、幅5.1cm、厚さ1cm。スギ。SD4699下層出土。

51はやや大型の杓子。身から握りへゆるやかに移行する、丸みをもった形態である。先縁部は両刃状の刃がつく。長さ26.5cm、幅6cm、厚さ0.7cm。SD5021中層出土。58は細長い身と

比較的短い握りからなるもの。先縁部は欠失するが、半円形になると推定される。身は中央部が厚くなっており、撹拌用と考えられる。現存長21.3cm、幅3.1cm、身の厚さ0.9cm。SD5021下層出土。

vi　遊戯具（Pl.180, Ph.250－60・61・63・64）

琴柱１点、独楽２点、さいころ１点がある。

琴柱　60はＡ型式の琴柱である。両側辺を内傾させ、下底部に三角形の切込をいれる。完形で、遺存状態が良い。幅3.3cm、高さ1.8cm、厚さ0.2cm。SD4699下層出土。

独楽　63は砲弾形の独楽である。全面を刀子様の工具で削って整形し、上面は平坦にする。削りは丁寧であるが、削り痕を比較的明瞭にとどめる。先端部がわずかに磨滅する。直径4.2cm、高さ5.3cm。樹種未同定。SD4699中層出土。64は大型の独楽に似るが、あるいは挽物の残欠であろうか。一端は丸底の椀形をなし、他端は浅く窪む。側面はやや内傾する。表面は腐蝕しているが、轆轤目がよく残る。直径8.3cm、高さ3.6cm、窪み深さ0.7cm。サカキ。SD5021下層出土。

さいころ　61は八角柱状のさいころである。粗く加工した八角柱の各面に、１～８本の細線を、刀子で横方向に刻んだものである。上下面は切断面をとどめる。やや腐蝕するがほぼ完形で、幅3.1cm、高さ3.7cm。SD4699中層出土。

vii　祭祀具（Pl.180・181, Ph.250・251－65～68・70～72・75～77・79・81・83・84・86・90・91・97・108）

祭祀具には斎串17点、人形26点、刀子形１点、鏃形１点、鳥形１点、陽物形１点がある。

斎串　第118－23次調査区で７点が比較的集中して出土している。判別の可能なものにはＢ型式とＣ型式があり、Ｃ型式が多い。91はCI型式の斎串。頭部の一部が欠失する。切込がなく、下端の一方の側辺が圭頭状に切落される。長さ17cm、幅2.1cm、厚さ0.6cm。SD4699上層出土。97はCIII型式。切込は１回である。長さ26.8cm、幅2.8cm、厚さ0.7cm。SD4699上層出土。90はBIIIまたはCIII型式の斎串であろう。圭頭部が鋭く尖る。現存長15cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm。SD4699下土層出土。108は墨画のあるもの。ＢあるいはＣ型式のIVあるいはＶ式。上部の切込は２回。頭部直下に人の顔と胴を線画で表現する。冠帽、目、口が認められるが、胴部の表現は不明瞭である。下半部を欠失する。現存長６cm、幅1.6cm、厚さ0.2cm。SD5021下層出土。スギ。

墨画斎串

人形　正面全身人形23点、側面全身組合わせ人形２点（77）、立体人形１点（79）がある。

正面全身人形にはAI型式（65・68）、AIa型式（66・70・75）、AIb型式（67・71）、BIb型式（72・76）などがある。

65は胴部から下が失われ、胸部から上が半截する。墨画により眉、目、耳、鼻、口を表す。現存部の長さ11.8cm、同幅2.9cm、厚さ0.3cm。SD4699上層出土。68は胴部から上が残存する人形である。墨画で眉、目、鼻、口を表現する。現存部の長さ13.4cm、同幅2.7cm、厚さ0.3cm。SD4699上層出土。65は手の有無が不明であるが、顔の表現の点で68と共通しており、おそらく手を表現する型式であろう。65・68は大きさが異るが、顔の表現が似ており、出土位置も近いので、同一の製作者および同時使用を想定してよかろう。

66は膝下を欠損し、左肩から先を失い、右手の先を欠失する。頭部は丸くつくり、顔は墨画により眉、目、鼻、ひげを描出する。眉と鼻は繋がっている。長さ9.1cm、幅2.6cm、厚さ0.3cmである。SD4699中層出土。70は小型のもの。頭部は丸くつくり、顔の表現はない。ほぼ完形である。長さ6.5cm、幅1.7cm、厚さ2.5cmである。SD4699中層出土。75は腕と右足を失う。頭部は丸く形どり、顔は目、鼻、口を墨画で表現する。長さ14.3cm、幅３cm、厚さ0.4cmである。SD4699中層出土。

67はほぼ完形の人形である。右脚の一部を欠失する。頭部は梯形につくり、顔の表現は、眉には「八」を、鼻には「十」を、口には「口」を墨書する。長さ26.2cm、幅3.3cm、厚さ0.4cm。SD4699下層出土。71は小型の人形。頭部は圭頭にかたどり、全体は菱形に近い。墨画による顔の表現はない。ほぼ完形。長さ9.5cm、幅1.4cm、厚さ0.2cm。SD4699下層出土。

72は頭部を圭頭につくり、腰部の切込をいれないもの。腕は削り出さない。脚の切欠きは逆「U」字形に近い。顔は墨画により目、鼻、口を表現する。完形。長さ17.4cm、幅3.3cm、厚さ0.4cm。SD4699下層出土。76は頭部を圭頭につくり、腰部に切欠きをいれ、短い脚を削りだす。腕は削り出さない。顔面は針描きにより目、鼻と口を表現している。長さ12.1cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm。SD5021中層出土。

77は組合わせ式の人形、いわゆるマリオネットである。横向きの胴部と頭部は一体に作り、腕と脚はそれぞれ別材から作る。腕と脚の付け根と肩および股間に穿孔して、腕と脚を取りつける。腕は出土していないが、完形に近い脚と大きく欠損のある脚がそれぞれ１本ずつある。頭部は切欠きにより冠帽、眉、鼻を表現する。胴部と頭部は、高さ11.6cm、幅3.3cm、厚さ0.4cm。ほぼ完形の脚は長さ7.1cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm。SD4699中層出土。

79は頭部が半截している立体人形である。顔面と頭部には彫刻を施したうえで墨を塗って冠帽、頭髪、耳、目、眼窩等を表現するものであるが、いま顔の前面部が欠損して、両耳周辺と後頭部のみが残る。胴部は断面楕円形を呈する。長さ13.2cm、胴部長径２cm、同短径1.4cm。SD4699中層出土。

刀子形　84は刀身のみを表現したＣ型式刀子形。刃をつける。茎は折れている。現存長8.1cm、幅１cm、厚さ0.3cm。SD4699下層出土。

鏃形　83は翼状に開いた身に断面円形の茎をつくりだしたもの。茎下端部は折り取って整形している。現存長6.7cm、幅1.7cm、茎直径0.7cm。SD4699上層出土。

鳥形　81はほぼ完形のAII型式鳥形である。小さな半円形の頭部、丸くふくらんだ胸部、尖った尾部を簡素に表現する。長さ11.1cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm。SD4699下層出土。

陽物形　86は心持丸木の全面を削ってかたどったもの。加工はやや粗雑である。腐蝕し、軟化する。長さ18.9cm、直径2.3cm。SD5021下層出土。ヤブツバキ。

viii　調　度（Pl.182, Ph.252－112）

刳り抜き箱　１点がある。112は箱蓋。長方形の材の裏面周縁を削って低い凸部をつくる一般的な形態である。表面は甲高で縦断面が山形をなすが、横断面は平坦である。表面に残る墨書は風蝕によりかすれているが、「□□并□〔資ヵ〕人等上日帳」（出土木簡抄№192）と読めることから、文書をいれた箱であることがわかる。外法は、全長35.6cm、現存幅5.1cm、凸部長　箱　蓋

さ32.1cm、同幅4.9cm、厚さ1cm。樹種未同定。SD4699上層出土。

ix　部　材（Pl.182, Ph.252・253－113～115・119）

42点が出土しているが、用途のわかるものはほとんどない。

113は把手であろう。厚手の長方形部材の中央部を山形に高く削りだし、両端部は面取りをして斜辺ないし圭頭状にする。両端部には横合いから穿孔する。全面が腐蝕する。長さ15cm、高さ2.8cm、厚さ0.7cm。SD5021最上層出土。114は断面長方形の材の中央部を削り込み、木錘形につくるもの。両端部に方孔をあける。孔の上部が窪んでいるが、孔に通した縄などがあたっていたのであろう。一部欠失するが完形に近い。長さ15.5cm、幅3.5cm、厚さ1.6cm。SD4699下層出土。115は断面形が隅切角を呈する材の一端を圭頭状に尖らせたもの。丁寧に加工した完形品である。長さ19cm、幅1.9cm、厚さ1.6cm。スギ。SD4699下層出土。119は完形にちかく、遺存状態の良好な脚である。高さに比べて幅の広い直方体の一端に、これも幅の広いほぞをつくる。ほぞには長軸に平行に2本の楔が打ちこまれ、それらに直交する楔がさらに打ちこまれる。脚底面は磨滅している。高さ12.3cm、幅6.5cm、厚さ3.6cm。SD4699上層出土。

脚

x　用途不明品・その他（Pl.181・183, Ph.254－106・124～129・132）

106は塔婆に似た製品で、この他に1点ある。全形は不明ながら、頭部を梯形につくり、頭部付近の側辺に4個所の切込をいれる。表面には「八」「丁」字形の墨書が認められる。斎串であろうか。現存長17.4cm、幅4.7cm、厚さ0.8cm。SD4699下層出土。

124は縦・横断面とも、台形の斜辺下部を垂直に切落した形につくる。頂部には横合いと頂点から円形孔をあける。孔は外見上、直列する個別の孔に見えるが、内部でつながっている。幅9.3cm、奥行6.5cm、高さ4.2cm。樹種未同定。SD4699中層出土。

125は轆轤挽きの円板状製品。片面を轆轤挽きで浅く削り込み、全体を高台状につくる。台のようなものであろうか。半截する。直径12.5cm、高さ1.2cm。SD5021下層出土。

126は一端を圭頭につくり、他端を直線状に仕上げ、全体を撥形にかたどるもの。いま2片に分離し接合しないが、同一地区の同じ土層から出土しており、同一個体と考えられる。長さ16.8cm以上、幅4.5cm、厚さ0.4cm。SD4699下層出土。

127は断面が蒲鉾形を呈する長方形の材の裏面周縁を削り、一まわり小さい凸部をつくるもの。合わせ蓋などであろうか。長さ18.9cm、幅4.2cm、厚さ2.3cm。SD4699中層出土。

128は、割面をとどめる木片の両端を棒状につくり、中央部両側辺に2対の「V」字形の切込をいれ、左右対称形に仕上げたもの。加工は粗雑で断面は不整形。現存長11cm、幅1.7cm、厚さ0.7cm。SD5021上層出土。

129はいわゆるささら形の木製品。中央部に鎬を通し、切先を丸くした剣形の材の周縁に細かく切欠きをいれて鋸歯状につくるもの。折損する。現存長10.8cm、同幅3.2cm、厚さ1.1cm。アカガシ亜属。SD5021上層出土。

支　脚　132は長い支柱の先端部が二叉に分れると想定できるもの。先端部が残存するに過ぎない。側縁は面取りしており、断面が楕円形を呈する。股の基部には長軸方向の擦痕をとどめる。たたりであろうか。現存長17.5cm、幅8.4cm、厚さ2.7cm。SD4699上層出土。

C　SD5100出土木製品

二条大路南端に掘られた濠状遺構SD5100からは、大量の棒状品を除いて、約2800点の木製品が出土した。木製品の種別と点数は、別表21に記載した。遺物の出土した層は上から、炭層、木屑層、黒灰色粘土層の順であるが、大半は木屑層出土である。

遺物の分布

SD5100の木製品と木炭の分布状況をFig.69に示した。出土量の変化をを東から西へ小地区（3m方眼）別に100分比で示している。木製品は出土点数、木炭は重量で集計した資料を基にし、変化の様子を近似曲線で表現した。一見して明かなのは、両者とも分布がUO40地区付近から西へ大きく偏り、東へ向けて急激に出土量が減る点である。UO16～20には未発掘部分が含まれることも影響しているであろうが、全体の傾向からみると、本来遺物が少ない場所であった可能性が高い。また、細かくみると、共通して遺構中央のUO27・28付近、東端部のUO12・13付近に若干の集中がある。以上の傾向は土器や木簡にもほぼ共通するようである。SD5100西端付近には左京三条二坊一・二・七・八坪を占有した時期の宅地の北門が存在し、分布が西に偏ることから、遺物は主にこの門内から廃棄されたと考えられる。また、中央と東端部の集中は、後述するSD5300の集中にほぼ対応しており、SD5300の遺物と同様に左京二条二坊五坪の宅地からも廃棄が行われた可能性がある。

ここでは499点の木製品について報告する。出土層位について特に記載しない場合は、木屑層出土である。

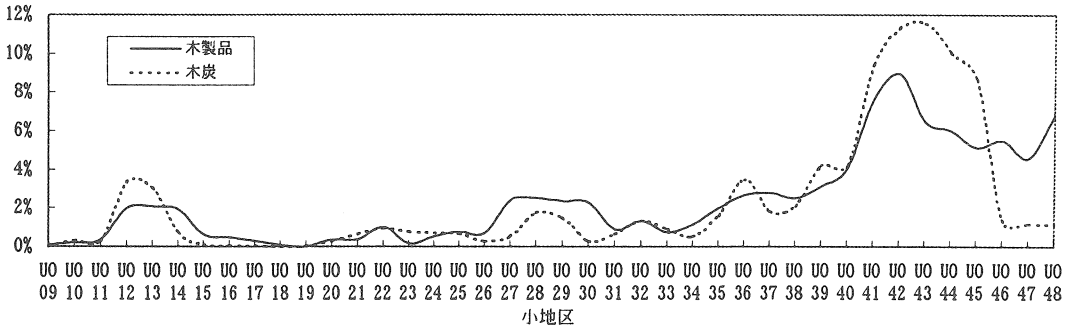


Fig.69　SD5100出土木製品と木炭の地区別出土量

i　工　具（Pl.184～186, Ph.255－1～63）

工具柄　棒材の端部に茎孔をあけ柄とする。1は柄元付近がやや太く、断面を八角状にする。長さ24.5cm、径1.2cm。断面長方形。幅0.8cm、深さ4.3cm。錐あるいは鉈の柄か。2は断面が偏平な八角形を呈する錐柄。長さ15.5cm、径1.1cm。茎孔は断面正方形。幅0.4cm、深さ2.2cm。3は割り材を断面八角形の棒状に削り、両端に長方形の茎孔をあける。長さ11.5cm、径1.5cm。茎孔の大きさは異なり、それぞれ幅1.2cm、深さ5.2cmと、幅0.6cm、深さ3.1cm。鑿と錐の両方に用いたものか。炭層出土。4は丸棒の木口に茎孔をあける。切目をいれて折っており、柄元付近のみ残る。現存長6.0cm、径1.0cm。茎孔は断面正方形。幅0.4cm、深さ1.9cm。5は丸棒を用い、柄元付近を太くする。一辺0.4cmの正方形断面の茎孔をあける。柄頭

部分は破損。現存長10.4cm、柄元径1.1cm、茎孔幅0.4cm、深さ2.3cm。

刀子鞘　6は合わせの鞘の片側。薄い板材を削り、片面を刀子の身の形に刳り抜く。鞘元部分は折り取っている。現存長9.2cm、幅1.4cm。7は柾目材を削り、片面に浅い溝を彫る。両端は鋸による切断。合わせの柄の可能性もある。長さ8.8cm、幅1.4cm。

刀子柄　8は柄頭付近で刃側から斜めにそぎおとしたⅡ型式の柄。柄元付近で背側を破損する。茎孔は断面三角形、深さ5.4cm。茎を焼込み柄に装着する。長さ14.0cm、幅1.2cm。9は柾目材を用いた、扁平でまっすぐな柄。茎孔は断面台形で、縦幅0.7cm、長さ3.9cm。装着は焼込みによる。長さ15.6cm、幅1.7cm。10は柄の中央部分で背方向に曲折するⅠ型式。柄元は直に切断し、柄頭は圭頭状に面取りする。茎孔の深さ6.4cm、断面倒卵形。装着は焼込みによる。長さ14.9cm、幅1.8cm。

楔　材を主に削りにより斧頭状に仕上げたものを一括する。11は薄い柾目材を削り、中央に切欠きを施す。長さ5.5cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm。12は板目材を用い、側面に粗い切断痕を残す。長さ4.7cm、幅4.8cm。厚さ1.4cm。13は片面から斜めにおとして手斧状に作る。腐蝕がすすみ、加工痕は不明瞭。長さ7.0cm、幅1.6cm、厚さ1.9cm。炭層出土。14は棒状の材を斜めに切りおとし成形する。頭部は粗く面取り。先端を若干欠損する。長さ8.5cm、幅2.5cm、厚さ1.5cm。黒灰色粘土層出土。15は板目材を削り、先端は両側から斜めに切り落とし幅を狭める。周縁も丁寧に削る。長さ7.2cm、幅2.6cm、厚さ1.0cm。16は棒状の柾目材を折り成形する。頭頂部に折り取り痕を残す。長さ5.3cm、幅1.1cm、厚さ0.9cm。17は薄い板目材から成形する。長さ6.7cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm。18は角棒状の材を片面から斜めに落とし、先端部のみ両面から削る。片側の側面には割り痕が残る。長さ10.2cm、幅1.3cm、厚さ0.9cm。19は柾目材を長方形に加工し、削りで仕上げる。頭頂部に鋸による切断痕、片側面に割り痕が残る。長さ17.0cm、幅4.3cm、厚さ1.3cm。20は角材を加工し、断面を緩やかな弧状に削る。上面は鋸による切断痕が残る。両側は角材の面を残す。長さ16.8cm、幅3.2cm、厚さ2.4cm。21は大型の楔で、割り材を鋸と手斧で整形する。長さ31.0cm、幅7.5cm、厚さ3.8cm。

木釘　22～25は釘頭を作り出す。22は釘頭を大きく欠損する。長さ6.0cm、径0.5cm。23は先端を斜めに落とす。釘頭部を杏仁形に作る。長さ3.9cm、頭部径1.0cm、身部径0.7cm。243は頭部が球状。長さ4.3cm、頭部径0.4cm、身部径0.3cm。25は細かい切り込みにより頭部を半球状にする。長さ4.7cm、径0.5cm。26は断面方形の棒状を呈し、頭部に折り取り痕が残る。27は断面方形で両端を尖らす。合釘接用か。長さ7.0cm、幅0.6cm。

不明工具　28は、円柱状の柄と細い身部が作り出されており、何らかの工具と考えられる。身の先端を尖らせていることからすると、刺突用か。長さ18.7cm、柄部径2.8cm、身部幅1.2cm、厚さ0.9cm。

墨刺　29・30はいずれも尖らせた端部に墨が付着し、墨刺として使用されている。29は割り材を削った匙状品であるが、柄頭部を斜めに落とし、墨刺として利用している。長さ16.2cm、幅1.4cm。厚さ0.5cm。30は棒状品の先端を尖らせたもの。長さ8.8cm、幅0.7cm、厚さ0.5cm。

刷毛　31～34はいずれも平刷毛。31は板目材を削り、握りを徐々に細くし先端を尖らせる。柄元は扁平に作る。先端を欠損し、毛の装着方法は不明。32は合わせの柄の一方。柾目材を削り扁平な柄を作り、縦に二つに割る。両者を合わせ、間に毛をはさみ刷毛とする。柄元には紐で

たばねるための溝を彫り、さらに両側面にV字形の切り込みを入れる。毛が一部残存。端部を欠損する。現存長13.9cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm。33・34は板目材から握りが棒状で、柄元が偏平な柄を作り、柄元に縦に割れ目をいれ毛をはさむ。ともに生漆が柄元に付着し、漆塗りに用いられたことがわかる。33は柄元端を斜めに面取りする。柄元に緊縛した紐の痕跡が若干残る。長さ27.8cm、幅3.3cm、厚さ1.1cm。34は柄元に紐をたばねるためのV字形の切り込みを両側にいれる。毛が一部残存する。長さ15.7cm、幅2.4cm、厚さ0.9cm。

漆工具　35～42は匙・ヘラ状品で、漆が部分的に付着し、漆の作業に用いたことがわかる。35・36は柾目の薄板を先端を尖らせて剣先状に作る。35は柄を部分的に欠損する。現存長24.4cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm。36は先端を若干欠損。現存長17.9cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm。37は柄を棒状に、先端を刀子状に削る。長さ15.9cm、幅1.0cm、厚さ0.7cm。38～42は匙状に作る。周縁にも削りを入れる。柄と身との境界が不明瞭なもの（39・40）と、明瞭に肩を作り身と柄を分けるもの(38・41・42)がある。38は柄頭部を欠損する。現存長7.9cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm。39は長さ24.1cm、幅2.8cm、厚さ0.4cm。40は身の先端を若干欠損する。長さ21.8cm、幅2.2cm、厚さ0.6cm。41は身の先端を若干欠損する。柄頭部は面取りする。長さ23.7cm、幅3.6cm、厚さ0.5cm。42は柄頭部を欠損する。現存長さ12.1cm、幅2.5cm、厚さ0.6cm。

木型　43・44は釘型。43は角棒の片端を若干細く削り、もう一端を面取りし頭部とする。長さ9.4cm、幅1.4cm。44も同様の加工を行い、先端を尖らせる。全長8.3cm、幅0.9cm。45は円頭の丸釘型。成形後全面を研磨する丁寧な加工である。先端部を欠損する。現存長3.4cm、円頭部径1.0cm、身部径0.3cm。炭層出土。46は鏃型。薄板を雁又鏃形に切り出している。篦被も表現されている。形代の可能性もある。鏃身を若干欠損する。長さ8.2cm、厚さ0.2cm。47は鉈尾。帯に装着した痕跡がなく、木型とした。全面丁寧に削っている。長さ4.4cm、幅3.3cm、厚さ0.4cm。48は床脚の上底端部。柾目の薄板を切り出して成形。下部に刳りを2単位施す。現存幅3.9cm、厚さ0.3cm。49～52は飾金具の型板と思われる。49は柾目の薄板を八花形を半分にした形に切りとる。長さ5.0cm、厚さ0.1cm。50は板目の板材を菱形に切り抜き、中央部を菱形に削りくぼめ径0.3cmの円孔をあける。縦1.8cm、横5.1cm、厚さ0.7cm。51・52は同形の型板。柾目板を、中央が突起した釣鐘形に切りとる。両者とも端部を若干欠損する。51は現存幅7.2cm、高さ3.7cm、厚さ0.3cm。52は現存幅6.6cm、高さ3.9cm、厚さ0.3cm。

木針　53～56は藁仕事に用いる木製の針。53は角棒の先端を削りでとがらせ、頭部に切欠きを入れる。長さ18.6cm、厚さ0.7cm。54は丸棒を半裁し先端をとがらせ、頭部に切欠きを入れる。長さ17.8cm、幅1.2cm、厚さ0.6cm。55は丸棒の先端をとがらせ、頭部は面取りし切欠きを入れる。長さ14.1cm、径0.7cm、56は板目材を扁平なへら状に整形し、頭部に径0.4cmの円孔をあける。長さ15.2cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm。

木錘　57～63は編布などの作成用の錘具。57は棒状品の片端部近くを切り込み釘頭状につくり、もう一端を斜めに切り落とす。渡辺誠の分類[1)]によるタテ型木錘に類似する。何かの部材の可能性もある。長さ10.7cm、長径1.5cm。58は割り材の中央に切り込みをいれる。端部は面取りを施す。片端部が若干欠損する。現存長6.8cm、厚さ0.6cm。炭層出土。59は割り材の断面楕円形の棒を短く切断し、中央を削りこむ。長さ4.7cm、径2.4～2.0cm。60は円柱状の材

1）渡辺誠「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』66－4，1981

の側面中央を１段低く削る。加工は比較的丁寧で、何かの部材の可能性もある。長さ10.3cm、径2.5～2.0cm。61は芯持ち材を切り出し、中央部を削りこむ。太い部分に樹皮が残る。一方の端部には斧様の工具による切り出し痕が残る。長さ11.6cm、径4.7cm。62も61と同様の手順で作る。一部に樹皮が残る。長さ19.0cm、径5.0cm。63は中央部から約半分を欠損する。丸太材を半裁して断面長楕円形の材に加工し、中央部を細く削る。加工は粗い。現存長10.6cm、径8.8～6.0cm。黒灰色粘土層出土。

ii　紡織具（Pl.186・187, Ph.255－64～88）

紡輪　中央に円孔を持つ円盤状の製品をあてた。全て薄板を切りとり、周縁にも削りを施す。64～67は柾目材を用いる。64は径6.9cm、孔径1.2cm、厚さ0.4cm。65は一部欠損する。径5.4cm、孔径1.2cm、厚さ0.4cm。66は約半分を欠損。径5.6cm、厚さ0.3cm。67は約半分を欠損する。中央部がやや高い円錐状に作る。径2.3cm、厚さ0.4cm。68～70は板目材を用いる。68は約半分を欠損する。径6.3cm、厚さ0.6cm。炭層出土。69は紡茎の一部が装着した状態で残存し、紡輪は一部欠損する。紡輪径3.3cm、孔径0.4cm、厚さ0.5cm、茎現存長3.9cm、径0.3cm。黒灰粘土層出土。70は径2.6cm、孔径0.3cm、厚さ0.2cm。

糸巻　糸を巻いておく道具。中心の軸棒に、相欠きで組み合わせた横木を通し、横木の端部に枠木を固定する。枠木と横木が確認できる。

71～76は枠木である。71は断面八角形の棒状を呈し、円形のほぞ孔を開ける。約半分を欠損する。現存長14.2cm、径1.3cm、厚さ1.8cm、孔径0.7cm。72～76は断面カマボコ状を呈する。端部はほぞ孔から両端に向け削りこみ、細くする。72～74は円形のほぞ孔をあける。73以外はほぞ孔間の腹面を浅くくりこむ。72は約半分を焼失する。現存長13.8cm、幅1.3cm、厚さ1.4cm、孔径0.6cm。73は約半分を焼失する。横木をほぞ孔に差し込んだ後、木釘留めする。ほぞ孔間の腹面をくりこまない。現存長18.8cm、幅1.6cm、厚さ1.8cm。74は約1/3を欠損する。腹面稜角を面取りする。現存長15.2cm、幅1.1cm、厚さ1.2cm。75・76はほぞ孔を持たず、未製品と思われる。75は腹面の稜角を面取りする。長さ19.9cm、幅1.5cm、厚さ1.8cm。76は長さ16.0cm、幅0.7cm、厚さ1.0cm。

77～88は横木である。板材の中央を幅広く残し、両端を棒状に削りだす。77～85は同形の横木を相欠きで十字に組むもの。77～84は中央に軸棒をとおす孔を持つ。77は両端を枠木のほぞ孔に差し込んだ後、さらに木釘留した痕跡がある。長さ12.8cm、幅2.5cm、厚さ1.1cm。78は長さ10.4cm、幅1.9cm、厚さ0.9cm。79は端部を若干欠損する。長さ10.4cm、幅2.3cm、厚さ1.0cm。80は端部を若干欠損する。現存長9.0cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm。81は長さ9.9cm、幅1.8cm、厚さ1.1cm。82は全長9.5cm、幅2.1cm、厚さ0.9cm。62は全長9.3cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm。84は長さ7.2cm、幅1.7cm、厚さ0.6cm。85は中央の軸孔を持たない。長さ8.2cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm。86・87は横木に６本の枠木が結合される型式。真ん中に両面から相欠き部分を切りこんだ横木を置き、上下に片面のみ切り込んだ横木を組み合わせる。86・87とも約半分を欠損する。86は片面のみ切りこむ。まず、側面と60°で交差させて切り込み、その後、逆方向に同様に切り込む。現存長3.3cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm。87は真ん中に用いる横木。組み合わせ部分の両面を側面と60°の角度で斜めに切り込む。端部に円孔を持つ。現存長3.6

cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm。88は大型品の横木。中央に方形の結合部を持ち、両端を断面台形の棒状に作る。中央に軸孔を持たない。長さ22.8cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm。

iii　食事具（Pl.188・189, Ph.256－89～125）

匙形木器　板材を削り匙形にしたもの。柄と身の境界が余り明瞭ではないもの（89～94）と、身が広がり肩が比較的明瞭に作られ柄と身がはっきり区別できるものがある。後者は柄が棒状のもの（95～106）と、柄が板状のもの（107～112）に分かれる。身の先端形は直線と、弧状に分かれる。89は長さ19.5cm、幅2.7cm、厚さ1.4cm。90は柄頭に折り取り痕がある。長さ15.9cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm。91は柄頭に切り取り痕がある長さ15.5cm、幅0.9cm、厚さ0.8cm。92～94は身部を先端に向け薄くせず、厚めに作る。92は長さ14.6cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm。93は身部が柄の部分より厚い。長さ10.5cm、幅0.9cm、厚さ0.8cm。黒色砂出土。94は長さ10.2cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm。

95～98は直線的な身の先端を斜めに面取りする。95は柄頭部を山形に面取りする。長さ13.7cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm。96は長さ11.9cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm。97は長さ14.8cm、幅3.6cm、厚さ0.5cm。98は柄端をヘラ状に削る。長さ16.1cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm。黒色砂出土。99～101は身を細長く仕上げる。99は周縁も丁寧に削る。長さ21.4cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm。黒色砂出土。100は柄頭部を欠損する。現存長20.4cm、幅1.7cm、厚さ0.7cm。101は身の側縁を若干欠損する。長さ22.6cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm。102は柄端を若干欠損する。一部に割り面を残す。長さ16.8cm、幅2.1cm、厚さ0.7cm。103は長さ14.3cm、幅1.5cm、厚さ0.7cm。104は柄頭部を欠損する。部分的に割り面が残る。現存長12.1cm、幅2.6cm、厚さ0.4cm。105は柄と身の先端を表裏両面から面取りする。長さ10.3cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm。106は柄端を面取りする。長さ12.6cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm。107は柄頭部を欠損する。身の先端を斜めに面取りする。現存長6.5cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm。108も身の先端を斜めに面取り。長さ10.3cm、幅2.3cm、厚さ0.4cm。109は柄元が折れ、ヒビが入る。柄頭部に折り取り痕がある。長さ12.5cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm。110は柄頭部と身の先端を欠損する。現存長14.8cm、幅3.1cm、厚さ0.7cm。111は身の一片の側縁を欠損する。長さ16.9cm、現存幅2.3cm、厚さ0.5cm。112は割り面を残す薄板を切り取り成形する。長さ20.1cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm。

匙　113は全体が弓なりに屈曲する。柄は棒状で、柄頭は面取りする。身は薄く若干湾曲し、特に窪みはない。柄頭を若干欠損する。長さ19.8cm、幅2.1cm、厚さ0.8cm。114は柄は棒状で、浅く刳りぬいた楕円形の身を持つ。身の片側縁を欠損する。長さ10.2cm、現存幅2.9cm、厚さ0.9cm。

杓子　板材を加工して作る。匙形木器と形状は共通するが、身部が大型のものをあてた。柄部は板状。身の先端は一直線のものと、弧状のものがある。115は柄頭部を欠損。現存長17.1cm、幅2.9cm、厚さ0.6cm。116は柄頭部を斜めに切り落とす。身部には割り面を残す。長さ18.0cm、幅3.7cm、厚さ0.4cm。117幅は柄頭を両側から切り込み細くする。身に割れ目が入る。長さ18.9cm、幅5.2cm、厚さ0.5cm。118は全体の半分弱を欠損する。柄頭は切り込んで細くする。身に2ヵ所、柄頭付近に1ヵ所穿孔がある。長さ20.1cm、現存幅3.5cm、厚さ0.5cm。

119～125は大型の杓子。119は腐蝕が進み、加工痕は不明瞭。長さ45.9cm、幅5.7cm、厚さ

1.0cm。120は柄頭付近と柄元に割れ目が入る。長さ30.4cm、幅4.8cm、厚さ0.5cm。121は身の先端を破損する。現存長25.8cm、幅5.1cm、厚さ0.8cm。122は柄を欠損する。現存長19.0cm、幅7.3cm、厚さ0.6cm。123・124は方形の板材を利用する。123は材の両長側縁の中央から柄頭に向け斜めに落とし、柄を作り出す。長さ37.0cm、幅14.0cm、厚さ0.9cm。124は長方形の板材の２隅を方形に切り落とし、柄を作る。長さ32.3cm、幅13.2cm、厚さ0.7cm。125は身の半分弱を欠損する。身はほぼ円形。表面と周縁に細かい削痕を残す。柄頭は面取りし、山形にする。長さ45.2cm、現存幅16.5cm、厚さ1.6cm。

iv　容　器（Pl.190～194, Ph.257～259－126～189）

挽物蓋　ロクロで整形した容器の蓋。126は頂部に宝珠形のつまみを作り、縁部内面の内寄りに直立する反りをつける。黒漆を内外全面にかける。1/8が残存する。縦木取り。復原径12.6cm、高さ3.6cm。127・128は合子の蓋。127は白木の蓋。平坦な頂部に直立する縁部をつける。口縁部外面は凸帯状に作り、端部と頂部の境に浅い段を挽き出す。縁部の約1/4を残存する。縦木取り。復原径13.4cm、高さ2.5cm。128は全体の形状が127と同様であり、縁部上端と頂部に１ヵ所ずつ、２条の凸帯を挽き出す。黒漆を内外全面にかける。縁部の約1/3を残存する。縦木取り。復原径20.0cm、高さ3.6cm。129は半球状の蓋。漆は外面のみにかかる。内面の縁部端に段をつけ、合口の蓋にする。内・外面にやや粗いロクロ痕が残る。約1/8残存する。縦木取り。復原径15.0cm、復原高約５cm。130は頂部に段をつけ、半球が２つ重なる形状を作る。内面の縁部端に段をつける。弧状に切り取った部分があり、円あるいは半円の透かしを入れていたらしい。切り取りの後、漆を内・外面にかけている。約1/8を残存する。縦木取り。復原径10.2cm、高さ4.8cm。

挽物皿　ロクロで整形した皿。131は口縁部の1/3程度を欠損し、残りの部分も土圧により変形する。腐蝕のため内面は加工痕が不明瞭だが、縁部の内・外面にロクロ痕が残る。内面中央付近に刀子による「少子」の刻字がある。底面は高台を作らず、粗くはつって整形する。中央に５爪のロクロ爪痕が残る。底面は火を受け炭化している。横木取り。復原径22.0cm、高さ1.5cm。132・133は高台付皿。ともにロクロで高台を挽き出す。132は口縁端が若干外反する。約1/2が残存。横木取り。復原径34.4cm、高さ2.2cm。133は口縁下にロクロ削りによる段を作る。口縁付近約1/3を残存。横木取り。復原径32.6cm、高さ2.2cm。

曲物　板を曲げて樺皮綴じし円柱状にした側板を、底板と結合する。134～142は底板にあけた２孔一対の結合孔を通して樺皮で留めた樺皮結合曲物。内面に側板の痕跡が残り、側板の内径がわかる。134は底板のみであるが、柾目の底板の周縁を一段低くし、そこに側板をたてて樺皮で留めた樺皮結合曲物Ａ。結合は４ヵ所で行う。径19.5cm、側板内径17.8cm、厚さ1.1cm。135～142は段を作らない樺皮結合曲物Ｂ。135は側板に２列前上外下内１段後内１段綴じと、２列前内１段後上外下内１段綴じを行い、５ヵ所で底板に結合する。側板は板目材を用い、縦にケビキを入れる。底板に粗く方形の小孔をあける。蓋か。底板径19.5cm、側板内径16.8cm、底板厚0.9cm、側板復原幅2.5cm、側板厚0.2cm。136は側板に２列前上外下内１段後内１段綴じと、２列前内１段後内１段綴じを行う。底板との結合は５ヵ所確認でき、もう1ヵ所あった可能性が高い。側板は板目材で、斜めに直行するケビキを施す。底板は板目材。底板径22.7cm、

側板内径20.7cm。底板厚0.5cm。側板復原幅2.7cm、側板厚0.3cm。137は5ヵ所で側板を底板に結合する。側板は板目材、底板は柾目材。底板内面に刃傷が残る。底板径20.5cm、側板内径19.5cm、底板厚0.6cm。側板復原幅2.5cm、側板厚0.2cm。138は刻字のある底板。柾目材の底板外面の中央に「麻呂」と刻む。約1/3を欠損。径20.5cm、側板内径19.5cm、厚さ0.5cm。139は墨書のある底板。側板との結合は4ヵ所で行う。2ヵ所に「建部建部部□」と「□□建建部」の墨書がある。板目材。径18.2cm、側板内径18.0cm、厚さ0.6cm。140は側板を1列内2段綴じする。側板にもう1ヵ所樺皮綴じがあるが、側板固定用ではない。底板とは8ヵ所で結合する。底板・側板ともに板目材。底径27.0cm、側板内径25.5cm、底板厚0.7cm、側板復原幅5.3cm、側板厚0.4cm。141は土圧により底板が屈曲する。側板を2ヵ所で1列上外下内3段綴じし、8ヵ所で底板に結合する。側板の内側端部に縦のケビキを施す。底板・側板とも板目材。底板径26.4cm、側板内径24.9cm、底板厚0.8cm、側板幅3.5cm、側板厚0.3cm。142は隅丸方形の折敷の底板破片。2ヵ所に結合孔が残る。現存長31.7cm、厚さ0.8cm。

143～157は側板を底板の周縁にに木釘留めする釘結合曲物。143は底板のみ。3ヵ所に木釘が残る。柾目材。径8.6cm、厚さ0.7cm。144は底板の約半分が残る。釘孔が1ヵ所確認できる。柾目材。径8.1cm、厚さ0.6cm。145は側板を2列前上外下内3段後内1段綴じし、補足的にもう1ヵ所小さく1列内2段綴じする。側板には縦にケビキをいれる。側板・底板ともに柾目材。木釘孔は4ヵ所。底板径10.2cm、底板厚0.5cm、側板幅4.3cm、側板厚0.2cm。146～148は底板のみ。いずれも柾目材。146は釘孔が5ヵ所。径12.3cm、厚さ0.7cm。147は約1/3を欠損。径13.3cm、厚さ0.7cm。炭層出土。148は4ヵ所に木釘が残る。径13.5cm、厚さ0.8cm。149は底板と側板の一部が残存。側板の綴じ方は不明。木釘孔は6ヵ所。側・底板とも柾目板。底板径16.2cm、底板厚0.8cm、側板復原幅1.8cm、側板厚0.2cm。炭層出土。150は側板を1列外1段綴じ、5ヵ所で底板に釘留めする。側板は板目材、底板は柾目材で削痕を明瞭に残す。底板径16.7cm、底板厚0.7cm、側板復原幅1.6cm、側板厚0.2cm。151は側板を1列外3段綴じし、底板に6ヵ所で釘留めする。側・底板とも柾目材。底板径17.8cm、底板厚0.8cm、側板幅2.6cm、側板厚0.3cm。152～154は、底板中央に字を刻みそこに墨を点じている。152は側板を1列外3段綴じし、6ヵ所で底板に釘留めする。外面中央に「泰身万歳福」の刻字がある。土圧により全体が屈曲する。底・側板とも柾目材。底板復原径17.6cm、底板厚0.6cm、側板復原幅2.4cm、側板厚0.2cm。153は底板のみが残る。刻字は「益万呂」釘孔は6ヵ所にある。柾目材。径17.2cm、厚さ0.8cm。154も底板のみ。刻字は二次的な削りを受け、現状では「□一人」と下2文字のみ確認できる。釘孔は5ヵ所。柾目材。径16.4cm、厚さ0.8cm。155は底板のみ。釘孔は5ヵ所。柾目材。径17.4cm、厚さ0.6cm。156・157は有孔の底板を持つ甑。156は全体の半分弱を欠損。側板の綴じ方は1列で下外であること以外は不明。底板に現状で小孔を20個確認できる。側・横板ともに柾目材。底板径13.0cm、底板厚0.5cm、側板現存幅8.6cm、側板厚0.1cm。157は底板のみ。約2/3残存。刀子で粗く方形孔を1ヵ所あける。対称位置にもう1孔が存在したか。釘は比較的密に打っており、現状で7ヵ所確認できる。柾目材。径22.9cm、厚さ1.1cm。黒灰色粘土層出土。

「双鉤鎮墨」技　　法

柄杓柄　158は先端を尖らせた丸棒に、先端から10.5cmのところに径0.4cmの釘孔をあける。若干太いきらいがあるが、曲物柄杓の柄にあてた。柄頭は欠損する。現存長34.0cm、径2.1cm。

炭層出土。

栓　小型の円・角柱状品を容器の栓にあてた。159は円形木片の周縁に段を削り出す。上面は若干隆起する。径2.3cm、厚さ0.9cm。160は板目材を円盤状に加工する。径2.6cm、厚さ1.1cm。161は芯持ち材を角状に削る。一方を若干細くする。長さ2.4cm、幅1.6cm、厚さ1.4cm。162は材を粗く円柱状に削る。一方の端が若干つぶれる。

蓋板　板状の蓋。割りや削りで成・整形するものが多い。つまみを装着するための孔を持つものもある。163～165は小型品。円・楕円板の周囲を斜めに落として面取りする。163は楕円形品。板目材。長径6.6cm、厚さ0.9cm。164・165は円形品。164は板目材。径6.0cm、厚さ0.5cm。165は柾目材・径8.0cm、厚さ1.2cm。166は周縁を2ヵ所を小さく切り欠く。それらを繋ぐように刃傷がある。板目材。径5.8cm、厚さ0.9cm。167～171は円形品。167は両面に割り面を残し、周縁を削りで斜めに面取りする。板目材。径19.6cm、厚さ0.8cm。168は全面削りで整形。周縁は斜めに面取り。板目材。径15.5cm、厚さ0.9cm。169は全面を細かい削りで整形する。周縁は垂直に落とす。柾目材。径17.4cm、厚さ0.7cm。

170・171は大型品。170は周縁を両面から面取りする。柾目材。径22.7cm、厚さ1.0cm。171は全面を細かい削りで整形する。周縁は垂直に落とす。柾目材。径25.7cm、厚さ0.9cm。172は円の両端を真っ直ぐに落とした形状をとる。周縁は部分的に両面から面取りする。径17.8cm、厚さ0.9cm。173は楕円形を呈する。全面細かい削りで整形する。周縁は垂直に落とす。柾目材。長径18.7cm、短径16.5cm。厚さ1.1cm。174は隅丸方形を呈する。周縁は両面から斜めに面取り。板目材。長径17.1cm、短径13.8cm、厚さ1.3cm。175は方形の4隅を落として八角形につくる。周縁は垂直に落とす。板目材。長径16.2cm、短径15.1cm。176は長方形板の2隅を丸くする。切欠きを1ヵ所に施す。板目材、長さ17.4cm、幅12.3cm、厚さ0.5cm。177～179はつまみを装着する孔を設ける。177は円形板の周縁を低く削り段を作り、中央に未貫通孔をあける。逆面の周縁は斜めに面取り。板目材。径14.6cm、厚さ0.8cm。178は約1/3を欠損。円板の中央につまみ装着のための方形孔をあける。つまみのほぞが残存する。周縁は垂直に削られている。片面に生漆が付着し、漆容器の蓋であることがわかる。板目材。径12.0cm、厚さ0.8cm。179は割り面を残した円板の周縁を斜めに面取りし、中央に刀子で隅丸方形孔をあける。柾目材。径16.9cm、厚さ1.0cm。

漆の容器

把手　両端を細くして枠材に挿入し把手としたと考えられる細板。180～182は下面が湾曲する。180は中央部分が湾曲し、一部に割り面が残る。長28.6cm、幅1.5cm、厚さ1.2cm。181は中央下部に抉りを入れる。片端を若干欠損する。現存長28.5cm、幅1.8cm、厚さ1.3cm。黒灰粘土層出土。182は全体が湾曲するように削り出す。中央部分は角を面取りし丸みを持たせている。現存長19.5cm、幅1.5cm、厚さ1.2cm。

183～185は下面が真っ直ぐなもの。183は両端の、上面を斜めに落とし、両側面も削って細くする。長さ30.1cm、幅2.4cm、厚さ1.3cm。184は両端の、上面を斜めに落とし細くし、先端から約2cmのところにそれぞれ釘孔をあける。木釘片が残る。長さ33.7cm、幅2.8cm、厚さ1.3cm。黒色砂層出土。185は上面が弧をえがくように切り出し、両端は山形に面取りする。長さ26.2cm、幅2.1cm、厚さ1.2cm。186～188は両端を、上下両面削りこみ細く仕上げる。186は両側面も削りこみ両端を細くする。長さ37.7cm、幅2.2cm、厚さ1.3cm。187は長さ29.6

cm、幅3.1cm、厚さ1.1cm。188は両端を丸く削る。両端から約1cmのところにそれぞれ釘孔をあける。長さ30.8cm、幅3.0cm、厚さ1.2cm。

枠木　189は細板状の材の両端の両側縁にV字形の切欠きを入れたもの。同形の部材を十字に組み合わせたものを2組そろえ、曲物の上下に置き、切欠きに紐をかけ枠木としたと考えられる。両端を若干欠損。長さ38.5cm、幅2.1cm、厚さ0.9cm。

V　服飾具（Pl.195, Ph.259・260・265－190～214）

檜扇　ヒノキの薄板（骨）を、各骨の下端部（要）と中央部の綴紐で綴じ合わせ扇としたもの。190・192は要に2孔、他は1孔をあける。191・195は板目材他は柾目材を用いる。190は同形の骨が11枚残る。骨の上端は真っ直ぐで、下端は半円状。下半部の片側を若干切り込む。骨の中央やや下寄りに、綴じ合わせ用に2孔をあける。長さ32.5cm、幅3.6cm、厚さ0.2cm程度。191は骨が7枚残る。骨の上端は刺葉形に切り出し、下半部は両側から位置をずらして切り込む。骨の中央やや上寄りに綴じ合わせ孔を2個あける。骨の1枚に「大宅黒大実」の墨書が残る。長さ29.3cm、幅2.9cm、厚さ0.2cm程度。192は骨の下半部のみ残る。両側を弧状に切り込み、下半部が湾曲するような形状をとる。現存長17.7cm、幅2.4cm、厚さ0.2cm。193は1枚のみ。上・下端は角を斜めに落とし、台形状にする。下側約1/3を、一方を浅く、もう一方を深く両側から切り込む。長さ35.3cm、幅4.2cm、厚さ0.2cm。194は骨4枚が残るが、全体が残るのはうち2枚。縦の割れ目のため、綴じ孔の位置は不明。上・下端とも弧状。下半部の片側を若干深く弧状に切り込み、下端をふくらませる。長さ33.1cm、幅4.2cm、厚さ0.1cm。195は要部分のみ7枚残る。片側をやや深く弧状に切り込み、下端をふくらませる。最も長いもので現存長10.5cm、下端幅1.7cm、厚さ0.2cm。

7枚組の檜扇

横櫛　板材の側縁に歯を挽きだし、表面を研磨し横長の櫛に作る。196・197は全体を長方形に近く肩が角ばるAⅠ型式。ともに一方の肩を欠損する。196は3cmの幅に26枚の歯を挽きだす。現存長8.7cm、幅5.0cm、厚さ0.9cm。イスノキ。197は3cmの幅に25枚の歯を挽きだす。現存長6.2cm、幅4.8cm、厚さ1.0cm。モッコク。198は全体が長方形に近く両肩に丸みを持つAⅡ型式。一方の肩を欠損する。3cmの幅に21枚の歯を挽きだす。現存長8.3cm、幅4.9cm、厚さ0.9cm。イスノキ。

縦櫛　199は長方形の板材の両短辺に歯を挽きだし、両長辺中央を弧状に抉り握りとした、縦長の両用の櫛。歯の密度は一方が3cmの幅に15枚、他方が6枚と変えている。握り部分に「三麻毛」と刻字し、墨をうつ。幅7.8cm、厚さ1.1cm、長さ20cm以上に復原できる。モッコク。

丸鞆　帯の装飾。200は板材を半円状に切り出し、裏面に粗く方形の隆起を削り出す。隆起部分に木釘先端が残ることから、皮帯を方形に切りくぼめて隆起部分をはめ込み、帯の裏側から木釘留して装着したと思われる。表面と周縁には墨を塗る。縦長1.7cm、幅2.1cm、厚さ0.5。隆起部分の縦長0.6cm、幅0.9cm。

木製帯飾

鉈尾　帯の先端にとりつける部品。201は先端に帯先がはみださないように顎を作りだす。帯先をあてて帯の裏側から釘留し装着しており、釘留の痕跡が裏面に6ヵ所残る。側縁を若干欠損する。白木。長さ2.6cm、現存幅1.7cm、厚さ0.2cm。帯幅は約2.2cmに復原できる。

留針　先端の尖る棒状品。被りものを髷に留める針と考えられる。202～204は頭部を釘頭状に

作るＡ型式。身部は棒状。202は先端を欠損。現存長6.2cm、頭部径0.7cm、身部径0.4cm。203は頭部がやや長い。長さ7.7cm、頭部径0.7cm、身部径0.6cm。204は頭部を若干欠損する。長さ10.8cm、身部径0.5cm。205～210は身部が偏平なＣⅠ型式。205・206は頭部が直線的なもの。205は板材の片面のみを削り整形。長さ12.1cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm。206は長さ13.5cm、幅0.8cm、厚さ0.2cm。207～210は頭部を圭頭状にする。207は長さ16.0cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm。208は長さ17.6cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm。209は長さ18.9cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm。210は全体が湾曲する。長さ20.2cm、幅0.8cm、厚さ0.5cm。211は両端を尖らすＤ型式。身は偏平。長さ20.4cm、幅0.9cm、厚さ0.6cm。212～214は身が棒状のＣⅡ型式。いずれも加工は粗く、身が角棒状。212は若干湾曲する。長さ13.2cm、幅0.9cm。213は頭部がややふくらむ。長さ19.5cm、幅1.2cm。214は長さ20.2cm、幅0.8cm。

vi　祭祀具（Pl.196～198, Ph.261－215～283）

正面全身人形　薄板を切りぬき人の正面全身を表したもの。手を表現したＡ型式と、手の表現を欠くＢ型式がある。切欠きを両側縁にいれ頭と肩を画するが、切欠きには二等辺三角形状のⅠと、上側を長くし顔の下半部をやせさせるⅡがある。SD5100出土品は全てⅠに含まれる。足の作りには木口からＶ字形に切り込みをいれるａと、切れ目を２本入れ間をおり取るコ字形のｂがある。215～221は浅い縦の切り込みで手を作り出す。215・216はＡⅠｂ型式。215は頭部が台形。両手と片足の端部を欠損する。長さ17.1cm、幅3.5cm、厚さ0.5cm。216は頭部が台形。両手を欠損。顔を墨描きする。長さ17.8cm、幅2.2cm、厚さ0.2cm。217・219は作りと規模が類似し、出土地区も同じで、同一人物の製作の可能性がある。いずれも頭部が三角形に近く、目、鼻、口を墨描きし、頭頂部は両面に髪を墨描きする。218は首の部分の切欠きが、二等辺三角形ではなく下側が長いが、Ⅱとも異なるのでⅠに含める。手の下を弧状に切り取り腰を表現する。217は両足を欠損する。現存長22.7cm、幅4.9cm、厚さ0.7cm。219は手の先端を若干欠損するが、ほぼ完形。長さ33.3cm、幅5.0cm、厚さ0.4cm。218・220はＡⅠａ型式。218は頭部が弧状。顔を墨描きする。手の切り込みの下の腰の部分にも切り込みを入れる。両手と片足を欠損。長さ20.2cm、幅2.7cm、厚さ0.4cm。黒色砂層出土。220は両面とも割り面が残る。頭部は三角形。片足を欠損。長さ26.7cm、幅2.5cm、厚さ0.4cm。221はＡⅠｂ型式。顔の他に腹部と両足に墨描きがある。ほぼ完形。長さ13.8cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm。222・223は斜めに三角形に切り込み手を作り出す。222は首の部分の切欠きは下側の切り込み角度が急で上側がやや長いが、Ⅱほど顔がやせず、ＡⅠａ式に含める。両足を欠損する。現存長15.0cm、幅3.3cm、厚さ0.2cm。223は木口から縦に切り込み、さらに斜めに切り込んで手を作り出す。ＡⅠａ型式。頭部は台形。両面の全身に墨描きがある。両足を欠損する。現存長8.3cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm。224は手の部分が２回切り込まれる。頭部は低い三角形。ＡⅠｂ型式。両手の先端と両足を欠損する。現存長6.4cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm。225は手の表現を持たないＢⅠａ型式。腰の部分にも切り込みを施す。両足を欠損する。現存長14.7cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm。226・227は頭部のみ残存する。ともに顔を墨描きする。Ⅰ型式。226は現存長7.3cm、幅2.7cm、厚さ0.1cm。227は裏面も髪を墨描きする。現存長6.2cm、幅3.4cm、厚さ0.2cm。

２枚１組の人形

側面人形　板材を人間の側面形に切り抜いたもの。228は顔と胴体の部分を切り抜く。頭部に

は被りものを表現し、目と口の刻みを入れる。腕と脚の部分を取り付ける穿孔はない。長さ11.3cm、幅2.4cm、厚さ0.3cm。

立体人形　229は棒状品の先端に目、鼻、口の刻みを入れ、後頭部下に切欠きを施し首を表現する。脚側は欠損し不明であるが、手の表現はない。現存長14.7cm、幅0.8cm、厚さ1.1cm。

鳥形　板材を切り抜いて鳥の側面を表現したもの。230～232は翼をたたみ尾羽を下に下げた鳥が枝などにとまった状態を表現したもの。230はくちばし部と尾の端部を欠損する。現存長9.2cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm。231は頭部のみを表現したものか。長さ5.5cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm。232は猛禽類を表現する。くちばし先端を欠損。長さ7.0cm、幅2.0cm、厚さ0.2cm。233～238は鳥が飛ぶ姿を表現したものか。233は長さ4.6cm、幅1.0cm、厚さ0.6cm。234は水面上を移動する水鳥の表現の可能性もある。長さ7.0cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm。235は背部に小さなV字形の切り欠きがある。長さ9.7cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm。236は頭部のみ残存。現存長5.6cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm。237は全体に割り面が残り、加工が粗い。長さ5.8cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm。238は頸の長い水鳥を表現したもの。胴部は欠損。現存長7.2cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm。239・240は水面上の水鳥を表現したものか。239は枝などにとまった状態の可能性もある。腹部に細棒を挿入している。長さ4.7cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm。240は頭部を欠損する。現存長8.3cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm。

立体鳥形　241は材を彫刻し鳥を立体的に表現する。たたんだ羽を両側面に刻み、墨で数本の線を描く。胴部全体を墨塗り、その後部分的に削る。胸部は削りで斑点を表す。尾の端部には縦に溝を刻む。頭部を欠損する。長さ8.8cm、縦幅3.2cm、横幅2.4cm。

馬形　板材を切り抜き馬を表現したもの。242は胴部のみ残存。加工は粗い。現存長6.9cm、幅1.6cm、厚さ0.2cm。243は長さ7.1cm、幅0.9cm、厚さ0.2cm。244は頭部と胴下半部を欠損。若干鞍の表現が残る。鞍の部分に縦の穿孔がある。現存長9.1cm、幅2.1cm、厚さ0.7cm。

牛　車　形

牛形　245は割り材を削り牛の形に作る。別に作った尾と四肢を装着するためのほぞ孔がある。頭部、背面、腹部の一部を欠損する。現存長17.2cm、幅6.6cm、厚さ2.7cm。

車輪形　246は板材を円盤状に切り取り車輪の輻を墨描きする。4ヵ所に小孔を、中央に車軸孔をあける。牛車形の一部であった可能性もある。一部欠損する。径7.6cm、厚さ0.5cm。

舟形　247～249は割り材に船槽をくり抜き舟の形に削りだしたもの。247は船首、船尾ともに尖頭状で、船底の3ヵ所に1列に並んだ小孔がある。長さ17.1cm、幅3.3cm、厚さ1.0cm。248は船首が三角形、船尾が方形で、船底は平である。構造船を表したものと思われる。船底に14個の小孔をあける。長さ16.5cm、幅3.6cm、厚さ1.4cm。249は両端が尖頭状。片端に縦の穿孔がある。長さ10.4cm、幅1.8cm、厚さ1.1cm。250は船槽のくり抜きがないが、全体を舟の形に削る。船底は平。長さ7.1cm、幅1.4cm、厚さ1.0cm。

陽物形　251は棒状の材を削り、男性性器をかたどる。亀頭部に斜めに溝を削る。長さ17.3cm、径4.5×4.1cm。

農　具　の
ミニチュア

鋤形　252は板材に柄受け棒を削り出し、中央に斜めの柄孔をあけて組み合わせ鋤の身をかたどる。身の先端は斜めに面取りする。長さ4.4cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm。

鑿形　253は平たい身部と棒状の茎を持つ。茎端を若干欠損する。工具の鑿に類似する。長さ9.5cm、幅0.8cm、厚さ0.3cm。

刀子形　棒状の材や板材を加工し、刀子をかたどったもの。254～257は柄が表現されている。254は細い板材を用い、刀身部を削り出す。柄頭は粗く面取り。長さ13.0cm、幅1.2cm、厚さ0.7cm。255・256は棒状の材を削る。柄頭はともに面取りする。255は長さ14.3cm、幅1.0cm、厚さ0.8cm。256は長さ20.5cm、幅1.0cm、厚さ0.8cm。257は細い板材を用いる。鞘と柄の間に段をつける。長さ12.4cm、幅1.1cm、厚さ0.6cm。258は薄い板材を刀子の形に切り取ったもの。柄を装着しない本体のみを表現している。長さ17.8cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm。

刀形　棒状の材や板材を加工しを刀をかたどったもの。柄の部分を表現したA型式と、刀身と茎を表現したB型式がある。刀身が比較的長いもの、先端が三角形のかます切先のものを刀子と区別し刀形とした。259は刀身のみが残る。切先のみ削り、他は割り面を残す。現存長14.5cm、幅1.7cm、厚さ0.6cm。260はA型式。板材を切り抜いたもので、柄頭がふくらむ。切先を欠損する。現存長11.7cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm。261～263はB型式。全てかます切先。261は細い板材に刀身を削りだす。茎と刀身の間に明瞭な段（関）を作らない。茎端を欠損する。現存長15.9cm、幅1.2cm、厚さ0.6cm。262は角棒の周縁を削り刀形にする。茎と刀身の間に明瞭な関は作らない。長さ25.8cm、幅1.5cm、厚さ0.8cm。263は薄板をきりとったもの。刃・背両側に明瞭な関を持つ。長さ18.8cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm。

鏃形　薄板を切り取り、鏃をかたどる。264は木葉状の身部のみ残る。現存長10.4cm、幅2.3cm、厚さ0.4cm。265は長頸鏃をかたどる。先端を焼失。現存長6.0cm、幅0.8cm、厚さ0.2cm。

斎串　薄板の上端を三角形に、下端を剣先状にし、上端近くに左右から切れ込みを入れる。266は切り込みが左右1ヵ所ずつ。下端を欠損する。現存長17.8cm、幅3.7cm、厚さ0.3cm。267は切り込みが左右2ヵ所ずつ。片切り込み部分を若干欠損する。長さ23.1cm、幅2.4cm、厚さ0.2cm。

形代　割り材や板材を用いて、様々な形を作ったもの。本来何を表したものか不明であるが、祭祀用の形代にあてた。268は割り材を削り、全体を波型につくり、一端を面取りして尖らせたもの。長さ3.0cm、幅1.2cm、厚さ1.1cm。269～282は板材を用いる。269は両長側縁に三角形の切欠きを入れ、先端を尖らせる。若干欠損する。長さ13.0cm、幅2.6cm、厚さ0.3cm。270は楕円形の材の一端を尖らせる。長さ5.7cm、幅2.4cm、厚さ0.4cm。271は板材を切り抜いた後、片側縁に横に短く溝を彫り、両面の同位置にも斜めに溝を彫る。長さ7.4cm、幅3.9cm、厚さ0.6cm。272は一端を錐状に作る。長さ5.7cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm。273は板の両側縁に三角形の切欠きを入れ、一端を剣先状、逆端は斜めに落とす。先端を若干欠損。復原長12.9cm、幅4.1cm、厚さ0.4cm。

274～276は端部に1ヵ所穿孔がある。274は細板の一端を剣先状、逆端を圭頭状にし、片側縁に2ヵ所、三角形の切欠きを入れる。長さ16.0cm、幅3.2cm、厚さ0.5cm。275は細板の両側縁に三角形の切欠きをいれる。片端を欠損する。現存長13.9cm、幅2.6cm、厚さ0.2cm。276は一端を剣先状にし、逆端に向け両側縁を切り込み幅を狭める。片側縁に三角形の切欠きを入れる。剣先状の端部を欠損する。現存長11.9cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm。

277は先端を剣先状にし、側縁に三角形の切欠きをいれる。片側縁と片端を欠損する。現存長さ13.3cm、現存幅1.6cm、厚さ0.5cm。278は細板の両側縁に波形の切欠きをいれ、片側縁には三角形の切欠きもいれる。長さ18.0cm、幅2.9cm、厚さ0.3cm。279は雲に似た形状をとる。表側は細かく削るが裏面は粗い加工痕を残す。2ヵ所に穿孔がある。長さ11.9cm、幅4.5

cm、厚さ0.5cm。280は全体がＳ字状に近い。一端を欠損する。現存長8.5cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm。281は板材の一端を両側縁から斜めに切り込み、さらに面取りして尖らせる。長さ5.3cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm。282は細板の両端を斜めに落とし、台形状にする。中央を横切るように丸鑿で浅い溝を彫る。長さ10.7cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm。283は細板の両端を斜めに落とし、片側縁に三角形の切欠きをいれ、両端と片側縁を面取りする。長さ19.6cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm。

vii　文房具・調度（Pl.199～200, Ph.259・260－284～300・320）

筆管　284は丸棒の一端に筆毛をはめる孔をあける。筆毛側の端部近くはやや太い。筆毛孔の部分が欠損により露出し、他方の端部を欠損する。現存長15.1cm、径1.4cm。

算木　285は短い角棒の両木口を除く４面に、順に１、２、３、４本の墨線を引く。長さ3.0cm、幅0.8cm、厚さ0.7cm。286は断面正方形の角棒の４面に１、３、４、２本の刻線を施す。両木口は四角錐に面取りする。長さ2.7cm、幅0.8cm。

題籤軸　巻物の軸。上部は題を記すため板状に作る。287は下端部を欠損。長さ13.1cm、幅1.2cm、厚さ0.7cm。288は側面に割り面を残すなど加工が粗い。長さ25.9cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm。炭層出土。289は薄板を題籤軸の形に切って作る。長さ12.9cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm。

木簡形　板材を利用し各種の木簡と同じ外形を作るが、墨書がないもの。290～294は荷札形木簡と同様の形状をとる。端部近くの両側縁にＶ字形の切欠きを入れる。290・291・293は両端部に切欠きを施す。290は両端部の耳状の部分を欠損する。長さ11.1cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm。291は長さ10.8cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm。292は上端を三角形に作り、切欠きは上端側のみ。「五百」の針書がある。下部側縁を若干欠損。長さ7.9cm、幅1.0cm、厚さ0.5cm。293は両端部の耳状の部分を一部欠損する。長さ9.2cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm。294は片端にのみ切欠きを施す。耳状の部分を欠損する。長さ11.5cm、幅2.4cm、厚さ0.2cm。295は細板を縦に薄く二つに割って使用する封緘形木簡。長さ27.6cm、幅3.3cm、厚さ0.2cm。

はさみ板　296は長方形板の両短辺部分を厚く残して、片面を粗くはつり薄くする。さらに、両端近くの両側面にＶ字形の切欠きを施す。同じ材から同形品をもう１枚作り、２枚１組とする。紐の痕跡が残り、両者を合わせて切欠き部分に紐を巻き固定したと考えられる。隙間に何かを挟み込んでいたと考えられるが、正確な用途は不明。封緘形木簡の一種か。長さ12.8cm、幅3.2cm、厚さ0.8cm。

箱　297～299は刳り抜きの箱。297は角材をくりぬいた箱の身。内面に「井」「田部宿祢」、底面に「政」「樌」、側面に「藍給事」「政」「官」などの墨書が残る。長さ33.3cm、幅6.3cm、高さ2.7cm。298はくりぬきの箱蓋。板材の片面の周縁を削り突出面を作り合わせ蓋とする。片側縁を欠損する。長さ30.2cm、現存幅4.2cm、厚さ1.0cm。

299も同様の作りの蓋。片側の端部付近のみ残存する。現存長16.9cm、幅4.5cm、厚さ0.9cm。スギ。300は組み合わせの箱の部材。「凸」字形の板材を４枚相欠き接ぎにして木釘留めし、方形の箱の側面を作る。底面の装着法は不明。長さ16.8cm、幅5.9cm、厚さ0.9cm。320も同様の作りの箱材。「凸」字形の耳状の部分側縁も若干切り欠く。底板装着のための仕口か。長さ10.9cm、幅4.8cm、厚さ1.0cm。

viii　遊戯具（Pl.200, Ph.260, 265－301～314）

独楽　301は芯持ち材を砲弾形に削り、先端を乳頭状に削り出す。上面は中央をくぼませる。長径5.0cm、高さ5.4cm。ヤブツバキ。

立体形の賽子

賽子　302は材を立方体に削り、錐などの工具先端で若干表面をくぼませた後に墨をうち、目をいれる。目は1と6以外は相対する面の和が7にならない。1辺0.9cm。

琴柱　板材を六角形や台形に切り取り、下方に三角形の切欠きを入れ双脚とし、上底に弦受けの溝を入れる。303～308は六角形材を利用したA型式。303は高さ1.1cm、幅1.7cm、厚さ0.6cm。304は片脚を欠損。高さ1.9cm、推定幅2.5cm、厚さ0.6cm。305は片脚を欠損。作りが薄く、実用品ではなく型板の可能性もある。高さ2.1cm、幅3.2cm、厚さ0.3cm。306は高さ2.4cm、幅3.0cm、厚さ0.5cm。スギ。307は高さ2.8cm、幅3.7cm、厚さ0.6cm。308は高さ3.0cm、幅3.6cm、厚さ0.7cm。309は側縁上方が若干弧を描く。上端を欠損。現存高さ2.0cm、幅2.6cm、厚さ0.4cm。310～312はやや特殊な形状をとる。310は全体が低い台形状で、切欠きも台形。高さ1.3cm、幅3.0cm、厚さ0.6cm。311は全体を高く、外形を曲線的に作り、側縁は弧を描く。約半分を欠損。高さ3.9cm、推定幅2.8cm、厚さ0.5cm。312は上方側縁を波形にする。高さ2.2cm、幅2.7cm、厚さ0.4cm。313・314は台形の材を利用。313は高さ2.5cm、幅4.2cm、厚さ0.4cm。314は片脚を欠損。高さ3.1cm、推定幅4.8cm、厚さ0.6cm。

ix　雑　具（Pl.200－315・316）

火鑽板　315は断面蒲鉾形の棒の平坦面に切欠きを持ち、平坦面に直行する位置に火鑽杵を回転させた火鑽臼が残る。先端部のみ残存する。現存長5.0cm、幅1.2cm、厚さ1.5cm。スギ。

鞘木　316は断面蒲鉾形の鞘木の一部。同形品を2枚合わせ、樹皮を巻いて固定し、木地の表面に直接黒漆塗りし刀の鞘とする。刀身を挿入するためのくりこみは見られず、鞘尾に近い部分と思われる。現存部分端部に鞘木を横断する漆だまりが見られ、鞘尾金具が装着されていた可能性もある。現存長16.4cm、幅2.4cm、厚さ0.5cm。ミズキ。

x　用途不明品（Pl.201, Ph.236－347）

鋸歯状木製品　棒状の材の側縁に切欠きを連続して施し鋸歯状にした製品。鋸歯状部分を摩擦して音を出す「ささら」にあてる説がある。3点とも片側縁のみ鋸歯状にする。317は先端部分のみ残存する。現存長9.5cm、幅0.9cm、厚さ0.7cm。スギ。318は細板の材を用いる。13.1cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm。319は断面三角形の棒状品を用い、両端は面取りして尖らせる。長さ23.7cm、幅1.0cm、厚さ1.0cm。スギ。

柄状品　角材を削り全体の形を作り、片面に断面蒲鉾形の溝を彫る。同形品を対称に作り、合わせて何かの柄としたものか。321は溝が端まで通らない。長さ14.7cm、幅2.4cm、厚さ1.3cm。322は溝が端まで通り、紐で固定するためか両側縁の対応する位置に切欠きをいれる。長さ17.3cm、幅2.8cm、厚さ1.5cm。スギ。

管状品　323～325はウツギの芯持ち材を短く切り、全体を削りで整形し中央を穿孔し管状にしたもの。323は長さ1.9cm、径1.4cm。324は長さ1.6cm、径1.2cm。325は長さ1.0cm、径1.3cm。

326は断面楕円形の材を焼き込みにより穿孔したもの。本来刀子の柄であったものを切って転用したと考えられ、一端は粗い切り取り痕が残る。長さ4.3cm、径1.5cm。

有溝棒　327は角棒の一端をほぞ状に切り出し、約1.5cmの間隔をあけて丸鑿で浅い溝を横に彫る。各溝の中央に釘を打っており、現状は釘の部分から二つに割れ、途中で折れている。ている。全面に生漆をかけている。調度品の部材か。現存長42.7cm、幅1.2cm、現存厚0.9cm。

有抉細板　328は細板の端部を刀の切先状に削り、2.5～2.8cmの間隔をおいて側縁に三角形の切欠きを施すもの。途中で折れている。現存長33.4cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm。

木札　板材を成形し、片端付近の中央１ヵ所に穿孔をほどこしたもの。329～331は両側縁を長方形の切り欠いて、片端に耳状の張り出しを作る。329は端部を台形に作る。長さ5.3cm、幅3.2cm、厚さ0.3cm。330・331は端部を半円状に作る。330は長さ6.9cm、幅3.5cm、厚さ0.5cm。331は長さ6.4cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm。332は全体を匙の身状に作る。長さ4.1cm、幅2.0cm、厚さ0.2cm。333・334は長方形板の隅を落とし、一端を台形に作る。333は長さ3.4cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm。334は長さ2.9cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm。335は一端を半円状に作り、他端に向け厚さと幅を減じる、楔状の作り。側縁を若干欠損する。長さ7.8cm、現存幅2.5cm、厚さ0.6cm。

不明品　その他の不明品を一括して述べる。336は板材を削り両端をへら状にし、両側縁中央に小さく切欠きを入れる。両端を若干欠損する。現存長8.0cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm。337は角棒の端部付近の３側面に各々１、２、３本の溝を彫ったもの。現存長4.8cm、幅0.8cm、厚さ0.4cm。338は割り材を削り環状に作る。把手の一部か。幅0.9cm、厚さ1.1cm。断面は蒲鉾形。339は棒状の材を削り、１ヵ所に穿孔したもの。両端は面取りしている。側縁に１ヵ所、縦に切り込みを入れる。長さ10.8cm、幅0.6cm、厚さ1.0cm。340は細板の一端を尖らせ、１ヵ所を方形に穿孔したもの。先端を若干欠損する。現存長11.6cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm。341・342は棒状品の一端をＶ字形に切り欠いたもの。341は断面五角形の棒材を用い、片端は斜めに落としている。長さ11.5cm、幅1.3cm、厚さ1.1cm。342は側縁に１ヵ所横に浅く彫られた溝を持つ。長さ8.7cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm。

343～346は小型の材を加工したもの。343は棒状の材を用い、中央に粗い削りにより溝をめぐらす。端部に１ヵ所横に刻みを入れる。長さ4.9cm、径0.7×0.6cm。344は小さい長方形の板材の両端の両側縁に三角形の切欠きを施す。切欠きには紐をかけたと思われる痕跡が残る。長さ3.4cm、幅0.7cm、厚さ0.4cm。345は割り材を粗く削り側縁に台形と三角形の切欠きをいれる。長さ3.3cm、幅1.3cm、厚さ0.8cm。346は板材の両端を薄くし楔状にし側縁中央にに切欠きを施す。長さ3.6cm、幅0.6cm、厚さ0.3cm。347は直方体の割り材を削り、一端を円錐状にする。木印の未製品か。長さ6.7cm、幅1.9cm、厚さ1.8cm。

xi　建築模型部材（Pl.201，Ph.265－348）

面取りの巻斗

巻斗　348は平面形が正方形の材の上面に面取りが１/４の断面台形の溝を切欠き、面取りした桁か肘木を受ける含みとし、４側面の下部を削りこみ斗繰を作る。４隅には１/９の面を取る。下面に円形のほぞ孔をあける。敷面中央に釘孔があり、上に載る肘木か桁とこの斗を釘留めしていたたらしい。十分の一の模型の部材であろう。長さと幅2.7cm、高さ2.1cm、敷面高さ1.7cm、斗繰の成（せい）（刳りの高さ）0.8cm。ほぞ孔径0.9cm、ほぞ孔の深さ0.8cm。

xii　部　材（Pl.201～204，Ph.262・263－349～407）

台座　349・350は中央に支柱を立てる台座と考えられるもの。349は割り材を削り、四角錘の上端を切り取った形に面取りし、上面中央に焼き込みにより円形のほぞ孔をあける。半分以上を欠損する。現存高さ2.6cm、幅7.3cm。350は材を粗く削り円盤状にし、中央に方形のほぞ孔をあける。底面中央が若干窪む。二つに割れたものを鉄釘で合釘接し用いる。径20.3×19.5cm、厚さ2.5cm。351は板材の側縁中央を方形に切り欠いて合い欠きの仕口とし、他側の側縁は内湾させる。同形で仕口を反対に設けた材と十字に組み合わせ台座としたらしい。長さ7.5cm、幅3.2cm、厚さ1.1cm。

支脚　352は上面を窪ませ両側縁に刳形を施す。形状は床脚に類似するが、上面が凹面である点が一般的な床脚とは異なる。なお、SD5100から二条大路をはさんで北側の溝SD5300より、同形・同規模の型板が出土しており、この製品に用いられた可能性が高い。下半部を欠損する。現存高さ3.9cm、幅9.7cm、厚さ1.0cm。352～358は一方の木口面にほぞを作りだしたもの。机などの支脚。353は、円形のほぞ孔があく。下端を欠損する。現存長7.4cm、幅1.3cm、厚さ0.7cm。354は小型品。角棒を削り、下端は面取りする。長さ3.3cm、幅0.8cm、厚さ0.7cm。355は長方形の材にほぞを作り出し、半円形の刳形を施す。ほぞの部分に釘孔があく。長さ7.1cm、幅3.6cm、厚さ1.0cm。356は長さ17.1cm、幅2.5cm、厚さ1.8cm。スギ。357は割り材を用いる。ほぞ上面に楔を打ち込んだ痕跡がある。長さ8.5cm、幅5.0cm、厚さ3.3cm。358は板材の一端を両側から方形に切欠きほぞを作り出す。長さ12.5cm、幅4.9cm、厚さ1.4cm。359は断面楕円形の棒材を用いる。下端を欠損する。現存長13.3cm、径4.0×3.0cm。アカガシ亜属。360は棒材を削り、下半部を断面六角形、上端を断面方形にする。この部分をほぞ孔に挿入したと考えられる。上端近くに桟を通す長方形のほぞ孔をあける。長さ19.8cm、幅2.8cm、厚さ1.9cm。

型板と製品

脚横桟　机などの支脚の間に補強のために取り付けた横桟。両端にほぞを作り出す。ともにほぞ孔を持つ両開きの脚に取り付けたもの・貫通したほぞの先に端栓を差し込み固定する。361はほぞに脚の痕跡が残る。中央に方形のほぞ孔をあけ、ここに別の桟を直行させて差し込み補強している。ほぞを若干欠損する。長さ37.0cm、幅3.5cm、厚さ1.2cm。362は下部を弧状に刳る。長さ30.1cm、幅6.5cm、厚さ1.1cm。

脚座　363は机などの天板と支脚の間にはさむ部材。長方形の板材の両端に方形のほぞ孔をあける。長さ33.8cm、幅8.9cm、厚さ2.3cm。

不明部材　本来の製品が不明な部材を一括した。364～369は細板状の材に穿孔したもの。364は端部にV字形の切欠きを3ヵ所施し、溝2本を彫る。穿孔は2ヵ箇所。長さ28.1cm、幅2.6cm、厚さ1.0cm。365は片端の幅を若干狭く作る。穿孔は狭い側の端部近くに1ヵ所。長さ30.1cm、幅2.1cm、厚さ1.2cm。366は断面蒲鉾状の棒材の片端を切欠き薄くしてほぞを作り、そこに2ヵ所穿孔する。ほぞの端に浅く溝を彫る。逆端近くをさらに1ヵ所穿孔する。長さ35.4cm、幅1.6cm、厚さ1.1cm。367は断面蒲鉾状の細板に2孔1組の穿孔を間隔をおいて施す。途中から折れている。現存長34.3cm、幅2.2cm、厚さ0.9cm。368は先端を尖らせた断面蒲鉾状の細板に、縦に2孔1組の穿孔を間隔をおいて施す。現存長52.5cm、幅3.4cm、厚さ1.8cm。369は板材の中央に相欠きの仕口を作り、そこに方形孔をあける。同形の部材と十字に組み、

中央に別材を通したと思われる。長さ30.4cm、幅6.6cm、厚さ2.1cm。370は細板の一端を方形に切欠き、3ヵ所に貫通孔と1ヵ所に未通孔を開ける。長さ11.1cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm。炭層出土。371は断面蒲鉾状の細板の一端を薄くしほぞ状にし、両端付近に1ヵ所ずつ穿孔する。長さ11.6cm、幅1.6cm、厚さ0.9cm。372は丸棒に切欠きを施し、端部付近に穿孔したもの。切欠き部分で折れている。現存長10.1cm、径1.3cm。373は方形板の中央と4隅を穿孔する。長さ6.3cm、幅5.4cm、厚さ0.6cm。スギ。375は小判形の板材に側縁にそって8ヵ所の穿孔を行ったものと思われる。下端部を欠損する。現存長11.1cm、幅4.6cm、厚さ0.5cm。375は割り材を蒲鉾状に削り、底部を若干刳って、周囲に溝をほる。長さ2.3cm、幅1.8cm、高さ1.5cm。スギ。376は円柱状の材の一端を面取りし円錐状にし、逆側の端部付近に半球状の切欠きを施す。長さ9.3cm、径3.0cm。377は短く偏平な材に切欠きを施し、一端は両面から斜めに切り込む。長さ5.8cm、幅2.1cm、厚さ1.4cm、モミ属。378は棒材の端部付近をを切欠き、2ヵ所を穿孔する。一方の端部は粗く切り込みを入れた後折りっとてあり、二次的な加工の可能性がある。長さ17.3cm、幅1.8cm、厚さ0.8cm。379・380は端部に切欠きのある棒状の部材。いずれも一方の端部のみ残存。379は現存長16.1cm、幅2.0cm、厚さ1.2cm。380は途中から焼失している。現存長24.7cm、径1.3cm。381・382は側縁に斜めに切欠きが入る。381は全体が鰹節状を呈し、両端を小さくV字状に切り欠く。長さ5.0cm、幅1.2cm、厚さ0.8cm。382は板材を用い、一端を若干欠損する。長さ22.7cm、幅3.5cm、厚さ1.2cm。383～386は棒材の端部を鋲頭状に作り出したもの。383は大きく縦に割れ、片端のみ残る。現存長20.4cm、径1.0cm。384も片端のみ残存。現存長15.5cm、径3.0cm。385・386は両端を鋲頭状にする。385は長さ12.8cm、径1.0cm。386は長さ16.5cm、径2.2cm。387は棒材の端部を薄くほぞ状に作り、その両側面に切欠きを入れる。片端のみ残存。現存長18.0cm、幅1.6cm、厚さ1.1cm。388は棒材を若干屈曲させ、端部付近に溝を彫る。片端のみ残存。現存長33.6cm、幅2.1cm、厚さ1.4cm。389は角棒の一方の端部を方形板状に幅が広がる。現存長36.3cm、幅5.4cm、厚さ2.8cm。

390は板材の両端付近に2ヵ所斜めのほぞ孔をあける。小型の台などの脚座か。長さ13.2cm、幅5.2cm、厚さ1.5cm。391は細長い長方形の板材の端部に2ヵ所、方形のほぞ孔をあける。一方の端部付近のみ残存。現存長20.4cm、幅3.5cm、厚さ1.1cm。392は角棒の端部付近にほぞ孔をあけ、別材のほぞを挿入し横から木釘留めする。その他に3ヵ所木釘を打った痕跡がある。途中で粗く切り取られている。現存長18.4cm、幅1.9cm、厚さ1.4cm。393は断面八角形の棒材を途中まで角棒に削りなおしている。角棒部分は途中から折れている。現存の端部付近には「王」字状の刻みがある。ほぞを削り出す途中か再利用品であろう。現存長16.6cm、径1.5cm。スギ。394～401はほぞを端部に作り出す。394は細板の端部の片隅を方形に切欠きほぞを作る。現存長14.8cm、幅1.1cm、厚さ0.6cm。395は角材の端部の片隅を切欠きほぞを作る。二次的に途中で切り取った痕跡がある。現存長12.4cm、幅1.5cm。396は断面蒲鉾状の材の端部にほぞを削り出す。途中から折れている。現存長12.3cm、幅13.3cm、厚さ1.4cm。397は角棒の端部を斜めに切欠きほぞを作り出す。長さ9.6cm、幅1.9cm、厚さ1.4cm。398は角棒の端部付近を薄くしほぞを作り出し、そこに浅く溝を彫る。他端は斜めに切り落とし楔状にする。長側6.3cm、幅1.2cm、厚さ0.8cm。399・400は両端にほぞを作り出す。399は細板の両端3面を削りほぞを作る。長さ11.5cm、幅2.2cm、厚さ0.9cm。黒灰粘土層出土。400は細板材の両端の隅を切欠き薄

くしてほぞを作る。長さ18.8cm、幅3.6cm、厚さ1.6cm。401はほぞの先端にU字形の切欠きを入れる。途中から粗く切り落としている。現存長10.4cm、幅1.7cm、厚さ1.0cm。402～407は相欠き・蟻接ぎの仕口をもつもの。402は角材の端部付近を方形に切り欠く。途中で斜めに切りおとしてある。現存長12.3cm、幅部1.1cm、厚さ0.8cm。スギ。403は角材に相欠きの仕口を施し、そこに円形孔をあける。孔の部分で折れている。現存長3.7cm、幅1.6cm、厚さ1.2cm。404は粗く加工した材の中央に2本の浅い溝を彫る。長さ18.0cm、幅2.8cm、厚さ2.0cm。アカガシ亜属。405は丸棒に断面台形の溝を彫り、蟻接ぎの仕口を施す。両端を欠損する。現存長22.6cm、径1.0cm。406は角棒に切欠きを施し、そこに円形孔をあける。両端は四面を斜めに切欠き折り取っている。長さ22.7cm、幅1.3cm、厚さ1.1cm。407は相欠きの仕口を2ヵ所に施した材を4本組み合わせ、長方形の枠を作り、組み合わせ部分に孔をあけ角棒を通す。大小の部材各1本ずつ残る。大は長さ28.2cm、幅1.6cm、厚さ1.5cm。小は長さ20.5cm。幅1.5cm、厚さ1.3cm。角棒は0.3cm角。

xiii　その他（Pl.205～208，Ph.263・264－408～499）

鋲状木製品　408は直方体の材を削り、立方体の部分と剣先状のほぞを作る。立方体部分は約半分を欠損する。長さ3.3cm、幅1.8cm。409は角材を削り、上端を4角錘状に面取り、側面に溝を2本めぐらし、下部に釘状の身を削り出す。飾り鋲の一種か。炭層出土。長さ3.4cm、幅1.6cm。棒状部品　410・411は棒材の一端にほぞを削りだしたもの。410はもう一方の端を斜めに面取りしている。長さ11.6cm、幅1.3cm、厚さ0.9cm。411は先端を尖らせている。ほぞの端部を欠損する。現存長20.4cm、径0.8cm。何かの部品か。

半球状木製品　412は割り材を半球状に削り、平坦面に方形孔をあける。釘頭などにかぶせる飾りの一種か。約3/1を欠損する。径5.4cm、高さ1.8cm。

不明品　その他の不明品を一括する。413は全体が弓形を呈する。一端を欠損する。現存長6.6cm、幅0.7cm、厚さ0.6cm。414・415は薄板を切り抜いたもの。型板か。414は墨線が残る。長さ9.9cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm。415は側縁を若干欠損。長さ11.2cm、幅2.7cm、厚さ0.3cm。416も板材を切り抜いたもの。片長側縁に刳りがあり、一端は弧状に作る。端部を若干欠損。現存長10.0cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm。417は未貫通の円形孔を持つ材。長さ12.3cm、幅5.2cm、厚さ2.9cm。418・419は割り材を削った同形品。同地区から多数出土した。418には何かに挿入した痕跡がある。ともに長さ5.1cm、幅0.9cm、厚さ0.7cm。420は円柱状の材の一端を面取りし尖らせる。長さ9.3cm、径2.9cm。421は長方形の材の2隅を弧状に刳りこむ。台脚か。長さ5.7cm、幅2.8cm、厚さ0.9cm。422は方形の材の1隅を落としたもの。長さ7.4cm、幅7.2cm、厚さ1.5cm。423は棒材の端部を鍵状に突出させる。長さ26.9cm、幅1.5cm、厚さ1.3cm。424～433は全面削りで整形されている材。424・425は同形品が同地区でまとまって出土。424は長さ3.0cm、幅1.7cm、厚さ0.7cm。425は長さ2.9cm、幅1.7cm、厚さ0.8cm。426は墨線の残る角材。長さ12.6cm、幅1.9cm、厚さ1.3cm。スギ。427は長方形の板材。長さ13.3cm、幅3.2cm、厚さ0.5cm。428は一端が、山形に面取りされる。長さ16.7cm、幅5.4cm、厚さ3.5cm。429は長方形板。長さ6.9cm、幅4.7cm、厚さ0.5cm。430は短い柱状の材の片端を削りで若干細くする長さ6.2cm、幅3.2cm、厚さ2.6cm。431は直方体の材の1面の周縁を細く斜めに面取

りしている。長さ3.9cm、幅3.0cm、高さ1.2cm。イスノキ。432は角材の一端を細く削り、他端は山形に面取りする。長さ24.7cm、幅3.9cm、厚さ2.2cm。433は細長い長方板材。長さ36.7cm、幅4.2cm、厚さ0.9cm。

細板　用途は不明であるが全面加工している板材を一括した。計測値はTab.36にまとめている。434～439は端部を真っ直ぐに仕上げる。434はスギ。435は一端を若干圭頭状に作る。スギ。437は両端が若干弧状を呈する。439は一端が若干圭頭状を呈する。440～459は端部を剣先状に尖らせている。440は両端が圭頭状。スギ。441は一端が圭頭状。先端を欠損する。442・443も両端が圭頭状。445・446は一端を斜めに切り落とす。445は暗灰粘土層出土。447～453は一端を真っ直ぐに作る。454・455は上端が広がるもの。456は上端が内湾する。457は先端を棒状に削る。458・459は先端がへら状。

棒　完形品を一括した。用途は不明。断面形は円形、方形、偏円形、多角形のものがある。端部は尖らない。計測値・断面形はTab.37にまとめている。465は一端を圭頭状に面取りした角棒。469は両端を斜めに面取りする。471は一端を面取りする。472～475はスギ材を削った長さ7cm前後の角棒。473は一端に斜めの面取りがある。474は折り取り痕が残る。

尖端棒　端部を削り細く尖らせた棒を一括した。計測値や断面形はTab.37にまとめている。端部がへら状や刀子状のものも含む。断面形は、円、偏円形、方形、多角形のものがある。477は上端を凹字状に面取りする。478は丸棒の端部を2方向から斜めに削る。479は端部が刀子状の角棒。481は端部を斜めに切り落とす。483は端部が刀子状。484・485は端部がへら状。487は断面上端を放射状に面取りする。490は断面八角形で端部はへら状。上端は欠損する。

大型品　用途不明の大型品を一括した。491・492は円形板の破片。大型曲物の底板に類似するが、側板の装着痕跡が無く、2孔1組の穿孔を3ヵ所に施しており、底板では無い。491は現存長40.4cm、現存幅9.6cm、厚さ0.9cm。492は現存長38.2cm、現存幅4.9cm、厚さ0.6cm。493は先端が二股に分かれる棒状品。逆側の端部はへこみ、ほぞ孔に挿入した痕跡のようにもみえる。台に装着したとすれば、紡織具の一種で繊維の束を掛けておく棉(たたり)などの可能性もあ

番　号	長さ	幅	厚さ
434	25.6	1.2	0.5
435	22.9	1.3	0.3
436	22.5	1.9	0.4
437	20.1	1.4	0.5
438	18.9	1.6	0.4
439	17	1.7	0.4
440	27	2.2	0.2
441	17.5	2.9	0.3
442	10.1	1.9	0.5
443	10.2	1.8	0.5
444	*12.7	2.2	0.1
445	9.9	1.9	0.3
446	20.3	2.6	0.6
447	10.5	1.8	0.2
448	8.1	1.9	0.5
449	20.7	2.1	0.3
450	23.7	1.6	0.6
451	24.9	5.4	1.1
452	18.2	3.6	0.6
453	10.1	2.9	0.2
454	9.2	2.5	0.3
455	16	2.1	0.3
456	15.5	1.6	0.4
457	8.3	1.2	0.5
458	13.8	1	0.2
459	22.4	1.3	0.4

＊＝現存長　　（単位＝cm）

Tab.36　SD5100出土
細板計測表

番　号	長さ	幅・径	厚さ(cm)	断面形
460	31.9	2	1.2	偏円
461	29.3	1.3		円
462	23.4	0.9	0.7	方
463	23.5	0.5		八角
464	22.7	1.1	0.7	偏円
465	21.3	0.8	0.6	方
466	20.9	0.6	0.4	方
467	21.3	0.6		六角
468	20.1	1.2	0.9	偏円
469	16.9	0.7	0.4	方
470	15	1		円
471	9.1	0.7		六角
472	8.3	0.7	0.6	方
473	6.9	0.8	0.7	方
474	7.5	0.7	0.6	方
475	7.5	0.8	0.7	方
476	8.4	0.8	0.6	台
477	8.8	0.9	0.6	ひし
478	13.1	1.2		円
479	16.1	0.7	0.6	方
480	18.3	0.8	0.4	偏円
481	18.7	0.7	0.5	方
482	19.3	1.2		円
483	19.9	0.9	0.4	六角
484	19	1.2		円
485	21.2	0.5	1	七角
486	27.2	1		偏円
487	29.6	1.8		八角
488	31.9	0.7	0.6	方
489	33.8	0.8		七角
490	34.4	1.1		八角表

（単位＝cm）

Tab.37　SD5100出土棒・
尖端棒計測表

る。ただし、二股部の加工は、ささくれ気味で楯とするには粗すぎるようにも見える。長さ61.6cm、幅5.0cm、厚さ2.4cm。494は断面円形の棒状品の一端に段をつけ断面隅丸方形にし、さらに先端を尖らせたもの。長さ56.1cm、径2.3cm。495は一端を四方から斜めに面取りした棒状品。長さ48.7cm、径1.7cm。496は断面方形の棒材の一端を斜めに面取りしたもの。端部付近の1面に2本の溝を刻む。長さ41.8cm、幅2.9cm、厚さ2.2cm。497は断面偏円形の棒状の材の一端にほぞを削り出す。他端は欠損。現存長64.6cm、幅5.7cm、厚さ2.0cm。

巻胎漆器　**特殊漆器**　498はカヤを削った幅約0.2cmの細い角棒材を同心円状に巻いて器胎とし、布着せして黒漆をかけたもの。径約70cmの円形の外縁部と思われる。SD5100とSD5300から同一個体と思われる破片が9片出土し、うち7片は接合できる。漆の塗りは外側が薄い。厚さ0.5cm。

墨画板　499は墨画の描かれた薄い細板。何かに転用されたらしく、絵の途中から切り取って成形している。一端を丸く切り取り、側縁に1ヵ所V字形の切欠きがある。墨画の内容は不明。「成成」の墨書もある。途中から折れている。現存長22.7cm、幅4.4cm、厚さ0.2cm。

木炭　SD5100からは総量297254gの木炭が出土した。この中から20片を無作為抽出し、樹種を同定した。結果はアカガシ亜属16点、スダジイ1点、ヒノキ3点である。

D　SD5300出土木製品

SD5300からは大量の棒状品を除き、約1000点の木製品が出土している(別表21)。ここではそのうち228点について報告する。埋土は上から、黄褐色粘土混暗灰色粘質土層、炭・砂混暗灰色粘土層、木屑層、黄褐色砂質土混青灰色シルト層の4層に分かれるが、ほとんどが木屑層から出土した。出土層位は、特に記載しない場合は木屑層である。

遺物の分布　SD5100同様に、全体の分布傾向をみるために木製品と木炭の地区別の頻度表を作成した(Fig.70)。それぞれの細かいピークの位置にはずれがあるが、全体としてはJD20付近を境界に2つのまとまりが存在する点は共通している。東側では、JF10～12付近がほぼ共通したピークになる。西側ではJD28・29、つまり西端部に集中度が高い。特に木製品はJD28で高い頻度を示すが、これは半月板がまとまって200点前後出土したためである。

i　工　具(Pl.209, Ph.266－1～16)

刀子柄　1は断面八角形の一木の柄。茎を焼き込み身を装着する。柄元は金具をはめ込むため薄く削り出す。用途は不明だが柄頭にも木口から穿孔。長さ15.6cm、幅1.9cm、厚さ1.5cm。

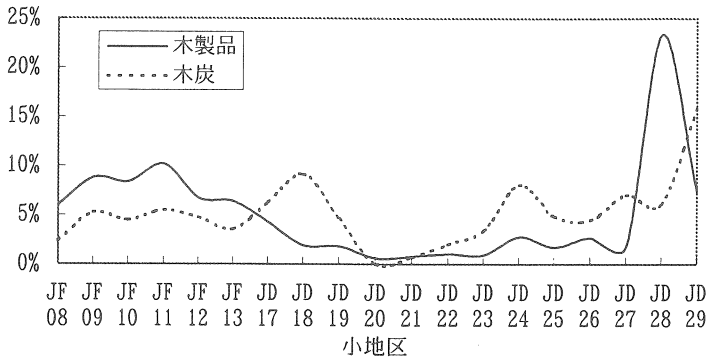


Fig.70　SD5300出土木製品と木炭の地区別出土量

楔　2・3は割り材を粗く加工する。2は長さ12.5cm、幅4.1cm、厚さ1.6cm。スギ。3は長さ4.7cm、幅2.9cm、厚さ1.2cm。ハリキリ。4は芯持ち材を用いる。長さ7.2cm、幅1.8cm、厚さ1.3cm。スギ。

木型　5は斧矢式鏃の型。先端を両面から斜めに面取りする。長さ11.5cm、幅3.2cm、厚さ0.4cm。スギ。6は角釘の型。頭部を若干欠損する。長さ11.2cm、頭部幅、1.1cm、身部幅0.6cm。スギ。

刷毛　7は板材を削り身部と柄を削り出す。身の先端から毛をはさむための割れ目を入れ、両側縁に紐をかけて結縛するために2ヵ所ずつ小さく切欠きを入れる。紐の痕跡が残る。糸を通し毛ずれをふせぐため、身の先端に4ヵ所の小孔をあける。身部先端に漆が若干付着しており、漆刷毛と考えられる。柄頭を若干欠損。現存長21.0cm、幅2.7cm、厚さ0.7cm。8は同形の柄木を2枚に毛をはさみ、紐をかけて留めた合わせの刷毛の片側。両側縁は紐をかけるため2ヵ所ずつ切り欠く。柄頭部を欠損。現存長18.9cm、幅2.7cm、厚さ0.5cm。9も7と同様の一木の刷毛。両側縁の切欠きは1ヵ所ずつ。身部の先端に若干漆が付着する。柄頭を欠損する。現存長14.5cm、幅1.9cm、厚さ0.7cm。スギ。

漆工具　身部に漆が付着し、漆塗りに用いたと思われる匙・ヘラ状品。10は長さ22.3cm、幅1.6cm、厚さ0.8cm。11～13は身部のみ残る。11は現存長6.2cm、幅2.6cm、厚さ0.3cm。12は現存長10.1cm、幅3.0cm、厚さ0.7cm。13は現存長12.6cm、幅5.4cm、厚さ0.3cm。

木釘　棒材を削り成形した釘。14は長さ6.5cm、頭部幅0.8cm、身部径0.3cm。15は釘頭をやや長く作る。長さ8.2cm、頭部幅0.4cm、身部径0.5cm。

横槌　16は芯持ち材から円柱状の身部と柄を削り出す。身は若干中央がへこむ。

ii　紡織具（Pl.209，Ph.266－17～21）

紡輪　円形板の中央を穿孔したもの。17は約半分を欠損する。径2.4cm、厚さ0.7cm。18は周縁を斜めに面取りする。径2.2cm、厚さ0.3cm。スギ。

糸巻横木　19～21は中央に相欠きの仕口を施し、両端を棒状に作る。19は中央が軸通しため穿孔される。両端を若干欠損する。現存長9.8cm、幅2.0cm、厚さ0.9cm。20・21は中央が方形で棒状部分の断面が六角形。糸巻き以外の部材の可能性もある。20は長さ15.4cm、幅1.7cm、厚さ1.0cm。21は棒状部分の元部に段をつけ細くする。長さ15.1cm、幅1.9cm、厚さ1.0cm。

iii　食事具（Pl.210，Ph.266－22～41）

匙形木器　細板を削って作る匙形品。22～25は身が細長いC型式。22は長さ17.8cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm。23は長さ17.4cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm。24は長さ17.8cm、幅2.0cm、厚さ0.7cm。スギ。25は長さ16.9cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm。26・27は身が幅広く先端が弧状のB型式。26は長さ13.1cm、幅2.8cm、厚さ0.4cm。27は柄頭を欠損する。現存長19.8cm、幅3.4cm、厚さ0.4cm。28～30は身の先端が直線的で、斜めに面取りしているA型式。28は長さ13.6cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm。スギ。29は長さ11.2cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm。30は長さ10.2cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm。31・32はC型式。31は非常に薄く、実用品ではないか。長さ11.5cm、幅2.4cm、厚さ0.2cm。32は柄頭部を欠損する。現存長9.7cm、幅2.6cm、厚さ0.5cm。

杓子　身の先端が直線的なA型式と弧状のB型式がある。33～35は身が細長い。33はB型式。

長さ41.3cm、幅2.8cm、厚さ1.2cm。34はB型式。長さ26.6cm、幅5.3cm、厚さ0.7cm。35はA型式。長さ24.3cm、幅3.6cm、厚さ0.8cm。36はB型式。長さ32.2cm、幅11.9cm、厚さ1.0cm。スギ。37はB型式。柄頭を欠損する。現存長33.8cm、幅7.4cm、厚さ2.0cm。38はA型式。長さ33.6cm、幅6.5cm、厚さ1.0cm。39はA型式。柄の部分に粗く方形に穿孔されている。部材を転用したものか。柄頭部を欠損する。現存長24.4cm、幅4.3cm、厚さ1.4cm。40はA型式。身は若干凹状をなす。柄を欠損する。現存長16.2cm、幅7.2cm、厚さ0.9cm。

まな板　41は全面を平滑に削った方形板。二次的に途中から粗く切り落とされている。片面に細かい刃傷が残り、まな板として使用されたものと考える。現存長13.2cm、幅14.3cm、厚さ1.1cm。

iv　容　器（Pl.211・212，Ph.267・268－42～70）

刳物鉢　42は全周の約3分の1が残存する。底面と内面は磨滅が顕著だが、外面は削痕がよく残る。推定径65.4cm、推定高さ12.8cm、厚さ1.7cm。トチノキ。

挽物杯　43は須恵器杯Aと同じ形状をとる。約3/1が残存。器壁に近接して2ヵ所の穿孔がある。横木取り。推定径21.5cm、高さ6.2cm。スギ。

挽物蓋　44は口縁端の内面に段をつける合せ口の蓋。内・外面ともロクロ挽き。外面に薄く漆を塗る。口縁部に半円形のえぐりが施される。縦木取り。全体の約4分の1が残存。推定径8.0cm、推定高さ3.0cm。

挽物皿　45は須恵器皿Bと同じ形状の皿。全面ロクロ挽き。低い高台を削りだす。約半分が残存。推定径35.1cm、高さ4.0cm。46は皿。須恵器の皿Aと同じ形状をとる。全面ロクロ挽き。底面に6ヵ所ロクロの爪跡が残る。推定径29.8cm、高さ1.6cm。ハリキリ。

曲物　47は樺皮結合曲物B。6ヵ所で側板を底板に固定する。側板は2列前上外下内1段後内1段綴じ。側板高が低く、蓋に用いられたものか。底板は柾目材、側板は板目材。径20.0cm、底板厚0.8cm、側板内径18.5cm、側板高さ1.5cm。48～54は釘結合曲物。48は3ヵ所で釘留めした小型品。底板のみ残存。中央に円孔がある。つまみをつけて蓋としたものか。板目材。49は底板中央に2孔があく。蓋か。側板を1列外4段綴じし5ヵ所で釘留めする。側板の内側端部付近のみ0.7cm前後の間隔をおいて縦にケビキが施される。底・側板ともに柾目材。底板径14.7cm、側板厚0.3cm、高さ5.1cm。50は中央に1孔をあける底板。約半分を欠損する。釘留めは現状で3ヵ所にあり、全体で5、6ヵ所であろう。甑あるいは蓋と思われる。柾目材。径17.6cm、厚さ0.8cm。51は側板を2列前上内下外3段後上外下内2段綴じし6ヵ所で底板に釘留めする。側板には縦と斜めのケビキをいれる。底板は柾目材、側板は板目材。底板径15.6、底板厚0.9cm、側板高6.1cm、側板厚0.3cm。52は刻字のある底板。中央付近に「益人」と刀子状の工具で刻む。刻字の周囲に細かい刃傷が残る。釘孔は4ヵ所。柾目板。径18.7cm、厚さ0.8cm。53は底板。釘孔は5ヵ所。柾目材。径16.4cm、厚さ0.6cm。54は2孔1組の穿孔を2ヵ所対称の位置に施した底板。紐を通して蓋としたものか。釘孔は5ヵ所。板目材。径15.4cm、厚さ0.8cm。

把手　55～57は組み合わせの把手。55・56は細板材の側縁を削り、両端付近の幅を狭めたもの。55は両端に釘孔をあける。下端を若干欠損する。長さ31.5cm、幅3.8cm、厚さ1.7cm。スギ。56は両端を若干薄くする。長さ34.3cm、幅1.8cm、厚さ1.1cm。57は角棒状の材を削り、両端を細くする。全体が若干湾曲する。長さ32.8cm、幅1.6cm、厚さ1.5cm。58は槽などの容

器に作りつけた把手。把手部の他、容器の上縁部が若干残る。上縁部にひび割れをとめるために鉄釘を打っている。把手長6.7cm、幅3.6cm、厚さ2.8cm。

蓋板　板材を削った蓋板。59～66は小型の円形蓋。59・60は柾目材。59は１ヵ所切欠きがある。径7.5cm、厚さ0.4cm。スギ。60は径6.3cm、厚さ0.7cm。スギ。61～65は板目材。61は径6.0cm、厚さ0.6cm。スギ。62は中央に木片を打ち込みつまみとする。径5.0cm、厚さ0.5cm。スギ。63は径6.0cm、厚さ0.7cm。64は径6.2cm、厚さ0.3cm。スギ。65は非常に薄い作り。約３/１を欠損する。径4.3cm、厚さ0.2cm。66～68は柾目材の蓋。66は円の両端を真っ直ぐに切り落とした形。側縁を若干欠損する。長さ16.6cm、現存幅15.5cm、厚さ0.8cm。67は中央に円孔をあける円形の蓋。つまみを付けたものか。約半分を欠損する。径18.2cm、厚さ1.2cm。モミ属。68は楕円形の蓋。径20.4×19.6cm、厚さ1.0cm。69・70は板目材。69は径19.7cm、厚さ0.7cm。70は周縁を斜めに面取りする。周縁の約１/４を欠損する。径18.8cm、厚さ1.0cm。

Ⅴ　服飾具（Pl.212，Ph.265･269－71～92）

檜扇　檜の薄板を骨として用いた扇。全て要は１孔。71はほぼ同規模の骨が６枚残る。片側縁に３ヵ所の切欠きを設けるものと、切欠きのないものがある。上端は全て弧状になると思われる。切欠きのある例は完形に近いもので長さ19.9cm、幅2.7cm、厚さ0.1cm。切欠きのないものは長さ20.0cm、幅2.2cm、厚さ0.1cm。72は同形の骨が2枚残る。両側縁をＳ字状に切り取り、中央上端よりに綴じ合わせ孔を２つあける。１枚に墨描きが残る。上下端を欠損する。大型の破片で現存長19.0cm、幅3.0cm、厚さ0.2cm。73は同形の骨が２枚残る。片側縁を弧状に切り取り、要部が丸く仕上がり、片側１ヵ所に切欠きがある。中央上寄りに綴じ合わせ孔が２ヵ所あく。上端は斜めに切り取る。長さ19.6cm、幅2.4cm、厚さ0.1cm。74は同形の骨が６枚残る。要端は丸く仕上げ、片側縁に切欠きを３ヵ所施す。切欠きの上から斜めに切り込む。綴じ合わせ孔は２孔。全て上部を欠損する。最大の破片で長さ13.7cm、幅2.3cm、厚さ0.1cm。75は上端が圭頭状、下端は直線的に仕上げる。要のやや上寄りに１孔があく。長さ15.8cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm。76は下端を直線的に仕上げる。上端と側縁を若干焼失する。現存長25.3cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm。

木製帯飾

丸鞆　帯の装飾。77は表・側面を墨塗りする。裏面に装着のための釘孔が１ヵ所ある。下端を若干欠損する。縦長1.6cm、幅2.1cm、厚さ0.55cm。78は樹皮を切り抜いたもので、裏側に装着痕はない。樹種不明。縦長2.1cm、幅2.5cm、厚さ0.4cm。

鉈尾　帯先の部品。79は表面と側面を墨塗りし、裏側には装着のための釘孔が２ヵ所あり、１孔は表面まで貫通する。長さ3.1cm、幅2.4cm、厚さ0.5cm。80・81は裏側の先端を厚くし有段に作る。表・側面に炭酸カルシウム膜が付着。蛍光Ｘ線分析により、表面から銅イオンが検出され、銅由来の顔料を塗布した可能性がある。木釘留めの痕跡が１ヵ所残る。長さ2.7cm、幅2.4cm、厚さ0.7cm。81は白木。裏側の段の部分中央を半円状に削りこむ。穿孔はない。長さ2.6cm、幅2.3cm、厚さ0.5cm。

横櫛　82は全体が半円状のＢ型式の横櫛。横幅の約３分の１が残存。１cmあたり９枚の歯を挽きだしている。高さ2.6cm、幅6.0cm、厚さ0.5cm。イスノキ。

耳かき　83は棒材の一端を刀子状に尖らせ、もう一端を匙状に作る。留針の１種の可能性もある。長さ8.5cm、幅0.4cm。

留針　84～86は頭部を鋲頭状に作るＡ型式。84は長さ10.1cm、頭部径1.1cm、身部径0.5cm。84は長さ12.2cm、頭部径0.6cm、身部径0.4cm。86は先端を欠損する。現存長12.2cm、頭部径0.8cm、身部径0.6cm。ヤブツバキ。87～92は身が偏平なＣＩ型式。87は頭部を台形状に作る。長さ13.4cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm。87は頭部付近を側縁から斜めに切り落とす。長さ15.5cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm。89は長さ15.5cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm。90は長さ15.7cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm。91は周縁を斜めに面取りする。長さ13.2cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm。92は長さ11.9cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm。

vi　文房具・調度（Pl.213，Ph.265・268・269－93～107）

算木　角棒状の材の４面に１・２・３・４本の刻線を施したもの。ともに両端を四角錘状に面取りする。93は大きく縦に割れ、刻線２本の面を欠損する。長さ3.0cm、幅1.3cm。94は長さ1.9cm、幅と厚さは0.6cm。

木簡形　95～98は荷札形木簡と同様の形状。両側縁の切り込みは一方の端部付近にのみ施される。95・96は上端を圭頭状にする。95は長さ4.0cm、幅2.3cm、厚さ0.6cm。96は長さ3.6cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm。97は長さ3.5cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm。98は上端が圭頭状。長さ13.7cm、幅2.3cm、厚さ0.6cm。99は封緘形木簡。長さ27.3cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm。

物指　100は薄板に墨で目盛りを描いたもの。墨の残りの良好な部分で10目盛り分が約4.5cmある。ただし、目盛りの幅は必ずしも一定しない。端部付近に１ヵ所穿孔がある。長さ22.5cm、幅1.5cm。

軸　巻物の軸。101は両端が若干太くなる丸棒で、両端付近の側面を漆塗りする。長さ26.8cm、径0.9cm。102は角棒の上端を薄板状にする題籤軸。下端は欠損する。現存長22.2cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm。

箱　103～106は刳りぬきの合わせの箱。103は箱の身。半分強を欠損する。内面には工具痕が残る。長さ34.7cm、推定幅6.0cm、高さ1.6cm。104～106は蓋。下面の周縁を薄くし段を作る。上面は周縁が薄く中央が膨らむ曲面に作る。全てに墨書がある[1]。104は墨書、人物像・建物の墨画が上・下・側面に施される。下面が内湾する。巻物用の文書箱か。片側側縁を欠損する。長さ33.3cm、現存幅5.6cm、厚さ1.5cm。105は上面のみに習書と火炎文のような墨画がある。側縁を若干欠損する。長さ32.6cm、現存幅6.2cm、厚さ1.5cm。106は上面に墨書、内面に墨書・人物画がある。端部を若干欠損する。現存長33.2cm、幅5.9cm、厚さ1.6cm。107は組み合わせの箱の側板、底板に連結するための釘孔が３ヵ所、直行する側板に連結するための釘孔が一方の端部に１ヵ所、他方に２ヵ所残る。側板の痕跡も見られる。上部を欠損する。長さ34.0cm、現存高8.2cm、厚さ1.2cm、スギ。

文書用の箱

vii　遊戯具（Pl.213，Ph.265・269－108～115）

賽子　108は断面六角形の棒状の材の両端を面取りし角錘状にし、側面に1から6までの数字を墨書きする。対向する数字の和が７になるように配列する。長さ4.4cm、幅1.8cm、厚さ1.6cm。

琴柱　全て全体の形状が六角形を基本とするＡ型式。109は幅3.1cm、高さ1.9cm、厚さ0.5cm。

1）釈文は以下を参照。奈文研『平城宮木簡概報』24，1991，p.23

110は幅4.1cm、高さ2.5cm、厚さ0.8cm。111は幅4.0cm、高さ3.0cm、厚さ0.5cm。112は幅2.8cm、高さ1.9cm、厚さ0.3cm。113は脚部を若干欠損する。幅2.6cm、高さ2.1cm、厚さ0.5cm。114・115は作りが薄く、型板の可能性もある。114は片面に墨画がある。幅3.2cm、高さ2.0cm、厚さ0.3cm。115は形状が左右不均等。幅3.6cm、高さ2.1cm、厚さ0.3cm。

viii　祭祀具（Pl.214，Ph.269－116～118）

正面全身人形　116～119は手の表現のあるＡ型式。116・117は頚部の切り込みが二等辺三角形で、足の切欠きがＶ字形のＡＩb型式。116は顔に１ヵ所穿孔がある。長さ18.1cm、幅2.4cm、厚さ0.3cm。117は片側縁を欠損する。長さ18.3cm、現存幅1.8cm、厚さ0.2cm。118は顔と両足を欠損する。足の切欠きはＶ字形。あご髭の墨描きがある。現存長17.1cm、幅3.6cm、厚さ0.3cm。119は頚部の切欠きが肩側が長い。足の切欠きはＶ字形だが非常に短い。両手と片側縁を欠損する。長さ9.6cm、幅1.4cm、厚さ0.2cm。120は手と足の表現がないＢ型式。長さ5.9cm、幅1.4cm、厚さ0.1cm。

馬形　121は側縁に小さな三角形の切欠きを持つ。鞍の表現か。穿孔が１ヵ所。両端を欠損する。現存長15.1cm、幅2.4cm、厚さ0.2cm。

鳥形　いずれも鳥の側面形を表したもの。122は長さ7.2cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm。123は頭部先端を欠損する。長さ12.0cm、幅1.6cm、厚さ0.2cm。

刀子形　124は刀身のみを表したＣ型式。長さ5.7cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm。125～127は薄板に刃を削り出し刀身と柄を表現したＡ型式。125は長さ13.4cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm。126は長さ15.2cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm。スギ。127は柄頭付近を欠損する。現存長19.1cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm。

刀形　いずれも柄と刀身を表現するＡ型式。128は柄頭を丸く仕上げる。切先は三角形に作る（かます切先）。129は柄元付近で刃から背方向に縦に孔が貫通し、現状はそこから割れ目が走る。長さ24.6cm、幅1.4cm、厚さ0.8cm。130・131は柄の刃側を弧状にくりこむ。130は柄元付近の背側にＶ字形の切り込みを３ヵ所施す。切っ先を欠損する。現存長15.3cm、幅2.3cm、厚さ0.2cm。131は柄頭を先の尖った半円状に作り、丸を針書きする。柄の背を波形に作る刀身を欠損する。現存長13.0cm、幅3.5cm、厚さ0.9cm。

鉈形　132は鉈の身のみを表現したもの。平たい刃部と棒状の茎を持つ。刃は片面を面取りし、他面を削りんで凹状にする。刃・茎端を欠損する。現存長9.7cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm。

鏃形　133は鏃身部分のみ残存。現存長5.0cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm。134は関の部分にＶ字形の切欠きをいれる。身の先端は直線的で斜めに面取りする。斧矢式鏃を表現したものか。茎端を欠損する。現存長6.3cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm。

形代　板材を削り、何かの形を表したもの。135は一方の端部を尖らせる。全面比較的丁寧に削る。長さ7.5cm、幅1.3cm、厚さ0.5cm。136は薄板の一方の端部を弧状に斜めにし、片側縁をＶ字状に切り欠く。被り物の表現に類似し、側面人形の可能性もある。長さ12.7cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm。

斎串　137は上端が圭頭状、下端が剣先状で、上端付近の両側縁に２ヵ所以上の切り込みを持つＣⅣ型式。切り込み部分と下端を欠損する。現存長16.9cm、幅3.1cm、厚さ0.2cm。138は上

端が圭頭状、下端が剣先状で両側縁に２ヵ所以上切り込みを持つＣＶ型式。切り込み部分を欠損する。長さ39.1cm、幅3.2cm、厚さ0.5cm。スギ。

ix　部　材（Pl.215･216，Ph.270－139～172）

床脚　139～141は板材の左右に刳形を入れた床脚。139は高さ3.9cm、幅5.0cm、厚さ1.1cm。140は薄板を切り抜いたもので、周縁には墨が残り型板と考えられる。上・下底ともに平ではなく、弧状に窪み、中央に小さな切欠きがある。この型板を用いて作ったと思われる床脚がSD5100より出土している。高さ6.7cm、幅9.6cm、厚さ0.3cm。141は床脚の下底付近の破片。板材に墨線を引き成形する途中の未製品。墨線にそって、割りや粗い削りで大まかに加工してあり、その後細かい整形が施される予定であったらしい。墨線で描かれた部分は、140の型板にほぼ一致し、中央の墨線と切欠きの位置も合うが、底は直線で描かれている。上部は欠損する。現存幅6.4cm、現存高3.6cm、厚さ1.0cm。

枠木　机などの支脚と組み合わせた支えの枠木と思われる。142は板材の端部にほぞを作り出し方形の釘孔をあける。別材の痕跡が残り、ほぞ孔に貫通させ木釘留めしたものと思われる。途中で切られ再加工されている。現存長11.8cm、現存幅4.0cm、厚さ1.4cm。143はハの字状に開く支脚の枠木。両端にほぞを作り出し、支脚のほぞ孔を貫通させ木釘留めたしたらしい。脚の痕跡が残る。長さ19.3cm、幅2.9cm、厚さ1.2cm。144は長方形の材の両端にやや長めほぞを作り出したもの。枠木にしては短く別の部材の可能性もある。長さ6.6cm、幅2.7cm、厚さ0.7cm。

支脚　長方形の板材の片長側縁を弧状に切り込み、もう一方の側縁で別材に木釘留めする。長さ13.5cm、幅2.6cm、厚さ1.1cm。スギ。146～149は上部木口にほぞを作り出した、机などの支脚。146は棒状のほぞを削り出し、ほぞの下約３cmの部分に円形のほぞ孔をあけ、そこに丸棒状の枠木を通す。下端は欠損。現存長5.9cm、幅1.3cm、厚さ0.6cm。147は長方形の板材の角を１ヵ所方形に切欠きほぞを作り出し、下端は両側縁を斜めに落とし、細くする。長さ10.8cm、幅2.2cm、厚さ0.7cm。148は長方形の板材に角を２ヵ所方形に切欠きほぞを作り出した机の支脚。天板のほぞに挿入後、上から楔を２本打ち込み留めている。長さ22.6cm、幅6.9cm、厚さ2.1cm。

不明部材　149は一端にほぞを削り出した角柱状の材。逆端は鋸で二次的に斜めに切られている。本来は建築部材か。「卍」「長」の墨書がある。現存長16.8cm、幅9.2cm、厚さ6.0cm。

150は角柱状の材の２ヵ所に方形の未貫通のほぞ孔をあける。墨書があり、「倉」が確認できる。長さ28.0cm、幅5.3cm、厚さ4.4cm。151は平面形を猪目状につくられたものか。成形後表面を入念に削り研磨する。下面は粗く削り、段を作り出しており、何かにはめこんで用いたのであろう。途中で粗く断ち切られている。「用」などの墨書がある。現存長12.6cm、高さ6.4cm、幅6.9cm。152は厚めの長方形の板材の片側長側縁の中央を台形に切り取ったもの。台座に用いたものか。長さ13.5cm、幅6.0cm、厚さ3.2cm。153は角棒状の材の５ヵ所に釘孔をあける。別材の痕跡が残り、孔の部分で別材と直行させて木釘留めしていたらしい。釘孔は7.5cm間隔に４個並び、端の１孔は8.2cmの間隔をあける。長さ32.2cm、幅2.9cm、厚さ1.1cm。154は細長い長方形の板材の側縁に幅の狭いほぞ孔をあける。ほぞ孔は約10cmの間隔で少なくとも３つ以上並ぶ。別材のほぞを挿入した後、横から木釘留めしている。途中から焼失している。現存長39.9cm、幅3.6cm、厚さ1.7cm。155は角柱状の材の片側端部付近を切欠き薄くし、そこに

さらに長方形の切欠きをいれたもの。長さ38.9cm、幅6.0cm、厚さ3.3cm。156は端部に「く」字形のほぞ状の部分を削り出している。長さ16.5cm、幅7.1cm、厚さ3.5cm。アカガシ亜属。157は偏平な断面七角形の棒材の片側端部付近に1ヵ所穿孔する。長さ13.9cm、幅2.0cm、厚さ1.7cm。158は角材の両側縁を斜めに削り端部を細くし、さらに一方の側縁に細かく削りを入れ段をつける。長さ12.2cm、幅3.5cm、厚さ2.2cm。スギ。159は棒材の端部付近の側縁を1ヵ所浅く切欠く。長さ21.0cm、幅1.7cm、厚さ1.2cm。

160は角棒の両端にほぞを削り出し、ほぞに穿孔する。一方のほぞを欠損する。現存長23.2cm、幅1.5cm、厚さ1.1cm。161は角材の両端を斜めに流線形に削り細くし、中央に1ヵ所穿孔する。長さ19.2cm、幅1.7cm、厚さ1.1cm。162は中央を角棒状、両端を丸棒状に作る。長さ14.7cm、幅0.8cm、厚さ0.6cm。163は板状部分と断面六角形の棒状部分を削り出し、両者に面を別にして相欠きの仕口を施す。棒状部分の両端部はさらに細くほぞ状にしたらしい。板状部分の仕口付近に漆らしい付着物がある。棒状部分の先端を欠損する。現存長14.0cm、幅2.1cm、厚さ0.9cm。164は直方体の割り材の側面に方形孔をあけ、上面を斜めに面取りし角錘状にする。高さ2.3cm、幅2.1cm、厚さ1.4cm。165は方形の板材に方形孔をあけ、隅を2ヵ所斜めに落とし、その中間に半円形のえぐりをいれる。高さ2.5cm、幅2.9cm、厚さ0.7cm。166～168は、材の長側縁に斜めに溝を彫るもの。166は中央部分を太くし、そこに溝を彫る。片端を欠損する。現存長21.3cm、幅2.7cm、厚さ1.9cm。スギ。167は両端を三角形にした板。長さ4.8cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm。168は両端を尖らせた断面が菱形の材を用いる。側縁を若干欠損する。長さ7.3cm、幅2.1cm、厚さ1.4cm。169は断面六角形の棒材の2ヵ所に切欠きを施す。長さ12.1cm、幅2.2cm、厚さ1.7cm。170～172は角材の隅を面取りし、断面八角形にし、円形孔をあける。いずれも円形孔の部分で折れる。170は端部付近に円形孔と直行する方向に小孔をあける。現存長16.7cm、径1.8cm。171は端部に棒状のほぞを削り出し、小孔をあける。現存長13.9cm、径1.9cm。172は円形孔が2ヵ所に直行してあく。現存長21.9cm、径1.8cm。

x　その他（Pl.217～220，Ph.269・271－173～228）

板状品　173は板材の両長側縁に2cm前後の間隔で溝を彫り、表面に浅い台形の彫り込みを連続して施す。一方の端部付近が残るのみ。現存長11.1cm、幅3.0cm、厚さ1.1cm。ハリキリ。174は薄板を切り取り、2ヵ所に小孔をあけ軸を通す。長さ8.2cm、幅0.9cm、厚さ0.2cm。175は細長い長方形の板材の長側縁に2ヵ所に台形の切欠きを施す。両端は粗く切り取られている。長さ16.5cm、幅1.8cm、厚さ0.8cm。176は長方形の板材の端部付近に方形孔をあける。長さ12.8cm、幅2.2cm、厚さ0.9cm。177は長方形の板材の一端を斜めに弧状に抉る。円形孔が2ヵ所あり、木釘を打った痕跡がある。長さ16.2cm、幅2.8cm、厚さ0.7cm。178は長方形の細板材を2ヵ所穿孔する。片端は粗く折りとられている。長さ21.4cm、幅3.1cm、厚さ0.7cm。179は全面を削りで整形する長方形の板。途中で折れている。長さ14.4cm、現存幅7.3cm、厚さ0.8cm。180は細板の両端を弧状に切り取り、片長側縁に台形の切欠きを連続して施し波形にし、他方の長側縁中央付近に1ヵ所長方形の切欠きを入れる。端部付近に1ヵ所小孔をあける。長さ32.3cm、幅4.0cm、厚さ0.8cm。

181は八角形の板。向かい合う四辺の中央に刻みを入れ、これを目印に糸で片面に十字の墨

線を引く。縦13.0cm、横11.9cm、厚さ0.9cm。スギ。182は粗く切り取った六角形の割り材。片面は平坦に削り中央に十字の墨線を引く。長さ2.3cm、幅2.1cm、厚さ0.7cm。183は板材を、片側長側縁端部付近に張り出しを持つ形に切りとる。長さ7.5cm、幅1.2cm、厚さ0.8cm。184～186は木札状品。ずれも上端を台形に切り取る。184・185は1孔をあける。184は長さ4.3cm、幅1.4cm、厚さ0.2cm。185は長さ4.3cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm。186は長さ3.9cm、幅2.1cm、厚さ0.7cm。187は薄板を杏仁形に切り取り、端部付近に1孔をあけ、細い棒を通す。長さ5.8cm、幅2.4cm、厚さ0.2cm。188は細板の端部を斜めに切り取り、長側縁に切欠きを入れ、2孔をあける。途中で折れているがもう一方の側縁にも切欠きを施していたらしい。現存長5.9cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm。189は半月形の板材。2面とも割り面のままで、周縁は削っている。同形品は200点近くまとまって出土した。何かの素材か。長さ18.2cm、幅12.4cm、厚さ2.1cm。190は台形の板材の上底の1隅を斜めに切り取る。下底は切れ目を入れ折り取る。長さ8.8cm、幅3.4cm、厚さ0.4cm。191は片端を細くした板材に、方形の切り抜きと切欠きをいれる。長さ21.0cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm。192・193は両端を弧状に面取りした細板。両者とも片面は割り面をそのまま残す。192は長さ27.2cm、幅3.2cm、厚さ0.5cm。193は長さ28.2cm、幅2.9cm、厚さ0.7cm。194～202は先端が剣先状の細板。194は上端が圭頭状。長さ24.6cm、幅3.9cm、厚さ0.5cm。195は長さ27.4cm、幅3.6cm、厚さ1.1cm。スギ。196・197は上端が圭頭状。196は長さ6.6cm、幅2.7cm、厚さ0.3cm。197は長さ7.2cm、幅0.7cm、厚さ0.4cm。198は長さ13.9cm、幅2.3cm、厚さ1.1cm。199は上端を両面から削り薄くする。長さ12.2cm、幅0.6cm、厚さ0.3cm。200は長さ14.0cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm。201は先端を棒状に削る。長さ16.4cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm。202は上端をV字状に切り欠く。長さ12.6cm、幅1.2cm、厚さ0.6cm。スギ。

素材の集積

尖端棒　203は断面蒲鉾形の棒の両端を尖らせたもの。長さ22.8cm、幅1.0cm、厚さ0.6cm。204は角棒の先端を尖らせる。長さ22.5cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm。205は先端を尖らせた丸棒。長さ24.6cm、幅1.8cm、厚さ1.2cm。206は先端を山形に面取りしたすりこぎ状の丸棒。先端付近は断面八角形に作る。長さ26.3cm。径2.5cm。207は長さ30.3cm。径1.7cm。216は先端を尖らせた短い角棒。長さ9.9cm、幅0.9cm、厚さ0.8cm。

棒　208は両端を圭頭状に面取りする。長さ19.8cm、幅0.8cm、厚さ0.5cm。スギ。209は20.5cm、径0.5cm。210は長さ20.9cm、幅0.6cm、厚さ0.4cm。211は長さ18.1cm、幅0.5cm、厚さ0.4cm。212～215は短い角棒。212は長さ8.9cm、径0.6cm。213は両端を圭頭状にする。長さ9.5cm、幅0.7cm、厚さ0.6cm。214・215は同規模。ともに長さ6.3cm、径0.7cm。

鋸歯状木器　217～219は片長側縁を鋸歯状にする。218は先端と柄の部分を欠損する。現存長22.5cm、幅3.3cm、厚さ0.8cm。218・219は先端付近が残る。218は先端を山形にする。現存長17.1cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm。219は現存長7.2cm、幅1.9cm、厚さ0.7cm。スギ。220は断面が弧状に屈曲する板材の表面に浅い溝を連続して彫り込む。先端付近が残る。現存長4.8cm、現存幅2.8cm、厚さ0.3cm。ウツギ。221は両長側縁を鋸歯状にする。先端付近が残る。現存長5.7cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm。スダジイ。

挽物受皿　222はロクロ挽きで椀状品を作り、底部に円形孔をあける。孔には軸が差し込まれていたらしく、内部が摩滅している。外面に円を2ヵ所、内面には点を墨描きす。約半分を欠損する。燈台などの受皿か。縦木取り。推定径8.4cm、推定高3.9cm、厚さ0.7cm。

有溝棒　223は角棒の両側縁に７条ずつ横に浅い溝を刻む。一方の端部は粗く切り取られている。長さ26.8cm、幅0.9cm、厚さ0.7cm。

二股棒　224は棒の先端付近を二股につくる。先端は摩滅し、二股部の根元に何かの圧痕が斜めに残る。棒状部分の端部付近に浅い溝を２条刻む。SD5100出土の同形品と同様、楯（たたり）に用いられた可能性もあろう。

絵馬　225は柾目板に、墨で馬の側面全身像を描く。馬は轡、鞍、障泥、鐙などの馬具を付けた姿で描かれる。蛍光Ｘ線分析により、馬の体にはベンガラ、障泥には白土が塗られたことが判明した。障泥にはさらに何かの顔料で装飾が加えられている。使用されている板材は年輪年代法により728年以降に伐採されたことが判明している。縦19.6cm、横27.2cm、厚さ0.9cm。　最古の絵馬

楼閣山水之図板絵習書　226は曲物の折敷の底板を転用し、側板をはずした後に墨画や習書に用いたもの。使用後さらに縦に割れ、もとの約１/３が残る。「楼閣山水之図」には建物５棟、門２棟、塀、池、山、滝が描かれる。反対の面に尺笏を持つ人物、童女、人の顔、箱が描かれている。墨書[1]には千字文、人名、国名などが見られる。長さ61.3cm、現存幅10.8cm、厚さ0.8cm。

墨画板　227・228は墨で人物を描いた板。ともに途中で焼失している。227は被りものを付けた男性と、頭上に髷を結い裾をまとった女性が片面に描かれる。現存長23.2cm、幅7.1cm、厚さ1.2cm。228は笏を持つ男性とそれに向き合う人物、線で簡単に表現した人物、目と鼻を強調した男性が一方の面に、人の顔らしい物が他面に描かれている。長さ20.2cm、幅8.3cm、厚さ1.3cm。

木炭　SD5300からは、総量62111ｇの木炭が出土した。この中から８点を無作為抽出し、樹種を同定した。結果はアカガシ亜属６点、不明広葉樹１点、ヒノキ１点である。

Ｅ　SD5310出土木製品（Pl.221－１～12）

SD5310からは91点の木製品が出土した（別表21）。出土層位はすべて木屑層である。ここでは遺存状態の良好な12点について報告する。

楔　１は割材を粗く加工して作る。長さ7.1cm、幅2.0cm、厚さ1.8cm。

匙　２は板材を切り取り成形する。柄頭部の両側縁を削り細くする。身の先端を欠損する。現存長10.0cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm。

蓋　３は円形の板材の周縁を斜めに面取りする。径6.0cm、厚さ0.7cm。

留針　４は細板の先端を剣先状につくるＣⅡ型式。長さ15.9cm、幅1.3cm、厚さ0.6cm。

桧扇　５は要端を丸くつくり、要に１孔をあける。上端を欠損し、綴じ孔も不明。現存長21.1cm、現存幅1.5cm、厚さ0.2cm。

刀子形　６は角材を粗く削り柄と刀身を成形。両端は欠損。現存長22.1cm、幅2.7cm、厚さ1.6cm。

鏃形　７は板材を削り、茎と身を成形する。長茎鏃を模したものか。鑿形の可能性もある。先端を欠損する。現存長10.4cm、幅0.6cm、厚さ0.3cm。

不明品　８は角材の端部付近を細く削り、端部には細かい削りを施す。途中でおれている。現存長14.0cm、幅2.8cm、厚さ2.0cm。９は筒状品の外面に浅い溝を１状めぐらせる。径1.6cm、高さ1.0cm、厚さ0.5cm。10は円盤状の材の中央に円孔をあける。半分弱が残存する。現存長9.3cm、現存幅3.3cm、厚さ1.4cm。11は半月形の板材。周縁は削りを施すが、その他は割り

1）奈文研『平城宮木簡概報』24，1991，p.36

面が残る。長さ4.2cm、幅2.6cm、厚さ1.2cm。12は角材の３面を削り、一方の端部を細くしたもの。長さ19.4cm、幅6.8cm、厚さ4.9cm。

F　二条大路北側溝出土木製品（Pl.221－13～18）

二条大路北側溝SD5240からは32点の木製品が出土した。SD5240は同位置で２度掘り直しており、木製品はすべて２番目のSD5240Ｂから出土している。ここでは遺存状態が比較的良好な５点を報告する。

正面全身人形　13は切り込みで手を表現し、頚部の切り欠きが二等辺三角形、足はコ字形切り込みを入れて折り取ってつくるＡＩb式。圭頭。長さ19.4cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm。スギ。

斎串　14は頭部が圭頭状で頭部付近の側縁に４回の切り込みを施す。破損部が多いがＢⅣ型式ないしＢⅤ型式であろう。現存長12.3cm、現存1.9cm、厚さ0.3cm。

鋸歯状木器　15は片側長側縁のみを鋸歯状にする。一方の端部の隅を方形に切り取り、突起をつくる。長さ14.4cm、幅2.7cm、厚さ0.5cm。

留針　16は丸棒状のＣⅡ型式。長さ19.6cm、幅1.2cm、厚さ0.9cm。

木針　17は棒の先端を尖らせ、円錐状の頭部を削り出す。長さ15.0cm、径1.1cm。スギ。

G　井戸出土木製品

ここでは、井戸から出土した木製品のうち、主要なもののみを取り上げて解説することとする。各井戸ごとの出土木製品の概要については、別表21・22，Fig.71を参照されたい。

i　工具・農具（Pl.175，Ph.245－２・６～９・11）

刀子　７は断面が長方形を呈するＩ型式の刀子柄。柄元には「はばき」を装着したあたりが残る。柄元直下に「Ｕ」字形の切込をいれるが、周囲に紐等を巻きつけた痕跡はみられない。やや腐蝕が進む。現存長14.3cm、幅2.3cm、厚さ1.6cm。SE5140井戸枠内埋土出土。サカキ。６は断面が円形を呈するIII型式刀子柄の刀子。柄は途中で折れるが完形で、平造りの刀身は柄元から12.6cm先まで残存する。柄は心持材。長さ17.3cm、直径1.3cmである。SE5220井戸枠内埋土出土。アカガシ亜属。８は断面が楕円形を呈するIII型式刀子柄の刀子。柄頭と切先を欠失する。平造りの刀身は銹に覆われているが完形で、長さ６cm。柄は長さ6.3cm、直径1.1cm。SE5220井戸枠内埋土出土。ウツギ類。

刷毛未製品　**刷毛**　９は刷毛の未製品と考えられるもの。断面が正方形を呈する棒状の材を撥形に削って細い握りとし、柄元の両側に「Ｖ」字形の切込をいれたもの。毛を植える割れ目はない。完形。長さ13.7cm、幅1.5cm、厚さ1.1cm。SE4225井戸枠内埋土出土。

へら　11は断面長方形の板材を両面から削り両刃状にする。身と握りの区別が不明瞭である。先縁部が片減りし、握りは欠損する。現存長14.3cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm。SE4225井戸枠内埋土出土。

木錘　２は丸太材を粗く切断して、中央部を左右から削り込んで細くしたもの。粗製で、両端の丸木面は樹皮を剝ぎ取るだけの加工にとどまる。完形で、長さ16.5cm、丸木面の直径４cm、中央部直径2.1cm。サカキ。SE4770黒灰色砂土層出土。

ii　紡織具（Pl.176，Ph.246－15・16）

糸巻　15はＡⅣ型式の中型糸巻。枠木と横木が組合う稀な例で、枠木2本と横木2枚が残る。横木は長さ11.8cm、幅2.2cm、枠木は長さ25cm、幅1.4cm、厚さ1.8cm。SE4366井戸内埋土出土。

16は完形の糸巻横木。中小型のＡ型式糸巻に属するものであろう。長さ9.1cm、幅2.3cm、厚さ0.9cm。SE4770暗灰色粘土層出土。

iii　服飾具（Pl.176・214，Ph.246－20・25・133・134）

横櫛　大部分の櫛が断片であるが、133は完形に近い長方形のＡII型式横櫛。３cmあたりの平均歯数は22枚である。幅13.6cm、高さ5.4cm、厚さ0.8cm。樹種未同定。SE5087出土。134は半分が欠損しているが、半円形のＢ型式横櫛。１cmあたりの平均歯数は10枚である。現存幅６cm、同高さ3.2cm、同厚さ0.7cm。樹種未同定。SE5045出土。

耳掻き　１点（20）。細長い小木片を粗く加工し、薄く削った一端に曲面をなす匙形の身をつくり、他端を断面長方形に削って握りとしたもの。中央部は断面がかまぼこ形を呈する。握りは背面方向に反りをもたせてある。形態と大きさから、ここでは耳掻きと考えておく。完形。長さ8.8cm、幅0.5cm、厚さ0.3cm。SE4770暗灰色粘土層出土。

檜扇　25はAI型式の檜扇。先端部を欠失するが、７枚が一括して出土した。綴じ目が認められないことから、骨の末の両側辺に切込をいれて、綴じ合わせたようである。７枚のうち、最長のもので現存長27.5cm、同幅2.2cm、厚さ0.25cm。SE5140井戸枠内埋土下層出土。

iv　容器・籠編物（Pl.177・178，Ph.247・248－31・34・35・37・43・45・46）

挽物　31は漆器皿Ａもしくは杯Ａ。口縁部を失うため全形を窺うことはできない。木心のうえに布着せし、内外に黒漆をかける。底部外面に「少川」「→」などの針書が見える。木取りは不明。底部外面径10cm、現存高0.5cm、底部厚さ0.4cm。SE4225井戸枠内埋土出土。樹種未同定。

針　　書

曲物　34は大型の円形曲物。目玉と俗称される井戸枠に転用されていたもの。下箍をもつ。側板の綴じ合わせは１個所で、２列前外４段後内２段綴じ。側板内面には縦平行線のケビキをいれるが、線は上端まで達していない。箍の綴じ合わせは１個所で２列前外２段後内１段、箍と側板は８個所から木釘を打ち込んで結合する。SE4530出土。

35は円形、木釘結合の曲物底板。木釘は４本使用しており、配置は不均等である。直径18.9cm、厚さ0.8cm。SE4885井戸枠内埋土出土。45は円形の木釘結合曲物底板である。ほぼ完形である。木釘は４本を90度ずつずらして配置する。直径13.3cm、厚さ0.6cm。SE4340井戸曲物枠内出土。

曲物柄杓　37は柄杓。身は底板を欠き、側板底部も欠損するが、ほぼ全形を窺うことができる。側板の綴じ合わせは２列あり、前上外４段以上の綴じと後上内３段以上の綴じである。内面に縦と斜めの平行線ケビキをいれる。側板の重ね合わせに隣接する上寄りの位置に方孔をあけ、相対する側板の下寄りに小円孔をあけて、柄を装着する。柄は握り部の断面が方形で、柄元は丸棒状。柄には側板の内面に接する位置に木釘をさしている。底板と底板に結合する部位の側板が欠損しており、結合型式は不明。身の直径15.6cm、現存高10.6cm、柄の長さ43.6cm、幅1.8cm、厚さ1.2cm。SE4268埋土最下層出土。

蓋板　43は円形の蓋板。周縁を斜めに削り落しており、断面が台形を呈する。下底面中央に小孔を穿つが、孔は貫通していない。直径6.2cm、厚さ0.5cm。SE4340枠内埋土最下部出土。スギ。

籠編物　46は六つ目編みの円形籠。幅0.6～0.9cm、厚さ0.5mmのヒノキの板目材で皿形に編む。底部で編んだ材は、底部外縁で上方へ折曲げ、上部で円形に回し、結びながら束ねて口縁部とする。一般に1本の材の両端を口縁部の相対する位置において同一方向に回しており、1本の材を巴形にたわめている。現存口径19.5cm、同高3.5cm。SE4815井戸枠内埋土中層出土。

v　食事具（Pl.179，Ph.249－47・48・52・54・55・59）

箸　47・48は白木の箸。断面が楕円形で、元と先の区別はない。47は長さ23.1cm、直径0.6～0.7cm。48は長さ19cm、直径0.4cm。いずれもSE4225井戸枠内埋土出土。48はスギ。

匙　刳物匙（52）、A型式匙（55・59）、B型式匙（53）がある。52は身の上面全体が曲面をなし、柄は細く水平につくる。。現存長15cm、同幅33cm、厚さ0.8cm。SE5075掘形埋土出土。55は柄と身の一部を欠失する。短い身と長い柄からなり、両者の区別は明瞭。現存部長18.2cm、同幅2.6cm、厚さ0.7cm。SE4770黒灰色砂土層出土。スギ。59は長方形の材を粗く撥形に加工したもので、一方の側縁を直線的につくる。身と柄の区別は不明瞭。身の先縁部に片刃状の刃がつく。長さ23.1cm、幅2.6cm、厚さ0.8cm。SE4770黒灰色砂土層出土。

杓子　54はA型式の杓子。部材からの転用品。腐蝕している。粗く加工して幅広く長い身と長い柄をつくる。片刃状の刃は身の中程から長く削り出す。身と柄の境界部に転用前の部材のほぞ孔らしき方形の抉りがある。現存長44.6cm、幅9.8cm、厚さ2.8cm。SE4815掘形出土。

vi　遊戯具（Pl.180，Ph.250－62）

独楽　62はほぼ完形の独楽である。粗く切断した心持材の樹皮を剝ぎ、先端部を細かく削り、砲弾形に整形したもの。上面は粗く削られ、わずかに盛りあがり、先端部には鉄芯を打ち込む。直径2.2cm高さ3.6cm。SE4770黒灰色砂土層出土。樹種未同定。

vii　祭祀具（Pl.180・181，Ph.250・251－69・73・74・78・82・85・87～89・92～96・98・99・101～105・107・109～111）

斎串　BIII型式（87・88）、BIV型式（89）、CII型式（92～94）、CIII型式（95・96・104・105・109～111）、CIV型式（98・99・107）、CVI型式（101～103）がある。

87は全体に細く、下端部を鋭く尖らせる。長さ24.9cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm。SE4366枠内埋土出土。88は小型のもの。切込の一方を欠失。推定全長11.8cm、幅2cm、厚さ0.2cm。SE5205井戸枠内埋土出土。89は比較的小型のもの。側辺の切込は2回。長さ13.7cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm。SE4116井戸枠内埋土上層。92は小型のもの。下端部は圭頭に近い剣形。長さ13.6cm、幅2.7cm、厚さ0.2cm。SE5205井戸枠内埋土出土。93は下半部を欠損。垂直に切込を入れている。長さ15.5cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm。SE5205井戸枠内埋土出土。94はほぼ完形。長さ21.8cm、幅2.4cm、厚さ0.3cm。SE4116枠内埋土上層出土。スギ。95は、頭部を圭頭にはせず、直線状に断ち落す。頭部は破損。長さ20.6cm以上、幅2.8cm、厚さ0.6cm。SE5140井戸枠内埋土下層出土。96は幅が広い。完形に近く、長さ23.2cm、幅3.7cm、厚さ0.4cm。SE4365井戸枠内埋土出土。104は小型のもの。長さ13.2cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm。SE4225井戸

枠内埋土出土。105は小型細身のもの。頭頂部に長軸に平行な切込がはいる。完形。長さ13.7cm、幅2cm、厚さ0.4cm。SE4225井戸枠内埋土出土。109は下半部が鋭く尖るもの。長さ18cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm。SE4260埋土。110はやや厚手のもの。両側の切込は圭頭部直下からいれる。長さ17.3cm、幅2.6cm、厚さ0.4cm。SE4116井戸枠内埋土上層。

スギ。111は92の形態に似ており、下半部が剣形をなす。推定全長17cm、幅2.9cm、厚さ0.2cm。SE5205井戸枠内埋土出土。98は小型のもの。切込部は欠失するが、痕跡から2回以上の切込とみられる。長さ12.2cm、幅1.7cm、厚さ0.2cm。SE4340井戸曲物枠内最下部出土。99は切込を圭頭部の斜辺からいれるもの。長さ21.1cm、幅2.5cm、厚さ0.4cm。SE4340井戸枠内埋土出土。107は中型のもの。長さ15.9cm、幅2cm、厚さ0.3cm。SE4815井戸枠内埋土出土。101は頭部を半円形につくり、側辺の切欠きにも丸みをもたせる。現存長29.4cm、幅2.5cm。SE4815井戸枠内埋土出土。102は圭頭につくるもの。半截する。側辺の切欠きは7個所以上からいれる。長さ27.1cm、幅2.4cm、厚さ0.4cm。SE4365井戸枠内黒灰色粘土層出土。103は頭部を梯形にかたどり、切欠き部より下は細くつくる。長さ25.5cm、幅1.9cm、厚さ0.2cm。SE4380井戸枠内埋土出土。

人形　AIb型式(74)、BIa型式(69)、組合わせ式(78)などがある。74は粗製品。頭部は梯形で、顔面を線刻により表現しているらしい。脚端部は内傾する。長さ14.8cm、幅1.9cm、厚さ0.2cm。SE5205井戸枠内埋土出土。69は顔と頭部全体を圭頭につくる。腰部の切欠きは「L」字形で、腰が張る。脚端部は内傾する。長さ7.7cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm。SE4770暗灰色粘土層出土。樹種未同定。78は切込により冠帽、口の側面観を表現する。腐蝕が著しく、鼻や眉などの有無は不明。腕と脚の付け根に相当する部分には、それぞれ1孔が穿たれる。腕や脚は不明。現存高9.9cm、同幅2cm、同厚さ0.5cm。SE4770黒灰色砂土層出土。樹種未同定。73はあるいは人形であろうか。脚に相当する部分が明確でなく、腕に当たる部位の切込と腰部の切込は一側辺にのみはいる。長さ13.5cm、幅2cm、厚さ0.3cm。SE4770黒灰色砂土層出土。

船形　82は後端部を欠失する小型のもの。先端部は鋭く尖る。粗製である。現存長7.4cm、同幅2cm、厚さ1.1cm。SE4770黒灰色砂土層出土。樹種未同定。

陽物形　85は横断面形が楕円形を呈する小型の陽物形。基部を欠失する。粗製。現存長8.5cm、長径1.4cm、短径1.1cm。SE4770黒灰色砂土層出土。樹種未同定。

viii　雑　具（Pl.177－32）

釣瓶　32はとくに根拠はないが釣瓶と考えておく。挽物底部付近の破片で、全周の5分の1ほどが残るに過ぎない。縦木取りで木心をはずす。厚みのある底部と直立する胴部からなる。底部内外に轆轤目をとどめる。底部内面には轆轤爪痕らしき傷が認められる。白木。現存胴部径20cm、同高さ5.7cm、底部の厚さ3.4cm。SE4366井戸枠内埋土出土。トチノキ。釣瓶はこの他に、SE5140からも小断片が数点出土している。

ix　部　材（Pl.182，Ph.252・253－116～118・120・123）

9点出土したが、屋根材の流し板（123）以外は用途不明。

屋根材　123はSE4116の南側板に転用されていたもので、隣接する流し板を交互に上下に重ねる、いわゆる大和葺きの下材に相当する。現存部の長さ223.5cm、幅22.7cm、高さ4.5cm。上面中央部にしのぎが通る。左右の側縁はL字形に短く曲がり、隣接する流し板の側縁を引っ掛けるようになっている。側縁は高さ4.2cm、幅2cm。樹種未同定。

116は長方板状の部材である。柾目板の中軸上に2円孔を穿つ。腐蝕が著しく、一方の端部を欠失する。現存長47.8cm、幅3.9cm、厚さ0.6cm。孔径0.9cm。SE4760井戸枠内埋土出土。117は両端を徐々に細くして、全体を紡錘形にかたどったもの。一方の端には、表面から両側面に及ぶ紐ないし縄のあたった形跡が残り、他端には同じく紐あるいは縄のあたった形跡が表裏と両側面に残る。中央部で折れて腐蝕が進むが、ほぼ完形。長さ78.1cm、幅6.3cm、厚さ2.3cm。SE4885井戸枠内埋土出土。118は横断面形がかまぼこ形を呈する部材。折損しているが、一方の端部が残る。端部は明瞭な段をつけないで、徐々に細くつくりほぞとする。端部から約3cmの位置にほぞ穴のあたった形跡が残る。現存長23.3cm、幅4.3cm、厚さ3.1cm。SE4705井戸枠内埋土出土。120は断面形が楕円形を呈する材の一端に、断面方形のほぞをつくり出したもの。他端は径を細くする。用途は判然としないが、何かを掛けておくためのものか。完形。長さ22.5cm、直径1.2×1.8cm。SE4268井戸枠内埋土出土。

x　用途不明品・その他（Pl.183，Ph.254－130・131）

130はいわゆるマリオネット形の人形の腕に似る製品。一端は折れるが、他端は半円形につくり、中央部に小孔を穿つ。長さ3.8cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm。SE4770黒灰色砂土層出土。131は中央部を幅広くつくりだし、両端を二又につくると想定できるもの。分岐する部分は3本を失う。二又部分は内側辺を両面から削り、両刃状の刃をつける。全体に加工は粗い。現存長21.9cm、同幅10.7cm、厚さ3.8cm。SE4145井戸枠内埋土出土。アカガシ亜属。

二又品

H　土坑および柱穴等出土木製品

ここでは土坑や柱穴等から出土した木製品を取り上げる（Fig.71）。遺構ごとの出土木製品の概要については、前出の別表21に掲げた通りである。注目すべきものについて解説を加える。

i　工　具（Pl.175，Ph.245－13・14）

叩き板　13・14は叩き板である。いずれも礎板に転用されていたものである。13は柄と身の叩き面を揃えるようにして一木から作りだすが、柄は背面側へ反り上がる。身は平面、断面とも長方形で、先端部が使用の為に薄くなっている。叩き面は斜面を呈し、磨滅した上に片減りしているが窪んではいない。また、柄の先端部は細く尖り、やや磨滅している。14は柄と身の叩き面を揃えるようにして一木から作りだしている。身は先端部幅が狭く、断面が長方形で、叩き面は磨滅し中央部が著しく窪んでおり、かなり使いこまれた様子が窺える。柄は直線的にのび、先端部が細く尖る。民具例のなかに、屋根に藁（萱）を葺く際に使用する叩き板があり、その形態が本例に酷似する。長さが1.5m以上ある民具例に比較すると本例はかなり短いが、同じ用途を想定しておきたい。13は全長50.5cm、身の長さ17.5cm、同幅9.7cm、同厚さ5.9cm。13はSB4490の西入側柱筋北から5間目の柱穴掘形から出土した。14は全長62.3cm、身の先端

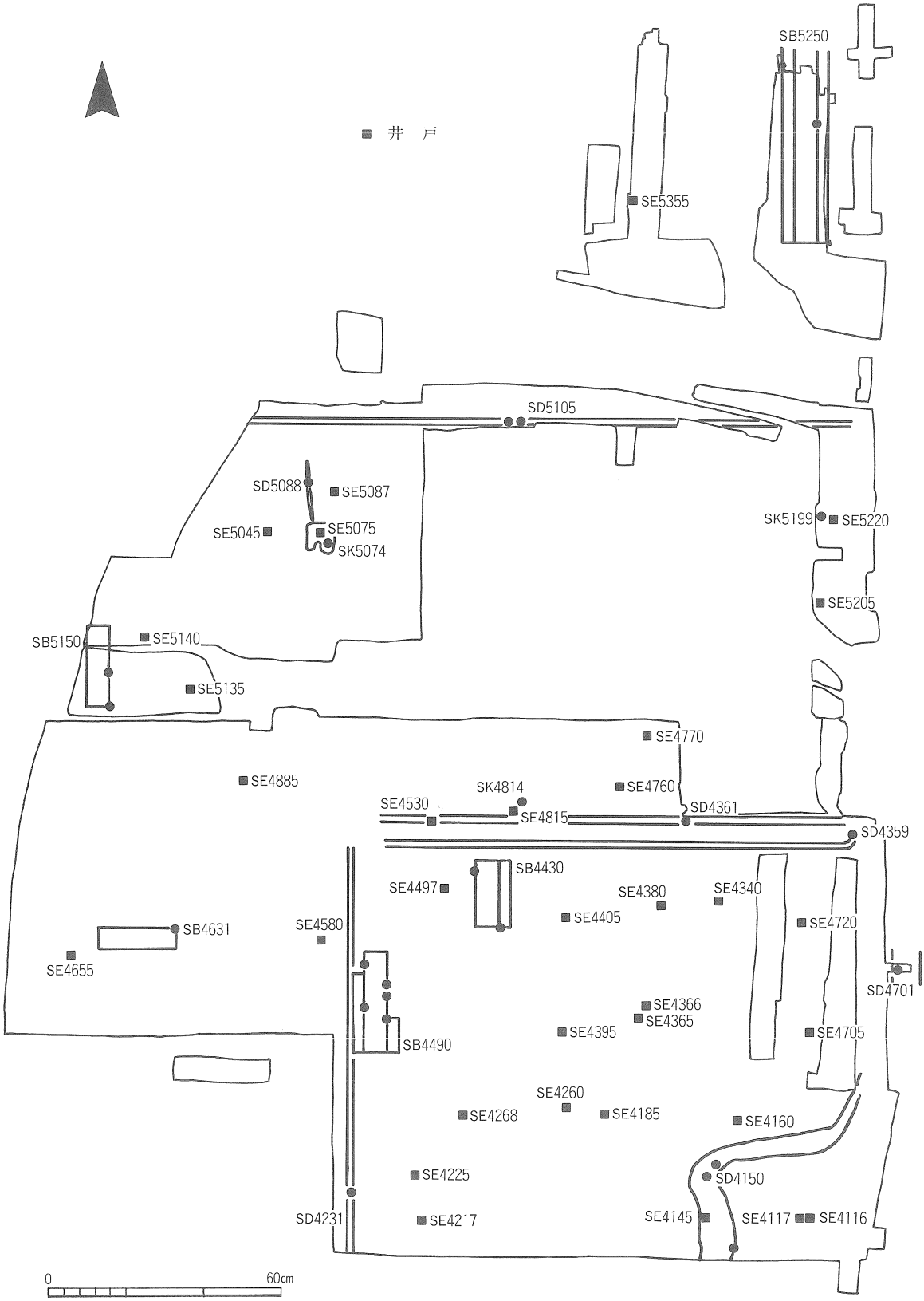


Fig. 71　木製品出土井戸および柱穴等分布略図　1：600

部幅6cm、同柄元幅9.9cm、同厚さ5.8cm。SB5150東南隅柱から出土。スギ。

ii　容　器（Pl.177・178，Ph.247－26・27・41・44）

漆器大鉢

漆器　26は漆器大鉢である。SB4631東北隅柱抜取り穴内に正立した状態で埋没していた。整形は基本的に轆轤挽で行い、胴部下半に2条の突帯を削り出し、底部には高台が付く。高台の内側は轆轤によらない削り。布着せはなく、素地の上全面に黒漆を塗る。高台の欠けた面は素地がむき出しとなり、磨滅して平坦になっており、欠損後も引続き使用したことを窺わせる。口縁部と高台の下部を失うが、復原すると口径が45cm、高さが15cm程度になる。ケヤキ。

27は壷であろうか。強く張った肩から、頸部が直立ぎみに立ちあがり、外反する口縁部へと続く。口唇部は欠損する。布着せはなく、表裏とも素地の上から漆を塗る。素地の腐蝕が著しい上に、全周の1/4程度の破片であり、頸部の傾きなどに不確実さが残るため、器形を確定できない。現存部の内径6.4cm、同高さ8.1cm。SD4359上層出土。

蓋　41は断面が長方形を呈する円板状のもの。中央部に浅い不整形な窪みがある。完形。直径7.3cm、厚さ0.5cm。SD4361下層出土。44は長楕円形にかたどるもの。断面は長方形を呈する。中央部両側に2孔、一端に1孔をあける。孔のない端部両側面は磨滅して薄くなっている。片側の面には刃痕らしき細線をとどめる。長さ18.2cm、幅5.9cm、厚さ0.6cm。SK5074出土。

iii　食事具（Pl.179，Ph.249－53）

匙　53は身に3個所の穿孔がある。孔の用途は不明。平板な身に水平な細い柄がつく。柄は大部分が失われる。腐蝕が著しい。現存長10cm、幅4.5cm、厚さ0.3cm。SK5074出土。

iv　祭祀具（Pl.180・181－80・100）

斎串　100はCIV型式の斎串。井戸や土坑から出土したものの中では、長い部類に属する。側辺の切込は3回以上いれる。完形。長さ22cm、幅2cm、厚さ0.5cm。SK5199出土。スギ。

人形　80は樹皮製のAI型式の人形である。腕と脚を欠失し、全体が湾曲する。頭部は円形につくり、顔面には目、鼻等の表現はない。現存長8.3cm、幅2.7cm、厚さ0.2cm。SD4361出土。

iv　部　材（Pl.182，Ph.253－121・122）

礎板　121は長さ78cm、一辺約13cmの角材を用いた礎板である。一端に筏穴が残る。3面には新しい手斧削り痕があるが、残る一面には古い削り痕と樹皮が残る。新たな手斧削りの後、一側面中央部4個所に「大」字を刻印している。刻印内は特に炭化した様子もないことから、焼き印ではなく打印であるといえる。印文はいずれもほぼ同形・同大で、直径3.4cm。年輪年代測定の結果、761年の秋から762年の春にかけて伐採された木材であることが判明している。五坪のF期の建物SB5250の東入側柱南から13間目の柱穴掘形から出土した。ヒノキ。

年輪年代

屋根材　流し板（122）がある。いわゆる大和葺きの下材に相当する。122はSD5021から五坪への導水斜溝SX5034の北側板に転用されていた。腐蝕が進み、大部分が欠失する。現存長59.2cm、幅24.2cm、高さ4.4cm。左右の突出部のうち残りの良い右側は、高さ5.3cm、幅2.2cmである。ヒノキ。

5　銭　　貨（Pl.222・223，Ph.272・273）

今回の調査では奈良時代の銅銭３種類114点以上、中国の銅銭４種類11点、中国銭の模鋳銭１点、寛永通寶２点、明治以降の銅銭２点、不明124点以上（うち94点以上が「緡銭（びんせん）」いわゆる差し銭）が出土した。皇朝銭の出土遺構はTab.42、Fig72の通りである。中国銭、模鋳銭および寛永通寶や明治以降の銅銭は、すべて遺物包含層ないし床土からの出土である。なお、本文中で図面番号の後に（　）を付して併記した番号は、皇朝銭データベースにおける銭種別ID番号である。各銭貨の計測値については別表23を参照されたい。

遺構出土の皇朝銭では、七・八坪坪境小路SF4360東半部の路面上で検出した、直径35cmほどの浅い土坑SX4355中に、和同開珎を含む銅銭100点前後（97点を確認）が「緡銭」状にして埋められていたのか注目される。

出土状況は、一部水平になった銅銭もあるが、斜めあるいは立った状態で蛇行しながら連なっており、100枚前後を１本にまとめていた様子がよく窺える。これらは銹化固着していたため、個別に取り上げることができず、出土した状態のまま採取して保存処理を施した。そのためX線写真撮影が不可能で、より正確な点数や銅銭種すべては確定できない。現在、銭文が確認できるものが３点あり、いずれも和同開珎で、うち１点は「隷開和同」である。

井戸ではSE4580から出土したものが注目できる。井戸枠内埋土の底部付近から、鉄刀子、鉄釘、銅巡方、銅鋲、横櫛、曲物底板、斎串とともに和同開珎24点、萬年通寶３点、神功開寶12点が出土した。これは、１基の井戸から出土した銅銭としては異例の多さであり、井戸祭祀などの特別な用途を考えるべきかもしれない。

東二坊々間路西側溝SD5021では、二条大路より北50mまでの範囲から和同開珎８点が出土している。SD4699と比較すれば密といえる。同じく西側溝SD4699の、二条大路から南の総延長約250mの範囲からは、12点が散発的に出土しているが、二条大路との交差点では和同開珎３点が出土している。

二条大路北側溝SD5240Cでは、二条二坊五坪の南門SB5320近くで和同開珎１点、神功開寶１点が、東二坊々間路との交差点で和同開珎４点、萬年通寶１点、神功開寶１点が出土。

遺構	銭種	点数	
床土	和同開珎＊	2	
埋戻土	和同開珎A	1	
包含層	和同開珎＊	9	
	和同開珎＊	1	
	萬年通寶＊	1	
整地土	和同開珎＊	3	
SD4231	和同開珎＊	5	
SD4359	和同開珎＊	1	
	和同開珎A	1	
	萬年通寶A?	1	
	神功開寶E	1	
SD4361	神功開寶E?	1	
	和同開珎F	1	
SD4699	和同開珎＊	2	
	和同開珎A	2	
	和同開珎D	3	
	和同開珎F	2	
	萬年通寶C	1	
	神功開寶E	2	「緡銭」
SD4701	萬年通寶A	1	
SD4750	和同開珎C	1	
	和同開珎F	1	
SD5021	和同開珎＊	2	
	和同開珎A	4	
	和同開珎C	1	
	和同開珎F	1	
SD5100	和同開珎＊	1	
	和同開珎A	2	
	和同開珎D	1	
	和同開珎E	2	
SD5240	和同開珎＊	1	
	和同開珎A	3	
	和同開珎E	1	
	萬年通寶B	1	
	神功開寶B	1	
	神功開寶E	1	井戸出土銭
SD5300	和同開珎A	2	
SE4185	神功開寶E	1	
SE4225	神功開寶B	1	
SE4580	和同開珎＊	3	
	和同開珎A	10	
	和同開珎D	3	
	和同開珎E	7	
	和同開珎F	1	
	萬年通寶A	1	
	萬年通寶C	1	
	萬年通寶D	1	
	神功開寶＊	2	
	神功開寶A	1	
	神功開寶E	6	
	神功開寶F	3	
SE5355	和同開珎A	1	
	和同開珎D	1	
SK4355	和同開珎等	97＋	
SK5074	和同開珎＊	1	

＊　型式不明

Tab.42　遺構別出土銭貨点数表

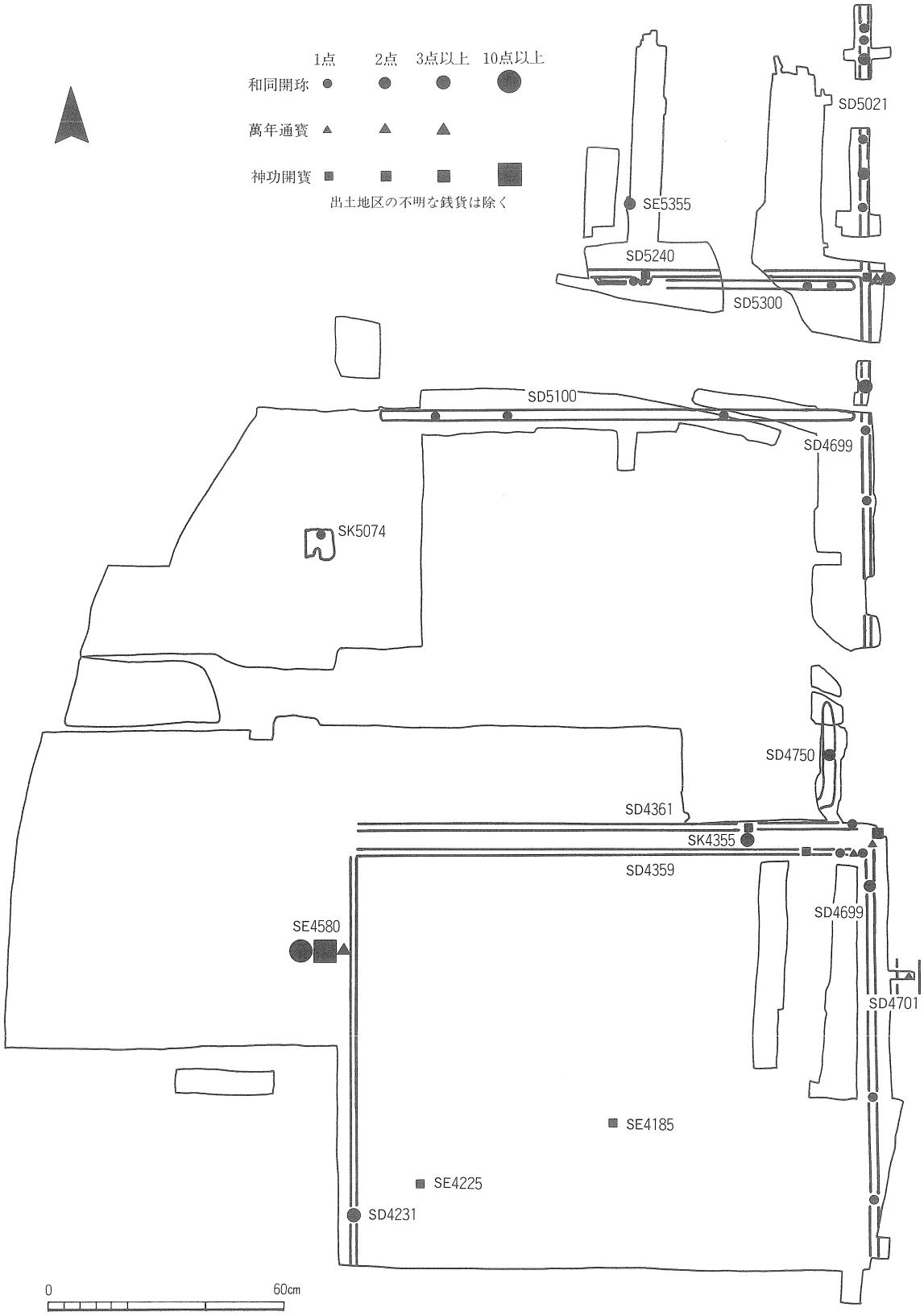


Fig. 72　銭貨出土遺構分布略図　1：600

七・八坪坪境小路の南・北両側溝であるSD4361・4359（F期）では、東二坊々間路との交差点近辺で和同開珎３点、萬年通寶１点が出土している。このほか坪境小路側溝では、上記以外の地点での出土はほとんどなく、二・七坪坪境小路西側溝SD4231A南端近くの１地区から５点が出土しているに過ぎない。以上のように、条坊関連遺構では道路交差点付近での出土が多い傾向にあるといえる。

和同開珎　初鋳は和銅元年（708）である。今回の調査区では86点を確認している。いずれも、構え上端が隷書風に開く「開」字を配するいわゆる隷開和同であり、古和同とされるものはない。一般に鋳上がりが良く銭文が整うが、なかには内郭縁が乱れ、孔内のバリが残るものもある。笵傷などから同笵とわかるものはない。

型式別にみると、A型式が27点、C型式が２点、D型式が８点、E型式が10点、F型式が６点、型式不明が33点である[1]。A型式のうち、SE4580出土の１（878）は銭型が他よりひとまわり大きく、銭文と内郭は周囲を鑿で調整しており、極めて細く明瞭である。銭文、外縁、内郭とも丁寧に研磨され、鈍いながらも金属光沢を有する。銭文上端は、他の和同開珎が粗く研磨され平板な印象を与えるが、１（878）の場合は文字上縁がやや丸みを帯びる。また、文字面も平滑に仕上げる。このような特徴から、これが銭笵の型押しに使用する「種銭」ではないかとの指摘がある[2]。　種　　銭

萬年通寶　初鋳は天平宝字４年（760）である。今回の調査区では８点を確認した。そのうち７点が完形である。鋳上がりは悪くないが、笵傷により銭文がつぶれるものが多く、鮮明に鋳出されたものは２点に過ぎない。

型式別ではA型式が１点、B型式が１点、C型式が２点、D型式が２点、型式不明が２点である。笵傷等により同笵と認定できるものはない。13（133）は「通」と「寶」の間に笵傷があり、表裏の型合わせが著しく損なわれている。15（139）は「年」から「通」にかけて笵傷が斜めに延びる。

神功開寶　初鋳は天平神護元年（765）である。今回の調査区では20点を確認した。12点が完形品である。総じて鋳上がりは悪くないが、銭文が不鮮明で、裏面の鋳出しの浅いものが完形品の半数を占める。

型式別では、A型式が１点、B型式が２点、E型式が11点、F型式が３点ある。今回出土した神功開寶では、A・B型式はいずれも「寶」の第４画を「宀」内に納めるが、E・F型式では同じく第４画が「宀」の外へ出る。このほか図示していないが、笵の崩れが著しく外縁の一部が失われ、鋳上がりも悪く、文字面が鋳放しのままのもの（452）や、銭文が鮮明に鋳出されているが、裏面は鋳放しのままのもの（453）などがある。

中国銭　中国銭は天聖元寶（1023年初鋳）が３点、皇宋通寶（1037年初鋳）が２点、治平元寶（1064年初鋳）が１点、元豊通寶（1078年初鋳）が２点、銭種不明３点がある。いずれも腐蝕が著しく、わずかに銭文が読み取れるに過ぎない。

模鋳銭　27は皇宋通寶を摸したものである。本銭に比較すると、４字すべてに変更が加えられている。

1）各種銭貨の型式分類は、『平城宮報告Ⅵ』1975，pp.97～103による

2）小林茂之、林洋市、船越康、松浦辰夫各氏の御教示による。

6　金属・ガラス・石製品他

A　金属製品

金属製品は不明品も含めて158点あり、その内訳は銅製品が51点、鉄製品が108点である。これらには床土あるいは包含層から出土したものや、後世の製品もしくは時期の不明なものもあるが、多くは奈良時代の遺構にともなって出土したものである(Fig.73)。各遺構ごとの出土金属製品の内訳は、Tab.43のとおりである。

銅製品には帯金具、瓔珞、鏁(はばき)、轡、座金、鋲、鏡、人形、鈴、鋳造関連品、切り屑、延板、箸、棒状品、鎌倉時代以降の鏡(蓬萊双雀鏡)などがあり、鉄製品には刀子、楔、斧、鑿、釘、鋏、鏃、錠・鍵、金具、歯車形鉄製品、板・棒、時期不詳の鍋などがある。

i　銅製品 (Pl.224, Ph.274－1～34)

鉸具　1点(1)出土。端部を丸くおさめた鋲留の板金具で、刺鉄を装着しない型式。外枠を失い、板金具は破損して片面のみ残る。現存長2.3cm、幅2.1cm、厚0.1cm、現存重量2.5g。SD

遺構番号	遺物	点数
SB4800	不明鉄製品	1
SD4150	銅素文小鏡	1
SD4231	銅鈴	1
SD4359	銅巡方表金具a	3
SD4361	銅鉈尾裏金具	2
	銅瓔珞(佐波理)	1
	鉄扉金具	1
SD4589	不明銅片	1
SD4699	銅絞具	1
	銅素文小鏡	1
	鉄刀子	3
	鉄釘(方頭)	1
	鉄海老錠鍵	1
	鉄扉金具	1
	鉄鎌？	1
	不明鉄製品	1
SD4701	不明鉄製品	1
SD4750	銅切り屑	2
	鉄釘(折頭)	1
	不明鉄製品	1
SD4909	不明鉄製品	1
SD5021	銅座金	1
	銅鈴	1
	鉄刀子	1
	銅巡方裏金具a	1
SD5100	銅丸鞆表金具	2
	銅鏁	1
	銅轡(うばら轡)	1
	銅人形	3
	不明銅板	1
	不明銅製品	1
	鉄釘	1
	鉄釘(円頭)	1
	鉄釘(折頭)	1
	鉄釘(方頭)	1
	鉄海老錠鍵	1
	不明鉄丸棒	1
	不明鉄製品	1
SD5240	銅丸鞆裏金具	1

遺構番号	遺物	点数
SD5240	瑞雲双鸞八花鏡	1
	鉄釘	1
	鉄釘(折頭)	2
	不明鉄角棒	1
SD5300	銅鉈尾表金具	3
	銅丸鞆表金具	1
	銅丸鞆裏金具	1
	銅瓔珞	1
	鉄刀子	3
	鉄楔	2
	鉄鑿	1
	鉄釘	3
	鉄釘(折頭)	2
	鉄釘(長方頭)	1
	鉄釘(方頭)	1
	鉄釘(截頭)	1
	鉄鋏	1
	鉄座金	1
	鉄海老錠牡金具	1
	鉄環連結部	2
	歯車形鉄製品	1
	不明鉄角棒	3
	鉄釘？	1
	鉄鏃？	1
	不明鉄製品	1
SE4116	鉄鎌？	1
SE4225	鉄釘(截頭)	1
	鉄鏃	1
SE4365	銅素文小鏡	1
SE4366	鉄釘(環頭)	1
SE4580	銅巡方表金具c	1
	銅飾鋲	1
	鉄刀子	3
	鉄釘	2
	鉄釘(円頭)	2
	鉄釘(環頭)	1
	鉄釘(折頭)	1
	鉄釘(方頭)	2
	鉄釘(截頭)	2

遺構番号	遺物	点数
SE4770	鉄鏃	1
	不明鉄製品	1
SE5075	銅鉈尾裏金具	1
	不明銅片	1
SE5140	鉄刀子	1
	鉄釘(折頭)	1
SE5205	鉄刀子	1
SE5220	鉄刀子	2
	鉄釘(円頭)	1
SE5355	鉄斧	1
	鉄釘	1
SK4397	蓬萊双雀鏡	1
SK4545	銅素文小鏡	1
SK5074	鉄釘(環頭)	1
床土	銅箸？	1
	銅簪	1
	鉄鎌	1
	鉄釘	1
	鉄釘(環頭	1
	不明鉄製品	2
包含層	銅箸	1
	銅鋳竿	1
	銅板	1
	銅棒状品	1
	不明銅製品	1
	不明銅片	1
	キセル	1
	鉄楔	1
	鉄釘	2
	鉄釘(方頭)	1
	鉄鍋	2
	鉄環	1
	鉄金具	3
	不明鉄板	2
	不明鉄棒	2
	鉄鋸？	1
	鉄釘？	4
	不明鉄製品	3
その他	キセル	2

Tab.43　遺構別出土金属製品点数表

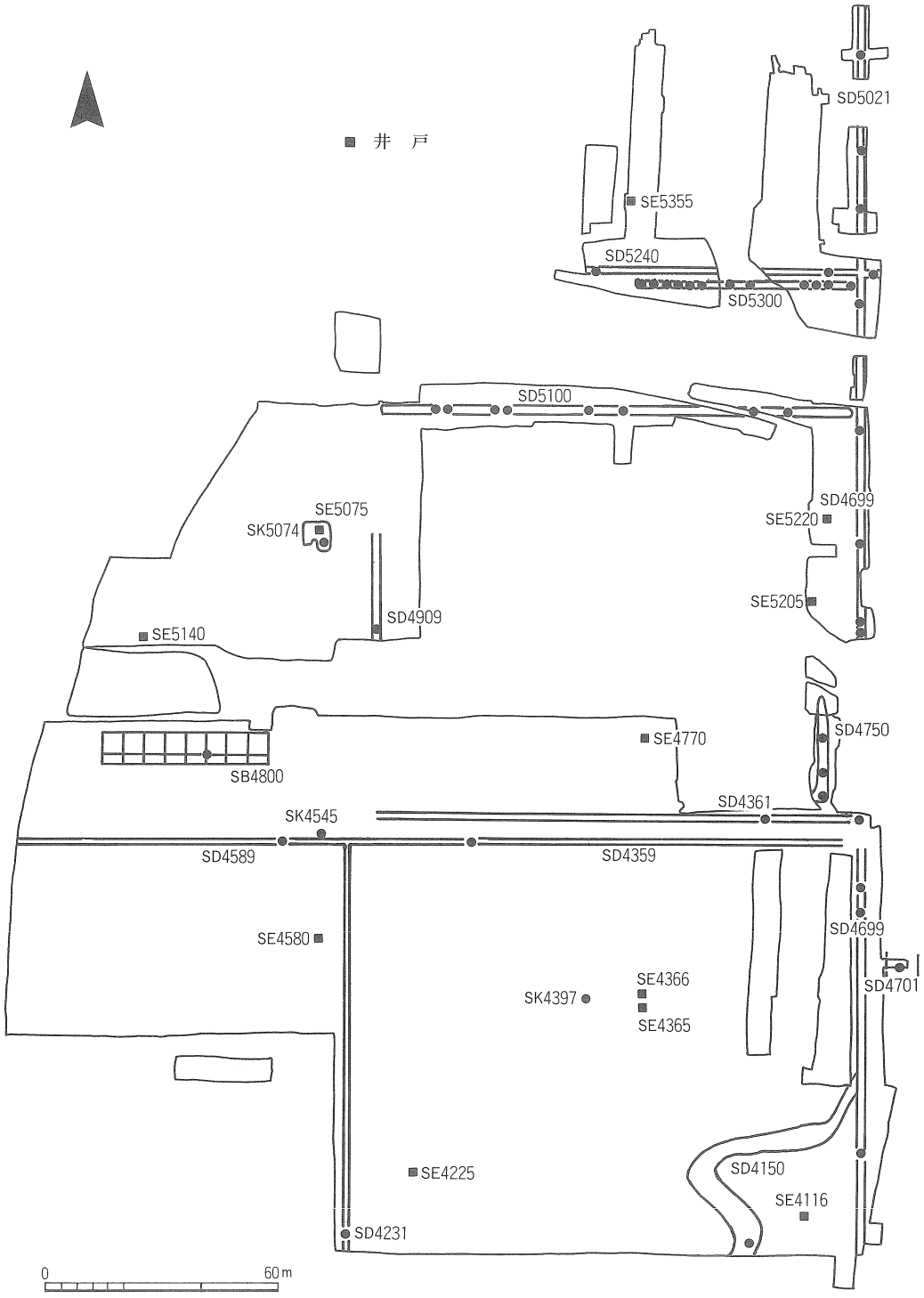


Fig.73　金属製品出土遺構分布略図

4699中層出土。

鉈尾　表金具3点、裏金具3点がある。10・11は鞐(こはぜ)を呈する表金具。裏面の3隅に鋲足を鋳出する。大部分が剝離しているが、いずれも黒漆を塗る。10は長さ2.4cm、幅2.5cm、高さ0.3cm、重さ4.6g。SD5300木屑層出土。11は長さ2.4cm、幅2.4cm、高さ0.3cm、重さ4.0g。SD

5300木屑層出土。12～14は板金に孔をあけ、周縁を面取りした裏金具。12は大きく欠損し、先端部と基部を失い、２個の鋲孔が残る。鞆形を呈するのであろう。現存長2cm、同幅2.3cm、同厚さ0.1cm、同重量2.1g。SE5075暗灰色砂層出土。13は長く伸びた鞆形を呈するもの。先端部の鋲孔は二つあるが、為損じであろう。土圧により折れ曲がる。長さ4.2cm、幅2.4cm、厚さ0.1cm、重さ8.0g。SD4361上層出土。14は長方形に近い鞆形を呈する。長さ3.2cm、幅2.6cm、厚さ0.05cm、重さ5.5g。SD4361上層出土。

巡方　表金具（２・３）４点、裏金具１点（４）がある。２はほぼ正方形を呈する巡方。６本の鋲足を鋳出する。腐蝕のため周縁が欠失する。現存長3.6cm、同幅3.5cm、同高さ1.1cm、透孔2.7×0.5cm、同重量16.3g。SD4359下層出土。３は横長の長方形を呈し、下辺両端と上辺中央部に鋲足を鋳出する。黒漆がわずかに残る。長さ3.2cm、幅1.5cm、高さ0.5cm、透孔2.4×0.3cm、重さ8.6g。SE4580井戸枠内埋土の上７層出土。４はほぼ正方形を呈する裏金具である。板金に透孔をあけ４隅に鋲孔を穿つもので、３孔に鋲足が残る。黒漆がよく残る。長さ2.1cm、幅1.8cm、厚さ0.15cm、透孔1.6×0.6cm、重さ2.3g。SD5021暗灰色砂層出土（下層）。

丸鞆　表金具３点（５～７）、裏金具２点（８・９）がある。表金具はいずれも黒漆を塗り、３鋲足を鋳出する平板状のもの。５は長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm、透孔1.5×0.6cm、重さ1.8g。SD5100木屑層出土。６は裏面に黒漆がわずかに残る。長さ２cm、幅1.4cm、厚さ0.2cm、透孔1.5×0.6cm、重さ1.8g。鋲足の一つがよく残り、長さが0.3cmある。SD5100木屑層出土。７は黒漆がよく残る。長さ2.1cm、幅1.4cm、厚さ0.2cm、透孔1.6×0.8cm、重さ1.6g。SD5300木屑層出土。裏金具は板金に透孔をいれ、下底両端と頂部に鋲孔をあけたもの。痕跡程度であるが黒漆が残る。８は長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.1cm、透孔1.5×0.7cm、重さ１g。SD5240出土。９は長さ2.4cm、幅1.9cm、厚さ0.2cm、透孔1.6×0.5cm、重さ1.4g。SD5300木屑層出土。

瓔珞　２点（16・17）。16は佐波理鋺等の破片を転用したものである。楕円形に整形し、上端に径0.11cmの円孔を穿つ。周縁に整形時の切断面が残り、一部にもとの容器の破損部をとどめている。円孔部には穿孔の際に生じた亀裂が認められる。長径4.4cm、短径2.6cm、厚さ0.1cm、重さ5.0g。SD4361上層出土。17は曲面をもつ楕円形の銅板の上下に孔をあけたもの。上下端が磨滅し、孔は痕跡をとどめるのみである。表裏面は銅地金の金属光沢を有するが、表面下部に黒色の付着物がある。現存長径3.3cm、同短径1.4cm、同厚さ0.1cm、同重さ3.3g。SD5300木屑層出土。

鏃（はばき）　１点（15）が出土。幅3.8cm、厚さ0.7mmの銅板を断面長楕円形の筒形にまるめ、両端を重ね合わせて接合する。周縁は鑢がけし、一端側縁に半円形の切り欠きをいれる。黒漆装とするが、黒漆はかなり剝離する。表面には凹凸がかなりある。ほぼ完形で、長径3.16cm、短径1.67cm、重さ14.0g。SD5100黒灰色粘土層出土。

座金　１点（19）出土。円形の板金の中央部に方孔をあけ、周縁を面取りした後に金鍍金したもの。厚さが一様で、輪郭も整う。直径1.5cm、厚さ0.1cm、孔の一辺0.4cm。SD5021砂混灰色粘土層（下層）出土。

飾鋲　１点（18）出土。笠形円頭で軸の断面が方形のもの。頭部はやや扁平で、下面はわずかにくぼむ。軸は頭部直下で折損しほとんど残らない。頭部直径2.3cm、同高さ0.7cm、現存重量12.1g。SE4580枠内埋土の上７層出土。

轡　1点（20）出土。荊棘轡（うばら）と呼ばれる轡の鏡板である。先端部の破片であるが、もとを合わせた2枚の木葉形に復元できる。横断面が菱形を呈し、先端部は鋭く尖る。鋳造品で、表面を鑢がけして黒漆塗りとするが、黒漆は大部分が剝離する。現存長5.4cm、同幅7.3cm、同重量35.0g。SD5100炭層出土。荊棘轡は、正倉院に鉄製のものがいくつか伝えられており、また山口県宮原遺跡などに出土例がある。宮原遺跡では引手の片方がついた長さ12cm程度の鉄製鏡板1枚と、兵庫鎖のついた鉸具が出土した。　荊棘轡

人形　3点（25～27）。薄く展延した銅板を細長く切り、浅い切込をいれて頭部、胴部、脚部を表現したもの。周縁は切放したままで、やすりがけなどで仕上げていない。25・26は完形に近い。いずれも切込は頸部が「V」字形、胴部が逆「L」字形、脚は短く二股に分れる。顔の表現は明瞭でない。25は長さ15.1cm、幅1cm、厚さ0.07cm、重さ4.5g。SD5100木屑層出土。26は腰部付近が腐蝕のため欠失する。長さ13.6cm、幅1.1cm、厚さ0.02cm、重さ1.7g。SD5100木屑層出土。27は腐蝕のため頭の一部と胴下半部以下を欠失する。頸部の切込は「V」字形である。現存長9.1cm、同幅1cm、同厚さ0.03cm、同重量1.0g。SD5100木屑層出土。

鈴　2点出土。1点はSD5021出土品であるが土圧により潰れており、詳細は不明。28は球形の鈴。上と下に分けてつくり、上半部を下半部に嵌めこむもの。頂部には鈕をさしこむ径2mmの円孔があるが、鈕は欠失する。上半部と下半部の接合部は外反する。銹化が著しく、下半部は全周の約1/4をとどめるに過ぎない。上半部内には錆により固化した土が充満する。直径2.3cm、現存高1.9cm、厚さ0.05cmで、周長は7.2cm（2寸4分）である。SD4231上層出土。

素文小鏡　4点（29～32）出土したが、西側溝出土品以外は腐蝕が著しい。いずれも小型の鋳造品で、いわゆる唐式鏡である。三角縁に近い斜縁で、鏡面は凸面をなし、鏡背面が浅い匙面となり、鈕座はなく素鈕である。背面は鋳放しで、鏡面と鏡縁外面を鑢がけする。29はくすんだ赤銅色を呈する薄いつくりのもの。鈕は鑢をかけて板状に整形しており、鈕孔も鑢がけし整った円形をなす。鏡面の反りは弱い。全体に腐蝕が進み、一部腐蝕による穴があく。面径3.6cm（1寸2分）、高さ0.4cm、厚さ0.08～0.1cm、鏡縁厚0.15cm、鈕孔径0.2cm、重さ4.0g。SE4365掘形埋土から出土したもの。30は鏡面の反りが強い。鋳上がりはよくなく全体に鬆がはいる。鈕の頂部が欠損する。面径4.4cm（1寸5分）、現存高0.5cm、同厚さ0.05～0.12cm、同鏡縁厚0.2cm、同重量11.0g。SD4150第3層出土。31は保存がよい。鏡面は平滑で金属光沢を有し、反りが強い。面径4.5cm（1寸5分）、高さ0.5cm、厚さ0.1～0.12cm、鏡縁厚0.15～0.2cm、重さ15g。SD4699暗灰色砂層(下層)出土。32は腐蝕が顕著で、鏡縁外周全体を欠き、鏡面全体が薄く剝離し、鈕の頂部が欠損する。鋳上がりはよくなく、片側2/3に鬆がはいる。鏡面の反りは弱い。復原面径4.5cm（1寸5分）、現存高0.6cm、同厚0.2～0.3cm、同鏡縁厚0.4cm、同重量16.0g。SK4545出土。

瑞雲双鸞八花鏡　1点（33）出土。完形品でいわゆる唐式鏡と称されるもの。くすんだ暗赤褐色を呈するが遺存状態はよい。鈕は、平面形がくびれの弱い分銅形を呈し、鈕孔が左右方向にあき、鈕座はない。文様は1条の圏線により内区文様と外区文様に分かれる。内区文様は、鈕の上方に瑞雲を配し、左右に鸞を向い合わせ、下方には蔓草に止まる鳥を配す。外区文様は花文と雲文を交互に配す。八花形の外縁は平縁である。文様の表出はややあまく、内区では右の鸞の左足の蹴爪が消失し、羽毛や顔が不鮮明である。外区では、上方に配した花文と雲文それ　「唐式鏡」

ぞれから右回りに数えて、第２・３花文と同雲文が不鮮明である。また、内区下方の蔓草の左端付近に笵傷があり、蔓草の左端が欠失している。笵傷はこのほかに、内区雲文の下部や外区第３雲文と第３花文の間などある。外縁の輪郭線は、第１花文上方の花形から右回りに数えて、第７花形と第８花形の交わるあたりに歪が生じている。面径11.5cm、高さ0.75cm、外縁の厚さ0.45cm、界圏の径7.4cm、重さ221.0g。二条大路と東二坊々間路の交差点上にあたるSD5240最上層から出土。層位からみて奈良時代末～平安時代にかけて埋没したものであろう。

「和鏡」 **蓬莱双雀鏡**　１点(34)出土。圏線に沿って外区を打ち欠いて、儀鏡に転用したもであろうか。腐蝕して遺存状態がよくなく、文様が不鮮明となっている。内区文様は蓬莱山図の左側に双雀を向い合わせ、周囲に珠文を配する。鈕座は短い列点を配する花形座。鈕孔は左右方向にあける。土圧により歪んでいる。直径6.7cm、高さ0.49cm、厚さ0.1～0.19cm、重さ29.0g。SK4397出土。鎌倉時代以降。

鋳竿　１点（21）出土。いわゆる鋳竿、あるいは「枝」と呼ばれるもの。同一製品を同時に複数鋳込むことのできる鋳型の、湯道と堰の部分で固化した溶湯の残欠である。湯道部は上・下とも折損する。鋳造品は不明だが、堰の間隔が比較的広いことから、さほど小型のものを鋳造したのではないであろう。現存長7.2cm、同幅２cm、同じく湯道部の直径0.6cm、同重量11.6g。包含層出土。

銅板切り屑　２点（23・24）ある。切り放した際の不連続な切断面が周縁部に残る板金片。端部がまくれている。23は長さ5.7cm、幅3.8cm、厚さ0.09cm、重さ3.2g。24は全体が截頭錐体形を呈している。直径3.4cm、高さ0.9cm、厚さ0.05cm、重さ3.4g。いずれもSD4750出土。

銅板　22は薄く延ばした細い板。一方の側辺がわずかに乱れているが、ほぼ一様な幅を保つ。一端が斜めに切断されて片刃状を呈する。製品というよりは、むしろ素材ないし原料と考えるべきであろう。現存長10.7cm、幅1.4cm、厚さ0.09cm、現存重量10.7g。SB42区包含層出土。

ii　鉄製品（Pl.225, Ph.275－35～77）

刀子　木製品の項で取り上げたものを含めて14点出土しているが、ここでは刀身のみのものを取り上げる。38・39は平造り角棟で、刃関と棟関をつくりだすもの。38は現存長20.9cm、同幅１cm、刀身中央部の棟厚さ0.3cm、茎の厚さ0.3cm、現存重量15.3ｇ。SD5300木屑層出土。39は現存長10.7cm、同幅1.3cm、刀身中央部の棟厚0.2cm、茎の長さ7.1cm、茎の厚さ0.3cm、現存重量9.2g。SE5205井戸枠内埋土出土。40・41は平造り角棟で、棟関のみをつくりだすもの。40は端部がわずかに欠失するが、完形に近い。長さ13.2cm、幅１cm、刀身中央部の棟厚0.2cm、茎の厚さ0.3cm、重さ8.6g。SD4699暗灰色土層出土。41は現存長7.3cm、同幅0.6cm、棟厚0.3cm、茎の厚さ0.2cm、現存重量2.9g。SD5300木屑層出土。

楔　３点（35～37）出土。35・36はいずれも平面形がほぼ方形を呈する、薄いつくりのもの。大きさもほとんど同じ。35は下端部付近に一条の隆起線が水平に通る。刃の先縁部は丸みを帯び、基部はわずかに傾斜する平坦面をなす。打撃のためであろうか、基部の両端部が少し外へ広がる。幅３cm、高さ3.1cm、隆起線の厚さ0.3cm、重さ12.2g。SD5300木屑層出土。36は刃部を片側から面取りして、片刃としたもの。基部の一側縁と一方の面の両側縁を面取りする。基部の一端が欠失する。幅2.8cm、高さ2.8cm、厚さ0.3cm、重さ11.5g。SD5300木屑層出土。

37は長方形を呈するもの。外圧により折れ曲る。刃部は大きく斜めにおとし片刃とする。刃先端部は欠損する。幅1.9cm、現存長3.3cm、厚さ0.3cm、重さ1.7g。包含層出土。

斧　1点（44）出土。小型の袋状鉄斧。手斧であろうか。長さ7.4cm、幅3.9cm、袋部深さ3.4cm、袋部内径2.8×0.9cm、袋部厚さ0.2cm、重さ90.8g。SE5355井戸枠内埋土下層出土。

鑿　1点（43）出土。断面方形の鉄棒の先端部を薄くつくり、小さく片刃をつけたもの。中央部よりわずかに上方で最も厚みを増す。全体に錆化が進み、やや膨張するが、よく本来の形をとどめる。長さ8.2cm、幅0.6cm、厚さ0.6cm、刃幅0.4cm、重さ6.8g。SD5300木屑層出土。

鉄釘　計38点出土した。頭部の形態から5種類に分けることができるが、頭部が欠損して形状の不明なものが7点ある。

方頭釘は6点ある。47・48は先端部が欠損する長脚のもの。47は現存長14.1cm、頭部径2.1×1.7cm、現存重量30.3g。SD4699中層出土。48は頭部が偏よる。現存長10.3cm、頭部現存径1.4×1.4cm、現存重量15.5g。SD5300木屑層出土。49・50は小型品。49は脚部が徐々に広がって頭部へと移行する。完形に近い。現存長3.6cm、頭部径1.0×0.8cm、現存重量2.0g。SE4580井戸枠内埋土上8層出土。50は現存長2.4cm、頭部径1×0.9cm、現存重量1.9g。SD5100木屑層出土。51は頭部を横長の長方形につくるもの。頭部幅と脚部厚さが同じとなる。現存長5.0cm、脚部厚0.6cm、頭部長径3.7cm、現存重量14.0g。SD5300木屑層出土。

円頭釘は3点ある。52・53は小型のもの。52は現存長1.8cm、頭部径1.1cm、現存重量0.8g。SD5100木屑層出土。53は脚部が緩やかに頭部へと移行する。現存長3.3cm、頭部径1cm、現存重量2.3g。SE4580井戸枠内埋土の上8層出土。54は頭部を扁平でやや大きな笠形につくる。つくりは丁寧である。現存長3.9cm、頭部直径2.5cm、現存重量8.5g。SE5220井戸枠内埋土出土。

折頭釘は5点ある。55は長い頭部を直角よりわずかに鋭角に折り曲げる。先端部を失うが完形に近い。錆化のため暗赤褐色を呈する。現存長11.4cm、頭部幅0.8cm、同長さ2.9cm、現存重量15.6g。SE5140井戸枠内埋土出土。56はやや長めの折頭部が鋭角をなして曲がり、脚先端部もねじれるが、いずれも2次的な力が加わったためである。現存長9.1cm、頭部幅0.7cm、同長さ1cm、重量5.7g。SD5300木屑層出土。57は完形。短い頭部を直角に曲げる。長さ5.0cm、頭部幅0.7cm、同長さ0.5cm、重量2.4g。SE4580井戸枠内埋土上8層出土。

環頭釘は3点ある。61はほぼ完形。頭・脚部の断面が円形を呈する。長さ5.5cm、頭部直径1.2cm、重量4.0g。SE4366井戸枠内暗灰色粘土層出土。62・63は頭部断面が円ないし多角形で、脚部断面が方・長方形をなすもの。62は完形で、長さ5.9cm、頭部直径1.6cm、重量6.0g。SE4580井戸枠内埋土の上8層出土。63は脚部を欠損する。脚部断面が長方形を呈する。現存長4.7cm、頭部直径1.6cm、現存重量4.7g。SK5074出土。

截頭釘は4点ある。58は脚端部がわずかに欠失。断面は方形。現存長8.3cm、幅0.8cm、現存重量17.9g。SE4225井戸枠内埋土出土。59は断面長方形を呈する短いもの。完形で、長さ5.6cm、幅0.8cm、厚さ0.5cm、重量8.4g。SE4580井戸枠内埋土の上8層出土。60は断面方形を呈する細身のもので、脚下部を欠損。現存長3.4cm、幅0.7cm、現存重量2.1g。SD5300木屑層出土。

鋏　1点（42）出土。断面長方形の細い鉄棒の両端を尖らせ、等脚台形につくるもの。一方の端部を欠失。現存幅3.8cm、高さ2.4cm、厚さ0.2cm、現存重量1.8g。SD5300木屑層出土。

座金　72は薄い円形板の中央部に、方孔をあけたもの。周縁部を面取りする。直径3.2cm、厚

さ0.1cm、孔の一辺0.7cm、重量3.1g。SD5300木屑層出土。

鉄鏃　2点（45・46）出土。鑿矢式鉄鏃。45は長い棘篦被と比較的短い茎からなるもの。身の先端部を欠失する。棘部には漆らしき黒色付着物が認められる。現存長14.4cm、鏃身幅0.6cm、棘幅0.7cm、茎長4.7cm、現存重量9.0g。SE4770明灰色粘土層出土。46は茎の大部分を欠失する。篦被は中央部が細くなり、棘はつかない。土圧により屈曲する。現存長7.7cm、鏃身幅0.6cm、篦被幅0.7cm、現存重量4.7g。SE4225井戸枠内埋土出土。

錠　66～68はいわゆる海老錠の金具。牡金具1点（68）と鍵2点（66・67）が出土。牡金具の施錠部の68は、2本の発条軸を上と下に配し、発条を水平に開く。下発条すべてと上発条の一部および弦通し孔を欠失する。発条軸は土圧で曲がり、銹化のために発条が固着する。現存長8.8cm、幅1.3cm、現存高2.1cm、重量17.6g。SD5300木屑層出土。67は幅0.7～1.2cm、厚さ0.3cm前後の鉄板からなる。一端を長さ1cm程度直角に折り曲げ、そこに1辺0.6cm前後の方孔をあけ鍵爪とし、他端は板の幅を0.7cm前後に狭めた上で右に3と1/4回捩じり、鑢がけして螺旋状の握りとする。握り部は環頭。ほぼ完形である。全長13.1cm、幅1.2cm、高さ1.5cm、重さ22.0g。SD4699下層出土。66は鍵爪部分を欠損する。銹化が著しく遺存状態はよくない。環頭。現存長11.2cm、同幅0.8cm、厚さ0.3cm、現存重量9.5g。SD5100木屑層出土。

錠牡金具

扉金具　2点出土。鋳放しの鋳造品。長方形板の一方の端部両面に突帯を鋳出し、他端部の中央に径1cm前後の円孔をあけるもの。65は厚さが一様ではなく、孔が偏在する。いま図のように突帯のある方を天とし、突帯が左上がりになるように置くとすると、左半部が厚くなり、左側面が磨滅して平滑になっている。全体に銹化が進むが比較的残りはよく、完形に近い。同様の金具は東三坊大路東側溝SD650から環形の金具とともに出土（『平城宮報告VI』1974, PL.103）しており、いずれも扉金具ではないかと考えられるが、本例が扉のどの部位に使用されたかは明らかでない。全長10.2cm、幅4.7cm、板厚0.6cm、両突帯の頂点間2.2cm、重さ219g。SD4699下層出土。

環頭金具　2点出土。2本の細い鉄棒を中央部で環状に曲げて180度折返し、折返した部分を重ね合わせて鍛接し環を連結したもの。いずれも端部を欠損し、種類は不明。環は銹化し固着する。69は現存長5.9cm、軸厚さ0.5cm、環外径1.8cm、現存重量15.8g。SD5300木屑層出土。70は現存長4.3cm、環外径1.8cm、軸部厚さ0.4cm、現存重量13.2g。SD5300木屑層出土。

鉄鍋　全周の1/10程度の口縁部片1点（76）が出土した。頸部から直角に折れ曲がった口縁部は、そのまま水平に大きく張りだし、端部付近でわずかに外傾しながら厚みを減ずる。暗赤褐色に銹化するが、遺存状態は安定している。出土層位から見て後世のものか。口縁部推定径30cm、現存高1.7cm、現存重量68.8g。包含層出土。

歯車形鉄製品　1点（73）出土。17枚の鋸歯状突起が巡る断面楔形の環状金具。環は歯幅ひとつ分だけ切断してあけている。土圧により歪んでおり、全面が赤褐色に銹化。外径3.8cm、内径1.9cm、厚さ0.4cm、現存重量6.9g。SD5300木屑層出土。

鉄棒・鉄板　74は極めて細くつくる丸棒。銹化、膨張し遺存状態は良くない。一方の端部が欠失し、土圧で曲がる。現存長7cm、銹の剝落した部分の直径0.2cm、現存重量3.3g。SD5100出土。71は著しく銹化し遺存状態が悪く、中央部が土圧で曲がるが、完形の鉄棒である。断面は多角形を呈する。層位から見て後世のものか。現存長16.2cm、直径0.8cm、重量64.5g。包

含層出土。77は別材に鋲留した際の小型の鋲が残る細い薄板。両端が欠損し、銹化が著しく、遺存状態が悪い。用途不明。現存長7.9cm、幅0.8cm、厚さ0.2cm、鋲現存長0.6cm、鋲径0.2cm、現存重量4.7g。SD4750木屑層出土。

不明鉄製品　75は遺存状態不良のため形状不詳。鉄鏃か。中央部が細く、両端が広がっている。現存長7.6cm、同幅0.6cm、同厚さ0.2cm、同重量1.9g。SD5300木屑層出土。64は刀あるいは刀子形を呈するもの。両端を欠失する。両側辺を薄くし、断面紡錘形につくるが、鋭利な刃はつけない。現存長5.0cm、同幅1.8cm、同厚さ0.3cm、同重量8.7g。SD5100木屑層出土。

B　鍛冶・鋳造およびガラス関連土製品他

土製品には坩堝（トリベ）、鞴羽口、鞴羽口台、炉壁などの鍛冶・鋳造関連遺物があり、ガラス関連遺物にはガラス坩堝やガラス小玉鋳型などの他にガラス小玉がある。他に、実体の不明な壁体、鉱滓、鉛板、銅塊、黄鉄鉱、墨、赤色顔料や鍛冶・鋳造炉に関連すると考えられる焼石などがある。これらの出土遺構と品目別の重量は、Tab.44、Fig.74のとおりである。

i　鍛冶・鋳造関連遺物（Pl.226, Ph.276－1～9）

坩堝（トリベ）　総点数約65片、重量にして1.5kg近く出土。全形を知ることのできるものはごくわずかであり、坩堝とトリベとの区別が困難であるため両者を一括して扱う。遺構に伴って出土した坩堝は、重量にして全体の50％程度を占め、SD5100・5240およびSX4495出土のものが全体の約40％に達する。確認できるもののほとんどが粘土製の専用坩堝であるが、わずかながら土器を転用したものが3点認められる。ただし、土器転用の坩堝は細片のため図示できない。

1は粘土製専用坩堝で、全形を復原できる唯一のもの。全体のほぼ3/4が残る。浅い皿状を呈し、外面は火熱のため灰色ないし灰黒色に変色する。胎土は多孔質で、石英砂粒を含む。内面には赤紫色を帯た灰黒色の鉱滓が全面に薄く付着する。後述する蛍光X線分析によれば、この鉱滓からは銅、鉄、砒素が検出できたが、錫あるいは鉛は検出できなかった。口径11.4cm、高さ3.7cm、深さ2.1cm、器壁厚1.7cm、現存部重量309.0g。SD5100木屑層出土。土器転用坩堝はSX4495から2点、SD4750から1点出土している。このうちSX4495炭層出土品(13)は口縁部の小片で、器形が明らかでないが土師器を転用したものである。外面は灰色に強く焼け、内面には緑色を帯びた灰黒色の鉱滓が付着する。外面に貼り付けたであろう粘土は剝離したものか、今は認められない。なお、後述するようにこの鉱滓からは銅が検出されている。　転用坩堝

羽口台　2点が出土。9は比較的残りが良いが約1/4を失う。平面形および立面形は台形を呈し、底部がやや狭い。上面はやや幅の広い溝状に窪み、長軸に平行して傾斜する。底面に対する傾斜角は18度前後である。2次的な火熱を受けて、全体に赤色ないし灰色に変色する。高い方の端部は小口面から上面にかけて強く焼けて亀裂が走る。低い方の小口は大きく欠損しており明らかではないが、隅切角ないし丸くおさまるのであろう。胎土は細かな砂粒を含むが、比較的緻密である。現存部長9.5cm、同幅8.8cm、高さ7.1cm、窪みの深さ1.6cm、窪みの現存部幅5.2cm、現存部重量356.0g。SX4495底部（炭層内）出土。この他に図示していないが、SD5100炭層出土品が1点あり、これは現存部長6.4cm、同幅6.6cm、同高さ7.1cm、上面窪み

現存幅2.8cm、同重量230.0gで、9とほぼ同形・同大と見ることができる。胎土は細かな砂粒を含むが比較的緻密である。

羽口　全体で総点数約450片、約24.3kg出土した。重量にして約50%が遺構から出土しており、全体の約1/3がSD5100・5300、SX4495から出土した。ほとんどが先端部ないし胴部片であり、元口部は少ない。すべて使用されて火熱のために変色破損し、もとの法量や形態を知ることのできるものはない。先端部は火熱のため溶融し短くなっている。先端部の形状から、直線羽口（2・3・6～8）と湾曲羽口（4・5）に分けられる。

直線羽口　2・3は比較的細身のつくりで、通風孔先端部の直径が小さなもの。2は先端部に滓あるいは器壁等の溶融物が垂下した状態で付着する。羽口装着角度は5～10度であろう。胎土に1cm大の小礫を含む。通風孔先端部直径2.1cm、現存部外径5.2cm、同長さ8.0cm、同重量171.9g。SD5300木屑層出土。3は羽口装着角度が5度前後と推定できるもの。外壁には整形の際についた稜線が明瞭に残る。胎土は多孔質で、砂粒を含む。通風孔先端部直径2.1cm、現存部外径4.5cm、同長さ5.7cm、同重量203.8g。6AFF－K区包含層出土。6～8は太めのつくりで、通風孔先端部の直径が比較的大きなもの。6は先端下半部が欠損する。外壁には整形の際についた稜線や波状の凹凸が残る。羽口装着角度は10度前後。胎土は粗く、3mm大の砂粒を含む。通風孔先端部直径2.5cm、現存部外径6.0cm、同長さ10.8cm、同重量314.7g。包含層出土。7は破損が著しいが、羽口装着角度を10度前後に復原できるもの。胎土に1cm大の小礫を含む。通風孔先端部直径2.8cm、現存部外径6.2cm、同長さ12.5cm、同重量236.6g。SD5100暗

遺構番号	遺物名	重量g
SA4199	坩堝	56.1
SA4860	羽口	35.1
SB4670	鉱滓	54.0
SB4680	羽口	154.7
SB4810	鉱滓	147.0
SB4940	羽口	31.8
SB5070	羽口	15.8
SB5083	羽口	51.9
SB5085	羽口	173.9
SD4150	ガラス坩堝	466.4
SD4231	羽口	410.7
SD4359	鉱滓	644.7
SD4361	羽口	13.3
SD4361	鉱滓	185.7
SD4589	鉱滓	158.8
SD4699	坩堝	28.8
SD4699	羽口	906.2
SD4699	鉱滓	95.2
SD4750	坩堝(土器転用)	16.1
SD4750	羽口	63.2
SD4750	壁体	21.6
SD4750	ガラス小玉	
SD4750	鉱滓	27.1
SD4750	銅塊	106.7
SD4779	鉱滓	9.0
SD4874	羽口	55.6
SD4874	鉱滓	79.0
SD4911	羽口	77.6
SD5021	羽口	70.3
SD5021	鉱滓	5.6
SD5079	坩堝	41.0
SD5088	羽口	148.8
SD5092	鉱滓	179.9
SD5094	羽口	343.6

遺構番号	遺物名	重量g
SD5094	鉱滓	140.0
SD5100	ガラス小玉鋳型	20.9
SD5100	坩堝	328.5
SD5100	羽口	3427.4
SD5100	羽口台	230.0
SD5100	炉壁	949.8
SD5100	壁体	260.8
SD5100	焼土	9.5
SD5100	焼石	13.4
SD5100	突起状ガラス	
SD5100	赤色顔料	2.6
SD5100	鉱滓	1257.5
SD5100	黄鉄鉱	0.7
SD5100	墨	1.9
SD5105	羽口	103.8
SD5240	坩堝	193.7
SD5240	羽口	521.7
SD5240	炉壁	26.4
SD5240	鉱滓	103.5
SD5246	羽口	249.1
SD5246	鉱滓	17.0
SD5300	坩堝	13.1
SD5300	坩堝(土器転用？)	3.0
SD5300	羽口	2239.7
SD5300	炉壁	75.0
SD5300	壁体	36.3
SD5300	焼石	151.0
SD5300	焼石？	12.8
SD5300	赤色顔料	6.4
SD5300	鉱滓	1330.2
SD5300	墨	1.3
SD5353	鉱滓	35.0
SE4405	鉱滓	18.5
SE4580	鉱滓	21.5

遺構番号	遺物名	重量g
SE5075	鉱滓	37.6
SE5205	羽口	35.3
SE5355	鉱滓	69.8
SK4679	鉱滓	56.5
SK4873	羽口	73.0
SK4909	羽口	3.2
SK4970	羽口	109.1
SK5074	羽口	422.6
SK5074	炉壁	91.0
SK5074	鉱滓	58.4
SK5076	鉱滓	14.1
SK5086	羽口	184.6
SK5086	鉱滓	108.6
SK5091	羽口	13.6
SK5155	鉱滓	102.9
SX4495	坩堝	65.5
SX4495	坩堝(土器転用)	38.4
SX4495	羽口	1667.2
SX4495	羽口台	356.2
SX4495	壁体	21.5
SX4495	鉱滓	16.4
その他	羽口	815.6
瓦堆積	坩堝	121.7
瓦堆積	羽口	47.0
床土	羽口	69.0
床土	鉱滓	219.9
整地土	羽口	1649.0
整地土	鉱滓	858.0
包含層	坩堝	424.0
包含層	羽口	10126.0
包含層	ガラス坩堝	149.5
包含層	鉱滓	1832.0
包含層	鉛塊	78.6

Tab.44　遺構別鍛冶・鋳造およびガラス関連土製品等出土量

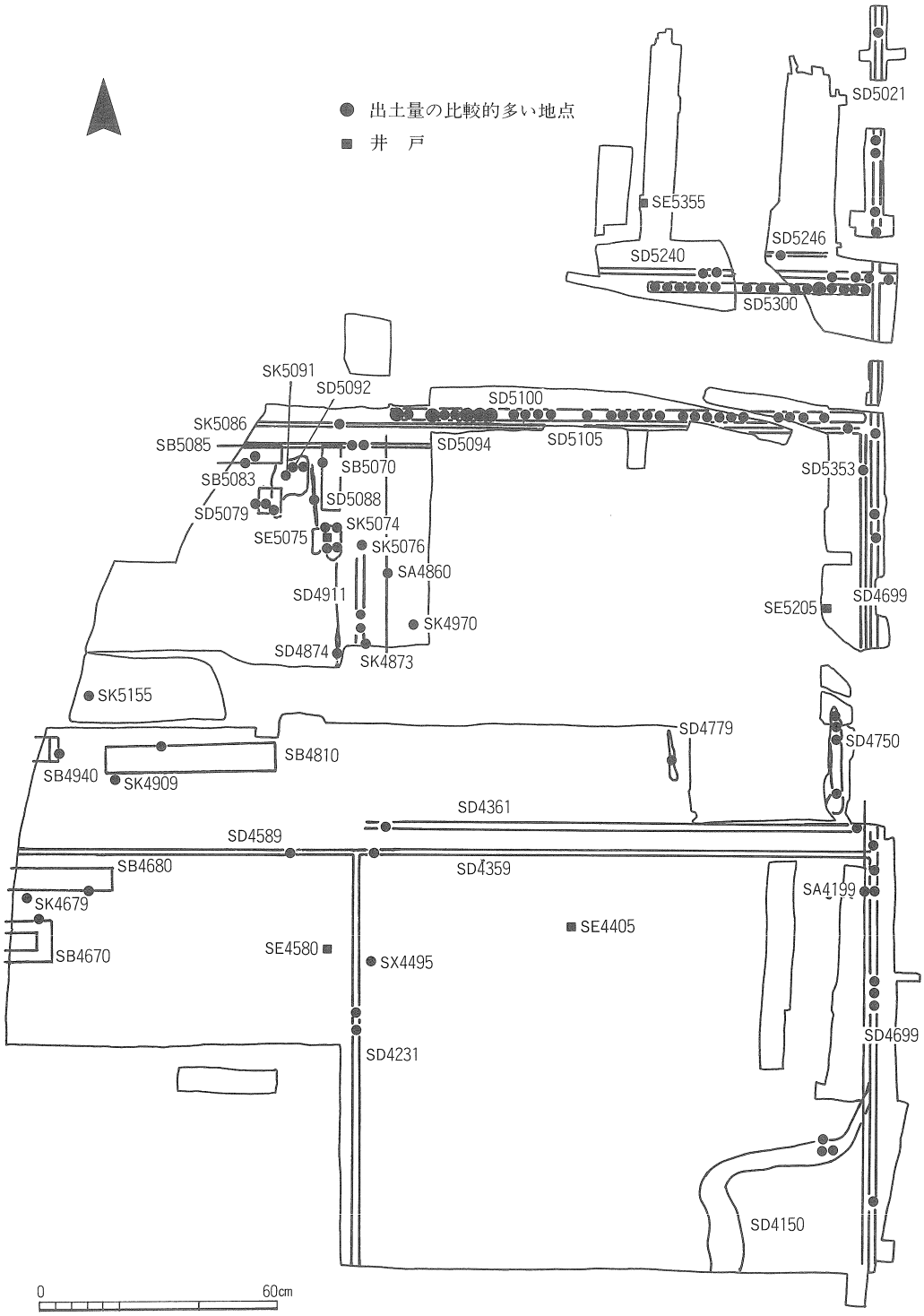


Fig.74　鍛治・鋳造およびガラス関連土製品等出土遺構分布略図

灰褐色砂質土層出土。8は通風孔直径が先端部付近で広がっているが、外径・器壁の厚さに比較すると総じて孔径が小さい。外面には整形痕が波状の凹凸となって明瞭に残る。羽口装着角度は20度前後。胎土は多孔質で砂粒を含む。通風孔先端部直径2.5cm、現存部外径7.1cm、同長さ13.5cm、同重量526.7g。SD5300木屑層出土。

4は空気吹き出し口が太い湾曲羽口。先端の口元を絞ることはない。吹き出し口が溶融ガラ　湾曲羽口

ス化して垂直に垂下することから、先端部を水平にして羽口を装着したことが分る。胎土は多孔質で6mm大の小礫を含む。通風孔先端部直径2.1×2.4cm、現存部外径6.0cm、同長さ10.5cm、同重量228.8g。6AFF区包含層出土。5は先端部の口元を少し絞るようにして湾曲させたもの。半面は特に強く焼けて収縮し、細かな亀裂が走る。全周の1/4を欠失する。破損のため装着角度は不詳。胎土に砂粒を含む。通風孔先端部直径2.5cm、現存部外径5.5cm、同長さ11.6cm、同重量172.0g。SX4495炭層出土。

ii　ガラス製品とガラス製作関連土製品（Pl.226，Ph.277－10～12）

ガラス小玉　11は青色を呈する、薄手のもの。側面は膨らむことなく、円筒形となる。直径0.4cm、高さ0.3cm、孔径0.2cm。鉛ガラス。SD4750木屑層出土。

ガラス坩堝　10は砲弾形を呈するガラス坩堝。底部片と口縁部片が残り胴部はほとんど欠失する。底部心を最も厚くつくり、次第に厚みを減じて口縁部を最も薄くし、口をわずかにすぼめる。口縁端部は平坦で、底部外面はさほど尖らせない。外面には一般的な格子敲目ではなく、細かな縄目状の敲目を施す。底部内面と口縁部内ならびに外面を淡緑色のガラス膜が薄く覆う。胎土は緻密であるが、3mm大の長石粒を含む。推定復原高19cm、復元口径9.6cm、底部心厚3.0cm、口縁部厚0.7cm。鉛ガラス。SD4150出土。

ガラス小玉鋳型　12は土師質の粘土板に小孔を多数穿った鋳型。四周を欠損しており全形を窺うことはできない。表面および断面は淡赤褐色、裏面は灰色を呈する。粘土板は単層で、上面をなで調整で平坦に仕上げ、直径3.5mmの円孔を2～4mm間隔で整然と配する。孔は現状で、不完全なものも含めて45個が確認でき、孔の底面中央部には直径1mm強、深さ4mm弱の穴があき、この穴に心棒を立てて小玉の穴としたと考えられる。心棒の穴は裏面近くにまで達する。裏面には布目圧痕が残る。表面および孔内にガラスの付着は認められない。現存長5.2cm、同幅4.9cm、厚さ0.8cm。SD5100暗灰褐色砂質土層出土。

iii　鉱滓他（Ph.277－16～23）

鉱滓　ここでは鉄滓や銅滓あるいは鋳造の際に生ずる金属滓や浮き滓なども含めて、一括して鉱滓と呼ぶことにする。鉱滓は総数560点余り、約7.9kg出土した。重量にして約60％が遺構から出土しており、全体の約40％がSD4359・5100・5300から出土している。これらの鉱滓は、表面の肉眼観察では大きく4種類に分けられる。第1類（16・17）は、灰白～灰白緑色を呈する、主として粘土分の溶融固化した滓で、手にすると軽く感じられるもの。あまり金属分を含まないように見える鉱滓である。木炭を噛みこむ。第2類（18・19）は緑色を帯びた灰黒色を基調とするもので、重量感を伴う。表面は気孔が発達しているが緻密かつ滑らかで、円礫状の外観を呈する。表面にわずかではあるが木炭を噛みこむ。第3類（20）は橙褐～赤褐色を呈する、粗鬆な組織からなるもので、底部が丸いいわゆる椀形滓である。木炭を多く噛みこむ。第4類（21）は、表面が滑らかで緻密、樹脂が固化したような外観を有する比較的小型のもの。灰黒色を呈し、手にすると重量感を伴う。

特記すべき鉱滓については後に理化学的分析の項で詳述するが、ここでは成分分析の概要を記しておく。第1類としたものは、SD4699・5100・5300、包含層出土品計11点を分析に付し

た。２点が銅と鉄を主成分とする以外は、鉄を主成分としており銅は検出されなかった。銅と鉄を主成分とするのは、22（現存長2.2cm、重さ7.3g。SD5100木屑層出土）と、他に図示していないが、SD4699暗灰色砂層(下層)出土品である。SD5100では鉄を主成分とするものと銅と鉄を主成分とするものの２種類がある。第２・３類としたものは、SB4810、SD4359・5094・5300・5353および整地土や包含層等出土品を計17点分析したが、いずれも鉄を主成分とし、銅は検出できなかった。第４類としたものは３点を分析し、それぞれ銅、錫、鉛、鉄(Tab.82－27　SD5100木屑層)、銅、錫（Tab.82－28　SD5100木屑層)、錫、鉛（Tab.82－29　SX4495）を検出した。

板状鉛塊　１点(24)出土。不整な長方形を呈する板状の鉛塊である。片面は鉄銹で覆われるが、他面は白く粉を吹いたような酸化鉛に覆われる灰色の地金が露出する。蛍光X線分析では、微量の銅と銀も検出された。現存長6.1cm、同幅3.9cm、同厚さ0.7cm、同重量78.6g。包含層出土。

銅塊　１点出土。椀形を呈する完形の小型銅塊である。表面は、暗赤褐色に変色しているが、切断面は銅地金の金属光沢を保つ。全体に気孔が発達するが、重量感に富む。上面が全体にやや窪み、底部には中央部２個所に小さな窪みがある。詳細な分析結果については後述。長径5.1cm、短径4.3cm、高さ2.2cm、重さ106.7g。SD4750暗褐色粘土層出土。

黄鉄鉱　小鉱物片１点（16）が出土。六面体の結晶で、淡真鍮黄色を呈し、金属光沢をもつ。一辺0.6cm。重さ0.7g。SD5100出土。

墨　小片ながら、SD5100木屑層から２点、計1.9gが、SD5300木屑層から２点、計1.3gが出土。

C　石製品（Pl.227・228，Ph.278・279，別表24，Fig.75）

出土した主な石製品には、石銙、紡輪、石製容器片、小玉、砥石などがある。これらの多くは、SD5100・5300などの奈良時代の遺構や遺物包含層より出土したもので、奈良時代、あるいはそれ以降のものと考えられる。この他、少数ながら弥生時代以前の石鏃、石核、剝片なども出土している。各遺物の属性については、別表24を参照されたい。

石銙（Pl.227－１，Ph.278－27）　黒色粘板岩製の丸鞆が１点出土した。表面には擦痕が多数あるが、側面とともに鈍い光沢がみられる。側面は若干傾斜する。裏面は光沢がなく、周縁の角をわずかに落とす。裏面にみられる取り付けのための加工は、石銙に通常見られる2孔1組の潜り穴とは異なり、直径0.7cm、深さ0.35cmの比較的大きな穴3個があけられている。各穴の底面隅には鋲足とする細棒状の部品の端を収めるための直径0.2cmほどの小孔がみられる。　丸　鞆

紡輪（Pl.227－２・３）　２点出土した。２は流紋岩製砥石を紡輪に二次利用したものか。全面に研磨痕が残り、上面観は不整形な七角形を呈する。内径は1.1cm。３は流紋岩質凝灰岩製。中央部が緩やかにふくらむ断面形をもつ。内径は1.2cm。

石製容器（Pl.227－４・５）　滑石製容器の口縁部の破片が２点出土した。いずれも滑石を表裏両面から削り出したものである。４にはわずかに肩部が残り、壺状のものと推定できる。５の外面には口縁と平行する沈線が２本巡る。

小玉（Pl.227－６，Ph.278－28）　滑石製のものが１点出土した。表面内孔の縁には紐づれと思われる摩滅がみられる。風化により側面から多数入る細かなひびにより破損する。

砥石（Pl.227・228－16・17，Ph.278－16～26）　砥石は48点出土した。その多くは包含層からのもので、特定の遺構に集中することはない。平城京内の他の地点でも一般的である淡黄褐色

で、長石風化による細孔があいた流紋岩のものが多く、これ以外には、ホルンフェルスなどを素材とするものもみられる。形状は偏平な直方体のもの、棒状の直方体のもの、やや厚みをもち、ばち形に開く研磨面をもつものが多い。また、整形痕と考えられる鑿痕や研磨時についた

有溝砥石

と考えられる深い線条痕を残すものも少なくない。Pl.227の16と17は溝状の研磨痕がみられる砥石。いずれも表裏両面に幅約1cm、深さ約0.5cm程度の溝が数条走る。17の裏面には深い線条痕が多数みられる。16は縞状片麻岩製、17は流紋岩製。

各種の砥石

Pl.228の1と2は出土したものの中では多くみられる形状である。1は長方形の上面観を持ち、表裏2面の研磨面は緩やかに凹んでいる。左側面は平らな研磨面、右側面には鑿痕がみられ、直径約0.7cmの孔が穿孔されている。流紋岩製。2はバチ形に開く研磨面をもつもの。上端は欠損し、小口面には研磨痕はみられない。両側面には研磨痕がみられ、左側面のものは浅い溝状を呈する。流紋岩製。3は棒状の砥石である。下端がややつぶれ、丸みを帯びている。上端と裏面は欠損している。ホルンフェルス製。4は板状のホルンフェルスを素材としたもの。表裏両面が研磨面である。上端には両側から鑿状の工具で小孔が穿たれている。穴の上縁には、紐づれと考えられる摩滅がみられることから、吊るして携帯したものであろう。5は小形の棒状のもの。上端を欠損する。表面および両側面が研磨面。小口面と裏面には鑿痕がみられる。砂岩製。

6は岩の偏平な小礫の上下2面に平らな研磨面を持つもの。小形で、かつ置いて使用したとすると安定性に欠けることから、手持ちの砥石と考えられる。チャート製。7は全面に研磨痕が見られる小形のもの。不整形な形状をもつ。通常の大きさのものを使い込んだものか。やはり手持ちの砥石であろう。流紋岩質凝灰岩製。8は大きく湾曲した研磨面をもつ小形のもの。この他の面にも研磨痕がみられる。流紋岩製。9は流紋岩質凝灰岩製の大形のもの。表面に3面の長い研磨面をもつ。研磨方向はいずれも長軸方向である。断面は隅丸の三角形をしている。裏面は割れ面であり、比較的凹凸がみられるが、研磨面として利用され、長軸方向の深い線条痕多数もみられる。

不明石製品(Pl.227－7～15)　加工が明らかなものの、機能や性格が不明なものを一括した。7は白雲母片岩製円盤。周縁を加撃して粗く調整する。紡輪と比較すると薄く、紡輪未製品ではなかろう。8～10は軟質な流紋岩を円柱や半円柱に研磨して整形したものである。8と9には凸帯が削り出してある。また、8の片面は平らで断面はかまぼこ形をしている。11は粒状の水晶の片側から直径0.2cmの孔を穿孔したもの。片側が欠損する。水晶は表面が不透明で凹凸があり、自然状態で粒状になったものと考えられる。12は流紋岩を立方体に整形したもの。各面には研磨痕がみられるが、その他の加工はない。賽子の未製品か。13は棒状のチャートの両端と側面の一部を切断後、研磨したもの。14は泥岩の小礫の端部に直径0.2cmの細孔を穿ったもの。小礫はやや縦長の球形をし、表面は滑らかである。錘か。15は偏平なホルンフェルスの礫に直径約2.0cm、深さ1～2cmの凹みが付けられたもの。凹みは表裏両面に4個確認できる。

水晶・石英・瑪瑙・琥珀　石製品のほかに、SD5100・5300などからは石英片13点、瑪瑙片12点、水晶の針状結晶片が10点、琥珀6点が出土している。

弥生時代以前の石器(Ph.279, Fig.75)　調査地では、弥生時代以前の石器がSG58区のトレンチ内で、奈良時代遺構面より下層から数点が集中出土したほか、各地区で散発的に出土し

た。ここで取り上げたもの以外に、サヌカイトの不定形な小形剝片が若干出土している。

Fig.75の１～５はサヌカイト製石鏃。１は凸基無茎式。両側縁は細かな二次加工が施され、鋸歯状を呈する。２～５は凹基無茎式のもの。４は特に小形である。５は基部と片側縁に加工が集中しており、未製品であろう。６は黒耀石剝片。下端を欠損する。７はチャート製削器。片側縁に腹面からの剝離によって刃部を形成している。８～10はサヌカイトの剝片を素材とした石核。８は素材剝片下端を加撃して打面を形成した後、素材剝片の縁辺を作業面として縦長剝片を連続剝離している。９は分厚い楕円形の剝片の周縁から求心的な剝離方向で剝片剝離を行っている。粗い剝離による打面形成・調整がみられる。10は板状剝片を素材とする。素材剝片の打面から剝片背面への数回の剝離により打面調整した後、素材剝片の打面を作業面として数枚の横長剝片を剝離している。

石　　鏃

剝片・削器

石　　核

以上のうち、サヌカイト製のものでは、２～５・10で表面の風化が進み、灰白色化や稜の摩滅などがみられ、年代的な古さを感じさせる。10は技術的にみて旧石器時代、約２万年前の瀬戸内技法の石核と考えられる。また、２～５は２・４の脚部が若干外反する特徴や比較的小形なことから、縄文時代のものであろう。これに対し、１・８・９は表面が比較的新鮮で、青灰色をする。型式や技術的な特徴から弥生時代のものと判断できる。

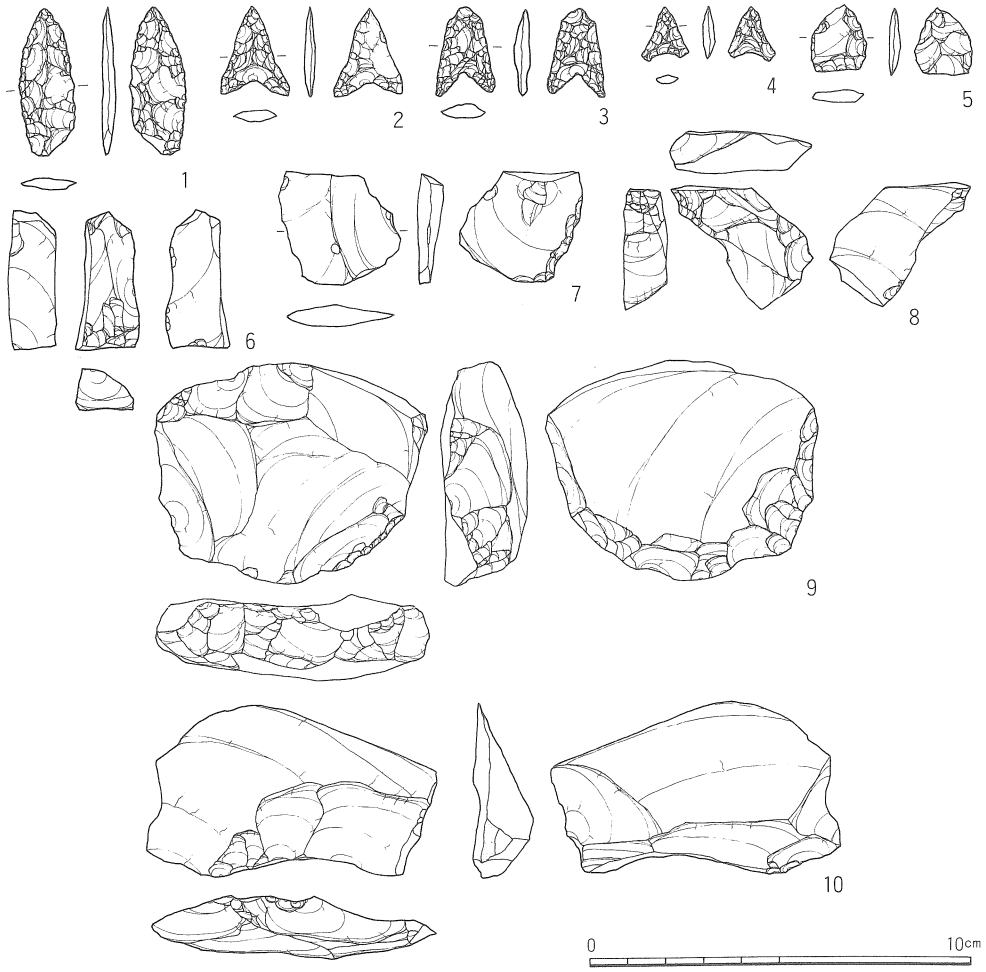


Fig.75　弥生時代以前の石器実測図　１：２

7　植物・動物遺存体

長屋王邸内の溝状土坑SD4750、二条大路上の濠状遺構SD5100・5300・5310では、大量の植物遺存体、動物遺存体が検出された(Tab.46～49)。以下では、特に上記遺構の植物遺存体について、部位、状態、散布の傾向について報告する。自然遺物を出土した他の遺構は、Tab.45にまとめた。植物遺存体は、種類や量が限られ、クルミ・モモが大半である。各自然遺物の詳しい同定結果や花粉分析については、補論３・４・７・８を参照されたい。

採取の経緯と方法　上記の遺構の発掘に際し、埋土中に木屑を大量に含む木屑層があり、大量の木簡や木製品を含むことを確認した。しかし、作業中に埋土よりそれらを選別することは不可能であり、遺物を含む埋土を各地区で層ごとに土をすべて取り上げ、整理室で水洗選別を行うこととした。その結果、木簡や木製品とともに自然遺物、動物および植物遺存体が検出された。特に植物遺存体は良好に保存され、出土量も多い。地区分けには平城宮・京調査地区割りの小地区３m方眼を利用した。なお、SD5100のUO16～20地区は完掘しておらず、SD5310は東端２小地区分を発掘したにとどまる。また、大半の遺物が上記の木屑層から出土したが、その上下の層からも若干出土している。取り上げた土の総量はコンテナ5000箱以上となった。

選別・整理方法　水洗は５mm目のふるい上で行った。このため、検出できた植物遺存体は比較的大型のものがほとんどで、５mmを下回るものは若干数の検出にとどまるが、別項のとおり、金原正明氏に依頼し、別に土壌サンプルを採取して花粉分析を行っている。同定は南木睦彦氏にご指導いただいた。ここでの植物学的な所見は、全て南木氏のご教示によるものである。

計数方法は種や属により若干異なるが、いずれの場合も確認した部位の最少個体数に近づけることを意図して行った。クルミ、ウメ、モモなど二つに割れる傾向のある核は、完形を１、半裁されたものを0.5とした。ハシバミやコナラ属などの堅果類は果皮が破損した状態で出土する場合が多いので、半分より多く残存している場合を１、それ以下は小片でも0.5とした。これは、例えば0.7や0.2というように小片の割合を計測する方法は、計測者の違いによる誤差が大きくなり、正確さにも欠けると判断したためである。他の種子も小片の扱いはこれに準じ

遺構各号	遺構種類	獣骨	貝殻	昆虫遺体	クルミ	モモ	その他
SE4340	井戸				○	○	○
SD4351	道路側溝	○					
SE4365	井戸				○	○	○
SE4380	井戸					○	
SE4386	井戸	○				○	
SE4580	井戸	○			○	○	
SE4790	井戸				○	◎	
SE4815	井戸					○	
SD5021	道路側溝	○			○	○	○
SK5074	土坑				○	◎	
SE5075	井戸	○			○	○	○
SE5087	井戸				○	○	
SK5097	土坑		○	○			
SE5135	井戸				○	○	○
SE5140	井戸				○	○	○
SE5205	井戸	○			○		
SE5220	井戸				○	○	

◎＝100個以上出土

Tab.45　井戸および土坑等出土自然遺物一覧

る。この場合、実際の個体数よりも多めに計数される傾向があると考えられ、計数方法にさらに検討が必要であろう。なお、クリやヒョウタンの果皮は原形を復元できないほど破損しているものがほとんどであり、前者は自然乾燥後、後者は水浸けの状態で重量を集計した。マツやアカガシ亜属はいくつかの部位が出土しており、それぞれ別々に集計を行った。その他、大量に出土した加工木片や自然木片は特に集計していない。

植物遺存体の部位と状態　検出した植物遺存体には、各種の部位がみられ、加工や破損などの変形もある。部位は量的には核や種実が大半を占める。ナシやカキは果実本体も出土した。その他の主要部位として、二条大路上の濠状遺構よりハスの中房、アカガシ亜属とコナラ亜属の殻斗、マツの毬果や鱗片、フジの莢果が出土した。これらの部位は特に有用部分ではないので、遠方より運ばれたものではなく、近辺にその植物が存在したと考えられる。出土量は多くないので、自然堆積したのではなく、近くの邸内に植栽されていたものがゴミとして処理されたのであろう。その他の種子や果実の大半は食物残滓と考えられる。そのためクリ、ハシバミ、クルミ、チョウセンゴヨウなどの食用堅果類やヒシは、ほとんどの果実が破損して出土している。破損が人為的なものか自然作用によるものかを判別するのは難しいが、長屋王邸内のSD4750と二条大路上の濠状遺構出土のクリとクルミには、明らかに人為的な破損の痕跡がみられる。　人為的破損

まず、クリはすべての溝から刀子様の道具で六角形に切り取った種皮が出土した。クルミは核の頂部と底部が破損するものが多く、上下方向の打撃により核を割ったと推定できる。また、ハシバミやカヤには完形で小孔のあいた種子が若干みられる。貯蔵中の虫害によるもので、あろう。モモ、スモモ類、ウメの核はほとんどが完形か自然に割れた状態で出土しており、ネズミなどの齧歯類の食害を受けたものも若干存在する。人為的な破損は確認できない。SD5100出土のカキの果実は、小型のもので現生種では柿渋を採取するものに近い。この溝では多くの加工木屑が出土しており、木工用である可能性は高い。ヒョウタンの果皮には特に刃物や加工の跡は確認できず、容器であったか食用としたかの判断はできなかった。　ネズミ食害

木簡との対応　上記の遺構では各種の大量の木簡が出土しており、荷札や進上状に記された植物と遺存体とが共伴している例がある。中には産地や納入の日付の記載がある木簡もみられる。遺存体を全て記載品と関連付けることできはないだろうが、参考資料として有効であろう。

長屋王木簡（SD4750出土）には、クルミ（呉桃子）、モモ（桃子）、カキ（柿子）、ナツメ（棗）、メロン仲間（瓜、大瓜）、クリ（栗、栗子）の記載がある。ナツメやアケビは「木上」からの進上であり、クリには越前国「丹生郡」、クルミに越前国丹生郡「朝津里」の地名の記載がある（『平城宮木簡概報』21，1989，pp.13・32・35，『同』25，1992，pp. 6 ・21・23）。

二条大路木簡（SD5100・5300・5310出土）では、ナシ（梨子）、メロン仲間（毛付瓜、熟瓜、瓜、黄瓜）、クリ（栗）、カキ（柿子）、ハス（蓮子、蓮葉）、アケビ（郁子）、シイ（椎子）、イチイガシ（伊知比古）、クルミ（呉桃子）がある。メロン仲間には「岡本宅」「意保御田」「南宅」、ナシには「園池司」、クリには「岡本宅」からの進上の記載がある。また、クルミには越前国足羽郡「少名郷」、ハスには「武蔵国足立郷」の記載がある（『平城宮木簡概報』22，1990，pp.10～12・15・30・41，『同』24，1991，pp. 7 ・ 9 ・10・22・28）。

記載された日付によれば、これらの植物が運ばれてきた時期は、メロン仲間が６～８月で７月が最も多く、カキが９月、クリが８月である。クリは干栗などの加工・貯蔵品であろう。　運搬の時期

遺構内での分布（Tab. 46～48）　SD5100・5300では植物遺存体は遺構中の分布にかなりの偏りがみられる。また、その状態は種別により相違する。ここでは、一定量を出土した種や属を対象に、遺構内の分布状況を報告する。まず大まかな傾向を知るために、取り上げに用いた平城京地区割を利用して各遺構内をいくつかの区間に分けて集計し、種や地区別に出土量を百分比で示した表を作成した。

ここで対象とした植物遺存体は、50以上の個体数を出土した比較的大型のものに限った。少量を出土した5mm以下の小型の遺存体は、水洗の方法からみても、偶然検出されたといえるもので、統計的にはあまり意味がないと考えられるからである。また、重量で集計したクリとヒョウタンも加えている。平城京地区割の1小地区内（3m平方）での分布状況は、十分には把握していないが、クリやクルミなどで層中に顕著な集中が見られたことが記録されており、同一種はある程度まとめられて廃棄されていたと考えてさしつかえないだろう。出土量は少ないものの、SD5100のUO45～47小地区やSD5300のJD27～29小地区から集中して出土したハスの中房のような例からも、同様の廃棄状況が想定できる。なお、SD4750は、9小地区にまたがる南北溝で、ここで取り上げた中ではもっとも小規模であり、一定量を出土した種もクルミとモモに限られており、分布にも両者に顕著な差がないので、ここでは詳しく述べない。2小地区分のみを発掘したSD5310については、総数のみ記す。

SD5100　SD5100は6AFI地区のUO09～UO48小地区にまたがる全長約120mの東西に伸びる濠状遺構である。ここでは全体を3小地区（東西9m）ずつの14区間に分けた集計表を作成した。ただし、西端の2区間は2小地区（東西6m）ずつとした。

全ての種に共通しているのは、東西両端の頻度の低さである。特に東端ではほとんど投棄が行われず、西端でもかなり限定的に行われたとみてよい。UO15～17、UO18～20については未発掘部分が含まれるためもあり、頻度はかなり低くなっている。また、多くの種がUO39～41・UO42～44の区間で最大頻度を示し、UO45～46がそれについで集中度が高い。全体としては、最西端を除くと、西側に大きく偏って分布する傾向がある。この傾向は特にウメ、モモ、ヤマモモ、スモモ、メロン仲間、ナシなど、現在の初夏から夏に収穫される果実に強く、この3区間に全体の6割以上が集中する。

なお、このように西側に分布が偏るのは、木製品、木簡、土器などの傾向とも一致するが、最西端については、他の遺物は植物遺体ほど頻度が低くならない。一方、オニグルミは、上記の3区間でも頻度はある程度高いが、他の区間でも5％以上の頻度を示し、全体に分散する傾向がある。また、チョウセンゴヨウ、ハシバミ、ヒシでは最大頻度が上記3区間以外にある。特にハシバミなどに代表されるように、UO12～14で比較的高い頻度を示す種があるのが注目される。個体数があまり多くないものの、マツやアカガシなどもこの部類に入る。全体の傾向としては、堅果類や秋の果実は西側への集中の度合がやや低く、特に堅果類で分散する傾向が強い。ただし、クリについては夏の果実に近い分布を示す。また、カキやヒシは両者の中間といえよう。

SD5300　SD5300は2小地区分ずつに分け、全体で10区間を設定した。なお、JD19～21区間のみ3小地区分となっている。全体の傾向としては、JD20近辺を境に西と東に二つのピークがあることがわかる。その中で東側により分布が偏るグループ（モモ、スモモ、ウメ）の存在が目につ

小地区	TB11	TC-TD11	TE-TF11	TG-TH11	TI-TJ11	不明	計%	総計
オニグルミ	0.8	16.1	22.3	32.8	28.7	1.3	100	3412.5
ヒメグルミ	0.0	1.6	5.9	76.7	15.2	0.7	100	382.5
モモ	1.7	19.9	11.5	29.8	35.1	2.2	100	3032.5
クリ	0.8	9.6	15.1	33.1	40.4	1.0	100	166.1

Tab.46　SD4750出土植物遺存体地区別出土量

小地区	09−11	12−14	15−17	18−20	21−23	24−26	27−29	30−32	33−35	36−38	39−41	42−44	45−46	47−48	不明	計%	総数
ウメ	0.0	0.7	0.2	0.2	0.4	0.6	2.2	0.7	1.7	4.9	42.1	35.1	2.9	0.1	8.1	100	2637.9
モモ	0.1	5.2	0.0	0.5	3.0	2.9	5.4	3.8	4.4	5.5	17.7	33.1	11.5	2.1	4.8	100	4868.5
ヤマモモ	0.0	0.4	0.0	0.0	0.4	0.2	0.4	0.2	0.4	5.9	38.3	48.0	1.4	0.1	4.5	100	1109.5
スモモ	0.0	1.8	0.0	0.1	0.3	0.4	1.0	0.5	0.5	3.5	57.6	24.4	3.6	0.5	5.9	100	733.0
トウガン	0.0	0.0	0.0	0.0	4.1	1.6	1.9	17.1	6.0	35.2	1.9	2.9	19.2	0.0	10.1	100	315.0
メロン仲間	0.0	0.5	0.0	0.0	0.2	0.0	0.1	0.5	1.4	4.6	23.6	20.1	26.2	7.6	15.1	100	48652.0
ナツメ	0.0	10.5	0.0	0.1	1.8	0.7	2.9	4.8	3.4	5.5	45.3	45.3	16.3	0.4	6.7	100	2189.0
カキ	0.0	4.2	0.0	0.2	3.8	2.5	1.8	6.9	8.8	10.6	10.1	38.3	5.2	0.0	7.7	100	651.0
ナシ果実	0.0	0.9	0.0	0.0	0.9	0.9	0.5	1.4	1.4	9.0	19.9	36.2	18.6	0.0	10.4	100	221.0
ヒシ	0.0	8.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.0	36.8	26.9	3.0	3.0	7.5	4.0	0.0	5.0	100	100.0
カヤ	0.0	4.6	0.0	0.0	0.6	0.6	0.6	0.9	3.9	13.1	8.0	50.7	7.4	0.6	9.1	100	350.0
オニグルミ	0.4	8.4	0.1	5.0	9.0	5.8	14.6	3.5	8.7	4.9	6.7	12.4	8.1	2.8	9.8	100	2311.0
ヒメグルミ	0.1	19.8	0.0	2.6	1.0	1.0	1.4	0.4	2.4	2.6	6.4	46.4	3.1	0.4	12.2	100	381.5
ハシバミ	0.0	36.4	0.0	0.1	6.2	0.5	0.9	1.0	4.9	5.7	3.0	23.4	5.8	1.0	11.1	100	1197.0
チョウセンゴヨウ	0.0	4.7	0.0	0.7	1.3	0.4	2.9	0.4	42.6	10.2	7.3	18.0	5.8	0.4	5.3	100	225.5
ツブラジイ	0.0	2.7	0.0	0.0	2.7	3.6	2.7	11.7	9.9	16.2	5.4	20.7	9.0	0.0	15.3	100	111.0
マツ毬果	0.0	21.5	0.0	0.0	2.1	0.0	13.3	2.1	4.1	5.1	10.3	22.1	7.2	2.1	10.3	100	97.5
マツ	0.0	70.7	0.0	0.0	2.2	0.0	1.1	0.0	0.0	2.2	5.4	15.2	0.0	0.0	3.3	100	92.0
アカガシ殻斗	0.0	12.9	0.0	1.4	0.0	1.4	0.0	4.3	48.6	12.9	4.3	4.3	0.0	1.4	8.6	100	70.0
クリ	0.0	4.8	0.0	0.3	3.9	2.6	2.0	3.9	4.9	6.2	19.3	32.5	11.4	0.5	7.7	100	3374.5
ヒョウタン	0.0	2.6	0.0	0.3	2.7	1.0	2.0	3.5	3.5	5.4	9.6	42.4	12.0	9.0	6.1	100	7578.1

Tab.47　SD5100出土植物遺存体地区別出土量

小地区	JF08−09	JF10−11	JF12−13	JD17−18	JD19−21	JD22−23	JD24−25	JD26−27	JD28−29	不明	計%	総計
ウメ	21.9	34.8	9.0	9.0	0.0	4.5	3.9	7.7	7.7	1.3	100	77.5
モモ	9.6	23.5	28.2	7.5	1.8	0.9	4.3	6.4	12.9	4.7	100	3436.5
スモモ	3.2	17.7	31.6	5.1	0.0	0.0	2.5	5.7	32.9	1.3	100	79.0
メロン仲間	2.3	15.0	26.4	0.2	19.3	0.1	26.7	1.9	8.1	0.0	100	876.0
ナツメ	8.1	28.7	10.8	4.0	2.7	0.0	9.9	14.3	19.7	1.8	100	111.5
カキ	1.4	3.7	3.5	20.7	5.6	4.0	31.6	13.3	6.3	10.0	100	215.0
ナシ果実	0.0	13.5	0.0	4.1	6.8	0.0	0.0	0.0	75.7	0.0	100	74.0
カヤ	1.8	23.5	12.6	14.4	3.6	1.8	15.8	10.4	8.4	7.7	100	221.5
オニグルミ	2.1	5.3	15.7	8.0	6.7	4.2	14.1	19.1	20.1	4.8	100	1226.5
ハシバミ	4.0	10.9	15.2	15.8	5.3	5.3	19.1	7.6	12.9	4.0	100	151.5
コナラ属	0.3	0.0	4.5	2.7	5.7	7.6	26.3	29.0	23.6	0.3	100	334.5
マツ毬果	0.0	1.0	0.0	1.0	1.0	0.0	10.8	58.8	10.8	16.7	100	102.0
クリ	3.9	24.5	11.8	7.8	4.7	4.0	18.2	11.7	21.1	1.1	100	1409.7g
ヒョウタン	5.7	18.1	20.0	7.1	5.2	2.3	12.8	11.1	14.7	3.0	100	8359.1g

Tab.48　SD5300出土植物遺存体地区別出土量

種族	総数
ウメ	8
モモ	89
スモモ	2
メロン仲間	28
ナツメ	12
カキ	14
ナシ果実	68
カヤ	9
オニグルミ	84
ハシバミ	10
コナラ属	22
マツ毬果	94
クリ	42g
ヒョウタン	40g

Tab.49　SD5310出土植物遺存体総数

く。ナツメやメロン仲間もこのグループに比較的近い。一方、オニグルミ、ハシバミ、クリはやや西側に偏り、ナシ、コナラ属、マツは強く西側に分布が偏る。全体の傾向としては、夏の果実は東側の比重が高く、その他の秋に結実する種は西側よりに分布している。

以上のような分布の傾向には、投棄が行われた季節が反映されていると考えられる。例えば、SD5100の西側部分では継続的に廃棄が行われたようだが、東端部は主として秋頃と推定できる。SD5300では東側の集中が主として春頃となる。ところで、SD5100とSD5300の東側の集中地点は二条大路をはさんでほぼ対応する位置にある。SD5300の廃棄は主に北の宅地からと推定すると、例えば廃棄場所が春から秋にかけてSD5300からSD5100へと道を横切って移動したというような可能性もある。また、複数年にわたるような長期間廃棄が行われた場合、両遺構に見られるような季節的偏りは、平均化されていくであろうから、廃棄期間はかなり短いと考えられる。

植物遺存体の構成　SD4750・5100・5300・5310出土の植物遺存体の種類は多岐にわたるが、各遺構から全ての種類が出土しているわけではない。また、同一種を出土していても出土量には差がある。なお、実数は上記のTab. 46～49に記載している。

もっとも多くの種を出土したのはSD5100である。これは、規模がもっとも大きく、水洗した土壌の量が多いことによると考えられ、5mm以下の小型遺体の検出例も中でもっとも多い。大型の遺存体に限れば、種類は各遺構に特に大きな差はない。ただし、それぞれの出土量には若干違いがある。これら全ての遺構で、漿果類ではモモ核、堅果類ではクルミの核の出土量が多く、もっとも一般的な果実であったらしい。上述したように、SD4750ではこれ以外の遺存体は極端に量が少ない。SD5100では漿果でウメ、ヤマモモ類、スモモ類、ナツメがモモについで出土量が多いが、SD5300・5310ではこれらは極端に数量が減る。カキ種子やナシ果実はSD5100・5300ともに比較的多く出土した。ただし、一つの果実中に含まれる種子の数を考慮すると、カキについては本来の果実数は少量に見積もる必要があろう。アンズは各遺構で若干数見られる。メロン仲間はSD5100では種子の出土数が他より圧倒的に多い。カキと同様の理由で果実数については低く見積もるべきであるが、他と比較すると、SD5100については出土量が多いといえよう。一方、SD5300では、かなり少ない数字と考えてよいであろう。

食用堅果類では、クルミ以外にハシバミ、チョウセンゴヨウ、カヤなどが比較的多い。特にチョウセンゴヨウは、SD4750でも47個が検出されているのが注目される。ただし、クルミに比べると、産地がかなり制限されることも考慮すると、貴重な木の実であったことは確かである。重量で集計したクリは、他の堅果類との比較が難しいが、比較的多い種であるのは確かであろう。

関根真隆の研究[1)]によれば、奈良時代には干栗・胡桃・柿は比較的高価で、桃・梅は安価であったという。漿果に関しては、モモやウメとカキの出土数の差は、そのような状況と合致しよう。また、堅果については多少高価でも常食していたということであろうか。なお、文献資料では安価な部類にはいるビワ（枇杷）や、やはり文献や木簡に見える柑橘類の種子が検出されていないが、種子を利用する、あるいは種子ごと食べるというような、種子を廃棄しないような利用のされかたをしていたことも考えられよう。

1）　関根真隆『奈良朝食生活の研究』1969，pp.119～133